

昭和四十六年九月六日発行

広島原爆戦災誌 第二巻 第二編各説

第一章 広島市内各地区の被爆状況

広島市

例言

一、本巻は広島原爆戦災誌全五巻のうち、「第二巻各説第一章 広島市内各地区の被爆状況」である。広島市全地域を三十六地区に分け、各地区ごとに被爆直後の状況を取りまとめて、終局的には広島市全体の惨禍が把握できるようにつとめた。なお、事項によっては、発行の年まで記述したものもある。

一、本巻の記述は、本誌編集に当たって、広島市が委嘱した地区委員八二人が調査して提出した「広島原爆戦災誌資料表(地区用)」を主体とし、被爆体験記・談話、その他関係文献によって行った。ただし、陸軍所部隊の所在地基町地区のみは、前期資料の記入者がなく、軍人被爆者、あるいは被爆直後に乗り込んだ新聞記者・軍人軍属などの手記・談話、その他関係文献によって記述した。

なお、各地区の被爆直前の世帯・人口数、及び炸裂瞬間の被害状況など一覧表については、地区により昭和二十一年八月十日、広島市調査課が各町内会から提出を受けた調査票綴の原簿(広島市保管)を使用した場合もある。

一、本文の叙述は現代かなづかいとし、なるべく平易につとめたが、場合によっては当用外の漢字も使用した。

一、各地区ごとに挿入した地図は、戦前(昭和十五年)の公認地図を基礎として、本誌編集担当者が作成したものであるが、単なる地区の説明図であるから縮尺をはぶいた。なお、広島市では、昭和十六年以降終戦まで一般用地図の作成・発売が禁止されていたようである。

一、各巻の執筆は、小堺吉光が行った。

一、各巻の監修は、今堀誠二・後藤陽一・四電一郎がおこなった。

一、各巻の背文字は、広島市長山田節男の揮毫になる。

一、各巻の編集にあたり、原爆体験記・談話をはじめ、各種文献・写真などの提供・貸与、及び多くの指摘や便宜を与えられた各位に対し、深く感謝の意を表する。

以上

昭和四十六年九月六日

広島原爆戦災誌・第二巻

目次

第2編 各説

第1章 広島市内各地区の被爆状況

第1節 序説 1

第2節 国泰寺地区 29

第3節 中島地区 77

第4節 本川地区 121

第5節 基町地区 155

第6節 白島・二葉の里地区 194

第7節 牛田地区 227

第8節 戸坂地区 249

第9節 幟町地区 260

第10節 荒神地区 308

第11節 大洲地区 334

第12節 尾長地区 349

第13節 矢賀地区 365

第14節 中山地区 373

第15節 段原地区 389

第16節 比治山地区 428

第17節 皆実地区 448

第18節 仁保地区 468

第19節 大河地区 477

第20節 青崎地区 497

第21節 宇品地区 506

第22節 似島地区 526

第23節 竹屋地区 555

第24節 千田地区 590

第25節 吉島地区 630

第26節 神崎地区 643

第27節 舟入地区 662

第28節 江波地区 681

第29節 広瀬地区 709

第30節 天満・中広地区 726

第31節 観音地区 747

第32節 福島・皆実三篠地区 777

第33節 三篠地区 797

第34節 己斐地区 828

第35節 草津・庚午地区 854

第36節 古田地区 876

第37節 井口地区 893

主要一覧表・記録

1、広島市内主要橋梁の被害状況表 12

2、広島市常会議員河口社三メモ帖 19

3、元広島産業奨励館（原爆ドーム）の概要 71

4、広島市本川聯合町内会日誌 145

第二編 各説

第一章 広島市内各地区の被爆状況

第一節 序説 ... 1

軍都

大川のデルタに建設された広島市は、猿猴川[えんこうがわ]・京橋川[きょうばしがわ]・元安川[もとやすがわ]・本川[ほんかわ](太田川本流)・天満川[てんまわがわ]・福島川[ふくしまがわ](戦後埋立て)・山手川[やまてがわ](戦後拡幅され太田川放水路となる。)の七つの清流が市内を貫流し、環境の美しい城下町として筆を続けてきたが、明治時代以降、中国地方の政治・経済・文化の中心地であるばかりでなく、わが国陸軍の大軍事基地として着々とその機能の強化充実ははかられると共に、軍需工場もいちじるしい発展を遂げた。

日清・日露両戦争から大東亜戦争(第二次世界大戦)に至るまで、広島港(宇品)における出征・帰還の各部隊の数は計り知れず、そのつど市中は昂奮につつまれ、異常な活気を示した。

昭和十六年以降、軍事色が濃厚になるにつれて、市民生活は、あらゆる面にきびしい規制を受け、特に諜報に関しては、たびたび厳重な注意をうながされた。広島市全域が軍事基地であり、軍隊も多数駐屯していたが、これが、原子爆弾攻撃の第一目標として、広島市が選ばれたアメリカの戦略上の一理由となったのである。

防衛態勢

陸軍の大策源地広島市の防衛態勢は、まさに軍・官・民三者一体のもと、他の諸都市に比類を見ないほど完璧なものであった。県・市の防空本部は詳細な防空計画を作成すると共に、常に他都市の被爆実状を参考にし、軍の指導によって、防空要員に対する訓練・演習をおこない、焼夷弾や普通の爆弾攻撃に備えていた。

市内一三二か所(八、二〇〇坪)の建物疎開を実施して火災の延焼防止と避難空地を設けると共に、防空壕は、軍用のものをはじめ、町内会単位・隣組単位・各家庭単位に作り、防火用水槽もまた同じく、油性焼夷弾の消火に砂袋や火叩きなど、規定どおりに配備した。バケツ操法による注水訓練も各種の場面を想定して繰返し行なわれた。

重要建物の屋上には、在郷軍人や警防団員が防空監視に立ち、また河川の要所には緊急避難用の舟・筏などを常備し、被爆により河川の決壊で洪水となった場合や、橋梁破壊に際しての渡河避難用として、竹製の浮袋が市民に配給された。また、敵機空襲にあたって、視界をふさぐ煙幕用に、近郊の山から青松葉を取集めて全市各所で焚く用意をしていた。そして、敵軍上陸に対処して、一人必殺の竹槍訓練、小銃の撃ち方などの訓練も欠かさず実施され、負傷者の担架運び、救護方法、あるいは空爆下の緊急待避法(地面に伏さり両手で両耳をふさぐ)などの訓練がぎびしく行なわれた。

服装も、一般の老幼婦女子は防空頭巾にモンペを着用し、上衣の胸には、住所・氏名・血液型など記入した名刺型の小布を縫いつけていた。また、屋内にあっては、常に身近に医薬品、米、及び貴重品を入れた非常持出し箱を備え、屋外にあっては、それらを入れた布製(皮革は欠乏)の鞆を提げて持ち歩いた。しかし、米は入れておくほど配給がなかった。

大きな建物は塗料を使って迷彩擬装をほどこし、各窓に分厚い板を打ちつけて爆風除けをし、室内の金庫その他重要個所には、土のうを積んでその周囲をかためた。また、爆風による粉砕を防ぐため・窓ガラスには細長い紙を十文字に張りつけた。更に、兵舎をはじめ各学校・倉庫など大きな木造建物は、投下された焼夷弾が引っかかって爆発すると、大火災になるため、天井をすべて剥ぎとった。鉄筋コンクリート建物の屋上は、区切って常に水が溜めてあり、木造建物は、棟に板を渡してその両側に満水した大樽を置いている所もあった。

夜間の空襲に対処しては、窓を黒布で完全に遮蔽し、電灯も一つ一つ黒布で覆った。警報発令時には、マッチ一本の火も戒めて、厳重な灯火管制が実施された。これらを監視し、指導するのは警防団員や町内会役員の重要な役目で、警報が続出するような夜は、まったく一睡もできなかったから、夜が明けるとクタクタになって眠った。したがって、前夜空襲警報の出た場合は、軍需工場など特別な事業所を除き、翌朝の出勤時間が、自動的に一時間遅らせられることなども決められていた。

防衛力の集中

昭和二十三月ごろから、県下各地の防衛力を広島市に集中し、防衛陣の増強はかられた。ただし、「広島市を空襲

する前に、尾道、福山両市を襲撃する」という宣伝ビラ（実際には逆で、八月八日に福山を空襲した）を敵機が撒いたので、この両市の防衛力は削がれなかった。同年七月二十八日、呉市が大空襲を受けて焼けたため、呉市の残存する防衛力 - 警察警備隊・消防自動車などが広島市に配置された。

しかし、国内の都市は、次々と空襲を受けて焼き払われていたが、広島市だけはさしたる空襲もなく、いつまでも取残されていた。それを、市民の一部では、「広島出身の移民がアメリカに多数いるからだろう」などと、ささやく者もあった。しかし、空襲必至とみる空気は濃厚で、戦争末期には、防空要員確保のため、老人や病人以外は疎開禁止となったが、夜間のみ郊外へ避難する者が多く、警防団が要所に立ってこれを取締まった。国民学校(高等科)児童・中等学校生徒もまた、防空補助隊員として、各方面に出動した。

人口の減少

この頃、広島市の人口は、防空計画に基づく建物疎開や人口疎開によって、通常四四万人と言われていた常住人口が三二、三万人に減少していたと推定される。しかし、郊外からの通勤者が多く、昼間人口は大きく増加した。このほか軍人が推定約四万人(九万人ともいう)ほどいたようである。

広島駅をはじめ、己斐・横川両駅とも、次々に満員列車が到着し、駅は雑踏をきわめた。市内電車・バスもまた満員で、「乗ればありがたい。」というほどの混雑で、広島駅前などでは、一台の電車を待つため、五〇〇人くらいの行列ができるのは毎朝のことであった。実際、被爆直後、電車・バスの停留所近辺に最も死体が多かったと、救援隊のある兵士が語っている。

食糧欠乏

配給米をはじめ、他の副食物も極度に欠乏し、市民はみんな空腹をかかえ、ただ、気力で生きているという状態であったが、戦争遂行の歯車は一秒たりとも止まらず、あえぎあえぎの生活であった。

建物疎開作業隊や応召兵

市内は第六次建物疎開の実施中で、近郊市町村の国民義勇隊や会社・工場の職域義勇隊、中学校・高等女学校一、二年生の動員学徒など約二万人が、連日、早朝から作業に従事していた。

建物疎開作業には、予・後備役の軍人で編成された広島地区特設警備隊の各部隊が主として実施し、国民義勇隊や動員学徒は、瓦や材木などを整える跡片づけを行なった。また、市内の各部隊では、本土決戦のための赤穂・鬼城・護路その他独立工兵隊などの新しい部隊を編成中で、これらに入営する応召兵が、続々と指定された場所に集合しており、それを見送る人も多数集っていた。

五日の夜

八月に入ってから、急に警報発令も少なくなっていたが、五日夜は、警戒警報・空襲警報が連発されて、一晩中、市民たちは眠る暇もなかった。空襲は殆んど夜間であったから、翌六日午前七時三十一分に警報が解除になったとき、みんな胸をなでおろして、ほっと安心した。嚴重な防空態勢も一応解かれた。

敵機侵入

このようなとき、呉の海軍鎮守府地下作戦室に、甲山町監視哨・三次監視哨などから、直通電話で「敵機三機広島に向う」と報告があり、呉地区ではただちに警戒警報を発令した。続いて、中国軍管区司令部参謀部と広島地区司令部から、敵機侵入の情報連絡があり、引続き空襲警報を発令した。しかし、広島市の場合はそうではなかった。

炸裂

広島市流川町の広島中央放送局では、中国軍管区司令部からの情報により、古田アナウンサーが急ぎ警報発令を放送中であった。

突如、市の上空約六〇〇メートルの所で、原子爆弾が炸裂した。市民には、まったく寝耳に水の突発事態で、一瞬、地上が暗黒に包まれ、一人一人、自分の所が直撃されたと感じた。爆心地(爆央)の細工町島外科病院付近から比較的遠く離れていた市民は、その異様な閃光と大爆発音に、驚きおののいた。全然、訳がわからなかった。

爆心地から三キロメートル以上離れていた所からは、炸裂の瞬間にできた異様に光る火球(推定直径六十メートル)を見た者もあった。

たちまち、上空数千メートルに達する大爆煙が、虹を溶いたようなあやしく美しい色彩を渦巻きつつ、キノコ状になってモクモクと湧きあがり、市の上空をおおった。これらの光景は、すべて被爆者の体験で語られており、五、六人はその瞬間カメラにとらえた(各巻に所載)。

被害状況

この一発で、市域の大部分 広島城跡一帯の陸軍各部隊と繁華街・商店街・住宅地など旧城下町時代からの全域、及びその近辺が一挙に壊滅し、死者・負傷者・行方不明者などおよそ二〇数万人に達し、未曾有の惨状を出現したのであった。

おおまかに言えば、爆心地から半径五〇〇メートル以内の地域は、一瞬に壊滅し、点々とビルディングの残骸が立つ平地と化した。住民はごく一部、特殊な場所にいた人を除いてはほとんど蒸発的即死に近く、直後に暁部隊の救援隊が入ったとき、地表は、死体も骨片もあまり見当たらないほど焼きつくされており、すべての物は原型をどどめず破砕されて白い灰に埋まっていた。また、普通爆弾のように穿かれた弾痕も無く、まったく不思議に思われたという。

半径五〇〇メートル以上一キロメートル以内の地域にいた人々は、五体がバラバラに裂けた。転がっている首は、目玉が飛び出しており、胴体は裂けて内臓がはみ出していた。爆心地から約六〇〇メートルの地点にあった広島県立第一高等女学校の第四学年の生徒の一部約五〇人は、原子爆弾の炸裂時に登校して被爆し、全員死亡したが、その当時、校庭に首も手足も何処かへ千切れ飛んだ胴体だけの死体が、まるで丸太棒のように多数転がっていたという目撃者の報告がある。

半径一・五キロメートル内外では、倒壊した建物の下敷きとなり、火災の発生によって、生きながらにそのまま焼死した人々が実に多い。放射能熱線による自然着火、あるいは炊事の残火によって、たちまち大火災となったが、荒れ狂う猛火の中で、子どもを抱いたある母親は、倒壊物に下半身を取られて動けず、火災が襲うと顔を伏せ、去ると顔をあげて、「助けて...」と叫びながら、ついに火の中にその声を絶った。辛うじて下敷きから脱出し、安全地帯に逃げて行く人々は、それを見ながら救助することができなかった。このような光景は無数に語られていることであるが、ともかく安全地帯へ逃げることができた人々の多くは、この地点以上離れた所にいた人々である。しかし、全裸・半裸の幽鬼のような姿で命からがら一応は脱出した人々も、その大多数は死んでいった、これは事実の証明するところであるが、原子爆弾特有の放射能線による障害で、外見上は無傷の人々も多く死んだのである。

救援隊

被爆当日の正午前後には、被害の比較的軽微であった宇品町の陸軍船舶司令部(暁部隊)隷下の諸部隊が、陸上と河川から救援に出動したが、この救援隊の直接被爆者でない多くの兵士たちも残留放射能によって、白血球減少・嘔吐・下痢・出血・脱毛など、被爆者と同じような症状にかかり、ついには死亡する者も幾人かあった。

市内の救護態勢はほとんど壊滅し、六日当日は、生地獄の修羅場と化したまま暮れていった。比治山の多聞院に、この日の夜、行政機関のわずかな残存者によって開設された県防空本部からの連絡通報により、県下及び隣県その他から救護班が続々入市しはじめたのは翌七日であった。負傷者の多数集合している場所を、とりあえず臨時救護所として治療にあたったが、アカチンか油の塗布だけであって、治療というほどのことはできなかった。救援の医師も、原子爆弾を知らず、また、その障害の治療法など知らず、適切な治療も指導もできなかった。

死体の処理と道路の啓開

七日に陸軍船舶司令官佐伯文郎中将が、広島警備担任司令官に就任して、救援対策も軌道に乗りはじめ、負傷者の収容、死体の収集と処理、道路の清掃など、軍隊が主軸となって積極的に作業が進められ、十日ごろまでには一応目につく死体は処理され、道路もトラックが走られるようになった。

郊外に逃げて行くことができた被爆者は、約一五万人に達したが、逃げきれないで猛火を避けながら、被爆地にずっと留まっていた者もあった。一たん逃げて、すぐ引返した者もあったが、まったく僅かな人数であった。

探索者の混乱

焼跡には親類や縁故者の安否を探ねる人がたくさん市内に入って来て、収容所はいずれも混雑をきわめたが、それもいつ時のことで、発見できずむなしく帰っていく人も多くあった。

人的被害

原子爆弾による人的被害は、現在(昭和四十五年)なお、精確な数字が得られず、広島大学原爆放射能医学研究所が被爆当時の地図復元作業を進め、被害実数の把握に努めているところであるが、昭和二十年十一月三十日現在で広島県警察部が発表した推定数が信頼性高いものとされている。また、広島市調査課が、昭和二十一年八月十日、県下の各市町村長をはじめ、市内の各町内会長を通じて調査した数字を基礎とし、被爆時の状況その他の計数的資料を勘案して、「近接被害推定数」をまとめたものがある。これによると、当時の総人口三二〇、〇八一人として、死亡者一一八、六六一人(38%)・負傷者七九、二二〇人と生死不明者三、六七七人の計八二、八〇七人(25%)で、

以上被害者合計二〇一、四六八人(63%)・無傷者一一八、六一三人(37%)となっている。ただし、約四万人いたといわれる軍隊の被害は含まれていない。

終戦

八月十五日の終戦を迎えるころ、混乱が一応おさまると同時に、焼野原は深い空虚に包まれていった。食糧事情はますます窮迫し、罹災者らは半壊の防空壕の中や焼トタンで囲ったバラック小屋の中で、すさまじい飢餓に耐えねばならなかった。

残忍をきわめた原子爆弾の災害に引続き、敗戦を迎えた市民は、一挙に深い虚脱感に陥り、何らなすところも無かった。多くの罹災者には、戦争に敗けるといことは絶対に無いはずであったのである。

闇市の発生

早くも終戦三日目ごろから、広島駅前付近に、ムシロやトタン板を地面に敷いた闇商人が現れ、日増しに人数が増加した。十二月ごろになると、四〇〇軒余りの集団となり、板囲いの仮店舗ながら、ついに固定化して、統制経済もどこ吹く風という盛況を示した。

台風禍

九月十七日夜半から十八日にかけて、焼跡に枕崎台風が襲来、全市水浸しとなり、焼残りの防空壕やトタン囲いのバラック小屋に住んでいた罹災者は、最後の手持品まで失うという打撃を受けた。このころ、ポツポツ疎開先や避難先から帰りはじめていた市民も、焼跡に住むことを諦めて、再び田舎へ引揚げる者もあったし。しかし焼跡は台風で清掃された。

窮乏生活

七五年間は生物が棲めないと言われた焼野原に、青々と鉄道草が茂ったが、爆心地付近は、なお、茶褐色の焼跡のままで人影もなかった。全焼地域では住む人もまばらで、時折り進駐軍のジープの走るのが見られ、また、死んだ被爆者を焼く煙が、あちこちに眺められた。食糧の配給は乏しく、飢餓状態に陥った罹災者は、バラック小屋の周囲を整理して、自給菜園を作り、役所から配給された芋ヅルやジャガイモ・カボチャ・キビなどをできるだけたくさん植えた。しかし、汗を流してようやく収穫できるようになって、夜のうちに努力の結晶が盗まれるということも多かった。

闇市は広島駅前、己斐・横川両駅付近、その他でますます繁盛していたが、純正なものはおどろくほどの高値で、なかなか入手できなかった。まやかしものの代用品が多かったが、背に腹はかえられず、これを買って空腹のたしにした。雑草が材料の江波ダンゴという代用食が売出されたのもこの頃で、焼野原の中をテクテク歩いて、遠方からも江波まで買いに行った。

郡部の農家へ買出しに行く者も多かったが、農家は金よりも物を欲しがったから、物々交換が盛んになった。罹災者は、疎開していた僅かな衣類を取寄せて、食糧と交換したが、交換する物の無い者もたくさんいた。

町内会の復活

外郭だけになった市役所は、残存職員の努力でようやく起ち直って配給事務も行なわれるようになり、町内会の復活が要請されたが、全焼地域は町内会長や町役員の死亡者が多く、たまたまその町内跡に住んでいた罹災者の中で、比較的元気な者とか、印鑑を持っている者とかが選ばれて、町内会長になった者が多かった。爆心地から一・五キロメートル以内の焼跡の町は、住民もごく少人数であったから、七つも八つもの町をひとまとめにして、会長をつくった所が多かった。

復興の足音

焼跡に帰って来る者が、比較的に多くなりはじめたのは、被爆後一か年たってからであった。転入抑制措置など取られたが、以後、次第に人口は増加していった。しかし、広島市が本格的な復興を見せはじめるまでには、被爆後、なお三、四年の歳月を必要としたのである。

広島市内主要橋梁の被害状況

番号	川の名	橋梁名	爆心との距離(m)	構造	被爆直後の存否	状況説明
1		駅前橋 えきまえばし	1,800	木造	否	被爆により消失。渡れなかった。

2	猿猴川 えんこう がわ	猿猴橋 えんこうばし	1,900	鋼鉄桁橋	存	爆風によりランカンが破壊されたが、避難者の渡ることはできた。
3		荒神橋 こうじんばし	2,000	ゲルバー式 電車併用	存	爆風によりランカンが破壊されたが、渡られた。
4		大正橋 たいしょうばし	2,200	鉄筋コンクリート造	半壊	ランカンが一部は破壊されただけで、渡ることができた。ただし、九月の風水害で四径間(四橋脚間)流失。不通となった。
5		大洲口宇品線鉄橋 おおずぐちうじなせ んてつきょう	2,500	鉄橋	存	支障なし。七日、初列車第四三七列車が通過。
6		東大橋 ひがしおおはし	2,000	木造	存	被爆時、被害僅少で避難者が続々と渡った。九月の風水害で橋脚一部沈下。
7	神田川 かんだが わ	工兵橋 こうへいばし	2,100	木造つり橋	存	被害なし。爆風方向にかかっており、工兵隊裏の大樹もこれをかばった。牛田、戸坂方面への避難者が続々と渡った。なお、反対側からの入市は一時制止された。
8		神田橋 かんだばし	2,100	鉄筋コンクリート造	存	爆風方向にかかっていて、渡橋はできたが、白島よりの部分は陥没して危なかった。風水害で二径間橋脚一基沈下。
9		山陽本線神田川鉄橋 さんようほんせんか んだがわてつきょう	1,800	鉄橋	存	放射能により、杭木が発火してくすぶる。爆風により下り貨物列車四九輛編成(うち八輛落下せず)が脱線転覆して発火、積荷のドラム罐が次々に爆発した。八日、単線で旅客列車上り線十六時四十二分、下り線十五時三十分が初通過。
10		常葉橋 ときわばし (現在常盤橋)	1,700	鉄筋コンクリート造	存	橋床のアスファルトが熱線により自然着火し、一時はその火災のため、渡れなかった時期もあった。石造ランカンは河中に落ちた。
11		栄橋 さかえばし	1,600	鉄筋コンクリート造	存	炸裂時、橋床上を鬼火のように怪火が飛んだ。爆風方向に沿ってかかっていたので、被害が少なく避難者が東練兵場へ向けて続々と渡った。
12	京橋川 きょうば しがわ	京橋 きょうばし	1,500	鋼鉄桁橋	存	被害なし。台風の被害もなかった。避難者が続々と渡った。
13		稲荷町 いなりちょう 電車専用橋	1,400	鉄橋	存	被害なし。台風の被害もなかった。レールが曲がっていたが、これを渡って逃げた人もあった。
14		柳橋 やなぎばし	1,600	木造	否	前年の水害後は仮修理で、南側は通れず、北側の一方通行であった。修理資材(木)が橋の中程と東寄りに積んであったから、それに自然着火して焼落ちた。被爆後一時間くらいは渡って逃げられた。
15		鶴見橋 つるみばし	1,800	木造	存	ランカンなど一部が熱線により、自然着火したが、これを消火。比治山への避難者が続々と渡った。三年後、砂舟が橋脚を折損して一部落橋した。
16		比治山橋 ひじやまばし	1,900	ゲルバー式	存	爆風により南側のランカンが全部川の中へ落ちたが、避難者はどんどん渡って逃げた。死体多数折り重なる。
17	御幸橋 みゆきばし (電車併用)	2,300	石造ゲルバー式	存	石造の勾ランが双方とも爆風によって倒れ、南側の河中に転落。中央部から宇品方面へ避難しようとする罹災者で橋上は大混乱し、凄惨をきわめた。	
18	元安川 もとやす がわ	元安橋 もとやすばし	200	鋼鉄脚ゲルバー式	存	石造勾ランの点灯装置が、爆風によって相反方向に移動。ランカンは両側とも川の中へ左右に分かれて転落。したがって爆源がこの橋の延長の上空であることが立証された。
19		新橋 しんばし	500	木造	否	被爆により半分落橋、渡れなかった。昭和二十七年、ほとんど同位置に平和大橋が架橋された。
20		万代橋 よろずよばし (俗称県庁橋)	900	鋼鉄桁	存	橋床上にランカン・ハシケタ・五人の通行者の影が残っていた。被爆直後は、火が出ていて渡れないときもあったが損傷少なく通行はできた
21		明治橋	1,300	鉄筋コンクリート造	存	石造の点灯装置が爆風によって移動し

		めいじばし		リート造		た。避難者らは続々と渡った。九月台風で流出。
22		南大橋 みなみおおはし	1,800	木造	存	爆風により南側に傾斜し、手すりが焼けていたが、人だけは通ることができた。十月水害で流失した。
23	三篠川 みささがわ	山陽本線(三篠)太田川鉄橋 おたがわてつきょう	1,700	鉄橋	存	支障なし。八日、単線で旅客列車が初通過。
24		三篠橋 みささばし	1,400	鉄筋コンクリート造	存	爆風により勾ランの笠石をはじめ、かなりの部分が破損して川中へ転落し、大破したが一部分が通行できた。十月水害で一部流出した。
25	本川 ほんかわ	相生橋 あいおいばし (電車併用)	100	鋼鉄桁T字部鉄筋	半壊	爆風により勾ラン柱埋込のI型鋼が剪断。また橋床板の嵩上が大きく吹きあげられて移動した。西部あるいは北部へ向かって、多数の人々が渡って逃げた。
26		本川橋 ほんかわばし	250	鉄製	否	橋ケタは爆圧のため移動し、橋台は橋脚をはずれて通行危険であった。また、添加配水管を切断し給水不可能となる。直後に軍により板を渡して修理していたが、九月風水害でさらに被害。十月水害で完全に落橋。
27		新大橋 しんおおはし	500	鉄筋コンクリート造	存	被爆による損害は軽微であった。十月水害で流失し、廃橋。後、至近場所に西平和大橋が架橋された。
28		住吉橋 すみよしばし	1,300	木桁橋	存	被爆時、ランカンが南北に分かれて川中へ落ちただけで人々の通行はできた。十月水害で流失。
29	天満川 てんまがわ	横川橋 よこがわばし	1,200	鉄筋つり橋	存	被爆による支障は小破で、可部海道へ向けての避難民が続々と渡った。
30		横川 よこがわ 電車専用橋	1,200	鉄橋	存	炸裂時、渡っていた電車が川の中に転落したが、橋そのものは無事であった。九月台風の時、出水で流失。
31		北広瀬橋 きたひろせばし	1,000	木造	否	被爆当日、午後二時ごろ消失。それまでは渡ることができた
32		広瀬橋 ひろせばし	900	木造	否	被爆当日午後二時ごろ消失。
33		天満橋 てんまばし	800	木造(仮橋)	存	被爆時、木部が燃えていたが、人々はほとんど渡って逃げた。十月水害で落橋。
34		天満町 てんまちょう 電車専用橋	800	鉄橋	存	被爆により、ヒン曲がったが、これを渡って逃げた者も多かった。十月水害で落橋し、渡舟で通行した。
35		観船橋 みふねばし	1,000	木造	存	被爆により、橋ケタがゆるんだが避難者らが渡ることはできた。九月台風で落橋。
36		観音橋 かんのんばし	1,450	鉄筋コンクリート造	存	十九年の台風でワン曲し、車は通れず辛うじて人が渡っていた。被爆時、避難者らが西部へ向けて渡った。九月台風で半分落橋、十月水害で流出。
37		昭和大橋 しょうわおおはし	2,700	簡易仮木造	存	被爆時、損傷なし。江波から観音地区へ向かって避難民が続々と渡った。
38	福島川 ふくしまがわ (現在埋立)	中央橋 ちゅうおうばし	1,400	木造	存	被爆直後は渡れたが、二、三時間後に燃えはじめて、夕方までには北側半分ぐらい焼け落ちた。太田川放水路工事により廃橋。
39		小河内橋 おごうちばし	1,500	木造	存	被爆による損傷なく、避難者ら続々と渡り、橋上は混乱をきわめた。九月台風で流失。
40		福島橋 ふくしまばし	1,500	木造	存	被爆時、自然着火によりランカンが燃えたから、渡るものも少なく、避難者はたいがい上流の小河内橋にまわって逃れた。福島川の埋立により廃橋。
41		福島町 ふくしまちょう 電車専用橋	1,500	鉄橋	存	爆風によって大傾斜したが、必死の避難者はこれを渡って逃げた。
42		西大橋 にしおおはし	1,900	鉄筋コンクリート橋	存	被爆時、多少の損傷はあったが、渡るには支障はなかった。九月台風で中央部が陥没した。以後次第に落橋し、西詰部分だけを残した。

43	福島川 (現在太田川放水路)	庚午橋 こうごばし	3,300	木造	存	被爆による損傷はなかった。九月台風で流出。
44	山手川 やまてがわ	山陽本線(打越)山手川鉄橋 やまてがわてつきょう	1,800	木造	存	支障なし。六日、二本の救急列車を運転。七日、己斐・横川間の上り線を折返し運転。十二日ごろ・広島・横川間の上り線開通。
45	山手川 (現在拡幅して太田川放水路)	天神橋 てんじんばし (山手町寄り)	1,600 M	幅二間の仮板橋	否	爆風で吹っとんだ。後、太田川放水路の完成に伴い、山手橋と共になくなり、現在の中広橋となる。
46		山手橋 やまてばし (天神橋に続く中広町寄り)	1,600	幅二間の仮板橋	否	爆風で吹っとんだ。後、太田川放水路の完成に伴い、天神橋と共になくなり、現在の中広橋となる。
47		己斐橋 こいばし	2,100	鉄筋コンクリート造	存	爆風により小破したが、避難民が渡ることに支障はなかった。
48		己斐町 こいまち 電車専用橋	2,100	鉄橋	存	爆風により小破したが、電車の運行には支障はなかった。
49		旭橋 あさひばし	2,200	木造	存	被爆当時、渡橋には支障はなかった。九月台風で流出。

総数 四九橋

イ、被爆直後、存在していたもの 四一橋

このうち、九月台風・十月水害で流出(一部沈下も含む)したものの二〇橋

ロ、被爆により消失・落橋したもの 八橋

(註)右のうち被爆により大破・半焼・半壊したもののでも「存在」した橋とした。

被爆当時の市内各橋梁配置図

(註)この配置図の内の数字は、前表の橋梁の該当番号である。

広島市常会議員

河口祉三メモ帖(抜粋)

(昭和十六年二月八日告示の「広島市町内会等設置規程」により設置された「広島市常会」は、市長が委嘱した市常会議員七〇人で構成され、町内会制度の最高機関であった。

この市常会議員であった河口祉三(大河連合町内会長)のメモ帖から原子爆弾被災前後の状況資料として次のとおり抜粋した。)

()内は編集者の補記

(昭和二十年)

五月二〇日市常会

(一) (疎開家屋の)瓦の処置、各町内会へ引取りのこと

(二) 救護所・待避壕設置の件

五月二五日

(一) 国民義勇隊編成の件...軍人軍属及び入学せざる七歳以下の子持及び妊産婦・学徒(を除く)

食糧営団・土建組合・塗装工場・陸上運送 = 小運送を含む・鉄道・海上輸送・通信局以上(職域義勇隊)編成
二九日までに連合町内会へ名簿提出、隊員は町籍(簿)に其記入をなすこと

(二) 非常食糧三〇日分保管

(三) 日向西館六月一日開始(火葬業務)

(四) 日用品交換六月一日より市営にて福屋旧館にて開始

(五) 松根採取六月九日(実施)

(六) 横穴式防空壕、(構築)場所を選定し二〇日までに(義勇隊)聯隊長報告

(七) (町内会)防衛部長選定の件

(八) 疎開(跡)地耕作の件(自給菜園)

- (九) 勤労奉仕の件
- (一〇) 隣組改編に関する件
- (一一) 灯火(管制)の件

六月二三日

- (一) 全国(重要施設)一五万戸

広島重要施設、白島通信局・貯金局・芸(備)銀(行)・興(業)銀(行)・横川(の三篠)信用組合・日赤(病院)・文理(科)

大(学)

- (二) 疎開跡整理耕作(自給菜園)
- (三) 瓦処分の件(家屋疎開跡)
- (四) 鯉魚配布(貯水槽蚊発生予防)
- (五) 避難用浮橋。雁木及び橋の個所(に設置)
- (六) 非常用食糧確保の件、配給食糧を郡部に疎開(災害時避難先用)
- (七) 錫金類保存
- (八) 重要食糧保管の件、罐詰・大豆

七月一七日

(避難場所)

- (一) 国泰寺町中心六万坪 雑魚場町全部
- (二) 中島広場 県庁前・上水主町・中島町・元柳町
- (三) 堺町広場三万七千坪 堺町三(丁目)・小網町
- (四) 避難道路 八丁堀・白島西側全部
- (五) 西練兵場三万五千坪 (陸軍病院)第二分院も疎開
- (六) 一二、三万人疎開。八月二〇日まで完了。疎開に要する人員三〇万人、職域・地域学徒隊を以って充つ
- (七) 帝国(銀行)・安田(銀行)・興(業)銀(行)・福屋(デパート)・日本銀行・広島燃料・大正屋 周囲三〇米(疎開)

八月一三日

- (一) 東郷地区臨時野戦病院設置

本部・仁保(国民)学校・女(子)専(門)学校)・大河(国民)学校・楠那(国民)学校

- (二) 患者の看護
婦人の労力奉仕...患者に対する身廻り
- (三) 災害後における伝染病予防(対策)
- (四) 医師・看護婦出勤のこと
- (五) 町内の患者は町内会の手を経て治療を受けしむること
- (六) 人心安定の件
 - 1 安定に関する町内会長の決心
 - 2 通信防諜
 - 3 信号その他
 - 4 窃盗に関する件
 - 5 水道処置(漏水防止など)
 - 6 便所設置の件

八月一三日 聯会(連合町内会長)会同、船舶司令官が警備司令官となる

- (一) 町内会再編成
- (二) 罹災者休養所の設置
宇品(国民)学校)一、〇〇〇人・第三(国民)学校)五〇〇人・江波(国民)学校)一〇〇人
学校収容者は自活出来得る者
- (三) 戦災焼跡地の整理、必需物資の回収八月一八日まで
- (四) 罹災者見舞金贈呈一世帯三〇円

貯金その他金銭なく生活に困窮せる者は援護課へ出頭受領せしむる

(五) 一〇日より普通配給に復す

配給所 草津・古田・己斐・天満・三篠・牛田・尾長・仁保・比治山・大河

副食物は主として国民学校に於て当て、主要食は連合町内会長が一括して引渡し谷町に配分

(六) 戦災処理委員会、己斐・古田・草津の避難者は成るべくその地に落着く様指導すること

1 戦災者に対する着物

タオル三万・モンペイ二万・シャツ二万・ズボン二万・作業(衣)三万 計一二万

一五日より五日間、県庁前・下柳町・罹災証明書持参

2 日用品・草履一五万足決定

マッチ・ロウソク百箱

雨傘、その他はなし

以上戦時災害保護法

3 貧困者には市長及び援護課より各三〇円

町内会長証明

4 孤児比治山国民学校(に収容)

5 災害調査報告八月一四日(までに提出)

八月二一日 連合町内会(長会)議

(一) 八月一六日次官会議(において)軍需品を民需に移す(ことに決定)

激民需に應ずる衣類は類別に廻す

(二) 義勇隊...一〇日に解散(決定)

(三) 輸送も民需に(変更)

(四) 民需生産は自由

(五) 食糧は依然増産、工場労力(を利用?)

(六) 薪炭類 統制通り

(七) 漁業(統制通り)

(八) 応徴士(徴用朝鮮人)は解放

(九) 家屋は制限なし、土地には制限あり

(一〇)入市は制限をなす

(一一)軍人遺家族、統制通り

(一二)学徒動員解除

(一三)学童疎開は追って指示

(一四)金融関係は支払制限は絶対せず

(一五)駐屯軍は六大都市

(一六)戦災者保険、銀行預金通帳ある者は罹災証明書にて支払う なきものは後日対策を行う

(一七)広島市は一五、六万 土地一戸百坪内に三〇坪以内の家屋を建つ

紐帯道路五〇〇米~三〇〇米、河川に沿っては三〇〇~三〇米

(一八)(記載なし)

(一九)恩賜財団、援護課(取扱い)

戦災見舞品 酒・ブドウ酒一人七勺、ブドウ一人二〇勺

食糧配給現在員数により配給

(二〇)福屋を伝染病院(とする)

(二一)ロウソク・マッチ近く配給

砂糖四俵六〇〇斤一斤六〇銭

霞町二三三人・人河北一、一八二人・大河南一、四二〇人・旭町一、三〇〇人・出汐町六九五五人・楠那一、六二

〇人、丹那一、二一〇人

八月二三日

(焼跡整理事業)

八月二四日午前七時 出汐町十字路へ集合

旭(町)二〇(人) (大河)北二〇(人) (大河)南二二(人) 霞(町)七(人) 出汐(町)
霞・出汐(両町はトラック)二台

八月二五日午前六時半発

二三日 (大河)南 二四日(大河)北 二五日旭(町) 二六日出汐(町)
出汐町三(人) 霞町二(人) 午前八時より(午後)四時(まで)

八月二八日

砂糖二七俵六四八メ(配給)

八月二九日

(一) (町内会)事務所建設の件

(二) (町内会)事務員増加の件

(三) 配給に関する件

丹那 一、一〇〇 楠那 一、四〇〇 北 一、一八二 南 一、四二〇 旭 一、三〇〇
霞 四二三 学校 一九〇 計 七、七一五人

九月三日

下駄九〇〇足・ロウソク・マッチ大箱一〇〇個(配給)

九月八日

第一区 牛田・白島、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、大芝・三篠(戦災見舞金支払い分?)

鶴見町、昭和町、宝町、富士見町一部、比治山本町一部、雑魚場場町全部、国泰寺町一部、中島新町、木挽町全部、上水主町、天神町、元柳町一部、小細町、西大工町、堺町三、四丁目全部、西小網町、榎町一部、以上県に於て(戦災見舞金)支払い

応急建物の復旧

修理可能なるもの、小修理で済むもの、可能の家二万五千の勘定

平均二月当り修理費五人(役とする)

(内訳)大工三人、屋根屋一人、左官一人(総体では)一二万九千人を要し、資材は(全壊・半壊の)残留家屋の材料を利用

(イ) 戸当り三石の木材を見積り、七七、五八〇石

(ロ) 瓦一戸当り五坪 一二九万四千枚

(ハ) 釘一坪当り三〇〇匁を要す 二月当り二(貫)匁

(ニ) セメント二月当り一袋

大工左官一〇(日)間、五、六千人を県内外より傭人 宿舎は町内会に配分するにより斡旋 資材・労力の調査 食糧は本人持ち込み(および)別に市に於て特配の予定、副食物は市に於て配給

賃金一日二〇日(支払い)

小修理の結果、資材労力等一〇月までに報告

材料配給は一五日より一〇日間の見込

大工左官の賃金は前納

(損壊)八割以上の家屋、全壊と認め、その材料を使用す

戦災保(険)に付せざる家屋は坪一〇円乃至三〇円にて市に於て引取り

八月六日出動の義勇隊の数、当日死者と行方不明者の数を一三日までに報告のこと

供出のミシン返還につき交渉中電灯を付ける希望者は調査課?

一〇月六日 連長会議(連合町内会長会議)

戦災資金支払い一〇月より開始

一〇月三〇日

旭町 一、四〇〇人 三四三戸
大河北 一、三一二人 三〇五戸
大河南 一、五九〇人 三九五戸
霞町 四八〇人 一一五戸
出汐町 八三八人 一九六戸
計 五、六二〇人 一、三五四戸（住民現在数）

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

大手町 一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、立町、紙屋町 一丁目 二丁目、本通、袋町、中町、小町、国泰寺町 一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区は、猿楽町[さるがくちょう]・立町[たてまち]・細工町[さいくまち]・横町[よこまち]・鳥屋町[とりやちょう]・塩屋町[しおやちょう]・尾道町[おのみちちょう]・播磨屋町[はりまやちょう]・平田屋町[ひらたやちょう]・革屋町[かわやちょう]・研屋町[とぎやちょう]・東魚屋町[ひがしうおやちょう]・袋町[ふくろまち]・新川場町[しんせんばちょう]・下中町[しもなかんちょう]・中町[なかんちょう]・国泰寺町[こくたいじちょう]・西魚屋町[にしうおやちょう]・雑魚場町[ざこばちょう]・小町[こまち]・紙屋町[かみやちょう]・鉄砲屋町[てっぽうちょう]・大手町[おおてまち]一丁目～七丁目の範囲である。

この地区の細工町島病院付近の上空五七七メートル(20±)が原子爆弾の爆源であり、爆源直下の爆央から地区内でもっとも遠い距離は、国泰寺町の現鷹野橋[たかのばし]郵便局で、約一・四キロメートルである。

地区一帯は、旧藩時代からの商業地域で、大手町筋は銀行のビルも多く、南北を貫くビジネス・センターとして栄え、紙屋町・尾道町なども、大小の商店が軒をならべていた。

また電車軌道をはさんで、研屋町・革屋町・立町・播磨屋町・平田屋町・中町などは、ショッピングセンターとして常時賑わい、袋町・中町・小町・新川場町・雑魚場町は、国泰寺をはじめ、由緒深い名刹古寺も多く薨をならべ、明るい日ざしのなかに奥まった住宅が建ちならんでいて、城下町としてのおだやかな雰囲気を保つ、風格のある町筋であった。

国泰寺町には広島市役所があり、中町の広島県立高等女学校、雑魚場町の広島県立第一中学校など、市内有数の教育機関があった。

また、龐大な和漢の古書・郷土資料を所蔵していた広島市立浅野図書館(小町)があり、市役所北隣りには、旧藩士今中相親の下屋敷であった広島市公会堂があって、その庭園は、春和園と称する名園であった。

原子爆弾に際して、細工町はもりろん、まわりの猿楽町・鳥屋町も爆圧で一挙に壊滅した。

なお、この地区全体(被爆直後)の世帯数は六、四〇八世帯、人口約二三、〇〇〇人と推定されるが、被爆直前の町内会別に見ると、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
国泰寺町	661	1,200	5,800	(北)土井田仁平 (中)勝原平三郎 (南)村上清二
雑魚場町	520			田中勇
小町	398	240	969	香川三之助
立町	183	170	683	熊谷幸兵衛
猿楽町		260	1,055	岩崎永助
細工町		130	524	坂井典夫
横町		18	76	財満芳太郎
鳥屋町		80	325	中村静彦
塩屋町	70	70	300	佐々木昇
尾道町		300	1,225	柴田康一
播磨町		250	1,009	佐久間勇
平田屋町		260	1,055	杵木勝吉
革屋町		200	819	米山松次郎
研屋町		280	1,128	吉田幸一
新川場町	595	580	2,341	林栄太郎
紙屋町		220	901	高橋四郎
大手町一丁目		280	1,045	山本宥太郎
大手町二丁目		260	1,055	藤井徳兵衛
大手町三丁目		220		山田幸之助
大手町四丁目		230	432	渡部数太郎
大手町五丁目				島田省吾
大手町六丁目		280	797	倉本周誓

大手町七丁目		450		(東)野村寿仁 (西)林乙次郎
袋町		280	1,127	藤重彦一
鉄砲町	136	150	650	東三平
中町				

地区における主要建物・事業所は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広島市役所	国泰寺町	白神社	小町
市立浅野図書館	小町	玉昭院	小町
広島市公会堂	国泰寺町	戎禪寺	新川場町
控訴院	小町	妙慶院	新川場町
西警察署	大手町一丁目	正清院	新川場町
中電話局	下中町	等覚院	新川場町
広島郵便局本局	細工町	延命院	新川場町
産業奨励館	猿楽町	本照寺	新川場町
日本赤十字社広島支部	猿楽町	海雲寺	新川場町
県立第一中学	雑魚場町	源勝院	新川場町
県立高等女学校	中町	聖光寺	新川場町
大手町国民学校	大手町七丁目	金龍寺	新川場町
袋町国民学校	袋町	禪林寺	新川場町
安田銀行	平田屋町	広島日本基督教会	国泰寺町
日本銀行	袋町	崇徳教社	立町
芸備銀行	紙屋町	頼山陽記念館	袋町
住友銀行	紙屋町	中国配電株式会社	小町
三井銀行	革屋町	大林組	国泰寺町
帝国銀行	革屋町	千代田生命ビル	大手町一丁目
三和銀行	大手町	富国生命ビル	袋町
国泰寺	小町		

二、疎開状況

人員疎開

本通り商店街地域は、被害激甚で、不明の個所が多いが現存者の一人中山良一(中山楽器店主)の資料によれば、人員疎開は、各町とも総人口の約半数が疎開し、疎開前は各町一〇〇戸から二〇〇戸あったのが、疎開後は各町とも五〇戸ぐらいになっていたという。

大手町筋、及びその周囲の各町は、商店経営者が多かった関係上、店舗を空家同然にしておくことは事実上できなかったから、家族が交替で疎開先に帰るという方法をとっていた。すなわち、一応、当局の指示どおりの疎開態勢を整えていたとはいうものの、一家あげての完全疎開ではなく、自発的に行なう交替制疎開が実状であった。

研屋町・革屋町から下[しも]の新川場町へかけての地域一帯では、別に疎開先は指定せず、各家とも、親戚縁故をたよって、ほとんど田舎へ疎開した。

小町・国泰寺町・雑魚場町地域の、当時の町内会長が全員が被爆死したため判然としないが、生き残った人々の推定によると、初めの強制疎開実施のときには誰一人として、応ずる者がなかったという。昭和二十年四月、小型爆弾一〇個のうち二個が町内に投下されたが、このとき、国民義勇隊袋町大隊本部の中山良一計画部長は、ただちに被爆状況を師団司令部の参謀長に電話で報告し、憲兵の出動を求め、要所要所を通行止めにして、被爆者の処置にあたった。死者三〇数人は兵隊の手によって、袋町国民学校講堂に収容し、死体をムシロでおおった。これらの遺体は、一般市民の目につかぬよう夜になって、軍用トラックで、天満町の向西館(火葬場)に送られて茶毘に付せられた。負傷者のことについては不明であるが、広島市民に与えら衝撃は実に深いものがあつた。このときから疎開もはかどるようになり、急に、任意疎開のかたちで、まず老人を疎開させた家が多かった。

こうして、各町内南部方面では一二〇人・中部方面では約七〇人の疎開者を出した。昭和二十年五月ごろから、各町内会の約三分の一程度の疎開があり、被爆直後ごろは、約半数の疎開者があつたと推定される。

物資疎開

物資疎開は自発的に行なわれたようである。猿楽町にあつた食糧配給所では、朝、疎開地から荷車で運んできて販売し、夕方閉店すると、残品を荷車に積んで疎開地まで帰るという方法を毎日繰り返した。

町民は、親族や知己を求めて人員疎開はともかく、運送の不便になやみながらも物資疎開だけは大半の家庭が、大なり小なり実施した。

しかし、原子爆弾による家の中心人物の死亡などの理由で、戦後、これら疎開物品を引取ることについて、人間の誠実性をうたがうような悲惨なできごとが多く発生した。中には、広島には爆弾は落さないだろうという風説を信じ、疎開しなくて、全部焼失した家庭も相当あった。

医師の疎開禁止

医師は防衛要員として、地区外に疎開することはできなかった。ただし、県衛生部からの通達により、医師は薬品・医療機器などを、宮島～西条間の各町村に疎開させていた。

また、薬局の薬品は、軍の命令により、高田郡向原町に疎開させた。

さらに、各商店の食料品や衣料品なども、命令により町内会が責任をもって倉庫に保管し、空襲のあったつど、軍に対して在庫数を報告できるようにしていた。

学童疎開

大手町国民学校の生徒は、集団で、比婆郡山内北村、及び同高村方面へ疎開し、袋町国民学校は、双三郡田幸村その他の村へ疎開した。

また、生徒のなかには、親戚・知己のところへ縁故疎開した者も相当人数あった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年ごろ、市の指導によって警防団が結成され、各町内に、警防分団を設け、隣組組長を班長にして、指導員を設け、男は警備・防火および竹槍訓練を行ない、女は、バケツ送法の消火訓練や避難・救護の訓練を受けた。また、毎週訓練として、灯火管制が行なわれた。水槽の設置も強制されたが、いずれも気休め程度であった。

昭和二十年四月、国泰寺町六八番地の日本キリスト教団広島教会が、鷹野橋における交通の要路にあって便利なため、この場所が警防団本部となり、警防団員や警察官が常駐していた。

また袋町国民学校に、広島市国民義勇隊袋町大隊本部が設置された。

防空訓練

竹槍の訓練は、時代逆行として実施しない町もあった。これについて、師団司令部で問題になったことがあったが、そのかわり婦人会は、実際的な担架輸送訓練に励み、救護方法を習得し、さらに一層防火訓練に精を出した。

西部軍司令官の査察がおこなわれた際、義勇隊関係者をはじめ町内会役員一同、竹槍訓練不実行について、叱言があるものと覚悟していたが、実戦さながらの訓練ぶりに、司令官自身ビショ濡れになり、一同は賞讃の言葉を受けた。中でも本通りは、「この実状をフィルムに撮って各地区に観せよ。」とまで言われたという。

家屋疎開作業

家屋疎開作業については、本通り商店街を中心とする各町は、六日当日は動員指令がなかったので、他地区へ作業に出ていたものはなかった。むしろ町内の作業に、他地区からたくさんの人が勤労奉仕でやって来ていた。

猿楽町の家屋疎開は早く、十九年には全部完了した。電車通りから大手町通りまでの北側で約一〇〇戸であった。横町・細工町方面は、七月二十四日までに建物疎開を行なうよう指令があり、町の北側西警察署から島病院まで実施していた。国泰寺町では、公会堂が実施中で、学徒約五〇〇人が出動していた。小町（県立高等女学校南側）は、三〇〇メートルに亘って実施済みであったが、戸数は不明である。その他の町も計画どおり実施していたが、当時の責任者が死亡しているので、六日朝の状況は知ることができない。

家屋の取壊しには、たいてい軍隊があたり、その跡片づけは、隣組や学徒隊が交替でおこなった。

また、解体家屋の木材で、町内特定の場所のほか、各家庭の屋敷内や家屋内の地下に、少なくとも一か所は防空壕をつくった。

家庭用防空壕には、警報発令にあたって、老幼者を優先的に待避させ、当座の食糧・衣服なども保管していた。

四、避難経路及び避難先

避難計画

本通り商店街付近各町の避難先は、第一次避難所として西練兵場を指定した。袋町付近は、袋町国民学校と決めていた。

第二次避難先は、安佐郡可部町と指定し、ここの民家の倉庫を借用して、常に二〇〇人分の食糧品・薪炭・塩な

ど調味料、それに薬品と町籍簿の写本・文具などを保管して万に備えていた。

国泰寺町方面の各町は、最初に吉島方面へ避難し、そこから似ノ島へ行くよう指定されていた。しかし、町によっては、己斐を経由して、佐伯郡観音村へ行く計画もあったし、比治山へまず行くよう考えていた町もあった。

だが、実際原子爆弾にあったときは、各町で指定されていた避難経路を取ることができず、各自バラバラになり、郊外の実家とか、親戚・知人をたよって避難した。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種名称不明の陸軍が、崇徳教社に一〇〇人ぐらいた。なお、学校内にも軍隊が駐屯していたようである。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日の夜は、しばしばの警報発令で、警防団員や町内会の役員は、ほとんど眠らず、防衛態勢の万全につとめた。町民もまた、防空壕に入ったり出たりして、あわただしいひと夜をあかしたのであった。

六日朝

六日午前七時九分に警戒警報が発令され、三十一分に解除された。多くの者は、「B29の定期便」と呼んでいて、差し迫った感情はなく、町内は活気を取戻していた。職場に急ぐ人々、疎開作業に動員されて市内・近郊から現場に向う人々も多く、その中には中学校の動員生徒も続々と集結しつつあった。また、建物の中では事務をはじめた人もいた。家庭にあっては、主人や子供たちを送り出した主婦たちが、後かたづけをしている時でもあった。

敵機襲来 炸裂

東方の西条・呉方面から三二機の来襲が目撃されたし三回ぐらい旋回し、うち二機は西方海上方面へ、うち一機は落下傘ようの物を投下し、そのまま出雲方面へ遁走した。まもなく空中で異様な光が閃き、爆発した。それは、マグネシウムを焚いたような光とも、また、焼夷弾の爆発を大きくした光とも思われた。青白い光で、空が大変美しく感じられ、ものすごく大きい火の玉であり、まったく特殊な閃光であった。

七、被爆の惨状

一時の惨事

閃光を感じた一瞬、人々は爆風によって、瞬間的に吹きとばされていた。中には、赤ちゃんを抱いて戸外に立っていて、爆風で赤ちゃんだけが何処かへ吹き飛ばされた婦人もいた。

木造家屋は、一瞬にして全壊すると同時に火災を生じた。

鉄筋建ては、外郭を残して、窓ガラス・窓枠が吹飛び、壁も剥がれてメチャクチャとなり、内部は熱のためたちまち火災を起した。

阿鼻叫喚

爆風によ家屋の倒壊する騒音、高い煙突の倒壊する轟音、舞い上がる砂塵、コンクリート壁の落下する大きな音、これらの轟音をぬって、聞えてくる重傷者のうめき声、下敷きになって救助求める声、家族の名を尋ねあう叫び声などが一度に交錯してあがった。

熱線により、着衣が焼け、皮膚は火傷し、爆風で飛んできた木片や瓦などにより、血を流している兵隊や男たち、それに、若い女性も、子供を抱いた家庭の主婦も、全裸またはそれに近かった。なかには発狂した人もあり、大声で何かをわめきながら右往左往している。

人々は、大なり小なり、それぞれ火傷したり負傷したりして、迫りくる火炎から逃がれるのに必死であった。したがって、避難する途中の路上で、家屋の下敷きになった人から助けを求められても、自分自身が手足をひきずっているため、助けようと思ってもどうにもならなかった。

なかには一度は助け出された人もいたが、そのまま放置され、ついには炎に吞まれ、後日、焼死体で運び出された人も多数あった。動き得た被爆者は皆トボトボと歩いて郊外へ避難していったが、満足な治療も受けられず、むきだしの血まみれ、埃まみれの姿であった。

各所に起った火災のため、逃げ場を失った被災者の群れが、火熱からのがれるため、川まで避難してきたものの、力尽きて、その場で死ぬる負傷者や、川の中に頭を突っこんだままの死体、あるいは川面に浮いて流れてゆく死体などで、川の水も見えないほどであった。殊に相生橋付近は、惨状をきわめており、水面は死体でおおわれた。

猿楽町・細工町付近各町から大手町四丁目あたりへかけては、炸裂中心地の至近範囲で、その当時、在住していた町民は全滅した。まったく徹底的な破壊であった。

吉村浩明(大手町七丁目)の資料によれば、閃光を感じ、異様に思うまもなく、大炸裂の音響と同時に、爆風によって、周辺一帯の家屋が倒壊した。屋外にいた者は高熱の直射を受け、爆風により吹きとばされて、大手や壁土の倒壊によって下敷きとなり、屋内の者も、家の下敷きとなり、救いを求める声で耳をふさがれたという。

ようやく脱出できた者も、各所からの火災の発生で、下敷きとなり救いを求める声にも、助ける暇がなく避難した。避難先は、とっさのことで何処とも知れず、とにかく安全な方へと、われ先をあらそって逃げた。途中、倒れた者も多かったが、それらの人々をも見捨てて避難するありさまであった。県立第一中学校のプールに避難した者は、火災と、時々起きる竜巻のため、電柱や樹木が吹きあげられる光景に、生きた心地は全くなく、水中にもぐって、やっと難をのがれた。しかし、こうして一時はのがれた者も、多くは助からなかった。

市役所・中国配電株式会社(現在の中国電力株式会社)のビルが倒壊せずに残っただけで、木造可燃性の建物は、全部倒壊全焼した。人々は呆然自失、何らなすところを知らぬありさまであった。

建物の下敷きになった者は、ほとんど即死。かろうじて生き残った者も、負傷と、閃光のための火傷で、町内の約半数近くの者が、その日のうちに死亡したものとみられる。

火災は、時を移さず燃えひろがり、その日午後三時ごろまでに、ほとんどの木造建物は火炎につつまれ、夕方までには焼失した。

中には、市役所隣りの公会堂の庭園の池、県立第一中学校のグラウンドなどに一時的に避難した者もあったが、午後三時以降は、地区内で歩いている人間の姿は、その影さえも見るのが稀であった。

公会堂周辺

空地になっていた公会堂の池辺には、負傷しながらも、じっと翌朝まで、そこで過ごした被爆者が六、七〇人ばかりいたが、そのうち半数は死んでいた。池の中には幾つも死体があったが、中には自転車をかかえている死体や、財布が落ちたといつて必死に探していた人の死体、また一晩中いたわりあっていた市役所前の理髪店の夫婦などの死体があった(喜多輝子談)。

あとでわかったことであるが、本通りと大手町の交差点角の第一銀行・三和銀行建物内に、炸裂直下でありながら通行人が何人か逃げこんで死んでいた。そこまで逃げて来た人たちであつたらうか。

脱出

国泰寺町付近の者のうち、脱出できた者は、風向きを考えて、西の吉島町・南の千田町方面へ避難する者が多かった。また、一部の人たちは、ただ体一つで、人波のあとについて東の比治山方面か、または安全な郊外をめざしてのがれた者もあった。

顔面や肢体に閃光を受けた者は、たいてい皮膚がただれて、皮が剥げ、着衣は焼けていた、これら避難者は、道端に倒れて動けなくなったり、坐りこむ者も多かった。それを救うすべもなく、自分自身が、親戚の家かどこかにたどりつくのが精いっぱいであった。元安・本川などの川にのがれて火災を避ける人もあった。川に逃げた人は、溺死者も多く、水面を蔽うて流れた。また、干潮になったとき、河原に横たわったまま、動けなくなっている人が多数あった。また、引火して木造部が燃えあがっている天満橋の上を、続々と避難者が渡っていった。

救護隊員の目撃

被爆後二日目、救援隊として市中に乗りこんで来た賀茂海軍衛生学校の生徒の一人西家明男海軍上等衛生兵は、爆心地付近の惨状について、次のように報告している。

「広島駅前に出て、電車軌道沿いに中心部の八丁堀方面に前進したが、死体の悪臭がはげしく、手拭を取り出して鼻に巻き、マスク代りにした。トラックで進む道々には、黒焦げの死体が放置され、防火用水槽に頭から突込んで死んでいる婦人、防空壕入口に重なっている黒焦げ死体、狭い溝の中に体を無理に入れて苦悶のはて死んだ人など、さまざまな死体が目につく。また脱線炎上した電車の乗降口には、白骨が折り重なっており、後の方には、腰が少し曲っただけで前の骨にもたれかかっているのか、頭まで立ったままの姿勢の白骨もある。

一面廃墟の中では、外郭だけになりながらも高く建っている福屋百貨店が、なんとなく力強く思われた。銀行が何かの大きな金庫がくすぶり続けており、『中に紙幣が焼けているのだが...』と思う。

護国神社付近に行けば、鳥居だけが黒くくすぶって残っており、境内の大木はほとんど跡かたもなく吹き飛ばされ、根もとから幹が一〇数メートルだけ残り、それがまっ二つに裂かれている。

歩いている人は放心状態で、何を求めているのやら、身内を探しているようでもあるし、暗い表情をしている。

小高くなった物陰のような所には、被爆者が数人ずつ身を寄せあって、じっとしている。

基町・大手町・猿楽町・細工町付近はもっともひどく、その悲惨さは目をおおうものばかりで、みんな即死である。口・鼻・耳から出血した黒焦げ死体は、一瞬に死んだものであろう。

護国神社付近の道ばたの家では、一家枕をならべて死んでいる家族が多く、中には、五、六歳くらいと二、三歳くらいの子供を間に、夫婦が寝たまま黒焦げになっているもの、あるいは両親と共に一糸まとわず、豚のように脹れあがり、口・鼻・耳から出血して黒焦げになっている十歳くらいの子供など、涙をさそうものばかりである。

相生橋東側一帯は、路上に豚か何かの丸焼きをころがしてあるように、人間の黒焦げがたぐさ倒れており、通行中の人が即死したものと思われる。道路やその周辺とあわせて、一面が死体の散乱で、まったくこの世のものとは考えられない状況である。

『これが広島市とは思われない。どうしても何処か外地の戦場に来ているようだ。』と、隊員の誰かがいう。

トラックの通行は困難で、相生橋も渡れそうもなく、右往左往する。」

六日当日、江田島幸の浦基地から急ぎ出動した陸軍船舶練習部第十教育部隊の柴田富雄上等兵は、爆心地から約八〇〇メートル付近(国泰寺町・大手町一帯)の惨状について、次のように記している。

「...昨日(六日)に引続き道路整理にとりかかる。昨日も随分整理したようだが、今こうして、あたりを見まわすと整理した範囲は僅かなものだ、飯をくったあとだけに、作業にも自然気合いがはいる。散乱する電柱・トタン・壁板・瓦などを道路の両側に運ぶ。道路の整理は急を要するし一同黙々と作業に従事する。午後は付近の死体を次々と一か所に集める。水道の水が流れて水溜りを作っている所には、いたいけなオカッパ頭の少女の死体が半分水にぬれながら横たわっている。直接熱線にあたらなかったのだろう比較的きれいだし幼い犠牲者を目にするたびに烈しい怒りを覚える、次々と片づけているうちに思わず愕然とするような死体にぶつかった。仰向けに倒れている妊婦の腹が人きく裂けて、露出した大小の腸がそこら一面に散らばり、然もその先には胎児が転がっているのだ。何というむごたらしい死体だろう。思わず釘づけされたように一同その場につつ立ったまま動こうともしない。この死体を収容し、黙々と、だが元気一杯に作業を進め、ある大きな建物の向う側に出た我々の目前に、実に驚くべき光景が展開された。烈しい爆風に吹っ飛ばされたのだろう。建物の一方に数百あるいはそれ以上もあるか...ユデ蛸のような裸体の死者が見上げるような高さに累々と折り重なっているのだ。その殆んどが満足な格好をしておらず硬直した体にふくれあがった唇は、南洋の土人を彷彿させるものがある。両手を広げた者、エビのように体を折り曲げた者、両足の間から頭がのぞき、人の頭をふみつけて逆立ちしたり、仰向けにあるいはうつ伏せになっている。これは現実の姿なのかと思わず頬をつねりたくなる、ホーッ！と、ため息のような声が一同の唇をついて出る。何ともすさまじい光景である。

この時、身内の者でも探すのか、そこそこに転がる死体をあらためていた三人連れの男が近づいて来た。山のような死体の前に立ち、何事が話しあっていたが、やがて端の方から次々と調べはじめた。しばらくすると、どうもこれらしいと言って道端に運び出したのは、年齢はおるか、男女の別さえつかないような全身赤黒く焼け爛れた死体である。まったく火傷の程度から格好から酷似したこの死体の群れの中に、求める死体があったとしても、見つけるのは不可能だと思っていた我々の予想は見事にくつがえされてしまった...。同時にたとえようなない感動の湧きあがるのを覚える...。元気がない足どりで担架をかついで行くその人達の後姿を見つめる一同の表情は複雑だ。作業を続けるうちに、ふと物陰にうごめく人の姿が見えた。行って見ると、髪をボウボウと振り乱し、ほんの申し訳程度のボロ布を身にまとった一人の女が坐っている。我々が近づくと、急に空を仰いで、空襲！！空襲だ！！空襲！！と叫ぶ。突然襲いかかった原子爆弾の炸裂に発狂したのであろうか？ 戦慄を覚えるような恐怖に怯えた顔が痛ましい。近くには手足をちじめ、頭からつつ込むような格好をした幼児の死体が黒焦げになって転がっている。

今しも電車軌道を横断しようとする、急にむせび泣くような呻き声が聞えてきた。半焼のまま立往生している電車の中をのぞいてみると、車掌服をつけた若い女性がうつ伏せに倒れている。車内は乱脈をきわめ、あたりには綿のようなものが散乱していて、負傷者が苦しみ反転するからであろう、その首に一樣にからみついている。ウーン、ウーンと蒼変し、苦痛にゆがむ顔！通りかかった一般の救護班に後事を託して再び作業を続ける。」とある。

また、八月八日に豊田郡木ノ江町(大崎上島)から、救援のため入市した在郷軍人編成の大崎部隊(隊長・佐々木秋夫予備少尉)約一〇〇人は、九日から二班に別れて死体の収容・焼却などをおこなったが、一班は広島県立第一中学校の校庭に一週間野宿して、約五〇体を収容し、校庭に穴を掘って焼却した。この一班の隊員横本数満の語るところによると、倒れたコンクリート塀の下から発見された死体は、冷凍のイカのように白っぽく、蒸し焼きになっていた。見れば、若い母親と赤ん坊で、赤ん坊は母親の乳房をくわえたままの姿で、まだ生きてるように思われた。

死体の焼却は、全隊員が代わるがわる従事したが、その臭気は続けて三体も焼けないほど鼻を突き、一体ずつ交替して焼いたという。

この大崎部隊の作業は、終戦の日まで続けられたが、この間、校庭に耕作されていた畑の跡に、青い芋の芽が出ているのを発見し、满目焦土の中で、人々は驚き以上の複雑な感じを受けたのであった。

爆心地付近の生存者

爆心地から半径五〇〇メートル前後の範囲内の地域は、原子爆弾の直撃によって、まったく一瞬に潰滅したが、それは人間の想像を絶する惨劇で、火災が終息すると、地上は粉雪のような白い灰で深く覆われていた。

この範囲内における被爆生存者はほとんど無いと思われていたが、その後の調査で、堅牢なビルの陰や地下室その他特殊な条件にいて奇蹟的に命拾いをした人が、現在(昭和四十五年)まで約六〇人ばかり確認されており、このうち二人が路上の被爆者である(広島大学原爆放射能医学研究所)というが、なお精査の余地があろう。

楠木の終焉

袋町の日本銀行広島支店の三階は、当時、財務局が使用していたが、六日午前八時前に登庁した同局の赤井了介経理統制課長は、自席について執務姿勢をとったとき被爆した。何が起きたのかと言っているうちに、南窓から物凄い爆風が入り出したので、急ぎ窓のシャッターを下した。しかし、自席の後部のシャッターは、その時に限り閉鎖不能、窓ガラスは壊れて強烈な爆風が入り、執務机の上を四歩ばかり跳ね飛ばされて、腰部をしたたか打った。瞬間、大きなガラスの破片が左ひじに突き刺さり、左手が機能を失った。スリッパをはいていたので、これではいけないと思い、靴を履こうと自席に向きなおったとき、爆風激しく二進も三進も動けず、窓際にしゃがんで市内の動静はどうかと、屋外を見守っていたところ、隣りの国泰寺境内にある天然記念物の有名な大楠木の一本が、根こそぎにされ、宙に飛び上ったのを目撃した。そのうち随所に火災が発生し、みるみるうちに火の海と化した。しばらくして残りの一本の楠の木に火焰が移り、折からの強風で三階にその火焰が移り、居たたまれなくなったという(原爆の記・発行責任者 伊達宗彰)。

人的・物的被害

地区の人的・物的被害状況は、爆心地に近いほど調査困難で、後日の調査にまたねばならないが、概略は五四ページに記載する一覧表のとおりである。

火災発生状況

爆心地近辺は瞬間的に炎上したと推量され、他の地域は随所から発火し、ほぼ北から南(市役所方面)へかけて延焼したように思われる。

国泰寺町付近の火災発生は、放射熱線による発火は少なく、多くは倒壊建物の炊事場の残火が原因であったという。雑魚場町付近もまた、炊事の残火によるものがほとんどである。

小町付近では、放射熱線によって電柱が燃えた。また、板塀が爆風に倒されたままで燃えはじめた。

木造家屋が爆心地に向いている側から発火したという証言がある。

更に西練兵場の防空壕が焼失したが、その状況から、放射熱線によって発火したものと判定されている、放射熱線が人間の肌に触れたとき、痛いという感覚ではなくて、何か鋭利な刃物で瞬間的に、斬られた感じであった。火災が発生すると、火炎が渦巻き状になって立ち、ついに旋風のようなすさまじい黒煙を空に噴きあげたと、目撃者が語っている。

町名	最初に発火した		延焼の状況	終息の時刻
	場所	時刻		
国泰寺町	不明 二〇か所位から発火したという。	八時三十分頃	四方から発火し、延焼した。	九日午前中まで。
雑魚場町	不明	八時二、三十分頃	発火により延焼による火災のほうが多いようであるが、詳細不明。	九日早朝まで。
小町	詳細不明	倒壊と同時頃	一部、熱線による自然発火もあったようである。延焼状況は不明。	八日夜中、ある所では九日朝まで。

降雨

地区の北部寄りと川筋以外では、ほとんど雨が降らなかったようである。しかし、火災中に降雨があって、火災が一層強くなったと語る被爆者もいて、細部にわたっては判然とししない。

その夜

地区に比較的近い場所に避難した人が語るところによると、その夜、全地区が火の海で、各所に火炎が高く昇って、赤々と上空を焦がしていた。そして一晩中、パンパンと物の爆発する音が聴え、夜遅くなくても鎮火しそうな気配は無かった、

諸現象

放射能熱線を受けた部分と、受けなかった部分との区別が、はっきりと見分けられた。真上から熱線を受けた屋根瓦は溶解し、また、建物に使用された花崗岩をはじめ、石垣・庭石などが、皮をむくような状態で焼けているのが多数見受けられた。

屋内屋外を問わず、金属製・ガラス製のもの、例えば、硬貨・鉄骨・自転車・灰皿、その他一升瓶・花瓶などが溶解したり、著しく変形していた。

陶器類は原形のままのものもあったが、使用できないほど非常に脆くなっていた。

鉄製の電柱(物理的に組立てられたもので四角形をなす)は、一本残らず土台から倒されていたが、木製丸形の電柱の中には、一部分を除いて、そのまま立っているのが見られた。爆心付近の震柱で、完全なものは一本もなく、あるいは倒れ、あるいは傾き、あるいは中央部から折れ、燃焼して奇形を呈していた。また、爆心地至近の場所で、立ち続けている煙突があった。

国泰寺の樹齢四〇〇年という大楠木は、一本は根こそぎに倒れ、隣りの一本は上部が折れて落ち、下部は着火してその空洞から煙を噴いていた。また、高さ三メートル近い五輪塔の墓石の、中央円形部の下部に、煉瓦の破片が食いこんでいた、爆風で塔の上部が傾いた刹那、その隙間に、吹き飛ばされて来た煉瓦が挟まったものと思われる、後日、その不思議さのあまり、いたずらする者がいて、被爆現象としての価値を失った。

自動車・電車は吹き飛ばされて焼け、その残骸には、深く余熱がこもっていた。袋町のところで、脱線した電車が、炎上しているのを目撃した人(後かめよ)がいる。

また、相生橋の歩道が、約二メートルほど吹きあげられた、その瞬間を目撃した人もある。

鎮火後の地区内は、所々に鉄筋コンクリート建のビルディングが、外郭だけになってむなしく立っているだけで、地面は、焼け落ちた電線が、クモの巣のようにもつれ絡んでおり、死体や重傷者が到る所に横たわっていた。

島病院(細工町)付近の爆心直下では、焼けた電柱が鉛筆のシンのように尖って立っており、四角な防火用水槽(大手町一丁目・千代田生命北側)は、四方にはじけたように破壊され、その底もこなごなに砕けて抜けており、炸裂時の衝撃波の強烈な直撃を物語っていた。

助かった人々

助かるという事は奇蹟であったが、大手町通りも七丁目あたりでは、家屋内にいた人で、倒壊時に、タンスのそばにいたために、落下してきた木材や柱などが、タンスに支えられて負傷をせず命びろいした者、屋外にいた者でも、大きな材木や石垣などの陰になって、熱線も受けず、倒壊家屋も支えられて、下敷きにならなかった人がある。

新川場町の金龍寺山門だけが、風圧に堪え、火災をまぬがれ、厳然として立っており、不思議に思われた。

そのほか、次のような事実があった。

黒須さかみ - 屋内にいたが、そのまま畳に、伏せの姿勢をとった。物が落ちてきたが、それが支えとなって圧死をのがれた。

戸谷しげの - 屋内にいたが、タンスの横にいて、下敷きにならなかった。

後かめよ - 銀行の扉わきにおって、建物が頑丈なため、支えられ助かった。

白木ふさの - 裏の平家の家において、家は傾いたが、食卓の下にはいった。下敷きになったが、はい出ることができた。

福地弘 - 二階の安楽椅子にかけていて吹き飛ばされたが、唐紙(フスマ)に支えられて、火傷もなく助かった。ただし、ガラス傷が、多数体内に残った。

山村城造 - 家屋の倒壊とともに、吹きとばされたが、無傷で助かった。

炸裂時の被害

なお、炸裂時の被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
国泰寺町	70	30	-	-	50	43	7
雑魚場町	70	30	-	-	86	14	-

小町	78	22	-	-	72	23	5
立町	90	10	-	-	94	6	-
猿楽町	100	-	-	-	96	4	-
平田屋町	100	-	-	-	79	18	3
細工町	100	-	-	-	100	-	-
横町	100	-	-	-	100	-	-
鳥屋町	100	-	-	-	100	-	-
塩屋町	100	-	-	-	100	-	-
尾道町	100	-	-	-	100	-	-
播磨屋町	100	-	-	-	100	-	-
革屋町	100	-	-	-	87	13	-
研屋町	100	-	-	-	87	12	1
新川場町	76	24	-	-	75	10	15
大手町三丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町四丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町五丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町六丁目	100	-	-	-	100	-	-
紙屋町	100	-	-	-	90	10	-
大手町一丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町二丁目	100	-	-	-	100	-	-
大手町七丁目	90	10	-	-	81	19	-
袋町	100	-	-	-	90	10	-
鉄砲町	90	10	-	-	70	14	6
中町	90	10	-	-	70	20	10

元安川に避難して 藤田琴子(元広島市長・藤田若水婦人)

被爆したのは、大手町八丁目の川筋の妹の家(立川夫婦と八歳の女兒の三人家族)で、私は満六一歳でした。

五日の夜、弟加藤俊夫の嫁と一緒に、この立川の家に泊りました。翌朝六日、朝食をすませ、食卓をかこみ、しばらく雑談していましたが、妹が「八時です。モンペをつけましょう。」と、言い終るや否やおどろいたように「あれ、なんでしょう。」と、見つめるようにして言います。不思議に思いながら座敷の方を見ると、四斗樽ぐらいの高さ丸さに、赤青黄紫の火が恐ろしく燃えているのでした。

直撃弾を受けたと思い、ただちに伏しました。そのまま失心していました。その間の町間は不明です。日が覚めたときは真暗闇、体を起そうとしても自由ならず、身動きできません。「誰かおらないか。」と呼んでも答えがありません。「誰か来てくれ、来てくれ。」と呼びつづけていると、弟嫁が来て「起してあげましょう。」と、言って起こそうとするのですが、どうにもなりません。妹婿が「私が起しましょう。」と、申して、やっと起してくれました。

私にも、私の周囲にも大きなものが落ちかかっていた。私は、爆風で吹き飛ばされて、炊事場の方へたおれていたのです。

婿と弟嫁の肩にすがり、死人同様、亡霊の姿でやっと部屋にもどりました。

弟嫁も「私は姉さんの側にいましたのに、どこへ飛んでいたのでしょうか。」と、申します。幼い子ども、どこからか出て来ましたが「おまえはどこにいたのか。」と、皆にたずねられるありさまです。

伏せた私だけ、食卓の側をはなれていませんでしたが、食卓もどこかへ飛んでしまって、もうそこにはありませんでした。

浴衣に細紐をしめて、何一つもたず、立川の家族三人と、私と弟嫁五人で門を出て見ると、男や女、子どももまじってたくさん人間が右往左往して、親を呼び、子を探しもとめる狂乱の巷でした。

町内の世話をしている元気な若い大の男が気が狂い、大騒ぎしていました。どこかで、子どもの泣き声がすとか言うので、探しますと、土手の上の一軒家で、ただ一人の子どもが、何かの下敷きになっていました。町内の五、六人の者が、ともかく助け出しましたが、親たちは見つかりませんでした。

川のそばに、私達が避難していると、黒い雨が降り出しました。上空を偵察機が飛ぶやらして、生きた心地はしませんでした。

川向うの水主町の方は、どこもかしこも火の海でした。明治橋は、逃げてゆく人々でいっぱいでしたが、私たちは、逃れようもないとあきらめた気持ちで、崖下の川にうずくまっていたところ、颯風が起り、トタン板などがビュービュー飛んで来るのです。

そのとき、崖の上の方から「立川さん、このふとんをかぶっていなされ。」と、誰かが二枚なげてくれましたので、頭からそれをかぶって難をのがれることができました。

川水がひいて来たとき、私が川下の方へ流されますので、弟嫁が「流されてはいけません。」と、力の限り私を引きもどしました。しかし、私は、自分が流されていることに気づいていませんでした。

嫁の頭髮が燃えていたので、川水で消してやりました。

夕方になり、皆で明治橋のたもとで休んでいると、誰かが「立川さん、壕へおいでなさい。」と、案内してくれ、皆一緒に行きましたが、そこにいた多くの人々は皆苦悶していました。妹もいつ息が絶えるかと思うほど苦しみました。

翌朝、暗いうちから、防空壕の上に出ていると、高須の郵便局長が「藤田さん、ここにおいででしたか。外山の奥さんが負傷で危篤です。」と知らせてくれました。外山淑子は私の妹です。すぐ壕の中へ降りて行って、このことを話し、炎天下、ハダシで幾つかの橋をわたり、明治橋から高須まで一休みもせずに帰りました。

淑子は高須町の人々と一緒に、勤労奉仕に出ていたのですが、そこで被爆したのです。重傷で、私は二時間ばかり介抱をしましたが、どうすることもできず、ついに死去しました。かわいそうなことをしました。

町の人々と一緒に野原で茶毘にふしました。この時の薪は、私方旧宅の強制疎開のおり、高須へ運んでいたのを使ったのです。このようなことに解体材を使おうとは夢にも思わなかったことでした。愁傷胸に迫ります。淑子が死亡しましたとき、草津海蔵寺の英巖和尚(現在国泰寺方丈)が、早速来てくださってお経をあげ、お弔いくださいました。

その後二日ばかりしたころ、私も微熱が出て、気分がすぐれませんので、息子や孫、久保三郎の嫁など、皆一緒に朝鮮の人の荷馬車をやとって、佐伯郡砂谷村へ行きました。早速、砂谷村の診療所へ入院すると、死斑が出ているということでした。すぐO型の血液を輸血しましたが口中が痛く、歯が痛み難儀しました。歯科で三本も抜いたのです。次に、インフルエンザにかかり、注射したのですが、吸収せず、二日目に破れて膿がたくさん出ました。あとヘガーズをまいて、毎日取替え治療をしたのですが、容易になおりません。四か月ぐらい入院していましたが、退院後一か月ばかり医者にかかったようなことです。

二十年十二月末まで、入院していたわけですが、もう絶望的な容体だったのでしょうか、私が生きて退院するなど考えている者は一人もいず、私の死骸を乗せる担架を、村の人が造り備えていました。

幸い、私は全快して退院し、親類で二十一年元旦を迎えました。

三月に入り、市内の高須に家をもとめて帰りましたが、半月ばかり過ぎたころ、ある夜、九時ごろ、床につき電灯を消して眠りにつくと、突然ガッと咽喉へたくさん何かを充滿したのです。両手に受け、電灯をつきさせて見ると、血膿がいっぱい出ていました。

夜の明けるのを待って、広島赤十字病院へ行き診察を受けると、ガンだということです。

しかし、当時の広島赤十字病院では、それを取りはからうことができず、岡山へ紹介するということでした。

帰ってから、庚午の高橋百太郎先生に、再診察していただいたところ、先生は胃を洗滌され、ガンではないとのことでありましたから、三か月ばかり通院して、やっと全快しました。ところが、私を診察されてから一年もたたぬうち、先生の方がガンで亡くなったのです。先生も原爆を受けておられました。

その後、九年ばかりは何ごこともなく過しましたが、また、鼻汁が咽喉にくんだり、気持ち悪く、市民病院や広島赤十字病院へ通いました。老身には大変なことですので、古江の医者へ二か月あまり毎日通いましたが、このままではガンになる。手術しましょうかと云われるのです。

そのとき股野先生の診察を受けるようすすめる人があって診察を受けると、手術の必要はない。ガンにはならぬと申され、やっと安堵したようなことです。

原爆症はいろいろな病気にあらわれるようで、今でも歯が悪く通院治療をしています。さいわい内臓が丈夫で、現在、数え年八二歳です。

娘婿久保三郎は、八丁堀の砂原格郎から出て十分ぐらい歩いて被爆し、死去したのですが、行方不明のまま遺骨も拾うことができませんでした。

娘・孫・弟・妹・弟嫁など、近親者のうち一〇余人が、次々と原爆症で亡くなりました。

息子夫婦も、私をたずねて、立川の家に来ていましたが、九死に一生を得て、現在も達者でいます。 合掌

八、被爆後の混乱と応急処置

救援作業

爆心地付近の救援状況は不明であるが、救援する何ものも無かったと思われる。

国泰寺町一帯は全焼し、負傷者は、市役所や、三階以外が焼失をまぬがれた日本銀行広島支店に避難したり、収容されたりした。

しかし、市役所も、外郭だけで、内部はガランドウに焼け落ちており、物の残骸と灰が、うず高く散乱堆積しているありさまで、手当ての薬剤もなく、収容とは名のみであった。食事の炊出しも全般には行きわたらなかった。中には芸備線・呉線の沿線地域や五日市町方面に、たよりを求めて、さらに避難していく者があり、逆に、郊外にいて被災をまぬがれた家族の者や親戚の者、または知人などが探索に来て、臨時収容所は混乱をきわめた。

救援隊来る

なお、広島赤十字病院前、広島文理科大学前には、宇品から暁部隊が来援して救護活動をおこなった。ここに逃げこんだ者も多く、歩行不能の被爆者を更に電鉄本社まで運び、引続き宇品の収容所へ運んだ。多くの負傷者は、宇品からさらに似島の収容所へ送られた。

賀茂郡内(河内町など)から、食糧をもって救援隊が来た。この救援隊は、特に棺を作って持ってきていた。

二日目、郡部から看護婦を派遣して来たところ(町不明)があり、脱脂綿とムスビを、広島赤十字病院と市役所にとどけた。市役所前や赤十字病院前では、被爆当日から乾パンの配給がおこなわれた。

応急救護所

爆心地付近には、暁部隊の一時的な負傷者集結場所を除いては、応急救護所も、おそらく設置されなかったであろう。

市役所の救護所には、九日に、鳥取赤十字病院の救護班が来て、ようやく治療らしい治療がはじめられた。

このように、本格的救援は九日の正午ごろからで、県外や郡部から自動車やトラックで、腕章をつけた救護員が多数来援し、治療を行ったり、にぎりめしや乾パンを配給した。

市立浅野図書館(現在は解体されて中電新館建設)は、死体収容所であるとともに避難者が多数おり、にぎりめしなどの配給所として、係員が数人いたが、死体から出たリンパ液が、ヌルヌルして歩きにくいほど床に流れていた。

また、比治山公園方面へ避難した人は、公園の救護所で赤チンの手当てを受けた。

道路啓開

爆心地付近の道路啓開作業については、詳細は不明であるが、暁部隊などの軍隊と来援警防団の手によっておこなわれたようである。

その他の各町でも判然としないのであるが、電車線路や主要道路は、十日ごろには、だいたい啓開せられ、トラックなども通ることができるようになった。

死体の収容・火葬・埋葬

爆心地付近の死亡者は、すべて軍隊や警防団によって収容され、火葬にされた。しかし、ほとんど焼きつくされていたから、火葬する死体もあまり無かった。完全に焼けて白骨だけになったものも、その白骨が掌に乗るぐらいしか残っていなかったと、暁部隊の救援隊員やその他の者が語っている。

市役所や広島赤十字病院に収容された負傷者には、各人に住所氏名をたずねて掲示し、死者は氏名が判明しているのは明記した。氏名不詳の者には、性別・年令・着衣などを書きあらわして掲示し、探索者のために便宜をはかるようにしたが、多人数のため処理に困難をきわめた。腐敗した死体を所々にあつめて火葬にし、遺骨は市役所などに、とりあえず保管した。火葬は七日ごろから十日ごろまで続けて行なわれ、小町一番地国泰寺の墓地内に仮埋葬したのも多い。

広島赤十字病院に収容中の者で、血便が出て瀕死の者があったが、伝染病患者として扱い、夕方までに処理(隔離)した。後になって、伝染病でなく、被爆による障害だということがわかった。死体の処理をした者の中には、一体につき十円で請負った者もあった。

目撃者の話によれば、トラックで運んだ死体(二〇体くらい)を、ひとまとめにして、安佐郡緑井の河原で火葬にし、其処に穴を掘って埋葬したということである。

県立第一中学校グラウンド内で、親戚の者の骨拾いをした人もあるが、ここでも火葬がおこなわれた。

爆心地付近の各町は、人間も焼きつくされ、死体があまり見当らなかつたといわれるが、本通り付近の死体は、平田屋町と播磨屋町との境の道路上に、暁部隊が集めて焼いた。

本通り商店街の焼跡片づけ(火葬後一年)の際、火葬場所を掘りかえしたところ、完全に焼けていない死体がい

つかあり、まだ骨に肉片がついていたのもあった。堆積した瓦礫をはぐっては、遺骨をかき集め、近くの寺に安置して供養した。

大手町七丁目あたりでは、火葬のため、トタン板を下に敷き、焼跡の残材を積み、その上に死体をならべ、石油をかけて焼いたが、読経するようなことはまれであったし、その臭気が身に迫った。遺骨は、市役所や比治山多聞院などに安置したが、生存者が慰霊祭をするような余裕はまだ持てなかった。

被爆の後、数日間は、死体が所々方々に散乱しており、臭気が激しかった。

市の中央部の電車・電柱は焼けてしまい交通機関は途絶し、停電のため、夜は暗黒の廃墟であった。焼跡の整理は進まず、橋梁の破壊も多く、生存者は呻きたがらほそぼそと焼残りの防空壕で命をつないだ。

一望千里というか、ぎっしりと建ちならんでいた家々は、すべて焼失し、広島市をかこむ三方の山々が赤茶色に焦げた姿で見えていた。

町内会の機能

爆心地付近は、各町内会とも壊滅していたため、機能はなく、対策もできなかった。

猿楽町町内会は、町内会長死亡のあと、川本福一が就任し、相生橋東詰めでずっと事務をとった。

小町・雑魚場町は、全壊全焼のため、罹災後、防空壕などにいた者が話しあいの上、小町の新田行太を世話役に決定し、配給物資など対外交渉を依頼した。初め住民は二、三人であったが、年末には二、三〇人になった。また、雑魚場町の田村勇町内会長が即死したので、新田行太が小町と兼ねて町内会の世話をした。

国泰寺町身内会長が即死したので、福地弘(歯科医)が町内の世話をおこない、死亡診断所作成のための証明書、貯金局から貯金の払戻し、身分証明書など、市役所の代理事務をとった。後には物資配給の世話もおこなうようになった。播磨屋町の佐久間勇町内会長も死亡したので、被爆時に牛田方面に出ている負傷しながらも助かった中山良一副会長が、全身血みどろのまま、三日目(八日)に帰りつき、産業奨励館(現在原爆ドーム)横に外郭だけ残っていた鉄筋コンクリート建の一室(日本赤十字社広島支所事務所)に入って罹災者の世話をした。罹災証明書や死体検案書の作成をはじめ、呉海軍がトラック一台に積んで来た救恤品の自由配布などをした。救恤品は、乾パン・肉と野菜の缶詰・ゾウリ・チリ紙であったが、罹災者のほとんどは、まずチリ紙を取り、つぎに、乾パン・缶詰の順で、最後がゾウリを取った。また、死体をさがす縁故者の道案内や、焼残った多数の金庫の保護、死体や負傷者の処置をおこなった。

なお、播磨屋町の町内会名簿は疎開してあって、戦火からまぬがれたので、中山良一が各自の疎開先に集合をかけ、二十年九月十五日、生存していた人々が安佐郡八木村に疎開中の林正夫宅に集り、第一回播磨屋町町内会を開いた。

九、被爆後の生活状況

復帰の状況

爆心地付近一帯では、二十年十月ごろまで、猿楽町の川本福一の仮設小屋が一戸あるだけで、満目荒涼たる焦土であった。これも木造の瓦葺(材木も瓦もみな拾い集めたもの)のバラック建てで、大工の手もなく、自力で建てたのであった。しかも、相生橋付近では、郡部からの探索者などを目当てに追ハギが出没したりして治安は乱れ、不安な日々であった。夜、暴漢におそわれた通行人を助けて連れかえり、泊めて帰らせたこともたびたびであったという。

国泰寺町付近では、六日当日から引続き定住している者もいたが、半壊の床の低い防空壕に非衛生的な雑居生活をしてきた。十月末ごろ、焼トタン板を拾い集めて三坪半ぐらいのバラックを建てた者もあった。

昭和二十一年初めごろから、住宅営団の組立式バラック(三、五〇〇円四畳半二間)が数か所に建てられた。バラック居住者は、給料取り・大工・日雇など、それぞれの生活を持っていたが、配給物だけでは生きてゆけず、闇物資の買出しに苦心した。また、焼跡を整理してわずかながら、野菜や麦・芋などの作物をつくって、ようやく飢えをしのいだ。各町とも、この一帯の居住者は四人ないし五人程度であった。バラック小屋には電灯がたく、ロウソクの明りで板の間にゴロリと寝た。

本通り筋の復興はごく遅く、何とか住居らしい少数の家が建てられたのは、翌年になってからで、勿論、バラック建てであった。のちに、住宅金融公庫から、その当時規格になかった店舗住宅の特別設計建築により、六畳二間、店舗一間の住宅を二〇戸建てることができた。これが本通り筋の復興の基礎となった。

衛生環境

焦土にはハエがたくさん発生した。焼死者の残りが、各所に土や石をかぶったままで放置されていたため、その死体にハエがわき、ゴマをまいたようにたかってなめ荒らした。人間が近寄るとブーンと、うたって飛び立つが、また、すぐ寄ってきた。ハエは、八月末頃から発生し、九月中ごろまでが最も多く、歩行中の顔にあたり、電車の天井裏やガラス窓に一面にいた。口にとびこむので食事もろくろくできないありさまであった。

当時、駆除する薬もなく、ただ一刻も早く死体や汚物を取除く方法しかなかったが、九月ごろ進駐軍がきて、空中からDDTを散布してからようやく少なくなった。

生活物資

田舎に避難した人々は、行方不明となった家族を探して、毎日焼跡のあちらこちらを尋ねあてをたずねた。また、自宅の焼跡にきては、防空壕の中に貯蔵していた物資を探して掘り出したりする人もいた。

八月中は、どこへ行くにもほとんど徒歩で行かねばならなかった。電車が走り出したのは、九月の十四日か十五日ごろからであったから、罹災証明書や通帳など、戸籍関係に関して、仮設の市役所(比治山公園の頼山陽文徳殿)へ、たびたび歩いて往復した。

ロウソク生活

十月ごろから、配給のロウソクとカンテラによって夜を過したが、その配給も少なかった。一本のロウソクを大切に使い、必要な時だけ使うと、あとは暗やみ生活をした。どこからかパラピンろうを求めてきて、芯を作り、自家用ロウソクで不足をおぎなう者もいた。

電灯がついたのは、十月末か十一月ごろであった。裸電線を拾ってきて、つなぎあわせ、竹を柱にして点灯したものであるが、それでも目にしむように明るかった。

疎開世帯・疎開児童の復帰

徹底的な壊滅状態であったから、各町とも、疎開世帯が復帰するにも悪条件ばかりで、見通しもたたず、随分遅れた。

詳しい事は不明だが、早かったのは、二十年十月に新田行太、同年十二月に後かめよ、二十一年二月に田中稔純、同年三月に戸谷しげの、同年七月に福地弘、二十三年八月に四竈一郎、同年十二月に田辺きぬ子などがあげられる。

疎開児童のことは、第四巻第三章に記述してあるが、各自の避難先と連絡をとって、当分の間、田舎の学校に仮在学としたものが多かった。

闇市場の出現

商業の中心地区を抱えていたこの地区も、被災後はただ荒涼たる焦土で、人影もまれとなってしまった。物資集散の闇市場が、広島駅前と己斐と二か所にできて、多数の人々を集めていたが、本通り筋の生き残った人々は、正常な商業ができる日は、いつになるであろうかと思うにつけても、日本の将来さえどうなるか判らない生活で、心は重く沈むばかりであった。

続いて、鷹野橋・宇品町十五丁目・住吉橋にも自由市場ができて、日用品・マッチ・地下足袋・手袋・作業着など売っていたが、罹災者はそれらを買うこともできず、不自由に堪え我慢した者も多い。タケノコ生活で、終りには交換物資の手持ちもなくなり、ただジツとして飢餓を凌いだ。配給の手巻煙草は、作り方を各人それぞれが研究した。闇の手巻煙草も入手困難で、一本を三分の一ぐらいに切って吸ったが、それも無い日のほうが多かった。

進駐軍

このようなみじめな敗戦下の焼野原の中へ、時折り、占領軍がジープで入って来た。ある場所に来るとジープを停め、四、五人の兵隊が降りて来たが、焼跡にひそかに暮らしている被災者には全く無関心で、我が家の庭園を散歩するような姿で、何かをあさっているのが見られた。ある時は、日本進駐の土産(記念)にするのか、瓦礫の下から一個の頭骸骨を見つけたして持ち帰った。これを遠くから見ながら、被爆者らは腹が煮えるようにくやしがあったが、どうする手だても無かった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨と、十月八日の大豪雨によって残っていた市内の橋梁が、更に流失、破壊され、どうにか動きのとれていた交通が再び途絶し、軌道にのりかけていた復興作業は全く中断された。

大手町七丁目付近では、地上三〇センチメートル以上の浸水で、防空壕生活者たちが水浸しとなって、市外へと移っていった。

国泰寺町付近や、雑魚場町方面は少し浸水した程度で、それほどの水害ではなかったが、台風で焼トタン屋根は吹きとばされ、掘立小屋は倒れかけてしまい、精神的な不安打撃は大きいものがあった。中には、生き残ったことを悔やむ人さえあった。

経済活動

経済活動は、金融統制令前後から幾分活発になった。日用品・衣料品・八百屋などが、乏しいながらも店を設けるようにたった。

住宅の状況

国泰寺町地区では、二十年十月下旬ごろから、拾い集めの焼トタンでバラックが建てられた。新しい建築資材は郊外から求めるほかなかったが、材料費は高く、その上入手困難であり、大工もいないという状況であったから、資金や手づるのある者は市外で材料を切込み、大工と共に運送して建築した。

二十一年二月以降になって、組立式家屋(四、五～六畳)の配給に当籤して、自分で組立てて使用する者もいた。この頃、大手町の普門寺が建築されたが、正式の土壁を使用した建物は、復興へのたくましい息吹きが感じられた。

罹災後、約一か年たって、市役所は内部の応急修理をして使用されるようになったが、まだ住宅は、国泰寺町に五戸から七戸ぐらい、雑魚場町に六戸から八戸、小町に約三戸ぐらいしかなかった。国泰寺町付近は全滅家庭が一〇数戸もあるという甚大な被災地区で、復興も他の町よりは日数を要した。

ある罹災者は、建築中に金融措置令が出て、資金を制限されたため、生命保険加入によって第二封鎖預金の支払いを受け、これを建築資金にあてた。

なお、中国配電株式会社は、焼けた内部を一応修理して、僅かな人数ながら業務を再開した。

十一、その他

爆心地

この地区は、その西北端部に爆心地細工町をも包含する徹底的な被災地区である。

当時の放射熱線による焼痕が、住友銀行広島支店の入口階段に、人影をつけて残っており、西向寺その他幾多の寺院の墓石にも残っている。元安河畔の産業奨励館は煉瓦建てであったが、爆源直下、無残な姿となり果て、原子爆弾の威力を如実に物語っている。後に「原爆ドーム」と呼ばれ、平和祈念の象徴となった。

相生橋は、橋床が吹きあげられ、欄干が全部、横倒しになった。

主要建物

爆心直下地域の主要建物としては、島病院を中心にして、東隣りに西警察署があった。島病院の前を南北に通じている細工町通りをはさんで、西側に広島郵便局、その北隣りに西向寺・西蓮寺・産業奨励館が並立し、また、相生橋東詰南側の元商工会議所跡に、日本赤十字社広島支部があったが、いずれも壊滅した。

爆心地の東方にあたる電車線路(紙屋町交差点から宇品に通ずる線)の東側には、芸備銀行(現在の広島銀行)、住友銀行広島支店・明治生命ビル・富国生命ビル・日本銀行広島支店(三階のみ焼ける)・中国配電株式会社などの鉄筋コンクリート建築物がならんでいたが、いずれも大破全焼し外郭だけが残り、屋内は飛散物と灰で埋まった。相生橋東詰北側に商工会議所が半壊(内部全焼)のまま残っていた。

このビルに、二十年十二月、中国人集団がきて、青天白日旗を掲げていたが、約四か月後に引きあげ、次いで、二十一年四月ごろ、朝鮮人集団がきて、朝鮮の国旗を掲げ、同年末ごろまで占拠していた。双方とも、戦勝国を誇り、占領軍的感覚を持った集団であった。

頼山陽記念館

袋町の史蹟・頼山陽記念館は、(昭和十年十二月竣工)山陽の旧住居のほか、遺物陳列室・図書室・講堂などあって、戦前は各種団体の集会に利用され、市民に親しまれていたが、これも全壊全焼した。昭和三十二年に復旧したが、昔からの遺物としては、井ゲタが御影石造の井戸がある。なお、庭内にあった古いクロガネモチの大木(直径約五〇センチメートル)は、被爆により根株だけを残して焼けたが、五年目の昭和二十五年に、不思議にもその株が芽を吹き、現在、約四メートルの高さに茂っている(藤井五平談)。

アメリカ兵の捕虜

また、被爆直後、死体処理前に、相生橋東詰め北側の電柱の下に、アメリカ兵の捕虜が死んでいたが、焦土に復帰した川本福一が、本人が着ていた青いシャツと、片方だけの靴を拾い、そのアメリカ兵の遺骨と一緒に、元日本赤十字社広島支部跡に、他の爆死者の遺骨とともに埋め、土盛りして墓標建てた。その後二か年間、川本福一が線

香を供えて慰霊していたが、本願寺別院からの要請で、遺骨を掘り出し、他の遺骨と共にドラム缶二本に収納して、平和公園内の戦災者供養塔に納骨した。

元広島県産業奨励館「原爆ドーム」の概要

原爆ドーム

戦後、俗に原爆ドームと呼ばれて、昭和四十二年八月五日、世界に訴える平和祈念の象徴として、永久保存工事が完了した元広島県産業奨励館は、大正初頭、広島市猿楽町を建設場所に定め、県内各地の物産陳列館として開館した。概要は次のとおりである。

概要

一、設計・工事監督

ヤソ・レツル建築事務所

ヤソ・レツル(Jan LEtzEl)は、チェコ人(一八八〇年四月九日チェコ東北部の町ナホトに生まる・藤田文子調査)で、日本で幾多の優秀な建築物を遺した建築家である。

二、様式 セセッション様式

三、構造 鉄骨入り煉瓦および石造り

四、起工 大正三年一月初旬

竣工 大正四年四月五日

開館 大正四年八月五日

被爆前日が、満三十年目であった。

事業

五、事業館内には、県下の物産を展示して、即売もおこなった。

大正五年、広島県美術協会が設立されてから、例年、広島県美術展覧会が此所で開催され、その他の文化的催し物もあいついで開かれた。

広島市主催の博覧会・共進会においては、多くここが第二会場などにあてられた。

改称

六、大正十年一月広島県商品陳列所と改称。

七、昭和八年十一月広島県産業奨励館と改称。

時局の進展につれて、日満貿易の特別展なども開催され、産業奨励館の色彩を深めたが、戦時体制がきびしくなっからは館内の展示も縮小され、中国四国土木出張所や広島県木材統制株式会社など、官公庁や統制組合の事務所かなりの部分が使用されるようになった。

被爆

八、昭和二十年八月六日原子爆弾炸裂の、ほとんど直下で被爆し、大破全焼、本屋中心部だけの残骸をとどめるばかりとなった。

当時、館内にいて被爆した者はすべて即死した。その数三〇人ばかりと伝えている。

保存決議

九、昭和四十一年七月十一日広島市議会が原爆ドーム保存を決議した。

募金達成

広島市長浜井信三は、「ひとりでも多くの人々の協力によって残すことにしたほうが、より大きな意義がある。」と考えて、全国募金に踏切り、みずから東京都数寄屋橋公園に立ち、街頭募金を呼びかけて多大な反響を全国に与えた。

募金額は、六、八三〇万七、二一二円(昭和四十三年六月二十五日締切当時)に達した。この使途内訳(原爆ドーム保存募金収支報告書)は

件名	金額	備考
原爆ドーム補強工事費	五一、五〇〇、〇〇〇円	当初 四〇、五〇〇、〇〇〇円 追加 一一、〇〇〇、〇〇〇円
原爆ドーム周辺整備工事費	一三、〇〇〇、〇〇〇円	

となっており、寄金残額の使途については、原爆ドーム保存協議会と市が協議のうえ決定することになった。

原爆ドーム保存に対しては、日本国内のみならず、アメリカ(主として広島県人会)ソ連・(各平和委員会)フランス・インド・イギリスなどの団体や個人から、多くの熱烈な至情が寄せられ、当初の募金目標額を超えるほどになった。

(その他の寄附行為)

件名	件数	数量	備考
工事特許権	一件		コンクリート部材または構造物の亀裂補強法
樹脂	三件	三・ートン	工食用接着液

技術委員会

補強工事は清水建設株式会社が請負って進めたが、広島市と原爆ドーム保存技術委員会・施工業者の三者による強力な体制によっておこなわれた。同技術委員会は工事技術の指導的役割をはたした組織であって、メンバーは次のとおりである。

イ 広島大学工学部

佐藤重夫・椋代仁朗・柴晴夫の三教授

ロ 建設省建築研究所

藤井正一第二研究部長・今泉勝吉主任研究員

ハ 建設業界

㈱大林組青山幹主任研究員・鹿島建設㈱仁平久信第二研究室長・大成建設㈱鶴田康彦第八研究室長

・㈱竹中工務店入江謙二主任研究員・戸田建設㈱渡辺敬三技術部長・㈱藤田組辺見義男材料試験室主任

ニ 接着剤製造業者

シェル化学製品販売㈱館川裕合成樹脂部長・チバ製品㈱古川等プラスチック部技術第一課長

ホ 広島市

西村敏男助役・長松太郎建設局長・松本正夫営繕課長

以上一六人

賛助の詩

募金協力者からの手紙や感想文が多数寄せられたなかに、次のような少年の詩もあった。

平和の灯[あかり]

呉市立和庄中学校 三年 浅沼辰男

ぼくは立つ

ドームの前に

そして聞かされる

あの悲しい出来事を

ドームが写る

川の水面に

ドームははっきりと写っている

当時を物語るかのように

ドームは流れる

戦争なんて流れ去れ

と言うかのように

ドームはゆれる

平和を叫ぶように

ドームは雨にぬれる

そして泣く

死んで行った人を思い出して

ドームに光がさしこむ

平和の手がさし出されたように

ドームは嵐と戦う
そしてドームはくずれようとしている
世界に危機が迫っていると言うかのように
ドームは訴える
ドームに早く平和の灯をと

ぼくは欲する
平和の灯を
そして約束する
ドームに
永久に平和の灯を消さぬように

第三節 中島地区...77

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

中島町、加古町、住吉町、羽衣町（吉島町の一部を含む）

町内会別要目

この地区の範囲は、天神町[てんじんまち]・材木町[ざいもくちょう]・木挽町[こびきちょう]・元柳町[もとやなぎちょう]・中島本町[なかじまほんまち]・中島新町[なかじましんまち]・水主町[かこまち]・吉島羽衣町[よしじまはごろもちょう]・吉島町[よしじまちょう]とし、爆心地からの至近距離は、中島本町河畔(平和公園北詰で、相生橋の南たもと)で約一〇〇メートル、もっとも遠い距離は、吉島町の刑務所南側で約二・四キロメートルである。

本川と元安川にはさまれた地区でデルタの面であり、現在、中島本町・材木町・元柳町、および天神町・中島新町の一部は、原爆慰霊碑(正式には、広島都市記念碑という)・原爆犠牲者供養塔などがある平和記念公園として生まれかわり、平和記念施設として広島平和記念館・広島平和記念資料館(俗に原爆資料館とも呼ぶ)・広島市公会堂がある。

中島本町は、幕末から明治・大正初期へかけて、市内繁華街・歓楽街の中心で、中島本町通り商店街には、大きな店舗がならんでいた。北側に勤商場、南側に集産場があり、本通り裏から慈仙寺の鼻へかけての一带は、寺院・料亭・呉服店・医院・薬局・会社などをはじめ、東京浅草の仲店のような商店がぎっしりと軒をならべ、活動写真(映画)の常設館もあって非常に賑わった。しかし、大正の中ごろから、繁華街の中心が、市の東部へ移りはじめたので、往年の盛り場の雰囲気はなくなったが、町筋にどことなく、かつて最も栄えた地域としての面影をとどめており、遠くなった明治・大正時代を懐しく思い出さすものがあつた。

材木町・木挽町は、往時は川沿いに、材木の集散が行なわれたところで、材木を積んだ船や筏が、太田川を下ってきて、ここに荷をおろした。大正以後、陸上交通が急速にひらけてさびれたが、中島本町に続く住宅街として天神町・元柳町・中島新町などと共に愛着を禁じ得ない住宅街であった。ゆったりとした住宅の間に、鳩の多い誓願寺をはじめとして、歴史の古い寺が建ちまじっていたが、木挽町西福院の境内の淡島大明神(アワシマさん)や天神町の天満宮(天神さん)、持明院内の金比羅さん、材木町の妙法寺内のかさもりさん、安楽院の子安観音、慶蔵院の楠公さんなど、民間信仰を集めて、平和な下町情緒を町のすみずみに漂わせていた。

水主町は、旧藩時代からの由緒のある町で、県庁を中心として、一種の風格をもった屋敷町を形成していた。同町の広島県病院の後庭、与楽園は旧藩時代の御船屋敷で雅趣にとんだ園池であった。

被爆前の建物総数は二、五一〇戸、人口は八、九八二人と推定される。内訳は次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
中島本町	1,300	1,330	4,370	向井直助
天神町(北)				天城慶一
天神町(南)				津田享平
材木町				藤井順一
木挽町				光本半次郎
元柳町				成宮惣五郎
中島新町	500	500	2,130	田村源一
水主町上				長谷彦一
水主町中				赤羽光夫
水主町下	294	347	1,302	(兼連合町内会長)伊藤順一
吉島羽衣町				(一丁目)日下藤稔
吉島町				(二丁目)富海元治
吉島町	386	418	1,180	村田太郎一

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
簡易保険局	中島本町	持明院	木挽町
浄宝寺	材木町	森永製菓支店	元柳町
慈仙寺	材木町	瀬川倉庫	中島新町
中島勤商場	材木町	西応寺	中島新町
中島集産場	材木町	善福寺	中島新町

米田物産(元大正屋呉服店)	材木町	広島市農業協同組合	中島新町
水上警察 中島派出所	材木町	広島県庁	水主町上
西警察署 中島派出所	材木町	広島県警察官講習所	水主町上
教念寺	天神町	広島県病院	水主町上
清岸寺	天神町	(与楽園)	水主町上
天満宮	天神町	武徳殿	水主町上
公設市場	天神町	帝国兵器	吉島羽衣町二丁目
伝福寺	材木町	東亜産業株式会社	吉島町
妙法寺	材木町	呉陽鉄工所	吉島羽衣町
浄円寺	材木町	市立中島国民学校	水主町中
誓願寺	材木町	住吉神社	水主町中
慶蔵院	材木町	巢守鑑札工場	水主町中
安楽院	材木町	地藏堂	水主町下
西福院	木挽町	仏教説教所	水主町下
福寿院	木挽町		

二、疎開状況

人員疎開

昭和二十年三月ごろから、にわかには疎開する者が多くなった。

ことに、天神町・木挽町は約七〇戸、中島新町は約二五〇戸、水主町上組は六月から七月初旬の第六次建物強制疎開によって立退き、同町下組は、約三分の一から半数ぐらいは疎開を実施した。市内の非疎開区域へ移動した者もあったが、これは郡部に縁故がなかったり、事情があって利用できなかったため、約一か月間の猶予期間内に、疎開先が定まらず、やむなく市内にとどまったものである。交通難・輸送難も大きく原因して、遠距離の疎開計画がはばまれたからでもある。

なお、強制疎開区域でない者の中には、毎日夕方、市の周辺部の民家に宿泊し、朝になって自宅へ帰ってくるようにしていた者もあった。これは一時的に待避をする形式ではあるが、被爆直前ごろが最も盛んであった。

中島本町・材木町は、建物の強制疎開がなかった。

物資疎開

各家庭では貴重品・商品などの疎開をおこない、中島新町の瀬川倉庫内の物資も大部分が疎開されていた。

しかし、馬車・貨物自動車の配車がはかどらず、家財道具などは自力で運搬しなければならなかった。これがため、郡部への運搬は望まれず、やむなく付近の非疎開区域へ、ただ移動さすという状況であった。

学童疎開

中島国民学校の学童は、双三郡三良坂村および吉舎村へ集団疎開を実施し、国民学校や出雲大社教道場をはじめ、寺院や農家に泊まった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年、中島警防団を結成した。戦争が本格化するにつれて、当局の指示により他の地区と同様に組織を強化して、防空・防火訓練を行なった。

家庭防衛隊

昭和十七年、家庭防衛隊を結成し、隣組の整備・地区民の避難救護・防空防火訓練(演習)の強化をはかった。

また、昭和十九年に家屋疎開を決行して道路を拡張した。

国民義勇隊

昭和二十年、広島市国民義勇隊が創設されたので、中島大隊を結成し、伊藤順一連合町内会長が大隊長に就任、各町内会長が中隊長となり、建物疎開作業などに参加した。

自費で各戸に一か所の防空壕を作った。

防火備品

防火備品は次のとおりである。

ハシゴ 三〇丁

トビグチ 三〇丁

担架 一〇個

消防ポンプ(四人押)車付 二台
 消防ポンプ(四人押)車なし 一台
 消防ホンプ(二人押) 二台
 消防ポンプ(市からあっせんのもの二人押) 六台
 消防頭巾 一〇〇枚
 バケツ 六〇個

四、避難経路及び避難先

地区では、佐伯郡平良村及び原村を避難予定地とし、経路としては舟入町 己斐町 廿日市町 平良村に至るようにしていた。

このほか、応急の場合は、近くの広島県庁敷地内(水主町)、及び吉島飛行場も予定されていた。

五、所在した陸軍部隊集団

木挽町持明院に部隊がいたようであるが、現在では兵種・名称・兵力など不明である。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

中島地区は、全滅に近い災害を受けたので、生存者も少なく状況がつかみづらかでないが、他の地区と同じように警備や灯火管制などは、五日の夜も嚴重におこなわれたことであろう。

吉島町・同羽衣町では八月五日午後九時二十七分、警戒ならびに空襲警報が発令され、同時に家庭防衛隊長の命により、町内会ならびに隣組は、直ちに防衛・避難態勢に入り、解除と共に平常態勢にかえった。明けて六日夜半の警戒ならびに空襲警報発令のときも同じで、各家庭の防空壕や隣組防空壕に老人や子供を待避させ、防空要員はそれぞれの部署についた。

上空侵入の敵機の見撃者、爆音の聴取有無などについては、現在では何も判らない。

建物疎開

また、当日朝の疎開作業、および地区内建物疎開についても生存者は極めてわずかで不明なところが多く、次表のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
材木町	24	不明	なし			
元柳町	不明	不明	なし			
天神町上	6	不明	なし			約1,800人以上
天神町下	不明	不明	(全世帯立退していた)	不明	実施中 戸数不明	
木挽町	20	県庁付近	なし			
中島新町	不明	不明	全戸	不明	全戸で壊す予定で実施中	
水主町上	不明	不明	全戸	不明	不明	
水主町中	25	県庁	なし			
水主町下	26	県庁	不明	40	不明	
吉島町内会	10	県庁付近	30	30		
羽衣町一丁目	不明	不明				
羽衣町二丁目	不明	不明				

七、被爆の惨状

直後の実相

被爆当時、この中島地区内にいた者は、全滅状態と言ってよいほど死亡しており、生き残った者がいたとしてもすでに現存者もなく、炸裂直下の状況を知ることは困難である。

周辺部の事業所へ勤務していた者とか、たまたま出張していたか、または私用で郊外へ出ていた者が難をまぬがれ、心配のあまり、帰宅しようとしたが、火災にさえぎられてどうすることもできなかった。

被爆直後、ある住民が比治山へ登ってみると、中島地区は猛煙をあげており、地上一面が破壊された屋根だけのおおわれているように見えた。

同人が急いで帰ろうとして、相生橋まで来たのが午後十二時過ぎであったが、すでに地区は火の海に吞まれている。夕方六時ごろ、無理をして天神町へ火災をかき分けるようにして踏み入ったとき、元安川の川岸に勤労働員の女生徒たちが、互いに抱きあうようにして群がり、横たわっていた。ほとんど焼死していて、顔などでは、誰だか見分けがつかなかった。中には、かすかに息をしていて、死亡寸前の生徒もいたが、すでに、助かるような姿ではなかった。

この地区で、木挽町は中島新町より北寄り爆心地にも近く、はからずも生き残ったという者は奇蹟といつてもいいが、生き残ったとしても、おそらく後日死亡したであろうし、文字どおり全滅であった。

伊藤順一連合町内会長の語る所によれば、「住吉橋北側の工場へ調査するために行ったとき被爆し、工場の下敷きとなったが、足だけが空に向かって出て、上半身が下敷きになった形であった。まもなく、周囲の燃えている音が聞えた。そのとき警防団員が助け出してくれた。あと一分くらい遅れていたら焼死していただろう。助け出されて運ばれて行く途中、万象園(吉島羽衣町)の大きな樹木が盛んに炎上しているのを見た。」という。

伊藤順一の妻は、吉島羽衣町の町界に近い自宅(水主町南組)で被爆して、「家の下敷きになったが、どうやら外へ這い出すことができた。隣家と思われる箇所から火災が発生したのを見たが、押し潰された屋根の上を歩いて、ようやく万象園に逃げのびた。」と語っている。この付近は爆心地より南南西約一・四キロメートル離れていたため、助かった者がかなりあった。

吉島町・吉島羽衣町付近では、閃光を感受し、少し間をおき、地ひびきと同時に建物が全戸倒壊か半壊した。地煙りが立上って視界は、しばらくゼロとなった。全壊家屋がわずかだったので、路上に飛び出した隣組員が協力して、全・半壊家屋の下敷きになって助けを求めている者約二〇人を救出した。

避難実況

中島地区北部住民の、炸裂直後の状況は不明である。

吉島町・同羽衣町一丁目では、ほとんど全員が、広島刑務所の土手ならびに吉島本町二丁目、および、吉島飛行場へ避難した。また、川の中に避難した者も若干あった。

瞬間的被害

中島地区は壊滅したが、南下して吉島地区となると、被害もいくらか少なかった。

各町の被害状況は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
中島本町	100	-	-	-	100	-	- (一人健在)	本川橋 損傷した。 相生橋 床板が浮き上がったが通行には支障なかった。 元安橋 欄干落ち橋灯の石ずれる。
天神町	100	-	-	-	100	-	-	新橋 被爆落橋。
材木町	100	-	-	-	100	-	-	
木挽町	100	-	-	-	100	-	-	
元柳町	100	-	-	-	100	-	-	
中島新町	100	-	-	-	98	2	-	新大橋 損害軽少
水主町	100	-	-	-	40	50	10	住吉橋 欄干が南北に分れて落ちただけで通行には支障なし。 万代橋 損害軽少
吉島町	10	90	-	-	0.5	30	69.5	
吉島羽衣町一丁目	10	90	-	-	0.3	30	69.7	
吉島羽衣町二丁目	10	90	-	-	-	-	- (不明)	南大橋 欄干が焼け橋半分傾く。

火災発生

水主町より北部の爆心地に近い地域は、炸裂後、いっせいに火災が発生したようである。

天神町では、夕方六時ごろでも、なお火が盛んに燃えあがっており、探索者も町内に入れそうにたかった。三、四日後でもくすぶっており、焼ける物を焼きつくして自然鎮火した。

六日午後一時ごろ、吉島町・同羽衣町一丁目付近は、飛行場前の避難先から眺めると、一望火の海であり、また、吉島羽衣町二丁目付近も、ただ煙と火炎だけが見えていた。

なお、火災発生炎上の状況は次のとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時刻		
吉島町	数か所より発生	八時二十分頃	西風にあおられ火勢強く、たちまち全町に拡がる。	十六時
吉島羽衣町一丁目	数か所より発生	八時二十分頃	西風にあおられ火勢強く、たちまち全町に拡がる。	十六時

降雨の状況

中島地区には、重油かと思うほどの黒い雨が降り、誰れも彼れも、顔など真黒になったが、同地区の北部は不明である。吉島町・同羽衣町一丁目付近は降雨がなかった。なお、吉島羽衣町二丁目付近は、時間はわからないが、僅かの雨が降った。

六日夜

吉島羽衣町二丁目では、その夜は、防空壕の中や野っ原、それに畑などに蓆などを敷いて避難したが、何ごともしにつかず、みんな、呆然自失していた。

爆心に生き残る

野村英三(当時四七歳 爆心真下の元安橋南、建物地下室)

広島市中島本町、ちょうど元安橋南詰に現在燃料会館がある。当時広島県燃料配給統制組合の本部であった。この建物は地上三階・地下一階で、鉄骨鉄筋コンクリート建ての丈夫なもので、爆心点から西南約一〇〇メートルに位置している。

組合は当時毎朝八時に全員を二階に集めて、国民儀礼をするのが例であった。その朝も河合業務部長の音頭ですまし、全出勤者三七人は各階各自の机にかえって仕事前の一服をやっていた。さて仕事だと自分は机上を見たところ、いつもの書類がまだ置いてない。いつも課長が地下室から持ってくるのを今朝に限って忘れていたのだった。そこで自分の隣の広瀬女事務員に取りにってもらおうつもりで、その方を見たら、何か忙がしそうにしていたので、自分は二階を下りて地下室へ行った。

下りる前に、自分はメガネをはずし、財布をズボンのポケットから出し、そしてズボンのバンドに巻いてある鎖を解いて懐中時計を出し、机上にこの三点を揃えて地下室へ下りて行った。この品はもちろんみな焼いてしまったが、何故そんなことをしたのかは五年後の今日もどうしてもわからない。

地下室は建物の三分の一の広さで、一〇坪余りの狭いもので、いつも電灯がついている。書類が見当たらないので、あちこち探して階段下の金庫のところへ来た。その時だった。ドーンというかなり大きな音が聞えた。とたんにパッと電灯が消え、真暗になった。同時に頭に二、三カ所、硬い小石のようなものが当たった。

痛い！と、手を頭にやってみたら、ねっとりしたものが流れている。血だ！なんだろう、何事が起ったのだ。しばらくしてわからないまま頭のほかにどこか傷をしてはいないかと上半身、両腕、両足その他を調べてみたが、別に異状はないらしい。室内は真っ暗がりでも何も見えぬ。

自分は階段の直ぐ下に立っていた。上ろうかと思って足を階段にかけた。そして二、三步上りかけたが、どうも変な具合だ。階段の状態が無い。板切れや、瓦や、砂や、ごちゃごちゃに湿った坂になっている感じだ。

柔らかな俵のようなものが足の下にある。おかしい。両手でそっとさわってみた。半分位砂の中に埋もれている。あっ人間だ！抱え起して、声をかけたりいろいろしてみたが、がっくりしていて、もはやこと切れているようだ。とたんからだがふるえてきたようだ。

奥の方から闇をついて、助けてくれーと男の声だ。その声がつづいて聞えてくる。そして直ぐ泣き声にかわった。オオーン、オオーン、と。自分は急いで登りつめたとたんに、頭をゴツンと打った。手でさわってみるとコンクリートの壁らしい。両手で押してみたが、ビクともしない。出られない！

あっ、しまった、直撃弾だ！この建物に当たったんだ。地上の建物が崩壊して、この地下室だけがわずかに残ったんだ、と感じると、たまらない気持ちになった。出られねばここでこのまま埋もれてしまうのか、そのときゴーという水の音が聞えてきた。この地下室には八インチ位の水道管が元安橋の裏側を通過して入ってきている。そうだ、水道管の破裂だ！どうしよう。死は時間の問題だ。ああ駄目か、と思ったら四人の子供達の顔がすうっと目の前を走馬灯のように通り過ぎた。それから後は分らない。どこをどうして出たのか、気がついたときは一階に立っていた。

一階の窓の一つに人が止まっているのが、影絵のように黒く目にうつった。一階の様子は、薄暗くてはっきりわ

からないが、戸棚や椅子などがひっくりかえって、ごちゃごちゃになっているように感じられた。それらをかき分けるようにして窓下に行って「誰か？」といったら「広瀬です。」とこたえる。「おお広瀬か、外は？」と聞くと「道路です。」という。「よし飛べるか。」「はい飛べます。」との返事。「飛べ、僕も行く。」とあって、二人は外の道路に立った。

外は真黒い煙で暗い。半月[ハンゲツ]位の明るさだ。よくみると、広瀬の顔や手から血が流れている。急いで元安橋のところへ来た。ふと橋の上をみると、中央手前のあたりに、まる裸の男が仰向けに倒れて、両手両足を空に伸ばして震えている。そして左腋下のところに何か円い物が燃えている。橋の向い側は黒煙で覆われて、炎がチラチラ燃え立ちはじめに見える。橋を渡らずに現在の平和塔の方へ走っていった。ここは家屋疎開の跡で、広場と一部菜園になっている。川に下りる石段のところについて、二人は腰を下した。

腰を下ろすまで自分は半分夢中であった。四囲を見渡すと、地上も空も真黒い煙だ。その煙の中に今やっと逃れ出た組合の建物がぼーっと建っている。正面、川向うの産業奨励館も立っている。左向うには商工会議所も見える。煙の下の方から、燃えている炎はだんだん大きくなってきた。しかしまだ前記三つの建物は火はない。しばらくすると、組合の窓枠が燃えはじめた。どの窓も火がついた。そして火は内部へはいった。それから少し間を置いて、奨励館も同じようになった。間もなく商工会議所も窓から内部へと燃えだした。この辺りで最後に燃えたのが会議所で、郵便局が一番最初に燃え出したように思う。この間に組合を逃れて来たものが、自分とともに男四人女四人計八人となった。そしてみな石段に腰を下ろして、一ところにかたまっている。片方の目がだんだん見えぬようになったという女、気分が悪くなったという男、頭が痛むと訴えるもの、みなそれぞれに外部の負傷と内部の故障をもっている。

しかし、苦しんで声を立てるものはいない。ほとんど皆だまっている。火勢は次第に拡がり大きくなって、からだは熱くなってきた。川の水は満潮からだんだん引潮になるので、一段一段とわれわれは石段を下りる。すじ向いの郵便局の黒煙は、竜巻ようになって空中高く上る。ときどきその煙の竜巻は倒れかかってわれわれの頭上に来る。その中からトタンの焼けたのや、板切れの焦げたのなどが身近に降って来て危い。落下物を見て身をかわさねばならぬ。かわすためには上方を見ねばならぬ。その目の中に煙がはいると、痛さと涙でたまらないし、一度吸うと咽喉がむせてかなわぬ。自分は、腰の中古タオルを外し一重にして、顔に当ててみたら、目も楽にまた呼吸もいくらか凌ぎよくなった。降って来た焼トタンを拾って、それぞれに渡したので、一同はそれでからだを覆い、熱気と降下物の危険から大分たすかった。

元安川の水の一部が盛り上ったと思ったらクルクルと円柱となって空高く舞い昇った。水の竜巻だ！。その中から風下に水が落ちている。火勢は熾烈だ。川向いの煙が火の粉とともにわれわれに襲いかかった。ウワーと一同石段を上って広場に逃げると、とたんに火の粉がまた襲いかかってくる。止むなくもとの石段の石垣の隅に、一同小さく固まってしまった。からだを覆うトタンを川水に浸しては覆い、浸しては覆いして凌いだ。先ほどから遠くや近くで石油缶が爆発したような音を一〇数発聞いた。時限爆弾ではないかと、ひやひやした。そのうちにポツリポツリと大粒の雨が落ち始めて、次第に烈しくなり、ついにドシャ降りになった。一同われがちに雨宿りの場所を求めてそれぞれに身をかくした。しかしほとんど皆がズブ濡れになってしまった。

雨が止んだ頃には、寒さのためにふるえだして歯の根も合わない。で、そこでまた火の方へ近づいてからだを温め、二、三〇分もしたらやっと心地がついた。八月の盛夏、大火事の原因にいて寒さのために火に近寄るなどとは何ということだろう。それほどあのときの雨は身にこたえたのである。

そうこうするうちに中心部は大分火勢が衰えてきた。相生橋にしてみると、周囲は猛烈な煙と火だ。紙屋町以東は煙で見えない。二部隊の方も煙だし、西南方も同じく煙と煙だ。

脱出して救援隊に知らせてくれないか、と会計の宍戸君がいった。行手の模様が全然分らないこの火の中をくぐることは死を意味する。出るからには再びここへは帰られないことを覚悟しなければ、とあって、大型の焼トタン板を一枚手にして、再び相生橋上に立って、どの方面に救援を求めに行こうかと見渡した。そうだ、己斐[こい]の方面に行ってみよう。

左官町・十日市・土橋まで来る間に、何度となく地上やら、倒れた電柱の間やらに身を伏せた。市電の鉄橋の枕木があちこち燃えている中をよけて飛び渡り、やっと福島町に出た。ここはまだ煙もなければ火事もない。空は青天だ。振りかえって見ると、火と煙の地獄だ。よく出て来たものだと思った。己斐に着いた。ここは負傷者ばかりで、どこにも救援隊はおらぬ。それから草津に来たら、はじめて罹災者の手当をしている兵士五、六人に会った。

なんとか同僚を救ってくれと頼んだが、求める方が無理だとは幾千人とも知れぬ負傷者を見ただけでわかった。残った者のうち、宍戸君、安芸支部長の二人は、ほとんど大きな負傷はしていないので、心を残して自分は廿日市へ向った。廿日市に着いたのは午後二時半頃であった。

九月一日の夜、急に悪寒を感じ四〇度前後の発熱はその後七、八日間つづいた。この間廿日市町では、毎日毎日何人ともなく自分のような状態のものが死んでいった。咽喉は痛んでくるし、出血斑紋は五、六カ所も出る。歯茎がくさり、悪性下痢は一〇日以上もつづいて、からだはクタクタに衰弱していった。薬は無し、医師は手当ての方法が分らぬらしく、親戚も家族も諦めていたという。

しかしとに角、時が経つにつれて、元気が回復し、今日健康になっているが、近ごろまた爆弾症による盲目がはじめていると聞く。

あの朝、国民儀礼に参加した三七人中の三六人の霊よ、安らかに眠れ。ああ！

元安川の惨禍(流燈抄)

山崎益太郎(故山崎仁子の父)

(前略)私が元安川畔の広島市立高等女学校生徒遭難現場にたどりついたのは、あの日(六日)の昼すぎであった。

あの朝私は、小町中国配電会社で被爆し、頭に負傷して脱出。電車道を南へ走り、市庁舎を経て、広島文理科大学の広場まで逃れて、正午ごろまでやすんでいた。あちらからも、こちらからも、傷ついた人。血みどろとなって瀕死の人を背に、肩に、続々と逃れ来る人々。思えば阿鼻叫喚の地獄の様相とは正に、この時と思われる。昼前となって、火勢がやや衰えて来た。私は子供が気にかかり、友だちと別れて、再び引返した。

私の家は当時中島の天神町にあった。当時広島市立高等女学校の二年生であった仁子が、その朝、学徒動員で水主町へ県庁～新橋間の疎開跡の整理に出っていたので、その安否を気づかい、その方へ足を向けた。

元安川にかけられていた仮新橋は、その時既に半分落ちていた。ちょうど腰の辺まで水があったが、歩いて渡った。ああ、何たる悲惨、河原一面砂洲よりも、無残にも何十何百の少女らが、あるいは傷つき、あるいは既に事切れたのか、倒れており、あちこちで、わずかに動き、かすかにウメキ声が聞える。

驚くことには、どれもこれも素っぱだかである。シュミーズもスカートも焼け、身体はゆでダコのようにあか黒くなっている。ちょうど、海水浴場で裸ん坊の子供らが横たわり、あるいは寝ころび、たわむれて居るのを想像してみよう。焦熱地獄をさながら目前に見る。

私はあの時、会社の二階の一室で、夢からさめた時はあたりは暗闇であった。それこそ咫尺も弁せず、一寸先も見えなかった。被爆後何分かたっていた。一瞬気を失っていたのである。それで私が後に思い出したのであるが、彼女らもあの瞬間は、恐らく何一つしゃへい物のない露天で爆発音と共に、大部分は失神状態に陥り、倒れていた事であろう。

その間に黒煙の猛火がおおいかかり、生きながらジリジリと身を焼かれ、気がついた時は火だるまとなって、泣き叫び、河原でころげ廻ったのであろうか。またはそのまま猛火と共に昇天したのもあったらうか。

ああ、残忍非道鬼畜も目をそむけ、言語に絶する光景をあらわしたであらう。かくして無幸の天使、可憐なる乙女らは罪なくして戦禍の犠牲となり、永遠にこの世を去っていったのである。返す返すも、暴虐、悲惨の極。

私はようやく仁子を見出した。もちろん身体は焼けただけ、わずかに腰のあたりに手ぬぐいの切れ端と、名札と腰下げが残っている膚は黄色となり、顔はうずばれていた。「おとうさん、のどが痛い。」私は早速川の水を手のひらで、すくって飲ませた。今にして思えば当然放射能入りである。私の家もこの土手の上にあった。もちろん既に焼け落ちている。牛田の親戚に長女孝子を預けてあり、その安否も気にかかり、仁子を背負い牛田へ行くこととした。子供を負うて、水の中に入って行ったものの、水が腰のあたりまであり、私自身も相当弱っているとみえて、ともすると倒れそうになる。一寸困っていた。

幸いこの時川下から、船舶隊の兵隊さんが、舟で救援に来てくれたので、大手町側の岸に渡してもらおう。こうして、やがて西練兵場の紙屋町入口まで来た。西練兵場では多勢の人が休んでいた。会社の人も四、五人見当った。

ここでしばらく休憩し、再び子供を背負って立つ。急に重くなったので、会社の人、竹本君に少し上げてもらう。すると竹本君が「チョットおろして見なさい。」というので、何か異状を予感して思わずハッとする。その時わが子は、こときれていたのである。何ともたとえようのない思いであった。(後略)

水主町の惨状

黒瀬重吉妻(被爆地・水主町下の自宅)

私はご飯も炊きあがり、馬鈴薯も煮えたので食卓を準備して再び炊事場の流台に来たところ、ピカッと強い閃光、運命の八時十五分(その時は時刻の観念はなかった)。

一瞬の裡に倒壊した家屋の下敷きになり、真暗く光は全然見えない。どうしたことなのだろう。家屋の下敷きになったまま、心を静めるように努めた。その時は咄嗟に、我が家に集中爆弾が投下されたと思ったので、一刻も早く脱出せねばと、手や足を動かしてみたら動くので、かぶさった梁木や板を取除き、壊れた屋根瓦の破片を取除いていたら、小さな隙間ができ、そこから太陽の僅かな光が差し込んだので、なお、けん命の力を出して屋根裏を破って、やっと脱出した。

幸い庭に面した炊事場に居たため助かったが、一分間後だったら中の居間に坐っていたので到底脱出もできず、一家全滅したことと思う。

脱出して周囲を見れば、近所、町内は勿論、川向うの遠くまで、一面倒壊していて、諸所から火災が発生していたので驚愕、これは大変なことになったと思った。

主人と四人の子供はまだ脱出していない。この辺りに寝ていたと思う個所の屋根瓦を除き、漸く入れる穴を作り、梁の木や板を引出し、中へ潜り込み、主人が見つかったので引っ張り出したが、頭から顔一面に血が流れていた。このとき、主人に「早く子供を出すのを手伝ってください。」と言ったが、主人は何も言わずにボンヤリとして立っていた。

私は倒壊した中に、何度も何度も潜り、次々と子供を引出した。三女は胸から頭に壁土が覆いかぶさり、土を取除きやっと引出した。二男は誕生と三ヶ月で到底生きてはいないだろうと思ったので、長女に話したら、長女の足の辺りで動いたように思うと言ったので、また潜り込んで探した。畳が跳ね返り、板と木片の中を探しているうち、着物のようなものが手に当たったので引っ張ったところ二男であったので引出した。よくもこの小さな幼児の生命が保たれていたと思うと不思議であった。

私はみんなを家屋の下敷きから引出したので、さァーみんなで早く逃げましょう、と言った。その時、隣の松本圭一さんが茫然として倒壊した家の前に立っておられた。

その内、町内の各所から煙も昇りだしていたが、到底、四圍の状況を見まわすことよりも、この混乱と危険の状態から如何にして安全な場所に逃げ得られるかということが先決で、無論、町内の役員も警防団員の姿も見ることにはなかった。私たち親子六人は倒壊した家の瓦礫を踏み越えて、漸く川岸の通りへ出て見てまた驚いた。

殆ど全市は倒壊して、遠近各所が炎上していた。特に市の中心部は紅蓮の炎に包まれていた。

川岸は、南へ向って逃げる多数の人の大声と叫喚で大混雑、私は二男を抱えて、三女の手を引き、避難の行列に加わったが、主人は頭に負傷していて出血のため顔も背中も血に染まり、痴呆状態になったのかトボトボと歩いていた。

私は気が気でなかった。今、主人が倒れたらどうしようか、と思った。

私の後から自宅の筋向いの伊達の奥さんと小迫の奥さんが来られた。伊達の奥さんが、「黒瀬の奥さん早く逃げましょう。」と言われ、先に逃げますから、と言って南大橋の方へ向って二人急いで行かれた。

避難の行列は、益々、多くなって続いた。半焼けのシャツを着て、腕に火傷をしている男、上半身をまる出しにして焼けたモンペイを着ている女、その中には、両腕の皮膚が焼け爛れて、胸の前にダラリと垂れ下がり、さながら化物の行列であった。

また、元安川には多くの人が川中にいたのを見た。爆風のため吹き飛ばされて多数の人が川中で死んだと、後日に聞いた。

羽衣町の川岸の小原製菓所が盛んに焼けていた。従業員がバケツリレーで川の水を汲んで、消火につとめていたが火勢が猛烈で階下から二階まで焼けていた。

いったいどうしてこんなことになったのだろうか？と訝しく思った。

何か訳のわからないことを喚いて駈けだしている者、焼けた頭髮の女、焼き剥がれた皮膚、めくられた唇、血だるまとなって父母の名を叫んでいる少年、全くこの世の生地獄であった。

市の中心部は炎の海に包まれていた。

やっとみんな南大橋まできて橋を渡ったが、主人と長女、四女を見失い、橋の途中で待って探し求めたが、見当

らず当惑していた。そのうち誰か「早く逃げないと逃げられんようになるよ。」と、怒鳴りながら東に向かって逃げて行ったので、私も仕方なく続いた。橋の中程を過ぎた時、後から馬車屋さんが、全身各所を焼いた馬を曳いてきて「みんな早く千田町の電車通りに逃げないと危いよ。」と言ったので、橋を渡り、倒壊家屋の狭い路を一行となって、二男を抱き、三女の手を引いてやっとの思いで電鉄本社前に出ることができた。電車通りは架線が垂れ下がったり、切れて地上に落ちていた。

鷹の橋方面は火災が発生していた。ここも多勢の人が南に向かって逃げていたので、私も御幸橋に向かって逃げ、橋を渡って専売局前に辿りついて、暫く主人や子供のことを案じ、後から来るだろうと待っていたが来ない。

避難者の群れは、益々多く、宇品方面へ行っていたが、主人子供は見当たらなかった。(後略)

諸現象

吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目では、被爆後復帰した者は、何か原因不明の病気になる人が多く、中でも腹くだしは全員といってもよいほど罹ったが、手当での仕様がなかった。現場に停住した人の中には、頭髪や歯の抜ける人、斑点の出る人などたくさんあった。斑点は現在(昭和四十一年)でも出る人が多い。

吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目では、何ら火の気のない屋根などから火が出た。また火のつきやすいものが、あちらこちらで焦げ

たり焼けたりしたが放射熱線による自然発火と思われる。

金属・硝子製品は溶解した。瓦は変形して素焼よりもガサガサした感じであった。家の土台石や庭石などが、踏むとすぐ崩れるほど脆くなった。

また、植木の上部だけが焼けたり、電柱の爆心地に向く北側だけが半分焼けたりした。相生橋・元安橋の二橋とも、左右の欄干が開くようにして、両側の川へ向って落ちた。これは爆心直下の現象であって、爆心地点から南西約一・三キロメートルのところにある住吉橋も、前述の二橋と同様に、左右の欄干が相反した方向にむかって落ちていた。

また、電柱がほとんど六〇度、はすかいに傾き、中には、中間から折れたものもあった。電線は散々に切断されて落下し、歩きにくいほどであった。

吉島本町一丁目では、家屋倒壊で直接死んだ者は少ないが、汚染された空気を吸ったため死んだ者がある。

中島地区生存者座談会(要約)

日時 昭和三十九年十一月十日

場所 広島市中島町 浄円寺

出席者

藤堂イワ(材木町) 尾崎芳夫(中島本町)

坂田寿章(材木町) 福原亮輔(中島本町)

栗栖薫(木挽町) 木村律(中島新町)

坂本潔(天神町) 上園志水(材木町)

土井積(中島本町)

建物疎開

木村 中島新町は全部建物疎開しました。

坂田 材木町はまだでした。

栗栖 木挽町は三月に半分強制疎開しました。郵政の通りの角から、ウチ(栗栖)までと、同じ側の果物屋までが第一次強制疎開で、空地になっていました。

木村 六月の疎開が最後の疎開で、ウチ(木村)の倉庫の裏が誓願寺でしたが、そこが全部疎開でした。ずらっと新大橋までで、瀬川倉庫がぐるっと入って、みなです。細塵も本川旅館もみな…。

川土手をまっすぐ結んだ線でした。

新橋をまっすぐのばした線で、ずーっと現在の平和大橋よりの方です。

炎上

坂田 私は六日の昼前、観音町の三菱から総合グラウンドへ出たが、飛行機が偵察に来たので、西大橋を渡って福

島町の方へ逃げました。福島町の屠殺場のところあたりで、黒い雨が降って来て痛かった。

とにかく痛いので、兵隊帽をかぶり、前の小屋に入りました。しばらくして、雨もやんだので、中島町の方へ引返すことにして天満町へ出ました。天満橋は火がついていて、たいへんくすぶっていたので渡ることができず、電車鉄橋をわたって、そこからずっと電車道づたいに十日市に出ましたが、その道も燻っていて、十日市へ出るのもたいへんでした。煙がワツワツと湧くので、息が苦しくなり、濡れたタオルを口にあてて歩いた。前に行っていた女の子がバタッと倒れた。「しっかりせい。ここで寝たら死ぬぞ。」と言ってやった。それが相生橋(T字型橋)へ出て、Tの字からこっち(材木町)まで帰った。Tの字のたもとに旅館があったが、ふッと見ると無い。ありゃと思って眼鏡を擦って見てもやっぱり無かった。

十二時半ごろ、産業奨励館の丸いドームが音を立てて燃えていた。護国神社も炎上していたよ。

坂本 舟入本町の住吉橋の四ッ角でしたがね。ちょうど土橋あたりで、光ったのです。私は江波へ逃げて、荷物を取りに家(天神町)に帰ろうと思って、江波から舟入本町まで、江波の射撃場のところから半分戻ったとき、逃げる人に、「今から家に帰ろうと思う。」という、「坂本さんの家は今焼けている。」という。ですから九時半ごろには火がついたことになります。

坂田 十一時ごろ、もとの二中(県立第二中学校の畧)の下が燃えていました。住吉橋付近は十時ごろが火災の最中だった。材木町や中島本町には板塀がずっとありましたが、それにみな火がついていました。その小路にもパァッと火がついていたが、倒れたと同時に、いや倒れるまでに火がついていたのです。父もそうですが、妻や妻のおふるなども、その時は朝食の仕度で、まだ台所にいたままでした。

尾崎 今中さんが一番に中島へかけつけたと言っていました。負傷者が多勢むらがっていたと...

坂田 その日は絶対に中島には入れなかった。

藤堂 絶対に入れなかった。

坂田 私がそこまで入って見たら、元安の方から見て右側です。本川寄りに、埋立てしてから砂場がありました。そこを、ヨボヨボと男の人が - 年令はわかりませんが、五十歳位の年輩の人が、トボトボ歩いて来る。

尾崎 今中さんではなかったかね。

坂田 それで「おじさん！」とよんだ。ですが全然聞えるふうがない。その距離がほぼ七〇メートル位です。

坂本 六日午後六時に天神町へ来たときは火の海で、とてもとても...。私が市女(市立第一高等女学校の略)の生徒を探しに来たときも、地面が熱く焼けていたが、野球のスバイクをはいていたから入られたんです。

福原 六日朝十時半に比治山へのぼって向う側(段原側)に降りましたが、こんどは、どうでも中島へ一度行かにはいけないというので、比治山橋から鶴見橋を通り鷹野橋へ出て来たのですが、ちょうど赤十字病院のところがドン焼けていました。そこから中心部へは入ってこられませんでした。

坂田 私は兵隊で臨時帰休兵だったんですが、その日に限って軍隊の靴をはいていました。相生橋のTの字のところへ出て旅館がありましたね。三階建の...。その瓦がみな道路へずり落ちています。私は入ろうと思ったんです。そしたら足からパァッと煙が出るんです。足の裏から...おかしいなあとと思って、よくみると瓦が焼けていたんです。二、三步あるいているうち、煙がパァパァ出るんです。それで後へさがり、川へ入ろうと思ったが満潮で、これはどうにもならんと考え、高須まで無我夢中で帰りました。足の裏が痛いので見ましたら、両方の底がずっと焼けていました。皮がきれいに焼けていて、足袋も黄色になっていました。

だからとても、町に入るどころではありませんでした。材木町で、たった一人、女の人が助かって逃げ出たそうです。

尾崎 私は六日は動けなくて、明るる朝早く来ましたが、はいていた軍隊靴が焼けてしまいました。

藤堂 六日の夕方まで焼け続けました。

死体の収容と火葬

坂本 中島一帯の道路が、倒れた電柱と家屋で焼けているので、とにかく火を避け、わかるようにして火の中に入って来たんです。

市女の父兄が、私について来たのが二〇人ぐらいでしたが、両方へ分けて、あっちを探せ、こっちを探せとさがしたんです。ウチの子は、ちょうどお宮の前のところで...見つけました。

生徒たちの死体の収容は、どうだったんでしょう。

尾崎 明るる日(七日)早く来たのですが、死体はそうありませんでした。火は三日も四日もありました。

向井さんの死体を私は掘り出しましたよ。

木村 火はあっても、道路を自転車で私は通ったから...、明るる日の夕方三菱から帰るときに通ったが、だいたい道路は通れるようになっていました。

坂田 火葬は二日目ぐらい...からでしょう。

藤堂 八日からですよ。

坂田 死体がね。今言う新大橋、あそこが疎開をずっとしていたでしょう、そこにずらりと並んでいました。三日目の朝のとき、死体の腹が破裂して、腸が風船のようにふくれて出ているのを、鉄棒を拾って来て叩いたんです。ボンボンというだけで破れなかったよ。それまで転がしてあった。

木村 場所によると、十日過ぎても死体がまだありました。

坂本 死体の収容は兵隊が行ない、囚人も使われていました。

尾崎 七日に、私は本川橋の下流の橋(新大橋)を渡りましたが、橋の上にはずらっと死体がありました、女の子が一人生きておりましたよ。

弁当箱にね、米と麦と大豆を入れてあったのが、カラになっていて、まだ生きていました。女の子はおおかた伏さっていましたが、みんな死んでいました。男の子の顔は目が見えないように脹れていても、まだ生きていました。下手の石段があったでしょう、そこに石段が見えないほど死体がありました。それから中島に入りましたが、角の歯医者さんの二階に星野さんという人がおりましたが、土手に吸いついたようにして、まっ裸で、よく見るとその人でした。寝ていて被爆したのかも知れません。橋のたもとに老人の将校も死んでいました。

福原 中島町・木挽町・天神町も一緒と思いますが、三次地方の方々が来て清掃されたんです。私の知人が、その中に一人いて、兄が三次中学の先生だもんですからね。先生のご両親ですかというようなことで、そこらの残材を集めてきて火葬にふし、遺骨をとりました。

それは八日の午後でした。

藤堂 八日の朝、材木町へ戻ったとき、広島郵便局のところに娘がいたんです。戸口に死体が二つ転がっていたので、どちらかではないかと調べていましたら、警防団の人が「おばさん、もし自分の身寄りだったら引取っていきなさいよ。今から収容するからね。」と言いました。

「そうですが。それでは、これじゃと思って持って帰りましょう。」と二人の頭骸骨の皿の部分を紙に包んで帰りました。

福原 あとから聞いたのですが、この作業に出動された三次の警防団の人が、随分死なれたそうです。

坂本 警防団の人々は、おそらく三次とか高田郡から出てこられたのでしょうか。十五日に三次へ行ったとき、知人の医者が、今広島へ行くよう召集がかかったと言っていました。市の周辺から医者や看護婦さんが出動されました。

木村 だがね、八、九日でなくて、この区域は別として全般的には随分死体の収容は遅れております。大手町九丁目あたりには、十日過ぎても通路のほとりに死体がありました。

尾崎 私は被爆後、簡易保険の建物跡で町内の連絡事務を取っていたんですが、雨が降ると、湯気のようなものが、とても上がるんです。まだ下に火があるのかと思うほどです。それが燐だったんです。吉岡さんの下[しも]には、まだ死体が幾らでもありました。あと、骨を拾い集めましたかね。

木村 死体収容は目貫通りだけは早かったんです。

坂田 電車道が早かった。

坂本 死体の火葬は、みな所々で積み重ねて焼きました。しかし警官の立会いというようなものはありませんでした。

福原 どこでも焼いていたが、慈仙寺あとでも焼いたでしょう。

尾崎 女の人で何歳ぐらいとか、男の人で何歳ぐらいとか書いて並べてありました。

藤堂 まだそれはていねいな方です。ひと山にかためて焼いていました。

栗栖 中島は、まるで煮干魚[いりこ]を乾したように無数に死体がありましたし、誰が誰ともわからないし、町内会の証明などありませんよ。

尾崎 軍隊が来て、トラックにドンドン死体を積んでは、似島へ持って行ったそうですね。

坂田 似島へ持って行ったのもあるが、まず川へ投げて一杯にしたんです。

福原 川へ投げると満潮のときは浮いて流れるんです。それを住吉橋と明治橋へ流して行き、材木を橋げたへ持って行って棒をわたしといて、流れて来た死体を、それに掛けるんです。それを、ドンドン引揚げたわけです。住吉橋のところなどは、うず高く死体を積みあげ、ガソリンをかけて焼きました。死体の確認とか何とかいうことはできません。

尾崎 塵芥と死体とで、川の流れば見えませんでしたよ。

坂本 疎開作業の学徒隊は川にいました。六日午後六時ごろ、私がきたときは、川岸に皆降りて、石垣にずっとたむろしていました。市女の生徒がいましたが、女の先生は学校に残り、男の先生が此所にきていたのです。ウチのむら子は市女の二年生で来ていましたが、六時前でした、父兄が一人来て、天神町のところに子供がみな倒れているから行けというのです。集った父兄が県庁前で二班に分れて、名前をよびながら探しました。私が万代橋のところに来ますと、ちょうどお宮の前のところで、石垣に一〇人ぐらいかたまっていました。

「ここよ」と言ったので私は降りて行ったんです。そしたら女の子が、顔がはれていて目は全くの一筋、頭の髪はほとんど無い。皮膚は剥けて全部たれさがっているのです。負うことができません。私の子で築山家へ養女にやっていたんです。「むら子ちゃん、いいね、お父さんがこられて...」と誰れかが言ったのが、今も私の耳に残っています。通りかかった女の人に帯をもらって、背中に負わせてもらい、住吉へ出たのです。住吉のたもとに人が一ぱい板の上に並べてありました。そのおり、一五、六歳の特攻隊員のような青年が江田島からきて、死体の収容作業をやっていました。キビキビした人でしたが、隊長の名を聞きもらしました。これが夕方七時ごろでした。私は、それから市女へゆき、生徒がたくさん転がっているから行ってくださいと連絡しました。

赤十字病院も収容者で満員だということで、天神町付近の人々を私が指揮して江波の陸軍病院へ連れていきました。住吉橋船着場のところに荷馬車があったので使い、各自、板を担架にして、皆を引っぱって行きました。もう、十一時になっていました。ずうっと土手の畑中を通りましたが、寒くて寒くて女の子は震えていました。ところがこの病院も一ぱいでした。それから江波の学校へ行って全部運動場へ入れました。みんなが痛がった様子は忘れられません。江波の病院も八時ごろには軒下まで溢れて一ぱいだったそうです。

江波で死亡した人々は、翌日、運動場で火葬にされましたが、「どうもお気の毒です。あなたのお子さんは、皆と一緒に焼きますから、遺骨はわかりませんが、承知しておいて下さい。」と、言われました。確認のしょうがありませんでした。

坂田 材木町の場合は、死んだ人間の誰も顔かたちがありませんでした。それで私が知っているのはアワシマさん(西福院)の家のところで学徒が死んでいましたが、黒い服に白い名札をつけている。これが残るんです。中に身分証明書があるのが焼けているんです。それが一部出てくると「あら、あんたがたの弟は、あそこに死んでいた。」というようなことでした。それが緑さんの子供でした。名前がわかる程度なんです。で、私はあくる朝六時に町に入りましたが、もう全然確認するしるしは一つもありませんでした。ただ、ここでこれは靴をはいてバンドがこうだから竹田清さんだ、あるいは緑さんのお母さんだとか、肉屋のおじさんだとかいうぐらいのことでした。

初めの居住者

坂本 被爆者で、この地区に最初に住んだ人では、上蘭さんが最初ではなかったのですか。

尾崎 綿貫さん・土井さん・古川さんらも早く住まれましたね。それから吉田のおじさんも。八月末には、まだ誰も住んでいなかったのです。私が疎開の子供を連れて帰ったのが九月十五日でした。そのときもまだいなかったのです。

坂本 それは、戻りたくとも、ここへ戻ったら...草も木も生えないという恐怖があったし、まだ飛行機が来ることが頭にあったし...

坂田 八月末、本通りの山口銀行の金庫の中に、子供と女が住んでいたが、目撃してから一週間ぐらいたったとき、それが死んでいた。火傷でやられていたから、放射能が原因だったと思う。だから住んでいたとは言えないね。

尾崎 浄宝寺の息子さんが、九月の十五、六日ごろ疎開先の三良坂から帰ったと言っていました。

藤堂 うちの子を連れに行っただのは十日ごろでした。親のない子は五日市の収容所に収容されました。

木村 一番早く、ここへ帰ってきたのは、飯田さんだだと思いますがね。

坂本 私が夏に神社の地上物件を調べに戻ったときは、天神町に誰もいませんでした。これは、あくる年だったか、どうでしたか...ちょっと忘れまして。

上蘭 材木町では、二十年十月です。風呂屋の福原さんが帰っていて、もう一人誰れだったか...いました。

坂田 いや、材木町では私が一番早かった。年が明けて二月三日です。ロウソク生活でね、こころ細かいぎりでした。

福原 翌年二月、電車が通るようになっても中島には家がなかったのです。

坂田 相生橋のT字型のところで電車に乗り、天満町までかよっていました。

福原 物資の配給開始は、九月十四、五日ごろでしたよ。ロウソクの配給は一回きりでした。

上蘭 電灯がついたのは二十一年冬で、中島本町が一番早かったね。材木町は十か月遅れました。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊

炸裂直後、吉島方面には避難者が殺到して、その混乱状態はこの世のものでなく、救援隊すら入れそうになかった。

六町午後六時ごろであったが、水主町住吉橋付近で、江田島から来た暁部隊の一五、六歳くらいの若い兵士が、負傷者の救援作業に活躍していた。板で作った担架で運び、住吉橋のところにあった舟着場(東詰下流)にとまっている馬車に乗せて、隊員が引っ張り、陸軍病院江波分院まで輸送していった。これら特攻隊員の活躍はめざましく、多くの負傷者からたのもしく思われた。

吉島羽衣町二丁目では、当日十二時ごろ、船舶部隊から五人来援し、外部から避難して来た多くの負傷者を、担架で千田町方面を経由して似島へ向けて輸送した。

吉島町・同羽衣町一丁目一帯では、七日朝からムスピの配給および救急品の配給があった。

八日から、ムスピを朝三箱(一箱八〇個)・昼三箱・夜三箱ずつ受取って吉島一帯の避難者に配給した。

救護所設置

県の「戦災記録」によると、八月七日には県庁跡と水主町住吉神社境内に応急救護所を開設していたと記録されているが、負傷者が多くたむろしている場所が則ち救護所となったのである。

なお、道路の清掃作業は、この地区では、特別には行なわれなかった。

死体の収容と火葬・仮埋葬

八日ごろから、三次方面からと思われる警防団、刑務所の囚人、そして陸海軍兵士の活躍によって、死体の収容が行なわれた。

この時の収容状態から察すると、人名確認をするとか、身元不明者に対する処置(遺品を取っておくこと、性別・推定年齢を記すこと)などを行なうような余裕のある収容動作ではなかった。しかし、場所によっては、収容作業隊が検視を行ない、身元不明者に対する措置などを行なっていたようであるが、これは一部のことに過ぎないと言われる。結局、焼死体が多く、誰やらわからないほど容姿が変わっているため、やむをえないことであったと考えられる。

この地区内には、当日、建物疎開作業を行なうために、各地から国民義勇隊や学徒動員隊(判明している人員約一、八〇〇人)が多数集合していて全滅したので、死者は膨大な数であった。

死体の収容場所は、現在の西平和大橋のところ、慈仙寺跡・住吉橋のたもとなどで、各所から集めた死体は、うず高く積み重ねられ、ガソリンをかけて火葬にふした。

これらの死体収容には、暁部隊の斉藤義雄少佐が、若い特攻隊員を指揮して行なった。

吉島一帯では、七日ごろから死体収容を始めた。収容数は、現在では不明であるが、収容場所は吉島町の川土手その他という。収容にあたったのは同じく暁部隊で、兵隊がそれぞれの死体についている名札のようなものによって確認したが、不明者は年令・性別・服装などの特長をメモしていた。現在(昭和四十三年)、身元不明者の遺骨が三個ある。

火葬は、壊れた家屋の廃材と、兵隊が持参した松根油を使って、元中国製紙会社跡(現在・吉島公園)でおこなった。

墓標

当時、この埋葬場所に標識柱が立てられていたが、昭和三十五年ごろ不明になった。

材木町では、浄円寺境内跡に、町内に散乱していた人骨を集め、防火用貯水槽を埋め、その上に誓願寺の池の玉垣を積み重ねて墓標を立てた。この遺骨は、後年、当局の指示により平和公園の供養塔に納骨した。

なお、地区に町有地があったので、戦後、この土地を売却し、それを資金として法要を行なっている。

遺骨の収拾

二十一年五月ごろ、市役所から、水主町より上[かみ](北部)の地区の遺体や遺骨の収容に協力してくれと、全町に対して通達があった。この頃でも、遺骨はむろんのこと、物に埋まった死体は、そのまま放置されていた。このとき、マンホールの中や防空壕とか土中に埋もれている死体を探し出した。集めた遺骨は、現在の平和公園内の供養塔に納め、白骨化した遺体は天満町の向西館火葬場へ運んだりした。このときは、かなりの死体を処理したが、材木町にあった防空壕に、四人くらいの男女生徒がかたまって白骨ともならず、服を着たまの姿で発見されて、作業する者に衝撃を与えた。

町内会の機能

被爆直後は全町内会が壊滅状態になったので、対策とか処置については施しようもなかった。町内会長・幹事は大部分死亡し、各町民も全滅的な状態で、町内会の機能はまったく失われた。従って、各種の証明なども、生き残った人が誰彼なしに臨時町内会長となって証明した。

吉島町・同羽衣町一丁目は、当日から町内会を復活したが、住民は十分の一ばかりに減少していた。しかし、吉島羽衣町二丁目は、町内会役員が、一部のけが人はあったが、ほとんど無事であったから、幸い機能は停まらなかった。

九、被爆後の生活状況

復帰居住者の状況

中島地区では、八月下旬ごろ、焼跡の慈仙寺のところに、焼け残った廃材を利用してバラック小屋を作り、住んだ人(失名)があったが、これが最初の復帰者のようであるという。

材木町は、十月ごろ、人が居住しはじめたが、天神町などは、翌年の夏ごろでも家は建っていなかった。とにかく二十年十月ごろは、水主町から上[かみ](北部)で、五、六戸ぐらいしか見あたらなかった。そして、一戸の小屋に五世帯ぐらいが集って雑魚寝の生活をするという状態であった。そのときの暮しの状態は、八月下旬ごろは、配給品なども無かったので、知人とか親戚関係のところへ廻っては物資を分けてもらった。当初、非常用配給のあるころは、この地区には一人もいなかったの、こうした恩典も知ることなく、九月に入ってから、ようやく配給を受けるようにたった。

吉島町・同羽衣町一丁目では、被爆後一週間くらいして人が居住しはじめた。知人同志が協力して、飛行場跡や地区内外の焼残り木材・トタンなどを拾いあつめて来てバラックを建てた。生活は言葉にあらわせないほど惨めであった。

吉島羽衣町二丁目では、住民たちの身心がやや落ち着くと同時に、雨が漏らない程度の住居造りをはじめた。材料はなく、壊れた家を元にして、使用出来る最少限の一室程度のものでやっと生活した。働くところもなく、また、健康もすぐれず約一か月くらいは、虚脱してブラブラしていた。

八月末ごろの居住世帯

八月末ごろの居住世帯状況は、吉島町約一〇〇世帯、吉島羽衣町一丁目約五〇世帯、その他の各町については不明である。

衛生環境

八工が多数発生した。バラックのトタン屋根の内側にびっしりととまっているのを、夜、古い新聞紙などを丸めて火をつけ、その炎で焼き殺したが、幾ら捕ってもすぐに一面をおおうほど群れとまっていた。

九月に入ったころ、進駐軍が飛行機からDDTを撒布してから、ようやく減少したが、それでも、死体がまだ埋まったまま残っていたためか、まったくいなくなるということはなかった。

なお、ノミやシラミはいなかったようである。

生活物資の入手

生活物資は、十月末ごろまで、市から無償で配給を受けたが、これらの配給は、中島本町の富士火災支店跡の町内会事務所(付近の格町も含む)でおこなわれ、区域内の者が当番制で受け取りに行った。

主食は、吉島配給所とか千田町配給所および水主町下配給所まで行き、薪炭などは、大手町七丁目の森田配給所というように遠方まで行かねばならなかった。翌二十一年三月ごろになって、衣料品など放出品の配給は、地区町内会事務所まで配達してもらった。それまでは衣料品の配給はなかったが、五月になって、綿貫衣料品配給登録店

が中島本町で開業して以来、これらの配給がたびたびあるようになった。

この頃の地区内には、家のごくまばらに散在していたので、配給するときは、空罐利用の鳴子を作り、ガラランと鳴らして知らすようにした。それが鳴ると「何か配給があるぞ。」と言いながら出ていったものであるが、間の抜けたおどけたような音であった。

電灯つく

二十年十二月ごろ、中島本町には一〇世帯ぐらい復帰者がいたので、早く電灯をつけるよう、向洋町にある中国電力営業所へ日参して交渉した結果、電線さえあれば工事をするというので、水主町方面の焼跡にある電線を拾い集め、これを継ぎ足したもので工事をしてもらった。しかし、配電回路線に接続するためには、川を隔った向岸の革屋町の本線に接続しなければならなかったから、拾い集めた三メートルか四メートルの裸線を繋ぎ合せた。架線するときは舟を利用し、電線が切れないよう注意しながら渡して、本線につなぐという難工事であった。こうして、二十一年一月中旬ごろに電灯がついた。これまで付近にある焼残りの木を燃やして、明りをとっていたが、ようやく原始生活から一歩進んだのであった。これから逐次、地区全般にわたって電灯がついた。材木町あたりも、やはり拾い集めの裸電線をつないで、二十一年六月に電灯がついた。このときは電柱だけ各人が費用を負担した。

ロウソク生活

吉島町・同羽衣町一丁目あたりは、九月末ごろに電灯がつくまで、ロウソクの配給がほとんどないため、木ろうのようなものを闇で買い、これに手製の芯を置き、溶かして使用していた。電灯をつけるときは広島刑務所を電源にした。

吉島羽衣町二丁目は、市からロウソクの配給を受けて各戸に支給した。電灯がついたのは、十月十七日であった。

疎開世帯の復帰

中島地区一帯は、徹底的に焼けたばかりでなく、住民もほとんど死亡している関係上、疎開世帯の復帰を待つほかなかったが、七十五年間は不毛の地であると流布されていたので、疎開者も恐怖のあまり復帰する意欲もおこらず、ポツリポツリの状況であった。

吉島町・同羽衣町一丁目も散漫なものであった。

吉島羽衣町二丁目は、空家が多かったが、八月末ごろから、家主とか他町からの入居者が多く、わりに早く町民が増えた。

疎開児童の復帰

徹底的に破壊された中島地区は、住む所も無く、疎開児童を家族の避難先とか疎開先へ連れて帰る以外に方法がなかった。全滅した家庭の児童は、その縁故者に引きとられた。引取人のない児童は、五日市町の戦災孤児収容所に収容された。すなわち、中島地区へは帰ってくる者がなかったと言ってよい。

タケノコ生活

主食の配給が乏しく、配給された放出物資や疎開していたわずかな衣類などを持って闇市や農家へ行き、物々交換のタケノコ生活を営んだ。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

中島町一帯は、地盤が高かったから、九月十七日の暴風雨や十月八日の大豪雨にも、浸水するようなことはなかったが、軍が修理した本川橋も、原子爆弾では落ちなかった新大橋も、この豪雨による出水で落ち、しばらく交通が不便になった。

ただし、吉島町・同羽衣町一丁目付近は、床下浸水五〇%、床上浸水五〇%の被害を受けた。

吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目は、九月十七日の大雨で床下浸水となり、十月八日の大雨では、水が膝までつかる床上浸水の洪水となり、半壊家屋の大部分が崩れ、精神的な打撃は実に大きなものがあつた。

住宅の状況

焦土もようやく寒くなってきた十月ごろから、少数の人が周辺部の町村から木材を買って来てバラックを建てた。バラック建てといっても、掘立小屋式よりも、多少良くなった程度であった。二十年十一月ごろには、すでにこの地域を公園にする計画が話されていたが、具体的な設計とか方針とかは、まだ無かった。実施するか否かの確定を待つこともできず、土地所有者はこの地に住宅営団のパネル式住宅(一戸三、五〇〇円)を建てた。

吉島羽衣町二丁目では被爆後、四、五日して、焼残りの材木で何とか家を修理した。特別に資材はなかったのに、

有合わせの物をかき集めたのであった。

経済活動

二十二年ごろから、食糧品店が主体となって復興し、経済活動といえるものも見られはじめたが、商品も少なく活発なものではなかった。

学校再開

中島国民学校が廃校になり、舟入国民学校に編入されることになっていたが、中島地区町内会関係者が吉島本町一丁目川口宅に集まり、協議した結果、吉島本町一丁目に二戸、同町二丁目に二戸の民家を借りて、中島国民学校仮教室を作り、二十年十二月一日から授業を始め、廃校から免れた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

本川町一丁目 二丁目 三丁目、十日市町一丁目 二丁目、猫屋町、榎町、堺町一丁目 二丁目、土橋町（一部）

町内会別要目

この地区の範囲は、空鞆町東[そらざやちょうひがし]・同西[西]・鷹匠町表町[たかじょうまもおもてまち]・同中町[なかまち]・同裏町土井之内[うらまちどのうち]・鍛冶屋町[かじやちょう] 左官町[さかんちょう] 塚本町[つかもとちょう]・十日市町[とうかいちまち]・榎町[えのまち]・猫屋町[ねこやちょう]・油屋町[あぶらやちょう]・西大工町[にしだいくまち]・堺町一丁目～四丁目[さかいまち]・北榎町[きたえのまち]である。

爆心地点からの至近距離は鍛冶屋町の太田川畔で約三〇〇メートル、もっとも遠い地点は、空鞆町北端の西寺町と接するところで約九〇〇メートルである。

地区は、相生橋を西へ向って渡る電車軌道を中心にして南北に形成されていて、その町名があらわしているように藩政時代は、職人が多く居住していた。鷹匠町は、往昔藩侯遊獵のとき、鷹を放つ鷹匠の居住していたところであり、榎町は、昔、榎樹が水路に沿ってたくさんあったので町名とし、十日市町は、昔、毎月十日に市場が開かれたのが町名となった。また、猫屋町・堺町は、猫屋とか堺屋とか称する豪商が居住していて隆盛をきわめ、そのまま町名となったと旧史にある。

このように町人の町として古くから発展し、地域的な伝統も深い。明治以後、ずっと現代まで商工業地帯として栄え、人口の密度もきわめて高率である。

原子爆弾による被害は甚大で、家屋は全域にわたって全壊全焼した。人的被害も死傷者一〇〇%に近く、二十一年八月十日現在で、市役所が調査した資料によると、一か年間(四日間のズレがある)に死亡した数と、当日の即死者、および行方不明者を含めた数が、地区総人口の八五%におよんでいる。

まさに壊滅の廢墟になったといえよう。

被爆前の戸数・人口

当時の建物総数は、次表のとおりである。ただし、推定数。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
空鞆町東	1,917	1,930	7,720	榎本嘉八
空鞆町西				三上丹次
鷹匠町表町				平田倉吉
鷹匠町中町				後田寿
鷹匠町裏町				戸田弘
土井之内				榎山薫三
鍛冶屋町				三戸謙一
左官町				楠原常吉
塚本町				井上春美
十日市町				高橋剛
北榎町				正岡旭
榎町				山崎吾一
猫屋町				佐伯朋一郎
油屋町				西林繁雄
西大工町				
堺町				

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
本川国民学校	鍛冶屋町	妙教寺	油屋町
本覚寺	左官町	空鞆神社	空鞆町
光道国民学校	猫屋町	清住寺	左官町

二、疎開状況

人員疎開

十九年末ごろから、日本への敵機の襲来がはげしくなり、戦局は悪化の一途をたどったので、病弱者や老人が少

しばかり疎開した。そのあと軍から「病人や幼児のほかは絶対に疎開してはならん。市民はあくまで踏みとどまって、市の防護にあたる義務がある。」と、布告が出たため、あらわに家族を疎開させるものは少なかった。

ただ、夜になると必ず空襲が警戒警報が出るので、夜だけ近郊の知人の家に待避するか、または夜具をかかえて、周辺の山で仮眠し、朝になると自宅へ帰ってくるという生活を、ほとんどの者が繰り返していた。

しかし、どの家も青、壮年者は動員を受けて家にいず、老人と女、子どもが家を守って、それぞれの家業に従事していたから、完全な疎開生活は事実上できなかった。

物資疎開

物資の疎開も、二十年に入ってから、輸送機関がほとんど軍部に動員され、運送も思うようにいかないありさまとなり、ほとんど諦めざるを得ない状態で、計画的な疎開はできなかったものが多い。

学童疎開

本川国民学校では、昭和二十年四月十五日に、三年生以上の学童(高等科生徒を除く)二〇〇人あまりを、双三郡十日市町・同八次村(共に現在、三次市)へ集団疎開を実施した。

なお、この疎開以前にも、縁故のあるものは任意に疎開させたが、これら縁故疎开学童は約五〇〇人ほどであった。また、猫屋町の私立光道国民学校も、山県郡都谷村及び同郡原村へ約一〇〇人ほど集団疎開を行ない、縁故疎開は約六〇人ほどであった。

三、防衛態勢

地区内各町の警防団が、連繋して組織的に防空・防火訓練を実施した。

青壮年層が動員で家にいなくなったので、主として婦人ばかりが隣保班を組織し、パケツリレーの消火訓練や避難・救護などの演習をおこなった。

各家庭は、強制的に防火用貯水槽を設備し、防空壕を作っていた。また、各隣保班ごとに共同の防空壕を作った。なお、主要建物の周囲、倉庫の付近などに防火対策として空地を作るため、家屋の疎開も順次実施されていた。

四、避難経路及び避難先

災害時に水ける避難先、および避難経路をあらかじめ、次のように決めていた。

空鞆町方面 = 横川橋を経て、安佐郡川内村(現在・佐東町)

鷹匠町方面 = 横川橋を経て、安佐郡古市町中調子(現在・佐東町)

鍛冶屋町方面 = 中広町を経て、市内山手町天神山裏

五、所在した陸軍部隊集団

広島憲兵分隊

光道国民学校内に広島憲兵分隊が設けられ、藤井貞利憲兵大尉以下、憲兵七五人・補助憲兵一三五人、特別機動隊三五〇人計五六〇人が駐屯していて被爆、ほとんど全員死傷し、七、八人が生き残った(柳田元憲兵准尉談)。

六、五日夜から炸裂まで

戦局が逼迫し、連日連夜、警報が発令されたり、解除されたりする中で、町民は日ごろの訓練どおり、警防団や町内会役員の指揮に従い、防空壕へ待避したりしたが、終りには馴れっこになって、さほどの緊迫感も感じないような状態であった。

五日夜

防空・防火対策も決められたことを、ただ繰り返すだけであったが、特に五日の夜は、空襲警報が二回も発令されて寝不足であるうえ、これまでの疲労が重なって、暑苦しさが一層からだにこたえていた。

空襲警報のときも、灯火管制は怠ることなくおこなったが、もうたびたびのことではあるし、警報だけで爆撃はないものと、いささか高をくくって防空壕へ待避しなかった者も多かったようである。

六日朝

原子爆弾炸裂の直前六日の朝にしても、警戒警報解除後であったし、防空壕へ待避している者は一人もいなかった。たとえ待避していたにせよ、原子爆弾に役立つような構造の壕ではなかった。

炸裂に際してはなおさら、壕へ待避する余裕などまったく無かったし、壕もまた瞬時に破壊されていたから使用することはできなかった。

六日の朝は、寝不足の目を刺すように太陽が輝き、よく晴れていた。警戒警報が解除になったので、みな一安心して平常どおり、おのおのの仕事に取りかかっていた。

空鞘神社では、本川国民学校の一・二年生学童四、五〇人が、先生に引率され、戦勝祈願のため参拝していた。

また、空鞘町の町民は、土手筋にある家屋の疎開作業に出ている者もあった。疎開作業には、他の町の住民もかなり出動していたようであるが、現在生存者も少なく調査できないので詳細がつかめない。従って、本川地区における建物疎開計画とか、当日の実施地区有無や、その他の状況も不明である。断片的ながら、調べられた部分については、つぎのとおりである。

疎開作業への出動と建物疎開実施概況

町内会名	動員令による町内会より疎開作業への出動について		疎開状況			
	出動人員概数(人)	出動人員概数	建物疎開計画予定概数(戸数)	被爆前日までの実施概数(戸数)	当日朝実施中の概数(戸数)	他地区からの応援人員概数(人)
空鞘町 東、西	出動予定人員四〇	空鞘町	5	2	1	不明
鷹匠町 表、中町、裏町	不明		10	3		
鍛冶屋町	不明		5	4		

右表以外の町内会で、左官町・塚本町・十日市町・堺町一、二丁目・猫屋町・油屋町・西大工町の谷町は全面的に不明である。

七、被爆の惨状

火災発生

地区全体にわたって、炸裂と同時に強烈な爆風により、建物はすべて倒壊した。また、放射熱線を受けて着火し、炸裂後五分間ぐらいで随所に煙が立ちはじめ、約二〇分後には、全地域が火炎のるつぼと化していた。風が南から北へむかって吹き、各町ほとんど同時に火災を発生し、午前中にほとんど全地区を舐めつくしたのであった。

そして、多くの人々は、その時間にそこにいたままで死んだ。

火災地獄の出現

人々は爆風の衝撃で失神し、倒れたなりに焼死するか圧死した。辛うじて倒壊家屋の下敷きから脱出した者もひどい火傷、大きな打撲傷を受けて、まともに歩行できなかった。

救出を求める声が、黒煙のなかに聴えても、襲いかかる劫火に追われ、ただわが身一つを守って逃げるのがようやくのことであった。

逃げ出した人々のほとんどは、近くの太田川(本川)の川べりへ向ったが、川までたどりつく途中で倒れたまま焼死した。一部は中広町や己斐方面へ逃げ出そうとした者もあったが、これも大部分が途中で動けなくなって焼死したり、重傷のため死んだ。

せつかく川まで来た者でも、向う岸へ渡ろうとして、数すくない筏や川舟に群がりついたため、それらともろともに水中にくつがえされ、浮きつ沈みつつ流れて、ついに溺死した。

全域が焼きつくされたのは午後三時ごろであったが、本川の岸へには、息も絶え絶えになった避難者が、ずらっとメジロ押しに石にしがみついで喘いでいた。この人たちも次第に力つきて、つぎつぎに川に流されて消えて行った。

郊外に通じる鷹匠町から空鞘町にわたる土手筋の道路上には、全身血だるまになった負傷者や、ゆでダコのような火傷者、顔面の皮膚が剥けて腫れあがった者などが、折り重なって倒れていた。

また、火炎をくぐって逃げて来た馬が一頭、土手の道路をふさぐように四肢を張り、目をひらいてジッと立っていたが、急にドサッと倒れて死んだ。

夜間になっても、まだ、所々に残り火があって、煙をあげていた。特に倉庫などは永く燃えていた。砂糖や穀物が貯蔵してあった所は、青い炎が無気味にあがっていた。六日以後も二、三日燃えつづけていた。

相生橋 - 左官町 - 土橋へかけての電車軌道筋の道路にも、すでに息絶えた者や、死にかけている重傷者が両側をずらりと埋めていた。橋のたもとに、軍馬が横になって倒れ、そのそばには全裸で革の長靴だけをはいている兵士が死んでいた。また、一二、三人の兵士(一分隊か)が、折敷し葵勢のまま並んで死んでいた。帽子を吹きとばされている者、あまり傷のない者など、瞬間的に硬直したように思われた(中畑佐一談)。

そのすぐ近くには、四〇歳ぐらいの男が膝をかかえてかがみ、茫然と通る人々をながめていた。その左足の膝から下は、骨だけになっていた。何かに挟まれて左足が抜きとれないまま火に焼かれ、肉が焼けたとき抜けて、逃げるのができたようであった。

川へ避難した者は、燃えあがる火災の熱気をさけるため、首だけ水面に出して、川床の石にかじりついていたが、力つきた者からつぎつぎ水流におされて溺死した。

僅かの人々が、やっと向う岸の基町の堤防にたどりついたけれども、まもなく死んでしまった。

炸裂時の瞬間的被害

全壊全焼のこの地区は、その物的・人的被害が実に大きなものであった。各町の炸裂時の被爆状況は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
空鞆町	90	10	-	-	89	5	6
鷹匠町	97	3	-	-	89	4	7
鍛冶屋町	92	8	-	-	81	9	10
左官町	99	1	-	-	91	4	5
塚本町	100	-	-	-	96	4	-
十日市町	98	2	-	-	86	10	4
北榎町	94	6	-	-	52	43	5
榎町	99	1	-	-	79	20	1
猫屋町	98	2	-	-	85	10	5
油屋町	93	7	-	-	84	8	8
西大工町	98	2	-	-	88	10	2
堺町	96	4	-	-	87	4	9

橋梁被害状況

相生橋(永久橋)のらんかんは両側とも破壊され、橋床も浮きあがっていたが、通行は可能であった。本川橋は橋ケタが爆圧のため移動し、橋台は橋脚をはずれて落橋し、通行できなかったようである。

黒い雨降る

午前十時前後であったが、三、四〇分間にわたって夕立ちのように激しく黒い雨が降った。地区内で雨の降っているところは、もう火災が下火になっていたらしく、焼けるものはほとんど焼きつくされているところであった。

まだ息のある老は、灼けつくような炎天下ながら、防空頭巾やふとん・トタン・板など手当たり次第に拾ってかぶり、「寒い、寒い。」と、震えていた。そこへドシャ降りの雨が降ってきたのであった。

諸現象

翌日の朝、焼跡に帰ってみると大きな鯉が一〇匹ばかり飼ってあった池の水がカラカラに乾いており、鯉は影も形もなく消えていた。骨さえも見つからなかった。

また、焼跡に残っている黒焦げの死体は、いずれも首をもたげ、両手を胸の前に出し、その手先を幽霊のように下にたらしめていた(横田侃目撃談)。

また、縁故者を探しながら相生橋の上を渡るとき、裸の死体がすべて男なので不思議に思い注意してみると、女は陰部から腹わたがはみ出していて、ちょうど男の性器のように見えていたのであった。どの死体も赤くただれて腫れあがっていたから、顔面はもちろん、からだの形では性別の判断がつかず、陰部だけを男女の別の根拠にしなければならなかった(藤田松雄談)。

自然着火

熱線による自然着火が火災の大きな原因となったが、放射能線は爆心地から遠ざかるにしたがって、放射線状の筋となって拡がり、線上は強く、線と線のあいだは弱く、その強度が違っていたようである。

この地区は、爆心に近かったため、全域にわたってほとんど均等に熱線の放射をうけ、可燃性の物質は、炸裂後、反射的に火を発したと思われる。当時の居住者で、この着火状態を目撃した者はほとんど現存していない。

たとえ生存者があっても、炸裂にあってしばらく気絶状態におちいついて、気がついたときは、もう周囲が燃えていたであろう。

物質の変化

強度の火熱によって、金属類は溶解したり、いちじるしく変形したりして、原型を保った物は皆無であった。溶解した金属製品は、焼けた瓦や石をつつむようにして凝結していた。ガラス類も原型なく溶け、陶器類とともに置かれていたものなどは、その陶器に付着して流れたまま固まっていた。

このような状態のなかで、左官町の原田浴場の煙突は、かなり高いのに形もくずれず完全に残存し、空鞆神社の石造の鳥居も、倒れないで以前のとおりに立っていたのが不思議であった。

八、被爆後の混乱と応急処置

一瞬にして全滅したこの地区には、救援隊もまにあわないで、当日はおそらく来援しなかったのであろう。

ただ、相生橋 - 左官町 - 土橋間の電車軌道に瀕死の重傷で倒れていた者、及び鷹匠町 - 空鞆町間の川沿い土手筋に逃げ切れないで横たわっていた負傷者たちは、六日当夜から七日にかけて暁部隊の兵士が出動し、最寄りの外郭だけ残った建物(本川国民学校)や、その他の臨時救護所に収容した。

李グウ公殿下

宇品の暁部隊内で被爆した竹中泰軍属が、鷹匠町の自宅の安否をたずねて帰り、途中、憲兵にとがめられながらも、午後十二時四十分、相生橋西詰に到着した際、同西諸北側で、被爆してうずくまっている李グウ公殿下(第二総軍教育参謀)を発見した。「君は軍の者か、町の者か？」と、殿下に問われた。「町の者です。家を見に帰るところです。」と、竹中軍属は答えた。「よう生きて帰ったね。俺は、今朝、やられたんだ。李グウ公という者だが、どうか憲兵隊に連絡を取ってくれないか...」と、頼まれた。

李グウ公殿下は、顔から胸に火傷し、上衣は吹き飛ばされて、力なさそうであった。竹中軍属は、ともかく此処ではいけないと考え、殿下を背負い、本川国民学校東側の川沿いの道に面した防空壕(二畳敷位)に運んだ。殿下は一六、七貫の巨体であるうえ、手は火傷してズルズルになっていたから、壕内に運びこむのも一苦勞であった。

竹中軍属は、連絡しようにも誰もいなくて困ったが、三時半ごろ、十日市派出所の負傷した巡査が歩いて来たので、これに連絡方をたのんだ。巡査は引返して、派出所が埋蔵していた油を持って来て、応急手当をした。そのうち四時半ごろ、軍人が通りかかったので、これに連絡することができた。

この連絡により、宇品の暁部隊の舟艇が川をのぼって来て、殿下を収容した。

宇品の凱旋館に収容され、軍医の診察を受けたときの状況については、佐伯司令官の記録(外傷みられずとある。)にあるが、そこから似ノ島の収容所に転送後、翌七日午後四時過ぎに逝去された。

李グウ公殿下は、朝鮮王最後の王世子李ギン殿下の甥にあたり、当時、古田町高須の前田別荘に約三か月滞在中・第二総軍司令部へ出勤途上において被爆したのであるが、このとき、猫屋町の憲兵分隊(光道国民学校内)勤務の柳田博憲兵准尉は、李グウ公殿下の護衛憲兵を勤めていた田辺憲兵軍曹が、馬に跨がったままで、相生橋から約五〇〇メートル先の十日市町電車停留所付近の倒壊民家の前で死んでいる現場を、七日に確認し、その死体を収容した。

李グウ公殿下の死去にあたり、お付武官吉成弘中佐はその責任を感じ、殿下の病室の前の芝生に正座して、ピストルで殉死したと言われる。殿下の遺骸は総軍の飛行機で、京城の自邸朴賛珠妃殿下のもとに届けられた。ちなみに、昭和三十八年十一月七日、朴賛珠夫人が来広せられ、相生橋上から、川に花束を投げて、故殿下の冥福を祈られた。

応急救護所の設置

本川国民学校は、爆心地に近かったけれども、鉄筋コンクリート三階建校舎で、外郭だけ焼け残っていた。ここが応急救護所にあてられ、翌七日から負傷者を収容し、軍の衛生班が治療をおこなった。

十五日、終戦になってからは、三滝の山小屋で治療活動を続けていた長崎五郎医師が、本川国民学校臨時救護所の所長に就任、医員には、大芝国民学校で活躍していた沓内一知医師をはじめ、長谷・後藤・大内各医師、及び大川・堀部・佐伯各歯科医師、田辺薬剤師、事務長には県立三次保健所事務長が任命された。看護婦は、壊滅的打撃を受けた県立広島病院の残存者その他から集められたが、祇園高等女学校の生徒も看護補助に活躍した。また、双三郡医師会など郡部から多数の応援医療班が到着して、救護が進められた。

更に、鳥取・島根両県からも応援医療班四、五人が、連日来て治療にあたった。大混乱もようやく静まったころ、米・砂糖・粉乳などの配給があり、負傷者や医療従事者に対して、古い軍服も配給されたが、火傷者に塗る油もすぐ無くなるというような医薬品の欠乏状態のなかで、長崎所長以下全従事者の涙ぐましい奮闘が続けられた。

道路の啓開

倒壊した家屋や飛散物で、いずれの道路もふさがれていたが、電車軌道だけは路面に障害物が少なく、わりあいふさがれていなかったため、避難者の道筋となったぐらいで、誰が整理するともなく路面が片づいていった。

また空鞆町の土手筋も同じように通行がはげしかったので、道は自然に整理されていったようであった。しかし、これらの道路は七日から八日にかけて軍隊が死体の収容をおこなったので、同時に路面の清掃がおこなわれたことになったのもあった。

元安橋 - 本川橋 - 堺町通りの国道筋も、軍隊や救援隊の手によってだいたい整理された。その他の道路は、郡部

や周辺地区から縁故者の行方を探しに出て来た人々が往来することによって、そのまま復旧された形となった。

また、復帰者が多くなるにつれて、これらの人々が、自分の住居の付近をかたづけたので、次第に細い道路も復元していった。

死体の収容・火葬

火災が一応終息した七日から、電車線路、あるいは川沿いの土手筋をはじめ、全地区にわたって累積し、散乱しているたくさんの死体の収容がはじまった。救援の軍隊が一、二分隊ほどきて、電車線路筋の広場とか、各寺院の庭などを収容場所として処理した。

これらの死体のうち、縁故者によって探し出され確認できたものは、各自がその場で茶碇にふし、遺骨を持ち帰った。確認のできない身元不明の死体は、軍隊が任意にとりどころへ集めて火葬し、遺骨はそのままそこに置いてあった。

死体は、かなりの日数を経て、瓦礫の下などから発見されたものもあったが、そのつど発見した人の手によって火葬にふし、遺骨はそまつにならないよう適宜に処理された。

火葬のおこなわれた主な場所は、清住寺・本覚寺・妙教寺の焼跡、および本川国民学校校庭などであったが、縁故者が探したものは、その死者の家のあとなどで焼かれたものも多い。

遺骨の安置と慰霊

死体収容後、六日の火災で焼死した人々の白骨が、風雨に晒されるまま、あちらこちらにたくさん散在していたので、空鞆神社境内に復帰してバラック小屋を作り、準世帯を構成していた一四、五人の人々が、九月上、中旬にかけてたんねんに收拾してまわった。その遺骨は、空鞆町の川土手にあったコンクリート製防空壕(家庭用の一坪ぐらゐの穴)を利用して埋葬し、その上に小さな御堂を建てた。そして、その年の秋の彼岸に四十九日の法要を営んだ。

本川法要会

以後、毎年八月六日、本川法要会の有志が集って、法要を続けていたが、月日がたつにしたがい、また町の復興が進むにつれて、当時の痛ましい記憶もうすらいだのか、法要に関心を持つ者が少なくなって来た。十三回忌の三十二年八月の法要の際、学区内有志の寄附金を募り、それを基金にして慰霊碑に改築し、本川法要会としての最後の法要を執りおこなった。そして本川法要会は解散したのであった。

現在では、八月の盆と正月には、有志が花を供えている。しかし、心ある人々の参拝も絶えず、供花が置かれ、いまでも犠牲者の霊は慰められている。

この慰霊碑に納められた約一、〇〇〇柱の遺骨は、市の復興が進んで来たので平和記念公園の供養塔と、寺町の西本願寺別院の納骨堂に分骨して納めた。

町内会の機能

なにもかも一瞬の壊滅で、町内会も全面的に機能を喪失した。

当時の町内会役員は、会長をはじめ各役員とも、国土防衛の責任上疎開することもできず、町内に踏みとどまって日夜活動していたから、町の壊滅と生命を一緒にした。

空鞆町西町内会三上丹次会長の一家六人は、河岸から舟で上流に脱出、六人揃って奇蹟的に無傷であったのに、一か月以内に六人とも全員死亡した(竹野兵一郎談)。

人々の往来

空鞆神社のある土手筋は、安佐郡・山県郡方面から出てくる人々の通り道となる要路であった。ちなみに当時広島市内に入る経路は、西部方面からは、己斐町 天満町 十日市町 紙屋町の道順であり、東部方面からは、広島駅 稲荷町 山口町 紙屋町であり、北部方面からは、横川町 空鞆町・鷹匠町の川土手沿い 相生橋 紙屋町と出るのが主な経路であった。

したがって、空鞆町の川土手を通る人たちは、ほとんどがバラック小屋に立ち寄り、縁故者の消息をたずねたり、用件を依頼したりした。

町内会再建

八月十五日、終戦になってまもなく、罹災者に対して市から見舞金が交付されることになったが、これには警察か町内会長の証明が必要であった。その必要に迫られて、とりあえず空鞆神社境内に居住するバラックに本川連合町内会事務所を設け、元空鞆町内会副会長高本光信が会長に就任し、ただちに地区内罹災者の証明書の取扱い業務を開始した。

この以後、地区内に復帰する者は必ずこの事務所を訪れ、いろいろの相談や依頼をしたのであって、あたかも市役所の出張所のような役割をはたした。

また、このころは、諸官庁・銀行・会社などの施設も焼失し、従業員の犠牲者も多かったため、復興初期は内部的建直しに全力が傾注されていたから、一般の窓口事務をつぎつぎ町内会事務所に依頼するようになり、事務所はますます多忙に追われることになった。

当時、郵便関係も大きな打撃を受けて、郵便物などの配達事務にはもっとも不自由を感じていた。

郵便局は市内の各局とも全滅に近く、局員も多くの犠牲者を出し、被爆当日が非番で被災圏外にいた者が僅かに生き残っただけの状態であったから、配達事務は渋滞するばかりであった。加えて、配達先の家が焼失して行方すらも判らない者が実に多く、配達しようにもできないのが実情でもあった。

それで、本川連合町内会事務所では、これら郵便物を預かり、区分箱を作って分類し、受取人が来るとか、あらわれるのを待っていた。また、郵便物を発送するときも、罹災者は事務所へ依頼したりしたから、局は事務所に郵便切手販売所を委託し、ポストも設け、現在の三等郵便局の役割もつとめた。

さらに、学校・寺院・神社の復興をはじめ、地区内の環境整備(焼跡清掃など)や、横行するならず者の警備なども活発におこなった。

翌二十一年の初めごろから各官庁・会社などの機能が一応ととのえられるとともに、郡部からの復帰者も急増し、各町に四戸か五戸のバラックが建った。それが次第に増加してきて、連合町内会事務所だけでは運営できなくなったので、それぞれの町を単位とする組を組織し、各組に組長をおき、その町の事務をとりおこなうことにした。二十一年末、この組織を発展的に解消し、あたらしく各町に町内会を設置した。こうしてようやく町内会機能が正常に復したのであった。

九、被爆後の状況

最初の復帰者

荒涼とした廃墟の八月十一日、空鞘神社境内に、焼け残った約四メートル高さの松の幹をそのまま柱に利用し、周囲に転がっている残材や板を拾い集めて、焼トタンぶきのバラック約一二平方メートルばかりのものを三戸建て、空鞘町内会副会長高本光信ほか三人が入居した。この四人が被爆後に復帰した最初の人々であった。

このように早く復帰したのは、十一日午前十時ごろ、偶然、高本ほか三人(このうち二人は親子)が、空鞘神社の前の川土手の上で出会って、お互い生きていたことを喜びあったのが、きっかけであったという。

三人は、物資欠乏のとき、親類や知人をたよって行くのも迷惑がかかるし、また行ったとしても長期間いるわけにもいかないのであるから、いっそこへ留まって、何とか更生するようにお互い力をあわせてやろうということになり、定住することにしたのである。

十五日の終戦日には、復帰者が一四、五人になり、バラック小屋も二、三戸増加して、少しは賑やかになった。

このころから物資の配給もはじまったので、いよいよ力を得て、準世帯を構成し、共同生活をはじめたのであった。

八月末日の居住世帯数

八月末ごろの地区内居住世帯数は、空鞘町一三世帯・鷹匠町二世帯・鍛冶屋町二世帯・左官町二世帯・堺町二世帯で、このほかの町には一人も住んでいなかった。

八工の発生

被爆後二週間もたったころから、八工がものすごい勢いで、焦土をおおうように発生した。

バラック内で食事をするとき、その茶わんにまっ黒くなるほどむらがってきて、追えども追えども逃げず、口のなかへ食物と一緒にはいったりしたほどであった。

夜は、トタンの屋根裏一面に、すきまのないほど止まっていたから、ありあわせの紙を細長く巻いて火をつけ、これで焼きおとすと雨が降るように床に落ちた。掃きあつめると死がい山をつくった。

外を歩く人の体には、必ず何百とも知れぬ八工が、どこということなくさばりついてたし、ようやく走りだした電車の中でも、天井といわず窓といわず、つり革にまでも止まっていて人を刺した。九月上旬ごろ、占領軍の飛行機が二回ほど、空から駆除剤を散布したので、それ以後はばったりいなくなった。

生活物資

八月十一日の復帰後、最初のあいだは警察が置いてくれた乾パンや、近郊から縁故者などを捜しに出てきた人々

が恵んでくれる物でほそぼそとすごした。八月十五日ごろから配給機構が整いだしたので、準世帯として配給を受けるようになったが、主食の配給のときは、当初は千田町の御幸橋のところにある配給所まで行かねばならなかった。炎天下、人影もあまりない瓦礫の荒野を、壊れかかってキキイと軋み鳴る小さな荷車をひいて、汗をふきふき、回りまわって取りに行くのは、空腹をかかえての、一日がかりの仕事であった。

十一月ごろ、本川地区内に、主食配給所の出張所的なものが開店したので、以後はここで配給を受けるようになり、重労働から解放された喜びを感じた。

十月中旬ごろ、被服の配給があった。ほとんど軍隊の払下げ品で、軍服・軍靴・生地などで、罹災者全員に行きわたるほどはなかったけれど、その後の二、三回の配給でやっとゆきわたり、その年の厳しい冬をしのぐことができた。

電灯

夜の明りは、とぼしいロウソクや、残材をかき集めて焚火をしたりして過していたが、二十一年はじめごろ電灯がついて、一種の安らぎを取りもどした。

人口増加

疎開世帯と避難者の区別はできないが、地区内への復帰状況は、実に緩慢であった。

その実情は、別添の「広島市本川聯合町内会日誌」に見るとおりである。

十、荒廃と復興

枕崎台風と阿久根台風

九月十七日の暴風雨(枕崎台風)に続く、十月の洪水で、地区の西方に隣接して西側を流れる天満川へ、堺町通りに架設された天満橋が落ち、さらに天満橋の下流にかかっていた電車専用鉄橋も壊れた。そのため己斐町方面から市中に通じる要路が、完全に断たれてしまい、市中に行くには、中広町を迂回して北へ行き、横川橋まで遠まわりしなければならないことになった。

復旧するまで、天満橋の北側に仮設したロープ伝いの渡し舟を利用した。また、地区は水害はまぬがれたけれども、郡部に疎開していた最後の家財を、疎開地の水害によって水につかったり、流失したりして無一物となり、落胆した人も多かった。

住む人

なお、地区全体が焦土のままに住む人も少なく、社会的な不安な事故も発生する余地すらなかった。住宅の復旧状態も前述のとおりであって、しばらくのあいだ、ただ空漠とした荒野の生活があるに過ぎなかったのである。

地区は全滅で、昭和四十二年現在まで生き残っている者は、八月六日当日、勤務先の関係や偶然の私用などで運よく被爆圏外にいた者がほとんどである。従って、戦後復帰して町を形成した人々の多くはそうした人が多く、それに少数の復員軍人と海外引揚者たちである。しかし、緩慢とは言いながら、市の中心地よりは比較的早く復帰者があり、復興も早かった。

特に学校や神社などの復旧はそのさきがけと言えるようである。

広島市本川聯合町内会日誌(抜粋)

広島市本川聯合町内会日誌(昭和二十年十二月吉日起・高本光信記録)は、昭和二十年十二月一日から昭和二十二年五月三十一日までの記録で、内容は主として、住民の転出入が個人個人について、そのつど記入されており、ところどころに、世帯数・人口数などの記入がある。

また、婚礼や妊産婦などの物資特配事項及び復員者・引揚者の世帯・人口などが記入されていて、当時の復興状況を知ることができる。

町会日誌による転出入人口の一覧表で見れば、原子爆弾炸裂から、その年の十二月十一日現在まででは、全地域内に三六世帯八五人が復帰していたことが判る。翌二十一年になると、ようやく復帰者も本格的なものとなりはじめ、一月二十六日現在で、五二世帯一二六人となっている。

五月、六月には福岡から集団転入があり、七月には相当数の復員者や引揚者の復帰、十一月には、また県下や県外からの集団転入があって、ようやく復興のきざしが見えはじめた。

二十二年になると、いよいよ順調にのびてきているが、転入のほか転出人口も相当あり、当時の生活状況が如

何に不安定なものであったかが判る。

次に掲げるものは、町内会日誌の転出入を除く抜粋であるが、婚礼や出産などが、焦土の中でも次々におこなわれ、新生広島の、たくましいうぶ声を示している。

本川聯合町内会日誌(抜粋)

昭和二十年 十二月一日現在

世帯数 三五世帯

人口数 八四人(男 五八人、女 二六人)

十二月十一日現在

三才~五才 二人、二才~一五才 五人、

一六才~六〇才 七六人、六一才以上 三人

合計 三六世帯 八六人

十二月十三日

米穀 十二月二十八日まで配給済

三八世帯 九一人

十二月十四日

醤油一人当 〇・五四リットル、

エビつくだ煮一人当一五〇グラム、

食肉一人当 三七・五グラム

昭和二十一年 一月六日現在

世帯数 四八世帯

人口数 一二九人

一月十九日 イリコつくだ煮 一人当 九〇グラム、油 〇・〇九リットル

一月二十六日現在

世帯数 五二世帯

人口数 一四七人

二月三日現在

世帯数 五九世帯

人口数 一五八人

二月二十二日勤労署厚生月報に関する件

記

復員軍人 前月まで 外地 陸軍二九人

外地 海軍三人

本月分 内地 陸軍三人 失業二人

外地 陸軍一人 失業一人 海軍一人 失業一人

合計 三七人

失業 外地 陸 二人 海 一人

内地 陸 六人

就職不能 女 一人

失業者

前月分 事務者 女二人 小商業者 男三人

工場労務者 男五人 労務者 男一人

本月分 事務者女 一人 小商業者 男一人

工場労務者 男二人 その他 女一人

計 前月分 男九人 女二人

本月分 男三人 女二人

三月十日

塩人口

九月 一二五人、十月 一五四人、十一月 一七四人、一月 一八三人、三月 二一五人、三月九日 二三五人
三月二十九日現在

世帯数 八九世帯

人口数 二八一人

四月一日現在

世帯数 八八世帯

人口数 二八一人

四月八日

婚礼用物資配給交付(吉 昇分)

六月七日

妊婦に付増量す(竹 サ 分)

七月二二日

妊婦に付増量す(穠 孝 妻ヨ 子分)

七月十六日

戦災者給与金の件(萩 英 分)

七月十九日現在

復員軍人 三九人 世帯数 一〇

引揚邦人 二人 世帯数 四

八月十六日

妊婦増量(中 直 妻分)

八月二十二日

婚礼の為物資配給交付す(山 花 分)

九月十日

砂糖の件(商工課扱)

老令者(六〇才以上)二五人

乳幼児(一才~六才迄)六九人

計九四人

九月十三日

妊婦に付き増量す(百 政 妻文 分)

九月三十日

結婚物資配給交付す(徳 茂分)

十月一日

妊産婦米穀増量す(桐 松 分)

十月四日

妊産婦に付き米穀増量す(岡 正 妻チ 子分)

結婚に付き物資特配す(伊 政 利兄分)

十月十八日

妊産婦に付き米穀増量す(吉 利 妻貞 分)

十一月五日

妊産婦に付き米穀増量す(占 山 郎方妻三〇子分)

十一月七日

妊産婦に付き米穀増量す(丸 昇 の妻豊 分)

十一月十八日

引揚者数 一〇世帯 六〇人

復員者数 二五世帯 二九人

10	39	9	8	1	1		4		7						6	1
11	26	16	19	32		1				79						
12	32	7	10	5					4	2					3	
S22. 1	77	10	21	6		1			10							
2	24	12	17	30	1	2	2	1					8			
3	60	3	9	6			4		6							
4	10		9	1		5		1	4							
5	21			1					6							

	市部から転入			県外から転入			不明	復員	引揚	転出	転入合計	
	呉市	福山市	尾道市	山口県	岡山県	その他県外						
S20. 10. 26											1	12.25 現在 68 人
11. 2											1	
4											1	
9											1	
10											1	
13											1	
15											1	
23											3	
25								1			1	
26											2	
29				2							2	
30											1	
合計				2				1			16	12.1 現在 84 名(35 世帯)
12 月						4		2	1	4	31	12.11 現在 85 名(36 世帯)
S21. 1	1							3	1	4	25	1.6 現在 129 人(48 世帯) 1.6~1.26 15 人増 1.26 現在 147 人(52 世帯) 1.27~31 13 人増
2										9	35	2.3 現在 158 人(69 世帯) 2.1~2.3 増減なし
3	3					1		2	8	3	82	3.29 現在 281 人(89 世帯) 2.4~3.29 105 人増
4				11		3		1	7	3	82	4.1 現在 281 人(38 世帯) 43 人増 4.1 現在
5				7		29	1	1	1	4	84	福岡より集団転入 27 人
6	1					54		3			112	福岡より集団転入 54 人
7						1		6	3	12	43	7.19 復員 39 人(10 世帯) 現在 引揚 21 人(4 世帯)
8						3		2	5	21	29	
9	1			4		9			5	15	102	
10	1	4		2		10			2	15	95	他に出生 2 人
11			1			30		1	5	40	210	他に出生 1 人 集団転入(御調 79 人、安芸 32 人 23 人) 集団転出 246 人
12	3			1		9			1	16	77	他に出生 1 人 在籍簿抹消 80 人
S22. 1	4		1	9		59	長崎集団(1)		1	22	119	他に出生 4 人 集団転入 42 人
2				11		3			12	36	123	他に出生 1 人 (集団転出 29 人)
3	4			3		12	36		8	31	151	他に出生 5 人 死亡 1 人 在籍簿抹消 3 人
4				7	3	13				32	53	他に出生 2 人
5				5		4				29	37	他に出生 5 人 死亡 2 人

一、地区の概要

基町(もとまち)地区は、広島城内の中国軍管区司令部を中心にして、地区の全域が軍用地であった。

爆心地からの距離は、西南端電車線路に沿う広島商工会議所付近(相生橋東詰)が〇・二五キロメートル、もっとも離れている地点は、北端の三篠橋東詰めで約一・四キロメートルである。

基町の起源は、毛利氏以来の広島城城廓の旧址を、広島の開基地ともいべき意にちなんで、明治二十年に新しく旧城廓内の地の総称としてつけられたと言われる。

城跡の天守閣は、ほとんど市中のどの方向からも眺められ、日夜市民の目にながく親しまれていた。それをめぐる内濠の蓮は、紅白の花を点々とつづり、セミ取りやトンボ釣りの子供が歓声をあげて、さわやかな初夏の風物詩があった。冬には、枯れた蓮の葉かげや石垣の投影を乱してカモやオシドリなどが遊び、真鯉が急に水面を叩いて跳ねた。黒ガネの大きな城門をくぐると、老松古杉が聳え立っており、厳しい冷気が迫ってきた。なお、日清戦争従軍記者として広島に来た正岡子規は次の一句をのこしている。

春暁や城あらはるる松の上

陸軍の概略

明治四年八月二十日、全国に新兵制がしかれ、広島城内に鎮西鎮台の第一分営が設置された。翌五年十二月二十八日、初めて徴兵令が公布され、六年一月九日の全国の鎮台配置改定により、第五軍曹広島鎮台となり、歩兵二個聯隊(歩兵第一一聯隊・広島及び歩兵第一二聯隊・丸亀)・砲兵一個大隊・工兵一個小隊・輜重兵一個小隊・海岸砲兵一個小隊(下関)を統轄した。

明治十九年一月、広島鎮台を第五師団と改称し、広島鎮台司令官陸軍中将野津道貫は第五師団長に任ぜられ、ここに新制度による軍部広島の基礎が確立した。

第五師団は、軍港宇品港の竣工と共に、次々とその機構を拡充し、明治四十年頃には、歩兵第九旅団(広島)・歩兵第十一聯隊(広島)・歩兵第二十一聯隊(浜田)・歩兵第二十一旅団(山口)・歩兵第四十二聯隊(山口)・歩兵第七十一聯隊(広島)・騎兵第五聯隊(広島)・野戦砲兵第五聯隊(広島)・工兵第葵隊(広島)・輜重兵第五大隊(広島)・重砲兵第四聯隊(広島忠海)を統轄し、以後、大正・昭和両時代を経てますます陣容を整えていった。

昭和十二年七月昔、日華事変(後・支那事変と改む)の勃発による第五師団(師団長・板垣征四郎陸軍中将)の出勤後は、留守第五師団および各聯隊補充隊が設けられ、第三十九師団をはじめ多くの師団・旅団を送り出した。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争への突入により、近衛師団・第十八師団と共に第二十五軍の基幹師団として、マレー作戦に参加し、翌十七年二月のシンガポール陥落まで終始勇戦奮闘し、その精鋭を謳われた。なお、昭和二十年四月に中国憲兵隊司令部(司令官・細川寛憲兵大佐)が設けられ、本部を基町の西練兵場南端に置いた。

被爆時の地区内所部隊

なお、原子爆弾被災時、基町地区内に所在した陸軍所部隊は、次のとおりである。

部隊名	通称号	部隊長名	所在地
中国軍管区司令部		中将 藤井祥治	旧留守第五師団司令部
中国軍管区 歩兵第一補充隊	(西部) 中国第一〇四部隊	中佐 須藤重夫	通称二部隊旧歩兵第二聯隊
中国軍管区 砲兵補充隊	(西部) 中国第一一一部隊	中佐 川副源吉	通称六部隊旧野砲兵第五聯隊
中国軍管区 輜重兵補充隊	(西部) 中国第一三九部隊	少佐 田島権平	通称一〇部隊旧輜重兵第五聯隊
中国軍管区 通信補充隊	(西部) 中国第一二一部隊	大尉 富岡善蔵	中国第一〇四部隊内
中国軍管区 教育隊		少佐 柳生峯登	広島城北側
広島聯隊区司令部		少将 富士井末吉	京口御門
広島地区司令部		少将 富司末吉	京口御門
特設警備 第二五一大隊	中国第七一六一部隊	少将 世良孝熊	偕行社内
広島地区 第二四特設警備隊	(甲神部隊) 中国第三二〇六〇部隊	中尉 三原清雄	中国第一〇四部隊内
広島第一陸軍病院		軍医少将 元吉慶四郎	西練兵場北側
広島第二陸軍病院		軍医大佐 木谷裕寛	太田川左岸三篠橋下

広島陸軍病院看護婦生徒教育隊		衛生大尉 花房光一	三篠橋東詰
第五九軍司令部	山陽三二二〇〇部隊	中将 藤井祥治	広島城跡
第五九軍 第二二四師団司令部	赤穂第二八三二九部隊	中将 河村参郎	基町
第五九軍 歩兵第三四〇聯隊	赤穂第二八三三〇部隊	中佐 友沢兼夫	中国第一〇四部隊内
第二二四師団通信隊	赤穂第二八三一二五部隊	大尉 吉光保夫	中国第一二一部隊内
第二二四師団輜重隊	赤穂第二八三三六部隊	中将 河村参郎	中国第一三九部隊内
独立混成第一二四旅団砲兵隊	鬼城第二八三六八部隊	大尉 山本信夫	中国第一〇四部隊内
独立混成第一二四旅団通信隊	鬼城第二八三七〇部隊	中尉 戸井功	中国第一二一部隊内
第一五四師団通信隊	護路第二二七〇八部隊	大尉 富依英男	中国第一二一部隊内
第一五四師団輜重隊	護路第二二七〇七部隊	少佐 萩原国雄	中国第一三九部隊内
第一五四師団砲兵隊	護路第二八三五六部隊		中国第一一部隊内
中国憲兵隊司令部		憲兵大佐 瀬川寛	基町(電車通り北側)

二、被爆前の概況

防空・防火態勢

広島空襲必至という緊迫した空気の中で、各部隊では本土決戦準備が着々と整えられていた。

市内では、地区司令部の小谷少将や県当局の指導によって、広い避難用地確保のための家屋疎開作業が次々と進められていたが、陸軍諸部隊においても、兵舎その他建物の天井をすべてはぎ取り、焼夷弾が引っかからないようにした。営内には幾つもの防空壕が構築され、部隊の兵船や重要書類その他を保管した。兵舎の内外に大きな防火用水槽を設置し、バケツを備え、当番兵が常に満水状態にしていた。聯隊区司令部などでは、二階の屋根(棟)に、厚板で通路を作り、要所に満水の四斗樽を置いていた。空襲警報の発令時には、兵隊がそこに上って待機した。

また、各部隊とも兵舎の周囲にタコツボ式防空壕や機銃座壕を掘り、空襲下の防衛に備えていた。

中国軍管区司令部

中国軍司令部は、城内の南端、内濠の石垣ぞいに、上空から見えないように土盛りした半地下式の鉄筋コンクリート造の大きな防空壕を構築し、空襲下の作戦本部・情報本部に使用した。また、重要書類の保管庫にもあてられていた。この壕内の指揮連絡室には、比治山高等女学校の三年生のうち約九〇人が動員され、三〇人ずつで班を編成し、三交替の昼夜兼行で、中国地方の監視哨・飛行場・高射砲隊などへの警報の連絡・気象の通報・その他各地部隊との暗号通信の送受などの任務についていた。

作戦本部室は、各師団の将校など多数がならんで見る電光板式の警報一覧用全国地図があり、この室の隣りが薄板で区切られただけの放送室で、夜になると、広島中央放送局から放送部員一人、アナウンサー一人・技術員一人計三人が不寝番で常駐していた。

疎開の実施

軍用物資は各地へ分散疎開して、万一の場合の戦力確保に努める一方、高級将校の多くも市の周辺か郊外に疎開居住していたと云われるが、中国軍管区司令部参謀長松村秀逸少将のように、あえて市中心部(上流川町の疎開空家)に居住し、不安に浮足だつ市民の心を少しでも落着けようと考えた軍人もあった。

聯隊区司令部の一部は、安佐郡可部町の願仙坊に疎開し、陸軍幼年学校(一年(四九期)約二〇〇人・二年(四八期)二三五人・三年(四七期)一七八人)は高田郡吉田町へ、また、広島陸軍借行社附属済美国民学校は双三郡君田村・同郡河田村へ疎開していた。

格部隊の状況

八月六日午前七時三十一分に警戒警報が解除になり、警戒配置についていた在広各部隊は、一斉にその配置を解き、八時ごろから次々とその日の作業に取りかかっていた。

各兵種補充隊にあつては、臨時動員部隊を編成中であり、第二二四師団(赤穂部隊)の各隊、独立混成第一二四旅団(鬼城部隊)の各隊、独立工兵第一一六大隊及び同一一七大隊、ならびに第一五四師団砲兵隊(護路部隊)などの要員を収容中で、各部隊とも多数の兵員を擁していた。

原子爆弾炸裂時、広島市内には約四万人近い兵隊がいた(昭和二十八年七月三十一日付中国新聞)と言われるが、当日朝の、陸軍諸部隊の状況は、概略次のとおりである。

(一)歩兵第一補充隊(中国第一〇四部隊)

八月一日ごろ入隊した応召兵が、午前八時ごろから兵隊教育や家屋疎開作業に行くため、一部が営庭に集合しつづつあった。まだ、屋内に多数の兵隊がいたが、陣地構築要員と陸軍戸山学校から体操の講習に来ていた将校及び下

士官たちは、半裸になってすでに集合していた。

また、この時刻ごろ、防衛召集兵(建物疎開作業要員甲神部隊)や新師団編成要員が続々と入隊していた。

(二)砲兵補充隊(中国第一一一部隊)

内地兵備のための第一五四師団の砲兵隊要員が、七月二十七、八日ごろから、引続き入隊中であった。

営庭には、演習作業のため逐次兵隊が集合中であったが、多くはまだ兵舎の中にいた。

(三)輜重兵補充隊(中国第一三九部隊)

五日の作業の関係で、六日は起床時間が約二時間延期され、八時から朝食となったので、ほとんど全員が兵舎内にいた。ただし、自動車隊は作業に出動のため、すでに営庭に集合中であった。

(四)中国軍管区教育隊

八月四日、集合教育のため、中国地方各部隊から集った見習士官約二〇〇人が、初演習で全員兵舎前に整列していた。

(五)広島陸軍病院

第一陸軍病院には、本院に職員五六五人・入院患者三〇〇人(第一分院は疎開済み)、第二陸軍病院には職員三三〇人・入院患者三〇〇人が、病院の特質上、ほとんど屋内にいた。なお、三篠橋東詰めの陸軍看護婦生徒教育隊にも、職員一七人・生徒一六人がいた。

三、被爆の惨状

天守閣崩壊の音

爆心地から約一キロメートルの範囲内に、広島城天主閣を取りかこむように並列していた各部隊の木造二階建兵舎その他すべての建物は、原子爆弾が炸裂した一瞬、フワッと宙に浮きあがったかと思うと、逆に地面に叩きつけられて、木端微塵に崩壊した。

この朝、いつものように兵二人を連れて、本隊(歩兵補充隊)から城の北側の陸軍幼年学校(疎開済み)内に分室していた軍医部に出向していた増本春男衛生上等兵は、公用で大八車を曳いて、朝日に光る天守閣を仰ぎ見ながら、幼年学校の校門を出たとたん、強烈な青白い閃光を浴びた。

体が宙に浮いた。「アッ！」と思うと、同時に三〇メートルばかり吹きとばされていた。

モウモウと舞いあがる砂塵のなかで、息のつまるような一瞬、聳え立つ五層の天守閣の崩れ落ちるもの凄い音が聞えてきた。それはちょうど、山頂から無数の木材が、一度に転げ落ちて来るように、ドドドドー、ドドーと不気味に地面に響き伝わった。

このようにして、戦国時代の勇将毛利輝元が築城以来三五〇余年、広島歴史をつぶさに刻んで来た国宝広島城は、あえなく崩壊したのであった。

各城門、櫓なども一挙に吹きとばされて火を發した。城門の中には、軍の重要文書がいっぱい積みこまれていたが、たちまち火炎に包まれていった。

松や杉・榎の大木もなぎ払われたように吹き倒され、あるいは引き千切られた。実に、強烈な爆風で、種々雑多な塵芥が舞いあがり、しばらくのあいだ暗黒にとざされた世界が、そこにあった。

濠のなか一面に、紅白の花をつづっていた蓮は、刃物で剃り取られたようにその葉を一枚もとどめず吹き払われ、倒壊した建物が廃材の塊となって付近に散乱し、到るところに兵隊や軍馬が軽々と投げつけられていた。天守閣は崩壊しても火災から免れていて、あとにただ廃材を積んだ石垣だけを残していた。城門や司令部・各兵舎その他の建物は火炎に包まれ、全くの灰燼に帰した。

ただ辛うじて、半地下式の中国軍管区司令部のみ、何とか残っていた。この地下の指揮連絡室には、前述のとおり、比治山高等女学校の三年生が通信員として出動して被爆した。

被爆第一報

この学徒の一人恵美敏枝(旧姓西田)の手記「通信室・終戦まで」(旧比治山高女第五期生の会出版・炎のなかに)によると「...六日、午前四時頃、一応警報がとかれ、師団長閣下以下皆自宅や兵舎にひきあげられた。そして七時過ぎ、また敵機が広島の上空へ近づき、警報が出され、その後日本海へ脱出し、旋回中ということで警報もとかれた。私達も交替で朝食をとり、帰宅の準備を始めていたが、その頃また『先の敵機が反転して広島県へ侵入しつつあり。』との情報でまた警報が電光板に出された。『八時十三分、広島県警戒警報発令』。私は宇品高射砲隊と吉島飛

行場への二つの電話に電送を開始した。その時が八時十五分。運命の時だった。私は受話機を耳にあてたまま、机の下に入っていた。一瞬、鈍い音がして電灯が消え、気味悪い静けさが続いた。それは長いような短いような時間だった。誰かの声をたよりに手さぐりで外に出て、友を探し求め、その姿に驚嘆した。

すぐ前にあった木も建物も皆こわされ、勿論、広島城も見えなかった。そしてなぜか息苦しく、ハンカチで口をおさえて、大本営跡の前へ急いだ。そこには私達と交替する人々が、朝礼の後で、ワラ人形を相手に竹槍の練習をしていたらしく、(倒壊した建物の)下敷きになっていた人は、手に竹槍を固くにぎっていた。その姿は本当に痛々しかった。誰もかれもすぐには名前を思い出せないような変りようで、ただあっ気にとられていた。そのうちに二部隊(歩兵補充隊)方面から火の手が上がって、みな城の裏の方へ逃げだした。」という状況で、もう一人の学徒岡ヨシエ(旧姓大倉)は、「...板村さんより一歩おくれて外に出た私は、一瞬呆然となった。今までであった司令部も、あっちこっちの建物も、ないではないか。ただの木屑と壁土が山になっているだけ。私は思わず濠の土手の上にかけるぼった。広島の街は...。その目に映ったのは、あまりにも残酷な瓦礫の町と化した広島であった。赤茶けた想像することもできないむごい光景を目にやきつけながら、私は、その時初めて、『大変だ。』と血のさがる思いをしたのである。下の方で、兵隊さんが『新型爆弾にやられたぞう。』と、どなっているのが聞える。私は元の部屋にかけ込んだ。そうだ、そうだ、まだ通話の出来る所へ早く連絡を、そう思いながら電話機を持った。九州と連絡がとれた。そして福山の司令部へ、受話機に兵隊さんの声が聞えるのももどかしく

『もしもし大変です。広島が新型爆弾にやられました。』

『なに新型爆弾！師団の中だけですか。』

『いいえ、広島が全滅に近い状態です。』

『それはほんとうか。』大きく割れるようにひびく声。その内に火の手があがったのであろうか。濠の上の草がパチパチ燃える音が耳に入った。

『もしもし火の手がまわり出しました。私はここを出ます。』

『どうかがんばって下さいよ。』と、兵隊さんの声を後に受話機をおく。再び外に出ると、炊事場のあたりでは、もう火がまわり、パチパチと木のはぜる音がする。その音にまじり建物の底から、女の人の助けを求める声が耳に入った。」という。わずか一五歳の少女ながら、炸裂下、沈着勇敢に自己の使命を貫いたのであった。まさに広島被災の第一報であって、室外に出ると、倒壊物の下敷きになり、もがいている兵士を助けだし、倒壊した大本営跡周辺の草につきはじめた火を叩き消そうと努めるうち、火が自身の周囲を包んでしまった。その熱気に耐えられず、大本営前の泥池に身を浸した。「パシパシに乾燥した髪、あつくなっている服、頭から泥水をかけても、一寸の間にカラカラにかわいてしまう。」という凄絶な光景の中で、突然、大粒の黒い豪雨を全身にあびた。一〇分か一五分かたって豪雨が止むと、また、逃げまどっている学友はいないかと探して歩いた。そして「...時間も何時間かすぎ、木も草も焼け切れて、日もくれかかった頃、一緒の班だった古池さんや、宮川さん森田さん達が帰って来た。再会を喜びながら、他県から救援に来られた兵隊さん達と一緒ににおにぎりを作った。そして負傷されても割合元気な方達に配る。私はおいしいと思って食べた。そういえば朝から何も食べていなかった。仮の収容所が幼年学校にできて、大本営跡の芝生に居られた兵隊さんもそちらへ移られた。背中に二〇センチ程の棒切れが突きささった青木参謀は、青ざめた顔で、看護兵の手当てを受けて居られる。

大の男の兵隊さんが脱脂綿を大き目に背中に当てて、力一杯棒を抜きとられた。見るまに脱脂綿が血に染まって少々では足りない。

色々な傷を見た。脳天に穴のあいた兵隊さん。脈打つたびに中の肉と一緒にヒクヒク動く。全身黒焦げで死んでいる兵隊さん。空をにらんだまま、目をむいて死んでいる兵隊さん。負傷した兵隊さんが、地の底からうめくような声で『おかあさん』と叫んでいるのが、暗い夜空に尾をひいて、まるで地獄にいるような思いだった。」と述べている。

松村秀逸参謀長重傷

松村秀逸参謀長の手記「原爆下の広島軍司令部」によると、松村参謀長は上流川町の官舎で被爆した。倒壊家屋の下敷きとなったが危うく脱出し得た。着物はズタズタに破れ、フソドシーつの裸であった。全身が血に染まる負傷であったが、まだ気づかないでいた。

襦一つのまま、倒壊飛散物で狭くなった道に出たが、全く変りはてた町に立って、西も東も見当がつかないありさま。運よく放送局の方から来た古田アナウンサーに出会い、案内を請うて、司令部へ急いだ。

地面に叩きつけられた幾つかの屋根をよじ登っては降り、降りてはよじ登りして、やっと電車通りに出た。緑色の電車が幾台も転がっていた。

各兵舎の炎上

西練兵場の東南角の土手(旧広島城外濠石垣)に登りついたころは、火の手が練兵場の周囲の建物からあがっていた。

西南の一角にある司令官官舎も火炎の中にあっし、歩兵営も砲兵営も陸軍病院も、黒い煙におおわれていた。偕行社は倒壊し、五層の天守閣は消えて見えなかった。

松村参謀長は、土手から練兵場へ飛びおりて、城門へと急いだ。

練兵場の中は惨憺たる光景である。演習中であつた兵隊たちは、爆風で吹き倒されて、圧死した者も多くいた。中には上衣をぬいで両袖をまくりあげ、体操をしていた部隊もあつたが、露出部分をまつ赤に火傷していた。あつちにもこつちにも重傷者が転がっていた。ほとんど立っている者はいたかつた。塹壕の中からは呻き声がきこえてきた。その中を禪一つの松村参謀長は、なおも軍司令部の方へ急いだ。

地区司令部の前に来たとき、建物はちょうど燃え落ちつつあつた。その前を、濠に沿って城門の方へ曲がつた。歩兵営からも、砲兵営からも、軍司令部からも、兵隊が、赤く焼けた両手を、幽霊のように胸の前に高く差しあげたがら、続々と飛びだして来た。

「中国軍管区司令部」と、肉太に書いた標札のかかつた城門は、今、黒煙を吐いて燃えていたし、司令部もまた、赤い炎を吐いていたという。

この地域は爆心地に近かつたので、閃光を感受すると同時に、みんな倒壊物の下敷きとなるか、または吹き飛ばされていた。気がついたときは体が物の残骸に埋まっております、爆発音や衝撃を感ずる余裕すらなかつた。

鳥取第四十七部隊から、広島城の北裏の中国軍管区教育隊に派遣されていた竹原精一見習士官も、当時の日記に次のようにその状況を記している。

「六日。前夜中警報下なりしも、〇八・〇〇解除、初演習のため、約二百名の全員舎前に整列す。〇八・一五乃至〇八・二〇の間と覚ゆ。二、三の者『BだBだ』と叫ぶ。上空に白くB 29 三機と認めし瞬間なり。パツと閃光あり、ヴワツと生温き(?)風に吹かれたる心地す。黒煙見たるものの如く、また見ざるものの如し。暫時、失神。我に返ればうつぶせに倒れいたり。砂塵濛々として咫尺を弁ぜず、失明せるやと疑う。『畜生!』と心に叫ぶ。瓦・材木等頭上に降り危険。顔面、妙にひきつる。砂塵、徐々に収まり、視界を得。互いに呼び合い三々伍々集まる。戦友の一人吾が背に火ありと言う。彼もなり。衣・襦袢を脱げば背部、焼け崩れ、皮膚の如をももの付着す。背の火傷を知る。自然と皆プール付近に集まる。この頃、顔の火傷に気付く。顔面・後頸部・火傷、ただれ居るものの如し。左手首より先、火傷のため水ぶくれしたるがつぶれ、皮膚だらりとはげ、砂塵など付着、血もにじめり。顔・後頸部・背・殆ど同じ状況ならんと思う。帽・眼鏡・刀・飛散せるも、帽の下、無傷の如し。左大腿部に火あり、自らもみ消す。ここも火傷。小浜・林田と遇う。共に相当の火傷なり。顔面の如きほとんど判別不能。背、謂い難く痛し。火の手方々より上がる。『大型油脂焼夷弾の直撃を受けたるものの如し』などと語る。うめき声、倒壊せる建物の下より聞ゆれど、我等また、両手自由を失い、軍靴にて蹴る位の事しか出来ず、それにて三名を救出す。この頃、火迫り背は殆ど激痛、立つ能わざる程なり。とに角火を避くべく、小浜・林田と共に退避す。市中、建物という建物すべて倒れ、避難の人々何処へ行くともなく一つの流れとなり、ぞろりぞろりと続く。いずれも百鬼妖怪の如し。(以下略)」と、その惨状をつぶさに伝えている。

また、歩兵第一補充隊(二部隊)四中隊の真田盛重二等兵は、朝食後、ほとんどの兵隊が建物疎開作業その他で出て行き、班内には僅かの病院下番がいたとき、野戦帰りの准尉が来て、野戦の様様を話している最中に被爆した。

パツと一瞬光って暗くなつた。爆発音は聴かなかつた。気づいて見ると小さい光線があり、「助けてくれ、助けてくれ。」という声がきこえた。「火がつく、火がつく。」という声がした。「お前の肩には神さんがついている。」と言つた母親の言葉を思いだした。材木をのけ、光線を頼りに這つて外に出た。兵舎は完全に押しつぶされていた。タオルが一枚落ちていたのを拾い、腰にまいた。浅野泉邸に近い裏営門の方へ歩いて行き、半裸になつた軍医に出あつた。呼びとめて、裂傷で血の噴き出ている顔を、タオルでくくつてもらつた。この裏営門めがけて、市民がなだれこんで来たので、北方の工兵橋の方へ逃げるように言つた。吹きとばされた裏営門の衛兵が、また元の位置へもどつて来て、鉄兜を被り直し、銃をとつて、その部署を守つた。真田二等兵が裏営門を出るときは、まだ火災になつていなかつた。兵営が火災に包まれたのは、少し時間が経つてからであつた。

このように建物の下敷きになったり、吹き飛ばされた兵士たちは、どうした理由かわからないまま、それぞれ一番近い脱出口を求めて待避した。各部隊ともあらかじめ緊急避難先が定めてあったから、おおむねその方向へ逃げて行った。牛田の工兵作業場には、工兵と野砲兵が比較的によくいた。

被爆直後、相生橋東詰から三篠橋東詰に至る太田川沿いの堤防上は、血だるまになった半裸・全裸の兵士たちで埋まった。もう命令も出ることなく、ただ北方(上流)の安全地帯を求めて、押しあいへしあい蜿々とその列が続いた。力つきて倒れる兵士が続出、最後の声をふり絞って「天皇陛下万歳」と叫びながら死んでいくものも幾人かいた。

また、三篠橋東詰の兵舎で被爆した広島陸軍病院看護婦生徒一六人も建物の下敷きとなったり、吹きとばされて、即死六人、他は全員重軽傷を受けたが、お互い励ましあって、多くは戸坂分院へむかって兵士たちと逃げた。

佐伯郡五日市町の自宅で、中国新聞社へ入社しようとしていて被爆した大下春男記者は、あわてて戸外に飛び出し、広島上空に高く昇る一条の黒煙を見た。折りよく来た廿日市警察署の救援トラックに便乗して、途中沼田・鎌倉両記者と同行し、己斐付近まで来たが、入市不可能で、三人は徒歩で猛火をくぐりながら新聞社へ行こうとした。その途中、陸軍兵舎の焼跡を通ったが、手記「歴史の終焉」のなかで、「三篠橋を渡って土手を南下する。この辺は陸軍の要地で、平素は地方人の通行を許さなかった所だけに、一般の罹災者は見受けられなかったが、兵舎はいずれもペチャンコになって燃えている。その間を負傷を免れた数名の兵士が忙しそうに立ち働いている。傷ついた者や死体の収容である。収容といっても入れる家も何もない。照りつける炎天下の道路端に、魚でも並べたように寄せ集めている。

衣類はまとっていない。真赤にふくれあがった身体、肱を張り足を曲げたさまは赤不動さんの彫刻のようだ。中には、まだ死にきれずかすかに息をしながら、わずかに目をしばたくだけの者もいる。

それが幾十となく転がっていて、痛ましさに目を覆って駆け抜ける。

兵舎をめぐるて聳えていた榎・楠・柳などの大木が到る処にひっくり返っている。真中からポッキリ折れたもの、真二つに引裂けたもの、根こそぎ引抜かれたように倒れたものなどさまざまである。煉瓦造りの兵舎もガラガラにやられている。

昨日まで威容を誇っていた広島城の五層楼、かつて天皇陛下が東宮殿下の砌り、全市を眺望されたあの広島城は跡形もなく、ただ高台に木材を投げ重ねたようにたっている。広島城を取巻いていた、樹齢数百年の老杉も全滅である。広島城一帯にあった師団司令部、明治天皇縁りの大本営跡も木端微塵となっている。

実に物凄い破壊力である。爆弾が落ちたというのが、狙われた中心地と思われる衛戍地にさえ、弾痕一つ見当らない。これはひょっとすると原子爆弾のようなものかも知れないぞ、と話しあった。

野砲隊のあった付近に来ると、馬まで丸ぶくれになって死んでいる。いかつい野砲も打ち壊されて残骸をさらしている。完全なものは一つもない。(後略)」という状況であった。

広島陸軍の壊滅

更に、重傷ながら生き残った松村参謀長の手記(前同書)には、広島陸軍の壊滅について、概略次のような事も記されている。

藤井司令官死亡

中国軍管区司令官藤井祥治陸軍中將は、官舎(西練兵場西南隅)の居室で、軍服に着かえて、刀を片手に部屋を出ようとしたときに被爆したと言われる。居室跡と思われるあたりに黒焦げになった遺骨が発見され、そのそばに金の総入歯と、焼けた軍刀が残っていた。夫人は庭の池をまわって、堀の下で半焼けのまま倒れていた。燃え残った帯の切れはしと、そばに落ちていた財布で、やっと判定された。

遠藤参謀被爆

遠藤参謀は、ちょうど城門脇の濠にそって、馬を走らせているとき、炸裂に遭遇した。馬もろともに、濠の中に投げこまれ、鎖骨を折ったが、重傷に屈せず、泳いで濠から上がり、砲兵隊の兵士に助けられて、東練兵場に避難した。

松村参謀長避難

また、司令部の焼け落ちるのを目撃した松村参謀長は、いったん近くの浅野泉邸へ逃れ、そこから川を渡って牛田の工兵作業場へ避難した。二〇〇人近くの職員がいた軍管区司令部は、今やわずかに四人。裸の松村参謀長を中心に、まったく敗残兵以上の姿でトボトボと歩いていったという。

須藤部隊長死亡

歩兵第一補充隊の部隊長須藤重夫中佐は、白島町の自宅から乗馬で部隊へ出勤する途上、電車白島線の終点付近(爆心地から約一・五キロメートル)で被爆し、馬もろとも強く吹き飛ばされた。放射線によって顔面と両手に火傷したうえに骨折という重傷であったが、屈せず歩いて部隊に駆けつけた。そして、雑然と倒壊している部隊本部の建物の下から、急ぎ御真影を探し出し、ひとまず近くの浅野泉邸(縮景園)に待避した。しかし、泉邸もまた劫火の襲うところとなったから、泉邸に沿って流れる京橋川の水のなかに立って、他の多数の避難者とともに難を避け、火災のおさまるのを待った。午後四時頃、火災も鎮まったので、焼け落ちた中国軍管区司令部(松村秀逸参謀長)に行き、守り通した御真影を渡すと、気力も体力もつきてその場に倒れた。須藤隊長は、救援兵によってただちに大野陸軍病院に運ばれたが、数日後に死亡した。

各兵舎・将兵壊滅

この日、旧広島城内の司令部を中心に、歩兵・砲兵・工兵(白島北端)・輜重兵の各兵舎は約一万人(死者・負傷者の推定)の兵員とともに壊滅したのである。また、これに隣接する広島第一陸軍病院・第二陸軍病院も倒壊炎上し、入院中の軍人患者が即死者五五〇人、重軽傷者九〇〇人あり、病院職員も七三八人の死亡者と、約二〇〇人の重軽傷者を出した。

最初の取材記者

六日、中国新聞社の大佐古一郎記者は、市外府中町の自宅で、異様な衝撃を受け、ただ事ならじと、急ぎ市内に向い、軍管区司令部に足を運んだ。到着時刻は午後三時か四時頃であったが、司令部の焼跡で、負傷した松村参謀長に出会い、そこで、最初の中国軍管区司令部の「正式発表」取材したが、持ち帰った流川町の本社も壊滅しており、ついに公表されなかった。

爪跡(抜粋)

松尾公三(当時・広島鉄道病院医師、被爆地、広島城跡)

「頭中(カシラナカ)A候補生以下七名ただいまより、幹部候補生集合教育に出発します。頭中」

この瞬間である。左斜後方より、略帽から衿首までと両手背に焼けつくような火傷感。

それだけしか覚えはない。原子爆弾投下である。西部第二部隊九中隊舎前。投下地点よりわずか一キロの距離で、原子爆弾を受けたのである。

...幹部候補生の集合教育出発のため、中隊舎前中央の前方一〇メートルの所に、私を含めた中隊幹部候補生七名が、一列横隊に整列していた。ちょうど東北方の向い左斜後方、すなわち南西方向から被爆したことになる。その時の服装は略帽・執銃・巻脚絆、背中に鉄帽を背負っていた。冒頭の号令及び報告は当番のA候補生の入隊後八か月の訓練に鍛えられた声である。八か月間のきびしい内務班生活の象徴の張り切った声、いや張り切らざるを得ない声である。

...五月にはいってからは広島にも、警戒警報、空襲警報がひんびんと加わり、数日に一回くらいは必ず警報がなり、そのつど、ただちに武装の上、かけ足でそれぞれの部所につかなければならなかった。一キロ離れたB国民学校では二、三回敵機の鋭い爆音と共に機銃掃射を受けたことがある。

徳山が空襲にあい、呉がやられ、ことに呉の空襲の時は東南方にかすかに延焼する煙が見られ、徳山の時は、その上空で撃墜された米軍機からの落下傘で脱出した米兵二人が広島へ護送され、部隊の重営倉に収容されたのを、戦意昂揚と見せに連れて行かれたことがある。

...首と手の灼熱感。それから全く覚えがない。爆風で数間とばされていた。数分後に気がついたらしいが、あたりは光一つない暗黒の世界に変わっていた。気がついて起き上がったも何も見えない。

それこそ、キツネにつまされたような気で立っているうちに、だんだんと明るさが帰ってきた。一面の煙が天をおおい、地をはっている。いっさいを暗黒にした煙は、爆風で一挙にくずれ落ちた建物の土煙りであった。

土煙りが沈んで行くにつれ、周囲はだんだんと前の営内に返って行くが、すべての建物は全くなくなっている。

正面に立っていたはずの中隊二階建ての兵舎はペシャンコにつぶれ、あたりの他中隊の兵舎はもちろん、堀越しに見えていた民家も、「およそ建物という建物は全く消え去っている。薄暗く土煙りの立ちこめる中を、黒い人影が夢遊病者のようにウロウロしていた。背中焼けつくような熱感。手をやってみると、何とカーキ色の上衣が焼けて、きなくさい煙を出している。あわてて上衣をぬぎ、くすぶっている火を消す。二〇センチ大のやけどり

が三か所もある。痛いので背中に手をやると、ツルリとうすい皮がはげた。火傷だ。

首も両手もひどい火傷、略帽の下から衣衿までの間が髪がちぢれ、首は一面に第二度の火傷でズルズルと皮がはげる。両手も同じ。

左手の時計のガラスがとび、八時十五分で止まっている。あの原子爆弾爆発の一瞬、その爆風はわれわれを二、三間吹き飛ばして気を失わせたのである。右手でささえていたはずの三八式小銃は一メートルほど向うに飛び、整列直前に堅く巻いた脚絆は半分とけ、略帽もとび、背中の鉄帽も背中からなくなっている。「いったいこれは何だ。」もちろん、原子爆弾とはわかっていない。

「火薬庫の爆発？」

うす暗い中を兵隊が同じ思いだろう。皆、右往左往していた。「おい。どうだ、おれはもうダメだ。」

とびついて来たのは、隣の中隊の衛生幹部候補生のEである。真っ黒な顔、わずかに見える顔のりんかくと声からEだとわかるが、声を出さないとちょっとわからない。焼けただれた中に目玉だけギョロギョロのひどい姿だ。

「うん、おれはけがはないが、大火傷だ。これはいったい何事だ？」

「しっかりな、衛生部へ行こう。」

E候補生と一緒に歩きながら、これから一体どうするか考える。悲しいかな兵隊だから、こんな場合とて行動の自由ばない。自由行動をして、あとで重営倉入りはおもしろくない。まあ、衛生部まで行けば何とかなるだろう。背中の火傷も手当てができるかも知れない。建物という建物はいっさいがくずれているのだから...また、衛生部のほうが中隊より火薬庫に近いのだから。

そうこうするうちに、E候補生とははぐれてしまった。

「M候補生！助けてくれ、背中をやられた、痛い、どうなっているか見てくれ。」すがりついてきたのはF上等兵である。いつもかみつくような口のきき方をし、しゃべるときには「ツバ」を口中いっぱいにとってダミ声を出す精悍な古参上等兵が、あわれな声を出した。

顔もからだも真っ黒であるが、特長のある鼻と声で彼とわかった。

うしろを見ると、背中首から腰まで一面の大火傷、背中全体のヒフがペロリとはげて腰に下っている。真っ赤というより、赤黒い表皮の色。これはひどい。目が当てられない。

「しっかりしろ。」と、から元気をつける声をかけてみたけれども、相当なものだ。これだけの火傷を受ければ生命の危険もあろう。(昭和二十年も春ごろになると、いよいよ軍隊も物資欠乏したと見え、倉庫の中から、いろいろの古物が出てきた。もっとも、それまでにすでに、軍人の魂である小銃は数少なくなっており、弾丸をこめる所をおおっている遊底おおいの姿を消し、小銃を肩にかつぐときに右手でささえる鉄の床尾板も木製に変わり、ごぼう剣の鉄製のサヤは木か竹のサヤに姿を変え、水筒は竹筒になっていた。むろん新しく編成される新部隊には、新品が支給されていたが、われわれが使用する武器には、省略できる所はできるだけ、はぶかれていた。

武装器具がすでにそうであったから、服装はさらに簡略化されていた。新しく支給された軍服は、日清日露戦争時代のものではないだろうが、相当古いものに相違ない。軍服の色も赤味がかったカーキ色、開襟えりでなく詰めえりの上衣を着せられた。昭和時代でなくおそらく、大正末期のしろものだろう。

五月ごろになると、営内にてじゅばんなしの裸でよし、営内靴なしのハダシ通行よし、ということになった。あるときは、今まで支給されていた軍服・肌着の中の程度のよいものが回収されたこともある。服装にやかましい軍隊としては、ちょっと、想像もつかぬ事態であった。原子爆弾投下は八月盛夏である。多くの兵隊は上半身裸、靴なしで営内を通行していた。)

一閃の光が私の上衣を焼き、その下の背中に火傷をおこさすような原子爆弾の熱線が、まともに裸のヒフにあたればどうなるか。背中一面の大火傷、その表皮がはがれるのも当然である。

まわりの兵隊はゾロゾロと営門を出て行く。もちろん、衛兵もやられたらしく立哨していない。旧浅野泉邸前にある裏営門である。

そうだ、あの集団について行くに限る。

多人数ならあとで何の罰則があっても何とかだろう。皆について営門を抜け、電車通りに出て左へ曲がる。右に行くと広島市の中心地に出、左へ曲がると白島を経て郊外へ向う。

電車通りの左側は兵営、右側は人家のはずであるが、すでに家という家は完全に倒壊、関東大震災の写真と全く同じでいっさいが倒壊、ところどころから火煙が出ている。私のカーキ色の軍服さえ発火しているのだから、黒い

ものにはすぐ火が出るに相違ない。倒れた屋根の上で数人の人が右往左往して何か叫んでいる。多分家の下に人がつぶされているのであろう。

しかし、こんなことにかまっている者はいない。私を含めて広島市民全部が一種の虚脱状態に落ち入っていて、思考力というものが全く消え去っていたのであろう。

私が医師であるという証明書も兵隊であるという証明書も、いや人間であるという証明書すら、こんな場合には何の役にも立たぬ。

...虚脱者、異常人となった集団は、白島の電車の終点を通り、G橋に出、橋を渡らず左に折れて土手を川上に向かって歩く。(以下略)

中国軍管区司令部発表

大佐古一郎(当時・中国新聞社政経部記者)

原爆が炸裂した直後、私は爆心地から約五キロメートル離れた市外府中町の自宅を飛び出したが、西練兵場にたどり着いたのは、何時ごろであったろうか。

市街地の劫火は、ようやく下火になり、電柱や大樹がブスブスとくすぶっているころ - おそらく三時か四時であったろうか。

私は、ひたすら師団司令部へ向かって歩いて行った。

朝からトマト二、三個のほか、水道水以外は口に入れていなかったもので、だだっ広い西練兵場へ着くと、ホッと空腹を覚えた。歩兵第一補充隊(一般には二部隊と呼んでいた)前の芋畑で、小さな芋でも掘り出して、腹につめておこうかと畑を見わたしていると、傍らに倒れている男が、「ヘイタイサーン...ヘイタイサーン」と、私を呼んでいる。

近くにある防空壕の入口には、虫の息のような生存者や死体らしいものが見られたが、傍らのこの男は、壕へいく気力もないほど重体のようである。顔や両腕は火傷で糜爛し、上半身は焼け残ったポロポロのシャツで、脇腹と腹部がおおわれている。下半身を包んでいる国民服のズボンや巻脚絆・短靴がやっと被爆前の市民姿を想像させ、この老人らしい男は、おそらく、今朝二部隊へ入営兵を送ってきた地方の人だろうと思われた。

私の服装が、かすかに開かれた老人の目に兵隊のように映ったのであろう。

「何ですか？」

「すみませんが、顔へ陽除けをして下さいや...、熱うて熱うて...火の中におるようなけエ...」

なるほど焼けただけた上半身へ、灼熱の陽光がさんさんと降り注ぎ、めくれ上がった顔や手の皮膚は、すでに炒り上げられたようにカラカラになっている。

私は"これはひどい、暑いことだろうなア..."と思って、付近に板かトタンは無いものかと探してみたが、吹き飛ばされてきたものもない。壕をのぞいていると、「ヘイタイサーン...私のカバンの中に日の丸の旗がはいっとるけエ、あれを顔へかけて下さいや...」という。

私は木切れを二本ほど拾って、老人の頭と胸の横に立て、その日の丸を結びつけて遮光した。

「ありがとうございました。ついでに水を下さいよ。」

「水を飲むと死にますで。元気を出していなさいよ。あんたどこから来たんでしゃア。」

私は老人に水筒の水を一口飲ませながら聞くと、五日市の海老塩浜だという。

「そりゃー近いけえ、まもなく助けにこられますよ、頑張るとるんですゾ...。」

「何とお礼をいってええやら、お名前を教えてつかアさいや。」

私は社名と名前を告げ、激励のことばを残して、そこを離れた。

十日ほど経って、五日市に住む同僚の大下記者が「近所の牧野という人が、被爆二日後に息を引きとったが"中国新聞の大佐古さん"を繰返していたから、家人からよろしく伝えてくれといわれた。」そうである。「あのような場合は些少の親切も"地獄に仏"ほどの尊いものであろうか。」と、そのとき大下記者は語った。

被爆直前までは銃剣をかまえた衛兵と、衛兵司令のいた師団司令部の表営門はすでに無人となり、楼門も焼け落ちている。私はここに入ったとたん、前方の芝生の上に変った人がいるのを見た。

血色のよい身体に傷ひとつない大男が、パンツ一枚で横たわっているのである。

近寄って見ると、外国人である。アメリカ人がイギリス人の捕虜のようである。針金でうしろ手にしばられ、右脇腹を下にうつ伏せ気味のこの捕虜は、眼を閉じているが、呼吸はしているようである。美しい胸毛ががすかに動

いている。

「ハロー アー ユー アヤンキー？」

かすかに目を開いた。

「ホエアー アー ユー フロム？」

何も答えない。内臓でもやられている重傷者かな、それとも私が兵隊のような服装だから、殺す以外は何もしてくれぬとも思っているのであろうか。

それにしても町中の人々が、一人残らず負傷しているか死亡しているのに、この素裸の捕虜はまったく無傷とはどうしたことであろう。

司令部の中に重営倉があるということは聞いていたが、その地下壕にでも収容されていたのが、衛兵が死亡したり負傷したりしたので、ここまで逃げて、誰れかに捕えられてほうり出されたのであろうか。私はこの捕虜はアメリカ兵であろうと思った。

六月末であったか、B 29 が一機、広島上空で撃墜され、そのときの捕虜二人が師団司令部に拘引されたという話を聞いていたが、その一人かも知れないと、思われた。

そのとき、西練兵場の方から、お城の橋を渡ってくるカーキ色の軍服が見えたので、私は司令部の方へ足を運ぶことにした。

後日、相生橋の上で、しばりあげられた捕虜の死体に「叩け」という意味のことを書いた紙ぎれと棒が添えられていたのを見たという話を聞いた。しかし、この捕虜は私の見た表営門の捕虜とは別人のように思われる。

完全に灰となった木造の司令部前の石に、見慣れた顔の松村参謀長は、腰を下ろしていた。三角巾で首に吊るした右腕は、繻帯に巻かれ、はだかの上半身にはガラスの破片で受けたような傷あとが点々とあり、短袴と長靴だけが少将の姿をとどめていた。参謀長は案外元気に答えてくれた。

「西部軍も中国軍管区も、えらい人はみな戦死らしい。動けるのは俺一人のようだ。大本営の指示があるまで、わしがこちらの責任者になってしもうた。...上流川の官舎で家の下敷きになって、このざまだよ、とにかく動けるよ。...ときに何か情報ははいつらんかね。」

「私の社も全滅の模様で、軍事記者も殉職したかも知れません。とにかく、この広島の模様を広島師団の正式発表として報道させて下さい。」

「そうだね。この状況は国民に知らせる必要がある。」

と言って、しばらく考えていたが、ポツリポツリと口伝をはじめた。

「"中国軍管区司令部発表"だね。"六日午前八時ごろ敵 B 29 二機は"、この二機は重要なところだな。"広島市を攻撃、落下傘により新型爆弾を投下..."、そうだな、どの程度というべきかな...」

「"広島市は全滅"ですか。」

「ばかなことをいえ。"市内に相当の被害を生じたり"だ。」

私はメモを復唱し「お元気で...」と、参謀長に敬礼して、先ほどの道を引返した。

表営門の捕虜は、前と同じ姿勢で横たわっていた。西練兵場の防空壕の横には、荒廃した周囲の風景や雰囲気とまったくそぐわない、あの日の丸の旗が、陽光に赫々とあざやかな色を浮きあがらせていた。

司令部発表のメモを持って本社に到着すると、無人の社内は什器や紙類がまだ燃えており、熱気がビル内に充満していた。社の正面にあった社員寮跡を誰かの消息でもと思って、火炎をさけながら掘っていると、電車の線路の上に横たわっていた死体らしい一つが、かぼそい女の声で私の名を呼んだ。

近づいて見ると、顔面を目・鼻・口とガラスで縦に裂かれた若い女の子で、さきほど、私は社に関係のない人だと思って見過ごしていた人物であった。

「私はタイピストの磯崎です。編集局でやられ、腰を折っているので、ここまで這いだし、十字路のまん中で、火の消えるのを待っていました。」

断末魔の形相は、いまにも消え入りそうな声で話す。駅の方は安全だから逃げようと言ったが、すでに体力も気力もなかった。

私が伝えた司令部発表の第一報は、磯崎芳子さんの冥途のみやげになり、この世ではついに発表されなかった。

四、被爆後の状況

ただ廃墟

いかめしく建っていた軍管区司令部も、朝晩気合いの入った声に溢れていた各兵舎も、兵士がむっつりと銃をかかえて動哨していた弾薬庫も、樹齢数百年を経て、ご神木のようにメ縄が巻いてあった菅庭の楠の大木も、すべて消しとんでしまっていた。赤黒くただれた石垣と建物の土台石だけが残り、へちゃげた鉄兜や、曲がった帯剣、金属部分だけになった黒焦げの銃、車輪だけが半分焼け残っている砲などが、無秩序に崩れ落ちている瓦礫と共に散在し、そのなかに点々と兵士や軍馬の死体が転がっていた。その上を真夏の烈日が容赦なくカンカン照りつけた。

臨時救護所

火災の中から脱出しきれなかった重傷者も多く、西練兵場をはじめ、陸軍幼年学校跡や陸軍病院跡、三篠川堤防、あるいは大本営跡付近に、救援兵による天幕張りの或いは焼トタンで囲んだ急造の臨時救護所が設けられて、つぎつぎに収容されていった。しかし、少数のこれら救援隊の手にあまり、治療を受けないまま、死んでいく者も多かった。また、治療といっても、その言葉をはばかりほどの単純なものであり、それも外来の救援隊の手持医薬品であったから十分な活動はできなかった。

死体の処理

松村参謀長は、七日朝、一泊した牛田の山を降りて軍管区司令部跡に再び行った。司令部の本館は、玄関口のコンクリート造りの残骸があるだけで、完全に焼失していた。

その他、講堂・食堂・宿舍・倉庫など幾棟もの木造建物は跡形もなくなり、その焼跡には黒焦げの骨が点々と転がっていた。生き残った三〇数人の証言により、それが誰の遺骨か、ほぼ見当をつけた。無残な姿に変わり果てた死体は、司令部の裏庭に穴を掘り、腐材を積み重ねて茶毘にふした。それらは一つ一つ応急の骨箱に入れて名札をつけた。

建物としては、比治山高等女学校の動員学徒が、「広島全滅」の第一報を通信した地下作戦室と防空壕だけが健全であったから、これらの遺骨を防空壕に安置した。

緊急処置

一方、壊滅的な打撃を受けながらも、なお戦争遂行中であったから、軍事基地としての広島の都市機能の、早急な回復をはかる必要があった。そこで、まず倒壊物や雑多な飛散物で通行不能に陥っている主要道路の啓開を実施することになり、急遽来援した宇品の暁部隊を主体に、西条、八本松から来た軍管下の部隊などによって、その作業を

おこなうことにした。

同盟通信社の中村敏記者が、司令部を訪れたとき、松村参謀長以下一五、六人の重傷将兵らは、どこからか古ばけた机二つ、椅子三つを集めて、その上に携帯用のテントを五、六枚つなぎあわせて、地下作戦室の前に、軍管区司令部を設けており、「もうすぐ、青い目の人形がきて、日本を荒すかもしれん。日本の婦女子だけは、お互いに守ってやらにゃならん。」と、参謀長が言ったという。敗れ果てた司令部であったが、生き残った将兵は、重体ながら頑張っていた。

軍の再建はかる

また、壊滅した陸軍諸部隊の再建も緊要な問題であった。

八月九日、天幕の軍管区司令部に経理部の軍属守木豊一業務手(動員関係担当)など、生き残った職員一〇人ばかりが集合して、暁部隊を除く在広諸部隊の生存兵員を調査したところ、各部隊からの報告を合計してわずかに七〇〇人という状況であったから、兵員補充のため、山口・鳥取・岡山から応援部隊の派遣を求めた。

守木業務手は、また県下各地に疎開していた軍需品の種目・数量などを、連日、トラックで調査してまわり、軍の再建に備えた。比較的被害の少なかった被服廠・兵器廠・糧秣廠などや、たまたま出張していて助かった将兵が、次第に集って来たが、敗戦の憂色は濃く、暗然とした空気がみなぎっていた。

ロシア参戦の報

八月十日、東京から原子爆弾の災害視察団が来広し、軍司令部の天幕のなかで、松村参謀長らと話しているとき、ロシアが昨暁参戦したという新聞電報が来た。

広島へ来任する前、大本営の報道部長であった松村参謀長は、すでに戦局の見とおしについては、何もかも知っていたと云われるが、ロシア参戦の報に、一層暗い複雑な心境に陥ったという。

混乱続く

十二日、陸軍次官から軍司令官あての親展電報を受取った。

軍司令官代理を勤める松村参謀長が開封してみると、「大勢は再び抗戦に決しそうだから、そのつもりで」というような意味のことが書いてあったが、「これは東京がゴタゴタしているな、いよいよ終戦」ということを直感したそうである。

終戦

八月十五日、軍の本土決戦の決意もむなしく、ついに終戦となった。この頃、松村参謀長は被爆の傷が化膿して動けなくなり、半壊のまま焼け残った千田町の吉村宅の二階を借りて療養していたが、同盟通信社からの情報を得ていたから、慎重にその成行きを見守っていた。また、この日は被爆死した軍管区司令官の後任として、谷寿夫中將が着任する日でもあった。

松村参謀長は、その手記(前同書)に、「案の通り、東京からはいろんな指令が来た。書類を焼いてしまえというかと思えば、絶対に焼いてはいけない、よく整理しておけと言ってくる。兵器は焼却してしまえと言ってくるかと思うと、そろえて出せと言ってくるという具合だった。とにかく、終戦の混乱を理性の制御のもとにおくことは、なかなかムツカシイことだった。だが、焼けた広島は、ほとんどこの指令の圏外にあった。」

と記している。

重要文書焼却

このような状況の中で、守木業務手らは、残存する師団の重要な文書を集めて、連合軍が進駐する前に、すべて焼却した。

軍の解散

翌十六日、停戦命令が発せられ、引きつづき復員命令が出されたが、原子爆弾の一撃によって在広主要部隊は、すでに解散したのも同然であった。

しかし、公式には、九月二十六日に砲兵補充隊、及び輜重補充隊。十一月一日に歩兵第一補充隊、及び通信補充隊が復員したのである。なお、その他の残存部隊では、中国軍管区隷下の工兵補充隊は十月四日、広島地区第二特設警備隊は十月九日に、それぞれ復員解体された。

中国軍管区司令部は、九月一日に広島城内の焼跡から、佐伯郡五日市町の岩国燃料廠五日市出張所跡に移ったが、十一月末、一たん廃止されて、新たに第一復員省中国復員監理部として、業務を開始した。

広島聯隊区司令部は、十一月二十一日に安佐郡可部町の可部高等女学校で解散式をおこなった。

ちなみに、陸軍船舶司令部隷下の諸部隊は、少数の終戦処理要員を残して、そのほとんどが九月中に復員した。また、第二総軍司令部は、九月十七日に市外船越町の日本製鋼所広島製作所に移り、続いて大阪に移動した。また、全国の軍隊に対して降伏と武装解除を命じた大本営も、十一月三十日に廃止された。

開拓団の用地となる

広大な軍用地、基町地区は、ただいたずらに寒風の吹くにまかせる廃墟の上に、寂莫として昭和二十一年を迎えた。

この頃、外地からの引揚者が、連日、帰って来ていたが、住むに家なく、また働く会社も工場もなかった。

春ころになって、中国北京からの引揚者新見正団長を中心に、八人の同志が、西練兵場の紙屋町入口付近に、バラック小屋を建てて、西練兵場の開拓をはじめた。その努力が、またたく間に約六反の耕地となり、夏には、ナス・トマト・キュウリなどが、みずみずしく実った。更に一年たつと、約二町歩の広さになり、貴重な食糧としてのサツマ芋が美しく植えつけられた。食糧事情がいよいよ窮迫し、広い軍用地のあちこちにバラック居住者の開墾した自給菜園が、青々と茂るようになった。

復興進む

こうして昭和二十三年を迎えると、広島市の復興計画も進んでいき、市営住宅が次々に建設され、かつて砲車や馬蹄の音に明け暮れていた基町界隈は、平和な市民の町として生まれかわったのである。

三月初めごろ、すでに営団・市営の住宅一、二〇〇戸が建ち、一、四五〇人余りが居住しており、食糧品店や医者・理髪店などが繁盛して、更に七〇〇戸が建設されつつあり、市は五か年計画で、この一郭に八、一六〇戸の建設を発表した。ちなみに、川ぞいに不法住宅(バラック街)がひしめくほど建ちはじめたのは、少し遅く、昭和二十四年頃からであった。

また、西練兵場跡から広島城跡にかけての平坦な広場には、幅員一五メートル、四〇メートルの大道が縦横につ

くられた。これを幹線道路として、この地区は県庁その他の官庁街に指定され、その他の広大な城跡は緑地帯となり、西北部には、高等・地方裁判所、検察庁が建てられることになった。

さらに、元陸軍病院跡近くには、広島児童文化振興会その他の文化、教育の諸団体、有力者の協賛で、平和都市広島の未来をえがくシンボルのように「広島児童文化会館」の建設が進められた。

中国新聞(昭和二十三年五月四日付)は、その模様を次のように報道している。

「伸びゆく平和の子たちへ、ゆたかであたたかな心の泉をあたえようと、昨秋着工してこのかた、世界の注視をあびつつ五ヶ月余、装飾も鮮かにデビューする児童の樂園、広島児童文化会館の晴れの開館式は、三日午前十時から同会館大ホールで、C I E 顧問ハワード・ベル博士ら来賓多数を迎え、児童の胸躍らすなかを盛大に挙行された。管絃楽"ローエソグリン"の調べがたかまると、まず児童代表草津小学校神重正君の開式の辞にはじまり、佐伯館長の式辞、祝賀メッセージの披露があり、皇太子殿下御守贈品が和久田副知事から川本修三君(袋町小学校)ら児童代表四名へ伝達され、高師付小六熊野英一君らの"感謝とよろこびの言葉"があり、寺地委員長から建設経過の報告、女児童代表から感謝胸飾贈呈の後、ベル博士・クロワード広島軍政部長代理ベネット大尉・文部大臣代理坂本事務官・知事代理和久田副知事・浜井市長・寺田市会議長らの門出におくる祝辞があり、児童代表矢賀小学校山田正広君の開式の辞をもって"広島復興の歌"の奏楽に、正午意義深い式を終えた。午後はひきつづき同大ホールで記念講演・記念音楽会・舞踊をはじめ・赤十字デーの各種行事など開館を祝う"文化まつり"が多彩なプログラムをくりひろげた。」

なお、数年ののち、基町市営住宅街では、夜な夜な、進軍ラッパを吹いて行く兵隊の靴音が聴えるという怪談が生まれた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

白島九軒町、白島中町、白島北町、東白島町、西白島町、二葉の里、二葉の里一丁目 二丁目 三丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、白島北町[はこしまきたまち]・白島西中町[はこしまにしなかまち]・白島中町[はこしまなかまち]・白島東中町[はこしまひがしなかまち]・白島九軒町[はこしまくげんちょう]・東白島町[ひがしはこしまちょう]・西白島町[にしはこしまちょう]・二葉の里[ふたばのさと]とし、爆心地からの至近距離は、広島城北側の濠付近で約一・三キロメートル、もっとも遠い地点は、工兵橋西詰付近で約二・五キロメートルである。

白島地区は、広島デルタの北部に位置し、太田川本流(三篠川)と、その分流神田川とに東西から囲まれている。二葉の里地区は、標高一二三メートルの二葉山南麓一帯の地域で、神田川を隔てて白島の東対岸にあたり、常葉橋が、白島と二葉の里を結んでいる。また、北方牛田方面へは工兵橋・神田橋により、西方三篠方面へは三篠橋によって通じている。

国鉄山陽本線は、広島駅から二葉の里を経て西へ向い、神田川鉄橋をわたって白島の中央部を横断し、三篠川鉄橋に出て、横川駅に達している。

市内電車白島線は、中央部八丁堀から発して白島に至る路線で、白島終点は戦前は、現在の場所よりも南方約二五〇メートルの所にあった。

白島地区は、広島の市域形成の上で大きな役割を果たした歴史的にも古い地区で「白島は往古箱島と書せり、五箇荘の一なり」と、旧史にもある。封建時代は広島城の北側をかためる要衝の地にあたり、一帯が士卒の屋敷町であった。その地域性は明治から大正・昭和と、被爆時まで受継がれていて、メジロやウグイスの鳴く閑寂な住宅地区を形成していた。なお、常葉橋・神田橋・三篠橋付近には多少商店街があったし、白島地区の北端には、中国軍管区工兵補充隊(旧工兵第五聯隊)があり、二葉の里には、東部に第二総軍司令部(旧騎兵第五聯隊)があった。

白島・二葉の里両地区とも、古い神社仏閣が多く、もの静かなたたずまいの中に、おくゆかしい伝統を保っていた。

饒津[にぎつ]神社の西側の神田川沿いの土手は、昼なお暗いほど杉や椎やクルミの木が茂っていた。土手道から川面までの斜面には、シノ笹がびっしりと生えており、川水が笹の根をヒタヒタと洗っていた。昔、この付近は、「椎ノ木の森」と、呼ばれた。夜、一人で歩いていると送りオオカミが出て来て、その人を呼び止める。が、振りむいてはいけぬ。振りむくと命が無かったと、ある古老の書き残した伝説がある。刀のためし斬りをしたか、追いはぎが出たかであろう。被爆前まで、まだ伝説のおもかげを多分に残していた所であるが、ここは川がゆるく曲っている場所で、土手下は水も深く、海の潮が上がって来るとき、小鯛やコチ・シス・カレイなどがよく釣れ、水面を走るように泳ぐサヨリなどは、棒で叩いてとるほどたくさん上がって来た。被爆する前までの、広島の川は、ここだけではなかったが、この付近は特に釣人が足を運んで楽しんだ(紺野耕一談)。

被爆により、白島地区は工兵橋付近を残して全焼し、二葉の里地区も山麓沿いを残して、ほとんど焼失した。

被爆直前の世帯・人口

被爆時の白島・二葉の里両地区内の総建物数は二、三九一戸、人口約八、七五五人で、各町内会の内訳は次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
西白島町	402	420	1,840	佐々木重九郎
白島西中町	183	203	726	山根芳太郎
白島北町	64	65	223	金山富介
白島中町	285	298	1,190	木村松次郎
白島東中町	233	234	736	小田亮
東白島町	544	200	2,000	大横田義雄
白島九軒町	500	375	1,390	小野峯蔵
二葉の里	180	180	650	清代吉五郎

また、地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
白島国民学校	東白島町	禿翁寺	東白島町
県立広島工業試験場	東白島町	万行寺	東白島町
安田高等女学校	西白島町	円光寺	東白島町
工兵補充隊 (旧工兵第五聯隊)	白島北町	光明院	東白島町
広島通信局	(基町)東白島町	心行寺	白島九軒町
逓信病院	(基町)東白島町	正観寺	白島九軒町
妙風寺	(基町)東白島町	宝生院	白島九軒町
饒津神社	二葉の里	薬師院	白島九軒町
鶴羽根神社	二葉の里	碓神社	白島九軒町
明星院	二葉の里	白島信用組合	東白島町
東照宮	二葉の里	第二総軍司令官畑大将宅	二葉の里松本勝太郎方
洞門寺	西白島町		

二、疎開状況

(白島地区)人員疎開

白島地区は各町とも集団的な人員疎開はしなかったが、郡部方面に親類縁故を持つ家庭では、昭和二十年春ごろから、随時に疎開していた。しかし、疎開先での生活処遇が思わしくなく、再び地区へ帰って来る者もかなりあった。

白島には、予・後備、退役の陸海軍将校や高級官吏の退職者が家屋敷を持って多く居住していたが、これを処分して郷里に引きあげた人もかなりいて、これらが人員疎開のはじまりであった。続いて、老幼者が、郡部の縁故先へ若干移っていったが、一方では、市の中心部から逆にこの地区へ移り住む者もあった。

物資疎開

物資疎開については、日常生活に必要な道具や衣類などを田舎の縁故先へかわすことがかなり行なわれたが、戦局の熾烈化に伴い、トラックも馬車も自由に使えず、輸送は困難となり、小さな荷車に積んで家族が近郊へ少しずつ、運ぶ程度であった。

学童疎開の際に、一人当たり三〇キログラムの荷物の携行を認められたから、少量ながらその便に運んだ者も多かった。

これらの疎開物資をめぐって終戦後、紛争を起したり、あるいは大水で流されたりした者も多くあった。

(二葉の里地区)疎開状況

二葉の里地区では、十九年末頃、大須賀町踏切りから神田川鉄橋まで、山陽本線上下線路に面した建物と、下り線側は、常葉橋東詰から大須賀踏切りまでの道路沿いの建物の強制疎開を行なった。これらは鉄道線路を中心として、二五メートル幅を疎開したのであるが、居住者もそれぞれ立退いていった。

物資疎開は、この地区でも学童疎開に際して一人当たり三〇キログラムまでの疎開が認められたので、学童の必需品、家族の衣類などを疎開することができた。

学童疎開

学童疎開については、白島国民学校の児童三年生以上は、安佐郡大林村・三入村・亀山村・飯室村・鈴張村の寺院や学校分校へ集団疎開した。四月に、約二〇〇人が、一二人の教職員に引率されて出発したが、児童の列の両側に父母がつき添って、別れを惜しむ光景は、涙をさそうものがあった。ある親は、疎開先へ面会にゆき、連れもどしたということもあった。

残留した低学年学童たちは、地区内で、自宅に近い各寺院へ、分散通学した。東白島町では禿翁寺が、これら児童の勉強場になっていた。

二葉の里の学童は、約一〇〇人が鈴張村の三か寺に、五二人・二七人・一七人と分散して疎開した。五、六年生の残留者と、高等科の生徒たちは、白島国民学校正面校舎の二階の一部で授業をおこなっていた。

三、防衛態勢

警防団

広島市警防団白島分団が編成されて東白島町の常葉橋西詰に本部を置いた。ここには古くから火の見櫓があり、半鐘が設置されていた。白島七か町と、二葉の里(白島学区)をその区域とし、人員は分団長一人・副分団長一人・部長三人・班長六人・団員六〇人で構成した。設備は、手動ポンプ一台・消火用とびぐち・火たたき・バケツ・医

薬品など若干を常備し、また管内各家庭の前には、必ず防火用水槽を設置し、火たたき・バケツなどを備えた。また町内各所に適当な間隔で、大型防火用水槽や汲み上げポンプを設置して、万全を期していた。

各町内会は、隣組の組織で防衛態勢をかため、警防団と警察の指導のもと、昼夜別なく演習や訓練を実施した。

屋根の上の火を消すため、梯子をかけてバケツリレーをおこなったり、「鳥の巣注水」と称して、高さ五メートル以上の竹ざお上に、巣箱型の箱を取りつけ、それをめがけての集中注水を訓練した。また、長さ約二メートルの竹槍で「突っ込め」訓練や火傷・骨折患者の応急手当・避難救護訓練など徹底的に繰返した。

これら訓練の参加をためらったり、のがれようとしたりすると「非国民的行為」として指弾された。

夜間の灯火管制や空襲警報時における各家庭の防空壕への待避励行も厳重に実施した。

国民義勇隊

昭和二十年六月からは、国民義勇隊が編成され、町内会単位に中隊、隣組単位に小隊を組織し、空襲警報発令と同時に、各部署につくことになっていた。

四、避難経路及び避難先

避難対策

非常の場合は、安芸郡戸坂(へさか)村の国民学校、安佐郡口田(くちた)村の国民学校、あるいは安佐郡祇園(ぎおん)町字西原の神社に避難するよう指定されていた。

(避難経路)

東白島町	常葉橋・牛田土手経由、または神田橋経由。
白島九軒町	
白島東中町	工兵橋経由。
白島中町	
白島北町	長寿園土手・工兵橋経由。
白島西中町	
西白島町	

二葉の里 = 各人が決めて町内会に報告し連絡表を作っていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
工兵補充隊(旧工兵第五聯隊)	白島北町北端
赤穂部隊(第二二四師団工兵隊)	東白島町白島国民学校校内
第二総軍司令部	二葉の里元騎兵第五聯隊内
高射砲陣地	二葉山頂上
陸軍通信隊(部隊名不明)	二葉の里、東照宮内

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

八月五日夜九時半発令の空襲警報は、まもなく解除されたが、夜半〇時過ぎの空襲警報発令で、常葉橋西詰の消防分団本部の警鐘が乱打され、老幼婦女子が河原にたくさん避難した。鉄砲町や八丁堀方面からの避難者も多く、幼児を乳母車に乗せたり、背負ったりして、数百人の市民が常葉橋を渡った。

分団本部では、家庭防空要員以外のこれら多数避難者の誘導や指導に繁忙をきわめた。空襲必至という状況下で、道路上や避難場所での喫煙は、敵機の目標になるといって厳しく禁ぜられるほど緊迫した空気であった。午前二時十分ごろ、空襲警報が解除され、警戒態勢に入ったので、各家庭では仮眠をとり、他町からの避難者もぼつぼつ家庭に帰りはじめていた。

河岸に近い家の人たちは、光明院河原、工兵隊東側河原などに避難することになっていたもので、夜中に空襲警報が発令されたときは、熟睡中の子どもを揺り起して、河原に連れて行ったが、深夜ながらも、幼い子が二時間でも三時間でも無心に砂遊びなどしている姿は、かわいそうであった。この幼児たちが、夜が明けると原子爆弾で、一瞬に生命を落とすということは、夢想だにできないことであった。

なお、前夜九時過ぎの空襲警報発令中に敵機が撒布したのか、油脂性臭気を感じた所が、白島の中心地域にあって、何かを撒いた形跡があると語り伝えられている。

六日朝

六日の朝は快晴で、七時過ぎに警戒警報が解除されてからは、住民はそれぞれの職場に出勤するか、家庭の雑事に取りかかる人もあり、中には遅くなった朝食の卓を囲んでいる家庭もあった。このような状況の中で、上空に侵入して来たB29を目撃した人は、きわめて少ない。しかし、警報がもう解除になっているのに、B29らしい爆音が

かすかに聞えたので、ふと不審感を持ったという人はかなりあった。

白島東中町のある住民は、朝食につこうとしていた時、その部屋の高いガラス窓越しに、相当な高度をもって、B29が二機、東の方から市の中心部へ向って、侵入するのを目撃している。

おかしいなと、思ったとたん、大爆発に襲われ、身体がクルクルッと廻って飛ばされたという。

無警報下の爆音については、「友軍機だろう。」と思っていた人も多かった。上からのきびしい統制と命令に従って動く日常生活が、もはや習慣化していて、個人的判断による自主的行動などはあり得なかったからである。

白島九軒町のある人は出勤しようとして、一度玄関から外に出たとき、南方上空に高度約八、五〇〇メートルで飛行しているB29らしい一機を見た。そして、自転車に空気をつごうと、再び玄関に入り、空気つぎを終わったとたん被爆したという。

二葉の里でも、侵入する敵機を見ていた人があり、負傷して国前寺に収容されたが、数日後に眼球が自然に抜出して死亡した。その人は犬を連れていたが、犬は元気で、主人の死を見たあと何処かへ去っていったという。

当日朝、二葉の里から田中町方面の建物疎開作業に町民一三人が出動していたが、他の町内会は出動していなかった。

七、被爆の惨状

(白島方面)

その朝、九軒町から東白島交番所に至る約三〇〇メートルのあいだを、広島電気通信工事局の工事応援の兵隊が七〇人来ていて、電話のケーブルを取りつける作業で、道路を掘っていたから、原子爆弾の炸裂によるマグネシウムのフラッシュのような青白い光線を見たとき、付近の人々は、兵隊がガス管にトビグチをあてて、引火爆発したものと思った。その二、三秒後に、ドガンと地軸もさける轟音と共に、一瞬家が倒壊したのであった。

また、西白島町では、閃光をはっきり見て、「やられた！」と叫んで、立つと同時に爆風が襲って来て吹き飛ばされ、同時に大部分の家屋が倒壊したといわれる。

見渡すかぎり、ほとんどの建物が、なぎ倒されており、格別堅固な建築で、部分的に破壊された住宅でも、屋根瓦はすべて吹きとばされ、窓ガラスは完全に破碎された。室内も天井が抜け落ち、床も吹き上げられていた。花火のような青い一条の火が、ヘビのように匍って、チョロチョロと走ったのが見られた。これは放射熱線による自然発火と思われるが、炊事の残火による発火もあって、地区内の各所から火の手が上がった。

避難状況

白島地区内の西寄り地域では、通りかかった兵士に、下敷きになっている人々を助け出してもらったりして、いよいよ火勢の激しくなって来る中を、最も近い川沿いの桜の名所「長寿園」に、まず逃げた者が多かった。

いったん長寿園に出たから、さらに工兵橋を渡り、さらに北の牛田の山のなか、あるいは町内会がかねてから指定していた安佐郡西原へ向って、水源池の前を通り、歩いて逃げていった者もたくさんいた。

北へ北へと太田川上流地帯に逃げていく人々で、饒津神社横の川土手や、無事であった工兵橋付近は、フラフラになった負傷者で混雑をきわめた。

なかでも戸坂村の陸軍病院戸坂分院を目ざす人々が特に多く、工兵橋を渡った牛田町側では、重傷者は堤防に寝転び、軽傷者は水につかったりして、無数の人がたむろしていた。川では水を飲んでいる人々もたくさんいたが、ここまで来て死ぬる人もずいぶんあり、まったくの修羅場を出現した。避難者の中には兵隊も多く、工兵はもとより、基町の砲兵・輜重兵、あるいは陸軍病院の兵士や看護婦・患者も多数まじっていた。

一方、鉄橋上の光明院河原、あるいは下の三樹園(さんじゅえん)河原も、対岸から逃れて来た半死半生の避難民や兵士で、かがむ場所もないほど埋まり、皆、水を求めながら、次々に死んでいった。

白島に続く川沿いの泉邸には、中心部の人々が多数逃げ込んでいたが、庭園の森に火がついたため、裏川を泳いで二葉の里方面へ渡るものが多勢あった。神田川鉄橋の上には、貨物列車四九輛が脱線転覆しており、枕木と共に燃え上がっていた。

饒津神社裏が火炎を上げはじめ、火勢が盛んになるに従い、もの凄い竜巻が起こり、川水は高い棒しぶきとなって狂い立ち、トタン板が一〇〇メートル以上も吹きあげられた。饒津にあがった火炎は、たちまち近くの火炎と手を結んで、ついに三樹園を襲った。

三樹園付近にいた群衆は、猛然と襲い来る火炎の中を、必死になって走り、常葉橋下の河原にのがれていった。そのうちに、沛然と大粒の黒い雨が降り始め、傷だらけでうずくまっている人々を激しく叩きつけた。

二葉の里方面では、広島駅の四番踏切の遮断機が降りて列車が通り過ぎ、その最後尾の一輛が踏切りの所を切れ、遮断機が上げられはじめたその一瞬、轟音とともに衝撃波が襲い、一切は不明となった。遮断機の前にいた人は、背後から、突如大きな物体で打撃され、気づいたときには、線路を越えた反対側に打ちのめされていた。まっ暗な周囲が、ようやく明るんで来たので、恐る恐る起き上がって見ると、建物はすべて倒壊し、助けを求める声で騒然としていた。

近くに血を吐いて即死している人がいたが、通りかかった人が、その死体を急ぎかついで何処かへ去って行った。

この付近の人々は、東練兵場や二葉山、あるいは饒津神社付近に避難したが、東練兵場一帯は、他の各町の人々も殺到して来て、立錫の余地もなくなった。

安佐郡戸坂村・口田・矢口に通ずる道路は、避難者の流れの幹線となり、東白島町・大須賀町・荒神町・幟町方面、または流川町の避難者も二葉の里方面の山へ、ドッと押し寄せて来た。

常葉橋は、床板が燃えたり、欄干が落ちたりしたが、ほぼ完全であったから、みなこの橋を渡った。ただし、橋の西諸の消防署のガソリンが炎上し、付近の民家に延焼したため、その猛火で渡れない時もあった。

なお、地区内の炸裂時における瞬間的被害は、次のとおりである。

炸裂時の被害

町名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
西白島町	100	-	-	-	30	60	10	三篠橋一部破壊・通行に差事えなし
白島西中町	100	-	-	-	15	75	10	
白島北町	80	20	-	-	5	65	30	
白島中町	100	-	-	-	15	75	10	
白島東中町	100	-	-	-	15	75	10	
東白島町	100	-	-	-	30	60	10	常葉橋欄干落下・床板が燃えたが、渡ることができた。
白島九軒町	100	-	-	-	10	70	20	神田橋欄干被害
二葉の里	80	20	-	-	10	80	10	

神田川鉄橋の列車被害

常葉橋上手にかかる山陽本線の鉄橋上には、貨物列車が転覆脱線、発火して、積荷のドラムが次々に爆発し、避難者を不安がらせたが、この事について、当時の広島鉄道局荒井誠一専務課長は、次のように語っている。

「当日朝は、月二回しかない休日で己斐の官舎にいた。炸裂後、六日中に何とかして広島駅や広鉄局へ行こうと試みたが、警戒が厳重で近づけない。七日の午前三時、山陽本線の線路沿いに広島駅に向った。己斐・横川両駅ともホームの上屋が線路上に倒れていた。

三篠川・神田川両鉄橋の杭木はくすぶりつづけていた。

饒津神社から神田川鉄橋にかけて停車した四九輛編成の第三七七貨物列車のうち、八輛が鉄橋上に乗っかったまま、四〇度傾いて盛んに燃えている。

駅に着いたが、広鉄局長や各部課長の所在はつかめない。とりあえず分担（荒井車務課長は鉄橋・篠原総務課長は駅ホーム）して整理復旧することに決めた。

鉄橋上の列車の取片づけ作業には、三原・十日市両保線区からの救援隊、検車区の残存職員、岡山の鉄道部隊一個小隊が従事した。

決死隊を出して燃え上がる貨車にロープをまきつけ、岸からヨイトマケで川の中へひっぱり落とした。

死骸が累々と浮んでいる川面に、火のついた貨車を引き落とす。それは凄惨な光景だった（昭和三十九年三月二十一日付中国新聞）。」という。

大須賀踏切の列車

午前九時ごろ、放射熱線により鉄道路線の保強資材であるマクラ木が発火した。大須賀踏切の西土手四番目の踏切で、マクラ木の火が列車について、番小屋の処で停車したが、二時間後に炎上した。

なお、地区内の炸裂後の火災発生炎上の状況については、次のとおりである。

火災発生炎上の状況

町名	最初に発火炎上しはじめた		火災状況	火災終息時刻
	場所	時刻		
西白島町			町内全域全戸全焼	
白島西中町			町内全域全戸全焼	

白島北町			町内北端部(工兵隊のカラタチ生け垣際)の数軒が午後三時ごろ南からの風が北からに変わり、焼け残った。	
白島中町			町内北端部に一、二軒焼け残った以外全焼。	
白島東中町	神田橋の南詰あたりから先ず火の手があがった		町内北端、川土手の川側の家屋敷軒だけが中破で焼残った以外は、町内全家屋全焼。	
東白島町	常葉橋東詰禿翁寺裏その他数か所	午後八時四十分頃	連日の暑さで乾燥し切っていたため、次々と変わる風向きにあおられて炎上、町内全域全戸全焼。	午後十時ごろ
白島九軒町	神田橋南詰あたりから、まず火の手が上がった	午前九時ごろ	川土手の川側の家一、二軒が焼け残った以外、町内全域全焼。	
二葉の里	第二総軍の炊事場より発火を見る	午後九時過ぎごろ	二、三時間後に、にわか雨がふり同時に風が強くなり吹出して、火勢はこれより南に向かう。第二総軍司令部付近一帯焼失。	夜間九時ごろまで。塀や立木などの火、三日位燃える

工兵補充隊

白島地区最北端の工兵補充隊は、本土決戦要員としての、新部隊を編成中で、八月一日から続々とその兵員が応召しつつあった。六日当日も午前八時ごろから、下士官要員約一〇〇人が入隊していた。また、在隊者は、同じく八時ごろから作業演習のため、逐次営庭に集合して被爆、多数の死者・負傷者を出した。

第二総軍司令部炎上

また、二葉の里の第二総軍司令部の状況について、当時、司令部勤務の久都内智子筆生(現姓賀川)の体験によれば、「第二総軍司令部は倒壊または大破し、副官室のみ残っていた。そのうち総軍の建物の屋根にも火が移り、烈風の吹くたびに五か所の火災が一かたまりにもつれ、モウモウと燃え上がり、火の粉は飛び、凄じい音をたててドラム缶類爆発、松並木も炎の中に包まれ、松脂の臭を放って火龍の如く燃えた。

司令部内兵器部に引返すと書類戸棚が不思議に無事だったので、書類を小脇に脱出した。司令部の門の処まで辿りついて歩行不能となった。永田軍曹が探しに来てくれた。その時腕時計が動いていた。そこへ敵機が上空に来て悠々と偵察しているのを見て怨憎の涙をしばった。

戸坂に運ばれ、着いた時には日は暮れていた。民家で手当を受け、翌日深川に帰宅した。」という。

黒い雨

白島地区では正午前から約二〇分ばかり、大粒の荒々しい黒い雨が降って来た。

難をのがれた神田川鉄橋下で、まっさらな夜具を見つけて頭にかぶり、雨をさけたある避難者は、呉から来て八丁堀福屋前で、鼻の先端をまっ二つに切った海軍将校二人と共に、戦況などをいろいろ話しているうちに、黒い雨が地面を叩きつけるように降って来たのでみんなで、その夜具を頭にかぶって避けたという。

長寿園付近でも、やはり正午ごろになって、裸には痛いほどの雨が、一回降って、少し小降りとなり、また降り、三〇分ぐらいも降りつづいた。そして、長寿園から眺められる横川・己斐方面は相当に降っているようにながめられた。

しかし、この雨も、火災を消すほどのことはなかった。二葉の里方面では、昼前ごろ、雨が降りだし、約四〇分間ぐらい降ったようである。雲が出て、にわかにか空が暗くなったと思うと、パラパラと雨が降りはじめた。同時に風が起きた。風速は約一〇メートルくらいと思われる強い突風で、第二総軍司令部の炊事場付近にあがった火の手が旋風を起して、空高く舞いあがるのが見られた。

延焼する兵舎の火の手は、一層大きくあおられて拡がり、桜の馬場の大きな松もまたたくまに焼け、大火災となった。

(白島方面)六日夜

東白島の鎌谷薬局主人は、六日夕刻、焼け出された隣組の人達と相談の上、妙風寺墓地内に仮寝の場所を定め、防空壕から米・梅干などの非常食を出して来て炊出しをした。

鉄道線路の土手に登ってみれば、市の中心部をはじめ四方には、まだ数十か所猛炎が狂い立っていた。墓石を枕に寝ていると、半狂乱の父親の子供をさがすかすれた声が夜通しきこえていた。

光明院河原から見ると、牛田ふたまた土手付近の穀物倉庫が、夜になっても燃えつづけているのがよく見えた。また牛田の山腹でも二か所ぐらいが燃えているのが望見された。

光明院河原では、軍の公用で白島九軒町の自宅に島根県浜田市から帰っていた酒井薫兵長が、自宅も全壊全焼し

たため、家族の者と一緒に避難していたところ、火災のため河原も危険になったので状況判断の上、戸坂方面が安全と思いつき、避難民に、川伝いに北上して逃げるよう呼びかけ、誘導すると共に、負傷者の救出をおこなった。

諸現象

火災の原因としては、黒いものはほとんど自然着火したようである。

シュロの木は、全部といってよいほど着火したし、鉄道の枕木さえも熱線で着火した。

白島九軒町では、干してあった色物の洗濯物が、燃えくすぶりながら落ちていたのを拾って、すぐ防火水槽の中へ投げ入れたという人もある。

また、縁側の防空暗幕から発火したのも多かった。

壁の厚い土蔵は、爆風で屋根瓦が全部飛び散り、屋根下の赤土は落下、屋根板が露出し、窓も抜けた。そこへ火災が燃え移り、内部の貯蔵品が燃えたため、ついに四方の厚い壁も崩れ落ちた。

ある婦人は、ちょうど屋外にゴミを捨てに出たところ、爆風で何処かに飛ばされ、その後行方不明、死体も判らないままである。

また、ある婦人は、離れ座敷の東北のガラス戸に面したところで、髪の手入れ中、炸裂にあったが、傷一つしなかった。ただ目の前のガラス戸が、西南からの爆風を受け、一瞬どこかへ飛んで行ったのでびっくりしたという。

三篠橋東詰で、荷馬車もろともに馬が欄干にぶっつけられたまま死んでいた。橋の欄干は、爆風の方向に、一方は橋上に横倒れとなり、一方は川中に落ちていた。

(二葉の里方面)

二葉の里方面では、六日夜、町内の焼け残った家は、山の手西の鶴羽根神社から東照宮までの住宅であったが、これらもただ焼け残ったというだけで、棟の完全なのは一戸もなく、まっ暗な中で蚊の襲来になやまされながら、不安な中で夜の明けのを待った。二葉の里へは、他の地区からの避難者が数限りなく押し寄せて、神社・寺院の境内に充満した。東照宮の石段横に湧く清水を求めて、ここにも避難者がたくさん集っていた。

東照宮下は、地区の避難所として定められ、救護その他の事務を執っていた。また、東練兵場広場に警防団が集合し、避難者の救護活動をおこなうと共に、地区内の状況を連絡しながら、食糧・衣料など配った。

饒津神社から南方を見ると、ただ第二総軍司令部の兵営の土塀と高いコンクリートの煙突が残っているだけという一望の焼野原が遠く続いていた。電柱は、爆心に面した片方半分だけが焦げていた。

二葉の里ガード付近は、鉄道線路の枕木の自然着火から民家に延焼した。炸裂と同時に着火したのは、鉄道枕木のほか、饒津神社の檜皮葺の本殿や神社うしろの二葉山などがあり、一帯が火の海と化し、次々と火勢が広がっていった。山のふもとの家屋の軒先も自然着火したが、付近の人々が消しとめた。

火災によって延焼した物の中で、ガラス製品が一種不思議な色彩を持って変形していたのがあった。陶器も、釉薬が溶解したり、形が変わったりしていたが、中でも黒い色が黄色に変じ、ねばりがなく割れ易いものとなっていた。二葉の里第四踏切のところの、二〇メートルぐらいの高さの大木が、道路上に横倒しとなっていて、人間がかろうじて通れるだけで、車馬は通れなかった。この道は、牛田町や大須賀町・広島駅前へ通ずる道であったから、交通に大きな支障をまねいた。

八、被爆後の混乱と応急処置

(自島東部地区)

救急作業

白島地区東部では、四日目の九日ごろ、安佐郡・山県郡・高田郡方面から、にぎりめしがとどいて、初めて配給された。特に丹比村からきた米のうまさは腹に泌みた。しかし、配給機関が不備であったためか、せっかくのにぎりめしが腐敗していて、全部川に流したこともあった。

救護所の設置

救護本部を光明院前に仮設し、東中町の小田亮医師などが治療に奮闘する一方、警防団幹部の一人は、一日に三、四回鉄道線路ぞいに長寿園まで往復して、罹災者用の配給にぎりめしを運んだ。

八月十三日ごろ、二人の巡査が東署から派遣された。一番ガード南側に仮派出所を設置し、治安や罹災証明書、転出証明書などの事務を執った。両巡査とも被爆者で、ひどく衰弱していた。

八月十五日ごろ、呉海軍の救護隊が約二〇人ぐらい到着し、一番ガード北側に救護所を作り、町民の治療にあたった。

死体の収容と火葬

罹災者の死体は、九日ごろから収容しはじめられ、火葬・仮埋葬は二十五日ごろまで続けられた。ほとんどが光線に焼かれた半裸体であり、ひどい火傷のため人相はまったく違っていたし、その数も三〇〇体を越える状態であったから、人名の確認も身元調査もできないまま、東白島町の万行寺や一番ガードと二番ガードの中間の鉄道土手の下あたりで火葬し、仮埋葬した。

死体は焼けたトタンで担架を作って運び、五、六体から一〇体ぐらいを一組にして石油をかけ火葬したが、鉄道線路の上から四方を見ると、数一〇カ所で死体を火葬しており、その炎と煙が空にたちこめていた。

白島東中町(現在国鉄アパートの位置)に「船舶練習隊処理 柱」と木の柱に墨書された標識柱が麦畑の中に立てられていた。二十四、五年ごろ、国鉄アパートの建設がはじまることになり、市役所衛生課へ連絡して、香華を供え、遺骨を拾って市が平和公園供養塔に合祀した。

また、焼跡を掘り返しているうちに下敷きとなって死んだ人で、氏名の判明しない遺骨が、そこここから出て来た。これらはいちじ、最寄りのバラックの寺にあずけていたが、後に全部慈仙寺に合祀した。

(白島西部地区)

白島西部においては、六日夜、工兵橋の牛田町側、あるいは工兵作業場で、多くの人々がゴロ寝して仮眠をとった。翌朝、工兵補充隊の兵士が炊出しをおこない、避難者ににぎりめしをくばった。

六日の夕方ごろ、学徒動員で作業していた中学生や工兵補充隊の火傷した負傷兵たちが、「母さん、母さん。」と叫び、苦しんだ末、川の中へ飛び込んで体を冷やしたり、水を飲んだりしたが、あくる朝、目ざめて見ると、ほとんど死んでいた。

救護活動

救護活動がはじめられたのは、六日午後からで、工兵隊の作業場の東北、牛田山に応急救護所が設けられた。しかし人手が少なく、たんなる応急治療だけであって、戸坂国民学校の陸軍病院分院にトラックで負傷者を送った。ここも軽傷者が主で、重傷者は、付近に横になったままというありさまであった。人心も転倒していて、すべてがちぐはぐなことばかりであった。

白島地区の町内会の機能

白島地区各町内会は全滅したが、白島九軒町小野峯蔵会長が健在であったから、自宅あとにバラックを建てて町内会仮事務所を設置し、献身的に町民の世話をおこない、辛うじて町内会の機能を保つことができた。

(二葉の里地区)

救護活動

二葉の里方面では、六日、東練兵場(海軍救援隊)や東照宮石段下に救護所が設けられ、町内の比較的元気な者が総出で救援作業をおこなった。夕方、郊外から来たにぎりめしを配給した。また、警防団荒神分団も来援し、救護活動を行なった。

七日、医師(加茂郡北部医師会)と医薬品が到着したので、軽傷者は東照宮下へ運び、重傷者は尾長町国前寺に運んで応急の処置をとった。

死体の収容・火葬・埋葬

二葉の里一帯に逃げて来た罹災者も、次々に死んでいったが、これらの死体を収容して、七日ごろから火葬・仮埋葬を始め、八月も末ごろようやく終了したのであった。

軍人の遺体は、軍隊に報告して整理したが、一般市民の遺体は、警防団員など残存者が集って、寺の墓地を利用して火葬をおこない、氏名のわかっているのは縁故者が引取り、不明者は東練兵場で火葬し、明星院墓地に仮埋葬した。

しかし、いまだ敵機の飛来があったりして、火葬中に警戒警報が出たので七日・八日には火の見えないように、いちじ火葬を中止したこともあった。

十四、五日ごろでも、まだ道路上に放置された死体はかなりあり、悪臭を放っていた。

二葉地区における死亡者のため、東照宮下に慰霊塔を立てて弔ったが、遺骨は納められていない。

二葉の里町内会の機能

二葉の里町内会の機能は、清代吉五郎町内会長・その他役員・生存者・警防団員などが協力して事にあたった。また、福岡方面から来援した軍の工作隊が、饒津神社境内にテントを張り、三か月ぐらい駐屯していて、町内会の

対策に協力した。

警防団員は、警察と連絡し、食糧の配給や治安の確保をおこなったが、白島方面、その他町内会の壊滅した地区の町民の救助や連絡のため、不眠不休のありさまであった。

学生・勤労奉仕隊などの死亡者は、各自の持物とか、着物に住所氏名の記入があったのでこれによって関係者を見つけだして連絡したが、一週間ぐらいこれらの作業が続けられた。

日がたつにつれて、二葉山の中などの奥まったところからも、数々の死体が発見され、判明者は縁故先に連絡した。不明者は東練兵場に集めて火葬した。

二葉の里各所に、軍人の死骸がもっとも永く放置してあったが、明星院から饒津へかけての道路上の死骸には、八工が集り、悪臭が鼻を突くありさまであった。軍の機能がまったく失われたため、早急な処理がされなかったからであろう。

主要道路の啓開

町内会の道路は、まっ先に啓開して交通に支障のないよう取りはからい、牛田や大須賀に通ずる交通の要路として、その安全を確保した。しかし、橋梁やその付近以外はそのままで、人の通れる程度の幅だけの整理が徐々におこなわれていった。瓦の破片その他が高く堆積していたが、復帰した住民の手によってだんだんと宅地の境界の塀がわりに、これらの瓦が拾われたり、積み重ねられたりして、自然に整頓されていった。また、町内の焼けた家屋も、十日ごろになってはじめて各自が整理した。それまでは自分の事さえ考える余裕がまったく無かったのである。

九、被爆後の生活状況

(白島地区)

八月末ごろの白島地区各町の居住世帯概数は、次のとおりである。

町名	世帯概数
東白島町	30
白島西中町	20
白島九軒町	40
西白島町	20
白島東中町	15
白島北町	30
白島中町	

八工の発生

被爆後四、五日を経過したころ、八工の発生が目立って多くなった。鼻をつく負傷者の悪臭・腐敗臭に、八工が集って産卵し、ウジが無数に匍匐した。八工は、遂に焼跡を占領するほどにもの凄く発生し、道行く人の背には、八工がまっ黒くとまった。自転車に乗って走るものにも同様にとまりついていった。追っても追っても人間を怖れず、平手で叩くと一度に数一〇匹はころされた。死んだ人にはもちろん、全身に八工がとまって舐めていた。また、入浴もせず、着替えの着物もなかったから、ノミ・シラミがわいた。手の指には疥癬ができる者も多かった。

八月末ごろ急に八工がいなくなった。アメリカ軍が飛行機から殺虫剤をまいたということであったが、こんなに効く薬があるだろうかと思われなかった。

窮乏生活

八月十日ごろまで、郡部から救援のにぎりめしの配給をうけていたが、このころ、警察経由で、豆・肉・昆布の入った罐詰(軍放出品)の配給が数回あった。また、十五日目ごろから、軍隊の衣類(服・下着・シャツなど)や毛布の配給が僅かながら配給された。

九月初めごろ、郡部の縁故者をたよって、野菜・米・牛肉・馬肉・くだものなど、なんでも手あたりしだいに、食べられる物をあさって歩いた。仕事もなければ金もなく、ただただ食物の確保にだけ専念した。

灯火

焦土と化した焼野原の数日間の夜はロウソクも何もなかったから、焼け残りの木ぎれを拾って来て夜どおし燃やして過ごした。そのうち誰かが軍用の保革油を一罐手に入れて来たので、罐詰のあき罐に入れ、布ぎれを細長くたらしめて灯芯とし、はじめて灯火を得た。焼トタンでかこんだ仮住いながら、何か文明を取りもどしたような気がした。

(二葉の里方面)

二葉の里方面では、火災終息後、一部焼け残った木材やトタン類を集めて罹災者は雨露をしのいだ。

三家族・四家族と罹災者同志が集って共同生活をしたが、そのうちに縁故がたよられる者や独りで生活できるめどがついた者から散っていった。

中には、夜は防空壕で雑居寝し、昼は外へ出て、ムシロなどを陰にして、一日を暮らすものもあったが、ともかく皆が皆、食物を得るのに夢中になっていた。引揚者や軍人が、ときたま、持ち帰った珍しい物をくれるとうれしかった。

ハエの発生

ここでも八月二十日ごろ、ハエが発生しはじめた。死体は放置されていたし、家は焼けて便所がなく、塵芥はたまりっぱなしであり、駆除する薬品も方法もなく、ハエの大襲来は昼夜の別なく、その上、蚊が発生してなやまされた。

二葉の里は、山や木立が多く、ハエや蚊がいちだんと発生密度が高かったが、ただ茫然としているほかなすすべもなかった。シラミも発生した。

生活物資

食糧は、配給に頼るはかなかった。六日夕ぐれ、東照宮下で警防団が、にぎりめしを配給した。また夜になって、郊外からトラックがにぎりめしを積んで、饒津神社境内に来着した。これら救援食糧も三日後には来なくなり、軍がカンパン一袋ずつ配給したので、罹災者の一同はやっと飢えをしのをいだ。

十日ごろ、第二総軍司令部から食糧が配給されたこともあった。終戦後、広島駅前に南北に細長く屋台車や箱台で、闇市場が出現したので、これを利用する者も多かった。

暗い夜

六日以後、十四日ごろまで、流浪の民のような暗やみ生活が続いた。口ウソクの配給が、しばらくしてあったが、もちろん慰め程度で、ほとんど焚火で夜をすごしていた。

電灯は中国配電会社では工事ができなかった。資材不足・人手不足など多く理由があったが、五、六か月ばかりたったころ、焼あとから、裸電線を拾い集めて来て、各自が配電し、やっと点灯したのであった。

復帰者

二十年末までに、郡部へ疎開していた家族が一〇戸ばかり帰って来た。

学童は、安佐郡鈴張村の寺院に集団疎開していたが、二十年十月末、全滅した家の学童だけ残して、その他の学童が復帰した。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨禍

白島方面では、九月十七日の暴風雨によって、罹災者がせっかく建てたバラックの焼トタン屋根も無残に剥がれ、着ていた衣類まで、ずぶ濡れになった。また十月八日の大豪雨によって太田川が氾濫し、東側の山から、西側の山すそにかけて洪水となったため、白島全町は、高く盛土された山陽線鉄道線路だけを残して全部水没した。水深は一メートルから三メートルに達して被害甚大、泣くに泣けなかった。

白島北町の一部の、半壊家屋を残して、他は全壊全焼の地区であったから、これら二度にわたる災害によって、生活は徹底的に困窮のどん底につき落とされ、各町とも僅少な世帯数がさらに減ってしまった。

砂糖湯

二十年九月上旬市立浅野図書館(現在・中国電力株式会社)館内に、中国復興財団(理事長平野馨)が設立され、各種軍需物資を取扱ったが、馬場熊太郎は、ここから砂糖二、三俵を入手し、以前の真砂商店のところにテントを張り、甘味にかついていた町民に熱い純砂糖湯を作って販売したところ、永い間、糖分をとらなかつた人々が行列をつくって買い求めた。

経済活動

二十年十月中旬、焦土の中から、起ちあがろうとするきざしが出はじめた。元の白島終点到薬局(鏝谷信男)と自転車店(伊桐博士)が開業し、ようやく生氣らしきものを得た。これが地区内における経済活動の嚆矢であったと言えるか。

二葉の里方面では、二十年十一月中旬頃、東練兵場跡に「二葉開拓団」が組織され、農作物の生産をはじめた。また、同年末ごろ、土手筋に飲食店が三戸ばかりできた。

住宅の状況

なお、饒津神社境内を中心に、バラック建住宅が三〇戸ばかり建った。だいたい商店より住宅が多かったが、その実状は、次のとおりである。

地 域	状 況
三樹園・常葉橋付近	三樹園、常葉橋の付近からガード下にバラック建つ。昭和二十一年ごろ一五戸。
饒津神社境内	古資材で山の手の一部に建つ。戸数不明。軍隊によって一〇戸建つ。
東照宮から西山の手側	焼け残り家屋を修理。昭和二十年十月ごろ七〇か所。

白島付近を通過して

尾木正己

当時、私は呉海軍工廠に勤務し、爆心地から二〇キロメートル離れた呉市吉浦町の火工部設計係において、火工兵器の設計に余念がなかった。勿論、室内で作業していたが、鉛筆を持った手が浮き上がるような衝動を受けた。状況から判断して、普通の爆弾ではなく、広島市近郊で、火薬の誘爆だろうというのが、ほとんどの者の見方であった。

私は、数分後にモクモクと上昇するきらびやかなキノコ雲に、数枚のシャッターをきった。

吉浦の近くではないことは事実であったし、作業に追いまくられていたため、私は別に意に介せず仕事を進めていたが、午後五時ごろになって、負傷者が続々と町に帰って来はじめた。吉浦駅で、衣服の引き裂けた血まみれの人、気の失せた人々が、何を考えともなくホームを歩いている姿を見て、ただ事ではないと直感した。しかし、まだ原子爆弾ということは判らなかつた。

自宅のある海田市町まで帰って、広島市内が大変だということを知ったが、どうする術もなく、翌七日朝、出勤してから、火工兵器の経験者として救援隊を出すこととなり、私もその一員に加えてもらった。

今思えば、的場町で単身トラックから降りたと思う。ガラス工場か？瓶の破片が溶岩のように溶けて、夏の陽光にかがやいていたのが印象的であった。

それから焼けくすぶる市内を、広島駅の方に歩いて、大須賀踏切から二葉の里に出た。東照宮の石造の鳥居が跡かたもなく吹き飛ばされており、大きな松の木も焼けはてて幹のみを残している。

常葉橋にさしかかったとき、川遊びをしていた裸の子どもらが、泉邸の裏の川辺に散在して斃れており、此处からは、被爆したそのままの姿が、まだ片づけてなかつた。

常葉橋西詰(白島)付近は、炸裂下の凄惨な生地獄の最も典型的な状況を示していた。焼野ケ原の路上には、死体と、まだ命のある人間とが折重なって散乱し、中でも兵士であろう軍服が引き裂かれ、赤黒く焼けただれた背中の皮膚に、夏の強い日光が照りつけ、熱さと苦痛に耐えかねてか、隣の同僚の措けているトタンの切端を、おぼつかない手つきで引き寄せて、自分の体にかかけようとし、また、取られまいとして引きもどし、おそらくは、直射日光で熱くなっているであろう鉄板の切端を、遮光のために奪いあう姿。しばし、立ちどまって見ていたが、どうすることもできず、死体をまたぐようにして歩き過ぎた。

その時の自分は、それは救援活動ではなかつた。行方不明の妹の捜索も目的であつたけれども、今考えて、惨禍の予想外の大きさに心をうばわれ、ただ焼跡を無意識に歩いたに過ぎなかつた。しかし、直接の被爆者でなかつたためか、比較的冷静に観察したと思う。道端に数多く設備された防火水槽の中には、火傷の激痛に耐えかねてか、先を争って飛びこんだ様子が見られ、一個の水槽に折り重なって入り、水面に頭や顔を出している。赤く血に染まった水槽の水が、小刻みに震えて、断末魔の鼓動を漂わせている。時折り、大きく息吹く呼吸が、人間の死に到達する一里塚のように思われた。

同じ路地に、焼け果てた並木がある。それに直立不動の兵士が立ちかかっている。何か警備についているのだろうかと思ひながら、前を通り過ぎて、振り返って見ると、視線が動かない。立ったままの姿で被爆し、そのまま硬直して木に寄りかかり、倒れないままに息を引取っている。あたかも男のマネキン人形の顔のような、目は開いて、呼べば答えるような容相である。戸外で、火傷もせず、放射能線で死んだのであろうか。

また、爆発と同時に、家から飛出したと思われる一五、六歳の裸の少年は、戸口でうつ伏せに倒れ、火傷一つしていない。時計が八時十五分で止まっている。

つぶさに見ているうちに、白島の電車停留所(終点)付近に来ていた。そこには、バスに乗った人が、そのまま被爆し、火災にあつたためか、皆前向きに坐つたままの姿で黒焦げになっている。勿論、男女の判別もできない。反対側には、電車が満員であつたのであろうか、折重なって黒焦げになっている。バスも電車も焼け果てて骨格のみ

となっている。

それから八丁堀方面へ出て行ったが、このあたりから、わりかた死体も片づけられていたが、キリンピヤホールの前の道路に、胴がはち切れそうにふくれ上がった馬の死体があった。本通りの惨状もものすごかった。(中略)

一日中、歩き疲れて、探し求める妹の姿も見あらず、心の動揺をおさえながら、徒歩で一〇キロメートルの道のりを、海田町に向って帰途についた。その後、学徒動員で京橋町のミシン縫作業場において被爆した妹は、ミシンの下から這い出して、学友と一緒に、にわか雨の中を牛田方面に逃げて、幸い一命だけは助かり、八日に帰って来た。頭に負傷していたが現在も元気である。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

牛田新町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、牛田本町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目、牛田中町一丁目 二丁目、牛田南町一丁目 二丁目、牛田東町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、牛田町早稲田一丁目 二丁目、牛田町旭一丁目 二丁目、牛田山

町内会別要目

この地区の範囲は、牛田町新町区[うしたまちしんまちく]・同丹土区[たんどく]・同神田区[かんだく]・同本町・同旭町区[あさひまちく]・同早稲田区[わせだく]・同南町区[みなみまちく]とし爆心地からの至近距離は、二葉の里饒津神社裏山の太田川畔で約一・八キロメートル、もっとも遠い地点は、戸坂町に接する太田川畔で約四・六キロメートルである。

牛田地区は、広島市を形成する太田川デルタ地帯の創成前は、河口部に位置したところで「市域周辺の丘陵地帯では、そのふもと近く波が押し寄せ、牛田・中山・矢野などの縄文遺跡付近は海辺に形成された小集落をなしていた」し、「奈良末期に太田川河口左岸に牛田荘が成立して奈良西大寺領の荘園となっている(新修広島市史)。」と、往古からひらけていたが、太田川の流砂によるデルタの発達にともない、城下町築営ごろには、中心部からすでに離れていた。昭和四年、広島市へ編入合併されるまでは安芸郡牛田村であり、戦前までは、新しい文化住宅(当時流行の軽便洋風住宅)があちらこちらに点在しながらも、なお田園的なおもかげを多分に残していた。戦後、市の発展にともない、ベット・タウン的住宅地区として急激に発展をとげ、都市計画路線の整備とともにますます変貌しつつある。

原子爆弾の被害はかなり大きく、家屋の倒壊、破砕などと同時に、他町からの避難者が続々と詰めかけて来て大混乱をひきおこした。なお、地区の被災当時の建物総戸数は一、七七八戸、世帯数は一、八九六世帯、人口は七、四五四人で、町内会別の内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
牛田町新町区	200	200	840	牛尾孟
牛田町丹土区	132	132	525	石田房五郎
牛田町神田区	218	230	849	香川正平
牛田町本町区	326	332	1,269	武田悟
牛田町旭町区	205	208	835	芝田寿
牛田町早稲田区	247	269	950	任都栗司
牛田町南町区	450	525	2,186	小越

また、地区内に所在した主要建物(または事業所)は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
牛田国民学校	牛田町旭町区	日通寺	牛田町新町区
安楽寺	牛田町本町区	早稲田神社	牛田町早稲田区
牛田説教所	牛田町神田区	市水源池	牛田町新町区
不動院	牛田町新町区		

二、疎開状況

人員疎開・物資疎開

市の中心部からはずれており、田畑も多かったから、人員の疎開も、物資の疎開も実施していなかった。

むしろ、市内から疎開して来る人や物資を受入れる立場であった。

学童疎開

しかし、牛田国民学校の学童疎開だけは、広島市の計画どおりにおこなった。

昭和二十年五月十二日、六月二十二日、七月十八日と三回にわけて、高田郡船佐村(現在・高宮町)へ児童三八三人、教師二人が集団疎開をおこなった。

疎開児童は、芸備線十日市駅で下車し、あとは徒歩で疎開先の船佐村へむかったのであった。

なお、二年生以下の児童、および高等科生徒は疎開せず残留した。

このほか、郡部の縁故をたよって個人的に疎開した児童が約二〇人いた。

三、防衛態勢

町内会ごとに消防班が組織され、警防団が厳しく指導・訓練をおこなった。防火訓練もバケツ操法などしばしば実施し、焼夷弾などの災害に対処した。

各町に防空壕を構築し、手押しポンプを備え、各家庭には貯水槽を置いていた。

なお、各家庭で、リュックサックに救急品(薬品など)を入れて、万一の場合、ただちに持ち出せるよう常時身辺において用意していた。

四、避難経路及び避難先

地区は山林地帯に接しており、恰好の避難先にめぐまれていたので、わざわざ地区外に指定する必要がなかった。しかし、一応牛田国民学校・早稲田神社の裏山・不動院などを避難先として決めていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
陸軍部隊名称不明	旭区牛田国民学校内	兵数僅少・救急品保管の関係部隊
工兵隊作業場		当日、動員部隊が召集され、入隊式を行った直後、原子爆弾に遭遇した。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日の夜から、ぶつつづけに六日の朝まで警報が発令せられ、警防団牛田分団長西本義見以下団員一同は、本部事務所(本町区)に詰めかけ、平常の訓練どおり灯火管制を厳重に取締り、万一に備えていた。

防空壕への待避命令は出さなかったが、みんな神経過敏になり、睡眠不足でもあり、極度の疲労感におおわれていた。

午前七時三十一分、警報解除になったので、警防団も一応解散し、それぞれの家に帰っていった。

この日、牛田地区は、各町内会とも建物疎開作業はなく、また、動員令による他地区の作業も、四、五日前に胡町の作業に出動して、任務をはたしていたので、出動していなかった。

警防団員を解散させてから、西本義見分団長は、牛田地区でも北部にあたる太田川沿いの新町区の自宅へ、自転車に乗って帰る途中、白島の工兵隊に通じる工兵橋の南約一〇〇メートルの土手筋の道(幅員六メートル)にさしかかったとき、北方(可部福王寺付近)に、落下傘が一つ空中に浮いているのを見た。

炸裂

その瞬間、自転車もろとも道路上に投げつけられていた。爆発音にも、閃光にも気づかなかった。突然降って湧いた瞬間的な事態であった。もちろん、広島市に侵入して来た敵機の爆音など聞いてはいたかった。

また、新町区の浄水場に近い自宅で被爆した山下寛治の日記「歌心帖」によれば、「...朝の食卓におもゆ一杯をのんだときであった。

私は敵機の爆音を聞いた。土間に久仁雄を背負った妻に対して『あれはBの音ではないか、行くのを一寸待て。』と言いながら、目をあげて、裏の窓から空を見たとき、つんざくような爆発音と、ものの吹っ飛ぶのと同時であった。障子の紙に火がさらさらとのぼった。

『やられた。』と立ち上がって、そばの柱へだきついた。家は崩れなかった。背中にするどい声をかけて妻が抱きついて来た。

それからの行動は夢中であった。

『村田が焼ける。』と、妻が言った。私は身仕度をして飛び出した。六〇間先の藁屋根はすでに燃え落ちていた。』と、その瞬間を記録している。

七、被爆の惨状

一大事を直感

西本分団長は、気がつくやうに倒れかけた家の下に投げ出されており、路上には黄色なものが漂っていた。

防空訓練で常に、黄色は毒、赤色は爆弾として指導していたので、「これは危険だ。」と感じ、すぐ川土手の下に逃げた。

ちょうど工兵隊の召集日であって、みんな国民服を軍服に着かえているところであったが、その入営兵が逆に牛田の作業地へむかって来だしたのを見て、一大事が発生したことを直感し、自宅へ帰るのを思いとどまった。

早稲田神社に救護所設置

安楽寺の指定救護所に行くと、すでに負傷者が四、五人来ていたが、火災の危険を感じたので、救護所を早稲田神社に変更した。ただちに白鳥町の鉄道第一ガードの所の軍医に連絡を取るべく走ったが、すでに神田橋の下の四、五戸が火災の最中で、下側も通れたいため引きかえし、現在の信用金庫(早稲田区)の傍の知人宅に、乗れもしない自転車をあずけるため立ち寄ると、「顔が血でまっ赤になっている。どうしたか。」という。防空頭巾をぬいで、知人宅にいた女医に診てもらうと、馬蹄型に頭骸骨が露出していて、剥げた皮膚がひたいに垂れさがっていた。応急処置をして、バスの終点まで行ったが、気分が悪くなったので、町内対策を桑本・今田兩人に引きついで、やっと水源池を横切って、不動院の傍の自在坂神社(新町区・不動院の守護神)の竹やぶの中へ、他の避難者と一緒に逃げたという。以上は一つの実例であるが、全般的にみると、原子爆弾の炸裂の瞬間、家屋の天井や戸・障子などが爆風によって破壊された。ほとんどの町民が、自分の家がやられたと直感したが、外へ出てみて被害が全町内に及んでいるのに気づき、事の重大さを知ったのであった。

ガラスはこっぴ微塵に砕け、畳は吹きあげられ、屋根瓦は一方に吹き寄せられていた。

着火炎上

神田橋たもとから上流・下流に沿って建っている家々は、ワラ屋根の農家風の家が多かったが、次々に屋根から火を噴きあげ、熱風が道路を吹きつけていた。

警察の牛田派出所の土間に、火のついたこれらのワラが飛びこんで来た。やがて川ぞい一帯は火炎につつまれて全焼した。

防火活動

すぐに工兵隊が出動して、ポンプを持ち出し、延焼を防ぐために全力をあげるとともに、町民もこぞって防火に、救出に活躍し、郊外に逃げる者は余りいなかったが、中には世帯道具を背負ったり、老人や子どもを連れしたりして、他人のことはおかまもなく戸坂方面へ慌てて避難する者もあった。即死者や重軽傷者が地区全体の約半数に達した。

避難者殺到

また一方では、市中心部から工兵橋や神田橋を渡ったり、あるいは饒津神社西側の川沿いの土手道伝いに、白鳥や二葉の里方面から、ドッと避難者が殺到し、午後二時ごろになると、牛田を経て、戸坂方面へ避難者の行列が続いていった。いずれも重傷者で、見るも無残な幽鬼のような姿であった。雨も降らずカンカン照りの道で、中には歩けなくなって倒れる者、あるいは息絶える者などたくさんいた。

地区の被害状況

この炸裂時の瞬間的な被害は、つぎのとおりである。

町名	家屋被害(約%)			人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破・無事	即死者	負傷者	無事
牛田町	30	66	4	4	44	52

また、火災状況については、つぎのとおりであった。

町名	最初に発火した		延焼状況	終息時刻
	場所	時刻		
牛田町本町		炸裂と同時	西部地区全焼。	十二時頃
神田区	神田橋東詰の家から	炸裂と同時	西部地区全焼。三分の一位残る	十二時頃
丹土区		十時頃	西部方面全焼	
新町区		十時頃	西部の一部全焼	
南町区		九時頃	西部方面全焼	

川土手の惨状

避難者の数は、時々刻々と増加し、太田川沿いの川べりや、幅員六メートルの土手筋の道には、死人や半死人が無数に転がり、道路はやっと自転車が通れるぐらいの幅しかなかった。

惨状まなこを覆うこのなかを、負傷者の無秩序な列が、ソロソロと川土手の道を、北へ向って続いて行った。そのとき、雷鳴と共に、雨がパラパラと降った。

六日の夜

夜になるころには、町にも、町を囲む山にも、断末魔に喘ぐ無数の避難者が所狭いほどたむろしていた。

町内の家々は、みな避難者を抱えこみ、夜になっても家人の眠る場所がなかった。中には、再び空襲があれば、家が崩れるのは必定だと考えて、付近の山や畑に出て、蚊帳をつるし、一夜を明かす町民も多かった。

地獄なるこの闇夜につける火の

タバコ火赤しわれ生きてあり

山下寛治

工兵作業地の仮設糧秣倉庫には、衣服や食糧が貯蔵してあったが、夜目にも明るく燃えあがり、いつ終息するかも知れなかった。この火災は、ずっと一週間ぐらい燃えつづけた。

市内を望見すると、まだ燃え続けていて、上空が不気味な明るさでいろどられていた。

不安におののく避難者や、重傷で息絶え絶えに呻吟しつづける負傷者などの救護作業、あるいは夜食のムスピの炊出しをして、六日の夜は大混乱を続け、町民の多くは、ついに眠ることができなかった。

七日朝

七日朝になると、町内に避難して来た人々は、潮がひくように、それぞれの方向へ散っていった。牛田に残ったものは町内に縁故者のある人とか、歩こうにも歩けない重傷者であった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

被爆当日、この地区には救援隊は来たかったが、町内の太田萩枝医師(県病院医師)が、早稲田神社前をはじめ、負傷者の集っている町内各所を巡って、手持ちの医薬品により応急治療に活躍した。

半壊の牛田国民学校の校庭に、七日、呉海兵団派遣の医療救援隊が到着し、天幕を張って臨時救護所を開設した。また、白島の自宅で被爆負傷し、血染めのシャツのまま、神田橋で治療活動にあっていた国友国氏医師も来援するなど、不眠不休の活動が続けられた。これらの救護班の活動と相まって、町内の警防団・婦人会・町内会役員その他の人々の協力もめざましいものがあつた。

幸い、牛田国民学校には、陸軍の医薬品が多量に疎開されていたから、これを自由に使用することができた。

七日にはまた、西本警防分団長ほか七、八人の団員が集って、町内の避難者に対し、食糧の配給を行なった。

牛田地区に逃げて来た避難者のうち、なお余力のある者は、さらに奥地の戸坂その他の方面に逃げて行ったが、牛田に到着しただけで、動くことのできなくなった重傷者が、路上にたくさん呻吟していた。

警防団は、これら重傷者の救護にあたることにし、肥車(大八車)に麦ワラを敷いて、これに乗せ、戸坂の陸軍病院分院(戸坂国民学校)に何度も何度も繰返して運びこんだ。途中、車の上で死亡する者もあつたが、最後に五体ほどの死体が残った。

死体の処理

九日、東警察署から巡查部長が来町し、死体を火葬に付すよう指示した。警防団ではさっそく死体の収容と処理にかかった。しかし火葬する燃料がないので、警察の了解を得て、公園に土葬したが、軍人以外の死体が約五〇体に達した。

死体の中には、工兵隊が近いのか軍人の死体も多かつた。これらは、工兵作業地(水源地の山)の記念塔の下の、大きな防空壕の中で、工兵隊長が指揮を執り、兵隊が処理した。

浮流死体

奥地の竹原方面の村から、来援した警防団の協力を得て、四、五日かかって死体の収容作業をおこなつたが、太田川に無数に浮いて流れ寄って来る死体は、満潮時に一体ずつ引きあげ、早稲田区任都栗司宅の裏側の公園に収容して火葬にしたり、土葬にしたりした。

死体引揚げにたずさわった早稲田区の高井一夫は「上げ潮によって、神田橋あたりに流れつく死体は数を知らず、ただもう無我夢中でドンドン引きあげたが、死体をつかむと、その手の皮がズルリと剥げた。その感触は今日までも忘れられない。

そしておびただしい腕時計が、それらの仏の腕からはずされた。これはひとまとめにして、東警察署へ引渡したものである。」と、述懐している。

これらの死体の氏名は、確認できなかったけれども、任都栗司の記録によれば七〇〇体以上に及んだという。

供養塔

昭和二十一年五月二十七日、多くの死体を火葬したり、土葬した公園に供養塔を建て、毎年、慰霊祭を執行している。

このほか、土手筋など、その死体があつた場所でそのまま火葬にふした死体もあり、これらの遺骨は、後に平和公園の納骨堂へ納めたのもあつた。

町内会の機能

牛田地区の各町内会の機能は、被爆によって停止するという事はなかった。各町とも町内会長や役員が無事であったし、火災も一部分にとどまったから、従前どおりの町内会運営ができたし、立上がりも早かった。

食糧配給は警防団がおこなったが、その他の配給はすべて町内会が執りおこない、混迷と不安の交錯する被爆後の町民の生活を、ともかく守りとおした。

地区内に殺到した避難者への炊出しは、町内会としては米がなくておこなわなかったが、各戸においてそれぞれ救助の手がさしのべられた。

九、被爆後の生活状況

人口増加

八月末ごろの人口は、被爆前の人口に比較して約二割方増加した。

農家があったとは言え、すでに都市化が進んでいた地区であったから、食糧事情の悪化は、他の地区と同じで、人口の九割以上が配給に頼らねばならなかった。

ハエの発生

市内中心部のような荒廃はなかったにもかかわらず、後にはやはりハエが多数発生し、家の中はもちろん、歩く人の背にもクログロと止まっていた。

町内会としても駆除薬品の入手ができず、また他の駆除方法もないまま、発生するに任せる状態であったが、進駐軍の飛行機による薬剤の散布によって急激にいなくなった。なお、ノミやシラミはいなかった。

生活物資

当局の配給物資だけでは、到底、飢餓を克服することはできなかったから、生活物資の入手のため、広島駅前あたりの闇市を利用する者がほとんどであった。

食糧配給は、麦の時は麦ばかりであり、大豆のときは大豆ばかりが配給されて、配給機構そのものが混乱していた。

暗い夜

夜は電灯がつかず、暗やみ生活がながくつづいた。ロウソクも乏しく、とにかく夜になると早く寝るほかなかった。電灯がついたのは、山下寛治日記によると九月二十九日であったという。

疎開児童の復帰

牛田国民学校は、窓ガラス・天井など爆風で飛散し、使用不能たまでの半壊状態であったが、負傷しなかった教職員が協力して、校舎の修理や整備をおこない、ただちに疎開児童の引揚げ準備にかかった。

九月一日、授業開始の準備を完了。同三日、入学の受付をおこない、同十二日、高田郡船佐村の集団疎開児童の引揚げをおこなったが、授業開始当時の児童数は、約六五三人程度であった。

暴風雨禍

九月十七日の暴風雨によって、牛田地区の平地部一面は浸水した。新町区あたりでは、水源池の北から不動院の北まで深さ約二メートルの浸水があり、床上一五センチメートル以上の水びたしとなった。

本来、牛田は、昔、沼地のようなところであったから水に浸りやすいと言われているが、太田川の堤防が切れなかったのは幸いであった。

経済活動

壊滅的被害からまぬがれた牛田地区は、混迷虚脱の状態から脱出するのも早かったようである。経済活動も徐々に復旧し、日一日と正常化への道を歩んでいった。

いちじ殺到して来た避難者も、二十一年春ごろから、ぼつぼつ牛田を引揚げて行くようになってから、平穏なもとの田園住宅地にかえていった。

十、その他

不動院の柱

国宝不動院の、本堂の南の角から二本目の柱(ケヤキ材、直径約三五センチメートル、高さ約二メートル)が、爆風によって「まん中から折れた。後日、本堂修理の際、その柱は取替えられた。

牛田の山麓にて

小野勝(被爆地・牛田町早稲田区五九九)

ズボンのひだにあいていた小さな穴をつくろわせていたために、予定の出勤時刻が遅れたいらだたしさを、しいて押し静めながら、玄関先にひき出した自転車の荷台に、風呂敷包みの書類を結びつけた。

トタンに、首すじがチカリッ！

熱ッ！焼夷弾か？

そばの防空用貯水槽の四斗樽から、戦闘帽で水を汲み、頭からかぶり、体を伏せた。

フワッ...体が浮いた。

爆風！？

右手の防空壕の入口めがけてころがりこんだ。

「空襲！空襲！待避！待避！」

私は声をかぎりに叫んだ。耳をすませたが、あたりは静まりかえっている。

隣組全滅...？家族も...？

不安が全身をおののかせる。たまりかねて防空壕を飛び出し、すぐ前面の小高い丘にかけのぼった。

眼前に展開する牛田の町の家並みは、ほこりをかぶった古い油絵のように、変に白っぽく、くすんでいる。川を隔てた五〇〇メートル余り向うの市街地は、夕立雲につつまれたようにうす暗く、見通しがきかない。

何処かにぶい、しかし腹の底まで響くような、何かの爆発音が断続する。

何事が起ったのだろうか？

割り切れぬ気持ちのままに、ふと見あげた空に、例のあのキノコ雲！

火薬庫の爆発か、ガスタンクの爆発か。

飛行機の飛ばぬ空襲なんてありはしない。

市街から遠くへだたったここらまで、危険が及ぶ心配はまずないとみてよかろう。かりに、火災が延焼して来ても、だいぶん後の問題で、それまでには打つ手があるというものだ。

そんなとりとめのないことを考えていると、わが家の方から、子どもの泣き声と、妻の狂気じみた叫び声が聞えてきた。文字で綴ると相当長い時間のようなのだが、実際は、せいぜい二分か三分...、それよりもっと短かったかもしれぬ。

「どうしたんだッ。そこにいたらダメだ。早く裏山へ逃げなさい！」

声のする方角にむかって、姿の見えない家族に、そう呼びかけて私は丘を駆けおりた。

すぐ傍らの橋本の家から、私の勤務先(産業設備営団広島支所)の野中支所長が飛び出して来た。素ッ裸である。

「何でしょう？」

「わかりませんネ。」

「家のなかにはムチャクチャですよ。」

- 私はまだ自分の家の中のことは知らなかった。

見れば、彼の背中からまっ赤な血が流れている。五〇歳とは思えぬ若々しい艶のよい女のように白い膚が、あやしく美しくさえ見える。

「その傷は...」

「床の間の壁が、倒れかかって来たのですよ。」

「とにかく、消毒しておきましょう。」

私は野中支所長を、私の家の台所につれていった。水道の蛇口をひねったが、水は、チョロチョロとこぼれ出て、すぐ止った。

それでも洗面器の底に、わずかながら水がたまった。肩にかけていた救急カバンから、私はクレゾール液を出して、その水に溶かした。傷口を洗い、オキシフルで消毒したが、背中の中の傷をつつむだけの三角巾も繃帯もあるはずはなく、いち応、このままにしておいて、後で繃帯材料を探すことにした。

台所から座敷の方をのぞいて、あッと私は驚きあわてた。

畳は、そこここにはね返り、障子・ふすま・天井板がバラバラにこわれて散乱し、タンス・机・ミシンなどがバタバタとよこたわり、ガラス・食器・衣類・壁土などが見わけもつかぬ有様で積み重なり、足の踏み入れようもない。ただ呆然と見つめるばかり...

子どもの頃から大掃除の手伝さえ拒んできた無精者の私に、この乱雑の限りをつくした状況は取りつくしまもな

かった。やけくその舌打ちをしながら私は戸外に出た。被爆後、一五、六分後であったろうか。

家の前の細い坂道は、相変わらず無気味に森閑としている。

ただ、市街地の方で爆発音が続いており、それにかすかながら物の焼けはじける音が聞えてくる。

私は、忘れ物を思い出したような気持ちで、空を見あげた。

それは、何という美しい情景であったことか。あのキノコ雲の上部は、大きなシャボン玉の群れのように、虹色にかがやき、静かにうごめいている。

「やっぱり、ガスタンクの爆発だったのだナ。その蒸気に太陽がさして、スペクトルな色彩を映したのだナ。」

ふとそんなことが頭に浮んだ。

一〇メートルほど下手の曲り角の生垣のあたりから、人声がきこえてきた。目をやると、軍刀を杖にした将校と、その肩にすがった夫人らしい女…。

将校の頭には、グルグルと布切れが巻かれ、顔面にはタラタラと血が流れている。右腕も、軍服の上から布でしばられ、ダラリと垂れた手くびに血が伝わっている。夫人の顔面は蒼白で、歩行も息苦しいようすである。

「どうだったのですか…」

私は声をかけた。

「自宅に直撃弾ですよ。白島方面は全滅です。それにもう火災が起きて、神田橋を渡るのが精一杯でした。」

やっぱり爆弾だったのか…。敵機のいない空襲…。

「まァ、そのままではいけますまい、繻帯をかえてあげましょう。」

私は二人を上隣りの家の中にある井戸端に連れこんだ。足の踏み場もない台所口から声をかけたが、人の気配は感じられない。仕方なく、勝手に知っている台所の、あちこちを物色して、洗面器を探しあて、井戸のポンプを押した。冷たい水は勢いよく吐き出されてきた。

洗面器一杯に、クレゾール液をつくり、将校の頭の布を解いた。どこからか血がふき出してくる。

「しまった。大きな傷だったら、血の止めようもないかも知れぬ。」

しかし、そんなことは考えていられなかった。顔を洗面器につきこますようにして、掌で頭じゅうのほこりや血痕を洗い流した。

「薬がしみますか。」

「イヤ、大丈夫です。手数をかけてすみません。」

傷口は、右上頭部にみつかった。一寸余りの裂傷である。ガーゼで傷口をおさえ、血を拭きとると、白いものが見える。骨かなと思う。手ばやく傷口にガーゼを重ね、防空演習で習得した要領で三角巾をしぼりつけた。

どうにか血は止ったようだ。何となく気が落ちつき、度胸がすわった。

「腕の方も手当てをしましょう。上衣をぬいでください。」と、医者のような口をきいていた。

(中略)

いつのまにか、私たちの側には数人の見知らぬ負傷者が、あたかも指示された順番を待っているかのごとく立ちならんでいた。

しかも、下の坂道には、三々五々、それこそ老幼男女の別なき負傷者が、裏山をめざして避難して行くのを見かけた。

「ケガのある人はここへ来てください。消毒してあげますから…」

私は、時々、そう呼びかけた。しかし、それに応じて来る人は半分もなかった。その他の人たちは、血走ったおびえたまなざし、何かに追いかけているような足どりで、後を振り向くのもこわいかのように、石ころの道を踏みしめて、坂を登って行くのであった。

衛生材料の乏しくなった私は、それでも、医者気取りで

「すみませんが繻帯材料を持っている人は出して下さい。何でもよい、布切れをもっている方は、あのバケツの消毒液で、よく洗濯して、固くしぼって下さい。」と、呼びかけた。

次々に、傷口の消毒をし、仮繻帯をしていった。その間にも、言葉少なに、この避難者たちの語るところは、言いつつに、自分の家が直撃弾を受け、町は火の海で、家族はバラバラになっている、ということであった。

何人の手当てをしたであろうか。今、何時ごろであろうか。腕時計を持ったことのない私は、どの家の時計もこわれ、止っているだろうから、時間を知るよすがもない。避難者の姿が途絶えて、井戸端に私一人となったとき、

いい知れぬ孤独感と疲労におそわれた。同時に、忘れていた家族の安否が気がかりとなり、裏山へ登って行った。

山上から眺める市街は、ただ濛々たる砂塵と煙に蔽い包みかくされていた。時折り、その暗黒の切れ間に、火炎の点滅しているのが瞥見される。

それまで全く気がつかなかったのだが、眼下の畑中の一軒家がほとんど燃え落ちて、家財や柱がくずぶっていた。藁屋根の農家であった。消す人もなく燃えるにまかせて、燃えきったのだろう。

山に向って、妻や子どもの名を呼んだ。

隣組の人々も呼んでみた。けれども焼けつくような真夏の太陽の照りつける山には、コダマも返って来ない静けさが、たちこめているだけである。皆、山奥に隠れているのだろう。

まあ、それもよかろうと、諦めて山をくだり、家に帰り、とにかく腰をすえ、体を横たえるぐらいの場所を造るべく、飛散物の取片づけをすることにした。

(中略)

夕方近くたってから、家族や近所の女・子どもが帰って来はじめた。昼飯も食べずに、裏山のどこかにおびえながら待避を続けていたのだった。

女・子どもには、幸いに大した負傷者はなかったが、それでも、頭や手足の露出部に軽い火傷や、何かの小さな破片での傷を受けていたものは数人あり、それらは、各自の持ち合わせの油や赤チンで、取りあえず手当てを施してやった。

八月六日の夜は、家の中の片づけもできなかつた近所の数家族が、次の空襲の恐怖も手伝って、そこらの畑の空地に野宿するのが精一杯のようだった。

身の週りの大切な物だけをまとめて持ち出し、手近かなムシロ・ゴザ・フトンなどを敷いて、思い思いに横になつたり、あぐらをかいたりして時を過ごした。

昼のあいだは、全然気がつかなかったが、遥かに見渡す西の方己斐方面では、数か所山火事が発生し、燃えるにまかせた火の手は、煙をも赤く染めて、勢いよくのたうっている。

ふと耳をすませば、裏山のあたりでパチパチと焼けはじける音がする。

小高い所にのぼって見返ると、尾根一つ越えたあたりの山から、うすら明るい炎が散見され、「やがて近くまで延焼するのではないか。」と、氣遣われる情景である。女・子どももそれに気づいて「大丈夫だろうか。」と、おびえていう。「山一つ越えた向うだから心配するな。」と言ったものの、夜の火の手は近くに見えるもので、手放して安心もし得ない心地であった。

当時、広島市周辺の山林には、焼夷弾攻撃の場合の延焼防止の目的で、大規模な立木伐採をおこない、防火帯が設けられていたが、そんなものが役立つかどうか。強力な熱線は真夏の乾き切った山々に火災を起こさせ、消す人もないままに、あの瞬間から燃え続けているのであった。

夜露が降り、夏とはいえ夜の風は、おびえ切って、一日中食物もまともに食べていない人々に、肌寒さを感じさせた。

二〇〇メートル余り離れた山麓の第三国人が住みついていた部落のあたりからは、時折り「空襲警報発令！」という声が放たれて来る。

爆音も聞えぬ、誰の指令ともわからぬ号令である。間歇的なその号令に「あいつらの謀略だよ。意地悪をするんだよ。」と、あとでは氣にとめる者もいなくなった。

「牛田だけしか焼け残っていないのに、空襲もクソもあるものか。」と強いて元気づける者もいた。

見はるかす市の中心部は、依然として、濃い煙に包まれ、そのかいまのところどころに、小さな炎が、何一つとして残すものかと言わんばかりに、最後の力をふるっているように見える。

「この上、空襲でもあるまいではないか。」

ふと誰かが「蚊がいないじゃないか。」と、言い出した。そう云えば、なる程、昼間でもヤブ蚊やブトの襲撃を受けるこのあたりなのに、この畑の中に一匹の蚊もあらわれないのである。蚊も爆撃されて全滅したのであろう。

夜がふけて、山火事延焼の危険も感ぜられず、空襲など思いもよらぬことと確認してから「夜露で寝冷えをさせは...」と、子どもたちは、とにかく壊れた家のなかに寝かすことになった。

「ロウソクでよく足もとを照らして、ケガをしないように...」と、注意する私に、子どもを背負い、手をひく女たちは「あかりをつけて大丈夫だろうか。」と、敵機の攻撃目標になることを懸念する。

「バカな心配はよせ。それより、この上ケガをせぬことの方が大事だ。」と叱るようにいったが、やはり同じ心配が私の頭のなかをかすめるのであった。

異常なショックや、帰り来ぬ肉親や、安否の判らぬ親族・知己たどのが話題となって、大人たちはまどろむこともできず、話し明かした。

私はふと何時だったか、東京から来た電通の何とか部長の、時局講演会での話を思い起した。

「マッチ箱ぐらいの量で、大きな戦艦でも破壊することができる爆薬が発明されている。」

たしか原子破壊爆弾と言ったと思うという話を、野中支所長や近所の人に話した。

午後、牛田から出て市街の状況をまのあたりにして帰った支所長は「きっと、そんなものだろう。でなければ、あんなに全市がやられることは考えられない。」と、うなづいた。(後略)

一、地区の概要

町内会別要目

戸坂〔へさか〕地区は、昭和三十年四月十日、広島市に編入されて、安芸郡戸坂村〔あきぐんへさかむら〕から広島市戸坂町となった。

この地区の範囲は、狐爪木〔くるめぎ〕・千足〔せんぞく〕・惣田〔そうだ〕・山根〔やまね〕・数甲〔かずこう〕・大上〔おおあげ〕・出江〔いずえ〕各町内会とし、爆心地からの至近距離は、牛田町に接する狐爪木の山地で約三・九キロメートルであり、最も遠い地点は北端の山地で約六・七キロメートルである。

地区は、市の中心部から東寄り北端に位置し、太田川の上流に沿い、山林にかこまれた平地は、米・野菜の生産地として、穏かな田園風景を展開していた。

戦後、市部の発展とともに、市営住宅団地とかわり、広島市のベット・タウンとして著しく変貌している。

当時の建物総戸数は、三〇七戸、世帯数三七七世帯、人口は一、四四〇人で、村内各部落会の内訳は次表のとおりである。

常会名	被爆直前の概数			常会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
狐爪木	40	50	200	木村八千穂
千足	55	68	240	高野増一
惣内	40	52	210	山本群三
山根	45	50	200	清水政一郎
数甲	32	40	150	福本幸次郎
大上	50	62	230	向井唯三
出江	45	55	210	向井田岸太郎

地区内に所在した主要建物は、戸坂国民学校・呉市水源池である。

二、疎開状況

ここから他地区へ疎開した者はいなかったが、市部からの疎開者・疎開物資は多くあった。昭和十九年ごろから疎開者が来はじめ、そのまま定住する者がたくさんいた。

三、防衛態勢

昭和十三年、従来の戸坂村愛国婦人会を、国防婦人会に改組した。

昭和十四年、戸坂村公設消防組を廃し、戸坂村警防団を結成した。

昭和十五年十一月、広島県訓令によって、市町村常会(部落会・隣保班)に関する整備要領が発せられて戸坂常会が発足した。

昭和十七年七月、大政翼賛会広島県支部規程が発せられ、いよいよ銃後の諸態勢が強化されるようになった。

昭和十九年から二十年にかけては、本土決戦のため、竹槍訓練が強制された。

昭和二十年七月、戸坂村国民義勇隊を結成し、八月六日午前六時、これが編成(前衛・本隊・大行李・牛車・後衛)をおこない、直ちに総人員約五〇〇人が予行演習を実施した。

四、避難対策

この地区が当時郡部であったため、各家庭に防空壕を作ったほかは、別に行なっていなかった。それよりも、広島市被災時の救援並びに受入れについての対策が立てられていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
広島陸軍病院戸坂分院	戸坂国民学校	隊長・藤本軍医大尉
砲兵陣地(未駐留で終戦迎う)	戸坂村字中島	現在・市営住宅地

六、五日夜から炸裂まで

八月五日、警戒警報発令があったが空襲はなく平穏であった。

八月六日、午前六時から戸坂村国民義勇隊の編成と訓練があった。これがため当地区内住民の広島市内での被爆者は、学徒以外は僅少であった。

広島市遠望

原子爆弾の炸裂のときは、不安を感じながらも遠望しているという状況であった。しかし、爆風のため、地区によって程度の差はあるが、天井板・ガラス窓・屋根瓦などが破損した。

狐爪木地区から望見した者によれば、敵機が北の可部方面から南下し、横川上空あたりで爆弾を投下したように見え、投下と同時に、落下傘の物体が、ユラユラと北方に吹き飛んだという。

なお、当日の朝、この地区からは、広島市内の疎開作業に出動していた者はなかった。

七、被爆の惨状

キノコ雲見える

白銀光というかピカッと光って、ブルッと身を絞めるような震動と、ドンと陰気な音がした。その瞬間、絵にも口にも表現しがたい毒々しい雑多の色をつつんだ古綿をかぶったようなキノコ雲がのぼった。

刻一刻と、白・黒・赤の流れ雲とたって新庄山の稜線にたなびいた。これが午前九時ごろであった。

炸裂の衝撃は、さほどでもなかったが、ガラスが飛散したり、天井板が吹きあげられたりして、不安感と焦燥かられた。

被爆者なだれ込む

午前十時ごろから、裸体で焼けただれた被爆者が崩れるように、「水、水…」といいながら、足を引きずって当村へ流れ込み、さらに上流地域へえんえんと続いていった。

なお、炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

部落名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
狐爪木		1	60	39	5	10	85
千足			40	60	5	12	不明
惣内			20	80	不明	不明	不明
山根			20	80	3	7	不明
数甲			20	80	3	5	不明
大上			20	80	4	8	不明
出江			20	80	6	11	不明

火災なし

この地区では、原子爆弾の炸裂により火災が発生するということとはなかった。また、雨も降らなかった。

くるめぎ神社

熱線の影響による諸現象として特記するほどのことはなかったが、爆風の被害で、狐爪木神社の拝殿(三五坪)の西側の根太柱が、一〇センチメートルばかり内側に一本めりこみ、西側の土壁が破れ、東の間の天井と、その屋根が突き抜けた。また、西隅にあった太鼓(直径二尺二寸)が吹きとばされ、東隅の柱で支えられていた。絵馬額面(三〇面)が飛散し、稲荷社(五坪)が三〇度傾いた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護作業

市中から殺到した被災者の救護作業には、村の警防団員をはじめ、婦人会その他村民がこぞって活躍したが、医療救護については、戸坂国民学校にあった広島第一陸軍病院戸坂分院の軍医・看護婦が主体となって活躍した。被爆負傷者は、六日その日からひっきりなしに到着し、一挙に大混乱となった。

陸軍病院分院は、もともと軍人軍属だけを扱っていたが、六日以降は、なだれこんで来た一般市民も収容した。

各教室はもちろん、その廊下にも校庭にも収容し、混乱はそのきわみに達した。

そのうち学校には収容しきれなくなったので、民家を使うことにし、その家の畳数に応じて、収容者(一人ないし一〇人)を割りあてたが、たちまち超満員とたった。やむなく、農家であるから普通よりは広い炊事場の横や道ばたの隅にも収容しなければならなくなった。

みにくく火傷し、剥げた皮膚の、たれさがっている負傷者が、炎天下の地面に、長時間息もたえだえの姿でうずくまったり、転んだりしていた。

中には、すでに死んだ人を枕にして横たわっている重傷者もいた。

陸軍病院の治療だけでは間にあわず、医薬品もなかったのも、中には、気やすめのような民間療法しか受けられない負傷者も多くあった。

死体の収容と火葬・埋葬

負傷軍人は、八月十三日ごろまでに県下各地の分院に転送されたが、残った一般負傷者は、収容直後から死ぬる者が続出し、戸坂村尾岳のふもと(当時・土砂留、現在・桜丘住宅団地)で、七日ごろから十日ごろまで、死体の火葬をおこなった。

避難者の受けは、村役場の職員がおこない、氏名・年令・性別などを記録し、罹災証明書約二〇〇枚を交付し、探しに来た親兄弟などその縁故者のために役立てた。

探し出した縁故者は、看護をしたり、死ねば火葬して遺骨を持ち帰ったりしたが、ただ、重傷者のなかには、すでにものの言えない人やモグモグと口をうごかすだけで、その言葉が聞き取りにくく、ついに死後、無縁仏になった人も多くあった。

死亡者は、約六〇〇人であったが、軍民の区別なく、軍の衛生兵と警防団が協力して、軍用トラックで火葬場に運び、一度に三〇人ぐらいの遺体を、二段にならべて、供出用の松根の残りや、各部落から供出した割木で茶毘にふした。

供養塔

これらの遺骨は、昭和二十年十月、尾長山に仮埋葬をし、そこへ標識として供養塔を建てた。

慰霊祭

毎年八月六日、戸坂村と婦人会の共同主催のもと、供養塔前で慰霊祭を施行していたが、昭和三十四年四月、遺骨を平和公園内の納骨堂に納めた。

現在でも八月六日には、尾長山桜ヶ丘墓地の供養塔で、広島市戸坂出張所の職員などが、盆灯籠を献じて犠牲者の冥福を祈っている。

九、被爆後の生活状況

人口急増

戸坂村自体の被害は、それほどものではなかったが、市中からの疎開者や避難者が、そのまま定住したから、人口が急増した。農家は納屋などを応急的に改造して、居住できるように取りはからった。

昭和二十年八月末ごろの居住世帯数は、次のとおりである。

部落名	世帯数
狐爪木	110
千足	120
惣内	100
山根	100
数甲	70
大上	120
出江	110
合計	730

八工の発生

終戦後、八工が異常に多く発生し、ゴマ塩を撒いたように、あらゆる物にたかっていた。

被爆者の火傷が、ひどい臭気を発散したので、屋内にも無数に集って来て、不衛生この上もなかったが、駆除とか予防とかの環境衛生施策は、なんら施すすべもなかった。また、ノミの発生も多かった。シラミはあまりいなかったようである。

食糧状況

在来の保有米農家は、調味料や日用品の不足になやむことはあっても、主食に困ることはなく、むしろその余剰米を闇に流す者もあったほどであるが、疎開者や避難者などの非農家は困窮した。被爆当座は、玄米配給ながらまず順調であったが長く続かず、物々交換のタケノコ生活というその日ぐらしのありさまであった。野のヨモギ・ヨメナ・セリ・イモの葉など、およそ毒草でないかぎりの草を摘み取り、これをゆでて、少量の米をつなぎに入れ、ダンゴにこねて食べた。

諸物資

被爆後、灯火用として常会からロウソクが二、三本配給され、終戦になってから軍放出の石油が、一戸当り一合ぐらい特配された。主食以外の配給品もきわめて少なく、酒は大部分の農家が、いわゆる自家用と称するものを密造しておぎなっていた。ただ、田植などの農繁期には、増産用の清酒が特配されて、大いに氣勢をあげた。増産用の特配は終戦前からおこなわれていたことであるが、戦後は、三次方面からドブ酒、横川方面から朝鮮酒の密搬入も盛んにおこなわれるようになり、昭和二十五、六年ごろまで続いた。

煙草は密造できず、配給の煙草にヨモギやゴボウなどの枯葉を加えて喫ったりした。

もっとも困ったのは調味料や日用品で、広島駅前や己斐駅付近の闇市へ出向いて入手した。

終戦前の昭和十九年ごろ、市内から運搬した下肥のなかにまじっている脱脂綿を拾い集めて、これを再生する業

者がいたが、戦後は軍用物資の放出などがあるためか姿を消した。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月十七日の暴風雨で、太田川筋の県道が二五〇メートル、村内の県道が一六〇メートル(三か所)損壊した。このため、田畑の流失六町歩(五九、四〇〇平方メートル)、田畑冠水四五町歩(四四五、五〇〇平方メートル)、家屋の流失一四戸、浸水家屋五〇戸におよんだ。家屋浸水では、床上浸水が役場付近(国民学校東側)で七五センチメートルに達した。

また、十月八日の豪雨で、田畑冠水が三五町歩(三四六、五〇〇平方メートル)、浸水家屋が四〇戸あり、農家も非農家も大きな被害を出し、物心両面にわたる打撃を受けた。

戸坂には、軍需用の米や小豆、その他調味品がたくさん疎開されていたから、この暴風雨の災害に際して、濡れ米や小豆などが、軍靴や軍衣袴などの衣料品と共に特別に配給され、急場を一時的にでもしのぐことができた。

再建の道

地区内七部落の常会組織は、終戦と同時にその機能を失い、自然的に消滅したが、村民の団結精神は変ることなく、戦後の新体制に沿って再建の道を歩んだ。年を追うごとに民心も落ち着いてきて、教育の振興、児童福祉の増進など、特に青少年対策として母親学級などを設け、家族制度崩壊による諸問題の打開につとめた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

橋本町、幟町、上幟町、鉄砲町、八丁堀、上八丁堀、銀山町、胡町、弥生町、堀川町、新天地

町内会別要目

この地区は、八丁堀[はっちょうぼり]・鉄砲町[てっぽうちょう]・上流川町[かみながれかわちょう]・幟町[のぼりちょう]・上柳町[かみやなぎちょう]・山口町[やまぐちちょう]・橋本町[はしもとちょう]・石見屋町[いしみやちょう]・銀山町[かなやまちょう]・東胡町[ひがしえびすちょう]・斜屋町[ちぎやちょう]・堀川町[ほりかわちょう]・弥生町[やよいちょう]・新天地[しんてんち]・金座街[きんざがい]の範囲とし、広島市の心臓ともいうべき中枢的な、地区である。

原子爆弾の炸裂点からの至近距離は堀川町で、東南東約七〇〇メートル、もっとも遠く離れていたのは上柳町栄橋西詰で、約一・四キロメートルである。

この地区には文化・経済両面にわたって、重要な諸機関、諸施設などが集中しており、城下町のおおらかな伝統と、いきいきした近代的な色彩との、独特な調和の上に、常時、繁栄していた。

東辺は、清流京橋川に沿う清潔な住宅街の上柳町から、西は、かつて広島城の外濠を埋立ててできたという繁華街八丁堀であり、南はまた、多くの老舗・有名商店・娯楽施設が軒をつらねて、市内随一の殷賑を誇る胡町・堀川町の商店街がひかえている。北は、京口御門から京橋町へ抜ける旧国道を境に、前栽の樹木も美しい閑静な高級住宅街がひらけ、旧藩主の所有であった室町時代風の回遊式名園泉邸(縮景園・お泉水とも呼ぶ)がある。なお当時、園内の浅野侯爵邸の一部に、第二総軍司令部付情報参謀大屋角造中佐指揮下の海外通信傍受所が設置されていて、アメリカ移民二世の婦人二〇人ほどが、海外放送をキャッチしていた。

泉邸は、戦後整備されて、縮景園と呼ばれ、ようやく原型に復しつつあるが、八月六日当日は、おびたしい避難者で埋まり、襲いくる火炎の轟音の中で、園池はたちまち死出の血沼と化した。

このほか、地区内には、各官公庁・官公舎・学校をはじめ、各銀行・デパート・映画館及び新聞社・放送局などの報道機関、または、のれんを誇る多くの老舗・専門店が建ちたらび、市内の第一級地という名をほしいままにしていた。

被爆直前の、地区内の建物総数は二、八九七戸で、人口は一〇、五六八人で、その内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
上柳町	247	244	808	佐藤繁司
下柳町	350	350	1,200	三戸孝作
幟町上組	150	150	250	今西貞夫
幟町下組	253	250	1,000	内海了海
石見屋町	92	92	400	桧垣新兵衛
橋本町	48	45	120	蔵田新兵衛
山口町	350	350	1,200	大浜己三郎
銀山町				桑原謙吾
東胡町	40	80	240	高野又一
弥生町	130	120	680	増田卓一
上流川町上組	235	250	830	三佐尾貴一
上流川町中組				山田二三次
上流川町下組				土岡喜代一
鉄砲町上組	401	240	1,360	今田寿盛
鉄砲町中組甲				下村哲
鉄砲町中組乙				中尾蔵三
鉄砲町下組				川瀬建吉
八丁堀上組	226	220	840	田坂戒三
八丁堀中組				砂原格
八丁堀下組				島村譲一
胡町	93	95	380	武永三太郎
斜屋町	41	45	200	久保田豊造
新天地	120	不明	500	小林敏雄
堀川町	121	135	560	丸岡才吉

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
中国地方総監府総監官舎	上流川町	第百生命保険株式会社	八丁堀上
控訴院長官舎	上柳町二九	営林署	八丁堀上
検事正官舎	上柳町一八	広島無尽株式会社	八丁堀下
予審判事官舎	上柳町一八	広島県酒造組合	斜屋町
東警察署	山口町	幟町国民学校	幟町下組
広島証券取引所	銀山町	広島女学院	上流川町
広島銀行山口町支店	山口町	広島中央放送局	上流川町
太陽館(映画館)	下鉄砲町	中国新聞社	上流川町
東洋座(映画館)	下鉄砲町	勸業銀行広島支店	上流川町
帝国座(映画館)	新天地	胡子神社	胡町
新天座(劇場)	新天地	天主公会	幟町中組
花月(寄席)	新天地	流川メソジスト教会	上流川町
歌舞伎座(劇場)	八丁堀下町	中国管区防衛司令部	上流川町
広島税務監督局	八丁堀上	浅野観古館(のち郷土館)	上流川町
広島税務署	八丁堀上	泉邸(浅野侯爵邸)	幟町上組
福屋百貨店	八丁堀下		

二、疎開状況

人員疎開

十九年ごろから、老人子供の疎開をすすめ、二十年初めごろには、町内会・隣組を通じていよいよ強力な推進をはかった。大部分が縁故疎開で、下柳町の場合は、縁故疎開と学童疎開を併せて全体の約三分の一の三二〇人が疎開した。流川町・胡町などでは全体の約五分の一ぐらいが疎開した。

建物疎開

二十年六月ごろから建物疎開が始まり、堀川町(現在の金座街)西側、八丁堀西側(当時練兵場に接した)、鉄砲町上(当時陸軍倉庫に接した側)、電車通西側全部を陸軍の手で強制的に疎開を命ぜられ、またたくまに取りこわされた。

物資疎開

八丁堀・鉄砲町・堀川町などをはじめ各町とも、二十年初めごろから、物資疎開が強力に推進されたが、疎開先との関係や輸送の関係から、なかなか予定どおりに進捗しなかった。大方は市内の縁故先や知人の家の納屋・蔵を借りて行なったが、思うようにはかどらないまま、被爆時まで続いていた。

疎開は、家具や商品を主としたが、中には家屋の建具や畳までも疎開した人もあった。また、日常さしあたり必要な食糧や食器などは、地下室や防空壕の中に入れていた。

二十年四月ごろまでは、まだ順調に疎開できたが、その後急激に戦況が悪化し、運搬車のほとんどが軍の徴発にあい、荷造りしたままで、被爆した物資も随分多い。運搬できないので庭に穴を掘り、重要な品物を埋めていたが、大丈夫かどうか心配になって再び掘りあげて見たとき、被爆して失ったという人もあった。

学童疎開

幟町国民学校の児童三年生以上は、山県郡八重町、および同郡壬生町へ集団疎開し、縁故者のある者は個々に疎開して、そこの学校を利用した。集団疎開児童は民家へ分宿した。数人ずつの分散疎開ではあるが、でき得るかぎり町を単位に、同村同校を選んであてた。

また、双三郡方面に疎開し、至極簡単な収容施設にはいった者もあった。

しかし、たまたま五日が日曜日であったところから、荷物を取りに広島に帰ってきていて被爆死亡した者が相当多かった。

残留した低学年児童一、二年生は、地区内の各寺院で分散授業を続けた。幟町カトリック教会もその一つであったが、六日当日は、ほとんどの児童が、まだ登校中か、自宅で食事中であった。

三、防衛態勢

昭和十六年ごろ、各町内では隣組班(約八戸～一五戸編成)を組織して、毎月防火訓練を実施した。

昭和十九年二月、針屋町では酒造組合裏の空地に、町内合同避難防空壕を町民の総出動で、二か月間ばかりの日数をかけ、収容人員一五〇人ほどの防空壕を造った。

また、各隣組では、家庭防空隊を結成して防空防火の訓練を励行した。防火用水と砂袋を各家に備え、特に、夜の灯火管制は嚴重に実施し、毎夜、二回交替で警防団と警察が巡視を行なった。

警防団本部(警防団長・田中品太郎)を幟町国民学校に置き、各町ごとに分団を設置、各分団は、町民に任務の分担を決め、警報の伝達から送水・消火・避難・救護・灯火管制に対する措置など、予想され得る万一の災害を、最少限にいとめるよう、その訓練を重ねた。

二十年六月、国民義勇隊が創設されたが、大隊長丸岡才吉、中隊長砂原格、小隊長には各町内会長が就任して、男女を問わぬ訓練を半強制的に実施した。

なお、国民義勇隊防衛総監稲葉実は、八丁堀上組に居住していた。

四、避難経路及び避難先

八丁堀・堀川町・鉄砲町・新天地方面の町民は、第一避難先を浅野泉邸・幟町国民学校・広島女学院。第二避難先を饒津公園・大芝公園。第三避難先を安佐郡祇園町と予定していた。

被害の少ない時は、第一・第二へ、被害の多い時は第三の場所へとしていたが、八月六日当日は、予定の命令どおりにはいかず、第一・第二の場所へ集合し、翌日ごろから各自の縁故先へ分散していった。

上流川町・斜屋町・胡町では、その避難先をまず町内防空壕または幟町国民学校とし、状況によっては京橋川上流か二葉山・牛田山と定め、このほか、泉邸・西練兵場・長寿園・東練兵場も予定していた。ただし、八月六日、被爆したながらも歩ける者のほとんどは、泉邸や西練兵場へ避難し、そこから常葉橋付近の河原にのがれ、逐次、牛田・東練兵場へと、避難していった。

また、上柳町は検事正官舎の竹やぶへ、橋本町は牛田方面へ、下柳町は東練兵場方面へ避難した。なかにはバケツやシャベルを持って避難する者もあった。

幟町の町民は泉邸の奥の川土手に定めていたから、そこに避難したが、その後は、各自それぞれの行動をとり、まとまった行動などはできなかった。

五、所在した陸軍部隊集団

広島地区第一特設警備隊(六〇〇人)が、幟町国民学校内にいたが、原子爆弾で全滅した。

また、上流川町の松田重次郎邸には、中国管区防衛司令部が設置されていた。なお、空襲警報時には、泉邸前の松原の中に、たくさん軍馬をつれて来て、木陰につないでいた。

六、五日夜から炸裂まで

五日午後九時すぎの警報発令後は、各自各担当部署に待機した。一般の町民は各家庭において、次の警報に注意をおこたらず、終夜、老人子供および病人を除いて、一睡もとらないでいた。夜明け前、少し仮眠して、七時ごろ、また警報発令で警戒体制についた。町内会長はメガホンで、全町くまなく指令してまわった。

胡町・流川町方面の町民の二割ぐらいが、防空壕へ避難し、約八割程度は役員の指揮に従って、銀山町・山口町・京橋町を経て京橋川に避難した。

各家庭によって違うが、集団待避できる大防空壕には行かず、家庭内の防空壕に避難した者もいる。また、防空壕やその他の避難場所へいかず、家の中で用事をしていた者も多かった。

七時三十分ごろ、警戒警報が解除となり、八時に家屋疎開作業を行なう予定であったため、役員は早めに朝食をとり、町内会長宅に集合しつつあった。

また、一般町民は、解体家屋の跡かたづけに出たが、途中でやめて、各自家庭に帰り食事をしたり、出勤したりする準備をしていた者が多い。

屋外では、平時とかわらず電車も走り、人々も、それぞれの用事で歩いていた。家庭で食事を早くすませた者は、疎開現場に出て、倒壊した材木を薪木に作っている者もあった。

目撃者の一人は、初め飛行機の通ったあと、西の方で電光のようにピカッと光るものを見た。その瞬間、何か見ていられなくなり、顔に熱いものを感じたという。この人は、そのため顔に火傷した。

またある人は、敵機だと思って見た直後、閃光が走り、轟音がきこえたが、瞬間、一メートル先は、やや黄色を帯びてしまって、何も見えなかったという。

家のうちにいた人は、青い光を見たが、敵機は、もちろん見なかった。しかし、機影を見たという者でも、敵機は一機であって、他の僚機を見たという者はいなかった。

建物疎開実施概況

動員令による出勤人員は不明である。中学生以上は、ほとんど動員され、他の地区に作業のため出勤していたが、これも、その人員はわからない。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先地名	建物疎開計画予定数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区から実施のため集合した人員概数
上柳町	不明	不明	4	なし	市吏員未着につき実施せず	なし
下柳町	不明	不明	5	不明	不明	なし
橋本町	なし	なし	3	5	不明	不明
石見屋町	不明	不明	なし	なし	なし	不明
山口町	不明	不明		5	なし	不明
銀山町	不明	不明	10	なし	なし	不明
弥生町	なし	なし	10	なし	なし	なし
東胡町	不明	不明	1	不明	不明	不明
上流川町下組	80	不明	50	50	不明	主として学童がこれに当る
鉄砲町上組	不明	不明		約 20	不明	なし
八丁堀	不明	不明		約 50	不明	なし
胡町	不明	不明	50	20	不明	近郊から応援隊があったが詳細不明
堀川町	不明	不明		30	不明	なし
幟町	不明	不明	不明	不明	不明	なし

七、被爆の惨状

上柳町付近

そのとき、上柳町町内会長は、自宅の町内会事務所の玄関口で、町民の一人から「今日の家屋疎開計画の、私の家(長屋式)は中止してもらいたい。」と、言って来たので、話し合っていたところであった。

突如、顔を強打された感じがし、同時に眼鏡が飛び、わからなくなった。外を見れば、一メートル先も見えず、急に周囲が騒然となった。「会長さん、会長さん。」と、続けざまに呼ぶ鋭い声が四方八方から、聞えるだけであった。

事態の重大さを直感し、まず声のする近いところからと、隣家の主婦の声をさがしあてて救い出そうとしたが、倒れた家の下敷きになっていて、なかなかできなかった。

次に、予審判事夫人を救い出したが、すでに顔全体が焼けただれていた。判事夫人を抱きかかえるようにして、検事正官舎の防空壕に引きずりこんでから、そのあと、声をするのを手あたり次第に助け出したが、その人数は多くて覚えていないという。

八丁堀鉄砲町付近

八丁堀・鉄砲町付近も同じようであった。

その瞬間、何がどうして、こうなったか考える暇はなかった。ある人は、目前に爆弾が破裂して、その硝煙が大きく横にひろがり、襲いかかって来たので、とっさに体を地上に伏せたという。たちまち、火災が発生した。ある一人は、火元から通路に出て、体を低くし、這いつくばいながら、水槽を求めて五メートルほど行った。その水槽で体に水をかけ続けた。水をかけているうちに、爆風が運んでくる砂塵が周囲に立ちこめ、一寸先も見えなくなってしまった。

四、五人の者が、その水槽で、やはり水を頭からかぶっていたが無残にやられていて、誰が誰か見分けることもできなかった。

このとき、赤煉瓦造りの陸軍倉庫が火を噴くと同時に破裂して倒れた。「あっ、倉庫に爆弾が落とされた。」と思った。時間的なことはわからないが、爆風が止むと、カラッと晴れて熱い太陽が照りつけはじめた。あたりをながめると、見渡すかぎり家が倒れていた。周囲に居合わせた者は一様に、火傷や切傷それに打撲傷を負い、血と埃にまみれていた。また、数人の子供が、あちこちの路上に坐ったり、伏せたり、転がったりして、すでに虫の息になっていた。

水を求める者、親を呼んで泣く者など数限りない負傷者である。家の下敷きとなった呼び声が、あちこちから上がり、下敷きになっているのが、外から見えていながら、倒れた家の大きな材木や壁土の下に敷きふせられている

ので、施す術がなかった。そのうち、火が廻ってきたので、力をあわせて、救い出される者はできるだけ急いで助けだしたが、ひっぱり出されなかった者は見殺しにするほかなかった。各町を通じて、見殺しになった者の数は多く、鉄砲町だけでも何百人もあったという。

胡町流川町付近

炸裂直後、全町の家屋が殆んど倒壊した。一〇分後、各所に火災発生。三〇分後には全町火の海となり、下敷きになった者や重傷者などを、救助する方法もなく、歩ける者は涙をのんで避難しなければならなかった。

屋外にいた者は、全部死んだ。屋内にいた者は、硝子窓が破れると同時に、マグネシウムの発火に類似した閃光を見たが、轟音は気づかなかった者が多かったようである。

家屋の下敷きとなって救いを叫ぶ声と、脱出した人の出火を告げる声が交錯して、一瞬に狂乱の巷と化した。下敷きになっていたところを、やっと救出された人も、その後、原爆症に侵されて大部分死んでいった。

避難状況

胡町は、武永町内会長が指揮して、約一〇人ばかりが、泉邸の川土手へ集団避難したが、その他は各自が思い思いの行動をとったので、計画的な集団避難はできなかった。

泉邸裏の河岸沿いに避難中、物凄い竜巻が起り、対岸の河原に避難している人々の、逃げまどうありさまが目あたりで見られた。

恐怖におびえた避難者は、それを見ると、つぎつぎ水中に飛びこんで数時間を過ごしたが、水の中につかっているまま盛んに下痢嘔吐をした者も多い。傷つき疲れはてた無気力な身体で、常葉橋の下の河原や神田橋の上で、数日そのまま過ごした者も数人いた。

上柳町・下柳町・弥生町・橋本町・石見屋町・銀山町・山口町・東胡町付近は、地区によっては助かった人もあったが、殆んどは死亡した。家屋が倒壊し、道路がふさがれてしまったため、逃げおくれた者は、火炎につつまれて焼け死んだのである。

栄橋の上は、イワシをならべたように死人や重傷者が倒れていた。泉邸の東側では、太田川につかる人や、舟で避難する人もあったが、川に入った人は、ほとんど死んだ。

その日、九時過ぎごろには、泉邸の裏は避難者でうずまだったが、すでに動けなくなって、倒れて助けを求める虫の息の者や、死んでいる者が何百人もいた。歩くにも、転んでいる人と人とのあいだをさがして足を入れるほどの、すきまもない状態であった。また、兵隊が数十頭の馬を避難させて来ていた。

八丁堀・鉄砲町・堀川町・幟町付近も、一瞬に倒壊、火災が発生した。

町役員が、歩ける者は、市外地の指定場所に行くよう勧めたが、そこまで行かず途中で、各自、思い思いの方向へ避難したようである。市の中央方面から牛田・祇園方面へ向けて逃げる人の数は、実に多くひきもきらず続いた。男女を問わず、ほとんど半裸体で、中には全裸の人も少なくなく、恥も外聞もかえりみる余裕はなかった。

血の流れるまま、頭の髪は火炎で焼けちぢれており、衣服はシャツ・パンツのままで、それが皆、ヨレヨレに裂けていた。そんな姿の人間が無数にフラフラぼつぼつと歩き続けていったのである。

橋梁付近・河岸付近には、生き残った者が、熱気からのがれようとして集り、たくさん水中に沈んだり、浮いたりしていた。河岸の足のとどくところには、びっしりと避難者が立っていて、入りこむ余地もないほどであった。流川教会の谷本牧師は、小舟をこいで泉邸裏から対岸へ、負傷者を何回も運んだ。

瞬間的被害

この地区内は、全体的に家屋倒壊・火災発生のため、各町ともつぎのとおり全滅状態である。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
上柳町	100				17	60	23
下柳町	100				20	58	22
橋本町	100				40	44	16
石見屋町	80	20			24	49	27
山口町	100				40	53	7
銀山町	100				31	54	15
弥生町	100				39	44	17
東胡町	100				30	65	5
鉄砲町	100				50	29	21
上流川町下組	100				47	43	10
上流川町上組	100				46	48	6

八丁堀	100			69	30	1
斜屋町	100			66	34	
胡町	100			81	19	
堀川町	100			86	14	
幟町	100			39	50	11

火災発生炎上

各町とも、各所から発火したので、最初どこから発火したということを記憶している者がいない。それぞれの体験が、まちまちであるのはいたしかたないが、たちまちにして、全町、見わたすかぎり火の海となったのは事実である。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時刻		
下柳町	四方から火の手があがる	九時頃	不明	不明
橋本町	西方から	八時二十分頃	不明	
石見屋町	西方から	八時十七分頃	不明	二日余り後
银山町	西方から	八時二十分頃	不明	
弥生町	四方から火の手があがる	八時二十五分頃	不明	二日位
鉄砲町	不明	八時二十分頃	各所から火の手が上がったというだけで、そのときの状況を記憶しているものはいない	夕暮れ近くになって
八丁堀	不明			
堀川町	不明			
胡町	不明	十時頃	十二時頃は全町火の海となる	午後三時頃
斜屋町	不明			
上流川町	不明			
幟町	不明	八時三十分頃	各所から発火	午後三時頃か

降雨の状況

地区内の広範囲にわたって、降雨があったが、場所によって、時間差がある。この降雨のため、火力がかえって増大したように、感じられたところもあったという。

泉邸付近では、午前十時ごろ降雨があった。長い時間ではなかったが、どしゃ降りの雨で、雨というよりヒョウと言ったほうが、適当なような大粒(駄大豆ぐらい)のものが降ってきた。

場所によっては、降雨のころは、もう焼きつくさされていて、雨が降ったことによって、火の燃えようが変わったという現象は、特別に見られなかった。

六日夜

六日夜は、避難した場所で、それぞれ仮眠し、翌日になって、ともかく歩ける者は、自分の家の焼跡を点検するのが、やっとであった。

到る所に死体がゴロゴロし、無数の大木が幹だけになったり、折れたりして、黒焦げになっていた。夜の静寂のなか、月光にすかして見ると、黒焦げの立木が、あたかも火にあぶられて起ちあがり、体をよじって呻吟する断末魔の人影のように眺められた。

諸現象

家屋は瞬間的に倒壊した。比治山や元宇品の山などが、眼前に眺められ、地区のいたるところから火を噴いた。

午後二時ごろ、避難者でござたがえす泉邸の中の森が燃えはじめ、木から木へと燃え移る音がすごかった。それと同時に竜巻がおこり、地上の木切れ・板切れ・トタンなどが高く、一〇〇メートルぐらい吹き上げられ、泉邸向こうの河原(大須賀町付近)の方へ落下した。火災がおさまって、夕方焼跡に帰ってみると、使用に堪えたであろうという物は、大混乱のさ中にかかわらず、誰かに持ち去られていた。

防空壕に保管していた物をはじめ、地下に埋没していた物品さえも、あらかた掘り出されて、無くなっていたという。

泉邸前の広い松原(戦後、警察官舎建つ)では、二抱えも三抱えもある大木をはじめ、一〇〇本以上もあった松の木が、あるものは根こそぎ倒れ、あるものは中途から折れ、東の方になぎ倒されたようになっていた。

熱線による自然着火は、衣類・ふとんなどの黒色部分から発火した。

また、木の電柱の中途から、ポロポロと炎を発しているのを見たが、その付近は、まだ家屋の火災はなかった。炊事などの残り火から、発火したものもあるであろうが、屋内に火の気がない場所の柱の下あたりから出火したという報告がある。

硝子や陶器類は焼けて変形したり、溶けて一塊りになったりした。

爆風の中心が通過したのか、鉄砲町中央あたりの地上にいたと思われる人が、相当はなれた家の屋根の上に吹き

とばされて死んでいた。

電柱・電車は、そのまま立っていたが、電車は、全部黒く焼けて、鉄骨ばかり残り、車内には幾人も死んでいた。また、道路上に、腹部の破裂した馬が倒れていた。猛烈な爆風によって、最初、家が浮きあがったと感じた直後、倒壊した。トタン・木片など、すべての物が天空に高く舞いあげられた。

助かった者

自宅の庭園に構築した防空壕に待避したため、全く負傷しなかった人も数人いる。

家屋倒壊の際、すばやく机の下にもぐり込んだため、また、爆風に吹き飛ばされたが、落下物がハシゴ段に支えられたため、圧死や焼死から、まぬがれた者がある。

鉄砲町・京橋通り町内会では、酒の配給があったのを機会に、八月六日、町内の懇親会を催す予定で、当日、早朝それぞれ手分けして、郊外へ野菜・魚の買出しに出かけていて、命拾いをした婦人が数人いる。懇親会は、空襲が日増しに激しくなり、お互いに、何時別離となるやも知れぬ折りから、お別れパーティの意味を含んでいた。

福屋前、電車内にて

有木重雄

(被爆場所・八丁堀福屋の前、電車内 当時・市立中学校動員学徒、三年生)

列車が中山のトンネルを出た頃だったと思う。警戒警報の長いサイレンが耳に入った。

その頃、警戒警報は日常茶飯事で、別に気にする人も一人も居ない。

やがて矢賀駅で、鉄道関係の人々を大量に吐き出した列車は、終着駅広島のホームにすべり込んだ。午前八時頃だったと思う。毎日の事ではあるが、市内電車への乗替えが行列で一苦労するので、ホームから客は駅前の乗場まで駆け足である。私も例によって、前の乗車口の列に並んだ。己斐駅で宮島線への乗替えが早くできるからである。

電車が入った。小さな市内電車なので、やがて満員となる。運転手が"次にしてください"というのを、むりやり、若さで乗りこむ。節電のため、電車のコントローラーに小さな鉄棒が打ち込んであって、一定速度以上走れないようになっていたから、ノロノロと、強制疎開のために壊しかけた民家の町を走り、痩せこけた鉄橋を渡って、中心部に入っていった。

車内はスシ詰め、汗の熱気でムンムンである。電車が、広島を中心街八丁堀に停車すべく、カラカラとブレーキを掛けはじめた。

人の頭越しに映画館街を見て過ぎた。先刻のものだろうと思われる警戒警報の白旗を、屋内に引揚げているおじいさんの姿が、はっきり見えた。

その瞬間である！

ちょうど電車のパンタグラフと架線がショートした時の、スパークを大規模にしたような青白い光を全身に感じた。幾千メートルの地下に、音もなく突き落とされる感じで、何とも表現しようのない気持良さであった。

自分では数分もたったと思われたが、フと心配そうな母の顔が、暗闇の中に浮んだのである。"そうだ私には母が居たのだ"と思考力が蘇生したとたん、私はまた、惨状の中に現実を取りもどしたのである。

"どうした事だ"と、車外に目をやると、先刻の、白旗を持って屋内に消えた何気ないおじいさんの姿の一コマとは、打ってかわって、まるで夕立でも来るよううす暗い世界であった。

車内はさっきの瞬間まで、まばたきをして動きのあった人々の顔が、ほこりをかぶった人形のように黒い顔で、突っ立っている。

自分の胸に目をやると血である。瞬間ドキッとした。

電車の後部の屋根に火が燃えている。乗客が動かないのが不思議である。とにかく外へ出たくてはと、隣の人にゴメンナサイと声をかけたが、応答はない。身の毛のよだつ思いで、無中で人をかき分けた。私が動く隙間ができる。その隙間に、人がのめりかかる。

私の声が大きくなる。"ゴメン""ゴメン"と、運転台まで出た。運転手がブレーキの鉄輪を持ったまま倒れている。勿論、血だらけの黒ん坊である。

運転台の窓をとび降りた。

驚いた。車内だけだと思った修羅場が、見渡す限り全面である。

電柱は倒れ、線はたれ下り、ガレキが散乱し、車には火である。まだうす暗い。火だけが無気味に赤い。

目の前は広島唯一の福屋デパートである。アチコチで動くものが見える。悲鳴が聞える。ウメキ声が聞える。グニャグニャになった自転車がある。

半裸の死人が転がっている。

全体に火勢が強くなった。

ふと気がつくと、横に人が立っている。身内のような気易さで声をかける。

"どうしたんですか""さあ"

"どっちへ逃げたらいいのですか""さあ"

何だかたよりない。高田郡向原町に疎開する前の私の家が皆実町にある。無意識に、本通りの入口から南を見る。通りは、まるっきりない。火と倒れた家・電柱・線である。

熱い風が顔をなでる。

"練兵場だ"と直感して、夢中で逃げる。

なかたか走れない。そのうち何処からともなく、破れた服のクロン坊が、一つの集団となって練兵場へと足を運ぶ。

みんな気力だけで歩いている。

"助けてくれ"という強い声、弱い声、何ともわからぬウメキ声、パチパチという火の音。

自転車を握ったまま死んでいる人。尻を高くして死んでいる人。エビのように曲ったまま動かない人。

仲間らしい二人が"殺人光線だろう"と、当時はやりの新兵器の名が出ている。

石垣をよじのぼって練兵場へ出る。やはり見渡す限り、全面火の海である。

うす暗い煙の中を、右往左往人影が動く。黒コゲの死体が散らばっている。

タズナを持った兵隊が、馬を枕に倒れている。

腹這いになった死人の服の、背中部分が焼けて無い。

熱い。"逃げられないかもしれない"という不安が私をかすめる。北へと向かう。二部隊の前まで来た。

ハス畑(広島城の濠か)の中に、頭だけ出した黒ん坊が念仏を唱えている。熱さから逃避しているのだろう。横のふくらんだズボンをはいて、上半身裸の兵隊がたくさんいる。何をしようとしているとも見えない。不思議なことに、頭の毛が帽子のあった部分だけ黒い。ベレー帽をかぶっている感じだ。

動く人を見て、大分勇気が出た。

"死んでたまるか"

そう自分に言い聞かせながら、白島線へ出た。

部隊の裏営門にボロボロの正装をした衛兵が、ささげつつのまま、上官らしい軍人と何か大きい声で応答している。思いのほか白島線は火が少ない。道路は何処も同じ状態で、とても下を見ないと歩かれない。二、三人の困りが布ぎれを体につけて線路に添って北へ歩いていく。泉邸の森が見える。所々火のついた立木も見える。

その時、崩壊した家の屋根瓦に上がっていた女の人が走り寄ってとびついて来た。"助けて下さい"。一瞬ピクツとした。頭髪を振りみだし、カスリのモンペはさけ、防空ズキンを肩から下げ、顔は血とほこりである。目鼻の凹みが特に黒い。"私も逃げてるんです"と私は叫んだ。

その人のいうには、壊れた家の中に子供が居るという。むりやり私を引っ張って行った。屋根瓦をまたぎながら、引連れられるままに行ってみると瓦の下で"おかあちゃん、いたいよ"という男とも女とも解らぬ子供の声である。何とかしたいと思ってでもどうしようもない。瓦を二、三枚はいで見る。でもどうしようもない。"誰か呼んで来る"といって電車道まで帰って見た。兵隊が三人いた。公用という腕章をつけた兵隊を両脇からかかえるようにして歩いている。まともな者は一人もいない。でも声をかけて見る。"子供が"といっても目もくれない。空虚な人間である。

避難民がふえて来る。重傷者が多い。火勢がいつの間にか増して来た。霧のように青い煙が地上をはってくる。叫びながら一人の兵隊が寄って来る、憲兵という腕章と軍刀が目についた。あとはどんな恰好だったか覚えていない。押しつけるような目と言葉で"学生か！逃げないで市内に残れ！警備にあたれ！"という。反射的に"ハイ！"とはいったものの、"冗談じゃない"。憲兵は煙と避難民の中へ小走りで行って行った。

"逃げろ"、と自分に指令した。ボヤボヤしているとどんな事になるか判らない。

しかしチョッピリさっきの母親も気に掛かる。申し訳ない気持でふり返って見る。瓦の上にうずくまって子供の名を呼んでいたはずの女の人がいな。くすぶっていた材木に火が燃えている。"もうだめだな"と自分にいった。再び北へ向って避難の歩を早める。煙の向うから動きの早い人影がこちらへ来る。さっきの子の母である。泣きながら、わめきながら、まるで狂乱状態である。胸の中で手

を合わせる。誰彼となく助けを求めて歩いているのだろう。我身を忘れた母性愛の執念である。目頭があつくなる。

また我身に返る。白鳥線の終点の電停が見える。風が強い。火災のためだろう。左手に通信病院のビルが見える。入口に横になった負傷者が少しずつ動いている。君護婦らしい女の人がいそいそと入口を往復している。

常葉橋に向ってあるべき道がない。警防団と思われる人が、盛んに"ダメダ"と手を振っている。

そこから人の流れが東へ向う。私も泉邸の北はずれに向って歩いて行った。幅二メートル程の低い石垣の小路である。少し上り坂になっている。上がると泉邸の北端であった。

川が見える。驚いた事に老樹の並木の下は横たわった人でうずまっている。どこから集って来たのか判らない。川へ下りる所は、二重三重の重傷者の人垣である。"痛い！水！助けてくれ！"の合唱である。恐らく水を求めて集って来たものと思われる。みんな目の前に水を見ながら精魂つきたものだろう。名前を呼びながら人を探している者もいる。目の前がクラッとした。坐り込みたい気持で一杯である。

"ここではまだ駄目だ"と自分をむち打ち、川向うはまだ火が少ない。渡河を決心した。川への下り段の方へ行く。もう人の上を歩かねば通れない。

"チョットゴメン！"と人の背中を遠慮して歩く。死んでいると思っていた人が、"痛い！"と反射的に動く。真黒い背中の皮がヌルツとはげる。なんぼなんでもこれ以上人の上を歩く事は、良心が許さない。少し下手へ下る。土手の石垣が高い。軽傷の人が石垣づたいに川へ下りていく。そのままとびこむ人もいる。下は深いらしい。下流へ向って人が流れている。死んでいる人も居る。

とにかく向岸へ行けば安心だ。私も石垣をつたって下り始めた。無気味に動く石がある。私の上からまた一人下り始めた。半分程下りた処でうしろ向きのままとび込んだ。水が冷たい。流れが思ったより速い。泳ぎには自信があったが、なかなか思う様に進まない。一生懸命に足をかく。たるんでいたゲートルが解けて巻きつく。浮身で流れながら、靴とゲートルを脱ぎすてる。上流から人が流れて来る。私の肩に抱きつく。追い払うのに一苦労だ。水をガブガブのんでしまった。流れて来る人を避けながら、足の届く処までたどりついた。目標の場所より相当下流である。よろけながらやっとの思いで、州に上陸した。(後略)

泉邸にて

桑原房枝(被爆地・広島市幟町上組一〇一番地 主婦・当時満四二歳)

眠るといっても、モンペ姿のまま横になるだけであった。

警報続きであった夜があげると、形だけの大豆のご飯をたべて仕事につく。主人は屋上の納屋に、下の荷物を入れ、私は下の納屋の整理にかかる。

「警戒警報発令！」

またかと思ひながら、続いて空襲警報になるかも知れぬと緊張しているうちに、解除になった。

八時ごろ、主人がパンを食べたいというので、母屋に帰り支度をしていると。耳の近くに飛行機の爆音をきいた。

「アラ、今、警報が解除になったのに…」

と言ひながら、庭の築山に出た。

何かピカッと光り、ドンと音がした。

「ヤラレタ」と直感して、思わずそこに伏せた。そして、こわごわ顔をあげた。

と、見ると、母屋は倒れており、人々の泣き叫ぶ声がする。

「組長さん！」「桑原さん！」と、叫ぶ声。

「皆さん、泉邸へ逃げてください。早く早く、火の始末をしてにげてください。」と、大声で叫ぶ声。

道路に出てみると、広島女学院専門部の生徒さんたちが、血みどろになって、あちこち駆けまわっている。

屋上にいた主人はどうしているかと、あわてて崩れおちた屋根瓦を、ザクザク踏んで裏に行ってみる。

主人は、屋根にたてかけてあった梯子の一番上に腰かけて、私のパンを待っていたのだが、梯子と一緒に吹きと

ばされている。

貸家の便所のところに、たくさんの壁土にうもれ、手だけ出して「ウンウン…」と吟心っている。私は、覆いかぶさっている壁土やタル木などを、満身の力をこめて払いのけ、引っ張りだそうとしたが、足の先が引っかかっているらしく、どうしても動かない。

「助けて下さい。誰か助けて！」

声をかぎりに叫んだ。しかし、周囲はすでに裏も表もなく崩壊しており、人々はただ右往左往するばかり。

折りよくそこへ、私の家の離屋におられた石田さんが通られたので、手伝ってもらい、ようやく引っ張り出すことができた。

石田さんが頭の方を、私が足の方を提げて逃げようとする、西隣りの家あたりから火が出はじめた。

「桑原さん、すみません。私も家内を連れて逃げなければいけません。」

火が出たのにびっくりした石田さんは、そう言って走って行かれた。

私は一人で、頭の方をかかえ、主人を曳きずるようにして、泉邸の方へ逃げはじめた。

そこへ町内会幹事の三木力先生が通りかかられた。

「お宅には四人も子供さんがおられるのに、ここで奥さんが亡くなられたら、どうします。ご主人はもう意識もない状態ですから、あなただけは逃げなさい。子供さんのために生きなければいけません。」と言われる。

私は、しかし、かすかながら呼吸だけはしている主人を、一人残して逃げるわけにはゆかなかった。

「お父ちゃんお父ちゃん、しっかりして！早く逃げなければ、二人とも焼け死んでしまいますよ。」

私は泣いていう。だが返事はしない。ただ息をしているだけ…。

頭の方を持って、少しずつ引っ張ってゆく。

私も力つきた。誰かにすがりたいと思っても、だれもかれもソワソワと逃げまどっているばかり。途方にくれた。

折りよく五組の山根さんと出逢った。

「よしきた。お手伝いしましょう。」と、山根さんは、私の助けを引受けてくださり、ドンドン泉邸の方へ連れて行ってくださったが、「身内にケガ人がいるから…」と、言って、山根さんもまた去られた。

泉邸内の東裏の兵(迎軍峯)の中腹で、また私と主人だけになった。しかたなく主人だけを中腹において、丘の頂上まで助けを求めに行った。

とたんに、丘の裏の川に沿った深い竹やぶが、ボンボンバリバリと燃えはじめた。

丘の上には谷本牧師がおられた。すぐお願いして、主人を頂上まで連れて来てもらい、草の上に横にした。

私はグツタリした。しかし、ここも安全かどうかわからない。ともかく、しばらく様子を見ることにして、一緒になった隣組の人々と一か所に集っていた。

「桑原さん、私はあわてて子供二人を家においたまま逃げて来ました。一緒に連れにいてください。」と、五組の沖本さんが言われる。

私は沖本さんと二人で、町内の見える所まで行って見れば、町内は一面に火の海、ものすごい勢いである。狂人のようになって、助けを請う沖本の奥さんを、皆でなだめて泉邸の裏に落ちつく。

主人は相変わらず息をしているだけ。頭の方をよくみると、屋根から落ちたとき頭を打ったらしく、両側に深いキズがあった。手当てのしようがない。私たちは六組の人と一緒に、拾って来たテーブル掛けを、ならんで横たわっている負傷者の頭の上にかへ、転がっていた幟町国民学校のバケツで、川の水を運んで来ては、頭にかけて熱さを防ぐ。

川向うの大須賀町が炎上中で、息がつまりそうである。

川の水は渦をまいて、高く巻きあがる。

向う岸の家が燃えはじめたとき、一年生ぐらいの男の子が、ワーワー泣きながら逃げまわっている姿が、はっきりと見えた。

迫り来る火炎に、熱さのあまり、前の川へ飛びこむ人もたくさんいる。

私たちは、最後までこの泉邸にとどまることを約束する。避難者は増える一方である。

時折り飛行機が空を飛ぶ。いつ敵機がおそって来るかも知れない。

だんだん泉邸に避難して来る人が多くなる。

しかも、火勢は強くなるばかりで、川に飛びこんでそのまま死んでいく人も数多い。

主人はやはりかすかな呼吸をしているだけである。熱が出たようなので、泉邸の池の水を汲んで来たが、生ぬるい水である。タオルを持っている人から借りて冷やす。

時刻は、ずっとお昼を過ぎたころであったと思う。

「松の根が燃えだしたから、元気な人は消火につとめてください。」

町内幹事の中島さんが叫ぶ。皆、手に手に水の入りそうな物を持って、松の根にかけるが、一杯の水をバシッとかけると、シュッと行ってまた、パーッと燃えあがる。

このただ一つの逃げ場所を火の海にはいけない。それは皆の心であった。バケツリレーで必死に消火につとめたいがあって、大事に至らずホッとした。

川には、兵隊さんが、あちらこちらに腫れあがったまま浮いている。

泉邸の囲りも、苦しんでいる兵隊さん、また死んでいる兵隊さん、また二部隊に動員で来ていた女子商の生徒さんたちが、みんな大きく腫れあがって苦しそう。

時は、もう夕方の六時ごろ。

男子の元気な方が、焼けなかった防空壕から米を、家庭菜園からまだあまり熟していないカボチャを取って来られた。

防空壕の中から、また五升炊きの釜を探して来て、壊れた水道管のチョロチョロ水を使い、にわか造りのクドでご飯をたいた。五升ばかりの米で二百個ほどのおにぎりを作るのは骨が折れた。

不安のうちに、日はトッブリ暮れる。

「空襲警報発令！」「警戒警報解除！」という声を、人ごとのようにきく。

丘のひと所では、動員で二部隊に出ている、朝礼をしていたという女学生二〇人ぐらいが集っていたが、ブクブクに上半身が腫れて、とても苦しそうである。

「おばさん、水をください。」「水をください。」という。

「水がのみたい。家に帰ったら、杓に五杯ほどガブガブのみたい。」

「コップに何杯も何杯ものみたい。」

火傷には水をやってはいけないと言われていたので、なだめるのに一苦労。

「おばさんはうそつき、今あげると言っておいてまだくれない。」とダダをこねる。また、「明日は休むことを二部隊にとどけねばならない。」と、うわごとのようにいう生徒もいる。胸をえぐられる思いで聴く。肉親の方に連絡をする方法もない。

県女三年生の私の娘次子(よしこ)も、どうしているやら、まったく不明である。今朝元気よく動員で、南観音町の広島印刷に行ったばかりである。

夜もようやく十二時を過ぎるらしい。真夏とは言え、夜霧が降りるためかとても寒い。

屋根もなく、敷物もない。木の枝を集めて来て焚火をする。

市中はまだ、あちらこちら燃えている。

時折り、生きていたのか、木立の中でフクロウがホーホーと鳴く。何とも言えぬものさびしさ…。

横になったままの主人は、相変わらずかすかな呼吸を続けているだけ、オムスビも食わず昏睡状態。

時々、女学生さんたちを見舞って、ほとんど一睡もしない夜があけた。

七日である。

女学生さんたちは相変わらず苦しんでいる。

ようやく二人の女学生の氏名を聴くことができた。一人は楠木町の近藤さん、もう一人は安佐郡可部町の林さん。紙ぎれに住所氏名を書いて腰につけておく。

朝九時ごろ見廻ったときは、もうこの二人の息は切れていた。丘の下の香菜園のほとりの茶の株から一枝を手折り、胸もとに供えた。

川をみても、丘をみても、ブクブクに腫れあがって横たわっている兵隊さんたち、帽子をかぶっていたそこから下が、キチンとソリをあてたようにはげている。

昼前であったろうか、おにぎりの配給があった。ようやく連絡がついたらしく、はじめての配給である。麦の入った大きなおにぎりである。昨夜、小さなおにぎりを一個食べただけにまったく食欲がない。

娘の次子の安否が気にかかるが、重体の主人を残して探しに出ることもできない。

お昼過ぎであった。七組の板屋の娘さんが私たちを尋ねて来られた。お話をきくと、娘は生きていて「幟町の両親の生死がわからない。」と言って泣いていたそうである。

娘にこの場所がわかるか知らん？と、気になるので泉邸の外に出て見る。

被爆後、はじめて見る町の様子、一昨日までの建物は何一つない。幟町から八丁堀の福屋は勿論、遠く宇品の方まで見通しである。

私の家の蔵も、六日のドカンときた時には、家は倒れたが蔵は立派に立っていた。それが跡形もなく焼けていた。仏間の押入れにあった金庫が、焼けただれてポツンと立っている。貸家も全部焼けて、ただ風呂釜が残っているだけである。

真夏の暑さと、焼残りの灰の熱さで、とても一か所にながくは立ってられない。

水道管はねじれて、ポツリポツリと水が出ている。電線が道路一ばいに這いまわって何処が道やらわからなくなっている。

庭の松も、大きな幹だけねじれて残り、蘇鉄も黒焦げの幹だけになっている。

家の石門もこわれている。炭になった木切れを拾って、石門のところに「次子に告ぐ両親無事泉邸の丘に来れ」と書きしるし、再び、私は泉邸に行く。

泉邸では、他市から応援に来られたらしい兵隊さんが、死骸や重傷者を運んでおられる。私の家の前の大きな水槽に、体格のよい男の人がうつ伏せになって死んでいたが、逃げ遅れて、焼けただれて死んでいる人も数えきれない。

主人は相変わらず、かすかな呼吸を続けているばかり。今西町内会長は、腰を痛められて歩けない。

主人に飲ませる薬も、火傷につける薬もない。おにぎりや乾パンの配給があったが、お腹がすいているのに、ちっとも欲しくない。

七日も夜を迎えた。ものすごく冷える。丘から市中を見渡せば、あちらこちらに、まだ火炎が見える。

主人も寒かろうと思うが、掛ける物がないままで、また一夜明ける。

町内の世話をする人も谷本牧師と中島さんと、私だけである。

朝早く、宇品八丁目から高畑のおじいさんが、かけぶとんと敷ぶとんをかついで、見舞いに来てくださる。

泉邸に避難している事がようやく伝わって、市外から知人や肉親が探しに来られ、一緒に帰っていく人もある。

「幟町上組はどちらでしょうか？」

高畑のおじいさんと話しているとき、若い人の声、ふと視線をあげると、娘の次子が立っていた。「ここよー」と呼ぶと、娘はころぶようにして寄って来た。

かたわらの主人をみて「お父ちゃん、元気だして...」と、泣きくずれる。娘が呼ぶと、「ウン」と、はじめて返事をした。

娘は、安佐郡川西村から徒歩で帰る途中、軍のトラックに乗せてもらって帰って来たという。(中略)

元気な人たちは、縁故を頼ってポツリポツリ去っていくが、私と娘は昏睡状態の主人を連れて何処へも行けない。

八日の晩も、ホーホーとフクロウが鳴く。

前の川に浮いていた兵隊さんたちも、応援の兵隊さんによって葬られたので、姿が見えない。

寒い寒いとふるえながら、九日の朝を迎えた。一人去り二人去りして、この丘に避難していた二百人ばかりの人も、今は二〇人ばかりとなった。

町内会がなくなったので、現場の証人として、後に残った私が死亡証明書なんかを書いてあげた。

応援の兵隊さんたちは、まだ死体を集めては焼いておられる。

私と娘は、主人の看病。看病といっても、ただ側にいるだけで、どうしてやることもできない。

昼過ぎ、主人の様子がおかしいので、急いで脈をみる。急に乱れて来た。ますます乱れるばかり、呼吸もとぎれとぎれになった。

ちょうど一時、主人は五十七歳の生涯をとじた。河合さんに頂いた晒布を顔にかけ、高畑さんにもらったシーツを体にかけて、娘と丘をくだり、兵隊さんに主人の死を告げた。

夕方、泉邸に逃げておられた前町内会長の田中品太郎さんも亡くなられた。

日はとつぷりと暮れて、まわりには誰一人いない。時折り、フクロウがホーホーと鳴くばかり、冷たくなった主人の側に横になったが、さみしくて歯があわない。娘もガクガクとふるえている。

「お父ちゃん、すみません。今晚は丘の途中の安藤さんの所で休みます。」と、言って私と娘は少しはなれた安藤さんの所へ行った。

十日の朝早く、兵隊さんが来て、主人と田中さんの死体を一緒に焼いた。一〇人ばかりの兵隊さんが整列して、お別れの敬礼をしてくださった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救急作業

山口町の東警察署(現在・広島銀行銀山町支店)に、郡部から警防団が到着し、死体処理や炊出しをした。

また、各地区の警察官も出動し、ここで罹災者の救出、および罹災証明の事務をとった。

幟町地区の町民がたくさん避難した東練兵場の東照宮の麓では、尾道から数人の医師が救援隊として到着、負傷者の診療に従事していた。また、そこに近郊からの救急で、ムスビがたくさん運ばれ、罹災者に配られた。

また、八丁堀方面は死者が多く、救護施設もなかったため、各自が薬を求めて治療しなければならなかった。

八月六日から数日間、東警察署で、ムスビ・野菜の煮つけなどの配給があったが、その後は、中国新聞社の焼跡で、警察署が乾パンの配給をした。まもなく、福屋デパート・勧業銀行などに臨時救護所が設置された。

道路啓開作業

八月十日ごろから、軍隊や警防団の救援隊がきて、道路の啓開作業に従事し、主要道路は、同月二十日ごろに完了した。

死体の収容と火葬・埋葬

上流川町上組町内会の三佐尾会長は、中国管区防衛司令部(松田重次郎邸内)焼跡の、完備した防空壕に引き続き残留して、各家庭の焼跡から骨を拾い集め、焼残りのバケツ・洗面器などに、それらの骨を収め、各世帯主の名を、それに記して安置していた。この三佐尾会長は、九月中旬、原爆症のため死亡した。

火葬は七日ごろからはじめ、十日ごろに終わった。火葬した場所は、八丁堀福屋の北側の空地と、上流川町勧業銀行の南側及び北側の空地、それに泉邸内である。

下柳町方面では、被爆後三日あとに軍の警備兵がきて、死体を処理した。

鉄砲町方面でも、軍隊が来て死体を火葬とし、氏名不詳の者は集めて焼いた。その数何百か不明である。氏名の判明した者は、一人一人墓標を作り、死んでいたその場所に仮埋葬した。

死体が、焦土の中から、幾ら收拾しても、あとからあとから出てきたので、八日ごろ火葬しはじめて、何日に終わったかはっきりしない。泉邸の裏土手で火葬にふした者も多かった。

火葬方法は全部、そのまま、着衣していれば着衣のまま、木を集めて、その上で焼いた。

町内会の機能

各町内会は、全く機能が停止状態となったので、幟町学区内の町内会連合会が、泉邸の中の、軍隊が作ったトタン張りのバラックのなかにでき、ここで各町をとりまとめて事務をとった。

胡町では十日ごろ、町内の生存者一五、六人が相談して、胡子神社跡にバラックを建てて、町内会事務所をおき、復興に努力することを申しあわせた。

各町とも、九月ごろ、生存者が集って、僅かの人数ながら、それぞれの町内会事務所を設けたようであるが閑散としたものであった。上流川町は、幟町国民学校の焼跡に、町内会の標識だけをかかっていた。

九、被爆後の生活状況

復帰状況

当初は、焼残りの防空壕生活ではじまった。一週間ぐらいして、焼トタンで屋根をつくり、家の形をなしたが、床はなく、地面にそのまま拾って来たゴザやトタンなどを敷いて住んだ。

一か月ほどして、焼木や柱を拾い、瓦のなるべく焼けていないのを集めて屋根をふき、床も張った。バラックは、焼跡の中で水道の破壊されていない場所を探して建てた。

食糧の配給はごく僅かで、不足分は闇で入手した。当初は、焼け残りの食物や防空壕の中に貯えていた物を、堀り出して飢餓に堪えたが、すぐに無くなった。

八月末ごろの居住者は、各町とも明細は不明だが、下柳町に七世帯、上流川町に二世帯というふうに、荒涼たるものであった。

泉邸の中には、軍の建造したバラックに五、六世帯、泉邸前の松原跡のバラックに四、五世帯が雑居していたが、幟町町内会の居住者であった者は少なく、他の地区から逃げてきて、そのまま住んでいる者がほとんどであった。

八工の発生

被爆後、八工が一面に発生した。死体にウジがわき、たちまち焦土をおおうばかりになった。駆除の方法は全然なく、八月二十日ごろには、歩いていても、坐っていても、八工が密集してきて、眼もあけられなかった。また、シラミが多かったが、ノミは少なかった。

生活物資

十二月ごろから配給制度が復活した。市役所から食糧の配給を受けたが、少量の米だけで、野菜や調味料は全然なかったから、市外へ車で、近くは徒歩で買い集めに行って不足を補った。

ロウソク生活

ロウソクの配給は無かった。知人より分けてもらったり、闇市で入手したが、なるべく灯をつけないようにして、たいがいの用事は、日の暮れるまでに、終らせるよう努力した。

二十一年になって各自勝手に、焼け落ちている電線を拾い集めて、本線につなぎ点灯した。一般に点灯できるようになったのは、二十二年であった。

復帰状況

二十一年から二十二年にかけて、バラックを建てて復帰する者があったが、至って僅少であった。それは、各家庭の中心である主人が死亡したためと、資材も手間もなく建築が容易でなかったからである。また、他人に土地を借してバラックを建てさせたため、借地権が生じて、土地の返還を求めても要求が入れられず、遂に借地人に、法外の安値で土地を手放した者も多く、被爆前の居住者が復帰したのは、極めて少なかった。

疎開児童は、受入れ家族のある児童だけ、約一か月後に復帰した。家族と共に縁故疎開していた児童は、何月ごろ復帰したか不明である。その人数もつかみ得ない。

闇市場

八月末ごろから、広島駅前に闇市場というものができはじめ、日増しに賑やかになっていった。初めは地面に戸板を敷き、衣類・ロウソク・マッチなど日用品を売っていたが、後には放出軍需品も、たくさん売られて、無いものは無いという盛況を呈した。

二十一年の夏、駅前闇市場にアイスクャンデー(氷のかたまり)が売り出され、そのめずらしさに人々が群がり集った。なかなか買えないほどの人だかりであった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨禍

九月十七日暴風雨に見まわれた。風速五〇メートルぐらいで、各町内のバラックは倒れ、生埋めとなった老婆もいたが、幸い助かった。下柳町付近の者は、焼け残っていた東警察署へ避難した。また、幟町上組の泉邸の石垣(高さ約二メートル)に、暴風雨をさけて、へばりついていたら、まるで石垣が揺れているように思えた。風で身体がたえずゆらいでいたので、錯覚したのであろうという。

全滅に近い胡町・鉄砲町方面は、風雨のための被害といっても、住民が少なく浸水に任したままという状況であった。

経済活動

二十一年、八丁堀歌舞伎座跡に闇市ができ、二十二年、中央百貨店(現天満屋百貨店の所)という闇市場ができて、種々の品物を売った。店の数約五、六〇軒。続いて福屋百貨店が小間貸をして、売上げの歩合制で開店し、各種の店ができた。中央百貨店は、後日二階建となった。

住宅の状況

各町とも、ごくわずかではあったが、二十年十月ごろから、点々とバラックを建てはじめた。二十一年ごろから、少し家の型をしたものが建ち、二十二年へかけて、住宅営団のセットの家が建てられた。二十一年一月、下柳町の的場弘が、その第一号を建てた。二十三年には、だいが良い家が建ち始め、二十四年ごろ、やっと本建築の家を見るようになった。

十一、その他

(イ)某夫人が、家屋の下敷きから、ようやく脱出して、泉邸方面へ逃げようとするとき、隣組の若夫人から、「今、

主人と姑を助け出すところですから、子供二人だけ、先に連れて逃げて下さい。」と、二歳と五歳の子を託された。泉邸裏の川の中に数時間、火をのがれて過ごした後、白島の河原に避難して、熱い砂で身体を暖めた際、多数の避難者の中の、幼児を連れた婦人達に、もらい乳をして歩いたが、誰一人として、乳の出る人がいなかった。翌日、二人の子供を母親に手渡しするまで、ただ一度も、その子らは泣かなかった。

(ロ)八月六日朝、上流川町で出火後、某夫人が家の下敷きとなった主人を、助け出そうとしてもおよばない。主人は、「自分はもう絶望で覚悟しているから、お前だけは早く、安全地帯へ逃げのびてくれ。」と、悲痛な声で叫び続けた。

しかし、夫人は、その言葉に耳をかさず、遂に主人と共に、その場所で焼死した。焼跡を点検したとき、その夫婦は頭部をあわせ、堅く握手したままの姿で骨となっていた。

(ハ)八月七日朝、上流川町の放送局前の路上に、男女不明の焼死体が腹這いとなって横たわり、炭のようにまっ黒焦げになっていたが、その腹の下に、赤ん坊の焼死体が隠されていた。

(ニ)八月七日朝、流川教会のかたわらの家の、焼残り材木の下から、一人の人間が、突如として起きあがり、道路に向かって走り出したが、五、六歩いくと、パツパツ倒れて死んだ。

(ホ)幟町上組泉邸前の松原に沿った隣組の組長小堺マキ(当時六〇歳)が、回覧板を持って廻っていて、ちょうど、小路にある石地蔵の祠の前に来たとき、炸裂にあった。すぐ路上に伏さったところへ、家屋が倒れかかって来て、下敷きになったが、運よく隣家の三木力(当時・山陽中学教諭)に救出されて泉郷に避難した。しかし、全然負傷も火傷もせず、後遺症もなく達者。後日、現場に行ってみると、石地蔵の方はこなごなに砕けて、そこらに散らばっていた。瞬間的な紙一重の差で生命が助かったのである。

(ハ)東警察署の田辺至六署長が、三日後、管内を視察したとき、泉邸(縮景園)の池には長さ一メートルもある多数の鯉がいたが、背がまっ二つに裂けて水面に浮き、死んでいた。おそらく爆風によって引裂かれたものであろうという。

(ト)七日、可部町から肉親を捜索に来た神田貢は、本通りのキリンピヤホール前の水槽内で焼死体となっている青年を見た。また、京口御門付近で異様な蛙の鳴声を耳にし、その方向の水槽を見れば、瀕死の重傷者の呼吸が水面にひびいていたのであった。

移動演劇

さくら隊原爆殉難記(要約)

乃木年雄(俳優・当時珊瑚座長)

本土決戦が目前にせまって、米軍の上陸が必至と予想され、国鉄は寸断、移動演劇の行動が困難となる場合にそなえて、情報局の直接管轄下にあった劇団は、地方に分散されることになった。二十年六月二十二日、桜隊(隊長・丸山定夫以下九人)と珊瑚座(隊長・乃木年雄以下九人)が中国地区を志望して、広島市堀川町の高野一步宅(新天地商店会事務所)である移動演劇中国支部の寮に落ちついた。この両劇団員のほかに、日本移動演劇聯盟派遣の広島駐在員赤星勝美、三浦察長、食事係の婦人三人、及び非公式の演出家八田元夫氏、以上計二四人がこの寮に起居することになった。

両劇団は、中国地方全域と四国全域の公演を、東京本部からの指令でおこない、主として産業戦士と農村、及び陸海軍部隊を慰問した。

そのうちに戦局は苛烈の度を加え、広島もいつ空襲されるかわからないという切迫感に、郊外へ疎開する市民が多くなった。

劇団もいよいよ疎開することになり、珊瑚座の女優沢道子さんが、厳島(宮島)の実家から通勤していたので、彼女から宮島の梅林義一町長に頼み、島内の存光寺(住職・梶谷寛禅師)の庫裏十畳と六畳二間を借りることになった。

七月三十一日に、桜隊も珊瑚座も全員が厳島に疎開する予定で、荷造りも終わっていたが、桜隊の女優が「厳島の寺は狭くて芝居の勉強もできないうえ、食糧事情も大変よくない。米や野菜の買出しも、船で中国筋へ渡らねばならないから不便、親戚が広島市の近くにいるからそこにあたってみよう。」と言ってゆずらないため、丸山定夫隊長も困って、「とにかく珊瑚座さんだけ一応、厳島へ疎開して下さい。私の方は郊外を今一度探して、もしなかったら厳島へ行きますから...」という。八月一日、やむなく珊瑚座だけが赤星駐在員と食事係の若い婦人と計一人、存光寺に移った。

これよりさき、七月二十日ごろ、中国地区各地を移動公演していた丸山さんが、軽い肺炎を患い、舞台上で倒れた

ため、桜隊全員が公演を中止して寮に帰って来たので、その公演の残りを珊瑚座が受けもつ事になっていた。

八月二日、芸備線志和口着、「聯隊旗の町」公演。三日、吉田町にて公演。四日は東城町の劇場で公演。五日、車中で朝食をとり、岡山県久世町着、公演中に警報が発令され中止となった。

六日、昨夜の舞台をかたづけ、荷造りをしているとき、今度の主催者広島通信局の担当職員である梶川富雄さんが、私たちの後を追って来て、楽屋に着く早々、「広島に何かあったのではないのでしょうか。私の車がトンネルを出て、私が何気なく広島の方を見ると、もうもうとした雲のような白煙が立ち昇っていました。」と言ったが、気にとめなかった。梶川さんと別れ、島取県米子市に出て、山陰本線に乗りかえ、島根県仁方に夕方着く。公演中に警報が出て中止。

八日、三刀屋町に向かう。また、公演中に警報があり中止。ここで広島の被害を聞いたが大変らしいという程度でよく判らない。九日朝、広島に向ったが、汽車が広島県安芸郡の矢口駅までしか行かず、私たちは下車した。広島から来る列車は、矢口に停車せず、いずれも急ぐように通過する。その客車の中を、チラリと見た私は胸が急にしめつけられた。まるで屠殺場から皮をはがれた牛が詰めこまれているように、まっ赤な肉のかたまりのような人間がたくさん乗っていた。次に来る列車も、貨車も、何百人か何千人かもわからぬ負傷者が輸送されて来るのであった。漸く重大な事態だと判ったが、広島へ帰る手段もなく困った。考えたすえ通信局の梶川さんの家が、矢口から一里ほど離れた戸坂であったのを思いつき、トボトボ歩いて行き、泊めて頂いた。その夜、梶川さんが聞いてきた所によると、八月六日朝、広島市に新型爆弾が落とされ、想像以上に被害甚大とのことで、桜隊が心配になった。

九日朝早くから、珊瑚座全員が宮島口まで約二十里を歩く覚悟をきめて、広島への道を急いだ。一時間ばかり歩いたころ、軍用トラックが後から来て、慰問公演で顔見知りの少尉さんが乗っていたので、訳を話して乗せてもらった。

トラックが広島市に入ると、一望千里の焼野原の中に真っ黒く焼けただれた福屋デパートの残骸が見え、あちこちから黒煙が立ちのぼっている。福屋デパートのすぐ裏側にあった桜隊の寮は跡形もない。トラックはそれらに目もくれず宮島口へ突っ走り、正午過ぎに到着し、連絡船で厳島(宮島)に渡った。

存光寺に残っていた赤星さんに、市内の惨状を話し、桜隊の模様をたずねると、「六日朝、大きな鏡で太陽の光を当てられたような光がして、寺の裏側の色ガラスが全部こわれて飛んだほか、厳島は平穩そのものだが、広島へは電話も通じないし、交通機関も動かぬので、桜隊の人たちが、どうなっているか一切不明です。」と言う。

十日昼ごろから、広島行きの電車(宮島線)が開通したので、私たち男五人で捜査に出かけた。己斐駅で下車し、そこから徒歩で市内電車の軌道の上を伝って中心部へ入っていった。道行く人影は一人もない。

堀川町の寮の焼跡は、あたり一面真っ白な灰で、コナ雪が積ったようになっている。門と玄関の間に立っていた大きな松の木の幹が、地上二間ほどの所で折れている。その残った松の幹があるだけで、ほかには何も地上に立っているものはない。上部の幹や枝は何処に飛んだのか、その片鱗も見あたらない。私たちは屋敷跡を歩きまわったが、死臭は勿論、人間が焼けたような形跡もない。白い灰が地上一尺ほど平面に拡がって、瓦のカケラー一つ見つからない。

「ここに遺体はないよ。寮の人たちは何処かへ避難したんだよ。きっと...」

焼野原の東部に、近々と比治山公園が横たわっているのが見えた。

「あの山の下に陸軍の防空壕がある。あそこへ逃げたのかも知れない。」

私たちが歩き出したとき、頭にホウタイを巻き、杖をついた負傷者が近づいて来た。見ると、顔の皮膚はペロリと垂れ下がり、白い半袖のシャツから出た手の皮も肉が露出している。顔は真っ赤である。市内に入って初めて逢う人である。先方から声をかけられて、ギクツとした。

「あ、乃木さん？あなたたちは牝怪我は？」

私はじっとその人の顔を見たが判らなかった。

「散髪屋ですよ。私...」

「あ、三軒隣の...」

散髪屋の主人は、あの朝、裏庭で体操していたとき被爆し、町の人たちと比治山へ逃げた。そこで救援隊に赤チンを塗ってもらったので、こんなに赤いのだと話した。

「じゃ、移動隊の人を見かけませんでしたか？」

「私と一緒に一度は広島駅の方へ逃げました。名前は知りませんが、女の人と若い男の人が、肩を抱きあうようにして逃げるのを見ましたが...」

「その女の方は？」

「阪妻さんの無法松の写真に出ていた人です。」

「あ、園井さんだ。」

「若い男の方は、高山さんだよ。きっと」

と誰かが言った。

「今、私は比治山にいますが。家がどうなっているか気になって帰って来ましたが、私の家は何処でしょう？」と、散髪屋が言う。

「私たちの寮が其処ですから、お宅は其処ですよ。三軒目だったから...」

その散髪屋の跡も何一つ残っていない。

私たちは散髪屋の主人と一緒に比治山まで歩いて行き、たくさんの負傷者が横たわっている防空壕を一つ一つ探してまわった。

「桜隊の人はいませんか！」

大声で呼びながら、壕の奥の方まで行ったが、返事がない。探し疲れて、私たちはその日は帰った。

翌十一日も比治山へ出かけた。散髪屋の姿が見えないので聞くと、傍の人が「あの人は死にましたよ。」と教えてくれた。この日、存光寺に帰ったのは、夜も暗くなってからであったが、寺の住職梶谷寛禅さんから、小さな紙片を渡された。

「丸山さんからだ！」と、私はすっとんきょうな大声を出した。紙片には、丸山さんの字で、海軍の病院にいるから迎えに来てほしいという意味のことが書いてあった。

隣組の奥さんの息子が学徒動員で出勤中に被爆し、収容された所から連絡があって迎えに行き、敵島のことを話していると、五、六人先に寝かされていた人が、「敵島の方ですか？」と言って、存光寺の珊瑚座の人にこれを渡してくれと頼まれたと、お礼をかねて訪ねて行ったら話してくれた。また、「収容所の名前は知りませんが、宇品へ行って海軍さんに聞けば、連れていってくれます。」とも教えてくれた。

この夜遅く、仕事のことで上京していた八田元夫さん(演出家)と、榎村浩吉さん(桜隊事務局長)が帰って来たので、丸山さんの紙片を見せ、早速打ち合わせをした。明日、八田さんと榎村さんが丸山さんを迎えに行き、珊瑚座の男五人は、ほかの桜隊の人々を探すことになった。

十二日の朝早く敵島を出発した。私たちは広島市郊外の病院や学校など、多数の負傷者が収容されている所を、次々と探しまわったが、今日も徒労に終わった。

八田さんと榎村さんは、夜遅くなって帰って来たが、丸山さんが小屋浦国民学校に転送されていることが確かめられただけであった。

十三日、八田さんと榎村さんは丸山さんを迎えに行き、私たちは他の収容所を幾つも探して廻ったが、やはり手掛りはつかめなかった。この夜、丸山さんが八田さんと榎村さんの肩にすがって帰って来たが、案外元気そうな姿なので一安心した。

散髪屋の主人に聞いた園井恵子さん、高山象三さんの話をし、その他の人はまだ不明だと言うと、丸山さんは、「たぶんみんなダメでしょう。一人僕だけ助かって家族の方に申訴が立たない。」と、深く首をたれて泣いているようであった。そのうしろ首筋が紫色にはれて、一筋の傷があるので、「その傷は...」と聞くと、首筋に手をやりながら、「もう大丈夫、痛くありません。あの朝、園井君が二階の私の部屋に食事を運んでくれたので、僕は寝床の中で、腹ばいになって食事をしていました。病気がまだ完全でないので、大事を取って暇時には床から起きなかった。窓外から強烈な光が射したと同時に、落下した天井の材木で押しつぶされた。首筋が重い梁のような物に圧されて、その傷あとです。これは」と言って、また首筋をなでた。

「どうして上に出たのか、とにかく夢中で、屋根と思う所へ出たと思ったが、それは地上だった。土煙がモウモウとして、一寸先も見えないが、女の悲鳴や助けてエ！という声が聞えて来たが、足の踏み場もない。材木の破片で足が動かない。勿論、方角もわからない中を這っていた。

そのうち大きな広い道に出たが、道にも木材や瓦などが飛び散っていて歩けない。どのくらいの時間歩いたか見当はつかないが、僕の横にトラックが止ったと思うと、上に引き上げられた。水兵の陸戦隊とわかったので、海軍

の救助隊だと気がついた。そのトラックで海軍病院に運ばれたが、勿論、それが何処か、今もってわからない。」と、ながながと当時の模様を話した。

そのとき、島内に実家のある女優の沢道子君が、「兄さんのユカタですが着て下さい。」と言って、家から持って来た浴衣を丸山さんの後から着せかけた。丸山さんは、寝床の上に立って、帯を結んでもらって、一寸ふらついた。便所に行くと言って二、三步、歩くとまたフラフラとした。沢君が手を取ろうとすると、「大丈夫、大丈夫。」と言って、廊下を一人で歩いて行った。

十四日も探しに出かけたが、まったくむなしかった。赤星さんが、桜隊の人は一応東京へ引揚げたら...と言うと、丸山さんは、「いや、隊員の話がわからない以上、私たちだけで東京へ帰るわけには行かぬ。」と、断乎はねつけた。そして榎村さんに向って、「もう一度、寮の焼跡を探して見てくれ。僕が天井から出たとき、助けて助けてと言った声は、たしかにうちの女優の声だ。あの下で、きっとみんな死んでいるに相違ない。すまぬが明日最後の捜索をしてくれないか。」と言う。

「よろしい。では明日、草の根をわけても寮のあとを探しましょう。珊瑚座の方たちも頼みます。」と、榎村さんが応えた。

十五日、八田さんが寺に残り、他の六人が再び寮の跡へ行った。午前十時半ごろであった。六人は散り散りになって、指先で白い灰を掻きわける。私は大広間のあった所をかきわけた。四、五寸も掘ると地面が現れる。私の指先に瀬戸物がコナゴナになったような白いものが出て来た。よく見ると人骨である。そして、女の髪にさすピンが二、三本、人骨の中にあつた。「おーい、あつたぞ!」。みんな集まってきた。人骨にしては余りにも少ない量である。私の両方の掌一ぱいほどしかない。

「よくもこれだけきれいに焼けたものだ。」

最初から無いと思っていた白骨が出たので、みんな勇気百倍して探しはじめた。先刻から同じ所ばかり掘っていた榎村さんが、「あつた!」と大声を出した。みんなまた駈け寄った。そこは榎村浩吉夫妻の部屋の跡で、「女房の骨だ。これはきっと...」と言う。榎村さんの掌には、先刻私が見つけた白骨と同量ぐらいで、ピンも見える。榎村さんは、丸山さんが倒れたので、奥さんを寮に残し、東京へ藤原鶏太(釜足)さんと呼ばれていたのである。

玄関の跡を掘っていた大矢君が、「此処にも...」と言って、その周囲を掘って見ると、ちょうど車座に坐つたような形で、四個の白骨が出て来た。都合六人の遺骨が発見されたわけである。みんなピンがあるところから判断して、女子だとわかつた。ほかにも庭の隅々まで探したが、もう見つからなかつた。

ここらで昼食にしようと言って、木陰も何もない炎天下で、食事をしていたとき、広島駅の方から老夫婦が歩いて来た。

「このあたりに移動劇団の宿舎のあったのをご存じありませんか?」

「はあ、私たち移動劇団の者ですが...」

「私は羽原京子の母親ですが、娘がこちらにお世話になっていまして...」

見ると、老夫婦はモンペの上に、縞の紋付の羽織を着ており、焼跡の中では異様な姿に思えた。

「私たち、福山から、今朝広島へ着きましたが、駅に降りても尋ねる人影もないので、あちらこちらとさ迷つていまして、あなた方の姿が遠くから見えましたので...」

「私、榎村です。今やっと此処から遺骨が見つかりまして。でもあなたの娘さんの遺骨がどれかわかりませんが...」

「ばあさんが、今日どうしても娘が呼んでいるからと言って、来てよかつたです。」と老人が言った。

「皆さんの遺骨を少しずつ頂いて、一緒に供養させて頂きます。娘もその中にいるでしょうから...」と、老婦人が言い、五つの白骨を少しずつ紙に包んで袋の中へ入れ、何度も何度も礼をして、老夫婦は帰って行った。二人とも涙一滴もこぼさず、古武士のような風格があつた。そのときB32の編隊機が爆音高く銀色に光りながら上空を飛んでいった。私たちはもう逃げも隠れもしなかつた。

藤堂君がどこからか探して来た小さな壺のなかへ、五つの骨を入れた。榎村さんは、妻の分だけ別にハンケチに包んだ。

帰りがけに上原君が裏庭の方へ行き、灰の下からトタン板を上げて、「ここにまだあるよ。」という。そのナマコ形のトタンの下には、人間の形のままの黒い人骨が横たわっている。トタン板を、ふとんを被るように自分でかぶつたのかも知れない。火が廻つて来たので、逃げようともがいたが、足が何かにはさまつて逃げられなかつたよう

な形である。

完全に焼けきっていないので、持って帰ることもできない。手分けして薪になるようなものを探したが、焼けボックイさえもない。

皆がかなり遠くまで行き、燃えそうな木切れを集めて遺体の上に重ね、火をつけた。明日、白骨を取りに来ることにして、私たちは帰路を急いだ。

存光寺で待っていた丸山さんは、壺を抱くようにして、「すまん、すまん。」と言いながら床の上にくずれた。

「あの時、無理にも僕が疎開を説得すべきだった。僕の責任だ。みんなをこんな姿にして…僕だけ助かって」みんな丸山さんを慰める言葉がなかった。

その夜、女たちが、私に「丸山先生は、昨日からオカユにしていますが、今朝からそのオカユも食べられません。お茶を持って行っても、のどに通らないからって呑まないです。」という。卵でもと思ったが島には無かった。

十五日、私と最上君と二人で、芸備線で一夜お世話になった梶川さんの家に行き、卵一〇個と野菜を分けてもらい、正午にその家を出て矢口駅へ急いだ。駅の方から国民学校の児童が七、八人駆けて来る。「日本負けた、日本負けた、アメリカに…」と、長くのばして節をつけた歌を唄いながら通り過ぎた。

駅では、乗客みんな黙りこくなって、沈痛な情景であった。「日本が負けたのですか。」と、私は問う勇気がなかった。宮島口までの汽車の中でも大声で話している人はいなかった。私は妙に気がかかった。

連絡船で巖島に上がると、そこで海軍士官五、六人が、町民に演説のような声で怒鳴っている。「我々は、明日沖縄へ進撃します。皆さん！先程のラジオは敵のデマ放送ですから信じないで下さい！」

終りには泣くような声で、船から上がって来る人々に言い続けている。

存光寺に着くと、丸山さんは暑そうにパンツ一枚で、床の上に寝ていた。

「丸山さん、何か放送があったんですか。」「ラジオで天皇陛下の詔勅が放送されました。日本は無条件降伏ということですよ。」「でも、今、船着場で海軍の士官達が"デマ放送にまどわされるな"と言っていましたよ。」

住職が傍から、「先刻、町役場から、今夜から、灯火管制は解かれたから、電灯の黒いおおいは取って下さいと言って来ましたよ。」と、私に言った。「本当だ！」と思うと、私はがっかりした。

丸山さんは、昨日に変わる明るい顔をして、「大丈夫ですよ、乃木さん。これで日本は良くなりますよ。われわれのやりたい芝居が、これからやれますよ。いい芝居をやりましょう。」と、平然としている。昨日までの弱々しかった顔が、今は明るく希望に燃え、血色も良いように私には思われた。買って来た卵を出すと、「今どきよく手に入りましたねえ。」と言ったが、「今日は欲しくない。」と、ついに食べなかった。

八月十六日、灯火管制のない夜の家々は明るく、私たちの寺も電灯が久しぶりに座敷を照らした。戦争は終わったんだという嬉しさと不安が半々であった。十時ごろ、疲れはてて私たちはみんな床についた。それから少しして丸山さんは死んだのであった。十一時半ごろであった。みんな起きて来た。赤星さんと住職さんが医者之家に走った。すぐ尼子敏子医師(現姓渡辺)が来られたが、事務的に、「ご臨終です。死亡診断書を取りに来て下さい。」と、言ってさっさと帰った。医師も島に避難して来たたくさんの負傷者をかかえていたから、多忙をきわめていたのである。

住職が仏具を整え、読経するあいだ、次々にみんなが死水を取った。女優の一人が、「先生、水が呑みたかったんでしょう。」と、言って、葉っぱの水を泣きながらそそぐと、その声でみんな泣き声をたてた。

八月六日の死亡隊員は、島木つや子・森下彰子・羽原京子・笠綱子・小室喜代の五人で、八月十六日に丸山定夫、八月二十日には神戸まで園井恵子と逃げた高山象三、八月二十一日に園井恵子、そして、東京まで逃げて帰り、東京帝国大学付属病院都築外科に入院した仲みどり(被爆直後、京橋河畔に脱出、船舶司令部・凱旋館に収容され、八日汽車で広島発、九日夜半東京着。)が八月二十四日に死亡したのであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

上大須賀町、大須賀町、松原町、猿猴橋町、西荒神町、東荒神町、西蟹屋町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目
町内会別要目

この地区の範囲は、上大須賀町[かみおおすがちょう]・大須賀町[おおすがちょう]・松原町[まつばらちょう]・猿猴橋町[えんこうばしちょう]・荒神町東組[こうじんまちひがしぐみ]・同西組・西蟹屋町上組[にしかにやちょうかみぐみ]・同中組・同本通りとし、爆心地からの至近距離は、大須賀町栄橋西詰で約一・四キロメートル、もっとも遠い地点は、西蟹屋町東端で約三キロメートルである。

明治二十七年、鉄道開設当時から松原ステーションと言われた松原町の国鉄山陽本線広島駅は、広島市の表玄関であり、海の広島港と相俟って、陸上交通の要衝をなし、戦争勃発のたびごとに重要性を高めた。大東亜戦争においても、大きな役割をはたし、幾多動員軍団の出入りや軍需物資をはじめ諸物資の集散にあたって、重要な役割をはたした。

特に広島市は、動員軍団の輸送基地であったから、出征兵士を送る歓呼の声、また、帰還兵士を迎える日の丸の旗、あるいは第一線から帰って来た白衣の勇士、白木の箱に入った遺骨の出迎えなど、戦局の進展と共に、駅頭は多彩な人間模様を織りなした。

猿猴川岸に沿って東側の駅前地区松原町・猿猴橋町・荒神町は駅を中心にして、商店街・旅館街がひらけ、活発な経済活動を行ない、連日連夜賑わった。これに接する大須賀・西蟹屋両町は表通りがおおむね商店、裏通り一帯は住宅の密集地帯で、歴史的にも古く町家的面影を、その軒々に伝えていた。

戦争中、地区住民のすべては、広島市が空襲される場合は必ず攻撃の目標になる地区として自覚すると同時に、来る日来る日を戦々恐々としてすごしていた。

原子爆弾の炸裂にあたっては、その爆央からはずれたとはいうものの、地区のほとんどが爆砕焼失し、一挙に瓦礫の荒野と化した。辛うじて西蟹屋町のみが僅かの焼失で難をのがれたが、火災をまぬがれた家屋でも半壊程度以上のひどい損害を蒙った。幸いにも広島駅(爆央から約二キロメートル)はやっと残った軌道と車輛で、わずかながら輸送の命脈を保ち、空前の危機を超克していった。

被爆後、広島駅を中心として復興の第一歩が踏み出され、加速度的に市民の出入りが増加した。終戦となつてから、しばらくすると、駅前の焼跡に闇市ができ、市民の深い虚脱感をぬぐうように、物資面での刺激をあたえ、経済気力の回復にめざましい役割をはたした。

なお、被爆前の地区内建物総戸数は二、二五〇戸、世帯数二、三五三世帯、人口六、一〇〇人で、これを各町内会別にみると次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
上大須賀町	235	227	697	工藤繁舟
大須賀町	352	365	565	象面軍蔵
松原町	216	256	679	原田唯美
猿猴橋町	203	207	612	寺川勝三
荒神町東組	211	250	678	隠岐麻人
荒神町西組	237	255	595	禎田作蔵
西蟹屋町上通	258	293	773	須郷勘一
西蟹屋町中通	286	295	723	山田万吉
西蟹屋町本通	252	205	795	保田静吉

地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
荒神町国民学校	荒神町上通	広島総合信用組合	猿猴橋町
鉄道病院	大須賀町	住友銀行松原支店	猿猴橋町
国鉄広島駅	松原町	広島駅前郵便局	松原町
広島合同運送店	西蟹屋町中	瀬川倉庫	松原町
運輸省鉄道管理部	松原町		

二、疎開状況

人員疎開

敵機の空襲が日増しに激烈になるにつれ、日々恐怖はつのるばかりであったが、それでも住み馴れた土地への愛着は強く、また環境の変化が惹起する数々の不安もあったりして、人員疎開も、当局の指令どおりにはなかなか運ばなかった。

やっと第四次疎開計画の強制実施になって、鉄道線路をはさむ両側五〇メートル以内の家屋疎開実施のときから、ようやく人員疎開も活発になってきた。戦局は今や一刻の猶余も許されない緊迫した事態に突入したということが、他都市の被災実情を見たり、聞いたりするにつけても、住民にはっきりと感受されたからである。

特に、昭和十九年十一月ごろ、地区内西蟹屋町に、敵機(グラマン機)が一五キロ爆弾二発を落してから覚悟ができ、本格的に疎開するようになった。

各町内会へ届け出た疎開者数一、二七五人におよんだ。

物資疎開

物資疎開についても、第一次疎開計画のときから、各家庭へ幾度となく呼びかけていたが、親類とか知人とかへの保管交渉も意外に手まどり、また、運送関係業者との折衝もはかばかしく進まなかった。社会全般がひどい動脈硬化症にかかっている、何事もまともにはかどることはなく、疎開したくてもできないのが実情であった。

やっと馬車を見つけて来て運んだり、手押し車や大八車を自分が引っぱって運んだようなことであった。

もちろん手に持てるものは、もてるだけ持って疎開を行なったが、なお多くの大切な物品が取りのこされていた。

しかし、どうなりこうなり昭和二十年六月ごろまでには一応疎開済みということになったが、これも大須賀町の川筋三か所に、敵機が爆弾をおとしたことから、急速に進んだのであった。

学童疎開

荒神町国民学校では、三年生以上一八二人が、六月までに疎開することになり安佐郡小河内村へ一か所、同郡久地村へ四か所の、寺院や説教所へ集団疎開をおこなった。

このほか、四月ごろから、親戚や知人をたよって三八九人の生徒が縁故疎開をおこなった。

三、防衛態勢

自衛組織

地区住民の防衛意識は非常に強く、町民全員で、いち早く自治防衛隊を組織していた。町内に災害が発生した場合、加勢援助をすることを目的とし、連合町内会長が本部大隊長となり、各町内会長が大隊長、各副会長が中隊長、各隣組長は小隊長になって、指導運営した。

警察署・消防署、ならびに警防団が、その組織の指導と指揮にあたって訓練をおこなった。

国民義勇隊

昭和十九年四月、広島市国民義勇隊が創設され、荒神地区も荒神学区国民義勇隊を組織し、国民学校前で、市長列席のもとに結成式をおこなった。

この式に、各町の国民義勇隊が参加し、手車に紙旗(義勇隊旗)をたて、炊出し釜・炊出し用具一切・ハシゴ・綱・担架などを積みこみ、地区内一円をまわって士気を高揚した。

四、避難経路及び避難先

災害時の避難先としては、安佐郡狩留家村(現高陽町)を指定し、平素から連合町内会長が「避難先には食糧を確保してあるから安心するように」と、町民に知らせていた。

避難経路は、猿猴川上流へ向い、饒津神社横を北上、あるいは白島経由神田橋・工兵橋を渡り、牛田町を経て、戸坂から千足と、太田川筋をつたって、小田村から矢口村・落合村を過ぎて狩留家村に避難することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

大須賀町に、動員部隊一時集結所(瀬川倉庫)があったが、そのほかは不明である。

六、五日夜から炸裂まで

猿猴橋町の総合信用組合の屋上に、警鐘場が設けてあって、五日夜から六日早朝にかけての空襲警報・警戒警報発令および解除に際して、鐘をならし通報につとめた。その鐘の音を合図に、老人や婦人子どもは防空壕へ待避した。

防衛隊員・警防団員・ならびに警察署員は、警戒警報発令中は、所定の配置につき、空襲警報発令と同時に、全員防空壕に待避した。

六日午前七時三十分ごろ、警戒警報解除になったが、前夜半の空襲警報発令で心身ともに疲労していたから、原子爆弾の炸裂のときは、ほっとした安堵感で多くの家庭は、代用食やぞうすいの朝食をとっていた。

なお、建物疎開に、毎日出勤することになっており、各町内会においても町内の建物疎開もしなければならなかったから、地区内は順番で、三か町で約五〇人が出勤することに決められていた。

原子爆弾炸裂のとき、すでに各町で建物疎開作業が、その町内会員の手によって実施されていた。

六日朝、疎開作業の出勤と地区内建物疎開の実施状況は次のとおりである。

町内会名	動員司令によって町内会より疎開作業への出勤		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先地名	建物疎開計画予定概数	被爆前日までの実施済み概数	当日朝実施中の概数	他地区から実施のため集めた人員
上大須賀町	17	鷹野橋方面	戸数不明	約 60 戸	実施中	約 20 人
大須賀町	-	-				
松原町	15	鷹野橋方面	戸数不明	不明	実施中	不明
猿猴橋町	18	鷹野橋方面				
荒神町東組	-	-				
荒神町西組	-	-				
西蟹屋町上通	-	-				
西蟹屋町中通	-	-	戸数不明	約 70 戸	実施中	約 10 人
西蟹屋町本通	-	-				

七、被爆の惨状

炸裂直後

閃光の直後、周囲がまっ暗くなり、炸裂音と同時に、家屋が倒壊し、多くの人々が下敷きになった。

家屋はその場所場所によって横ざまに吹き倒されたのと、上から爆圧によって潰されたようになったのと、下方から吹きあげられるように浮びあがって倒れたのと様々であった。とにかく、アッという瞬間、町も人も一挙にたたきつぶされていた。暗やみの中を、ようやく脱出してみると、周囲は目もあてられぬ惨状を呈していた。

救助作業など思いもおよばず、長いあいだ訓練に訓練を積んで鍛えた防空防火の組織も設備も、また行動能力も瞬時に崩壊していたのであった。

負傷者があまりにも多く、指定された安佐郡狩留家村へ避難する前に、暫定的に東練兵場にいったん集合した。ここから狩留家村やその他、近郊の知人・親戚を頼って個々に避難した。

郊外に通ずる道路上は、市中から逃げて来て、力つきはたポロポロの姿の避難者でうずまっていた。

原子爆弾炸裂のとき、橋を渡っていて、川の中へ吹きとばされた者、橋の欄干に叩きつけられて即死した者、あるいは、負傷してそこに倒れ、虫の息になっている者などたくさんあったが、殺到して来た避難群衆の誰一人も、これらにかかわりあっている余裕すらなく、茫然と自分自身さえどうすれば良いか判らぬままだ逃げ去っていった。

また、時の経過とともに引潮となり、川の水位が次第に下がっていくと、猛火に追われて逃げ場を失った者が、たくさん川のなかへ逃げ去っていった。午後三時ごろ、川水を巻きあげて竜巻が発生した。その荒れ狂う波に吞まれて、ここでも避難者の多くが死んでいった。これも瞬間的なできごとであった。

広島駅もまた、壊滅的な打撃を受け、またたくまに猛火につつまれた。しかし、職員一同、堅忍不拔の精神力をもって動脈鉄路の惨禍を克服し、よくその使命をつらぬいたのであった。

瞬間的被害

瞬間的な炸裂による物的・人的被害は大きかった。即死者・負傷者など続出し、堅固であった社会的秩序も、親密であった人間関係も、一瞬のうちに葬り去られてしまった。

各町の被害内訳は、つぎのとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
大須賀町	80	20			13	36	51	栄橋 - 欄かんが破壊した 駅前橋 - 木造のため焼け落ち不通
松原町	82	18			15	50	35	猿猴橋 - 欄かんが破壊した
猿猴橋町	90	10			10	20	70	
荒神町	70	30			9	58	33	荒神橋 - 欄かんが破壊
西蟹屋町	29	71			4	40	56	大正橋 - 欄かん一部破壊したが九明の大雨にて中部が落ち不通となる

火災発生炎上の状況

また、炸裂後まもなく松原町・大須賀町・荒神町内から火災が発生し、午後三時ごろまで燃え続け、地区の約七〇パーセントが焼失した。ただ西蟹屋町が一部の焼失にとどまっただけであった。

各町別の火災状況は、つぎのとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況(方向、火勢、炎、煙)	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時間		
大須賀町	(上大須賀町) 飛石的に発火 (大須賀町) 広鉄印刷所方面	午前十一時三十分頃 午前九時頃	飛火にて火勢一面におよび全町が焼失した。	午後二時三十分頃
松原町	広島駅前方面	午前八時十分頃	二、三か所より発火、四方に延焼し、町が全焼した。	午前十二時頃
猿猴橋町	電車通り中央部	午前十時頃	ところどころより発火しているので飛火と思うが、それから、全面におよび全町が全焼した。	午後一時頃
荒神町	(東組) 中央部二か所より (西部) 鉄道線路筋と中央部三か所より	午前九時三十分頃 午後十時頃	残火の不始末と飛火と思われるが、約五戸を残して他は全部焼けた。	午前十二時頃
西蟹屋町	一部に火災発生	午前八時三十分頃	不明	不明

降雨

火災がおさまった午後三時ごろから、竜巻が起った。川水もあらあらしく波立ち、大つぶの黒味がかった雨が、三分間ぐらいずつ二回降って来た。

しかし、場所によっては、雨が降らなかったというところもある。

六日夜

その夜は、敵機が襲来するかも知れぬという不安と恐怖にかられ、歩ける者も歩けない者も、助けたり、助けられたりして、安全と思われる最寄りの場所、あるいは、避難者がたくさん集っている広場へ逃げていった。

敵襲がなくなったら、食糧の配給を練兵場で行なうということで、ほとんどの者が練兵場へ逃げたが、練兵場の北側の山中に火薬庫があり、敵機の再度空襲の場合、危険であるから、避難替えするよう軍から指示があつて、一度集っていた避難者らは、また他の場所へ逃げていった。中にはもう動けず練兵場のイモ畑のうねの低い所へ、身を伏せて夜をあかした者もあった。

家屋が破壊されなかった地区では、家財道具を守り、道路や防空壕のなかで眠れない一夜を明かした者もたくさんいた。

避難した東練兵場から市中を見渡せば、次から次へと火炎が立ち続けており、夜ながの東練兵場とはいえ、さながら昼のように明るかった。

燃え狂うまがつ火の、不気味な明るさのなかで、家屋の下から這い出た負傷者らは、多量の出血をしているうえ、顔は白い粉をふき、焼魚のような皮膚をさらしていた。また、衣服は裂け、ボロボロの布切れを体にたらしめているに過ぎなかった。帽子をかぶっていた者は、帽子からはみ出していた髪が剥ぎとられたように焼けていた。

諸現象

被爆者は発熱して下痢症状をおこした。赤痢ではないかと思われるほどの症状で苦しみながら死んだ者も多かった。

また、歯ぐきから出血し、一種異様な臭気のある唾液や粘液を吐いて死亡する者もあった。この症状は、被爆以来、かなり続いたが、なかには、被爆時から元気であった者が、急に貧血を起し、髪が一本もなくなるまで抜け落ちて死ぬる者も多くあった。そして、火傷の軽い部分は、治癒後、そこの部分がケロイド状に引きつって醜い傷痕を残した。

炸裂時の爆圧・爆風の威力は、常識では考えられない多くの現象を示していた。

電柱はなぎ倒され、電線はむちゃくちゃに纏れて路上に散乱し、歩くこともできないほどであった。倒れた電柱のなかには、その中間からまっ二つに折れたのもあった。また大きな石の門柱の、上部の半分がもぎとられたように吹き飛ばされていた。

栄橋のたもとにあった電話ボックスや橋の欄干も吹き飛び、はいていた下駄やかぶっていた帽子は無論のこと、人間も一〇メートル以上、瞬間的に吹き飛ばされていた。

しかし、中には建物疎開の作業中に被爆してほとんどが火傷したにもかかわらず、ただ一人無傷で逃げ帰り、生命に何ら別条のなかったという動員学徒もいた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊の作業

地区内住民の人たちが傷が浅く元気な者は、ほとんど狩留家村へ避難をしたが、重傷者その他肉親を探さなければならぬ者などは、東練兵場へひとまず避難していった。

六日昼過ぎごろ、避難者の中の元気な中学生三人に連絡をたのみ、中山村・戸坂村・府中町の三か町村へ急速救援を依頼したところ、午後三時ごろ、オート三輪車とトラックで医師とムスビを積みこんで来援した。医師はただちに負傷者の応急処置をおこない、ムスビを罹災者に配給した。ついで陸軍および海軍の医療班が来援して、簡単な治療が進められた。

翌七日、負傷者で歩行のかなう者は、自力で、また歩行ができない者は、歩ける人や知人に助けられながら、尾長国前寺とか尾長国民学校、または国鉄矢賀工機部まで行って、それぞれ応急の治療を受けた。

道路啓開

地区内はほとんどの人々が他へ避難して、ただ広漠とした死の町と化したままであったから、瓦礫で埋まった道路が、いつごろ人が通れるように啓開されたかということさえ知っている者はなかった。たぶん、暁部隊など軍隊によって、主幹道路の清掃が行なわれたと思われる。

死体の収容と火葬

東練兵場へ逃げた人々も、つぎつぎに死んでいき、八月八日ごろから十日ごろにかけて、その死体の収容がおこなわれた。

場所は、東練兵場東口(現在二葉中学校の約一八〇メートル手前)に仮設された収容所に収容した。

火葬は、八月十一日から十二日ごろまで、軍隊と協力して、焼跡の残材を集め、石油をかけておこなった。

町内会の機能

町内会長も、町幹部も、全員避難して、町内会の機能が壊滅したため、一人一人が負傷者や罹災者の手当てや相互の力づけをおこなって、突発した非常事態に対処したのであった。

九、被爆後の生活状況

復帰居住者

秋風が吹きはじめた九月ごろから、防空壕とか、バラックに居住する者がいた。しかしごく僅かで、各町とも四、五人程度であった。本格的に焼跡に住む気になって、バラック建てながら人が住みはじめたのは、翌年一月ごろからで、ポツンポツンと低いトタンの小屋が焦土化した瓦礫の中に散見されるようになった。

二十年八月末ごろの居住状況は、次表のとおりである。ただし、この世帯概数は食糧配給世帯数である。地区内に当時住んでいなくても、町籍だけそのままににおいて、食糧配給日には避難先から帰って来て配給を受けるといった状態のものも含まれている。実際に、現地に住んでいた者はごく僅少であった。

町名	世帯数
上大須賀町	120
大須賀町	27
松原町	45
猿猴橋町	17
荒神町	54
西蟹屋町	460

衛生環境

廢墟の衛生環境は非常に悪く、八月九日ごろからハエが地上をおおって、まっ黒に発生した。眼をつぶったまま、いきなり掌をたたきあわせると苦もなく一〇数匹のハエがつぶれていた。ハエは起居の間、どこにでもついてまわり、アブのように人を刺すので痛かった。

しかし、駆除剤なども入手することはできず、放任のありさまであったから、夜など、焼トタンに群集しているハエを、拾って来た茶わんに水を入れて採取すると、〇・五リットルから〇・七リットルに及ぶハエをたちどころに捕ることができた。

九月になって、アメリカ軍が飛行機で駆除薬を撒布したので、急激に少なくなって来た。

ノミ・シラミの発生はあまりなかったようである。これは、焼失家屋跡で、セメント塗の風呂場だけが辛うじて

残っていたのを利用して、露天ながら入浴だけは続け、身体の清潔を心がけていたからと、ある罹災者が語っている。また、水道栓が壊れたままになっていて、上水道の水が一日中出っぱなしであったから、それで洗濯も充分にでき、洗濯物も夏のことですぐに乾いたし、しょっちゅう洗うことができた。

生活物資

焼跡生活の上での食糧の欠乏は言語に絶した。被爆後五日間ぐらいにわたって、安芸郡府中町・中山村・戸坂村(両村とも現在広島市に合併)、及び軍関係から炊出しがあって露命をつないだ。その後は一般の配給に切替えられ、時には、軍隊の放出品で、衣類・かん詰・すきのり・毛布・軍靴などの特別配給もあったが、まったく僅かなもので、煙草などは路傍に捨てられた吸殻もなかなか見あたらないで、一服か二服すうだけの短いものでも、恥も外聞も考える余裕なく拾いあった。

ロウソク生活

夜は夜で灯がなく、まっ暗な生活であった。僅かのロウソクが九月末ごろ、やっと配給されたが、それを成るべく使わないように大切に大切に、早く眠るようにした。

電灯がついたのは、十月ごろであったが、初めて文明の光線を取りもどし、みんなほっとした。ただ、西蟹屋町の家屋の倒れなかった地域は、旧設備があったから、もっと早く電灯がついたようである。

闇市の発生

八月十五日、終戦となり、これまで社会を支えていた権力や機構が一朝にして瓦解し、人々は深い虚脱感に陥った。二日、三日はただ荘然として過ぎ去ったが、早くも広島駅前に商人があらわれた。ムシロを地べたに敷き、その上に商品をならべた。最初は一、二か所であったのが、十日もたたいたうちに二、三〇か所に及ぶ露天ができて、これまで目に触れることのなかった物や、統制で自由に入手できなかった物が、ドッとあらわれた。食糧品を主体としたあやしげな加工食品・日用雑貨品・軍用物資など、なんでも自由に売られ、日増しに盛大になっていった。

飢餓線上を彷徨していた罹災者らは、見るもの見るものがすべて垂涎のまどであって、人々はこれを「闇市」と呼び、昼夜をわかない雑踏の巷が出現した。

吸いがらを再製した手製のタバコや乾燥したタバコの葉そのまま、あるいは、占領軍から入手した洋モク(外国製煙草)。あるいは銀めし(白米)のムスビなどの立売りもいた。あくの強いザラメや黒砂糖は貴重品で、サッカリンやズルチン錠がもっぱら甘味の王様のように取扱われたし、酒もたくさん取引きされた。清酒よりも、ほとんどが密造酒で、軍放出の局用アルコールに色と味をつけたもの、またはマッカリと称するいかわしい濁酒と、その上澄み、なかには、工業用メチルアルコールもあって目がつぶれたり、死んだりした者も多かった。むし芋などは、金に糸目をつけぬというほどの売れ方で、闇屋でむし芋成金と言われるほどの財をなした者もあった。

闇市には、順当な品物もたくさん売られたが、その一方、まやかし物も実に多く、それとは知りながら、飢餓に迫られていた罹災者は買って来て食べた。

名の知れぬ海藻に塩水と人造甘味を入れて煮つめたものが、ノリの佃煮としておっぴらに売られたし、タクアンも、葉っぱのついたままの大根を黄色に染めてあるだけで、塩気のアまりないもの、あるいは色だけ似ていて、ただ塩からいだけの醤油・味噌、それから、桐油などで作ったあやしい食用油などが飛ぶように売れた。

これまで牛や豚の内臓(モツ)は、あまり一般家庭の食卓には、のぼらなかつたものであるが、ホルモン料理と称し、闇市を通じて、一般家庭に伝わった。それも殆んど密殺のものであった。ともかく食糧品関係はなんであれ、その形さえして、のどを通れば良かった。

衣類はまた、軍隊の放出品や復員兵の持ち帰った物品を主体として市場に溢れていた。

南方用の白いヘルメット帽から、半ズボン・半袖シャツ・ブカブカしたごつい航空服、さては佐官級以上が着用した立派なカーキ色の陸軍軍服、その他水兵服や歩兵の軍服・軍帽・軍手・軍靴・毛布・カヤ・水筒にいたるまで店先を飾っていた。

これらの物品は、配給品や隠退蔵物資の横流しか、それとも罹災者が、わずかな配給品を食糧にかえるために、やむなく手ばなした品物であった。ナベ・釜・フライパンなど台所用品も、あきらかに即製品と判る粗末たうすべらな品物が、堂々とその商品価値を誇っていた。

物々交換

罹災者が、疎開していた幾らかの物資を食糧にかえるため、このごろから物々交換ということがはじまった。農家へ行って頭を下げ下げ、気げんをとりながら僅かの食糧と、辛うじて残った疎開衣類とを交換した。

闇市にも、物々交換された物資がたくさん出まわっていたが、中には、著名な人の出版物・署名入りの図書・ヒスイのつまみのついた美しい銀びん・古色蒼然とした由緒ありげな甲冑・抹茶茶碗・書画・その他戦前の持ち主の生活をしのばせる高級な芸術品、伝家の宝物なども、天日に晒されながら、雑然とならべられていた。

社会悪はびこる

駅前闇市場は、警察力の萎縮につけこんで、ムシロー一枚・戸板一枚のにわか商人や戦勝国という特権意識の第三国人が思うままにのさばり、従来の商道德も慣習もなく、ただ思いどおりの掛値をつけて売りまくる商人が、入れかわり立ちかわり店を開いたが、特に第三国人は巨利をむさぼった。

闇市には、飢餓からどうにかして脱出しようとする罹災者らのひたむきな熱気と、平和な生活を一日も早く取りもどそうとする性急な意欲とが入りまざって、粗暴で無秩序な空気がムンムンと渦まいていた。

この異様な活気を持つ雑踏をぬって、リンゴ箱を立ちかけた上でおこなう煙草の空き箱をあやつる単純なインチキ賭博や、素人くさいパンパン(売春婦)たちが、おっぴらに横行するようになった。

焼跡では、ジープで来た占領軍の兵隊が、焼け残ってポツンと立っている金庫をハンマーで打ち破っている風景が見られたが、駅では貨物列車が発着するたびに暴力的荷抜きが盛んにおこなわれたり、物資の格納してある倉庫がたびたび襲撃され、守衛が殺されたこともあったりして、世相はまさに無政府状態の混沌たるありさまであった。実際、昭和二十二、三年ごろまでは、湯呑み茶碗に賽ころを伏せるイカサマ賭博のダミ声に群がる民衆の中に立入る警官も、まったく命がけのことであった。

罹災者たちの多くは、こんな世相のなかで、焼跡の防空壕やバラック小屋に起き伏し、いわゆるタケノコ生活で痩せ細りながら、その日その日をやっと過ごしていった。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月十二日ごろから雨が降り続き、十七日は、ついに台風が来て川が氾濫した。地区内のほとんどの道路にそって、川のように濁水が流れた。

半壊以上の損傷を受けた家屋や、焼残りの防空壕は雨がもり、浸水も激しく、危険になったので、みな尾長町の高地へ避難しなければならなかった。

家屋の建築資材はもちろん、補修材料さえも欠乏していて、釘一本すら思うように入手できず、原子爆弾を受けたままの状態であったから、九月の暴風にも、十月の豪雨にも荒らされるままになった。

十一月ごろ、全壊家屋に対して、一戸につき金壹千円也の交付金が支給されたので、この金で僅かながら応急資材を得ることができ、幾分か心の落ち着きを得た。二十一年一月ごろになって、ぼつぼつ疎開者や避難者が帰って来るようになり、各町ではトタンのバラックなどが建ち始め、また修復も進められた。その状況は、次のとおりである。

町名	概略
上大須賀町	全焼区域。二十年十月に入り焼トタンでバラックが建ちはじめた。昭和二十一年一月頃から住宅営団の組立住宅が、建ちはじめた。
大須賀町	全焼区域。二十年十月頃より焼トタンのバラックが四～五戸建ったとき建坪六四平方メートル余の家を建築した者もあった。二十一年頃、住宅営団の組立住宅が六戸建った。
松原町	全焼区域。広島駅のある地区なので、昭和二十一年四月頃から第三国人が豪華な建物を建てはじめてから、バラック建てが次から次へと建ちだした。
猿猴橋町	住友銀行駅前支店、広島信用組合駅前支所両建物は残ったが他は全部焼失した。昭和二十一年一月頃から住宅営団住宅が建ちはじめた。
荒神町	この町内では一部が全焼し、他は半壊以上の損害を受けた。翌年七月ごろから、本格的な修理をしいはじめた。
西蟹屋町	この町内では一部焼失したが、残った建物も半壊以上の損害であった。被爆後翌日から次々と修理をしていた模様である。

経済活動の伸展

二十一年三月、通貨金融非常措置令が実施されたが、インフレは上昇するばかりであった。新円切替で、それまで流通していた紙幣に新円証紙をはって使用したが、地区内では一人あたり一四〇円分が二月二十五日に町内会を通じて各家庭へ手渡された。

商人は現金取引上から新円の必要に迫られ、新円証紙は、いちじ別箇の価値を生んで、商売の掛引きに大きな魅力を持った。

商店・旅館ができる

二十一年になって、駅前の露店や立売り屋が一段と活気を呈し、漸次、松原町から猿猴橋町・荒神町方面へかけてソギ葺き、板張りの商店や旅館住宅がならびはじめ、焦土はようやく復興の緒についたのである。

十一、その他

水泡に帰した訓練と施設

地区内では、広島駅及び近くの二葉の里に騎兵第五聯隊(当時・第二総軍司令部)が所在していたから、特に防空壕は他地区よりも多く築造し、荒神町国民学校校庭には医療品を備えた応急手当用防空壕を造っていた。そして、たびたびの防空・防火、および避難訓

練を行ない、防衛態勢を整えていた。被爆時には、これら防衛対策も役立たず、また、医師もいなく、負傷者があまりにも多くて、混乱状態に陥り、執るべき処置も頭に浮ばなかった。鍛えた訓練も、原子爆弾という恐るべき兵器の前には、まったく水泡に帰した。

各戸に備えた防火用貯水槽も、バケツも使用不能となった。それに家の下敷きになった人を助けようとしても、救助用具もなく、まもなく火災が発生し、それらの人を助け出す余裕もなく、焼死するのを見ながら放置せざるを得なかった。

宮島の遠望

この地区から、日本三景の一つである宮島が見えることなどなかったが、被爆直後のこと、栄橋東詰の北側にあった道路補修用砂利置場の上に立ったとき、ふと宮島(この地点より南西にあたる)が、ハッキリと見えたのには驚かされた。

広島駅前の混雑

陸上交通の広島の正面玄関口というこの地区の位置づけは、このような苛烈な大災害後においても、余燼くすぶるときから、すでに人々の集散を見る特性を有し、そこに原始的な形ではあっても、たちまち経済流動の火花が散るといふ場面が展開されて、起ちあがる新生広島のバイタリティーをつぶさに眺めることができた。

忘れえぬ親切

橋本くに恵(被爆地・大須賀町)

被爆の日まで、私は母と二人広島駅にほど近い台屋町駅前橋のすぐ傍にすみ、県地方木材吉島営業所に勤めていた。あの朝出かけようとした途端、警戒警報に入り、しばらく待避していたが、間もなく解除になったので非常袋を肩に、ツバの広い麦わら帽子をかぶって家を出た。

玄関を出てから、ふと何気なく振り返るといつになく母が格子越しにぼんやり見送っているのが眼についたが、それが母との今生の別れになろうとは、夢にも思わなかった。ちょうど大須賀町の鉄道管理部横にさしかかったとき、突然パツ！と真白い光にクラクラと眼がくらみ、あっ…爆弾だ！と思った瞬間、いきなり脳天を叩かれるような爆音と一緒に暗黒の中に投げ出された。同時に鼻から口からムツとする熱気と布の焼けるような異臭が、呼吸を止めてしまうのではないかと思う程、モウモウと入って来た。自分でも眼を開けているのか閉じているのかわからなかったが、ただ真暗で呼吸のますます困難になっていくのだけが感じられた。もう駄目だと思うと、母の事、兄の事、ただ肉親の事のみが鮮かな火花のように頭の中を飛び散っていった。

それはほんの僅かの間で、やがて次第にあたりが夜明け前のように明るくなった時、眼にとび込んで来た光景は、いまがいま迄信じられない凄絶なものであった。一面灰色の海の中からムクムクと起ち上がり、やがて何ともたえようのない叫び声をあげながら、海藻のアラメのようなボ口布を身体じゅうぶら下げ、右往左往しはじめたもの、それは人の姿とは思えない想像を絶した人間の姿であった。

私はからだじゅう石でも結え付けられているように動きにくいので、ゴソゴソと四つ這いになって、一生懸命、何か大きなコンクリート様の物体へ這い寄った。そのうちにも人々の騒ぎは大きくなり、押しあい、ひしめきあいしている様は、左右に揺れながら、地鳴りを伴っていて、まるで地震のように思われた。ウォン、ウォンと奇怪なこだまのような叫び声は、口々に痛いとか逃げようとか喚いているらしかった。息苦しいばかりで起つことができないのである。そのうち近くの鉄道教習所の倒壊した建物から、メラメラと煙と一緒に炎の上るのが見えた。すると不思議な力が湧いてすっと体が立った。立って見廻せば、さき程迄歩いていた管理部の左側から、五、六間斜の人道と車道の境目にいる自分を発見した。二、三步踏み出して非常袋に気がつき周囲を見廻したが、どこへ吹き飛んだのかわからないので、灰もぶれの人波にもまれて丁字型の道まで戻

った。そこは大須賀町の方から押し寄せて来る群衆と、松原町方面からの逃げ惑う人群とでごった返していた。無意識に足が駅前橋の方へ向いたが、走って来る人々の喚き声で橋の落ちたことを知り、教習所の火勢の烈しさに圧倒されて、やむなく東練兵場へ避難した。

その頃になって、やっと自分の身辺に気がついた。モンペは上も下も右側は殆んど焼け切れ、下駄は片一方、麦わら帽子は、ツバとあご紐が残り、あらわになった肩から、ひじ、手の甲へかけて皮膚がすっかりまくれ、その端はぶらんと垂れ下がっていた。かゆいのか、痛いのかわからない。それよりも打撲らしい右肩の痛みが激しくて、知らず知らず呻き声が出た。やっと練兵場の権現下まで辿りつき余り苦しいので、どこかに腰を下ろして背中をもたせかけたいと思い、あたりを物色したが寄りかかれる所、坐られそうな恰好の場所は全部先に避難して来た人達に占められ、それらの人は、恐怖と不安の交錯した表情で、茫然と広島駅方面の燃えさかっている火炎を眺めていた。その大半の人の衣服は焼け千切れ、僅かに布端を身にまとっているに過ぎず、至るところ火傷を負い、或いは傷をうけ、むごたらしくむくみ、皮膚は垂れ下がり、物凄い出血は埃にどす黒くなり、めいめい打ち倒れたり、うつ伏したり、呻き声は地の底から湧いて来るように、不気味に響き、それはさながら、さき程の阿鼻叫喚の巷から初まる一連の地獄絵であった。詳細に見れば更に眼を覆うべき痛ましい人々に気がついたに違いないが、私は自分自身が苦しくて、人どころではなかった。いまにも呼吸が止まりそうで、権現下から、やや右寄りに記念碑がある横手を少し奥まった方へ行ったら小高い山裾の笹の茂みの中に倒れ伏すと、そのまま動けず、三日二晩、そこで虫の息をしていた。苦しい息をしながら母はどうしたろう、兄は無事であろうかなど思うと、独り野草の中で死んで行く事は、堪えられない淋しい気がした。それで大きな声を出して幾度となく母を呼んだり、隣組の人の名を呼んだりしてみたが、それは空しいこだまとなってはね返り、日が暮れると淋しさは、よけい加わった。昼頃から私の近くにいたらしい女の人が何くれと世話を焼いてくれ、かげ茶わんやビール瓶に水を汲んで来ては飲ませてくれたり、炊出しのムスビをもらってくれたりした。その若い女の人の親切はたまらなく嬉しかったが、握り飯を食べる気にはなれなかった。

また尾道船舶会社の名刺と旅行鞆の中から糊のきいたちぢみのシャツをくれ、何か困ることがあったら訪ねて来るようにと懇切に言い残して去った旅の老人、さえぎるもののない炎熱に喘ぐのを気の毒がって、笹の葉や松の小枝を折り日陰を作ってくれた兵隊、二日目の夜明け方に、己斐の山から来たと言って、夜露に濡れ苦悶している私の肩に自分の白いタオルをかけてくれた兵隊もあった。しかし、いずれの人もながく留まってはいられなかったであろう。来ては去り、来ては去りして、いつの間にか、一人減り二人減りして人はまばらになっていった。握り飯も干パンも全然手をつけなかったので、便意は催さなかったが、水ばかり飲んだのと、山土の隙間から湧く清水が胸から腹を冷やし、夜になると歯の根が合わない程悪感がし、頻繁に尿意を催したが、手足が動かないので非常に気味悪さを感じながらもそのまま用を足した。

こうして三日目の夕方と言っても未だ陽はかんかん高く、恨めしいほどの熱さの頃、通りすがりらしい一四、五歳の少年が、ひょいとかけ寄って来て私をのぞき「権現サンとこ、キュウゴシヨができとるよ。行くか。」言葉のなまりのたどたどしさからすぐ半島の子供と知れた。罪のない民族の偏見を越えた真心にすがりつくような想いでうなずくと、少年は殆んど私を負うようにして、権現下の救護所へ連れて行ってくれ、名も告げず所も言わず、いつの間にか風のように人混みにまぎれてしまった。礼を言う暇もなかった。ここで初めて右腕の火傷に手当てをしてもらったが、まるでしびれたように感覚がなく、両脚の火傷には気が付かなかった。足の踏み場もないほど負傷者が地面に転がっていて、中には既に死んでいる者も多かったに違いない。未だ少女らしい俄看護婦が寄って来て、握り飯をすすめてくれるのであるけれど、どうしてもものを通らない。しばらくして警防団の制服をつけた五十がらみの男の人が来て住所、連絡者の有無などを尋ねて廻り、余り私があつがるので、何処からか藎を拾って来て残陽への陰を造ってくれたが、藎にも甚だしい腐臭がこびりついていて。母の住所、その住居などを絶え絶えに答えると、間もなく「日通の人、日通の人」と声高く叫びながら件の警防団員は二人連れの人を連れて来て、「この人ですよ。」と言った。「わたしは宇品の日通のもんですがのう。え？橋本さん？知っとる、知っとる。兄さんはまめ(元気)で大洲の方は焼残っとりますけん、すぐ連れてって上げますよ。」

こうして私は三日目の日没頃、夢ではないかと喜びにうちふるえながら、苦痛もしばらくは消し飛んでしまった。宇品日通の木下氏に助けられ、トラックの覆布の上へ戸板で静かに抱え上げてもらい、兄の家に運ばれて行った。(後文略)

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

大洲町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目、南蟹屋町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、大洲町東組[おおずちょうひがしぐみ]、同西組、同南組、南蟹屋町[みなみかにやちょう]とし、爆心地点からの至近距離は、南蟹屋町西端の猿猴川(えんこうがわ)河岸で約二・八キロメートル、もっとも遠い地点は、新大洲橋西詰で約四・〇キロメートルである。

大洲は、往昔、文字通りの洲浜であったが、一七世紀中葉ごろから、つぎつぎと大がかりな干拓事業がおこなわれて大洲新開(一六六〇年)となり、矢賀沖と呼ばれた今日の蟹屋町・大洲町一帯の地が開かれた。

これらの新開は、藩政時代には、「御国第一の品」として重視された綿花の栽培が盛んであったが、繰綿生産の増大と共に、新開人口も漸増して今日の発展の基礎となった。

大洲町を南北に貫通して呉市へ通ずる現在の国道第二号線を挟んだ地帯は、戦争前も、現在と同じような各種の中小生産工場地帯であった。

被爆当時の戸数と人口

なお、被爆当時の地区内の建物総戸数は約八八八戸で、世帯数は八〇四世帯・人口約三、〇五五人で、各町内会の内訳は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
大洲町東	69	66	222	児玉義徳
大洲町西	293	267	972	天野悦胡
大洲町南	200	175	750	井上主衛
南蟹屋町	326	296	1,111	亀田多吉

また、地区内に所在した主要建物および主要事業所は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
大洲食料品配給所	大洲町	児玉鉄工所	大洲町
亀田砥石工場	南蟹屋町	大原ゴム工場	大洲町
藤川鋳物工場	大洲町	加藤製材所	大洲町
中島鋳物所	大洲町	難波鉄工所	大洲町

二、疎開状況

人員および物資疎開

大洲地区一帯では、五〇戸約二〇〇人が縁故を頼り、それぞれの関係へ疎開した。

南蟹屋町では、県食糧事務所付近の約二〇戸が、建物疎開をおこなった。

物資の疎開は、それぞれ行なっていたようであるが、詳細は、わからない。

学童疎開

学童疎開は、大洲町では昭和二十年四月十二日、佐伯郡津田村へ児童七〇人、教職員五人。同年四月十五日、同郡浅原村へ児童五〇人、教職員四人。同年七月十三日、同郡友和村(児童二人、教職員二人)および同郡栗谷村(児童三〇人)、教職員二人で以上第一次疎開。引続き同年七月十四日、佐伯郡津田村へ児童八人・および同郡浅原村へ児童五人が第二次疎開を行なった。

南蟹屋町では年月不明であるが、だいたい大洲町と同じごろ、佐伯郡浅原村へ児童五〇人が疎開し、九月十七日の台風の日復帰して来た。

三、防衛態勢

大洲地区の警防態勢は、比治山学区一四か町の組織にふくまれていた。

大洲町の東・西・南各町内会長および南蟹屋町内会長は、国民義勇隊小隊長となり、各隣組長が班長となっていた。

この義勇隊は、各小隊長が班長を指揮し、町民を動員して、防空防火および避難救護の訓練(演習)を実施し毎夜、灯火管制の訓練を午後十時ごろまで行なっていた。

この地域は、中・小工場の多い地域で、それぞれの工場は、防空防火の訓練を特に厳重に実施した。

四、避難経路及び避難先

災害時の避難場所として、大洲町東組は安芸郡温品村、同町西組は矢賀方面、同町南組及び南蟹屋町は安芸郡戸坂村方面へ避難するよう指定していた。

なお、地区内に所在した陸軍部隊集団はなかった。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜から朝まで

八月五日午後九時三十分ごろ、空襲警報発令があり、まもなく解除になったので、役員は灯火管制に注意して町内を一巡し、午後十一時ごろ就寝した。

六日朝の炸裂は突然のことで、炸裂と同時に、みな防空壕へ避難した。

上空侵入敵機の目撃者はいなかったようであるが、爆音を聴取した者は、かなりあった。

六日朝、疎開作業へ出動した人員、建物疎開実施状況は次のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数	出動先地名	疎開予定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
大洲町	5	南竹屋町	なし	なし		なし
大洲町西	10	南竹屋町	20	なし		なし
大洲町南	8	南竹屋町	30	10		なし
南蟹屋町	8	南竹屋町	30	20		なし

六、被爆の惨状

青い閃光

大洲町西組町内会天野悦胡会長の体験によれば、八時十分ごろ、家の前に出ると同時に、異様な青い光線が眼を射たので、パッと地面に伏せた。数分後、目をあけると、周囲に自宅の高さ二メートルのブロック塀が倒れていたが、かろうじて助かっていた。すぐ一〇〇メートルほど北の高見櫓に登って見ると、全市がもうもうたる黒煙におおわれていた。火柱が立ちあがり、見える限りの家屋がなぎ倒されていた。どうしたことかと一時呆然自失したが、気を取直して、早速大洲交番所へ行った。しかし、警察も本署と電話が通せず、連絡の警官を本署へ派遣したところであった。

避難者殺到

午前十時ごろ、避難者が比治山を越えて東側へ下り、宇品線の鉄橋を渡って大洲地区になだれ込んで来た。警察官・警防団が出て、路上に溢れた負傷者の手当をしたが、皆皮膚がむげてボロのように垂れさがっていた。死者も続出し、路上に重なりあった。死の行列が海田市町方面へ向けて、ひっきりなくゾロゾロと続いた。

十一時、師団司令部から「比治山橋へ集合せよ。」という命令が出たので、各町内会長・義勇隊長・警防団長が行った。司令部は「新型爆弾の投下で全市壊滅、被爆者の救護にあたれ。」と発表した。

このころ、大洲町東組のブドウ畑(約二七、〇〇〇平方メートル)および同町南組のブドウ畑(約一九、〇〇〇平方メートル)に約一万人が避難して来た。

地区の被害状況

なお、炸裂時の瞬間的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)			
	全壊	半壊	小破	計
大洲町東組	3	97		100
大洲町西組	4	96		100
大洲町南組	20	80		100
南蟹屋町	4	96		100

(人的被害実数はよく解っていない。)

また、この地区では各町とも火災発生はなかった。黒い雨は降らたかったが、普通の雨がバラバラと降った。

当日の夜、町民のほとんどは大洲町東組中央部にあった競馬場に、再び空襲があるかも知れぬという不安におびえながら集って、そのまま夜をあかした。

諸現象

原子爆弾の熱線とか光とかによる特別の現象はあまりなかった。

しかし、爆風の被害は、相当にあった。ほとんどの家屋の壁が亀裂を生じたり、剥落したりした。天井も抜け、場所によってはガラス窓が散々にこわれた。

天野町内会長宅(木造平屋建三七坪)では、家屋は東向きの家で、爆心にむく西側のガラス戸(巾一メートル、長さ二メートル)五枚は一枚もこわれずそのまま立っていたが、東側の同じガラス戸七枚は全部粉碎された。

爆弾炸裂地点から考えれば、西側がこわれるはずであるにもかかわらず、反対側がこわれたのは不思議な現象であった。その他の扉も全部、とばされ、天井が吹きあげられた。

七、被爆後の混乱と応急処置

死体の処理

被爆後、地区内に救護所は設置されなかった。ただし、避難者が多くいたので、救急品の配給があった。

大洲地区に来て死亡した身元不明者は、薪がないので、倒れた家の古材を利用し、現在の大洲消防署のある場所で茶毘にふした。

仮埋葬は、各町とも、それぞれ適宜の場所でおこなったが、大洲町西組は主として競馬場跡でおこなった。

町内会の機能

地区内の町内会の機能と町内対策については、次のとおりである。

町内会名	状 況
大洲町東組	町内会が立直ったのは一年後、当時は衛生組合として発足した。
大洲町西組	町内会長健在、引続き事務を行なう。
大洲町南組	町内会長健在、引続き事務を行なう。
南蟹屋町	町内会長健在、引続き事務を行なう。

八、被爆後の生活状況

この地区は、火災が発生しなかったので破損家屋を応急修理して、どうにか過ごした。

八月末ごろの居住世帯数

八月末ごろの居住世帯数は、大洲町東組五〇世帯・同町西組約二五〇世帯・同町南組二〇〇世帯・南蟹屋町二七〇世帯であった。

ハ工は多数発生したが、特別のことはなかった。

生活物資は無く、広島駅前の闇市場を利用する者も多かったが、軍需品の放出で、やっと衣類や日用品を補った。食糧の買出しは大変はげしかったが、殆んどタケノコ生活で、その日暮しであった。

九、終戦後の荒廃と復興

台風

九月十七日の暴風雨、および十月八日の豪雨により、どの家庭もいたんだ家屋の大雨漏りに困り果てたこと以外には、別に記すほどの被害はなかった。

ただ、十月八日の大豪雨のときは、猿猴川土手(亀田工場の前の土手)の切れる危険が迫ったので、大洲地区、および蟹屋地区の住民に避難命令が出て、みな矢賀方面へ避難したが別に被害はなくおさまった。

虚脱状態

住民は深い虚脱感におそわれていた。しかし、中には、このような世情を尻目にして、無神経な行為や悪徳を働いた者もあったようである。

何の災害も受けなかったある一家は、毎日市中に大八車で通い、家を一軒新築できるほどの木材や瓦を、無人の半壊家屋などから持ち帰り、自宅にうず高く積みあげて、人々から白眼視された者もあったと言われるが、このようなことは、比較的被害の軽かった地区においては、他にもたくさんあったようである。

府中に避難して

山本伊留満(被爆地・大洲町一丁目当時一八歳女学生)

空襲警報解除...表の方でそんな声が出て、しばらくたってからB29の爆音がする。

母と二人でつくろいものをしていた私は「変だな。」と思って外に出て見ると、丁度、西方の空からヒラヒラと真赤な玉が糸に釣られて落ちてくる。思わず「お母さん早く早く赤い玉が落ちて行くよ。」と呼ぶと、母も「エエ」といいながら外に出た。同時にパッと光って、何とも言えない妙な音がして、一瞬真暗やみになる。夢中で私は隣り

の玄関の中に逃げ込んだ。ソーツと頭を上げてみる。ゴーツというような音とも言えない音がする。五分位たったか、いやどれだけたったかわからない。ようやく明るくなった。前の家も隣りも私の家もみるかげもなくいためつけられて、あたり一面足の踏み場もない惨たんたる情景となっている。母も驚いた。不思議な顔をして出てくる。「何だろうか、どこに落ちたのかね？」

二人は同時に同じことをいっている。表の方が急にザワザワしだした。二、三軒先の夫婦が二人とも、顔から手から血だらけになって、何やら叫びながら走ってゆく。わが家も天井は吹き飛び、屋根の合掌は折れ、座敷も台所もメチャクチャ、建具も何処に吹きとんでしまったのか、硝子は柱につき立ち、畳の上も下駄ばきでないととても歩けない。何処に何が落ちたのか、皆目誰にも解らない。B 29 はそれでもまだ時々飛んでいる。人々は右往左往し、不安は刻一刻とせまる。とにかく表通りに出てみる。

市内の建物疎開の手伝いに行っていた人が、けがをして帰ってくる。駅の方にいたという人も、顔を光線にやられたとか言って、ちょうど卵のカラの内がわにある薄皮のような物を、目の下から頬にぶら下げて帰ってくる。「駅は全滅よ、自動車も電車も自動車も皆燃えているよ。馬も立ったまま死んだよ。」といいながら何処かへ行く。町の役員をしている母は、事務所にすぐに出かけていったが、帰ってきて「とにかく一度逃げなさい。荷車にできるだけふとんを積んでゆきなさい。野宿をするから」と、そう言って、また出かける。国道まで出てみた。皆真剣な顔をしてドンドン逃げて行く。リヤカーに一杯荷物を積んだ人、風呂敷包を背負っている人、ちいさな子供をたくさん連れている人はまあまあとしても、大方裸の人が多し。フラフラと何処に行くというあてもなく、とにかく市内から逃げないと、町はもう火の海なので市外へ出てゆく。ちょうど道路

の傍に水道管が破裂して、水を噴き出している処に来ると、先ずひと息入れて、水を飲み、そして市外へ脱けだすために必要な罹災証明をもらっている。母はその証明書を一生懸命書いてあげている。私は母のいうとおりに安芸郡府中町の埃宮に逃げてゆく準備をする。重い荷車を引いて府中に行き、山のふもとにありつたけのふとんを敷き、大きなカヤをつつて漸く一息入れる。しかし休んでいる暇はない。次から次へと、けが人が運びこまれる。府中国民学校の校舎には、もう一杯で収容できない。仕方がないので校庭にそのままおかれる。それでも引っぱりなしにトラックが積んでくる。髪もマユゲも焼かれている全裸の人が、ほとんど言葉も出ないのか、誰もだまって目ばかりギョロギョロと光らせている、老婆がフラフラと私の前にやって来た。腰巻一つで意識もうろうとしている。「わしの家は何処や。」と尋ねる。

医者処に連れて行きたくても、どのけが人もひどく、医者も手一杯。何処から手をつけてよいのかわからない。軍人もたくさん送られてくる。軍刀を杖に自分も傷つきながら、部下を心配して兵隊をしかったりなぐさめたりしている将校もいる。

B 29 の爆音しきり。警戒警報のサイレンが鳴りひびくたびに生きた気持ちはしない。「機銃掃射をされるから用心なさい。」と警防団がメカホンで叫んで廻る。その内に山のふもとは被災者で一杯になった。

(中略)七日は、朝からもう死人を焼くために、警防団や町の人たちは大変だった。道路でも畑でも薪を積み上げて、次から次に運びこまれるのを焼いている。勿論名前のわからない人もいる。府中の役場でも、罹災者たちにおにぎり、また証明書、死んだ人の名前を書いておくことなどと、それはそれは大変な混雑だ。おにぎりをもろう人たちは、国民学校に長い列を作って待っている。

トラックは朝から引切りなしにけが人を運んでくる。私たちの傍に逃げていた人たちも、七日昼頃になっても、帰って来ない家族たちを気にかけて、大洲の方の家に帰ってみる人、また、大洲にも帰っていないために、町の方に探しに行く人たちも出てくる。

たいてい一軒の家に一人くらいは帰って来ない。こうした人たちは、一カ月もそれ以上も探し、そして自分も原因のわからない病気で死んで行った人もある。また毛が抜けたりした人もあった。しかし、毎日毎日町の方へ行っては何かを拾って来たりした人もあったが、現在でもピンピンと働いている人もある。

大洲では四キロ離れているというのに、顔半分真黒になって片方の目がしばらく見えなかった人もあり、顔や手、肩などに硝子がたって傷を受けた人もあった。私と母はすぐに伏せたのと、家の外に出たので傷を受けなかった。もしあのまま家の中にいたら、ちょうど硝子戸の傍にいたので、全身傷だらけになるところだったと思う。

父は産業奨励館(現在原爆ドーム)がその時の事務所だったので、出勤していたら到底助からなかった。けれども六日の朝は岡山で講演することになっていたのだから、家を七時前に出た。駅で一時間近くも待ったが、前夜の空襲のため、汽車の線路が破壊されているとかでなかなか汽車が来ない。仕方がないから、事務所へ行こうとしたら、ち

ようど軍用列車が入って来たので、それに乗り、西条に到着したとき、赤い光をみたとのこと。しかし別に気にせずそのまま乗って行ったとか。その夜、宿で「広島が全滅だ。」と聞いたので、翌朝早速下りに乗ったところ、海田まで来たら、それから先は汽車が進まず、仕方がないので、大洲まで歩いて帰り、帰ってみたらもう誰もいなかった。「どうしたのかしら」と、心配していると、隣りの朝鮮の人が「皆、府中に逃げているよ。隣組みんな逃げているよ。」と教えてくれたそうである。父は七日の、夜七時頃、私たちを尋ねあてた。父だけはまた家に帰って行き、その翌日、奨励館の方へ行ってみたとか。工学部の学生さんにたくさん来てもらっていたのに、どうなったか心配して、その翌日もまたその翌日も、町へ行った。

五日目、家に帰って来ると何だか気分が悪くなって倒れたそうで、その後は、暫くもう町には出ないようにしたとか。私たち母と弟は、七日間を府中の山で過ごし、もう大丈夫だろうというので大洲の家に帰った。

父があらかじめ掃除をしていたけれども、住める部屋は、八畳の間一つだけ。それでも住むことが出来るのでありがたいことだ。ところが大洲は焼け残ったために、それからは人口が増えるばかり。電灯もつかず水道も出ない。しかし幸いなことに、あちらこちらと水道の鉄管が破壊されているので、水は流れ放だい。バケツを持って皆汲みに行く。これで水のなやみはなくなった。夜はとにかく早く休むことにして、あかりの儉約をする。こんな月日何日続いたかしら。私もまだ子供だったので、よく覚えていないが、こんなこともあった。暗い夜、知っている朝鮮の人が「奥さん肉いらんか。」と言って来た。母が「まあどうしたの。」というと、「田舎から連れて来たの、川の方でたくさんの人で殺したよ。皆でわけたよ。」とのこと。そして少しだけどと言って置いて行った。真暗ななかで何とも気味が悪かったのを覚えている。

配給配給で何でも皆配給だ。戦争中から慣れているようだったのに、戦後は何だか皆の気が荒くなったようだ。小さなことにすぐ腹を立ててけんかをしている。母はいつもなだめ役である。

学校もボツボツ授業を始めた。私は女学院なので、牛田山に学校があってその方へ行くことにたる。大洲から牛田山まで約三キロぐらいか三キロ半ぐらいある。毎日広島駅前を通過して歩いてゆく。駅前には早くも闇市が立つ。何とも皆が皆、殺気だっているように見える。軍人さんの復員、また元日本領の外地から引揚げなどで帰った人、列車は入口から出入りする人もなく、皆窓から出入りしている。

(中略)九月になって、ひどく雨が降った日があった。大野の方が流れたとか。私の家でも大変だった。八畳の部屋一つしか、満足な室はないのに、坐れるタタミー畳もない程の雨もり。とうとう皆起きて、ありったけのカサをさして、一晩中おきていた。この夜、お隣りの家は二階建てで家は風にゆれ、雨は内か外かわからない雨もりのため、親子五人が私の家へ来て一夜をすごされた。

雨と風が止むと、早速大工さん呼んで、家の修理をしてもらう。大工さんも仕事がないので困るとこぼしていた。「屋根がどんどんもる筈ですよ。満足な瓦は三分の一もない。」と申される。私の家の近くに、セメント瓦を作る処があるので、そこに行って買うことにしたけれども、運んでくれる人は一人もいないので、私と母と弟と三人で、乳母車に積んで運ぶ。「あらかじめの修理しか出来ませんよ。」との大工さんの言葉。何しろ材料がない、天井の板も皆吹きとんでどうなったかもわからない。「段原の方に六畳分ぐらい持っている人がある。」とのことで、母と二人でそこまで買いに行く。建具も売っている処もないので、古いのをわけてもらう。それを大工さんが、どうか間に合せて、やっと家の修理が出来る。こうして冬を何とか一応迎えることが出来た者は、本当に幸福な人たちで、鼠の中にトタンをひろい集めて、一畳ぐらいの雨露をしのぐ所を作って住んでいる人もあり、寝る所のない人たちがたくさんいた。

大洲は焼け残ったので、たいいてい一軒の家に二世帯か三世帯はいる。食糧難はますますひどくて、大洲など運根を買いにくる人が多くいた。田の泥をたくさんぬりつけ目方を重くした。それでも買いたいために、泥運根と知りつつ、高いお金で買って行く人もいた。貨車から、毎夜砂糖、大豆などを盗んで帰り、それを闇市に持ってゆき、米や魚や肉などとかえたり、或いは衣類を持って行って、かえる人などもいるとかいうことであった。

それから、だいたい一軒の家で一人ぐらいは原爆で帰って来ない人があるために、「お宅では如何ですか。」と聞かれた場合、「皆元気ですと、お答えするのが何だかお気の毒でたまらない。」と母などは言っていた。近所で、一軒の家など、親類縁者二人を一度になくしたご老人などは、「もう何処にも行く所もなくなった。」と、嘆息しておられた。

私の隣り、左の方の家には、朝鮮の方が五家族皆で二三人子供も合せて住んでおられたが、本当に良い人たちは

かりで、働きに出ては珍しいものがあると、私の家に持って来てくれた。野菜も肉も魚も、母は一度も買出しに行かなくて済んだのは、この人たちのおかげだったと、今でも感謝して言っている。この人たちが朝鮮に引揚げるときは悲しかった。永いあいだ日本で硝子工場に働き、良い生活をしていたのに、急にこんなことで引揚げなければならないのに、本国にどうやって帰るか、あてもなく不安がっていたけれども「引揚船に乗って帰ることが出来るから帰ることにした。」と言って、一夜自分たちの手製のドブロクでお別れ会をした。そして持てるだけの荷物を持って、「お世話になって有りがとう。」と言いながら、なごり惜しげに帰っていった。炭や薪や煉炭など、皆が皆全部、私の家にあげますと言って、庭に山のように積んで、雨にぬれないように上からトタンをかぶせて、小さな家みたいにかこって、チャンとしてくれた。親切なあの人たち、今はどうしているかしらと、よく母と二人で話す。「どうぞ幸福になってくれますように。」と祈るのである。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

東蟹屋町、愛宕町、若草町、尾長町、山根町、曙町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目、光町一丁目 二丁目、光が丘

町内会別要目

この地区の範囲は、曙町[あけぼのちょう]・東蟹屋町[ひがしかにやちょう]西部・同東部・西愛宕町[にしあたごまち]・東愛宕町[ひがしあたごまち]・若草町[わかくさちょう]・尾長町三本松[おながちょうさんぼんまつ]・同東山根[ひがしやまね]・同西山根[にしやまね]・同丸山[まるやま]・同片河[かたこう]・同尾長[おなが]・同岩鼻[いわはな]とし、爆心地からの至近距離は、大須賀町に接する広島駅裏の地点で約二キロメートル、もっとも遠い距離は、矢賀町に接する岩鼻の地点で約三・八キロメートルである。

尾長地区は、毛利氏の広島城築城とも因縁深く、広島市の各町のなかでも古い地区で、「尾長山麓に在り、依りて此名を得たり。福島氏が在城の時、矢賀村より分ちて一村とし、広島に属せしむ云々...」と広島市史(大正十四年刊)にあるが、藩政時代は、隣接の安芸郡矢賀村との境、尾長町が国道山陽道の東方の基点であって、そこから愛宕町を経て城下に入っていたから、この路線をはさんで町家が栄えた。

戦前までは、なお田畑も多く、半農半商の居宅がならんでいた。

被爆の当日、地区内の東練兵場や山林地帯には市中心部からの罹災者が多数殺到して酸鼻をきわめた。また、多くの罹災者は、国道沿いに矢賀方面へ、または東練兵場から大内越峠[おおちごだお]を経て中山村[なかやまむら]・温品村[ぬくしなむら]方面へむけ、陸続と歩いて避難して行った。

当時、この地区の建物総戸数は約二、二八七戸で、世帯数二、三六五世帯・人口約九、二五二人で、各町の内訳は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
尾長町東山根	265	265	1,058	水野敬二
尾長町西山根	115	120	490	中山佐吉
尾長町丸山	115	127	455	林登
尾長町片河	439	416	1,673	村上源次郎
尾長町尾長	220	288	1,231	秋月茂一
尾長町岩鼻	58	61	256	能崎乙吉
尾長町三本松	157	157	720	上田兼一
曙町	78	76	275	寺尾月水
東蟹屋町西	211	211	875	信川義雄
東蟹屋町東	110	117	430	平林亀吉
愛宕町西	126	122	554	和田実
愛宕町東	210	210	520	大原良宅
若草町	183	195	715	大橋馨

なお、地区内に所在した主要建物(または事業所)は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
尾長国民学校	尾長町	天満宮	東山根
松本工業学校	尾長町	瑞川寺	東山根
尾長鉄道寮	尾長町	荒神社	曙町一丁目
県立盲学校	尾長町	愛宕神社	愛宕町
市立東隣保館	尾長町	湯沢綿業株式会社	愛宕町
国前寺	東山根		

二、疎開状況

人員および物資の疎開

地区内の疎開作業として、鉄道線路側の家屋の疎開があり、西愛宕町が一八戸、若草町で二〇戸ばかりが軍隊によって取りこわされたため、その該当者が立退いた。

六〇歳以上の老人ならびに病人子供は、縁故疎開することになっていたが、ただ一部だけ疎開したのが実状である。物資の疎開は郊外の縁故先に疎開させたものが多かった。中には蔵があるからと考えて疎開せずにいたが、爆

風によって破壊され、火が内部に入ったため、結局焼失したのもあった。

学童疎開

学童疎開については、尾長国民学校は、全学年を通じて昭和十九年十二月ごろから二十年三月ごろまでに、極力縁故疎開をすすめた。

同年四月ごろまで約五〇〇人を減じて残留児童約八五〇人となった。そのうち三年以上の者で適当な疎開先がなく疎開を希望する二五〇人が比婆郡小奴可村・八銚村の二か村に集団疎開した。職員九人が引率し、村内五校に分れて勉強した。一、二年生と三年生以上の疎開しない残留児童約六〇〇人は、学区内で適当な数箇所をさだめて、寺子屋式授業をおこなった。

三、防衛態勢

警防団を結成し、隣保組織の整備充実をおこなった。防空壕資材の充実・竹槍訓練・防火訓練・避難と救護訓練・灯火管制訓練などを繰返して態勢の強化をはかった。

昭和二十年六月、国家総動員法により広島市国民義勇隊が創設されたので、尾長国民義勇大隊(隊長村上源次郎、副隊長和田実・上田兼一)を編成し、東練兵場において閲兵式を行なった。

四、避難経路及び避難先

曙町・蟹屋町東、西・愛宕町東、西・若草町・尾長町三本松の各町内会は、避難先として一応、安佐郡中深川村方面を指定していたが、被爆当日は家屋の全壊焼失のため混乱状態に陥り、それぞれが、親類知己をたよって避難した。また、尾長町山根東、西・丸山・片河・尾長・岩鼻の各町内会は、安芸郡府中町・中山村・戸坂村・温品村所在の寺院や国民学校に定めていた。

避難経路としては、矢賀町経由で、府中町または温品村、あるいは、尾長町大内越峠経由で中山村・戸坂村へ避難することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

地区内に所在した陸軍部隊集団は、次のとおりである。

兵種・名称	所在地	兵種・名称	所在地
高射砲部隊	尾長町二葉山頂	築城部隊	尾長国民学校内
防空隊	尾長山頂	不明(多数)	尾長町天満宮境内
暁部隊通信隊	松本工業学校内	不明(多数)	瑞川寺境内

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

尾長町東山根町内会では、国民義勇隊尾長分隊として、六日に鶴見町の家屋疎開作業に出動の命令を受け、五日の夜は、準備が終了していた。これは、尾長学区が、八月四日から出動命令を受けたので、学区一三か町の町内会長は、八月一日、分隊詰所に集合し、抽せんによって各町の出動日を決定し、六日は東山根町内会が当番にあたったためである。

五日夜から六日朝にかけての空襲警報発令の時は、平素の訓練どおり防空壕に待避した。

町内会は隣組単位に不寝番を定め、一定の場所を屯所として交替で詰め、警戒警報が発令されるや夜は灯火管制を厳重に取締って廻った。

六日朝

尾長分隊(東山根地区)二二〇人は、六日午前六時集合、点呼後六時三十分に出発して、鶴見町の家屋疎開作業に出動中、猿猴橋で警戒警報の発令があったが、まもなく解除され、七時四十五分目的地に到着し、県庁職員の指示を受けて作業順序の打合せ中に被爆した。

この他の各町町民は、警戒警報解除となったので、それぞれ平常どおりの活動を開始し、出勤する者、用事で外出する者などあり、人員の被害は大きかった。

ほとんどの者が、敵機が侵入するとも思わなかったが、南方から北方に高度を保ってゆく敵機を目撃した者(尾長)もあり、西山根でも敵機を相当人数の者が認めている。しかし、爆音は聞えなかったともいう。

愛宕町では、B 29 が相当に高い高度を保ち、市外温品・馬木方面に行くのが見られたが、瞬間、閃光があり、爆風が襲い、屋根瓦やノジ板が破壊され、埃が舞いあがって、たちまち周囲が真っ暗になった。

七、被爆の惨状

至近弾と錯覚

炸裂のとき、誰もが一瞬、大型至近弾を受けたものと思ったが、まもなく全市広範な被害であることが判明した。

負傷者殺到

市中至るところに黒煙があがり、義勇隊員として疎開作業に出ていた尾長東山根分団の隊員は、形相全く変り果て、軽傷者は重傷者をいたわりながら、部分集団で帰って来た。

このように東山根は、働き手が疎開作業に出ていたのので、留守番の老人子供、または一人前の働きのできない婦女子ばかりであった。しかし、多数の負傷者があとからあとから押しかけて来て、水を求める者、負傷手当てを求める者など多く、これらの救済に町民は全力をつくした。

愛宕町方面では、爆風で倒された家屋はほとんどなかったが、全部の家が東へ傾き、屋根が抜け、障子・襖類も全部バラバラになった。最初閃光がして黄色い霧のようなものが降ったかと思うと同時に、野菜の広葉や樹木の葉がジリッと焼ける音を聞いた。たちまち塵芥が周囲を包んで、一寸先も見えない状態になった。

ガラスの破片で顔や手を切り、全身血だるまとなって素足で逃げる者、ヤケドをして顔や手が腫れあがり、しかもそれに屋根裏の煤がおっかぶさり、まっ黒になった者、子供を背負って逃げる途中、子供が死んでいることに気づき気狂いのように泣き叫ぶ者、水、水と叫びながら路上に倒れている者など、この世にあらぬ修羅場が出現した。

出火

正午ごろ(確かな時間不明)、愛宕町の湯沢綿業工場の原棉が、放射能熱線により着火した。これが火元となって四方に延焼し、尾長町の松本工業学校・尾長国民学校へと燃え続け、ついに東山根に火の手が迫って来た。しかし、この頃には、町民はすでに、敵機の波状攻撃を怖れて、子供や負傷者を連れ、それぞれ避難したあとであったから、町内にとどまっていた七、八人の者や隣町の者が、バケツ操法で決死の注水をおこなって防火につとめた。幸い日暮れになって風向きが変わり、辛うじて延焼をくい止めることができた。火災が終息したのは午後六時四十分ごろであったが、町内残留者の防火活動と共に、東消防署矢賀出張所の出動、あるいは夜になってからの呉消防署の来援などが防火の大きな力となった。

約七五戸を焼いたが、一応延焼をくい止めたので、残留していた者も山林地帯に避難したが、この付近では、炊事の残火による出火が無かったから、全焼という災害を免れたと言える。

なお、尾長町西山根の瑞川寺(爆心地から約二・七キロメートル)のワラ葺屋根が、放射熱線によって自然着火し、たちまち全焼した。

避難状況

町民のほとんどは、被爆直後、事の異常さと、緊迫した危機感に襲われて、近くの山林地帯や東練兵場に避難した。中には、中山村・温品村、あるいは矢賀町・府中町などへ、さらに奥地の知人を頼って逃げる者もあった。ここらは、市中心部からの避難者も多くて、中山・温品両村に通ずる大内越峠(おおちごだお)(幅員五・五メートルの県道)は、幽鬼のような負傷者が道路一杯に溢れており、バタバタと倒れる者が続出した。また尾長の岩鼻・矢賀町を経て更に奥の府中町方面へ避難する罹災者もえんえんとつづいた。

瞬間的被害

炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
尾長町	-	90	10	-	16	26	58
尾長町岩鼻	-	30	70	-	30	70	-
曙町	10	80	10	-	2	31	67
東蟹屋町	16	72	12	-	3	31	66
愛宕町	90	10	-	-	3	42	55
若草町	80	20	-	-	3	42	55

火災発生炎上の状況

また炸裂後、火災発生・炎上については、次のとおりである。

町名	最初に発火した炎上		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
尾長町東山根	尾長国民学校	午後三時頃	西側尾長国民学校校舎より順次延焼 東側松本工業学校校舎より順次延焼 約四〇%	午後六時四十分
尾長町西山根	瑞川寺	被爆直後	瑞川寺は草屋根であり、自然着火により焼失した	
尾長町丸山	松本工業学校	午後二時頃		

尾長町片河	なし			
愛宕町	愛宕神社 湯沢綿業工場	午後十二時頃	焼失	
曙町	荒神社	午後七時頃	焼失	
尾長町尾長	なし			
尾長町岩鼻	なし			

諸現象

炸裂後、この地区には、降雨はなかった。

鉄道線路ぞいの電柱が一本、自然着火で焼けはじめ、ちょうど線香をたくように、四、五日間燃えつづけた。火災終息後、愛宕町の鉄道踏切りから、市の西方町跡が一望に見渡され、己斐の町まで眺めることができた。

八、被爆後の状況

道路啓開

八月七日ごろ、郡部から警防団員が多数来援して、道路の瓦礫や残材などを整理したが、地区の道路通行に支障をきたすようなことはなかった。

救護所設置

国前寺の救護所では、呉海軍鎮守府派遣の医療班、賀茂海軍衛生学枝隊、及び豊田郡医師会などが出動して活躍した。なお、東練兵場では呉・三原両市医師会の医療救護班も設営して治療活動を行なった。

死体の収容と火葬

他地区からの避難者のうち、重傷者は、次々と死亡し、死体の焼却には難渋した。後日、東練兵場跡開拓地で、農耕者が白骨を発掘したことがあるが、焼却した死体の人名・身元などの確認状態は不明である。また、死体収容・焼却者も不明であるが、その家族や縁故者が処理したのもかなりあったようである。なお、死亡者は、大内越峠の私営火葬場紫雲館においてもたくさん焼いた。

遺骨の安置、慰霊については別に記す資料がない。

町内会の機能

各町内会の機能は、被害軽微の地区は支障なかったが、その他の被災地区では、各自が自活の道をひらいた。町によっては被爆前の町内会組織で町内会長を作り、物資の配給その他の業務を行なうことができた。

応急住居

破壊家屋は、降雨をしのぐ程度の応急修理をおこなったが、資材不足で思うように出来なかった。

家屋を焼失した者の中には、焼残りの古トタンや古材で、仮小屋を造って住んだ者も一部あったが、当分、縁故者の家に仮入居する者が多かった。

二十一年四月、尾長町三本松の上田町内会長が家屋を最初に新築した。このごろはまだ、屋根を応急修理してどうやら雨露をしのいでいる者が多かった。

地区外へ避難した者のなかには、当分の間、帰って来ない者も多くいた。

八月末居住者状況

なお、八月末ごろの居住世帯概数は次のとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数	町名	世帯数
尾長町東山根	130	尾長町尾長	250	西愛宕町	75
尾長町西山根	160	尾長町岩鼻	60	東蟹屋町東	33
尾長町丸山	100	若草町	98	東蟹屋西	135
尾長町片河	400	東愛宕町	68	曙町	105

生活環境

被爆後、この地区内でも八工が多数発生した。死体の始末が不完全であったからと思われるが、駆除薬もなく、不衛生きわまりなかった。九月初め、占領軍の飛行機が薬剤を撒いてから減少した。

電灯がともらないので、相当期間、夜は「くらやみ生活」が続いた。電灯がついた時期は、素人工事が多く個々別々の点灯ではっきり判らない。

住民復帰

一般町民の復帰は散漫であったが、尾長国民学校は東隣保館幼稚園部、および高天原の旧通信部隊バラック兵舎七棟(一二〇坪)を利用して、十月一日から授業を開始した。当時、児童数約三〇〇人、職員二四人であったが、日増しに復帰する児童や転入する児童がふえていった。

九、終戦後の荒廃と復興

九月十七日の暴風雨と十月八日の豪雨禍はひどく、破壊された家屋は、資材不足・経済条件または労働力不足などから、完全に復旧されていなかったものでひどく雨もりして困難した。

山崩れのため、土砂が流出し、河川が氾濫し、各家屋とも床下浸水した。

三日月型の傷

原田守行(談)

当時私は、曙町三丁目三九九番地の二階建の家に住んでいた。

六日は、八時ごろ起床した。真夏だったので、パンツ一枚のまま、屋外の共同水道で歯を磨いていたら、B29のぶい爆音が聞えた。「おかしいなあ、警戒警報も、空襲警報も鳴らんのに、B29が飛んでいるぞ。」と、家族の者に言いながら、二葉山の方を見ると、ちょうど山頂の上から姿を現わすところだった。見ていると市の中心部の方向に飛んでゆく。と、マをおかず、ピカッと、それは、ちょうどマグネシウムを燃やしたような強烈な閃光であった。

びっくりして伏せた瞬間、グワッと爆風がきて、グラグラ家が左右に揺れた。床下に潜ろうとしたが、このように家が揺れたのでは、倒壊して下敷きになるぞと、瞬間的に思ったので、近所の防空壕目ざして走りこんだ。そしてひと息つく間もなく、女房や子供のことが心配になり、これはひょっとすると、やられたかもしれんと、壕の外に飛び出し、無我夢中で女房や子の名前を呼んだ。

あとで知ったのだが、女房は、そのとき朝めしの準備ができたので、屋外に出て、遊んでいる子どもを探しながら、五、六軒先の長屋の小路の角に立っていた。

ちょうど向いあっている長屋と長屋との、幅三尺の通路に子どもがいたので、近寄ろうとして歩きかけたたん、爆風のため、二階がガラガラと頭上に倒れかかって来たが、幸いだ事に、筋向いの平屋建の家に、二階が倒れて、もたれかかったため、母子がいた所が空間になり、奇蹟的にカスリ傷一つなく助かった。もし、この平屋がなかったら、倒壊した家屋の下敷きになっていたに違いない。

防空壕に逃げこむときは、自分一人だけだった。壕には人がいたが、飛びこんで来た私の頭をみて「大変な出血だ。」と言う。それで初めて気づいたのだが、頭部に三日月型の、ちょうど「く」の字を逆にしたような裂け目から、血がタラタラ流れていた。当初伏せたときは、痛みも何も感じなかった。しばらくして、家内と子どもが防空壕に入ってきたので、互いにその無事をよろこびあった。これは聞いた話だが、建物の陰や木陰にいた人は、爆風で飛んできた板切れなどで少々けがをした程度だが、日光があたっているところにいた人は、熱線の直射を受けなくても火傷をした。被爆距離にもよろうが、太陽の光線と、この熱線とが何らかの形で作用したのであろう。

従って原爆投下のとき曇天ではダメで、快晴のときに投下しないと効果があがらないのではないかと考えられる。米軍が、投下直前に、観測機を飛ばして気象状況を調査しているのを見てもまちがいない。

防空壕には一四、五人ぐらい入っていたが、衣類や医薬品などは全然なかった。

しばらくして、段原の店が気にかかるので頭部に繻帯の代りにタオルをまき、国民服にゲートルをまいて身仕度を整え、家を出た。大正橋まで歩いて来ると、医院があったので診てもらったら「ここでは手当てできない。」と簡単に薬をつけ、繻帯を巻いてくれただけだった。他に娘さんが一人治療を受けていたが、ズロース一枚のまる裸に素足、全身火傷とけがである。聞いてみると、女子商業の一年生で、鶴見橋方面に、建物疎開作業に動員されて、現場で点呼を受けていたとき被爆したという。手当てをする薬もなく、油だけ塗ってもらっていた。

外に出てみると、ゾロゾロとおびたらしい避難者が歩いてしたが、ほとんどの者が着衣はボロボロ、中にはまる裸、そして裸足。それはひどい光景であった。

道端には死体がいくつかがっていた。

避難者の中に知人がいて「おーい、そこにおるのは守さんか、原田の守さんじゃないか。」と、声をかけてくれたが、こちらは相手が誰か判らん。キョトンとしていると「わしじゃが...」と名乗られてはじめてわかったくらい顔面がヤケドしてふくれあがっていた。「あんたはどうして火傷したんじゃ。」と、問うと「わしも、どうして火傷したのかわからんのじゃ。」と答える。まさか原子爆弾で、こんな姿になろうとは、誰も思わなかった。原子爆弾は未知の兵器であったからである。

それから、向うから来る避難者が、ボロをさげてくるので、「バカな奴じゃのう、そのきたないボロなんか脱げば

ええのに...」と思いながら近寄って見ると、なんと、これが、皮膚が剥げて、ぶら下がっているんだから脱ぎようがない。まったくおどろいた。

段原の店に来てみると誰もいない。しばらく居って、また曙町のわが家へ帰ってみようと思い、大正橋まで来ると、着剣した兵隊がずらりと並んでいて、通行止めにしていたし、附近の家々は火炎に包まれ、その火勢がひどく、道をふさぐように燃えあがっていた。

それで、川土堤を引きかえして大洲へ渡る橋を渡り、大洲町一丁目に出て、そこのガードをくぐり、岩鼻をまわり、曙町に帰った。それが正午ごろだった。

曙町の家はどうだろうかと思えば、幸いなことに火災はなく、ただ傾斜しているだけであったが、屋根瓦はずり落ち、壁も落ちて、柱がやっと支えているという感じだった。

家の中に一歩足を踏み入れると、中は、何かで掻きまぜたように、物が散乱して足の踏み場もない。それでも、当日の晩は、家の中で寝る事もできないので、ゴザと蚊帳と毛布をもって、近所の畠の中に寝ころんだ。だが何とも小虫が多くて、じっと寝ておれないので真夜中に家にもどり、玄関脇の二畳の間を片づけ、そこに親子が寝た。

なお、先のB 29は、一機の爆音を聞き、一機の姿を目撃したのであって、他機のことには知らない。

一、地区の概要

この地区は、矢賀町[やがちょう]の一町で、爆心地からの至近距離は、尾長町と接する地点で約三・二キロメートル、もっとも遠い地点は、安芸郡温品村と接する地点で約四・五キロメートルである。

地区中央を南北に、国鉄芸備線が貫通し、北側はなだらかな丘陵地帯をひかえ、平地部は、当時、静かな田園がひらけていた。

往古は海辺の一集落であったが、矢賀村集落の東に、入海を作っていた矢賀浦はしだいに陸地化し、矢賀沖と呼ばれた今日の蟹屋町・大洲町一帯の地がつぎつぎに開かれていったのであって、昭和四年四月一日、隣接七か町村合併の際、広島市に編入され、つぎの広島市の成長の出発点となったのである(新修広島市史)。戦後、さらに市の復興と共に面目を一新して、田園地帯から一躍住宅地帯として急速に市街化が進んでいるが、なお、空気も澄み、小鳥もさえずる静かな良い環境を保っている。

被爆当時の総連物数は四二三戸で、四二六世帯、人口は一、七二二人、矢賀町内会長は穴戸義太郎であった。

原子爆弾炸裂による家屋の倒壊はなかったが、衝撃を受けた損害はかなりあった。人畜の被害はなく、火災も発生しなかった。

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
矢賀国民学校	矢賀町八四四	国鉄広島工機部	矢賀町
覚法寺	矢賀町		

二、疎開状況

農業地帯であるから、食糧増産に追われて、現住居を放棄するようなことは、まったく考えられない実情にあった。従って人員の疎開はなかったが、物資の疎開は、米や平生着用することのない晴着などを、郡部へ疎開している人も多かった。また、逆に市中心部からこの町内へ疎開して来る人もかなりあった。なお、学童たちは、郡部に縁故者のあるものは縁故先へ、ないものは佐伯郡玖島村(現在佐伯町)へ集団疎開をした。

三、防衛態勢

地区のほとんどが山林・田畑であって、街道に沿って家がたちならんでいた。戸数が少なかったから、以前は隣接の尾長町と合同で、防空・防火訓練を実施していたが、警防団を組織してから一町内会一警防団で独立して防空・防火の訓練を行なった。ただ、防空小区は尾長町と同一の小区であった。

防空壕も町としては設けなかった。しかし各家では、最寄りの山腹か、または家の内外の適宜な場所に、それぞれ小型防空壕を設けていた。

なお、軍隊関係は国鉄広島工機部の建物の一部(字向崎)に一、三人鉄道隊が駐屯していた。

四、避難経路及び避難先

地区の立地条件から、被災率が低いと考えられて、避難経路とか避難場所とかを特に決めておくということとはしなかった。市内とはいえ、多分に郊外の村落的な性格の町であったから、むしろ、八月六日被爆当日は、逆に市中心部から避難者が殺到した。

この日、矢賀町は挙げて、これら避難者群の受入れのために活躍し、矢賀国民学校は、当日から救護所(後に日本医療団体の臨時治療所)となった。

五、五日夜から炸裂まで

警報が発令されるたびに、警防団は勿論、隣組の当番は、所定の防空態勢に入ったけれども、空襲時以外は防空壕へ入って待避する者はいなかった。

六日午前七時三十一分からは、警戒警報が解除になったし、町は静穏そのもので、建物疎開作業に出動する者(鶴見町・約一三〇人)は、出かける仕度をし、炸裂時には、全員整列し、義勇隊長指揮のもとに、作業の分担を受けていたところであった。

六、被爆の惨状

爆風襲来

原子爆弾による家屋の倒壊とか、火災の発生はなかったが、閃光を感じた瞬間、天井は吹きあげられ、壁は剥落し、建具なども吹きとばされたり、こわれたりした。ただ、山の陰にあった一戸だけが、まったく被害がなかった。

しかし、稲田で耕作していた者の中には、熱線で火傷した者があって、尋常でない衝撃を直感し、一応は防空壕へ避難した者も多かった。

しばらくすると、市民や兵隊が続々と避難して来はじめ、ようやく事の重大さを知った。

炸裂による被害

地区内の原子爆弾炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

町名	家屋被害 (%)					人的被害 (%)			
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無傷の者	計
矢賀町	-	-	99.9	0.1	100	-	5 (通勤先で負傷した のも含まれる)	95	100

飛来物を拾う

矢賀には、雨は降らなかったが、屋根の鉄板や燃え残りの板が、地区内のそこここから降って来た。子供が面白がって、飛来物を追っかけて拾ったりしたが、それがためか発熱した子もいたという。

稲の葉焦げる

時節はちょうど稲の穂が出る前であったが、田の全面をおおって茂っている稲の葉の上を、閃光が放射線状に走って、扇型に葉のおもてが焦げているのが見られた。

七、被爆後の混乱と応急処置

避難者殺到

矢賀は被害僅少で救援隊は来なかった。しかし、避難者がドッと押し寄せてきたので、町民総出で、救急態勢をととのえ、受入作業に専心立ち回らした。矢賀を通して、中山村や府中町に行こうとする避難者が、道路に溢れて大混乱を起した。しかし、行く途中で死ぬる者もたくさんあった。

応急救護所の開設

六日は、負傷者をつぎつぎに矢賀国民学校に収容し、主として警防団の手によって看護をおこなった。

負傷者は後を絶たず、救護所だけではまにあわないほどであったから、学校の教職員や町内会役員及び町民が医師の手伝いをして働いた。

この矢賀国民学校の救護所は、二十年十一月から負傷者の治療だけをおこなったが、それから二、三年後まで存続していた。

また負傷者を、そのまま学校に収容しておくことが困難になったので、二十年十一月、宍戸町内会長の出資(一、五六〇万円)によって病院が建てられることになった。

死亡者続出

応急救護所に収容した負傷者たちは、六日から三日目頃までに続々と死亡していった。しかし、被爆後一週間ぐらいまでは、生きていた負傷者の救護に全力を傾注するほかなかった。幸いにして、救護所で扱った死亡者は、市中から少なくともここまで逃げて来ることができた人々であったから、住所・氏名が確かめられていたため、身元不明の死体は出なかった。

火葬と埋葬

火葬は、十日頃から郡部(瀬野など)から来援した警防団の応援を得て、約一か月半位はつづけられた。火葬場所は、初めは矢賀国民学校運動場で毎日四、五体ずつおこなわれたが、後には府中町の川土手において、学校教職員や町内会役員・警防団員・その他町民が協力しておこなった。

慰霊祭

二、三年後、国民学校校庭の、火葬場所にした一隅で慰霊祭を執行した。この火葬場は、そのままにしておけないので、ねんごろに死者の霊をとむらい、土砂を埋めて整地した。

町内会の機能

予想もしなかった市中からの多数の避難者で、町内は急に騒然となったが、町自体の機能は健全であったから、避難者対策について、食糧の確保・炊出しなども、町内役員の努力と相俟って円滑におし進めることができた。

八、被爆後の生活状況

人口急増

この地区へ避難して来た人たちの中には、被害の少なかった矢賀に、そのまま住みついた人が多かった。それがため世帯数が急増し、八月末ごろの居住世帯は一、二〇〇世帯(被爆直前四二六世帯)にふくれ上がった。

しかし環境衛生は、きわだって悪化することもなく、八工の発生もごく僅かにとどまった。

電灯も、四、五日後には、各家庭につくようになった。

復興進む

人的にも物的にも被害軽微であった矢賀町は、避難者の処置が一段落すると、居住者が急増したとはいいながらも、再び本然の農産地帯の平穏さを回復し、自給自足のできる食糧事情の強みもあって、足早やに平常状態に復興していったのである。

一、地区の概要

中山[なかやま]は、昭和三十一年四月一日、安芸郡中山村[あきぐんなかやまむら]から市部に編入された地区である。

爆心地からの至近距離は、尾長地区に接する山地で約三・〇キロメートル、もっとも遠い地点は、戸坂地区に接する山地で約五・四キロメートルである。

この地区は、東部と西部の山にはさまれた山間地帯で、耕地面積も、他の田園地帯にくらべると僅少である。従って、以前は戸坂・井ノ口とならんで海外移民・出かせぎ者が多かった。

明治三十年ごろから昭和七、八年にかけて、ハワイ・アメリカ・ブラジルなどに渡航した者が多く、農業特に、果樹園(ブドウ園)の労働に従事したという。

被爆当時の村の建物総戸数は二四六戸、世帯数は二九三世帯、人口一、八一二人であった。

地区内の主要建物(または事務所)は、次のとおりである。

学校および主要建物

名 称	所在地	名 称	所在地
中山村役場	中山村一八三三の二	稻生神社	中山村二〇九四
中山国民学校	中山村八二五	万休寺	中山村二二〇五
中山村農業会	中山村一八三四の一		

二、疎開状況

疎開状況

当時、郡部であったため、地区内から他へ疎開した者はなかった。逆に、縁故先をたよって、市内からこの地区に疎開して来た者が五三世帯、三〇八人いた。

物資疎開については、村民同志で、土蔵のある家にあずけた者がたくさんあった。また、ほとんどの家が市内から疎開物資をあずかっていた。土蔵のある家はもちろん、納屋から座敷まで積みこんで、寝る部屋があるだけという家もあった。

軍隊の物資も、七月下旬ごろから持ちこまれ、師団司令部の陣営具は万休寺へ、工兵隊の陣営具は東会館へ、また民家へは暁部隊の乾パン、歩兵補充隊(二部隊)の日用品、憲兵隊の事務用品などが疎開された。

この地区では学童疎開はなかった。

三、防衛態勢

警防団

村内の防衛・防空・防火態勢は、主として警防団長の指揮によって行なわれた。

村内八部落にそれぞれ部落長を置き、その下に八戸ないし一〇戸ぐらいの隣保班を設けて、防空・防火の訓練をおこなって、態勢をかためていた。

また各戸は、防空壕を作って待避に備え、国民学校は避難訓練を怠らなかった。

国民義勇隊

昭和二十年六月一日、中山村国民義勇隊結成式を挙行した。

牛田町と中山村との境界に、西山の国有林防火線が作られた。

なお、郡部であったため、避難経路とか、避難先については別に決めていなかった。

四、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
暁一九〇四部隊功績霧本部	万休寺	七月初め・疎開駐在九月十二日・引揚げ
憲兵隊(残務整理)	中組自治会館	九月二十四日から駐屯十月十二日・解散

五、五日夜から炸裂まで

五日夜

警防団員が村内を巡視し、隣組の班長は班内の灯火管制状況を調べたが、各家とも、夜間は消灯して寝るのがほとんどであった。

家が密集していないので、消火態勢は警防団だけがとっていた。

中山村は、三方を山にかこまれ、軍需工場や重要建物もないので、空襲のおそれが少なかった。五日の夜、空襲

警報が発令されても防空壕へ待避する者は少なかった。

六日朝

六日朝も、田畑の仕事や勤務に出たり、児童は、登校していたので、家にいる者は老人と幼児だけであり、警戒警報は日常茶飯のことで、あまり関心を持たなかった。

村内への爆弾投下など皆考えていなかったから、それぞれ平素のとおりに行動して平穏であった。

敵機を目撃

当時の中村忠実村長の語るところによれば、「午前八時十二、三分ごろ、まっ白いあたかも真綿のかたまりのような飛行雲を引いた一機が、爆音をたてて東北から頭上を少し北寄りに西南に向かって行った。同時刻ごろ、西方から一機来るのが見えた。両機が出合ったところ、落下傘のような白い物が投下されたと思ったら、シューシューと音をたてて落ちた。

瞬間、もの凄い閃光が目射たので思わず身を伏せた。」という。

敵機が東方から一機と、西方から一機来たのを見た者は多い。投下後二時間ぐらい後にも爆音を聴取したし、午後二時ごろにも聴取した者がいる。

当日、市内へ疎開作業に出動していた者はいなかった。しかし松根油をとる窯築造用の煉瓦を持ち帰ろうと、市内の的場町へ、この地区から約四〇人が隊を組んで出かけていたため、これらの人々が被爆して、死んだり負傷したりした。

六、被爆の惨状

閃光

炸裂の閃光は、マグネシウムをたいたような光り方で、その強度は闇夜に流れ星が落下して発する強い光のようであった。見た瞬間、身を伏せずにはいられないほどの異様さであった。

炸裂

炸裂音は、伏せて身を押えていても、なお鼓膜をズンと強く打ち、破れたのではないかと思われた。しばらくのあいだ耳がツーンと鳴っていた。

爆風の威力

爆風は伏せている体を、一瞬浮きあがらせる感じがした。

爆風と同時に、建具や障子はメチャメチャになり、ガラスの破片は座敷中に砂を撒いたように散乱し、ふすまにも無数に突き刺さっていた。天井は吹き上がり、足を踏み入れる場所もなく、まったく処置のない家が大半であった。

柱の折れた家も少しあったが、倒壊には至らなかった。

どこの家でも突然の破壊にびっくりして、自分の家が爆弾の直撃を受けたものと錯覚した。

国民学校へ作業(ゾウリ作り)に行っていた児童は、幸いに運動場にいたため負傷者が少なかったが、驚きあわて、ある者は叫び、ある者は母の名を呼んで、山間部へ先生と共に避難した。また学校付近の、ある児童はころがるようにして川伝いにわが家へ逃げ帰った。

このような異常事態の発生にも、地区の住民で他町村へ避難した者はいなかった。

また村内では、炸裂による火災の発生はなかった。午後一時半ごろ、五分間ぐらい雨が激しく降った。

村内被害状況

炸裂時の村内被害は、つぎのとおりである。

常会名	家屋被害(約%)					人的被害(約%)				
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	行方不明	無傷の者	計
中山村	なし	85	14	1	100	なし	30	なし	70	100

(但し市内に出ていた人的被害は含まない)

諸現象

原子爆弾の炸裂で、光線の通った筋の稲の葉が三分の一ぐらい赤く焼けていた。赤く焼けた稲の葉は、九月初旬から稲の発育につれて判らなくなった。このほかのことでは別段に変わった現象は起らなかった。

爆風による家屋の被害は甚大であったが、ガラスの破片によって傷をうけた者以外に、人畜の被害はなかった。また、電線その他の物にも異状はなかった。また、松根油窯を作るため、的場町へ煉瓦を取りに行った者の中で、物のかけにいた者、また煉瓦を取るためかがんでいた者は、火傷を受けなかった。煉瓦を積んだ車を引いて帰る者

のうち、黒衣の者は重傷を受け、遂に死亡するに至ったが、白衣の者の傷は軽微であった。

七、被爆後の混乱と応急処置

避難者の殺到

当日、午前八時四十分ごろ、広島駅から自転車で、県土木出張所の職員が避難して来たのを皮切りに、九時ごろから十一時過ぎまでは、長い列をつくって避難者が殺到して来た。

市中からひとまず東練兵場や尾長町一帯に脱出して来た大勢の避難者は、各所に火災が発生し、尾長国民学校もついに危険になったとき、そのなかの一人が「大内越峠(オオチゴトウゲまたはオオチゴダオという)を越して中山へ逃げよう。」と叫んで、行動を起したところ、数千人の人々が、続々とこれについて流れたという。

救護活動

村内に殺到した避難者の収容や受け付け、炊出しなどで、役場吏員は多忙をきわめた。

役場では、夕方までに約六七〇枚の罹災証明書を発行したが、吏員も市内で三人も被爆し、残り僅か三人で、暑い最中に昼食もどることができぬほど必死で作業をすすめた。役場では、村内の義勇隊の出動を求めて、救護活動をおこない、午後三時ごろから炊出しをはじめた。

逃げて来た避難者のなかには、すでに午後一時ごろから嘔吐しはじめる者がたくさんいた。

各家庭でも、壊れた家の始末やら、避難者の接待に忙殺された。恐怖のドン底におびえきっている避難者たちは、民家の温情こもった夕食を受け、再度の空襲におののきながらも、無事に一夜を過ごすことができた。

学校には、主として負傷者を収容し、食事を求める者には炊出しを、水を求める者には水を与えて、できる限りの看護をおこなった。

夕方には、罹災者とその縁故者との連絡をとるために、一人一人に住所・氏名・連絡先など聞いてまわり、これを記入した紙を手渡しておいた。

夜間、敵機の爆音がすると、避難者たちは皆、恐怖のため神経をとがらせ、小さな口ウソクの火にも怒声を張り「消せ、消せ！」と叱りつけるありさまであった。

非常米は一俵も受けていなかったから、平素からかかる事態に備えて配給を減らし、貯蔵していた玄米があったのを倉庫から出し、村民から緊急に、ジャガイモ・カボチャなどの供出を求め、これを切り込んでにぎりめしを作った。一日に、にぎりめし二個ずつ二回配給として、十日まで続けた。十一日から負傷者の食事だけとした。

当時中山は無医村で、負傷の治療ができないため、重傷者の処置に困った。幸い、隣村の戸坂国民学校の臨時救護所に「陸軍病院が来ていることを知り、治療の必要な者は戸坂へ行くようにすすめた。カンカン照りの暑い道を、トボトボと歩いて戸坂へ行く者もあったが、重傷者は、もう動けなかった。たまたま午後二時過ぎ、徴用トラックが通りかかったので、これに頼んでこれらの人々を戸坂へ送った。そのトラックは三回も引きかえして運んだ。

戸坂へいかなかった罹災者の大部分は民家へ避難させ、負傷者約二五〇人を臨時救護所の国民学校に収容したが、次第に増加して、民家への収容者約二、五〇〇人、国民学校への収容者は約一、〇〇〇人に達した。

学校に収容した負傷者も、翌日の朝までに七人死亡し、夕方までには一五人が死亡した。

七日、中山へ沢田医師(猿猴橋町)が一人来着した。しかし、苦しむ患者に与える薬品とてなく、治療を施すすべもなかった。ただ、水や食事を与えるだけのありさまの中で、沢田医師は油を塗ったりして、火傷の手当てなどできるだけの治療をした。

八日漸く西祭療養所から、医師と看護婦が薬品を持って到着し、ともかく治療ができるようになった。

さらにその後各地から医師・看護婦などの来援を受けたが、その状況は次のとおりである。

九日から十日まで... 忠海町・竹原町方面の医師三人、看護婦二人来援

九日から十二日まで... 鳥取県から医師三人、看護婦三人来援

十二日... 呉市から医師(人員不明)来援

十四日... 倉橋島から医師二人来援

十五日... 蒲刈島・江田島・庄原町から医師(人員不明)来援

十六日から二十日までの間は、医師の来援をみなかった。

二十一日から二十五日まで... 大阪市から医師四人来援

なお、救護所開設から閉鎖まで、役場吏員と婦人会員が協力して患者の介抱をおこなった。収容をした人のなかでも負傷の軽微な人は、縁故者をたずねて出てゆく者もあって、はじめ各教室にいた患者もだいぶ減ったので、十

日からは三教室を一間にして全員を収容した。その後患者は連絡がついて引きとられる者、元気になって帰る者、あるいは落命する者などによって、毎日減少し、八月二十一日には一三人、三十日には五人となった。

九月二日、県衛生課が残りの患者を引取って、矢賀救護所へ収容したので、三日に大掃除をして救護所を閉鎖した。

当初、医師から町に対して薬品収集の希望があり、これを集めるのに東奔西走したが、思うにまかせず困難をきわめた。

死体の収容・火葬・埋葬

死亡者の収容は、七日からはじめて、十八日ごろまで続いた。死体は一日分をまとめ、中山村字八反田堤防で、その日の夕方に火葬した。

収容した罹災者は、六日夕方、それぞれの身元調査をしていたので、最後まで身元不明の者は三人だけであった。火葬にした遺骨は、着衣・頭髪などと共に、箱におさめて万休寺の納骨堂に安置した。最初は一四柱であったが、二か年間のうちに、ほとんど引取られ、現在残っているのは三柱である。

火葬の状況は、八反田堤防に穴を掘り、一体ずつ並べ、頭部にそれぞれ名札を立てて火葬し、翌朝、箱に骨を納めて万休寺に安置し、和尚が読経をあげた。

民家で死亡した者のうちには、村内の火葬場で、火葬した者も多かったが、埋葬した者はなかった。

合同葬儀

村内での死亡者は約一二七人で、九月二十二日午後二時から、村内死亡者全員の合同葬儀を万休寺において執行した。

食糧対策

被爆による村の機能の障害はなかったが、食糧の不足ははなはだしく、農家に対し、野菜の供出を強く訴えて一般に配給した。米は、被爆当時は困ったが、後に非常米を受けて急場を切抜けることができた。

八、被爆後の生活状況

生活環境

被爆後の中山村は三五〇世帯であったが、避難者の殺到などで、伝染病発生のおそれがあり、七日に安芸地方事務所へ石灰の交付を申請していたところ、まもなく、蒲刈島から送付して来たので、週一回、各戸の便所へ撒布してまわった。また時節がら、食物に特に気をつけるよう常会を通じて注意を促した。幸いに、伝染病も発生せず、ハエも少なかった。ノミ・シラミの害も特別になかった。

当初、非常米を受けていないところへ、十日まで炊出しをし、また個人家庭では、保有米を炊いて避難者に提供した家が多かったから、食糧が極度に欠乏した。炊出しにあたっては、麦・馬鈴薯・カボチャなども加えた。トマト・茄子・胡瓜などの供出は少なかった。しかし、応援医師に対して供給するぐらいはあった。

九月になって、ようやく非常米を渡すという指示があり、村民の奉仕で府中町鹿籠の食糧営団へ受取りに行っても受取ることができた。塩の不足ははなはだしく、入手困難であった。

調味料・乾物などは、村の農業会に若干の手持ちがあるだけであった。

交通は、自転車か徒歩で、広島駅まで出るよりほかなかった。

夜間の生活は、各家庭に非常用口ウソクを備えていたので、どうにかしのげたが、夕食も暗くならないうちに食べるようにして、口ウソクを節約する家庭が多かった。

電灯は九月初旬についた。府中変電所付近は、早くから電灯がついていたので、中山から眺めて、その明るさをうらやましく思った。

中山に疎開していた者は、十一月ごろから、ぼつぼつ旧居住地へ復帰した。尾長・愛宕町方面からの避難者も多かったが、家が火災にかからなかった者は四、五日いてほとんど帰った。

食生活の状況

村民の食生活では、戦時中、荒廃した田畑を開墾して主要食糧・野菜などを作付したので、専業農家は勿論、兼業農家も買出しをする者は少なかった。

ただ、砂糖の配給が全然なかったから、砂糖代りにタマネギ・カボチャなどが珍重されたが、タマネギのような特殊なものは、買出しにゆかねば得られなかった。しかし、非農家の食糧不足は甚だしかったので、安佐郡方面へ買出しに行く者が多かった。

手巻タバコも不足なので、闇市場で洋モクや吸がらの再生品などを買った。老人などは、木の葉や松葉などを取って吸う者もあり、闇でタバコの種子を手に入れ、これを作って吸う者まで出るようになった。

酒は、ドブ酒を買って飲む者がほとんどで、ドブ酒を密造して飲む者も幾人があった。

清酒の配給も少しずつあったが、割当ての酒は、帰還軍人に心ばかりの慰安の意味で五合ずつ配給し、残りは冠婚用とした。

葬祭用の酒は、村常会の申合せで全廃していたから不用であった。

村内には、鮮魚商がないため、魚と牛肉の配給はきわめて稀であった。安芸地方事務所、あるいは市内の魚商人に依頼して配給を受けたのは、年間二、三回であった。しかし、物々交換により、少量の魚を売り歩く者が二、三人出入りしていた。

また、薬が思うように買えないので、強壯剤だといって、松のミドリや葉を一升ビンにつめて、水をそそぎ、これを醗酵させて飲む者や、ヨモギの汁を飲む者もあり、なかには、ゲンノショウコや、その他の薬草などを採り歩く者も多かった。

九、終戦後の荒廃と復興

暴風雨の被害

九月十七日の暴風雨で、温品川の堤防が決壊した。温品村字間所(間所一三町歩のうち、一〇町歩余を中山村民所有)、および本村字地免、庵りなど一五町歩が冠水し、その水深最大二メートル以上で被害甚大であった。

十月八日の大雨で、前記の個所が再び決壊し、九月同様の被害を受けて収穫は皆無となった。

被爆と暴風雨などによって、傾斜のはなはだしかった万休寺の屋根(棟)が、十月十一日、少量の降雨であったにもかかわらず、午前四時ごろ、大音響とともに倒壊した。幸いに屋根だけですんだ。この屋根を、二十二年五月、古トタンを門徒から集めて仮修繕した。

稻生神社の社殿も倒壊に瀕したので、二十四年秋、神殿と幣殿を改築した。

半壊家屋は、暴風雨でも倒壊するものはなかったが、瓦が吹き飛び、その補充は困難であった。

当時の民心は、虚無状態で、物質的には全然慾がなく、ただ生きていればよいと思っている者が大部分であった。

また、若い人が次々に死亡しても、切実な同情心も起きなかったし、水稻の被害も、家屋の被害も人間の力ではどうにもならないという諦めの観念におおわれ、あまり身にこたえないありさまであった。しかし、冬期のすきま風だけは身に泌みてこたえた。

被爆による建物の修理では、国民学校の柱の折れたものや、万休寺の棟に用いる資材は、万休寺にいた暁部隊所有の松材を譲り受けて修理した。しかし、各家庭の建具・天井などの修理は、資材の割当てがないため急速に修理することができなかつたので、数年間、放置している者も多かった。ガラス・紙・金物など、配給によって手に入れたものだけによって、部分的に修理するに過ぎない状況で、昭和二十七、八年ごろに至って、ようやく修理が終わったようである。

十、その他

松根油採集

敗戦前、油の補給路を断たれた軍部は血眼となって、補給源を探求し、ついにこれを松根によって求めることになった。農山村に半強制的に松根窯を設置させ、町村民を動員して松根を掘り集めさせ、これから僅かの油を得る原始的な採集方法をはじめた。

中山村の民有林三八町歩余りのものから取り得る松根油は知れたものだし、その労力と費用を考えると、松根窯の設置について躊躇せざるを得なかった。しかし、かねて県から勸奨があるのに加えて、六月二十五日には、温品駐屯の海軍将校の督励があったため、急速に工事を進めることになった。村民一致の努力で小屋もできあがり、釜を据付けることになった。八月六日平原部落の報国隊を動員して、約四〇人の者がこの釜据付の煉瓦を運ぶために、車をひいて的場町まで行った。現場へ行く途中の者、現場にいた者、車を引いて帰る者など、全員が被爆して、ついに四人死亡者(平田謙作・三宅ツタ・高田フサヨ・佐々木ミツコ)を出すに至った。

人体にウジがわく

また、中山救護所で、次のようなことがあった。

生きている人体にウジがわくということは、戦場では時々あるときいていたが、半信半疑であった。八月十六日から二十日まで、医師の来援がなく、役場吏員・婦人会員の者で、着物をきかえさせたり、油を塗ったりしていた

が、一人ほど婦人の患者が、膿が付着して痛いと言って、どうしても更衣をしないでした。二十一日、大阪から来援した医師が、無理やり着物をぬがしたところ、ウジが〇・三リットルぐらい取れた。「このウジが膿を食うたので、なおりが早い。」と医師が言った。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

京橋町、的場町一丁目 二丁目、段原大畑町、稲荷町、金屋町、松川町、比治山町、段原町、段原東浦町、段原新町(一部)、段原末広町、比治山公園

町内会別要目

この地区の範囲は、台屋町[だいやちょう]・京橋町[きょうばしちょう]・稲荷町[いなりまち]・比治山町[ひじやまちょう]・金屋町[かなやちょう]・的場町[まとばちょう]・桐木町[きりのきちょう]・土手町[どてちょう]・段原大畑町[だんばらおおはたちょう]・松川町[まつかわちょう]・段原町[だんばらちょう]・段原東浦町[だんばらひがしうらちょう]・段原新町[だんばらしんまち]・段原中町[だんばらなかまち]・段原末広町[だんばらすえひろちょう]・および比治山公園[ひじやまこうえん]とし、爆心地点からの至近距離は、稲荷町の京橋川河岸で約一・三キロメートル、もっとも遠い地点は、比治山公園東裏にあたる段原末広町猿猴川河岸付近で約二・五キロメートルである。

地区の被爆状況は、比治山公園によって対照的に二分され、公園の北及び、西側一帯にかけては被害が大きく、ほとんど全壊全焼し犠牲者も多く出たが、東裏側一帯は比治山によって爆風や熱線の影響も少なく、火災炎上の壊滅から免れた。

しかも東裏一帯は戦後の復興にあたって、都市計画区域から除外されたため、往年の家のなみそのまま、狭い道路をはさんで密集し、人口密度もすこぶる高い。道路に面した商店街は改造されてさほどでもないが、一步横路にはいると、軒の深い格子窓のついた赤ベンガラ塗りの昔どおりの家宅が、現在もたくさんあって、古い広島の面影をとどめている。

北部一帯は旧藩時代の国道筋であった京橋町を中心にして商業が栄え、風格のある町を形成していた。

明治三十年、公園として許可された比治山は、往昔は、海中に浮ぶ島の一つであったが、太田川口から流出する土砂の堆積によって陸繋したものである。

山の南麓傾斜面には、縄文時代の主要な遺跡である比治山貝塚があり、縄文土器も発掘され、古代は狩猟・漁撈を中心とした原住民が住んでいたことを物語っている。現在では自然公園として四季を通じて市民に親しまれ、憩いの場所となっている。新修広島市史にも比治山に関する記述は詳しく、「比治山は、小断層をとともなうつり橋付近の鞍部によって二分される。最高点は南嶺にあり六九・六メートル、この南西は北西南東方向の著しく直線的な急崖に終る。五〇余メートルの北嶺は、御便殿跡が平坦であるが、両部とも原山形は大幅な変更を受けている。」と全容を説明している。

大正六年、山頂に正午の時報(俗にドンと呼ぶ)が置かれ、昭和三年市庁舎が現在の国泰寺町に新築されてサイレンになるまで午砲を放ち、市民の標準時としてなつかしい数々の思い出をきざんだ。また御便殿跡・陸軍墓地・頼家一族の墓など古蹟も多い。

戦時中は、山腹を利用して軍隊や市民が防空壕を各所に構築していたが、被爆の時は多くの避難者で山全体がうずまり、阿鼻叫喚の修羅場と化した。

戦後はまた公園の整備がすすみ、桜の名所として復活し、観光バスは、常時旅行者を送って市街の展望や広島湾の眺望をほしいままにしている。なお、南嶺には昭和二十四年陸軍墓地を整理して、広島A・B・C・Cが開所し、現在まで原爆症に関する医療研究活動を続けている。原子爆弾による被害の甚大であった比治山公園と、商店街京橋町付近は、戦後の都市計画事業によって、まったくその全貌を一変し、広島駅前商店街に続く商業地帯として新しい繁栄をきざきつつある。

地区の被爆直前の総建物数・世帯数・人口の内訳について判明している所は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
京橋町	144	148	650	保田喬蔵
稲荷町	215	215	670	荒谷加一
比治山町	137	158	590	平賀若次
台屋町	280	280	780	角藤浅一
的場町	197	196	696	三木福太郎

桐木町	174	178	763	児玉助人
土手町	150	160	580	野尻松太郎
段原大畑町	303	303	1,085	久保万助
金屋町上組	185	265	785	松原笹一
金屋町下組				山中吾一
松川町	176	220	820	池上亀太郎
段原町	129	129	398	亀尾宥賢
段原東浦町上	269	268	864	沖永善次郎
段原新町上	306	312	932	原田哲三郎
段原中町上	73	90	315	吉田清
段原末広町	303	302	1,132	鈴木貢
比治山公園	9			

なお、地区内に所在した学校、および主要建物、または事業所は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
三和銀行	京橋町	多聞院	段原町
三菱銀行	京橋町	芸備銀行	京橋町
段原国民学校	段原大畑町	縄屋邸宅	京橋町
比治山神社	桐木町	比治山食糧倉庫	桐木町
旧御便殿	比治山公園	専売局段原支所	段原大畑町

二、疎開状況

人員疎開

昭和十九年第一次疎開の命令が出て、各町とも極力、当局の指示に従うよう町民に勧奨してまわった。京橋町では、まず京橋東詰の、左右の両土手側の一二戸の建物疎開を実施したが、これと並行して、自発的に各家庭において老人・子供などの縁故疎開がおこなわれた。

桐木町もおなじく、建物疎開実施にともない一五世帯五〇人が郡部へ縁故疎開をおこなった。すなわち台屋町が約三〇人、土手町が一五人、段原大畑町が高齢者四〇人ばかり、その他二〇人ばかりが郡部へ縁故疎開をおこなった。その他、他の町内へ単に移転しただけの者もあった。

松川町・段原町および比治山東裏にあたる各町は、県指定の安芸郡奥海田や同郡中野村へ老人・幼児・病人などを疎開させた。また、縁故を頼って自発的に他へ疎開した者もかなりあった。各町内会の勧奨が徹底して疎開者が多く、このため、町の人口が約五分の一に減少したが、内訳は現在でははっきりした資料がないので判明しない。

物資疎開

物資疎開は、各町とも個々の住民が縁故先や知人を頼って、日用品以外の重要な物資を郡部へ疎開した。疎開したものは衣類が主で、ついで家具調度品類が多かった。家によって疎開する質量の差があるのは当然であったが、なかには家伝来の古文書・美術品・系図など、歴史的にかけがえのないものを主として疎開した家もあった。

昭和十九年の末ごろから、運搬するトラックその他の車輛の確保がむつかしくなったが、それまでに、この地区では疎開をすませていた家が多かったようである。比治山東裏の各町は、人員疎開ほど物資の疎開はおこなわなかった。手押車程度の運搬具も入手がむつかしかったから、手に持てるぐらいのものや、貴重品ぐらいを疎開していた。

学童疎開

段原国民学校の学童疎開は、第一次・昭和二十年四月十二日に比婆郡山ノ内西村へ教職員六人、児童一五〇人が実施、ついで第二次・四月十四日に比婆郡山ノ内東村へ教職員八人、児童二〇〇人が集団疎開を実施した。

このほか縁故疎開をした児童もあったが人数ははっきりしていない。

疎開しないで残留した病弱児童や、一、二年生の児童は、地区内の寺院に分散して勉強を続けていたため、これらが被爆によって多数死亡した。

三、防衛態勢

伝統的組織の改編

消防組織は、各町とも伝統的な組織をもっていて、急にあらたまることはなかったが、国が戦時体制を強化するにつれて、従来の組織も改編し充実させた。京橋町では、昭和十年ごろすでに山県百太郎町総代を代表者として町内隣保班を中心に、町内自衛消防隊が編成されており、手押ポンプ一台・梯子・バケツなどを常備し、町民全員がこれに協力するよう決められていた。

段原警防団

昭和十四年四月、当局の指示により改めて段原警防団が結成された。段原学区一五か町で編成し、初代団長に中井万造が就任、輩下に各町内から団員を選出し、約一五、六〇人で結成された。さしあたり段原小竹槍訓練

学校(昭和十六年から国民学校と呼ぶ)を屯所として防火訓練に努めていたが、昭和十五年八月、桐木町の一角に消防屯所(建坪二〇坪)を新築し、ポンプ自動車二台・手押ポンプ二台その他備品として梯子・バケツ・救急箱・担架などすべてを完備し、いよいよ本格的防火・防空・救護などの訓練に邁進した。また当局の命により竹槍操法と称し、長さ約二メートルばかりの青竹で、その先端をとがらせた手製の武器を常備した。第一は、敵が宇品に上陸、または落下傘降下のとき、これに立ち向う訓練である。むかし、武家時代の剣士のように姿勢を正しくし、槍先を正眼にかまえ、三步前に突っこみ、二歩後退し、そのころ全国民の唱える「打ちてし止まん」の掛け声もいさましく猛訓練が繰り返された。この竹槍訓練は徐々に個々の家庭にまで及んだ。

昭和十六年春ごろから、防空・防火訓練はますます激化され、学区内の家庭消防が編成された。各町内会長を自衛消防の指揮者とし、隣保班長を先頭に立て、老若男女の別なく、足腰立つ者は全員をもって参加した。防空・防火は無論のこと、梯子登り・バケツ操法・人命救助・救急法・繃帯使用法などの訓練は、毎週東警察署ならびに消防幹部が、各町の巡回指導を実施した。

なお、このころの家庭消防の服装は軽装であって、男は茶褐色の服に巻脚絆、女はありあわせの古着で作ったモンペに地下たび姿であった。モンペは手製であるから、その色や柄がみなまちまちであった。

松葉の煙幕

戦局がいちじるしく急迫した原子爆弾炸裂の一二、三日ごろ、京橋町内会消防組は、命により敵機が市の上空に襲来した場合、上空に張る煙幕の代用として青松葉を積み重ね、これをいぶし焼く目的で、町内三カ所に青松葉を積んでおくことになった。その松葉の採取は何びとの山に入って取っても差しつかえなしということで、町民は、三日の奉仕で牛田方面の山に立ち入り、これを採取し、町内三カ所に堆積した。松葉は指揮者の「第一、いぶせ」「第二、いぶせ」の命令によって点火することになっていたが、六日当日は逆に火災発生・炎上のもととなった。

比治山東裏の各町では、松葉などの採取はしなかったが、防空壕や消火設備などについては、町内会はじめ、各家庭とも完璧を期していた。訓練も厳重に、各町において実施していた。

四、避難経路及び避難先

避難先はあらかじめ市役所から指定され、京橋町は安佐郡落合村、的場町は安佐郡甲田村、段原大畑町は安芸郡中山村・戸坂村の各国民学校というふうに各町とも決められていた。

避難経路は京橋町の場合、まず牛田町へ出て、そこから戸坂・矢口村を経て落合村に至るよう町民に周知していたし、的場町は、東練兵場に出て、大内越峠から中山を経て甲田村に至る。また段原大畑町は、尾長町を通過して中山村に至る。また戸坂村へは牛田町を通過して行くことになっていた。

松川町・段原町および比治山東裏の各町は、安芸郡奥海田・同中野村に避難するよう指示されていた。

被爆に際しては、各町とも幾人かの罹災者(京橋町では町民二四、五人)が、この予定の避難先へ脱出して一夜をあかした。

五、所在した陸軍部隊集団

比治山公園東南斜面に陸軍船舶砲兵団(隊員約一、五〇〇人)が、横穴の兵舎に駐屯し、同山頂(南峯)には同兵団司令部(部隊長中井千万騎少将)があった。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日夜九時二十分、警戒警報が発令され、同二十七分、空襲警報が発令されてまもなく解除になった。その間、比治山町・稲荷町などでは防空壕へ待避せず室内で電灯を消したまま、いざというときは何時でも飛び出せる準備をして、じっとしていた者が多かった。台屋町・土手町などでは、指示どおり多くの人々は防空壕に待避した。また、京橋町では六〇人用の防空壕が三カ所あって、留守番だけ一人は室内に残しておいて、そのつど待避した。段原大畑町では、警防団員は国民学校に集合し、特に医師・薬剤師・歯科医師など救護班も国民学校に集合した。

六日の朝

六日午前〇時と、七時の警報発令のときも同じような行動を繰り返したが、全体的に自暴自棄的な空気が強くおおうていて、待避行動も積極性が失われがちであった。連日連夜のことであるから疲労もはなはだしく、かつは精神の消耗もあって、自己の生業もろくろく手につかぬありさまで、末期的な様相は隠しようもなかった。

戦争が深刻化するにつれ、身の危険をひしひしと感ずるようになってから、女子や子供はおおかた一夜疎開をしていた。夕方になると郊外や東練兵場などの広場か、あるいは、比較的中心部から離れて安全と思われる知人の家に行って泊り、夜明けと共にわが家に帰って来るということの日課にしていたが、六日朝、不幸にも疎開先からみんな家に帰って来ていた七時過ぎ、警戒警報が発令されてとまどった。まもなく「広島上空に敵機なし」というラジオの放送があり、やっと朝食にとりかかる者、徴用その他の職場に出勤する者など、それぞれの生活が始まろうとする矢先であった。一部の人々には、なんとなく上空で爆音のようなものを感じたので、上空を見あげて見たり、不思議に思ったりした。

落下傘目撃

京橋町の赤井喜市は、ちょうど屋上の干棚にいて落下傘を目撃した。敵機の爆音は聴かなかったが、上空をふと見あげると、高度はよく判らなかつたけれども、落下傘が手に取るように見えるとともに、空中で炸裂し、稲妻のような閃光を受けた。一瞬、爆風で吹き飛ばされ、地上の敷石の上に落ち、両足とも歩行不能となった。

台屋町では、南の方向に敵機が見え、爆音も聞き、落下傘のようなものが落ちたのを目撃した者があった。十五分ぐらいたって周囲がまっ暗になり、約十分ぐらいして、もとの明るさになったという。

比治山公園東裏一帯では、各町とも町役員は、建物疎開計画の打合せを、各町内会事務所に集っておこなっていた。その他の人々も敵機の爆音をきいて不審に思っていたところ、閃光を感じたのであった。

疎開作業への出勤と建物疎開実施

なお、六日朝の疎開作業出勤、および区内建物疎開実施状況は、鶴見町の建物疎開作業に台屋町から六五人、桐木町から五人出勤していたというほか、各町の出勤状況は判然としない。

区内の建物疎開実施状況は、京橋町一二戸、稲荷町二〇戸、台屋町二〇戸、桐木町一〇〇戸(計画一二〇戸のうち)などのほか、その他の町のことは資料がなく不明である。また当日、桐木町の建物疎開作業に他地区から三〇人ばかり勤労奉仕に来ていた。

松川町・段原町・段原東浦町上・段原新町上・段原中町上・段原末広町では、当日午前七時、国民義勇隊鈴木貞大隊長が、各町から出た一七人を引率し、雑魚場町の家屋疎開作業に出動していた。鈴木大隊長は奉仕隊員を送っての帰路、比治山町で被爆し、重傷を受けた。その他の作業中の隊員はほとんど現場で死亡した。

七、被爆の惨状

凄惨を極む

比治山公園の陰にならない地域(北及び西側)一帯は、炸裂の閃光をまともに受けた。

青白い光線が閃いた瞬間、まっ暗になり、二、三分間ののち少しずつ夜が明けようにあかるくなった。

周囲の建物は全壊したり、半壊したりしていたし、見るも無惨な光景が出現していた。

京橋町筋の街路上は、古くからのなつかしい家なみが無残に倒れ、屋根瓦は散乱し、電線はクモの巣のように乱れ落ちていた。それらの下敷きとなり、焼けただれた頭だけ出して救いを求める者、中でも目だまが飛び出てまだ生きている若い女、また通勤途上にある男女、または勤労奉仕に行く途中の人などは、全裸、半裸体で両手を胸の前に幽霊のように挙げて、黒い血みどろ姿で助けを求めている。その声もとぎれとぎれの泣き声で、夢遊病者がさ迷うように右往左往していた。

九時ごろであった。黒い血にまみれた人が助けを呼んでいた。「この木を抜いてくれ、ほかに怪我はない。」と言う。見れば、その人は氏名不詳だが、生きながらの人間の串ざしであった。左手の肘から手前のあいだをタル木の削げ折れが突きささり、その先端は下あごから顔の左頬骨に立ちこんでいた。「これを抜きとってくれ。」と言うのであるが、「少しかごめ。」という、かがめばタル木の折れ端が地につくので抜かれない状態となった。そのとき、誰かが「市内の中央部は火の手が挙がり、大火事だから早く逃げよ。」と叫んだのでどうする暇もなかった。道ばたに倒れている重傷者、即死者には、目玉が飛び出し、股のさけている人が多く目についた。また、ある者は、倒壊家屋のモルタル塗の壁から、頭だけを出して即死している妻の、その頭に、せめてもと思って、そこに転がっていた釜をかぶせて逃げたという。

段原大畑町電車通り南方地域の家屋は倒れなかったが、ひどく破壊された。しかし、段原国民学校と専売局倉庫

などは全部倒れており、学校では疎開しなかった児童が大声で助けを求めている。また、台屋町の専光寺で分散授業を受けていた児童数十人が倒壊した家の下から呼び叫ぶのを、親が狂気のようになって助け出そうとしていたが、ついに火の手が迫って救助できなかった。

消火活動

比治山公園東裏一帯の各町では、火災はなかったが、八時半ごろ大正橋西詰手前(段原末広町)の唐須の煮豆屋の暖簾に火がついたのを、鈴木町内会長が見つけた消防団と協力し、これを鎮火した。また、段原末広町の変電所北の電柱の上部にも火がついて煙が出ていたのを消防団員が発見し、大事に到らぬまでに消した。しかし爆風は相当強くあたり、家屋全体がゆるぎ、傾斜し、屋根瓦は飛散した。またガラス窓が破壊されて、その破片の突き刺さった負傷者がたくさん出た。

比治山公園は、爆風で松や桜の大木などが折れて根っこから倒れたが、公園一帯は一部を除いて焼けなかったので、避難者が殺到した。公園が焼けなかったのは幸運であった。このため、東裏一帯の延焼もなかったと言えようが、比治山町の西岡歯科医師らが老人ながら、みな逃げ去ったあと踏みとどまって、山の西側の善教寺から多聞院までのあいだの消火に努めて、断乎、守りとおしたことも大きな原因であったろう。

避難状況

炸裂後、錯乱した町民は、必ずしも計画どおりの避難をしなかった。まったくその余裕がなかったのである。

京橋町では、辛うじて生き残った者は、生き残ったとは云え、大小にかかわらずすべて負傷をしていたが、大部分が東練兵場へ逃げた。そこで一息して、夜になってからそれぞれ思い思いに避難して行った。既定計画どおり落合村に行く者や向洋の学校、あるいは府中の埃宮などをさして行った者も多かった。

桐木町の者は、主として最も近い比治山公園へ逃げた。中には、災害が少なかった尾長町や向洋方面に避難した者もいた。

稲荷町は、わりかた統制がとれて、かねての計画どおり安佐郡部街道付近まで、歩ける者はみな避難した。一部には親戚をたよって個人行動をした者もあったが、負傷者だけはひとまず府中国民学校に集められた。

比治山町は即死者数人を出し、家の下敷きになって救いを呼ぶ声、それを助け出そうとする人などごったがえずなか、われ勝ちにと東へ北へ、無我夢中で家族を呼びあいながら、辛うじて避難した者が多かった。

台屋町は、東練兵場へ町民の約半数が避難した。その他は京橋川畔や橋の下に逃げたり、郊外へ脱出したりした。

段原大畑町の町民のほとんどは郊外へ避難した。しかし、電車通り南部地域の者は避難しないでとどまった者が多く、防火に努めて、火災を免れた。電車通りは道はばが広く、障害物も少なかったから、郊外へ逃げる者はみな、ここを通った。道路上には、火傷者や負傷者がえんえんと続き、あちらこちらに動けなくなって倒れている者がたくさんいた。

比治山東裏一帯は、家屋の倒壊も少なく、火災の発生もなかったため、遠くへ避難する者は少なかった。ほとんど東雲町方面のブドウ畑へ一時的な避難をした。火災が発生しなかったため、恐る恐るそこから家を見に戻ったりした。しかし、中には、また敵機が襲来するかも知れぬという不安にかられて、早々に郡部へ疎開する者もあった。時間が経つと共に、この東裏一帯に、罹災者が流れこんで来た。路傍でたくさんの人々が倒れたので、町内の者は協力し、負傷者もろとも霞町の兵器支廠(臨時救護所)にどんどん運んだ。

京橋の橋下にいちじ避難した者は、流木で筏を作り、川しもへ逃げた者もあったが、稲荷町の町民は、四方から火にかこまれ、逃げ場がなくなり京橋川にとびこんだ者が約四〇人ばかりいた。台屋町の駅前橋は木橋であったから焼け落ちて寄りつかれなかったし、土手町の柳橋も焼失した。段原大畑町の大正橋・荒神橋の欄干が爆風で落ちたが、その欄干と一緒に川の中へ吹きおとされた人が幾人もいた。幸い、川はちょうど満潮で泳げる人は命を拾ったという。また、京橋川の水につかたままま、どうすることもできず、六日の夜を明かした人々もたくさんあった。

炸裂直後、この地域一帯にも、また、比治山公園東裏一帯にも降雨はなかった。

六日夜

当日の夜、京橋町はじめ付近一帯は、全焼したため、逃げられる者はすべて逃げてしまったし、段原大畑町など一部半壊のまま焼け残った地区でも、電灯はなくまっ暗ななかで心細く夜を過ごした。

東練兵場の北辺に立つ二葉山へ避難した罹災者は、その夜一睡もできなかったが、山上からわが家の方を望見すると、夜半も火は燃え続けており、どうなることかと不安やるかたなかった。

土蔵などは、内部にこもっていた火が、夜の明け方ごろになって窓から火炎を噴き出し、幾刻かのちついに燃え

落ちるのが見られた。

比治山東裏一帯の各町は焼けなかったので、いったん、付近の畑へ逃げた人も夜は帰って来た。しかし、まっ暗でどうすることもできず、恐怖にかられて、周囲の様子に気をくばりながら、逃げて来た多くの負傷者の救護で夜を明かした。

その他諸現象

原子爆弾の熱線や爆風・爆圧などによって、次のような常識では考えられない種々の現象があった。

京橋町付近の被爆者で炸裂の閃光が眼中に入ったのか、二週間ぐらい、遠方は無論のこと、近くでも近眼のように大明かりだけ見えて、細く小さい物が見えなかった人がいた。

また、白い腕章をつけていた人は、腕章だけが焼け残って、他の身につけていたすべての物が焼けていた。

土手町の被爆者はみなゆでダコのような色をして、裸身はふくれあがり、人相が変っていた。色物を着た人は焼けて裸身となり、白物を着た人は焼けなかった。

ともあれ放射能熱線を受けた人々のほとんどは、時間が経過するにしたがい、傷の有無を問わず、つぎつぎと死んでいった。

段原大畑町では、放射閃光を直視して網膜が剥がれ、失明した者がいた。

一瞬、灼熱的な痛さを皮膚に感じて火傷した人も多い。

焦土と化した京橋町の家跡に帰って来て、土に深く埋もれた防空壕を掘りおこし、その中から、そのころのランキョウ瓶という、瓶詰の酒を一本取出してみると、その首がねじれ、曲っていた。中味はそのままなので呑もうとすると、煙くさくて全く呑めなかった。

また、陶器類は重なったまま、一塊りとなったり、トロトロに焼け流れた形で凝固している物もあった。ガラス類は勿論溶解していた。桐木町では硬貨約一〇個が半溶解して固まっている事例も見られた。

段原大畑町でも同じような現象が見られ、石も脆く、触っただけで崩れたりした。瓦も焼けているし、ガラス類は形をとどめていなかった。

比治山公園の御便殿は吹っ飛ばされたが焼けなかった。千本松原はまったく焼失した。

火災は、八時半頃、稲荷町の土手筋あたりから発生したように見えたが、放射熱線の方向によって、電柱上の横木が燃えているのが見られた。生の木も瞬間的に熱線が浸透して発火した。

草屋根の発火がもっとも早く、比治山神社の社殿の桧皮葺き屋根が炸裂直後に火を噴いた。この他、火の気の全くなかったところから、火が出た例は多く、段原大畑町でも、町内会長宅の倉庫の窓から煙が出ていた。また、長谷川医院の薬局からも発火した。国民学校の火災も、原子爆弾の熱線による着火のように考えられた。また、ひちりんなどの火が散乱して発生した火もあったであろう。ともかく火災はすごい勢いとなって八方に延焼したので手がつけられなかった。

爆風は強烈そのものであった。稲荷町付近では、家の中のあらゆる道具が飛び、ガラス窓は木ッ端微塵に粉碎され、戸・障子などの建具も破壊された。

比治山町は、家屋が瞬時に倒壊したし、台屋町付近では、屋内にいた人間が三メートルも吹きとばされ、家屋は三分の一破壊し、土蔵はまっ二つに割れた。倒壊家屋の下敷きになって生きながらに焼き殺された人もおびただしかった。土手町も同じく炸裂の大音響と共に、建具・壁・屋根が吹きとんだ。桐木町では爆死者が多数出たし、避難者は全裸になった者がほとんどで、半裸体の者でもボロボロの衣装をくっつけているだけであった。

段原大畑町では、電柱がほとんど傾き、電線は切断され、北側の家なみは、窓が全部破壊されてしまった。

これら各町の状況は、それぞれの事態が各町とも重層していたわけで、位置とか距離の差による被害の大小はあったにせよ、おおむね炸裂の瞬間、一挙に惹起した災害現象であった。

原子爆弾の光線は八方十方に、一定の線をもって放射したと思われ、京橋町は東西に横たわる町であるが、その日九九人の死者を出した。その死者の出た家を詳しく調べると、町全域をま横に、三筋になって多数の死者が出ていた。その放射線からはずれた者は、単なる負傷か、運よく命拾いしたのであった(別図参照)。

また、台屋町には、家屋の倒壊したとき、偶然できた物の陰(空間)にいて圧死から免れた者も幾人かいた。

桐木町の比治山食糧倉庫に近接した場所に、高さ一メートルの石造延命地蔵が立っていたが、爆風により吹きとばされたのにもかかわらず、まったく損傷を受けなかった。戦後、それが伝説化して信仰を広めたといわれる。

段原大畑町のある医師は、避難するとき、医療機械を風呂の中に浸けこみ、水を出し放しておいて、破損から免

れた。また、物陰にいた者は火傷もせず助かった者が多いという。

炸裂時の瞬間的被害

なお、炸裂による瞬間的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
京橋町	100	-	-	-	43	38	19	京橋...被害なし 駅前橋...被爆により落橋 猿猴橋...被害軽微
稲荷町	100	-	-	-	37	43	20	電車鉄橋...損傷したが渡って逃げた者もある。
比治山町	100	-	-	-	48	34	18	
台屋町	100	-	-	-	30	49	21	
的場町	100	-	-	-	34	30	36	荒神橋...ランカンが破壊される。
桐木町	99.2	0.8	-	-	45	30	25	
土手町	100	-	-	-	35	40	25	
段原大畑町	65	25	10	-	25	36	39	
金屋町	100	-	-	-	22	37	41	
松川町	100	-	-	-	39	43	18	柳橋...被爆により焼失
段原町 段原東浦町 段原新町 段原中町 段原末広町	55	35	10	-	20	32	48	大正橋...ランカン一部破壊

全焼は全壊を含む

八、被爆後の混乱と応急処置

被爆者の往来

突発的な原子爆弾の炸裂によって、地区は凄惨な修羅場を現出した。

段原町九六九番地の自宅で被爆した広島文理科大学の杉本直治郎教授の体験記「原爆に遭った日」によれば、「警戒警報も解除されて、やれやれとくつろいでいた朝の一瞬、あまりの不意打ちをくらったこととて、恐ろしいと感じる余裕もないまま、後から考えてみると、不思議なくらい平気な心で、『やっぱり直撃弾かな。なぜこのあたりへ落したのだろうか。そうだ、比治山に軍隊がいるので、そこを狙ったはずのが少し西へそれて、ここへ落ちたのだろう。それにしても、爆弾による死亡率は、比較的少ないと聞いていたが、はたしてその通りだな。わたしも、まだ生きていぞ。』と、頭の中で、こんなことを思いながら、あたりを見廻してみると、天井は落ちて、タンスに支えられているので、やっと下敷きになるのを免れたけれど、ガラスというガラスはその瞬間に破れ落ち、壁という壁は、たちどころに崩壊して、畳の上にごっちゃになって、うず高く積みれ、一面にたちこめた土煙は、この光景に拍車をかけて、さながらこの世の終末を思わせるような、暗澹たる様相を呈していた。」と、その瞬間を記し、続いて金輪島の暁部隊の修理工場に動員されている学生の派遣隊長としての責任感から、その日は佐藤助教授の当番であったが、学生の安否が気になり、まだ焼けはじめていなかったのも、家財や書物もそのままにして出発した。「下駄はもちろん、靴もなければ地下足袋も見当らず、やむを得ずハダシのまま、軒下に崩れ落ちた瓦の山を踏み越え、比治山下廻りの電車線路に出て、宇品を指して急いだ。するとゾロゾロと、どこから出て来たのか、この世の人とも思われない人々の群れが『救護所はどこですか、救護所はどこですか。』と、口々に尋ねながらこちらに向かって来るのに遭う。と見れば、ほとんどの人も完全に衣を纏っている者はなく、中には全裸体の腰にかるうじて敷ゴザを巻きつけて、よちよちと歩いて来る者も、ひとりやふたりではなかった。そして大抵の人たちは、黒く焦げた皮膚の破れ目から赤い血潮が流れていた。もちろん足は申しあわせたようにハダシであった。

実のところ、救護所がどこにできているのか、わたしも知らなかったが、とっさに思いついて、『そこに堤医院があるし、さらに向うへ行くと、段原国民学校があるから、そこらへ行ってみられたらどうです。』と、小走りに走りながら答えつつ進むほかなかった。

と、どの家もこの家も、直撃弾を受けたように、めっちゃめっちゃに倒れている。そのここかしこから、すでに火の手が上がり出した。けれども、だれも顧みようとすることはなく、燃えるがままにまかせていた。」という。杉本教授は、宇品の旧運輸部構内で、動員学徒の山田という学生にあってから、自分も医務室で頭や手の指の傷、深い手の甲の傷の治療を受け、その足で金輪島に渡った。市内から金輪島へ渡った最初のものであったから、実情をみんなに話した。

学生をすぐ帰宅させることにして、再び市内に引返し、死体のたくさん横たわっている大学にいき、暁部隊派遣生徒は全員無事であったことを報告した。そして、「学校への連絡もすんだので、わが家へ帰ってみると、すでにまったく焼けていて、階上の書斎から落ちた書物が、小山のようにつもったまま、まだまっ赤に燃えている。わたしは茫然として、足が釘づけになったようにその前に立っていた。いっかは爆弾に遭うであろうと、もとより覚悟はしていたが、その時期がいつになるか予知することができないままに、その間研究を放棄していることもできず、さし当って必要でないものは、少しは疎開したにせよ、必要なものは学校と家とに分散して、一方が焼けても他方は残るであろうと、たかをくくっていたのであるが、このようなひどい目に遭っては、そうした心尽しも所詮むだであった。

あたりには犬の子一匹もない。妻は、どこへ避難したのであろうか。もしやと思って、近くの比治山神社に行ってみると、そこも焼けていたが、自転車をもってぼんやりと立っている人がいたので『この辺のものは、どこへ避難したか、ご存じですか。』と聞いてみると『いや、わたしは近村のものでがんすがノ。わしの村から、たくさんのもものが、けさ市内の家屋疎開の跡がたづけを手伝いに来たところ、日没になっても、ひとりも帰って来ないので、探しに来たのでがんす。ひどいことのでがんすノ。』

夕暮れに、ほの白く浮んだその腕章には、『何々村長』とかすかに読まれた。

比治山下の交番所に引きかえすと、ここも破壊がひどくて、だれ一人いないので、山の方へ登ってみた。すると間もなく、屋根の壊れた多聞院の上手の左側に、交番所の出張所が、野天に机一つ置いてできていた。『段原町のものは、どこに避難しているのでしょうか。』『この辺にいるはずだから、探してごらん下さい。』とのことで、やっと妻が、近所の人たちと、路傍の芝生に一緒にいるのがわかった。

日はとっぷりと暮れて、凄惨な火の海と化した市内を、比治山下に立って眺めていると、父兄の方であろう、『ここへ何々校の生徒は避難していませんか。』と、憂色にくれながら、しきりに尋ねてこられる。これら市内の中等学校の一、二年生は、この日、家屋疎開の跡片づけに動員されたが、付添教官もほとんど死んでしまったことは、後になってわかった。

夜目にもかすかな光で、戸板に載せた、見るも痛々しく焼けただれた人や、大八車で運んで来た男か女かも分らないぐらいに、頭髮の焦げた人など、つぎつぎと運ばれて来る。比治山の上には、臨時に救護所が設けられたからである。妻はいった。

『もしも泰子が、あんなふうだったら、死んでくれているのが、ましですわ。泰子は、どうしているでしょう。』

ひとり子の長女は、女専(県立女子専門学校)からわたしと同じく宇品の暁部隊へ出動していたので、けさわたしはその前を通ったとき、一言、尋ねていたらよかったのであったが、実をいうと、わたしの頭の中は、ただ大切な教え子の安否如何で一ぱいで、実子のそれごときも、妻から尋ねられるまですっかり忘れていたのであった。すでに教師として、教え子の無事であったのを目撃して安堵したわたしは、子の父として、その子の安否が気になり出した。

明朝、また宇品へ行くので、そのときこそは、かならず尋ねてみるからと、妻をなだめてみたものの、気がかりな一夜を比治山登山口の舗装した堅い路傍で、着のみ着のまま、明かさざるを得なかった。ただ幸いなことには、近村から運ばれて来た心づくしの握り飯で飢えを感じることもなく、いつもならば、こうした夏の夜の野宿では、蚊軍の襲来に悩まされがちであるのに、今夜という今夜は、それもほとんど感ぜられないぐらいであった。おそらく蚊もまた、わたくしたちとともに爆撃の被害者であったのであろう。」と述べており、また、土手町の自宅で被爆し失明した沖土居春子(電話交換手)は「...パッと光った。太陽のそばへ近づいた心地、アラッと立ち上がり、裏へ逃げようとしたとき、ガチャガチャと爆風と共に私の全身は叩きつけられ、目はつぶれ、ガラスの破片で傷だらけとなった。意識ははっきりしている。手さぐりでやっとのことで人声のする表へ出た。

『まあ、春子さんが...』と変な声を出してお隣りのお婆様。しっかり下さい、とお念仏をとなえながら水槽のそばへつれて行き、ぬるぬるした血を洗い流して下さった。

『ここで待っていなさい。』とお婆様は家へ入られた様子。その頃私の家には、当時七七歳になる老祖母と、八歳になる女の子との三人の淋しい暮しであった。子供は学校へ出て行き、祖母が一人家に残っている。心配していると、間もなく『助けて下さい。』と微かながら祖母の声がした。

『ああ、おばあさん、ここです。』と一声呼んだ。間もなく『やれ、やれ』と出して来られ、私の姿を見るなり、『お前!』といったきり、『早く早く、病院へ行こう。』と、いらだたしい声、取るものも取りあえずそのまま病

院へと急いだのである。

お隣りのおば様から繻帯らしい布を頂き、血のふき出る手足にまき、草履をはかせていただき、祖母の肩にすがって、やっと小路を通り抜け、大通りの比治山下の道に出た。

両眼を失い血だるまになった自分、もう駄目、と諦めたような気持ちであったが、気分はとてもしっかりしていた。あの大通りはまるでお祭りさわぎのような人の波、みんな走って逃げている。

『みんな怪我人ばかりだよ、大変な一大事だったもんだよ、あちこちから煙が出て、火の手が上がるよ、山崎の病院も駄目らしいね、痛むかい。』

祖母はさも心配そうにいわれる。

『いいえ、済みません、おばあさん。』

と何だかお気の毒になって、祖母こそ怪我はないかと尋ねると、

『いや、お陰でのう、心配せんでもよい。しっかり肩にすがって元気を出して歩いてくれよ。』

とやさしい言葉。一時も早く安全な場所へ逃げるよりほかない。次々と火災はふえていくらしい。あたりの空気が乾燥して、暑さは一層増す。皆について逃げて行く途中、的場近くで救助隊の方らしい人に、油薬をぬっていただく。全部火傷と思われたらしい。少し安心した気持ちになって、また祖母の肩にすがり歩いた。」という。

比治山公園の東裏側地帯は、爆風による被害が多少はあったが、火災が発生せず、他町の避難者で混雑をきわめ、道という道はたくさんの死傷者で陰惨そのものであった。

当時一五歳の学徒で、宇品造船所に動員で行っていて被爆した門田武の体験記「重傷の婦人を負う」によると、宇品から御幸通を経て専売局に出て、惨状目をおおう御幸橋上に立つと、上手の比治山橋方面は火の海であった。馬の死んでいる電鉄横を通ると、鷹野橋は黒煙でまっ暗。避難者の大群にぶちあたり、広島赤十字病院の横を元安川に向って倒壊家屋の上を踏みわたる。山中高等女学校は避難者でいっぱい、川岸には炎の竜巻が天に向ってたけり狂っていた。引きかえして再び御幸橋に立つ。以前より増した火傷の群れを後にして、十二時すぎ広陵中学校横で食事をとると、友人の〇君とここから比治山東裏を抜けて広島駅へ出ようと考えた。

歩いていくと、

「女子商前付近からだんだんと惨状はひどくなっている。血と赤土で密着し、顔の輪郭が無いまでに傷ついている婦人。背中一面火傷した少女の肩に老いた母がしっかりとつかまり、右足だけゾウリをひっかけ、あぶなかしい足どりで避難している。

『広島駅を抜け饒津 - 三篠川 - 横川』、こんな道順が浮ぶ。熱さも怖さも忘れ、焼けている電車道を走った。駅のビルディングは猛火に包まれており、黒煙で広場は覆われて死者はおろか怪我人も見当らない。ただ白黒の犬が防空壕の辺に寝そべっていた。ふたたび荒神橋に立つ。この時刻(二時過ぎ位だったろう)ほんのちょっとした不注意で〇君と離れた(〇君は大洲のブドウ畑で一夜を明かしたとか)。家に帰りた一念に、前後の見境もなく、濡タオルを口にくわえ、稲荷橋に向って走った。

稲荷神社前で初の死人に会う。今まで見なれた火傷と異なり、真黒に焼け、両手を肩の上に置き仰向きに死んでいる。男か女かわからない。- 京橋上には一〇数人の瀕死の人々にまじって早や息絶えている人。断末魔のうめき声も聞える。橋の西詰には七、八歳ぐらいの女の子を菰で巻き、真青な足が見えるのみの我が娘の足を幾度もさすっている父親。東警察署では無傷な人四人が火傷者にメリケン粉を思わせる白い薬を塗っている。」という実情であった。

以上のように、炸裂後、地区は極度の混乱状態に陥り、逃げまどう避難民の救急活動も非常に粗略なことしかでき得なかった。

道路整備

道路は各町とも惨憺たるありさまで、歩行は困難なほどであったが、四日後、海田市町に駐屯している部隊が出勤して、京橋町中心に主要道路を整理した。

県の通達

八月二十日過ぎ、全市の町内会代表が、市役所に集合し、玄関の土間で、「九月六日までに道路を整備し、進駐軍の来広に備えよ。整備に際して、道路上に飛散している材木・家財など一切のものを町内会長の手で自由に処分してよい。」という県からの通達を言いわたされた。この条件に従って実施し、九月末までにはどの道も通行に支障な

いようになつたが、家財などの処分について、後日、復帰者が問題にし、裁判沙汰になつた一件もあつたが、罪に問われることはなかつた。

死体の収容と火葬

遺体の収容は、海田市駐屯の部隊その他の部隊の兵士らによって、六日の当日から始まつた。京橋筋の路傍の遺体は、七日正午ごろから海田市の部隊と来援した地方消防団員とが協力して、二葉山方面に収容し、火葬されたようである。

台屋町は比治山本町沿いの山手、現在市営墓地の下に、また土手町と桐木町とは食糧公団の焼跡などで火葬にふし、段原大畑町は、国民学校外側の通路で火葬をおこなつた。いずれも氏名はほとんど確認できなかった。

また稲荷町は、人的被害が少なかつたし、通行人の死者不明もなかつた。その僅かな死体は、国民学校で火葬し、仮埋葬はしなかつた。

これらの死体の火葬が終つたのは、だいたい十月末ごろであつた。

空前の混乱状態のもと、死体の火葬認可を受けることなど、正式な手続きはとれず、警察の検視も死体のすべてに受けたのではなかつた。

火葬をおこなつたのは、主として軍隊であつて、幾人もまとめて処理し、遺骨は、引取人のあるものは渡し、ないものは台屋町の源光院の慰霊安置所に納めた。比治山東裏の各町においては死体の収容や焼却はしなかつたが、町から市中心部へ出ていて死んだ疎開作業奉仕者やその他の犠牲者のため、大正橋西詰巡査派出所のところに昭和三十四年八月六日慰霊碑を建立し、毎年、灯籠流しをしている。

慰霊碑

町内会の機能

なお、各町内会の機能と対策処置は、つぎのとおりである。

町内会名	説 明
京橋町	その年の十月末頃からバラックが建ち始めたので、十一月中頃から海軍の解除兵赤井喜市が、毎日牛田から出張し、町内会としての事務に当り、十二月中頃からバラックの一角を借用して町内の事務をとる。
稲荷町	町内会長は死亡し、副会長は負傷、その他の人々も親戚縁者をたより疎開したため、町内の機能は一時止まる。
台屋町	残留町民が食糧および衣料の配給を行なつた。
的場町	約半年ぐらいあと、段原大畑町と合併運営した。
土手町	隣組単位に処理
桐木町	一七組あつた隣組が家屋疎開と、原子爆弾などにより世帯が減少したので、残存世帯を六組に吸収し、六組編成で町内会としての機能を整え、従来どおり月番制度を採り配給、その他の町内事務を処理した。
比治山町	
金屋町上	
金屋町下	
段原大畑町 段原町 段原東浦町 段原新町 段原中町 段原末広町 松川町	各町とも、焼失しなかつた地域では、従前どおり運営されたようである。

九、被爆後の生活状況

復帰居住者の状況

比治山公園の東裏や段原大畑町南部など火災の発生しなかつた地域を除き、全焼した各町は、居住者も少なく、疎開先からの復帰者も直後はきわめて僅かであつた。

京橋町での最初の居住者は三家族五人(福永ヨシ子・安原昇一・内藤玉喜の各家族)である。この三家族は、死んだ肉親の遺骨探しのために一夜をあかした向洋国民学校を出て、市内の焼跡に帰ってみたが残火なお熱く、寄りつくことさえできなかったので、その夜は東練兵場で野宿した。つぎの日、さらに焼跡に帰り、三人はそれぞれの遺骨を収集したが、すぐ日暮れがたとなつた。別に行くところもなく、近くにあつた京橋町内会の防空壕に、遺骨をかかえて入つたのが居住するところとなつた。

京橋町の防空壕は、間口約三メートル(一間半)、奥行約九メートル(五間)、深さ約一メートル半で、収容能力は六〇人であつた。地面を掘つた上に疎開作業で取りこわした家屋の平角材、柱類などを並べ、その上に掘りあげた

土を全部覆いかけて構築した堅固な防空壕で、被爆後も残っていたのである。

土手町でも町内防空壕を住居に利用している者がいたし、バラック小屋を建てていたものもあった。段原大畑町では、まず医院が木造で建てられた。医師不足であったから、残存者のたつての要望でもあったが、その他の人は焼跡の残材や古トタンを利用してバラック小屋を建てていた。

生活状況

荒涼とした焦土の生活は苦しく、物資の欠乏で極度の飢餓状態が続いた。

京橋町付近では、煉瓦建の芸備銀行の残骸で炊出しがあり、それで一日二日と露命をつなぐうち、近々物資の配給があるということになったとき、それを炊く道具も入れ物もなかった。これら売る店もないので、焼跡を掘り探し、使えそうな鍋・釜・茶碗など、みんな変形したり、黒ずんで汚れていたりしているままの器物を集めて来て、配給物の煮炊きをはじめた。こうして壕内生活とかバラック小屋生活が始まったのであった。

八月末の居住者数

八月末ごろ焼跡の居住者数は、だいたい次のとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数
京橋町	2	土手町	約 13
稲荷町	2~4	金屋町	不明
比治山町	(十月上旬) 2	桐木町	75
台屋町	30	消失地域	2
的場町	5	段原大畑町	非消失地域 250

焼けなかった比治山東裏各町の人口は、その後つぎつぎ避難者を受入れたので、莫大に増加し、そのまま定住するようになった。

八工の発生

八工の発生は言語に絶した。白い蚊帳がま黒い蚊帳に見えるほど八工が密集していたし、一步あるけば、その足あとだけの八工は逃げるが、足をあげると忽ち、逃げた以上の八工が、そのあとをたちまち黒く埋めた。焼跡を歩く人は、八工を追いながら歩いたが、背中といわず肩といわず、もぶれついてなかなか逃げなかった。

駆除の方法手段がなく、発生するにまかせているありさまで、バラック小屋のトタン屋根の裏側など、あたかも墨を塗ったように黒くとまっていた。夜昼となく、木ぎれなど残材を利用して、松明のようなものを作り、八工を焼きはらったりしたが、到底追いつかなかった。

この状況も九月初めごろ、アメリカ軍飛行機による殺虫剤の散布によって、やっと全滅した。

ロウソク生活

焦土の中の生活は、生活という形態をしていなかったが、殊に夜間照明がなく、残材を拾って来て焚いたり、乏しい配給のロウソクをともしたりして、心細い日々であった。

京橋町で壕生活をしていた前述の三家族は、九月十七日の豪雨で木材や廃材の流出したのを拾い集めて、小さなバラックを建てた。屋根は焼けたトタンを集めて葺き、同月二十四日、壕生活から脱した。このとき、電線の落ちていたのを拾い、つなぎあわせて、二十七日、バラックに電灯をともした。これがこの地区一帯の最初の明かりであった。三家族は、やっと人間らしさを取りもどしたような感じがして、よろこびあった。

バラックを建て、電灯をつけたものの、食生活は辛酸をきわめ、全くの飢餓状態が続いた。年末ごろから、闇市が駅前や愛宕町あたりに出るようになって、配給の不足を幾分かずつおぎなえるようになって来た。またバラックの周囲を片づけて簡素な菜園を作って、どうにか生き続けたのであった。

比治山公園東裏の地域は、焼けなかったのが大いに幸いして、苦しいながらも生活の平衡を取りもどすのが早かった。電灯も変電所から引いて二、三日後には各家庭に点灯することができた。

十、終戦後の荒廃と復興

台風被害

九月十七日の枕崎台風により、住居に使っていた防空壕がすべて浸水した。

京橋川は堤防を越すほど川水が増量し、付近一帯が危険に晒された。台屋町は特にひどい被害であった。

点々と散在していたトタンのバラックは傾き、ほとんど屋根を剥ぎとられて、細い古材の骨組を無残に露出してしまった。

猿猴川の増水も甚だしく、焼けなかった大正橋がついに流された。比治山公園東裏一帯は床上すれすれの浸水状

態になった。

バラックの建ちはじめ

なお、バラックなどが建ち、次第に復興しはじめた当初の、各町の状況は、次のとおりである。

町名	状況
京橋町	二十年末までに応急のバラックが一四、五戸できた。二十一年三月初め、組立式木造家屋(一セット・一〇坪、ラス葺、六畳用たたみ表付コモ六枚分。三、二〇〇円)が一二戸払下げあり、やっと板張りの家らしいバラックが建ったこの時、他所の割当分のうち不用のセットを一〇戸分ゆずり受けて、計二二戸が建った。
稲荷町	二十年十二月から二十一年一月ごろにかけて、市の払下げ組立式家屋もあり、ボツボツ家が建ちはじめた。この払下げ分より他に、トタンのバラックが二、三戸建った。
比治山町	二十年十月末から二戸が定住した。川に流れて来た材木を集め、トタンの破片をふいて屋根とした。
台屋町	九月十七日の台風で防空壕に住めなくなり、二、三日後から、木やトタンを拾い集めて、バラックを建てはじめた。
的場町	罹災後一週間ぐらいして、焼トタンのバラックを建てて少数の人が住んだ。二十一年になって、組立式の家を申込み、家らしいものが建ちはじめた。
金屋町	
土手町	被爆直後、すでに焼トタンバラックを建てて住んだ。十月ごろ、少し増えたが、自己保有の木材を他から運んで建てた者もあった。
桐木町	八月末まで、ほとんど壕生活をした。九月初めごろから、焼トタン小屋程度のものが建ちはじめ、二十一年三月ごろから、市の組立式木造家が二戸建った。同年六、七月ごろから本建築が一部に行なわれた。資材は、海田市町や安佐郡方面から入手した。
段原大畑町	十月ごろまでに、焼跡では残材利用の小屋を建てて少数ながら住んでいた。

京橋町商店街復興

昭和二十一年四月、市当局は、都市計画により、戦後、市内に復帰し、家屋や店舗など新築する者は、旧道路から約九メートル後方に退いて建築するよう通達をした。

京橋町内会は、その約九メートルを、地主にいちじ無償で借用することを申し出て快く承諾を得た。そこで町内会は復興対策として、一般人または広島駅前のムシロ敷きの闇市で、古着や日用品を売っている者などに利用するよう呼びかけた。条件は京橋町筋道路の左右を(一)一人当約一四平方メートル(四坪)を限度としてバラック建ての商店を開設すること。(二)土地は区画整理が施行されるまで無償で貸与するというので、一般に呼びかけたところ、昭和二十一年の九、十月ごろまでには一二〇軒ばかりのバラックが、店舗開設希望者と復帰した町民によって建設された。これはおそらく、市内全焼地区中で、最初に復興した正統的な商店街であって、深い伝統に根ざす町民の底力を、不死鳥のように示したものであるといえよう。

昭和二十年八月六日午前八時十七分原子爆弾炸裂直前までの京橋町住居者戸主氏名と被爆即死者氏名・年齢を記す。
あの日、あの時

前原静枝

昭和二十年八月六日、当時稲荷町京橋付近に在住。年齢四五歳。長男、次男共に出征、娘端枝二〇歳は向洋製鋼所へ挺身隊として勤務。戦たけなわとなり田舎へ疎開をと思いつつも、娘は「わたしは職場で倒れる覚悟だからお母さんだけ田舎へ。」と言うので、自分だけ安全地帯に入るに忍びず延引しているうちに親子共に被爆した。前夜来、警報の連続で殆ど眠ることも出来ず、隣組一同、屋外で夜を明かしたのであったが、そのとき、隣組の若い挺身隊の娘さんいわく「あすは広島を空襲するというピラを撒かれた。」と、誰かが「デマヨ、デマヨ。」と…。

六日朝、漸く警戒解除になりホットして、モンペも取り、身軽な簡単服で台所におり、朝食の準備、大豆御飯でもとコンロに火をおこしているところへ、二階の縁側から娘が首を出し、「お母さん、警戒警報解除になってもBの爆音が聞えているよ。」という。私も勝手口に出て空を見上げてみると、突然、ピカッと稲妻の如き閃光で、一瞬四・五メートル吹き飛ばされ、何かガラッという音がした様に思う。後は人の声もなく音もなく、ただシーンとしていた。

階下の座敷を貸していた女学院の英語の先生が、顔中血を流しながら出て来て「早く逃げましょう。」と言われる。「でも先生、私は眼が腫れ、つぶれて見えません。」手を引いて頂いて道路に出た。その時は何時のまにやら履物はぬげてハダシ、道はまるでガラスの粉の道、それが足にも立たず、ただ焼けつく様な熱さであった。

坊主頭をした地獄の亡霊の姿の様な人が、右往左往していて、誰も物言うものもなかった。フト見ると、彼方に福屋のビルが高くそびえていた。

京橋の中程まで歩いて来て、フト思い出したのは娘端枝のこと。先生は祇園の姉の家へ行きましょうと言って下

さったけれど、強いて拒否して、我家に引っかえす。腫れあがった眼を手で引っ張りあげる様にして、庭木を目標に倒れた家の木材の上を通る時、下の方でウンウンなる声をした。ようやく我家へ、そして二階にいたので、倒壊物の上へ上へとシャニム二上がって、娘の名をさけび続けていると、奥の六畳の窓際で、両足を膝から下のみ出してバタバタと合図をしている。からだの上には壁・フスマなどたくさん重なり、その上に大きな棟木が背中あたりに、上から斜になっていた。こんな時には、案外力の出るものだと思います、その上に大きな棟木が背中あたりに、上から斜になっていた。こんな時には、案外力の出るものだと思います、一生懸命に木に抱きついて見たが、一寸も動かぬ。大きな声で助けを求めていたところ、前の家の御主人が「待って下さい。今うちの者を出したら、行ってあげます。」という。的場の方から火炎が見えた。気が気でない。そのうち漸く娘を出して頂いた。一命が助かり、ホッとして何の欲気もなく、避難袋も横目で眺めるだけであった。ただ何気なく戸棚の中の洗濯物の中から、浴衣を一枚引きぬき道へ出た。もう逃げる勇気もなく、満潮であった京橋川へ飛び込み、筏につかまりつかっていた。隣組の逃げおくれた人達と「死ぬる時は一緒に死にましょう。」などと言う。みな観念してのことである。消防団の人達がとんで来る火の粉を防ぐため、時々頭から水をかけて下さる。私は顔がピリピリするので潮水をしきりにかけた。川上の方から死体が時々流れて来る。橋の上から自転車を投げて行った人もあった。

潮の引いた後は暑いので、日陰になった橋の下に皆たむろする。今度は橋を落すだろうと言う人がある。みな橋から体を出さぬ様注意を受ける。

何処も火の海。胸がムカムカして来る。下痢をする。紙一枚あるでなし、持って出た浴衣を破いて代用にする。ほかの方々にもあげる。夕方握り飯の配給がある。これも入れ物がない。また浴衣を破いて、みなでそれに配給をうける。

近所の娘さんで、女子商卒業で銀行勤めの志奈ちゃんは胡町で被爆。下敷きになっていて助け出され、川岸まで帰ってきた時には、全身ヤケドで、誰か見分けがつかず、声を聞いて初めて解った。一緒に川に飛び込んだけど、上がってから、とても苦しみ出した。どこかのおじいさんが見かねて「小便をかけるとよいと聞いているが、みなさんかけて上げてよいでしょうか。」という。とんだ漢方薬。しかし夜明けもまた息が切れた。朝出勤の時に、ほんとうにかわいい、きれいな娘さんになられたと思って見たのに...

今一人の娘さんは、家で寝ていて下敷きになり、州の土手まで這い出して来た時には、誰とも見分けもつかぬ。「藤田千代子です。お願いします。」の声で、初めて解る。鼻から口の方にかけて裂け、ちょうどイチジクが口を開いた様である。二日と見られなかった。朝誰かが千代ちゃん死んでいるが、腕時計していたのになくなっていてと言う声がする。

晩には川の堤にサバ(魚)を並べた様に、みな土の上に寝ころんで夜を明かした。寝たまま道路の方に眼をむけると、トラックが山のように積んだ荷物ならぬ亡きがらを積みあげて、幾台も幾台も通っていく。これはどこかの島に運び焼いたとかいう。

あさ四時頃、東警察署に知人を尋ねた。

途中、「おばさん、水が欲しい！」と全身腫れ上がっている人、肩から皮膚がぶら下って垂れ、赤身の出た人、生後五か月位の赤ん坊が木のかたくなって死んでいる姿を見た。また軍人が靴ばきのまま、馬の足もとに木のようにになって空に向ってはね上げたまま死んでいた。

道の西側、また東警察署にも足の踏入れ場もない位横たわって水を要求している人ばかり。全身だるくて身うごきも出来ぬ。日陰はなし、上から焼けつくような太陽。ころんだままで動かぬ娘を促して、東警察署まで歩かせ、郷里からムスビを運んで来たトラックに乗せてもらって、夜九時頃、佐伯郡佐伯町の我家についたのであった。

ちょうど、被爆当時は、モンペもぬぎアッパッパでくつろぎ姿でいたのが、川へ飛びこみ、ぬれたまま土の上に寝ころび、ボロボロの服が汚れてコジキよりもまだあさましい姿であつたらしく、田舎の近所の人達も、誰か見分けがつかず、お母さんですかと娘に尋ねていた人があった。

私も我家へ帰ってから、初めて自分もヤケドしていることが解った。

さすがに田舎は高原ではあるし、一日中、青田から来る涼しい風が気持ちよく、それでも家の上空を徳山方面に向う米機が群れをなして飛ぶ時にはジッとしている事が出来ぬ位恐怖におののいていた。(以下略)

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

南段原町、段原中町、段原山崎町、上東雲町、東雲町一丁目 二丁目 三丁目、東雲本町一丁目 二丁目、段原新町(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、東雲町[しのめちょう]・段原日出町[だんばらひのでちょう]・段原山崎町[だんばらやまさきちょう]・段原中町[だんばらなかまち]・段原新町[だんばらしんまち]・段原東浦町[だんばらひがしうらちょう]・南段原町[みなみだんばらちょう]とし、爆心地からの至近距離は、南段原町の現広島女子商業学校付近で、約二キロメートル、もっとも遠い地点は、現在の広島大学東雲分校付近で約四・四キロメートルである。

比治山公園は、地区分割上、段原地区に入って、この地区に含まないが、標高約七〇メートルの小丘比治山が、爆心地からの衝撃や火災発生の防壁となって、この地区の焦土化をふせぎ、北西部の人家密集地帯も、ただ家屋の大破程度であったことは、広島市の初期復興に大きな影響をあたえた。

地区は市の東部に位置し、比治山の東側部分で、猿猴川に扼されている。北部は、従前から人家の密集した住宅地域であり、東南方面一帯は、戦前は一面の田畑、ハス田、ブドウ園などが広がっていた半農地域であった。国鉄宇品線は、地区の北西部寄りを南北に走っており、猿猴川をまたぐ東大橋が対岸の南蟹屋町・大洲町に通じている。

地区内の当時の建物総戸数は約二、二一二戸で、人口は約七、五五〇人で、各町内会の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
段原東浦町下	120	118	365	田中孟
段原新町下	248	240	720	小早川盛登
段原中町中	290	315	1,260	中井仙太郎
段原中町下	188	215	850	桜井明
段原山崎町	168	118	427	香川士太
段原日出町	342	320	932	服部徳太郎
南段原町一丁目	154	145	497	高津幸一
南段原町二丁目	200	215	782	内富寛
東雲町上	320	310	1,050	藤本鶴一
東雲町南	183	178	667	中川到

地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
比治山国民学校	東雲町上	広島女子商業学校	南段原町一丁目
第一国民学校	段原山崎町	県立師範学校附属国民学校	東雲町南

二、疎開状況

人員疎開

当時地区内一般家庭では、老人や子供を、市外へ縁故疎開させていた。昭和二十年七月二十四日の呉市空襲以来、段原東浦町・段原中町・段原新町などの人家密集地帯では、約三〇%が空家という状況となり、残留世帯では主食以外の魚・野菜類の配給量がかえって良くなるという現象をまねいた。

物資疎開

各家庭では、縁故を頼って重要ものを小さな荷車(註・大八車は当時貴重品扱いされていたやすく使えなかった。)に積み、市外も五里以内程度の所に疎開していたものが、ほとんどといってよいほど多かった。

しかし、疎開した荷物が終戦後、完全に持ち帰られた者は少なく、たいがい品物が全部悪くなったり、著しく減ったりして物議をかもし事もあった。

学童疎開

比治山国民学校は、三年生以上の児童が、昭和二十年四月と七月に、佐伯郡津田町・浅原村・栗谷村の寺院などに疎開した。その数約二〇〇人、父兄側からも炊事婦としての同行者が二、三人あった。

別に、縁故疎開した児童数は約七〇〇人にのぼった。

三、防衛態勢

各町内会ごとに繰返し防空訓練を実施した。また、昭和二十年六月ごろから各町内会で国民義勇隊を編成したが、老人と婦女子ばかりで、名目だけの状況であった。

翼賛壮年団が盛んに各町内会を叱咤激励し、啓蒙にあたったが、成果はあまり現われず、警防団も五〇歳以上の団員が多く、概して気概に乏しかった。なお、比治山東麓には、一〇人から二〇人ぐらい収容可能の防空壕がいくつか作られていて、いざというとき、それを利用することになっていた。

四、避難経路及び避難先

東大橋を渡り尾長町を通り、矢賀町を経て安芸郡府中町に至る路線が、この地区の避難経路として指定されていた。また、地区内の緊急避難場所としては、比治山国民学校、及び第一国民学校が決められていた。これに中国配電株式会社大洲製作所があとから追加された。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍船舶砲兵団衛生教育隊	広島女子商業学校内
鉄道建設隊(部隊名不詳)	比治山国民学校内
兵器支廠の兵器貯蔵庫	比治山国民学校内

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

警報の発令と解除は、サイレンとラジオ放送のほかに、町内隣保班で当番制による監視員が配置につき、警報は振鈴、または大声で一般世帯に伝達する方法をとっていた。

五日夜から、たびたび出される警戒・空襲警報にも、たびたびの事で馴れているので、人々は動揺するようなことは、ほとんど無かった。

六日朝

六日午前七時、各隣組から男女の別なく、一人ずつ国民義勇隊として、鶴見橋付近の建物疎開作業に出動した。

地区内には前記の比治山東麓の防空壕のほか、各戸それぞれ待避場所を選定、簡単な防空壕を築造しており、本土空襲初期には、警報ごとに、これに待避していたが、のちには毎日のことなので次第になれて、六日朝の警報にも防空壕に待避する者は、きわめて少数であった。

被爆直前

朝七時三十一分、警戒警報も解除され、地区内はなんら変りなく、平常どおりの営みに入っていた。

家屋疎開作業の国民義勇隊はすでに出発しており、会社・工場の出勤者もほとんど出かけており、後には婦女子が掃除や跡片づけで、ほとんどの者が屋内にいた。しかし、警報解除後であるにもかかわらず、飛行機の爆音の聞こえることを、不審がっていた人はかなりあった。

目撃談

侵入敵機を目撃者は、ほとんどいない。段原中町の一婦人の体験では、西北の空にパラシュートのようなものを見た。マグネシウムをたいた時のように、ピカッと光った瞬間、ダイダイ色のような液体が流れるように見受けられ、同時に熱さを感じたけれども火傷はしなかったという。

なお、当日朝の疎開作業への出動と、建物疎開実施概況は、つぎのとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
段原東浦町下	12	鶴見町				
段原新町下	25	鶴見町	2	2		
段原中町中	25	鶴見町				
段原中町下	19	鶴見町	3	3		
段原山崎町	15	鶴見町	19	19		
段原日ノ出町	30	鶴見町				
南段原町一丁目	15	鶴見町	10	10		
南段原町二丁目	20	鶴見町				
東雲町上	35	鶴見町				
東雲町南	23	鶴見町				

七、被爆の惨状

炸裂の瞬間

強烈な閃光に一瞬目がくらみ、二、三秒でグワーという轟音。その後、約二、三分間は真暗で何も見えなかった。ほとんどの人が自分のすぐ近くに爆弾が炸裂したと感じた。

建物の倒壊は、段原中町中組と段原新町下組が最もひどかったが、全壊は余りなく、七割損壊というのが多かった。

瓦が飛散し、壁土は脱落、ガラスが粉碎された。家具や建具の下敷きになった人が、多数いたが、建物の下敷きになった人は、あまり見られなかった。

炸裂と同時に、所々方々から叫び声が上がったが、負傷者が屋外に逃げ出したのは、約二〇分ぐらい経過してからが多かった。三〇分も過ぎたころから、市外(東方)へ避難する大勢の負傷者が、行列をなして通り、同時に地区内から勤労作業に出動していた人々が、半死半生で帰ってきて右往左往し、各町ともにわかに騒然となった。

トタン板の塀などは、空中に舞い上がったままどこかへ消え失せた。なお、地区内ではガラスの破片による負傷者が多かった。

なお、広島女子商業学校は全校舎が、第一国民学校は北校舎がそれぞれ全壊した。

避難状況

原子爆弾炸裂後、幾人かの住民は、どこにも避難せずにふみとどまったが、大多数の人たちは東雲町のブドウ畑に避難した。一部は東練兵場、さらに遠く郊外へも逃げていった。

避難したブドウ畑からはもう逃げず、終戦まで野宿した人が多かった。

東大橋

東大橋は被害僅少で、これから大洲街道に通ずる道路上は、火傷した避難者や運搬される重傷者でごった返していた。路面は瓦などが飛散している程度で、通行にはさして支障はなかった。

当日正午ごろまでは、憲兵が東大橋に立ち、市内に入る者を制止していた。

被害状況

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
東雲町上組 南組	10	10	70	10		30	70	東大橋被害僅少
段原日出町		10	80	10		25	75	
段原山崎町		30	60	10		35	65	
段原中町中組 下組		60	30	10		70	30	
段原新町		60	30	10		70	30	
段原東浦町	10	70		20		70	30	
南段原町一丁目		70	20	10		70	30	
南段原町二丁目		70	20	10		70	30	

地区内が原子爆弾炸裂時、火災の発生を免れたことは幸いで、中心部のように、河川に避難するというような事態までには至らなかった。

なお、この地区では降雨はなかった。

その夜

当日の夜、地区内の住民のほとんどは、東雲町のブドウ畑、あるいは東練兵場などに避難して夜を明かしたから、各町の破壊された家屋内は、たいがい無人の状態であったが、比治山東側の壕に入っていた人たちもいる。多くの負傷者が半壊の家屋内にあり、路上にも転がっていたが、その中には、屍体も数体まじっていた。

そして、中心部の火災により、地区内は夜どおし明るかった。

諸現象

原子爆弾の炸裂にともなう、熱線と光の威力で、地区内随所に、張りめぐらされた電線の被覆が、各所で焼けて裸線となっていた。

段原中町の婦人が、黒いコウモリ傘をさして、的場町を歩いていたが、炸裂後、家に帰ってみて初めて傘が骨組だけになっているのに気づいたという。

しかし、その婦人は火傷もせず、現在、元気に生活している。

比治山山上の樹木は、ヘシ折れるか、折れないのはほとんど立枯木となった。また、羽のない雀が、屋根でピョンピョン跳ねていた。

一週間ほど経過してから、ハエが大変多くなり、そのハエが蚊同様に血を吸った。

地区内には、細い小路が多く、その小路の向きによって火傷を受けた人と受けなかった人とがあった。

熱線による自然着火現象としては、家屋には無く、段原中町女子商業学校前の通りで電柱一本着火、段原東浦町側の比治山の古い松の大木が、一週間もくすぶっていた。

段原中町中組で、町内の電柱のうち二本が、被爆一分後ごろ発火し、夕方までくすぶり燃えていた。また、段原東浦町下組では、民家の日除けのすだれが、炸裂直後に燃えたが、すぐ消し止めた。

燃焼により物質が変化し、瓦などが変色、変形していた。

爆圧・爆風の威力については、地区には爆風が西北から来たが、電柱のような物は場所により一五度以上傾いたため、電線はズタズタに切断された。トタンで造られた壁・塀・看板などは、そのほとんどが爆風のため飛散して、跡形もなくなっていた。

しかし、段原東浦町の比治山直下の家は、屋根瓦二、三枚吹き飛び、窓ガラスを少々壊されただけで、ほとんど無事であった。これは一〇メートル東前方寄りの家々が、約七割破壊の損害を受けているのと対象的で、山陰であったばかりに無事であったものである。

このように、段原東浦町と、南段原町一・二丁目は被害が軽く、ただ広島女子商業学校のような長く大きな木造建物が、倒壊しただけである。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援活動

地区内町内会その他の団体では、救援、炊出しなどを行なわなかった。

夕方になって海田市以東の郡部から、救援物資として握り飯が、大正橋巡査派出所前に輸送され、七、八、九日の三日間にわたって各町の罹災者に配給された。また、東雲町のブドウ畑・猿猴川土手・東練兵場などの避難老に対しても配給された。

東雲町のブドウ畑にいる避難者に「市役所の者です。」と連呼しながら、この握り飯が配られたのは、六日夜の九時から十時ごろで、十日ごろまで続けられた。

負傷者の中には、そのムスビをひと口食べ、「純綿のムスビだ。」とよろこびながら、息を引取った者が多数あった。そのなかには勤労働員で出勤し、被爆した若い女生徒もたくさんいた。

このブドウ畑では、畑の持主が棒をさげて来て、避難者がブドウを盗んで食べると言って、どなって廻るので、ゴタゴタが起きたという。中には畑から出て行けという地主もあったが、避難者は別に取りあわず畑に頑張っていた。多数の人が半死半生という状況で、もはやどうにもならないことであった。

救護所

広島女子商業学校に駐屯していた陸軍船舶砲兵団衛生教育隊(隊長・指田吾一軍医大尉)約一五〇人は、校庭で朝礼を終った直後に被爆し、倒壊校舎の下敷きになった者、爆風で強く吹き飛ばされた者などで負傷者が多数だが、動ける者一五、六人が集り、煙っている火を消すと共に、比治山東南側の防空壕の前に、天幕二つを組立て、赤十字の旗を立てて応急救護所(第六一八〇部隊指田衛生隊)を開設し、次々と集って来る負傷者の治療(チンク油塗布)にあたった。指田隊長の手記(原爆の記録)には、「半数ほどの患者は、薄れた記憶をたどっているのであろうか、どこかへ去って行く。残りの患者は、くずれ落ちるように倒れ込んでしまう。

時間がたつにしたがって、重症者がふえてきた。昼ごろになると、症状はだんだん醜くなってきた。悲鳴にも似たうなり声は、恐怖と憎悪に変わり、やがて無気味な沈黙に変わってきた。」とある。夕方までに患者約三〇〇人を宇品線の貨車で被害の少ない宇品へ送った。「...これで生きている負傷者はいちおう始末がつく。あとは死んだ人だ。特に名札をつけている人はいい。骨壺に名前を書き込むことができる。だが受取人のわからない、無名無縁の死体が無数に多い。

猿猴川の堤に運ぶか、その場で火葬にするか...。火葬に付すのが親切だが、全部というには手が回りかねる。溝を掘って材木を渡し、その上に遺体を乗せる。積み重ねて火葬にする。分担で、火葬にした遺骨に、それぞれ名札をつける。火葬するにも、石油もガソリンもないので、時間が随分かかる。

到底、少人数では始末におえぬ。わずかでも骨が見えたら、それをとって遺骨にする。

診療・後送・死体集積...だが《死体》、《死体》、《死体》、どこまでも、どこまでも死体の山である(同手記)。という状況であった。

また、指田衛生隊長らは、救援依頼の連絡を受けて、段原山崎町の第一国民学校に行った。ここは、女子商業学校よりもさらにひどい惨状であった。医師も、看護兵も、看護婦もいないのに、折り重なるように、ところせましと、負傷者が倒れ伏していた。

チンク油処置以外には方法がなかった。五本ばかり用意してきた繻帯も、たちまち使い果たし、負傷者自身の持っているタオルや手ぬぐいでしばった。

さらに、東雲町の比治山国民学校にも救護所が設けられた。ここもまた、前記救護所と同じ状況で、負傷者が溢れた。

これら学校の救護所は、負傷者がなだれこんだため、応急的に救護所となったのであった。当初は治療設備なく、その惨状は言語に絶した。

道路の清掃

道路清掃作業については、道路上に若干の飛散物があったが、警防団員によって片づけられ、八月十日ごろには、交通の支障を生じないまでに整理された。

死体収容と火葬

死亡者は六日昼ごろから翌朝にかけて続出したが、これら死体の収容と火葬・仮埋葬は、八月七日から収容が始められ、九月十日ごろまでに終了した。

救護所でもあった第一国民学校が死体収容場となり、警防団と遺家族とが処理に当たった。火葬は、校庭で行なったほか、東大橋下手の猿猴川堤防でも行なわれたが、これらの死体のほとんどが、区内内居住者であったため、人名確認は比較的容易であった。

他に、現在の広島大学東雲分校そばの川土手でも、連日多数の死体を火葬したが、一番多く取扱ったのは、第一国民学校の死体収容所であった。それに加えて、比治山山上でも、暁部隊の兵士たちによって、死体の焼却処理が行なわれた。

仮埋葬が行なわれたのは、火葬開始時期と同一で、終戦直後まで行なわれていた。場所は東雲町で、現在の市役所出張所のある処から下流土手下(東大橋の下流約一〇〇メートルのところ)であったが、埋葬場所を示す標識柱は別に建てなかった。

遺骨の安置と慰霊

比治山地区警防団詰所(現市役所出張所の位置)に身元不明者の遺骨が、昭和二十七、八年ごろまで安置され、最後にこれを市役所内の安置所へ移した。

町内会の機能

各町内会とも、役員や幹部が死亡したり、重傷を受けたため、活動は一時困難となった。

段原東浦町下組など会長が死亡したため、隣接町内会長が食糧配給などに当たった。

連合町内会の指令による配給は、七日から実施されたが、物資も末端までは行き渡らないのみか、かなり私腹を肥した人もあった。しかし逐次避難者も復帰するようになり、人が多く監視するようになってからは、次第に物資も公正に配給されるようになった。

九、被爆後の生活状況

八月八、九日ごろから、他へ避難していた人々がぼつぼつ復帰して来て、破損家屋の応急修理に当たった。また焼失地域からの避難者の来泊などで、終戦時ごろには、一軒に平均二世帯が住むという状態となった。

生活物資

八月七日夕方から九日まで握り飯の配給があり、十日からは一人一合程度の玄米が、町内会単位で配給された。

各世帯とも乏しい配給と、手持ち食糧で暮していたが、終戦後は、急に郡部の知人・縁故者などからの食糧入手が激しくなった。いわゆるタケノコ生活が始って、ほとんどの者が、日々窮乏の一途をたどっていった。

人口急増

被爆から終戦までの間、地区北部の人家密集地帯は、第二の空襲を恐れて人口は常時の半数以下となっていたが、他の地域は、避難者の流入などで逆に激増していた。

終戦時における各町人口は、次のとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数	町名	世帯数
段原東浦町下組	70	段原中町中組	220	段原中町下組	195

段原新町下組	160	南段原町一丁目	110	東雲町南組	280
段原日出町	290	南段原二丁目	170		
段原山崎町	220	東雲町上組	300		

八工の多数発生

八月中旬ごろから八工の発生おびただしく、駆除の薬品など思いもよらず、全く手もつけられないという非衛生的な状況であった。ノミやシラミの発生も激しく、夜も眠れないほどであった。

九月上旬になって、米軍が空からDDT薬剤散布を行なったが、生活環境の非衛生ぶりは翌年に持ち越した。昭和二十一年四月になって、町衛生組合が発足し、それから次第に改善されていった。

ロウソク生活

ロウソクの配給があったのは、被爆後数日過ぎてからである。それまでは名称もはっきりしない油を、ビンやカンに入れ、紐を浸してそれに火をつけ、明かりをとる生活であったから、夜はなるべく早く眠るようにして不便を凌いだ。

なお、東雲町のブドウ畑に避難したある被爆者の一人は、夜は市中心部の火災の反映で、被爆後三日間ぐらいは電灯をつけたよりも明るかったと語っている。

宇品線北側地区では、八月末ごろ電灯がついたが、罹災者が切断された複電線をつないで点灯した応急的なものであった。

疎開世帯・疎開児童の復帰

破損したわが家の応急修理を、自力のできる人々が、八月中旬からぼつぼつ復帰しはじめたが、多くは、転入抑制措置解除後に復帰したのであった。被爆以来、無人の家屋が多かったのにつけこみ、夜々、屋内の物資をぬすみまわり、川づたいに船で持ち去った者がいたという。

なお、比治山国民学校の疎開児童約二〇〇人が、復帰して来たのは、八月二十三、四日の両日であった。また、別に一般疎開者と一緒に帰って来た児童もかなりいた。

このようにして、地区内が従前の状態に戻ったのは十一月ごろである。

闇市場の利用

闇市場の利用も盛んであったが、軍関係の業務に従事していた者は、多数の軍需品を持ち帰り、物物交換で一般より楽な生活をしたと言われる。その反面、給料生活者は、交換する物資もなく、闇市の豊富な品物、高価な品物を手に入れることもできず、わずかな手持ち物資を手放した後の生活の悲惨さは言語に絶し、一家餓死の一步手前という月日であった。

狡猾な者は、放出された軍需物資を闇ルートで大量に入手し、これを闇市の露店で高価に売り捌くなど、軍服姿のにわか商人が大言壮語して横行する有様で、一般の者は、仕事らしい仕事もないまま、わずかな食糧の買出しなどに追われるだけであった。

昭和二十一年三月の新円切替のあとの頃から、被爆者らはどうやら仕事に就きはじめていたのである。

十、終戦後の荒廃と復興

台風襲来

この地区は、九月十七日の暴風雨で全面的に床下浸水し、宇品線北側では一七、八戸が倒壊した。応急修理の家屋ばかりであったから、貴重な物資を水浸しにした者が多く、惨たんたる有様であった。

ある所では、暴風雨により倒壊する家屋から、多数のネズミが飛び出して行くのが目撃された。倒壊する家の状態は、あたかもグラッと坐りこむような具合であった。

悪徳

比治山地区の家屋は、従前からその八〇%までは貸家であった。家主たちの中には被爆に続く風水害で、一層損傷した家屋を全壊家屋に認定して保険金を取得、二〇〇円の新円紙幣を見せびらかしたりして、羨望と侮蔑の入りまじった複雑な反発をかった者もいたという。また、大半破損した家屋を借家人に売りつけ、更に年の暮ごろには、その地代を以前より高く取立てた。この悪習が、その後ずっと残って借地借家人は生活をおびやかされ続けたという所もあった。

経済活動の伸展

この地区は、焼失を免れたので、被爆前からあった商店は、八月半ばから逐次開店していた。業種としては食糧

品関係の店が早く、古着などの衣料品関係がこれについて、営業収入をいちじるしくあげていた。

地区内の商店は住宅の間に散在していたが、段原東浦町の郵便局前通りがもっとも繁昌していたようである。比治山西側辺りの焼けた商店が、この通りに入りこみ、従来のペンガラ格子作りの家もつぎつぎと商店に建てかえられ、懐しい風土色がまたたくまに失われていった。

住居の修復状況

地域的に見て段原山崎町や東雲町方面の家屋が比較的早目に修復しており、宇品線北側の住家密集地帯は、昭和二十四、五年ごろになっても修復率は二〇%程度しかなかった。

建築資材の極度の入手難で、一般の家では容易に修理も行なうことができず、被爆当時の損傷を残したまま相当な期間、生活しなければならなかった。

十一、その他

この地区は既述のとおり、被爆によりかなりの破壊を受けたけれども、焼失を免れたという根本的な特質があり、被爆前の町並みがそのまま地区内全域に残った。

北部寄りに商工業的地域を若干存する以外は、今日においても南東部にかけての農業地域をのぞいて、他は住宅地域である。

戦災後の都市計画区画整理も施行区域外となって現在にいたっているので、昔どおりの細い道路が入りこみ、災害時が憂慮されている。しかし、広島市の近代化とともに、美しい住宅地として、ころもがえする日も遠いことではあるまい。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

比治山本町、皆実町一丁目 二丁目 三丁目、翠町

町内会別要目

この地区の範囲は、比治山本町[ひじやまほんまち]・皆実町[みなみまち]一丁目・同町二丁目東組・同町二丁目西組・同町三丁目東部・同町三丁目西部・翠町[みどりまち]の各町内会とし、爆心地からの至近距離は比治山本町の鶴見橋東詰で約一・六キロメートル、もっとも遠い地点は、翠町の丹那橋西詰で約三・六キロメートルである。

皆実地区は、往古、海中の島であった比治山を中心として、藩政時代、その南西麓に広大な皆実新開が開かれたのが街衢形成の初源である。そのころすでに亀島新開[かめじましんがい](比治山本町)・大黒新開[だいこくしんがい](皆実町)の一部ができていたが、さらに進んで東では仁保島が陸続きとなり、南地先では、宇品となり、太田川デルタの発達と干拓の進行に伴う市域拡大の典型的な現象として歴史的にも意義が深い一つの地域である。

戦前は、勤め人の多い閑静な住宅地で、ところどころにハス田・稲田・野菜畑が展開しているという環境のあかるい地域であった。

当時の地区内の建物総数は約二、八三二戸、人口は約一一、四二四人であった。

この地区では被爆によって、皆実町三丁目西部電車道路から西側京橋川の間、および広島専売局からガス会社までの約一〇〇戸が焼失した。また、比治山本町、皆実町一丁目が大破全焼した。そのほかには部分的な火災はあったが、だいたい全壊・大破または半壊・中破の被害であった。

なお、当時の各町内会別の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
比治山本町	340	380	640	坂本政之助
皆実町一丁目	312	312	924	福原一
皆実町二丁目東組	373	370	1,700	西谷徳右衛門
皆実町二丁目西組	383	383	1,700	吉永三代吉
皆実町三丁目東部	469	562	2,650	畑石兼吉
皆実町三丁目西部	425	447	1,310	豊島豊
翠町	530	510	2,500	中村勝一
註・国民義勇隊皆実大隊長は畑石兼吉				

地区に所在した主要建物および事業所は、次表のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広島地方専売局	皆実町二丁目	広島ガス株式会社本社	皆実町一丁目
皆実国民学校	皆実町二丁目	県立第一中学校寄宿舎	翠町
広島高等学校	皆実町三丁目	県立広島商業学校	翠町
第三国民学校	翠町	広島県師範学校予科寄宿舎	翠町
市立皆実保育所	皆実町	山陽文徳殿	比治山本町

二、疎開状況

人員疎開

市内各地区とおなじように、人員疎開をおこなった。老人・子供を優先し、郊外の縁故者をたよって疎開を進めた。

戦況が緊迫するに従って、疎開者は町内会に籍を残したままで、疎開地と往復の生活をする者も多かった。

物資疎開

家財道具・衣類とかの疎開は、地区内住民の九〇パーセントが行なった。最初はオート三輪で運搬していたが、ガソリンなどの不足で、馬車がこれにかわり、終りには馬車も引っぱりだことなって、自分が大八車やリヤカーで運搬しなければならなくなった。

運搬道具不足で、ついに自家の防空壕の中に入れておく者もあったが、次第に食糧難に陥り、近郊農家へ買出しに行くようになったが、そのついでに僅かずつでも手に持てるだけ持って疎開した者も多かった。

学童疎開

学童は、縁故疎開をした者もたくさんあったが、それができない学童は安佐郡伴村および戸山村、それに高田郡丹比村のそれぞれの寺院に、集団疎開した。

こうして原子爆弾の被爆時には、地区の住民のうち、三分の一程度が市外へ疎開していた。

三、防衛態勢

防衛隊

他地区と同じく防衛隊を組織し、各町内会ごとにバケツ操法・竹槍などの訓練をおこなった。

貯水槽を町内会と各家庭に備え、防火用具なども取り揃えた。防空壕も町内会用と各家庭用とにそれぞれ設けた。一般家庭では床下や縁の下に僅か三、四〇センチメートルぐらいの深さに掘った簡易なものが多かった。その理由は皆実地区は地下水線が浅く、三〇センチメートルぐらい掘ると水が湧くため、防空壕も深くは掘りさげることができなかった。

なお、翠町は空地が多かったので二、三戸ずつ共用の防空壕を作っていた。防火用水槽は各所にたくさん設けられていた。

警防団・消防団の指導のもと、学校の校庭や道路の広い所で、焼夷弾が落下した場合の訓練を、発煙筒をたいておこなった。この演習訓練には、各戸から一人ずつ、国民服に巻脚絆、あるいはモンペでかならず参加しなければならなかった。

ことに皆実町一丁目には、広島ガス株式会社があり、ガスタンクもあったので、防衛隊本部では、格別に警戒し、万一の場合に備え、同社従業員の防火隊を組織して、訓練を繰り返して行っていた。

四、避難経路及び避難先

この地区の避難先としては、皆実国民学校が指定されていた。皆実国民学校が爆撃を受けたときは丹那方面、または仁保黄金山に避難することにしていた。翠町の住民は、黄金山の火葬場麓が定められていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
船舶通信聯隊及び補充隊(陸軍第一・第二電信隊)	皆実町一丁目
陸軍安芸部隊(通信連絡班 約二〇人)	皆実町三丁目 広島高等学校(本隊高知県)
暁部隊(通信隊約七〇人) 及び幹部候補生隊(兵種不明約三〇人)	皆実町二丁目皆実国民学校
暁部隊(兵種不明)	翠町第三国民学校

六、五日夜から炸裂まで

五日夜は市内各地区と同様な状況ですごし、六日午前七時の警報解除後も特別に変ったことはなかった。

六日朝、各町内会から約二七人ずつ計約二〇〇人の国民義勇隊員が、雑魚場・国泰寺町方面の建物疎開作業に動員されて出ているが、原子爆弾の炸裂に遭遇し、即死か、助かっても重傷で帰って来て、まもなく全員死亡した。

なお、地区内の建物疎開計画については、皆実町二丁目ガス会社横を実施するような計画があったが、被爆時には、まだ実施していなかった。また翠町では、八月三日朝、取りこわし予定家屋に、一週間以内に立退くよう貼札がしてあったが、実施されたかどうかははっきりしない。

七、被爆の惨状

大方の人は炸裂の音を聞かなかった模様で、気づいたときはメチャクチャに家屋が壊れていたし、屋外に出て見ると、広島高等学校校舎(一部)がペチャンコになって、倒れていたという。

しばらくして、助けを求める声がきこえるので、つぎつぎに倒壊家屋の下敷きになっている人を助け出した。全身負傷の人たちを、皆実国民学校まで連れて行ったりしているうちに、周囲がにわかに騒然となった。そこではじめて被害の甚大さに驚いた。町内を走り回って専売局の処へ出た時、御幸橋方面は真暗で、被災者たちが殺到しはじめていた。皆実町三丁目の光徳寺(説教場)が、当時皆実国民学校の分教場にあてられ、当日も学童が二、三〇人ぐらい、出席していたが、寺院が倒壊し、下敷きになった学童がわめいているの

で、ただちに救助にかかった。どうした作用か、幸いにも学童は畳と畳の間にいるのを次々と引っ張り出し全員救助できた。

比治山本町・皆実町一丁目と、西部電車通り西側を除いて他の各町は火災の発生がごく少なく、倒壊家屋の下敷きになっていても、ほとんど救助できて、犠牲者をあまり出さなかった。

翠町でも、屋根瓦は飛び散り、ガラスはみな破壊され、壁は落ち、家がまるでギース(バツタ)籠のようになってしまったのが多い。塀の煉瓦がはがれて住宅の二階に飛び込んで来た所もあった。周囲に真暗な闇が立ちこめたが、

地上約一メートルぐらいの高さまでは見通すことができた。

町民は被害状況に愕然とし、不安にかられ、全家族が家財道具などそのままにして、一人も残らず、東南東にあたる丹那・楠那・黄金山方面へ避難した。その夜も家に帰る者は僅かで、山の中で一夜を明かした者が多かった。おそらく、その夜自家にとどまった者は一か町で四、五人ぐらいと思われる。

炸裂時の瞬間的被害は、次のとおりである。

瞬間的被害

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
比治山本町	90	5	5		8	78	14
皆実町一丁目	50	50			5	56	39
皆実町二丁目	40	60			3	52	45
皆実町三丁目	26	52	22		3	44	53
翠町	10		90		3	42	55

火災発生状況

地区内の火災発生炎上の状況は、次のとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
皆実町二丁目	専売局	午前十一時半頃	煙草の葉を包装したワラに火がついて燃えひろがった。これが比治山本町へかけて燃えつづけた。消火にあたる。	二～三日間延焼
	中野工業付近	午前八時十五分		
比治山本町		不明	電車線路の西側のみが、専売局方面から北上して延焼した。	不明

右以外の町内でも飛び火的に発火したが、直ちに消火することができて大事に至らなかった。

炸裂後、この地区には降雨はなかった。

その夜

当日夜、避難した黄金山から、地区内を見わたすと翠町方面はまっ暗で、皆実町二丁目・三丁目では、夜になっても炎上しているほか、他地区の火災が反映して、焼け残った家並みも、さながら火災のようにまっ赤に見えた。まったく人気のない死の町で、ただ破壊された家屋が並んでいるだけであった。

ガスタンク

原子爆弾炸裂にともなう放射熱線により、ガス会社の円筒型のガスタンクに取付けてある鉄梯子の影が、くっきりと明瞭に黒く印されているのが、後日、発見された(第一巻写真参照)。

炸裂の閃光・轟音を、このガスタンクの爆発かと思った市民が多かった。しかし、ガスタンクには、ガスが充滿していたが、被爆と同時に、タンクの天井がメチャクチャに破壊されて、ガスは空中に放散燃焼しただけのことであった(久永三郎談)。

また、専売局付近の電柱が、頂部から燃えながら下方へと火災がさがってゆくのが気味悪く目撃された。すずかけの街路樹(西側の列)の幹の、爆心地に面した側だけが焦げていた。

翠町では、爆心地点から三キロメートルもはなれているにもかかわらず、熱線により火傷した者が多かった。

放射状熱線・爆風

熱線について、皆実地区内であった事象であるが、熱線は太陽光線のように全般におよぶものではなく、光線がものの隙間から射し込むような状態であって屋外にいる者が全部、一様に火傷するのではなく、放射線が通ったと思われるところにいた人が火傷し、それから外れているところの人は火傷しなかった。爆風も全般に均等にはおよばず、幾本かの風筋をなして通過したようである。室内に敷いてある畳でも、吹きあげられて立ちあがったところもあり、そこと離れていない家の畳でも、そのまま異状がなかった事例がある。

八、被爆後の混乱と応急処置

遠くへ避難

被爆直後、町民は遠くへ避難したままで、町内に人がいないため、何もできなかった。二、三日後に、西条からにぎり飯を運んで来たが、配給する人がいなくて余らせたほどであった。

医療班来援

また、皆実町三丁目の「タカの記念碑広場」に、某大学医療班が来て、被爆者の治療をおこなった。

死体の収容と火葬・埋葬

出汐町の被服支廠と霞町の兵器支廠には、一階二階ともに負傷者がいっばいに収容せられ、つぎつぎと死亡した

が、氏名の判名したのは荷札をつけておいて、付近の広場で火葬にした。翠町にあった陸軍のバラック建ても負傷者でいっぱいになった。

地区内の空地には、重傷者が並べられ、死亡した者は、みなその付近で火葬した。なお、専売局構内でも死亡した者は、暁部隊が来て焼いた。

このように死体収容場所は、別に定められてなかったから死体はそれぞれの場所で茶毘にふした。陸軍共済病院前(現在の県立病院)の桜土手でも、多数の人を火葬した。火葬は、油をかけて焼くようにしたが、燃料不足で思うように焼けず、半焼けのものもあった。仮埋葬はおこなわなかった。

町内会の機能

町内会の機能は辛うじて保たれていたから、各町内会長宅に事務所を置き、ただちに罹災証明書・食糧配給の転出証明書などの事務をおこなった。そのうえ、尋ね人の応待も引きもきらずあって、町内会長は自分のことは何もできないのみか、一睡もできないこともあった。

ともかく、全焼地帯でなかったから、町内の対策処置がどうかこうにかはかどっていった。

九、被爆後の生活状況

ロウソク生活

被爆後、夜間は暗く、どこからか手に入れたカーバイト・ロウソク・灯油などでしばらくの間辛抱していた。

皆実町では八月十日過ぎ頃から、個人個人が勝手に裸電線を引込んで電灯をつけはじめた。翠町あたりでは、早くから電灯がついていたようだが、たびたび停電した。

住民の復帰

住民の復帰は、終戦の詔勅放送があったとき若干あった。しかし八月末ごろまでは、まだ各町ともほとんど住人はいなかった。家が倒壊しなかった家族は、避難したままであったが、むしろ家の焼けたところの人が帰って来ていた。

九月十七日の大豪雨後、十月ごろからぼつぼつ避難していた町民が帰りはじめて、本格的に復帰したのは翌年になってからで、だいたい七〇パーセントぐらい帰って来た。

なお、疎開児童は九月になってから帰って来た。

ハエの発生

ハエが多数発生した。その原因は、被爆者の死体からだと思われるが、雨が降るたびに多くなっていったようである。米軍飛行機が薬剤を散布してから減少したが、そのため、野菜類、ことにカボチャとかナスなどは稔らなくなった。

困窮生活

生活物資については、配給物を大ざっぱに分配することから始めたが、配給食糧だけでは栄養不足になるので、どうしても補充分を闇買いしなければならなかった。イモ類や代用のダンゴなど、食べられるものは何でも買い求めた。交通杜絶で郊外に買出しに行くのも、徒歩で往復し、あえぐような生活であった。

被爆後の市内は荒野のようになっていたので、皆実地区から、はるか遠くの相生橋(西北三キロメートルぐらい)や、横川橋のアーチ(三・八キロメートルぐらい)なども、間近に見えるほど見とおしができて、距離感覚にもしばしば錯覚を起した。

闇市の利用

地区内には、闇市場的なものは一切なかったので、広島駅前方面の闇市を利用する者が多かった。近郊農家へ、みな徒歩でリュックサックを背負い、物資買入れに出向いたが、焼野原の見通したので、案外近かったように感じたものである。何分にもひどい荒廃なので、町内会が新しいトタンの一枚、釘の少々でも配給しようと努力を試みたが、到底出来なかった。

十、終戦後の荒廃と復興

経済活動

九月十七日の暴風雨と、十月八日の洪水によって、この地区も壊滅的な打撃を受け、翌二十一年になってから、やっと本格的な経済活動が始まった。

主として、食糧品・衣料・雑貨の類が中心で、皆実町の映画館南座・広陵中学校前商店街・被服廠通りなどに店がならびはじめた。これが今では立派な商店街として、成長しているわけである。

このほか、広島駅前・宇品・己斐などの闇市場が拠点となって発達していたので、皆実地区でも、道路計画を構想し、その実現に努力したが、計画倒れとなって実現しなかった。

各町とも復旧資材が入手困難で、家屋の補修もできないありさまであった。後に県知事命令で、倒壊家屋とか、大破していて補修不可能な家屋を処分した時、それらの古材の自由利用が許されたので、これらで修理したものが多かった。

この地区は、前述のとおり一部の地区が全焼しただけで、他はほとんど焼失していなかったため、比較的復旧が早かった。

人口急増

それと空地が多かったため、他地区から新しく人々が入って来て、盛んに家を建てたので急激に人口が増大した。これにより、下水道・上水道の整備が間に合わず、多くの混乱を招いた。

なお、他の地区にくらべて、社会環境が、正常状態に早く回復して秩序を保ったことは特記されることであった。

皆実町三丁目の自宅にて

新田美登里(被爆地・皆実町三丁目自宅内)

当時私たちは皆実町三丁目の電車通りに於いて歯科医院を開業していた。一人娘の恵美が市立高等女子学校の二年生。息子の栄は附属国民学校の五年生で、これは比婆郡の西城町のお寺に学童疎開をしていた。

朝食が済むと娘の恵美は材木町方面に疎開作業のあとかたづけのため動員学徒として元気よく友人と連れ立って家を出た。家のかたづけをすませて二階のベランダの手すりにふとんを干し終ってから、無沙汰勝ちになっている親類に手紙を書いて、近況を知らせようと思い階下の食堂でペンを走らせていた。そこへ飛行機の爆音が聞えてきたが、警戒警報のサイレンもならないので、味方の飛行機だろうと思っていた。少し時間が過ぎた頃、突然、西の空のあたりに、見たこともない形をした雲が現れたので、何か知らんと思って、立ち上がった瞬間、轟音と共に家がグラグラと揺れてきた。私は反射的に両手で顔を押しさえて家の中心部にあたる廊下の上に身体をふせた。震動がやんだので顔を上げてみると、私の頭部の方から血がタラタラと流れるように出ていた。そばにいた主人も胸部や手や足から血が出ている。誰れかに助けを求めようと思って立ち上がると家の窓という窓も硝子の戸も全部メチャメチャに破れ飛んでいた。救急袋の中からガーゼと繃帯を取り出して、傷のところをおさえて家の外へ飛び出た。あたりを見廻すと、どの家もどの家もみんな半壊の状態である。私の家だけかと思っていた私は、何が何だか分らず、ただ急いで救護所を探して、傷の手当てをして貰おうと電車通りまで行くとそこに一台の貨物自動車止っていて、その中に私の家の二階のベランダに干しておいたふとんが敷いてあり、近所の人達が血だらけになって、何人もころがっているのではないかと。私たち夫婦もその中に入れてもらって、近くの陸軍病院まで連れて行ってもらった。その時、ふと見返ると、私の家の庭の棕櫚の木からチロリチロリと火が燃えていたので、大声で「誰れか火を消して下さい。」と頼むと、知らない男の人が「よし火は消すから心配すな。」と言って、バケツに水を入れて二階の窓から火を消してくれた。

陸軍病院に行ってみたら、広い病院の空地には、傷ついた人々が山のように集っていて、とても手当てなど受けられそうにもなかった。博愛病院に行ってみようと思って引返して行く途中、目のとどく限りの街並は、みんな半壊の家ばかりで、その中を傷ついた人々が「政府は何をしているのか。」という怒号を飛ばしながら歩いている人がいた。どこの救護所も、とても寄りつけそうもなかった。家に帰って傷の手当てをして、ガラスの破片が一っばい散らばっている部屋の一隅に、ふとんを敷き体を横たえ、安静にしていた。少し心の落ち着きをとりもどしてきた時、勤労奉仕で出かけた子供がどうしていることか気にかかって、たまらなくなってきた。そうした折に知らない人たちが水道の水を使わせてくれと言って、風呂場にはいって身体を洗っていた。ひどくよごれた姿をしているので「何処から来られましたか。」と尋ねてみたら「千田町から来た。」と言う。「千田町の方へも爆弾が落ちたのですか。」と尋ねたところ「御幸橋から向う側は大変です。建物は全部こわれて全市が火にやかれて居りますので、私たちはこちらの方面にのがれて来ているんです。」と言って水に喉をうるおして出て行った。急に不安になって、家の外に出て見ると、着ている着物はボロボロに千切れて皮膚も頭髪もチリチリに焼けた人たちが、うつろな目をして焼けていない町の方へと多勢歩いて行っていた。パンツもズロースも焼けてなくなった男や女がノロノロと歩いている。そのうちだんだんと時がたって夕暮れ近くなってきたが、娘の子が帰って来ないので、近所に居られた学校の先生の家に消息を聞きに出かけた。途中で誰れかが「あれは特殊兵器でとても恐ろしいものらしい。」と言って話

しているのを聞いたが、その時はこんなに恐ろしい原子爆弾などとは、まったく思いもかけないことであった。

夜になったが娘は帰って来ない。御幸橋より向う側は夜になっても火が燃えつづけているので、いつ自分達の方へ延焼するかという恐怖のため、その夜は眠らないで過ごした。人間の焼ける臭いがなま温かい風に送られて来て、生きた心地もなかった。不安の一夜が明けた。どこかへ避難しているのであろうと思っていた子供が、翌日になっても帰って来ないので、町のゆききの人々に「市女の生徒を見かけませんでしたか。」と問うて歩いたが、だれも知らないという返事だった。交通機関も電信も電灯も全く絶えてしまった中にいて、人々はどこからともなく流れてくる話によって、想像したり判断するよりほかなかった。

八日の朝、子供が疎開作業の跡片づけをしていたという材木町の誓願寺の辺に、子供のなきがらを探しに主人が出かけた。沢山の死骸が、まるで畜生の死骸のように、地の上にいるいと並んでいたそうである。原爆ドームの広場には赤ん坊が数百人も並んで死んでいた。親は川に飛び込んでのがれるつもりだったのか、川の中にも無数の人が死んでいた。翌日の九日ごろには、軍隊の人や地方からの勤労奉仕の方々の手によって、死んだ人達のかたづけが始った。川の中に浮いている死骸はトビロを打ち込んで引寄せ、トラックに山のように積み込み、空地に集めて焼かれた。そのするどい異臭が八月のぬくい風に混じって長く続いた。

その頃から遠い地方の親類や知人達が安否をきづかって尋ねてきてくれ始めた。一人娘の恵美は全く消息がわからず、手分けして方々の収容場所を探しつづけたが、遂にわからなかった。町のところどころに負傷者の収容場所や姓名などが掲示され始めた。その中に娘の名を見つけて大よろこびした。坂の鯛尾に収容してあると書いてあった。宇品の船着場まで歩いて行くのに、まるで夢中であった。全身火傷なのだろうか、それとも行きつくまでに生命がなくなりはいないかなどと思い続けて、舟の速度が堪らなく遅い気がした。島に上がって行くと、患者は治療するでもなく、無数の雑居寝の有様だった。私の尋ねあてた娘は何と同姓同名の見知らぬ娘さんであった。急にはりつめていた心がゆるんで、クタクタとそこに坐りこんだ。そして全身火傷にあえいでいるその娘さんに「両親の方が尋ねて来られましたか。」と聞いてみると、かすかな声で「誰れも来ません。」「みんなどうなっているのかわからないのです。」と言っただけであった。

私は持って行ったミカンのかん詰を与えて「そのうち誰れか探して来られましょうから、それまでがんばっていらっしゃいね。」と涙ながらに別れを告げて帰った。

市立高女の生徒は一人も生存者がいないという知らせを聞いたのは、原爆の日から六日ぐらいたってからであった。張りつめていたそれまでの感情が、せきを切って流れるように地に伏して号泣した。もう何の欲望もなく痴呆状態の内に、広島市の町を逃がれて郷里に帰ろうと、広島駅まで歩いた。焼け崩れた広島市の中に一つ、福屋百貨店の高層鉄筋の残骸が家の形を残して立っているのが見えるだけの広島であった。広島駅とは名ばかりで建物もなく、切符も買わず汽車も夕方まで待つようやく乗り込むことができた。夜の十時頃尾道駅に下車した。空襲警報発令中の知らない町に来て全く困った。ようやく一軒の旅館に行き、夜の明けまでリュックサックに身を寄せて過ごした。東の空が明るくなりかけたころ、始発の電車に乗って両親の待っている郷里の帰途についた。

八月とはいえ田舎の朝の風は涼しく肌に泌みた。昨日までの惨劇など思いも寄らないような静かな田園風景であった。子供を亡くした親の悲しみが灼けつくような思いで胸に迫って来た。私の生きて来た四十年間のうちでこれ程悲しい思いをした事はなかった。

家に帰りつくと年老いた両親は、私達の生存を喜んで泣いた。田舎の生活は平穩そのものであった。私たちは身体に硝子の破片を受けた多くの傷と、時々おそってくる猛烈な下痢に悩まされたが、それも日毎に軽くなっていった。それから数日たった八月十五日に、玉音放送があり、停戦となった。広島の地には、七十五年間草木も育たないという新聞記事も読んだ。あの地獄絵図さたがらの広島に再び住もうなどとは思っても見なかった。

しかしあれから二十年の歳月が流れた。原爆以来、とかく健康のすぐれなくなった主人は四年後に亡くなった。被爆以来の悲しみは生涯忘れることはできない。

市立皆実保育所被爆記

河元きくの(当時・広島市保母)

警戒警報が解除になって、一度帰宅させていた子どもたちが、保育所(皆実町三丁目)に来はじめて間もなくであった。

警報は解除にたっているのに、B29の爆音がきこえる。思わず空を見あげた一瞬、青白いマグネシウムを焚いた

ような光が、空一面にひろがっていた。

そのとき、そこにいた園児は五人、保母は三人であった。

「オカァチャン！」と、子どもたちが私の体に抱きついて来た。

その瞬間、ものすごい爆発音！崩壊音！

私はしばらく気を失ったらしい。気がついてみると園舎の下敷きになっている。体中、傷だらけになりながら、やっと這い出すことができた。

園舎の屋根は飛び、壁は落ちて周囲には誰の姿も見えない。

「修ちゃん！」「健ちゃん！」

大声で、一人一人の子どもの名前を呼び続けると、崩れ落ちた壁土の下から泣き声が聞えてくる。

やっと這い出してきた他の二人の保母さんと、協力して必死で子どもを救いだした。

掘り出したと言ったほうが適切かもしれない。

一人...二人...三人...四人...、一番小さい隆坊が見あたらない。

「隆坊！隆坊ッ！」と、呼べども呼べども返事がない。

重い壁土は動かない。折りよく通りかかった憲兵さんに頼んで、大きな壁土をかかえ起した。

ああ、その下に、かわいそうにグッタリとなっている隆坊、壁の横板でノドを押しつけられている隆坊！

夢中で抱きあげて、狂気のようになって、病院をさがして歩いた。

血みどろになった人、まっ黒くやけどした人々、みんな慌てふためき、通路はまともに歩けないほど混雑している。

ふだんならすぐ行ける隣の陸軍共済病院(現在県病院)を、やっと探しあてて手当てをしてもらったが、ついに生きかえってはいくれなかった。隆坊の死骸を抱いて、気がついてみたら、裸足のまま歩きまわっていた。

宇品線の電車通りまで来たころ、隆坊のお母さんとバッタリ出会った。大切なお子さんをこんな姿にしてすみませんと、言ったきり二人とも泣きくずれてしまった。

園舎に帰ってみると、子どもを探しに来たお母さん、隣組の人々、通りがかりの人など、一人残らず大けがをした人ばかりである。

薬品や衛生材料のありったけを、ひっぱり出して応急手当てをしてさしあげた。

ガラスの破片で、首から肩にかけて深い傷を受けた子どもの母親が、わが子の名を呼びながら幽霊のような姿で入って来た。

「お宅のお子さんは大丈夫ですよ。」という、そのままそこへペタリと坐ってしまって、「先生、どうにかしてください。」という。首から肩にかけて二〇センチぐらいの大きな傷を、おむつで押えて、子どもを探しに来たのである。

原爆が投下された八時過ぎから十二時過ぎまで、預っている子どもを、母親の手に渡しおわるまで、私たちは職場を離れなかった。

最後の子どもを引渡したあと、重要書類をバケツ二つを合せた中に入れ、防空壕の中に埋めた。

西の方面ほど被害が大きいと、避難する人たちの言葉を聴いて、わが家とは反対の方向である東へ東へと歩いていき、黄金山の山中へ入った。途中から一度引返して、市の中央へ出る比治山橋まで来たが、道路の西側から火が火を呼んで、火炎のトンネルのようにになっている。その火炎の中を、燃えている車をひっぱった馬が眼の前に走って来て、力つきてドサッと倒れた。私は、とても歩ききれないと諦めて、また引っかえし、仁保の遊園地のなかにあった同僚の保母さんの家までたどりついた。

その晩はそのまま泊めてもらい、翌朝、もう一人の保母さんと保育園まで行ってみた。

幸い保育園は火災をまぬがれていた。

こどもたちと一緒に作ったトマト畑から、まだ熟れていない青いのまでもぎ取ってバケツに入れた。そしてやかに水を入れて、わが家の方向である己斐に向った。

御幸橋の上では、ケガをした人がズラリとならんで寝ている。みんなのうめき声が今も耳に残っている。

天満橋まで来ると、堤防にたくさんの負傷者が避難していて、「水をください。」「水、水」、と虫の泣くような声で求める。私たちは、やかんの水を蓋に汲んで、最後の一滴まで給仕した。

「もう水がないのですが、トマトをあげましょうか。」

「ください。」「ください。」

私たちはトマトをくばって歩いた。一人のおばあさんにトマトを渡すと、口に持っていきかけて、ポロッと落してしまった。

「手がダメになってしまいました...」

見ると、ひどい火傷である。トマトをちいさくち切って食べさせてあげると、不自由な両手をあわせて合掌された。

からになったバケツとやかんを提げて、己斐町までたどりついたが、わが家はすっかり焼けて、何一つ残っていなかった。

一夜を防空壕ですごして、故郷の島へ帰るべく、焼跡の道を宇品へ向けて歩いた。途中、昨日の場所でトマトを半分かじったままの死骸があり、私は涙で合掌した。

私自身は、辛うじて大きな負傷はなく、生き残った数少ない保母の一人として、その後ずっと、市の保育行政にたずさわった。昭和三十八年十月三十一日、厚生大臣から表彰状をいただき、身に余る光栄に浴すことができた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

仁保町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、仁保新町一丁目 二丁目、東本浦町、西本浦町、本浦町、仁保沖町、東雲本町三丁目(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、仁保町[にほまち]・同町本浦[ほんうら]・同町湊崎[ふちざき]・同町柞木[ほうそぎ]・東雲町[しのめちょう]の一部とし、爆心地からの至近距離は、霞町と本浦との境界付近で約三・二キロメートル、もっとも遠い地点は、柞木の渡場付近で約五・二キロメートルである。

仁保山(黄金山)は、もと広島湾に浮ぶ一島嶼であったのが、新開の発達によって陸繋し、現在では、東部が猿喉川河口に、南部は広島湾に面した一地区を形成している。

藩政時代の仁保島の漁民の活発な稼働状態については、新修広島市史も特記しているところであるが、この伝統的な活動性は現代まで強く引継がれ、「出かせぎや移民の点で仁保地区の占める比重は重い。明治時代になってからも明治十三年(一八八〇)ごろ、北海道松前地方の漁業(ニシン・イカ・イワシなど)におよそ一六、七隻が出かせぎしているし、仁保村時代村内に含まれていた向洋(むかいなだ)の人々は江戸時代からの伝統に従って対馬に渡る漁夫が多く、明治初年でも、堀越・湊崎の人々をも交えて、二〇〇隻余の、主としてイカ漁の漁船、一、〇〇〇人余の漁師が往来していた。」と言われ、また、ハワイへの移民も第一回官約移民以来の伝統をもっているという特色の上に、今日まで発展を続けて来た。

農業も地区の大きな収入源で、海にのぞむ爽快な田園地帯から、鮮魚とともに多くの野菜を毎朝市民に供給してきた。

戦後は農地の宅地転用が急増し、多分に都市的な住宅地区が急速に開けつつある。

原子爆弾の被害は、周辺部であったから、火災の発生もなく、損害も軽微であった。

被爆直前の建物は約一、〇八四戸・世帯数は約一、一八〇世帯および人口は約四、八二四人で、この各町別の内訳は、つぎのとおりである。ただし、東雲町の一部は、比治山地区に記載する。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
仁保町本浦	416	497	1,972	濃村 謙一
仁保町湊崎	354	352	1,502	板付 信一
仁保町柞木	323	331	1,350	金森 一男

(注)戸数・世帯の概数は、昭和二十一年市調査課資料により、人口数は津付数一資料による。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
仁保国民学校	東雲町下組	遷保姫神社	仁保町本浦
市立第一工業学校	仁保町本浦	胡子神社	仁保町単田
竈神社	仁保町湊崎	西福寺	仁保町湊崎
本隆寺	仁保町本浦	本浦観音堂	仁保町本浦

二、疎開状況

市の中心部から比較的に離れているので、戦時態勢下とはいいいながらも、比較的緊迫感が薄く、人員疎開も物資疎開もともにおこなわれなかった。物資については、逆に市中心部から疎開されてくるぐらいで、一般的にも安全地帯のように思われていた。

学童疎開

したがって建物の強制疎開もなかったが、仁保国民学校児童の疎開だけは実施された。すなわち、佐伯郡玖島村(現在佐伯町)へ二〇人、また同郡上水内村(現在湯来町)へ二二〇人、計三四〇人の集団疎開をおこなった。

三、防衛態勢

広島市警防団仁保分団員を、各町内に配属して防衛態勢をととのえ、他地区と同様な訓練と警備をおこなった。

防空・防火用の施設とか、資材の充実なども、当局の指導どおりに実行して、万全を期した。

また、広島市消防団仁保支部の消防団員三〇人を、三か町へおのおの一〇人ずつ配置し、それぞれ町内の青年団

員・婦人会員を補助員として、警備をかためていた。なお、被爆時の避難先とか避難経路などについては、特別には決めていなかった。

四、所在した陸軍部隊集団

暁部隊通信隊が、仁保町本浦の金井別宅、および本隆寺と、淵崎の西福寺、そして東雲町の仁保国民学校に駐屯していた。

五、五日夜から炸裂まで

五日夜から

五日の夜、警報発令のたびに、めいめい決められた部署についた。

灯火管制を厳重におこない、住民は万一の場合、ただちに避難できるように非常服装をして備えていたが、空襲警報以外には、防空壕へ、待避する者はなかった。

六日の朝、原子爆弾の炸裂直前も、平常どおりで変わったこともなく、人々は生業についていた。

警報解除となって、しばらくして、上空の飛行機からパラシュート三箇が落下しているのを目撃した者がたくさんいた。

疎開作業隊

この朝、動員令による疎開作業のため、各町内会とも、つぎのように指定された現場に、出勤していた。

町内会名	出勤人員概数	出勤先
仁保町本浦	48	南竹屋町、宝町
仁保町淵崎	30	富士見町、宝町
仁保町柞木	45	竹屋町、鶴見町

六、被爆の惨状

避難状況

異常な炸裂の衝撃で、住民は、慌てて自宅の防空壕や、黄金山登山口に設けられた共用防空壕に待避したが、その後何事もなく、平静にかえったようなのでおそろおそろ壕内から皆出て来た。

淵崎・柞木方面は、山の陰になっていて、被害は軽かったが、本浦方面だけは、倒壊家屋はないにしても、各家とも半壊に近い被害をこうむった。

しかし、火災は発生せず、各町内にいた住民には一人もの死傷者が出なかったのは幸いであった。

市中心部への通勤者・通学生、あるいは行商人とか、建物疎開のための出勤者らは、大部分が死亡し、残余の人々も重傷をうけた。

犠牲町民

次の内訳の人的被害は、こうした町外に出ていた人々の犠牲者だけの数である(津村数一資料)。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(人)			
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	行方不明
仁保町本浦			80	20	126	169	1,677	
仁保町淵崎				100	65	150	1,285	2
仁保町柞木				100	45	123	1,182	

被爆者殺到

炸裂後、普通の雨が少し降った。そのうち、ここにも多数の避難者が殺到して来た。

山林地帯へいちじ難をのがれる者や、民家へたどりつく者などで、地区内は急に騒然となり、これらの救護活動で住民は多忙をきわめた。

当日の夜

夜になって、ますます避難者が増加する一方、町内から出ていた肉身の安否不明者も多く、收拾つかないほどの混乱状態に陥った。

七、被爆後の混乱と応急処置

応急救護所

避難者の殺到と、市中に出ていた家族の安否不明など、地区は混沌たる渦中に投げこまれたが、救援隊の派遣は受けなかった。住民の献身的な努力でもって、山林や民家に避難者を収容した。また、仁保国民学校に臨時救護所が開設され、暁部隊の軍医・看護兵などが治療にあたり、町民も連日三〇人ないし五〇人が出て、看護に協力した。

この臨時救護所について、津村数一(仁保町本浦)の資料によれば、被爆当日の午前十時ごろから治療活動が始め

られ、閉鎖になった十月末までのあいだに、収容者は四〇〇人未滿に達したという。市の中心部からたどりついた負傷者のなかには、到着したばかりでパツタリ倒れ、そのまま死んでいく人も多かった。治療中にも次々と死んでゆき、死亡者は推定六〇人以上に及んだ。

死体の処理

こうした死亡者は、氏名の判明のものはその関係者に遺体を引渡したこともあったが、ほとんどは火葬にして、遺骨を家族や縁故者に引渡した。

火葬は、被爆当日からすぐに仁保町東山(現在・本浦火葬場)と、東雲町猿猴川堤防上で実施した。火葬数は確実に三四体で、大部分が堤防上で行なわれた。後日、各宗派僧侶団が堤防一帯で読経供養をおこない、犠牲者の冥福を祈った。

町内会の機能

なお、各町内会の機能は支障なく、重大事態に直面して、大いに活躍したので、民心の動揺もなく、つぎつぎと緊急対策を打ち出し、円滑に進めることができた。

八、被爆後の生活状況

市の中心部は死の町と化し、生きる手だてもない廃墟であったから、周辺部の仁保地区へ、そのまま住みつく避難民や、あたらしく転入して来る者が多かった。被爆の日から八月末日までの一か月たらずのあいだに、一四九世帯も人口が増加した。

ちなみに、八月末ごろの、各町内会別世帯数は、つぎのとおりである。

仁保町本浦 五一二世帯

仁保町淵崎 四二八世帯

仁保町柞木 三七九世帯

ロウソク生活

突発事態で混乱をきわめている上に、電灯がつかなくなったので困難が倍加した。

灯油とか、ロウソクの光にたよって辛うじて、夜々をすごしていた。二週間ぐらいして、やっと電灯がついたときは、みんなよろこんだ。

また、仁保地区は、田園地帯で食糧だけは自給自足できる恵まれた生活を送られたのは力強い限りであった。このときばかりは周辺地区のありがたさが身にしみ、復興への生産活動にいち早く立ちあがることができた。

九、終戦後の荒廃と復興

被爆による被害は、淵崎・柞木両地区にはなく、ただ本浦地区が受けただけであった。そして、本浦の復旧は、他地区と同じように資材も乏しくはかばかしくは進まなかった。建物の被害も、応急的補修でいちじをしのいだ程度であって、復旧資材の入手が困難なため、ながいあいだ苦勞した。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

出汐町一丁目 二丁目 三丁目、旭町一丁目 二丁目 三丁目、霞町一丁目、東霞町、西霞町、山城町、北大河町、南大河町、丹那町、丹那新町、楠那町、本浦町(一部)、日宇那町、黄金山町、西本浦町(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、仁保町[にほまち]・同丹那[たんな]・同楠那[くすな]・同日宇那[ひうな]・同大河[おおこう]・旭町[あさひまち]・出汐町[でしおちょう]・霞町[かすみちょう]とし、爆心地からの至近距離は、出汐町西端の進徳学園寄り約二・四キロメートル、もっとも遠い地点は、仁保町日宇那の東南で約五・二キロメートルである。

市の南東、黄金山の南側のふもと、広島湾に面して西寄りに位置している丹那・楠那・日宇那などには古い漁業集落があり、山の西側の大河、東側の本浦は「すでにデルタの中に閉じ込められてしまったが、ともに船だまりがあって機能を失ってはいない(新修広島市史)。」ところである。早朝、まだうす暗いころから、新鮮な魚貝を市中に売りに出て、露地から露地へ「ナンマンエー」と呼び歩く声は、むかしからのなつかしい風物詩であった。「ナンマンエー」は「生魚よ」の転訛だといわれている。

霞町や出汐町には陸軍広島兵器支廠・陸軍広島被服支廠があったから、戦時中は特に軍人・軍属の出入りが多く、また、市民の勤労奉仕隊も集ったので戦時色はいやが上にも盛りあがり、緊迫した空気が町の隅々にまで漲っていた。

住民は、男女をとわず、これら施設への勤労者が多かった。なお被爆当時の地区内総建物数は約一、八八八戸、世帯数一、九一八世帯、人口七、四六八人で、各町の内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
旭町	324	395	1,254	奥本徳一
霞町	96	116	483	内藤彰
大河南町	378	375	1,650	小泊清一
大河北町	285	285	1,150	浜西健一
出汐町	205	189	688	河口祉三
丹那	245	258	1,092	谷口稔
日宇那(楠那を含む)	285	300	1,151	田野中房夫

地区内の主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
大河国民学校	旭町	有限会社杉原縫製工業	出汐町
楠那国民学校	仁保町楠那	株式会社小川広島工場	出汐町上
陸軍広島兵器支廠	霞町	網本食品工場	旭町
陸軍広島被服支廠	出汐町	清信缶詰工場	霞町

二、疎開状況

人員疎開

昭和十九年十一月の内務省告示による人員疎開はおこなわれなかった。

しかし、建物疎開計画の強制実施によって、出汐町八九戸三九二人・霞町三六戸九〇人・旭町一戸四人・丹那八戸二九人が立退いた。

物資疎開

物資の疎開は、個々に郡部の親類縁故の家に、貴重品などを、万一の場合を考えて疎開したが、大がかりなものではなかった。

ただし、軍関係は高田郡・双三郡その他に、大量の物資を疎開した。

学童疎開

学童疎開は、当局の指示どおり実施した。

大河国民学校では、昭和二十年四月十二日に比婆郡本田村(現在・庄原市)へ、三年生以上の学童一一五人が小田校長ほか訓導五人、寮母三人の引率のもとに第一次疎開を実施。また同年七月十六日に同村へ、学童六〇人が訓導四人、寮母三人の引率のもとに第二次疎開を実施した。

同じく楠那国民学校でも、昭和二十年七月十八日に学童七九人が、校長ほか訓導三人の引率によって、比婆郡帝釈村(現在・東城町)へ第一次疎開を実施、引続き学童二五人が訓導二人と共に同村へ第二次疎開を実施した。

学童を見送る父兄や教職員と、見送られて出ていく子どもたちは、いつ終るかわからない戦争であるだけに悲壮感に打ちひしがれ、痛ましきのおおいかくせぬ惜別風景であった。

三、防衛態勢

防空・防火訓練は、警防団の指導により、確実に実施された。

昭和二十年六月九日、当局のかねてからの指示に従って、各町内会は、それぞれ山麓に、横穴式またはトンネル式防空壕を築造した。また各家庭も自家用の防空壕を掘り、消火用器具の備付けなども、それぞれ実施した。

また、各町内会は、住民を指導して非常用食糧の確保(罐詰・穀類の備蓄)、灯火の用意など万全の対策をたてていた。

救護所

同時に、大河国民学校を救護所に指定し、待避壕を築造し、しばしば避難訓練もおこなった。

国民義勇隊

また、同年五月二十九日の通達により、国民義勇隊を組織し、六日当日は、各町から市中心部各町の建物疎開作業に出動していた。

また、地区内における建物疎開は六日までに一応終わっていたが、壊した家屋の屋根瓦を、各町へ配分して保管することになっていたため、疎開跡片づけに、この日も現場へ出動していた。

四、避難経路及び避難先

災害時における避難対策としては、別に定めていなかったが、一応、大河・楠那両国民学校を避難先としていた。

市の中心部から幾分それている地域であったから、郡部への避難は考えていなかった。

しかし、被爆当日、爆風によって家屋が破壊されたものや、敵機の再襲撃を怖れる者が、郡部の親類知己を頼って百数十人が避難した。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
暁部隊の一部(四〇人位)	仁保町大河説教場
暁部隊兵舎	仁保町町楠那
暁部隊(約五〇〇人)	大河国民学校

六、五日夜から炸裂まで

五日から六日の朝にかけて、空襲警報発令のたびに、各防空壕に数人ないし数十人が一団となり、敏活な行動をとって待避した。

警報解除後は、町全般が平常どおりの状態に復し、会社・工場へ出勤するものや、建物疎開現場へ出動したりなどして、事態の発生は夢想だにしなかった。地区外へ出動した国民義勇隊員の詳細は不明であるが、負傷した者も死亡した者もかなりあった。

建物疎開作業

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先地名	建物疎開計画予定概数	被爆前日までの実施済概数	当日朝実施中の概数	他地区から実施のため集合した人員
霞町	13	水主町	36	36	-	-
旭町	3	不詳	1	1	-	-
大河南町	25	比治山本町川筋				
大河北町	25	比治山本町川筋				
出汐町	3	基町	89	89	-	-
丹那	不明	不明	8	8	-	-
日宇那	20	不明	-	-	-	-

午前八時すぎごろ、建物疎開のため比治山本町に出動していた小泊大河南町内会長が、国籍不明の飛行機が低空で飛んでいるのを望見した。と同時に閃光を感受、爆発音を聴取した。たちまち周囲一面が暗黒となった。数分後、顔面・手足から血が流れ出て、自分が負傷していることに気がついたという。このような負傷者が、地区から数十人出た。

七、被爆の惨状

炸裂直後

炸裂後、しばらくして二、三か所に火災が発生した。

午前八時半ごろ、旭町では、藁屋根の家屋が全焼し、隣家の網本工場倉庫に延焼したけれども、警防団の活動によってただちに消し止められた。大河南町では、閃光と同時に、藁屋根が発火したが、隣組の活動により半焼程度で消した。霞町でも熱線によって草藁屋根が燃えはじめたが、発見と同時に、隣組が協力して消火にあたり、延焼を防いだ。

このほかに発火したところはなく、三戸焼失、三戸ボヤの程度で、大火になるところを食いとめることができた。

しかし、爆風によって、一〇数戸の家屋が倒壊し、倒壊しないまでも、ガラスが破壊されたり、瓦が飛んだりして、大なり小なりの損傷を受けた。

死亡者はなかったが、ガラスの破片による負傷者が相当あった。

被害状況

なお、地区内の炸裂瞬間の被害は次の通りである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			備考
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者	
旭町	1.2	70	28.8	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
霞町	-	70	30	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
仁保町大河(南・北)	1.5	60	38.5	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
出汐町	4	70	26	-	0.2	0.4	99.4	即死者は市中心部に出ている被爆したもの
丹那	-	-	95	5	-	0.1	99.9	
日宇那(楠那を含む)	-	-	95	5	-	0.1	99.9	

避難者の殺到

突然の事態発生で、住民は恐怖にかられ、不安がつよって来て、地区は混乱状態におちいってしまった。他地区のように雨は降らなかったが、まもなく地区外から、あられもない姿の避難者群が流れこんで来た。中心部の状況が知れわたると、住民はわが身の騒ぎどころではなくなった。

押し寄せた避難者は、誰れも彼もみた赤剥げ、黒焦げのばけものであった。

衣服は形なくボロボロに裂け、皮膚ははがれて垂れさがり、男女の別も判然としなかった。

ヨロヨロと喘ぎながら、歩くだけが力いっぱいありさまであった。力つきてその場に倒れる者、「水を…」と求める声も息絶え絶えの者、取りすがるようにして救護所へ案内を請う者など、大河地区の住民は、身辺のことを放り出して、これら避難者の救護に乗り出したのであった。

軍の被服支廠・兵器支廠も自由に、その門扉を開放し、続々と増加する負傷者の収容と治療に応急処置を講じた。また、大河国民学校も救護所として医療活動をおこなったが、治療中に倒れる者が続出した。

六日夜

避難者は、ずっと夜まで続き、夕食をとるひまもない救護作業であった。

市内中央部の、燃えあがっている炎が身の毛もよだつほどの、巨大な魔もののように赤々と映じ、いつ大河方面へ延焼してくるかも知れぬ心配にかられながらも、住民は不眠不休で事態処理にあたった。

兵器支廠にて

溝口悦子(当時一六歳、県立第一高女三年生、学徒動員で兵器廠にて作業中被爆)

千代ちゃん、お便りなつかしく拝見いたしました。本当に嬉しかったわ。

こちらこそすっかりご無沙汰してしまって...毎日元気で...といっても何をするともなくブラブラ日を送って居ります。

八月六日、思い出すさえゾツとしそうです。あの原子爆弾のために多くの人命がうばわれ、また、私たちにとって思い出多い広島市を、一瞬の間に焦土と化してしまったのでしたね。

貴女も弟さんを失われたとのこと、どんなにか淋しくまたくやしい事でしょう。お察しいたしますわ。

あの母校のなつかしい校舎も、もう見ようにも見られなくなったのね。"必勝の決戦""決死の御奉公""撃ちてし止

まん"これらの言葉も空しくなって終わりました。残念で残念でたまりません。

あの日、私たちがいつものようにトラックで兵器廠につき事務室に入り、書類を出して仕事を始めようと腰を下ろしたと思うと、ピカッ！と光ったでしょう。何だろうとびっくりして隣の岩村さんと顔を見合して、"何かね""おかしいね"と言ったかと思うと、今度はドカン、ガラガラ、ゴウツと、建物がグラグラゆれたので思わず床に伏せました。

右側の窓で光ったのだからと思って、破れた硝子がバラバラふってくる中を夢中で左の方へ這って行きました。そうして見習士官の机の下にもぐり込みましたのよ。爆風のために書類やいろいろのものが散るし、ガスの臭いで鼻や喉がツーンとして気分が遠くなりそうでした。このまま死ぬのかと思いました。しばらくして待避の命令で起き上がり、防空頭巾をかぶって外に出ました。そうして前の待避壕の中に飛び込み、そのうち解除が出ましたが、一寸外を見た時思わず倒れそうでした。

向うの方から顔や手足そして服を血で真赤に染めた人が何十人という程走ってこられますの。兵器廠の工員で下敷きになったか、何かによって怪我をした人でしょうけど頭のわれた人や、手のもげた人などが、走る元気もなくなって私達の前にバタバタ倒れるのよ。係の人がきて「怪我のない元気の方は出て手伝え。」とおっしゃるので、私たちは決心して負傷者を担架で運んだり、血をふいてあげたりしました。

それらの人がひとまず済んでホッとしたかと思うと、廠外の負傷者も収容しはじめて、火傷で全身皮がむけて桃色になったのやら、足の皮を三〇センチメートルぐらいひこじった人が、来るわ来るわ続々と行列の様に入ってくるのよ。ゾーッとしたわ。ポカンとして見ていると「オイ、あんたらもこいッ」と直属官に呼ばれて行って見れば、ガーゼに油をつけて、火傷している人に塗ってやれッと言われるのよ。最初は気味が悪くて、その部屋に入るとブーンと変な臭いがするし、顔がふくれて三倍ぐらいになったのやら...本当に泣きたくなりそうだったけれど、患者の大部分が女学校の一、二年生で「お姉ちゃん、すみませんけどつけて下さい。」「お姉さん、わたしにも。」「わたしも。」と寄ってくると可愛想になり、さきほどのいやな気分も何ともなくなって、一生懸命つけてやりました。でもその時の臭いが鼻について、一週間ぐらい御飯がおいしくなかったわ。

その晩は「全作業員は廠内に詰めきり勤務を命ず。」という命令が出て、待避壕の上で一夜を明かしました。七日も朝から患者を、きれいに掃除された倉庫の床に毛布が敷かれて、そこへ移すのに大変でした。一人で歩ける人はよいけれど、かかえたり抱いたりしていく時は困りました。体にさわれば痛がるし、痛みにかまわずかかえればズルッと皮膚がむけるし、そのころすでに二〇人ぐらい死んでいきましたが、その死体も抱いたりしたのよ。千代ちゃんだったらきっと出来ないでしょう。冷めたくて固くなっているんですもの。

七日の夕方、ほんとうは帰れないのを、見習士官殿のお情けでこっそり帰していただきました。八日の朝、トラックに乗り遅れたので、支廠まで三時間半もかかって歩いて行ってみると、もうお食事がすんでいて私達のがないので炊事に頼んで、また炊いてもらうやら大騒動をさせました。- 支廠に戻るとき、谷さんはいらっしやらないし、私と岩村さんの二人が、テクテクと路上にころんでいる死体をまたぎながら歩いていたのよ。-

それから五日ばかり全然家に帰らなかったのよ。岩村さんはお父さんとお母さんが亡くなったのよ。中島さんはね、あの方はちょうど六日にお休みになって、広島の家に行らっしゃったためお母さんと一緒に亡くたられましたのよ。県女に行っておられた妹さんも死なれ、伴へ逃げてこられたお父さんも亡くなられ、そのため病気で寝ておられたおじいさんも気を落として亡くなられました。

あとにはおばあさんと小さい弟さんと妹さんの三人が残られただけです。本当にお気の毒ですね。私と谷さんの家は何事でもありませんでした。

私の家では父も弟も私も広島市に居りながら一人も怪我がなかったのは不思議ですわ。

八月十五日以後は工員の退職金の支払いや、いろいろな片付けで徹夜を二晩も三晩も続けたり、ほんとうに目が回るほど忙しかったわ。

川内村に行って居られた方の事は、少しもわかりません。水野さんはお元気との事です。

私が知っているのは井槌さんが亡くなった事、山下さんのお母さんが死亡されたこと、それに二組(クラス)の中村さん・村尾さん・金行さん達が亡くなられたこと、これ以外のことはよく知りません。また、耳に入ったら知らせますわ。貴女もね。みんなの様子が知りたいのよ。今日はカラリとした秋日和...思い出すわ、恒ちゃんと一緒に貴女の家へ行ったことを。

では今日はこの辺で。乱筆をおゆるしいただきたくお元気でね。

おなつかしき千代ちゃんへ えっちゃん拝

被服支廠にて(抄)

金行満子

(平野町の自宅で被爆し、重傷の身で、出汐町の被服工廠までたどりついたときの状況を、「原爆体験記」所載"思い出のケロイド"に次のように述べている。

少し行くと、もうどうにもならぬ程フラフラになって私は立ち止まった。左手にある道のつき当りに大きな門がみえる。私は是が非でもあそこまで行かねばと思い、足を引きずるようにしてやっと辿りついた。何処かと見きわめる元気もなく、受付で住所氏名をつけ、「重傷」と書いた荷札がつけられるうちに、私は意識を失ってしまった。

まるで一昼夜して私は意識を取り戻した。そして私は目がみえなくなっていた。手をあげようとしたが、右手は重くて自由にならなかった。左手先でソツと顔に触れた。額・頬・口まるで豆腐とコンニャクをつきませたような感じで鼻もないように、ブクブクに膨れ上がっていた。私はフトあの石堀の下の化物のような姿を思い浮かべ戦りつした。

そして耳にポタポタ流れ入る涙もかまわず泣きながら、一心に神仏の御加護を祈った。

咽喉は猛烈に渴く。あちこちから水...水と叫んでいる声が耳に入る。火傷には水は禁物であることを思い浮かべ私は歯をくいしばって我慢するのだった。どうにも耐えられぬ時でも一〇滴とは飲まぬようにした。二、三日して少しあたりが白んで見えた。私は狂喜した。眼球はやられていないのだ。時を経るにつれ、次第に物の影がはっきり映り始めた。私はそこが被服廠であることを知った。そしてある大きい建物の板敷きの上に、大勢の怪我人と同じように、毛布一枚を敷き、その上に横たわっていた。

その日初めて、井に入った水のようなお粥を、女工員の人にスプーンで、開かない口に無理に流しこんでもらった。午後から治療が始った。火傷の顔はどこよりも気になった。ガーゼは毎日のようにとりかえられる。そのたびに薄桃色の肉のようなものや、皮などが相ついでにはがれ、下から少しずつ血が流れるのを見ると、痛いのと、心配で私はオロオロしながら泣いた。数えきれないような怪我人相手なので、一々ていねいな手当てはしてもらえない。腕は同じように腫れ上がり、その上にクリーム色の膿が底からジワジワと毎日浮かび、膿をふくために脱脂綿がスースーとあたるだけなのに、それはまるでメスで切りさかれるような痛みを感じ、私は声をあげた。

背中のはそれにも劣らなかつた。縦横無数である。短いのも、長いのも、浅いのもとりどりである。

ガラスを出す度に、チャリというメスの響き、殊に後頭部の傷はピンセットで破片がつまみ出される度に、息の根も止まる思いがするのだった。(以下略)

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

大河地区は、全焼からまぬがれ、家屋の倒壊も僅少であったから、救護隊の来る必要がなかった。

逆に、各町内会と、暁部隊・兵器支廠・被服支廠関係の軍人・軍属とが協力して、大ぜいの避難者の救護活動を展開した。

地区の国民義勇隊は、被爆後は隊員の集合が悪く、組織的な活動がおこなえず、機能も停止状態となったから、主として、町内会役員と警防団とが中心となって活動したのであった。

応急救護所の活動

大河国民学校・楠那国民学校が、かねてから避難所および救護所として指定されていたため、それを目指して避難者が殺到した。

幸いにして、地区に設営していた暁部隊が、部隊所属の軍医を派遣して来て、応急手当を実施することができた。

これに加えて、負傷した地区担当医師にかわり、佐伯医師が来援し、迅速な治療活動をおこなったが、何百という多数の負傷者であったから、医薬品も乏しいうえ、治療に追われどおして、処置は思うようにはかどらなかった。そして、連日、多数の死亡老が続出した。

八月十二日から、東部救護所として大河・楠那両国民学校が新しく指定され、主に軍関係が治療にあたった。

緊急食糧の配給

緊急食糧の配給は、河口連合町内会長が主体となり、警防団と協力して、緊急食糧の確保をおこない、臨時炊出

し場を設置して、にぎりめしを被爆者へ供給した。

この炊出しにあたっては、各町内会の婦人会に呼びかけて、毎日、隣組単位の交代制で出勤するようにした。

収容者数

救護所は十月五日限りで閉鎖されたが、取扱った収容者数は、記録がないけれども、河口社三・浜根肇二人の資料によれば千数百人に及んだようである。

後日、学校が救護所を解除されたとき、四年生以上の児童が総がかりで、校舎の大消毒、大整理をおこなわねばならなかった。

死体の収容と火葬

大河・楠那両国民学校に収容された避難者は、連日、一〇人ないし、三〇人位ずつ死んでいった。

収容する際、氏名などを聴取していたので、死亡者を火葬後、遺骨の引取人があれば、渡すことができた。しかし、重傷者や身寄りの者がつきそっていない者で、氏名の聴取も確認もすることができなかった死亡者も多くあったから、これらは身元不明のまま処理するほかなかった。

死体は、八月七日から大河・日宇那の火葬場に運んで火葬していたが、日々にその数が多くなり、やむを得ず校庭に穴を掘り、隔日ではあったが、一度に五体から三〇体ぐらいを積み重ねて、コールトールをそそぎ、少量の薪を使って茶毘にふした。

また、中心地で死亡した遺体を、軍隊が大河国民学校へ運んできて火葬したが、累計約五〇〇体にもおよんだという。応急救護所を閉鎖した十月五日からは、火葬の作業もおこなわれなくなった。

合同慰霊祭

なお、大河・楠那両国民学校に安置していて、まだ引き取り人の出て来ない遺骨については、後に合同慰霊祭(日時不明)を執行し、冥福を祈った。標柱などは別に建てなかった。

道路の開発作業

また、地区内の道路は、落下飛散した瓦や壁土で路面がふさがっていたが、各自が自発的に処理して啓開清掃した。

町内会の機能

被害度が比較的に軽かった関係上、各町内会の機能は支障なく運営された。

町内に対する事務的処理は、町内会幹部や、元気な隣組長とか、町有志の奉仕によって円滑におこなうことができた。

救護所用のふとん、身廻品の供出とか、被爆負傷者の看護などはもとより、被爆後における伝染病予防処置のための医師・看護婦の手配など、実に寧日なく地区住民の努力と奉仕がつづけられた。

九、被爆後の生活状況

八月末の居住世帯数

全壊全焼からまぬがれた大河地区は、避難者の殺到で混乱をきわめたとはいうものの、その後はいち早く平静に立ちかえた。

八月末ごろの居住世帯概数は、次のとおりである。

旭町 四四三世帯

霞町 一四一世帯

仁保町大河 七〇〇世帯

仁保町丹那 四〇三世帯

出汐町 二三二世帯

衛生環境

河口連合町内会長は、昭和二十年八月十二日、広島市常会に委員として出席し、災害後における伝染病予防、上水道の修理、便所の設置などにつき指示を受けた。

各町内会は、その指示に基づいて予防処置に努めたが、殺虫剤その他の薬品が欠乏していたので、指示どおりに万全を期することは不可能であった。

幸いにして、大河地区は、ハエ・蚊・ノミ・シラミなどの発生が少なく、環境衛生は災害前とあまり変らなかつたから、伝染病も発生せず、住民は安定した生活をおくることができた。

生活物資

生活物資は、八月十日から食糧営団が普通配給を開始したので、大河地区も配給を受けることができた。また、衣類・副食物なども配給されたし、恩賜財団援護会から罹災者見舞品としてブドウ酒一二六cc、ブドウ五グラムの配給もあった。

砂糖も一人当り四五グラムずつの配給がおこなわれたが、永く砂糖の甘味に飢えていた人々は、ほんの僅かながらも純糖の味に触れて感激した。

復旧活動

九月十五日以降、町内に復旧資材の配給があったので、急いで家屋の修理にとりかかった。

当時としては、統制経済の厳重な体制下にあったから、復旧資材の入手も不充分であったし、また幾ほどかの資材を得たにしても、大工や左官などの技術者が不足で、本式の建築工事などは望むすべもなかった。みな、バラックの仮工事でやっとまにあわせた程度であった。

しかし、軍需生産が、民需に切りかえられてから、経済的な動きもようやく活発となり、戦時損害保険金の支払いなどと相俟って、物資は、いよいよ本格的に生活をうるおわしはじめた。全焼しなかったので、商店はいち早く営業を再開し、主として白米・副食品・調味料・衣類・日用雑貨などが、物々交換や闇取引きによって盛んに流動しはじめて、占領下、なお混迷する世相ながら、生活は徐々に明るさを取りもどして来たのであった。

一方、地区に避難して来た人々の中には、なお防空壕に住んだり、焼トタンのバラックに露命をつないでいる人もあって、被爆の傷痕はここかしこに深くえぐりつけられていた。

県庁来る

なお、昭和二十一年六月二十二日、陸軍兵器支廠に広島県庁が移って来た。

十、その他

皆実町一丁目に駐屯していた暁部隊正門の〇・ハメートル角の石柱が、爆風のため正反対に方向転換して立っていて、見る人々は、爆風の威力に驚いたり、不思議に思ったりした。

一、地区の概要

住居表示実施後の新名

青崎町一丁目 二丁目、東青崎町、堀越町一丁目 二丁目 三丁目、小磯町、月見町、向洋本町、向洋中町、向洋大原町

町内会別要目

この地区の範囲は、向洋大原町[むかいなだおおはらちょう]・向洋中町[むかいなだなかまち]・向洋本町[むかいなだほんまち]・向洋小磯[むかいなだこいそ]・青崎町[あおさきちょう]・東青崎町[ひがしあおさきちょう]・堀越町[ほりこしちょう]とし、爆心地からの至近距離は、東洋工業株式会社内の現在の仁保橋東詰で約五キロメートル、もっとも遠い地点は仁保町字山之神の海岸べりの地点で約五・五キロメートルである。

向洋・堀越・青崎各町とも、もともと農家が多く田園地帯であったが、日本製鋼所・東洋工業株式会社などの工業の発展にともない、会社社宅が建ちたらび、田園は次第に宅地化した。戦後は更に発展して、商店街もひらけ、急激に田園は減少し、鄙びた往年の海岸線特有の情緒はうしなわれて来ている。

被爆当時、この地区の総建物数は約一、六八四戸で、世帯数一、六五五世帯、総人口は約六、三五四人で、各町の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
東青崎町	205	224	893	水田正信
堀越町	311	304	1,253	橋本長之助
青崎町	379	392	1,269	松本勘太郎
向洋本町	150	170	790	児玉群一
向洋中町	144	142	503	三太田勝吉
向洋大原	297	225	994	児玉倉太郎
向洋小磯	198	198	652	松原近夫

地区内に所在した学校および主要建物(または事業所)は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地
青崎国民学校(高等科併設)	青崎町
東洋工業株式会社	広島市青崎町・安芸郡府中町
日本製鋼所	広島市堀越町・安芸郡船越町

二、疎開状況

疎開者僅少

市の中心部から、かなり離れていたため、地区外への疎開は、学童を含めて約二〇〇人程度で、一般住民はほとんど疎開しなかった。また、物資の疎開をした者もなかった。

学童疎開は、向洋大原町二〇人、向洋本町一五人、東青崎町五〇人、堀越町五〇人で、比婆郡庄原町の寺院・学校・民家などへ疎開した。

三、防衛態勢

昭和十六年から警防団を結成し、青崎地区全般にわたって、隣保組織を整備し、毎日、訓練演習をおこない、避難・救護態勢を確立していた。

被爆当日、この地区の国民義勇隊は出動していなかったが、女子挺身隊員として向洋大原町二人、向洋本町一人、青崎町二人が、市内水主町付近の家屋疎開作業に出動していて、全員被爆死した。

なお、防火対策については、隣組二組に一台の手動ポンプを設置し、また各家に水槽を設置して防火態勢をととのえていた。

四、避難経路及び避難先

地区内に山を利用して、隣組が二組から五組程度入れる防空壕を作って避難することにしていた。

防空壕はいずれも、避難命令発令後、最大時間一〇分間以内に避難し得るところに作ってあった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
暁部隊(金輪島)	向洋大原町裏海岸

六、五日夜から炸裂まで

八月五日日曜の夜から六日の朝にかけて、しばしば警報が発令されたが、地区としては別に異常はなかった。

八月六日午前七時十分ごろ、警報発令により老人子供は、防空壕へ待避した者もあったが、その他の者は平常どおり、それぞれの仕事についていた。また農・漁業従事者も平常どおり作業に出ていた。

午前八時十分ごろ、向洋大原町の高い山地にのぼって、農作業していた沢井シゲノの目撃によれば、突然B29の爆音がきこえたので、広島市上空を見た。白い玉を三個おとし、約一分後、まっ黒の雲が湧き立ったと同時に、市内の一部に火の手のあがるのが見られたという。

なお、被爆前日までに向洋本町二戸、青崎町三戸の地区内建物疎開を行っていた。

七、被爆の惨状

惨状

鶴見橋付近の家屋疎開作業に出動していた東洋工業株式会社の社員二〇〇人が被爆し、その日の午後一時ごろまでに、車を利用したり、歩いたりして約一五〇人が会社にたどりついたが、ほとんどの者が火傷や負傷を受けていた。

また、同じ場所に学徒動員で出動していた町内の学生が午後三時ごろまでに約二〇人帰宅したが、この中の半数以上がつぎつぎに死亡していった。

このほか官公庁・会社・商店などへ通勤のため、この地区から中心部へ出ていた者約七〇人が死亡した。

地区住民は炸裂後、それぞれ避難したが、場所によっては気づけなかったのか、一〇分も遅れた者もいた。避難するとき、郊外へゆく者はトラックや三輪車に乗った。川は小舟を使用してわたった。

炸裂時の被害

炸裂時の瞬間的被害は次のとおりである。

なおこの地区内では、火災は発生しなかったし、降雨もなかった。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
向洋大原町	-	-	60	40	5	30	65
向洋中町	-	-	50	50	5	20	75
向洋本町	-	-	70	30	3	20	77
向洋小磯	-	-	-	100	-	10	90
青崎町	-	-	80	20	10	30	60
東青崎町	-	-	100	-	10	10	80
堀越町	-	-	100	-	10	30	60

諸現象

原子爆弾によって生じた諸現象は全町内とも、相当激しい爆風の被害を蒙った以外、特別の事象として生じたものはなかった。

爆風や爆圧により、猛烈に塵埃が舞いあがる中で、全町三分の一程度の家屋が傾斜して、瓦が落ち、壁がずり落ち、樋や看板が飛んだりした。

また、屋内の天井は吹きあげられ、ガラスはほとんど破壊され、フスマ・障子は折れて使用不能の状態になった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援作業

六日午後二時ごろから、青崎国民学校で、地元の医師や、消防団・町内会役員が出て、市中から避難して来たおびただしい罹災者の救援作業にあたった。救援作業は十一月末まで続き、約一、二〇〇人を扱った。

死体の収容と火葬

収容者のうち約三八〇人が死亡したが、死亡者は、国民学校運動場および堀越火葬場で火葬にし、住所氏名の判っている者は、連絡のつき次第それぞれの縁故者に渡した。住所氏名のわからない遺骨は、一応、地元教専寺に安置し、十一月末ごろ、市役所に引渡した。

堀越火葬場は、連続的に大量の火葬をおこなったため、ついには火葬場の屋根が焼失してしまった。

町内会の機能は、原子爆弾の影響なく、従来どおり執りおこなった。

九、被爆後の生活状況

この地区でも八工が非常に多く発生したため、各町とも衛生組合を組織して、環境衛生に充分注意をはらい、悪

疫の発生流行をふせいだ。

電灯は、翌七日には、もう点灯されて、疎開していた者も八月二十日ごろから、九月二十日ごろにかけて全員復帰した。

学童も疎開先から、疎開世帯が復帰して一〇%、疎開家族とともに九〇%が帰って来た。

しかし、生活状態は困窮していて、特に食生活の欠乏は苦悩大きく、近辺はもちろん、遠くは向島方面まで、毎日買出しに行った。特に調味料・乾物・かん詰・日用品はほとんどなかった。

九月十七日の暴風のため、高潮で、地区内の家屋約四〇〇戸が浸水した。また、屋根の破損によるはげしい雨もりには、みんなが困った。

経済活動ともいふべきものが見られはじめたのは、九月末ごろからであったが、食糧品が中心で異様な活気であった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

宇品東一丁目～七丁目、宇品神田一丁目～五丁目、宇品御幸一丁目～五丁目、宇品西一丁目～四丁目、宇品海岸一丁目～三丁目、元宇品町、出島町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、元宇品町[もとうじなまち]・宇品町[うじなまち]一区・同二区・同三区・同四区・同五区・同六区・同七区・同八区・同九区・同一〇区・同一一区・同一二区・同一三区、および宇品水上隣保会[うじなすいじょうりんばかい]の各地区とし、爆心地からの至近距離は、御幸橋東詰で約二・四キロメートル、もっとも遠い地点は元宇品町の南端海辺で約五・七キロメートル離れている。

広島市の海の玄関口宇品港は、明治十三年(一八八〇)、千田貞暁が県令として着任するとともに、築港計画が具体化し、皆実新開地先の宇品新開の造成と共に明治二十三年に完成した。

戦前までは、わが国有数の重要な陸軍の港湾として、史上に大きな足跡を残した。

この軍港を基幹として、全地域は発展を続け、各種の商店や住宅が集り、田園の散在する明るい新開地的な活気に溢れていた。

戦後、宇品港は広島市の繁栄に寄与する開港本来の目的にたちかえり、海陸交通の結接点としての機能を発揮しつつある。

原子爆弾の被害は、爆心地からかなり離れた位置であったため、比較的軽少で、戦後、広島市復興の大きな原動力となった。

被爆当時の地区内総建物数は約三、〇三七戸で、総人口は一三、〇〇六人であった。

戸数・人口の各町内会別内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
元宇品町	262	278	1,220	坂木四郎(道光)
宇品町一区(海岸通・中通・北通)	205	175	687	西丸理一
宇品町二区(御幸通一・二・三丁目)	193	177	626	安井清春
宇品町三区(鴨池・昭通通二・三丁目)	225	200	950	久米勝市
宇品町四区(西通三・四・五丁目、昭通通四・五丁目)	199	199	714	光宗笹一
宇品町五区(御幸通四・五丁目)	232	232	786	佐々木利一
宇品町六区(御幸通六・七丁目)	232	231	964	松本次郎
宇品町七区(御幸通八・九・一〇丁目)	154	198	722	山新繁人
宇品町八区(御幸通一一・一二・一三丁目)	266	275	1,130	松本安正
宇品町九区(御幸通一四・一五・一六丁目)	189	189	654	高田熊太郎
宇品町一〇区(神田通四・五・六・七丁目)	252	252	921	畠山庄一
宇品町一二区(神田通八・九・一〇丁目)	198	215	876	斉藤勲
宇品町一三区(神田通一一・一二丁目)	239	256	850	斉藤勲
宇品町一四区(神田通一三・一四・一五丁目)	189	213	636	窪谷守人
宇品水上隣保会	2	680	1,360	久米登

なお、地区内に所在した学校、および主要事業所は次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
宇品国民学校	元宇品町	県立第二高等女学校	宇品一三丁目
元宇品分教場	宇品七丁目	広陵中学校	宇品一五丁目
宇品学園	宇品八丁目	市役所宇品出張所	宇品七丁目
県立女子専門学校	宇品三丁目	宇品警察署	宇品一丁目
宇品郵便局	宇品一丁目	神田神社	宇品七丁目
神戸税関広島支所	宇品一丁目	中国配電株式会社宇品変電所	宇品八丁目
宇品造船所	元宇品町	法雲寺	宇品九丁目
逓信局研修所	宇品八丁目	千暁寺	宇品三丁目
大和紡績株式会社	宇品七丁目		

二、所在した陸軍部隊集団

部隊名	所在地	部隊名	所在地

陸軍船舶司令部 (三次支部含む)	運輸部構内	海上駆逐第一大隊	宇品町海岸
宇品憲兵分隊	船舶司令部正門前	第一船舶輸送司令部	船舶司令部内
陸軍船舶練習部	大和紡績(株)内	軍需輸送統制部広島支所	船舶司令部内
陸軍砲兵教導聯隊	大和紡績(株)内	広島陸軍糧秣支廠	宇品町御幸通 七区・八区・九区
野戦船舶本廠	運輸部及び金輪島	独立高射砲第二十二大隊	元宇品町

三、疎開状況

人員疎開と物資疎開

昭和十九年ごろ、宇品町八丁目と九丁目との境になっていた道路(幅員三メートル・本通り電車通りと、神田通りの間)北側の数戸を家屋疎開させることになり、該当居住者がそれぞれ転居し、また、昭和二十年四月ごろ、元宇品町の造船所付近の住宅二、三〇戸を強制疎開した。

また、陸軍糧秣支廠が佐伯郡五日市町、および廿日市町方面に諸物資を疎開した。

この糧秣支廠があるとの理由で、同廠に沿った御幸通り(七区・八区・九区)の家屋約四五〇戸(約六〇〇世帯)が、昭和二十年四月三十日の期限で、曉部隊により強制疎開させられた。しかし、同廠内はすでに物資を疎開し、空家同然であったから、家屋疎開もまったく無意味なことのようと思われた。被爆のとき、この空家の糧秣支廠に大勢の負傷者が収容され、臨時収容所となった。

その他、船舶司令部ができる限りの軍用資材を、近郊の府中・中山・向洋・海田市・坂・似ノ島方面の防空壕その他へ分散疎開して、万一の災害に備えていた。

一般の地区民は、全体の二、三パーセント程度が縁故疎開したにとどまり、家庭用物資を疎開した者もごく僅かであった。

学童疎開

宇品国民学校の児童は、昭和二十年四月十三日(七月二日、八月三日に追加疎開を行なう。)、双三郡三次町の三か寺、布野村の三か寺、作木村の四か寺へ疎開した。

(集団疎開児童約四二〇人・引率教師約二五人、縁故疎開児童約九〇〇人、残留孤児二八〇人。なお疎開後の校舎は大部分軍隊の宿舎に使用された。)

四、防衛態勢

各町内会とも隣保組織を整備し、警察および警防団の指導により、各町内会ごとに防火訓練の強化、避難および救護組織の確立をおこなった。

町内会ごとに防空壕を構築し、パケツ送水などの消火防空訓練をおこなった。

また、国民義勇隊を組織し、竹槍訓練などを強制的に実施した。

五、避難経路及び避難先

災害時の避難先や避難経路について、各町とも当局の指導により、それぞれあらかじめ指定していたようであるが、現在では、はっきりと判っていない。

ほぼ判っているのでは、三区は、千田町の広島文理科大学グラウンド(現在・千田小学校前電鉄車庫)へ、御幸橋を経て避難することになっていた。また、西部の五区～九区までの町内会では、宇品国民学校・千田公園から丹那に至る道路(桜土手)・仁保町黄金山などが決められており、東部の各町内会は、大和紡績工場近くの錦華園を含めて、橋が爆撃されたときを想定して、新大橋の北辺を船で渡り、大野村へ避難するよう指示されていた。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜半からのたびたびの警報発令で、各町内会の防空要員はそれぞれの部署について、万一の場合に備えていたが、六日午前七時過ぎの警戒警報解除で、各自の家に帰ってひと息つくか、早い者は出勤途中の者もあった。みんな寝不足の目をし、ひどく疲れていたが、気分だけは張り切っているようであった。

西埋立地に特設された防空壕に避難していた者も、その六〇パーセント程度がすでに自宅に帰っていた。また、自家の防空壕にいた者も出て来て、暑い朝の食卓についたり、仮眠をとったりしていた。

しかし、八時十五分の異様な炸裂音によって、ふたたび特設防空壕や自家用防空壕、あるいは公共用防空壕、その周辺にあわてて待避した。

町の人々の中には、侵入したB29の爆音をきいた人があったが、その目撃者はいなかったようである。

建物疎開に出勤

この朝、動員令によって、雑魚場町の建物疎開作業に、第五区町内会から第九区町内会までの住民約二〇〇人と、第一区町内会(八・九・十丁目町内会合併区)の四〇人が出動して被爆した。

七、被爆の惨状

閃光と轟音

原子爆弾の炸裂の瞬間、地区の人々はその閃光を感受し、数秒後に轟音を聴いた。

海岸方面にいた通勤途中のある人は、北方から背中などに閃光を受け、少し熱く感じたとき、爆風に吹き飛ばされ、帽子も遠くにとんだという。

この海岸方面では、倒壊家屋はなかったが、窓ガラスはほとんど破損し、屋根瓦や棟・桁などふきあげられた。また、雨どいがたいてい吹き飛ばされてしまった。

地区内では、爆心地に最も近い一七丁目の田村才四郎宅では、図書のぎっしり詰った本棚(三尺×四尺)が、本と一緒に約一〇メートルばかり隣室へ飛ばされ、本はそのまま正反対の向きになって立っていたという。

また、ある家では、その瞬間、ミシンが直角に移動した。

轟音がした北方(市の中心部)方面には、黒煙が高々と湧きのぼっているのが望見されたが、そのときは一体何が勃発したのか、被害がどの程度なのかまったくわからなかった。

町民は驚きあわてて不安にかられるまま、も寄りの防空壕へ急いで待避した。中には、いち早く船便を見つけ、近くの島嶼部の親類縁者のもとに避難する者もいた。

炸裂時の被害

炸裂による瞬間的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
元宇品町	-	-	90	10	0.1	0.5	99.4
宇品町一区(海岸通・中通・北通)	-	80	20	-	0.3	1	98.7
宇品町二区(御幸通一・二・三丁目)	0.1	89.9	10	-	0.8	13.2	86
宇品町三区(鴨池・昭南通二・三丁目)	-	35	60	5	0.5	12.5	87
宇品町四区(西通三・四・五丁目、昭南通四・五丁目)	0.2	63.8	36	-	0.1	19.9	80
宇品町五区(御幸通四・五丁目)	0.3	90.7	9	-	0.4	13.6	86
宇品町六区(御幸通六・七丁目)	0.2	90.7	9.1	-	-	27	73
宇品町七区(御幸通八・九・一〇丁目)	-	92	8	-	-	30	70
宇品町八区(御幸通一一・一二・一三丁目)	-	94	6	-	-	10	90
宇品町九区(御幸通一四・一五・一六丁目)	-	97	3	-	-	21	79
宇品町一〇区(神田通四・五・六・七丁目)	-	100	-	-	0.2	10.8	89
宇品町一一区(神田通八・九・一〇丁目)	-	100	-	-	0.6	11	88.4
宇品町一二区(神田通一一・一二丁目)	-	100	-	-	0.4	12	87.6
宇品町一三区(神田通一三・一四・一五丁目)	0.6	99.4	-	-	0.5	20	79.5
宇品水上隣保会	-	100	-	-	0.3	16	83.7

なお、地区は火災にあわなかったが、当初専売局付近の住宅が火災を発生したとき、警防団員が駆けつけて消火し、大事に至らなかったのである。

避難者殺到

炸裂後一時間くらい経ってから、宇品へむかって続々と避難者が歩いて来た。みんな大火傷で、見るも無残な様相であり、人別も困難なほどに皮膚をむかれ、血まみれの裸形であった。

この地区には降雨現象はなかったが避難者らはみんな重油でも被ったように、ドス黒く汚れていた。

六日の夜

六日の夜、町民の多くは不安におののきながら、特設防空壕や家庭用の防空壕などに待避して、ひと夜を過ごした。中には、丹那堤防や町内の空地などで野宿した者もあり、とにかくほとんど屋内に寝る者はいなかった。

出動の義勇隊全滅

なお、この朝、雑魚場町の建物疎開作業に出動した国民義勇隊は、多くの即死者を出した。生きて帰った者もほとんど重軽傷を受けており、これらは数日のうちに全員死亡した。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

被災程度が他の地区より比較的になかったから、救援隊は来なかったが、負傷者はたくさんおり、また、市の

中心部からの避難者が町内にあふれていたため、救急品が僅かながら配給された。

市の中心部の病院が壊滅し、辛うじて焼け残った広島赤十字病院や陸軍共済病院も、また個人の医院も殺到した負傷者で収容しきれなくなったため、救援に出動した陸軍船舶部隊の兵士たちは、トラックで繰返し繰返しこれら重軽傷者を、宇品の船舶司令部(運輸部)や船舶練習部(元大和紡績工場)、あるいは糧秣支廠畜に収容したが、ここもたちまち満員になったので、宇品港から各種の船舶を使って、似ノ島・金輪島、あるいは江田島などの臨時収容所へ運んだ。

また、財団法人宇品学園(託児所)・宇品国里子校・広島女子専門学校・各社寺、各医院なども市中からの負傷者が溢れるほど収容されたが、薬品がなく治療活動というほどのことは、当日はできなかった。

なお、逃げて来る罹災者に対して電車通り九丁目の巡查派出所で、罹災証明書の発行をおこなった。

屋根や窓ガラスなどを破損した宇品警察署は、須沢署長など数人の署員がただちに出勤し、御幸橋東詰の専売局前に救護本部を置き、逃げまどう避難者を、宇品の陸軍共済病院へ行くよう指示したり、応急的な救護作業をおこなった。

宇品港の惨状

被爆の直後、市内救援命令を受けた江田島幸の浦基地(爆心からの距離約一二キロメートル)に駐屯する陸軍船舶練習部第十教育隊は、ただちに出勤したが、このとき同隊の第五十海上挺進戦隊に所属していた柴田富雄上等兵(当時一八歳)は、その手記「炸裂」のなかで宇品港の状況を次のように記録している。

「...すでに宇品まで幾往復した操舵手の、声高に語る市内の被害状況に耳を傾けながら、前方を睨む一同の面上には、何ものにも屈せぬ気魂がみなぎっている。宇品港が近まるにつれて、爆風の跡も生々しく、瓦が吹きとんだり、トタンがめくれた屋根、ガラスのなくなった窓が視界に飛びこんで来た。今しも負傷者を満載した一隻の大発(大型発動艇)が、似ノ島めがけて矢のように走って行く。目的の棧橋は負傷者・避難者を運ぶ大小の船が入り乱れ、舟艇の割り込む余地もない。負傷でもしたか片腕を首に吊った一将校は、これらの整理に躍起になっている。

やむなく別の棧橋から上陸する。陸軍船舶練習部本部前には先発した他中隊も待機中だ。此处で次の命令を待つ。ふとわれわれは、そこここにうずくまる異様な人たちの姿に思わず目を見張った。煤をはいたように黒く汚れた顔...、ポーポーと振り乱した髪には黄色く見えるくらいの埃をかむり、ボロボロの衣類を身につけた素足の婦人...、半分ちぎれたようなシャツを身にまとい、じっとうなだれたままの男...、今にも何か叫ばんとするように口をあけ、カッと目をむき、われわれの方に視線をむけている一婦人の表情には、たとえようのない恐怖を抱いていることがうかがわれる。われわれの通行に対しても、ドンヨリとしたうつろな目を向けるだけで、何の反応も示さない人達...。

ちょうど鋭利な刃物で切って、無理にこじあげたかのように思われる大きく裂けた凄じい火傷を負った人もある。長さ二、三〇センチにも達するぐらいの火傷を、手といわず足といわず無数に受けているのだ。そこからは割れたザク口を連想させる赤黒い肉がのぞいている。おりしも負傷者を満載したトラックが入って来た。トラックの上に軍刀を手にして立つ一将校の唇が、ドス黒く変色し、ひきつるようにして異様にふくれあがっている。この人たちもまた烈しい苦痛に顔をゆがめ、車から降されるや、たちまち崩れるようにその場にうずくまってしまった。

そこら中に、地に引きずりこまされるような呻吟の声が満ちあふれ、それにまじり一層強く胸にひびく、血をしばるような子供の叫び、死に直面しつつもなお愛着忘れがたい肉親を泣き求める負傷者の姿...

本部付近では、素足の女子職員達がコマネズミのように走りまわっている。土間には無帽の兵士が一人倒れている。外傷は無いようだが、此处まで逃げて来て力つきたものが...

命令受領に行った将校の帰りがおそい。いよいよ事態のただならぬものが察せられる。こうして待機しているあいだにも市内の惨状がしのばれて、どうしようもない焦燥感を覚える。

ようやく命令がでる。石塚隊の目的地は八丁堀だ。ここは被害の中心地と聞く。あたりの空気をふるわせて、惻々と胸を衝く悲痛なる負傷者の慟哭に、必死の努力を誓いつつ、号令一下、長蛇の前進が開始された。」とある。

以上の手記のとおり、六日の宇品港の惨状はまったくこの世のものではなかった。そこへ続々と暁部隊の救援隊が上陸すると同時に、負傷者の輸送が港内狭しとばかり、無数の舟艇によって島嶼部の臨時収容所へ、続々と運ばれたのであった。

死体処理

陸軍船舶司令部や練習部や糧秣支廠その他に市中から逃げて来たり、運ばれて来た負傷者は、そのまま死亡する

者が続出した。しかし、六日はその夜にかけて、ただ収容だけの作業に追われどおしであったから、死体処理が始まったのは翌七日からであった。

死体処理は、ほとんど船舶部隊の手によっておこなわれ、それが、おびただしい数にのぼったことは確実である。

火葬場所は、宇品埋立地(現在島津木材会社の付近)や通信局研修所の庭などをはじめ、付近の空地を利用しておこなわれた。

死体多数漂着

宇品西海岸に漂着した多数の死体は、消防海上分団の手によって引きあげられ、警察官立会いのもと、その付近で火葬にしたが、氏名の確認できないものは、火葬した付近に、その遺骨を木箱に入れて埋葬した。木箱はありあわせのもので作った。

慰霊碑

なお後のことであるが、埋立地の魚岩別館の敷地内に、個人が慰霊碑を立てて、被爆死没者の供養をおこなっているが、遺骨は埋葬されていない。

町内会の機能

爆心地から離れていたため、地区自体は中心部のような人的損傷はあまり無く、各町内会の機能も、宇品町第一区から第四区までと、元宇品町では支障なく、緊急物資の配給など円滑におこなわれた。

ただし、第五区から第九区までの町内会では、町内会役員が雑魚場町の家屋疎開作業に隊員二二九人を引率して出動していたため、ほとんど負傷あるいは死亡したので、町内会の機能が一時停止状態に陥った。しかし、山田助松連合町内会長の指示によって、急ぎ町内会新役員を選出し、再編成をおこなって、被爆の応急対策にあたった。

なお、第一区地域は別段変わったことはなかった。

九、被爆後の生活状況

住民の復帰

被爆直後、一般的にはまだ本土決戦の構えであり、日本人としてなお闘う気持ちだけはあったが、反面ソクソクとして胸に迫る敗北感をどうすることもできなかった。

被爆の恐怖からひとたびは郊外に避難した者も、九月中ごろから次第に復帰しはじめた。

しかし、爆風で破損した家屋は、補修する資材もなく、またその気力もなく、ただ当面の雨もりを防ぐ程度にとりつくろったままであった。食糧事情もますます悪化し、あすの日も知れず心身共にその打撃は計りしれないものがあつた。

終戦以後

八月十五日の終戦の詔勅以後は、一度に緊張感がとれ、茫然自失の状態でその日その日が過ぎていった。

八月末ごろの、宇品各町内会の居住人口は、第三区二二〇人・第五区一五〇人・第一区一三〇人で、その他の各町内会は不明である。不明というのは、調査時点がすでに戦後二十数年を経ていることもあるが、当時の住民の移動が激しかったことと、敗戦による人心の混迷と荒廃により、確実な記録が伝えられなかったためである。

ハエなどの発生

焦土と化した他の地区と同じように、ハエが無数に発生した。また、赤色の蚊も多く発生したが、駆除薬品もなく、ただ発生するにまかせるほかなかった。

生活物資の欠乏

生活物資はいよいよ窮迫し、飢餓状態に陥った。この頃、宇品警察署から一世帯ごとにコンブと大豆の煮た缶詰が配給されたが、まったく貴重なものであつた。このような状況のなかで、住民の頼るものは、僅かながらのこれら配給品のほかには何も無かつた。

ただ、地区によっては、比較的畑が多くあつたから、幾分か空腹をおぎなうことができた。

闇市

広島駅前や己斐方面に「闇市」ができて、日ごとに賑わい、宇品地区からも食糧の不足をおぎなおうとして、出かけて行った。まもなく、宇品電車終点付近(現在の県営棧橋前の終点から三〇〇メートル東寄り)に、闇市がたつたので、後にはここを利用した。

電灯

被爆の翌七日、軍関係と一部には電灯がついたが、一般には、二、三日間は、ロウソクですごした家が多くあつ

た。

疎開児童帰る

宇品国民学校は、窓ガラスが飛散し屋根瓦が一部吹きとばされた程度であったから、九月一日には一応、第二学期を開校した。

九月十二日に集団疎開児童二七九人がまず帰って来て、これについて次々と児童が帰って来たが、校舎の不備や食糧の欠乏で思うように授業はできなかった。縁故疎開した児童の復帰はバラバラであって、一部は不明である。

再開された学校の管理運営は、香川軍二校長が自宅で被爆し、火傷のため出勤できず、軽傷の堀池良雄教頭が校長代理として、これにあたった。

暴風・洪水

九月十七日の暴風雨と、十月八日の大豪雨の被害は、宇品地区でも相当なものであった。

場所によっては停電し、断水も一三日間ばかり続いた。

浸水家屋が多く、水深約五〇センチメートル以上に達したところもあり、被爆災害の上に、さらに水害が加わって生活は惨憺たるありさまであった。

経済活動のきざし

昭和二十年の末ごろ、前記のように闇市ができはじめ、深い虚脱状態のなかながらも、宇品海岸通りや四丁目にも闇市が賑わって、ようやく経済活動のきざしが見えはじめた。

十、その他

(イ)陸軍船舶練習部のいた大和紡績工場は、負傷者を多数収容し、臨時陸軍野戦病院となり、被害調査に来広した仁科博士一行が、九日にここで無傷の死亡者を解剖した結果、正式に「原子爆弾」であることが確認され、十日に、東京の大本営に報告された。

(ロ)宇品造船株式会社は、元宇品町にある社員寮が臨時収容所となり、約三〇〇人くらい避難者を収容し、同社の労務者用の米約二〇石を放出した。なお、同社造機部職員約一〇〇人が、六日早朝から天神町の家屋疎開作業に出動して全滅した。

(ハ)中村藤太郎警防団長と田村才四郎副団長が、六日午前十時ごろ、状況視察のため比治山橋東詰付近を通りかかったとき、霧に似たものが空一面に降って来た。中村団長のハンカチ、田村副団長の口にあてていたタオルに、その霧が青い点々となって付着したので、毒ガスを撒いたと思った。青い斑点はすぐ水洗いしたが落ちなかった。

(ニ)元宇品に駐屯していた独立高射砲第二十二大隊本部の隊長内山恒太少佐は、高度五十五度で敵機侵入という監視兵からの報告(ブザーが鳴る)で、指揮所に入るか入らないかの瞬間、被爆し、六キロートル離れた広島の上空に立ち昇る巨大なキノコ雲を望見した。キノコ雲の高さ九、五〇〇メートルと報告を聴く。脱出するB29二機と、キノコ雲を背景にした三個の白いパラシュートが黒い物体をぶら下げて、空中を漂流するのを目撃した。軍司令部(広島城内五十九軍)へ連絡しようとしたが電話不通、すぐに宇品の船舶司令部を呼ぶと通じた。

このあと、ふと見ると、陣地の板囲いの板に一定の角度でキツネ色に焦げた跡があった。強烈な爆弾が空中で炸裂したことを直感し、江波・打越の高射砲陣地に電話連絡して、焼けて焦げた跡があるかどうか、あれば斜角は何度かを調べるよう命令した。まもなく集って来た報告を総合して、部下に計算を命じたら、高度は約五〇〇メートルという結果が出た。すなわち、地上約五〇〇メートル上空で爆弾が炸裂したことが判明した。

八月八日、空路入市した有末調査団の仁科芳雄博士ら一行は、翌九日早朝、元宇品をおとずれ、内山大隊長の報告を聴取したが、内山大隊長が調査していた爆弾炸裂の方向と高度により、仁科博士はいち早く爆心点の概略をつかむことができ、以後の調査に大いに役立ったと言われる。

愛子(抄)

木村玉二(白島北町にて被爆。当時・広島中央電話局交換課長)

暁六一四〇部隊にて

明けると八月十二日。相変わらずの快晴だ。あの日から一週間目だ。道路も大分片付けられて幾らか秩序立って来た。リュックを背負って救護所を次々と廻って歩く人が多い。

私はピッコを引きながら牛田へ向って歩いた。いつまでも左の向う脛の傷がなおらない。神田橋を渡って二股土手の小さい橋まで行くと、南からトラックが来て奥へ入るので乗せてもらった。しかし、トラックは五百メートル

余り行くともう先へは行かなかった。

車を下りて更に五百メートル余り歩くと、向うから来る学校の先生らしい四、五人の男女の一行に出会った。

「女学院の修練道場はどちらでしょうか。」と尋ねると、やはり女学院の人たちであった。

「道場はずっと山の上にありますますが何のご用でしょうか。」

「勤労奉仕に出ていた娘の消息がききたいのです。」

「それでは一町あまり行くと道場の入口に出ますから、上に登りたいで左に曲がって、元吉先生のお宅を訪ねてごらん下さい。」

親切に教えられて、聴かれるままに愛子の事を話すと、「女学院の行っていた一中の運動場の東南の隅に爆弾がおちたということですから...」と言われた。まだ広島の人たちはただ一発の原子爆弾でやられたとは誰も思っていなかった。自分も十四日になって、はじめて白島の電車の終点で焼けた電車の横腹に張られた新聞の号外で、強度の特殊爆弾だということとソ連の参戦とを知った。

元吉先生の家は直ぐわかった。そこは牛田もずっと奥であるが家は相当壊れていた。玄関に立つと半白の上品な婦人が出て来られた。愛子たちの消息を聴くと

「お話いたします。その前にこれをごらんになりよってください。」

といって、大学ノートを一冊私に渡しておいて奥へ何かとりに入られた様子である。私はノートを初めから一枚一枚めくって行った。

あった。八月十一日という日付けの所に、暁六一四〇部隊収容、重傷、木村愛子、家族、安佐郡戸山村戸山郵便局気付、木村玉二

と書いてあった。おお愛子が生きていた。

「ありました。ありました！先生/子供が生きていました。...」

と自分は大声で奥に向かって叫んだ。すると先生は直ぐ出て来て

「それはよござんした。それはよござんした。昨日校長先生が救護所を廻って聞いて帰られたのです。」

と言われた。戸山郵便局というのは六月に局へ頼んで荷物を疎開したので、私たちは戸山へ避難したものと思って校長先生に話したものに違いない。よく覚えていたものだ。

「有難うございました。有難うございました...。」

と自分は口早に礼をいって、挨拶もそこそこに門を走って出た。

「愛子が生きていた！愛子が生きていた！」

私はそう言いながら走った。

「観音様のお蔭だ。」

涙が止めどなく頬を流れる。

二股土手の近くまで出ると、溝を距てた左側の家の前に、もと局に勤めていた星出さんが立っていた。この辺は山の陰になっていて、家が殆んど壊れていない。私は星出さんに、走りながら

「子供が生きていました。」

といった。星出さんが何と答えたか耳には入らなかった。

早く帰って妻に知らせてやらなければ、...。そして迎えに行つてやらねば...。

気分のみあせって足がはかどらない。走ったり歩いたりして神田橋を渡って家へ急いだ。家の近くまで来ると秋山さんの小屋が見える。

「秋山さん、愛子が生きていました。」

と私はいった。自分たちの小屋に帰ると、ねている妻に

「愛ちゃんが生きていた。宇品の暁部隊じゃ。」

というと

「そうですが、愛ちゃんがー」

といって妻は、布団の上で起き上がった。私は傍に坐っている礼子に

「礼子ちゃん、一緒に行こう。」

といった。礼子はすぐ身仕度にかかった。

妻もいざりながら愛子のために自分の浴衣を出したり、帰りが暑いからといって、白い木綿の帽子もそろえた。

そして「愛ちゃんは、乾パンが好きじゃからー」といって戦災者に昨日配給された乾麺の一袋と、これも配給の牛肉とウズラ豆の罐詰一つとを救急袋へ入れた。

「行って来るよ。」

と地下足袋で踏む足も軽く前の小径に出た。

「用心しておいでなさい。」

と妻は布団の上に半身を起こして見送った。

「宇品なら広島駅から汽車があるはずだ。とにかく広島駅へ行こう。」

と常葉橋に出た。橋は欄干が落ちていた。

ガードをくぐると、駅へ通じる土手の道は両側の家が焼けて、福屋も中国ビルも、遠く厳島、似島まで一望の中に見渡された。

河向うの泉邸の松が焼けていた。

駅のホームで宇品行きの列車を暫く待ったが、時間が不規則で何時に出るのかははっきり判らない。まわりの人に聞いて見ると、駅前から宇品行きのバスが開通しているという。表に出てあっちこっち捜していると、百メートルあまり向うにバスが一台停まっている。行ってみると、丁度いい工合にそれが宇品行きで、今出るというところであった。戦災者は無料で乗せてくれた。

バスは的場に出て、比治山の北側を廻って山の西側を真直ぐに南へ向って走った。周囲が焼けて広々としているので、どこか知らぬ土地へ来たようだ。乗客は私たちのほかに一人きりで、ガラ空きだ。それが全速力で走るのでとても涼しい。

「愛子が待っているに違いない。もう三〇分もすれば逢えるのだ。」

二人はほがらかだった。

比治山を離れると、空襲警報が出た。私はすぐ鉄甲を、礼子は防空ズキンをかぶった。しかしバスはそのまま両側にプラタナスの茂った電車道を全速力で走った。この付近の家は多少壊れてはいるが焼けてはいない。

鉄道局の前で下車して運輸部の門の近くまで行くと、宇品駅の方へ曲がる角の広場の板塀に一面に大きく名前を書きつらねた紙が貼ってあった。沢山の人が立って見ている。

私たちも愛子の名前を一生懸命捜したが見つからなかった。人に聞くと暁部隊はずっと東の丹那に近い方面らしい。

駅の横を曲がって鉄道線路に沿って広い道を東に向って歩いた。錦華人絹のカモフラージュした灰色の煙突が魔物のように数本立っているのが目立って見えた。

暁六一四〇部隊の衛門前の橋の手前に受付があった。そこにはやはり罹災者を捜す人たちが十数名詰めかけていて、収容者の名前が細かく罫紙数十枚に書いて貼り出してあった。

その掲示は坂の小学校へ送られた者と、岩国へ送られた者とに分類されてあった。とても沢山の人の人である。

愛子の名前を礼子と二人でシラミつぶしに捜したが見当らない。受付できくと「それではこれを見てください。」と書いて同じような罫紙を十枚余り綴ったのを見せてくれた。はじめからくって行くと…。あった。

白島北町一六三木村周二方、木村愛子、学徒、一四歳、重傷

とある。「周二」とあるのは明らかに書き誤りだ。受付の人にいうと、すぐ衛門まで連れて行ってくれた。

歩哨に断って衛兵の詰所に行くと、そこにも面会者が詰めかけていて暫く待たされた。待っている間がとても長い。前の人をせき立てたいような気がする。

やがて当番兵が愛子の収容されている兵舎へ連れて行ってってくれた。兵舎といっても掘立てのバラックで、中央を通路にして廊下も何も無く、両側が板敷きでその上に藁が敷いてあった。

そこに残っている人は重傷者ばかりで、歩行のできる程度の人はいない。坂と岩国とへ船で送られたのであった。

ずっと奥の端の通路の両側に、二〇名あまりの人が藁ぶとんの上に寝ていた。

「木村愛子さんのお父さんが来られました。」

と当番兵が告げると、そこに腰かけていた一人の兵士が立ってこちらに出て来た。丁度その時、外からロープを手にして入って来た別の兵士があった。奥から出て来た兵隊さんはその人に

「木村愛子さんのお父さんだ。」

と告げた。ロープを掲げた兵隊さんは立ち止まって、黙って私の顔を見た。

「愛子の父ですが...」

と私がいうと、その人は矢張り黙って私の顔をじっと見つめていたが、暫くして

「遅かったー」といった。

「ええ、それでは坂へ送られましたか。」

と、つめよって聞くと、兵隊さんは静かに

「よくなかったです...」

といて下を向いた。

「ええ...死にましたか。」

「はい、おそかったです。今朝亡くなられました。私は今、金輪島へ遺骸を送って行って帰って来たところです。」

ああ、何としたことか。あまりのことに声も出ない。

「愛ちゃんが、お父さん、お母さん、お父さん、お母さんというので、お父さんお母さんや、家族の方が来られるのを随分待ちました。遅かったです。」

ああ！...おそかった...

「それでは死骸に違わせて戴けませんか。」という兵隊さんは

「よがす。」

と言って、直ぐわれわれを外へ連れて出て、途中、中隊本部へよって許可をとると、私たちを岸壁に繋留してあったダンベイ船に乗せてくれた。この兵士は納家さんという方で上等兵であった。もう一人兵士が乗ってきて、エンジンを動かした。

納家さんは、船の中央に蕙を敷いて

「どうかお掛けなさい。」

といて、われわれを坐らせて

「この船でさっき愛ちゃんを他の人たちと一緒に連れて行ったのです。」

といわれた。納家さんは四〇歳前後の人であった。関東の方らしかった。

「私たちがこうして無事でいて、沢山の非戦闘員を殺して誠に申し訳ないことです。」

と言っておられた。

金輪島の棧橋を上がると、納家さんはまた週番士官の許可を受けに行ってきて、一丁余りある右側の山の麓へ私たちを連れて行った。

倉庫のような建物の前までくると、入口の所に三四、五歳の兵士が二名着剣して歩哨に立っていた。

納家さんはその一人にことわって、中に私たちを連れて入った。歩哨も一緒に入ってきた。

蕙をかぶせた死体が六つコンクリートの床の上にねかせてあった。見廻わすと、左側に三つ並べてある一番奥の分の蕙の裾から細い足が二本のぞいている。自分は愛子だと直感した。

納家さんは近づいて蕙をめくった。

愛子だ、愛子だ。

パンツをはいて空色の上衣を着ている。両手は胸の上で組み合わせてあった。モンペははいていなかった。

「愛子よ！愛子よ！」

私は坐って愛子を抱いて頬ずりした。涙がとめどなく流れる。礼子も傍に坐ってむせび泣いた。

「愛ちゃん、必ずこの仇は...」

と私はいった。納家さんは手を目にあてて

「すまんです、すまんです。」

といわれた。銃剣を持った兵士は無言で傍に立っていた。

私は愛子の上衣をぬがせた。上衣は焼けて破れていた。そして白い油薬がべっとり全体にしみ込んでいた。礼子は持って行った妻の浴衣を出して着かえさせた。着物の前を合わせて、私の皮のバンドをはずして締めてやった。

手を胸の上で組み合わせた。そしてその手に、袋から乾麺麴を出して持たせた。罐詰をナイフであけて枕元へ置いてやった。

「髪の毛を切らせてください。」

という、納家さんは直ぐ鋏を借りて来てくださった。髪は後頭部が少しこげていた。

愛ちゃんは安らかに眠っていた。顔面と上衣の前の開いた処だけが皮膚が少し赤くなっている。背後から光線を浴びて背中をやられ、鋭い光に振り返った瞬間、顔をやられたらしい。軽い火傷なのにどうして死んだのであろうか。

右側の一番奥の愛ちゃんと向い合った位置に、愛子の同級生がいた。掛けてある蕙をめぐると敷ぶとんの上にねかせてあった。そして冷凍らしい小さいミカンが三つ枕元に置いてあった。

この人は愛子と同時に収容されたが、お母さんが直ぐ訪ねて来て、三日ほど介抱されたのであった。そのお母さんには後で学校の一週年の追悼式の時に、妻が逢って詳しい話を聞いたことである。

「船に子供がのせられて金輪島へ連れて行かれるのを岸壁で見送ってやりました。」

とその方は妻に話されたそうである。そして

「どうにかして木村さんのお母さんにお逢いして、愛ちゃんの最後のようすをお話してあげたいと思っております。」

と妻に逢ったことを大変喜んで色々愛子のようすを聴かせてくださったそうである。その方は藤本さんといって御幸橋付近にお家がある由で、是非一度お逢いしたいとおもう。

遺髪をもらって、後髪を引かれる思いで再び宇品へ帰ると、一時をとうに過ぎていた。納家さんたちはまだ昼食も済んでいなかったのだ。何度もお礼をいって別れた。

帰り道は寂しかった。愛ちゃんの遺髪を胸に抱いて、二人はトボトボと歩いた。

「帰って妻に話したら、何というであろう。」

バスで広島駅まで帰ると、そのまま私たちは菩提所である台屋町の源光院の焼跡へよって、お墓に詣でた。墓石が沢山焼けたり、倒れたりしていたが、幸い私たちの墓標は倒れもせず無事だった。僅かに台石の左側が火のために欠けていた。

寺の焼跡には

「当分山口県へ避難する...」

という意味のことが書いてあった。お上人は無事であつたらしい。

家へ帰ると五時近かった。妻はどんな気持ちで待っていたのか、二人が小屋に帰ると

「お帰んなさい。」

といって起き上がった。一部始終を詳しく話すと、妻は目に涙をためて黙って聞いていたが「愛ちゃんに一目逢いたい。これから宇品へ連れて行ってください。」という。もう時間も遅いし、今から行って金輪島へ渡れるかどうか、それもわからない。

しかし、どうしても妻は逢いたいという。

「もし逢えなければ、せめて最後の様子なりと、介抱してくださった方に逢って聞きたい。」

という。色々慰めて

「それでは明日の朝早く行くことにしよう。」といってやっと納得させた。

紙に包んだ愛子の遺髪と油薬のしみた上衣とを、焼け残った妻のタンスの抽出しの中へ、観音さんのお像と先祖の位牌と一緒に祀って、夜おそくまで拝んだ。

明けると八月十三日だ。

礼子を留守番させておいて、昼までの涼しい間に宇品へ行って来ようと早速準備した。

日中は暑い朝の間は涼しい。広い焼跡を渡って吹いて来る風には、何となく秋を感じられる。

妻はモンペに運動靴をはいて竹を杖にして表に立った。この体で駅まで歩けるかどうか心配だ。

私は俊ちゃんを帯で十文字に背負って、妻を後からかかえるようにして、ゆっくりゆっくり歩いた。駅までは相当時間がかかった。妻は気が立っているせいか、一言も苦しいとも何も言わずに歩いた。

暁部隊に着くと十一時近かった。

事情を話すと兵士が小隊長の石井見習士官の処へ案内してくださった。小隊長に頼んだが、「お気の毒ですが、金輪島へはもうお渡しすることはできない。死骸はすでに似の島へ運んだかも知れぬ。」という話であった。

「それでは誠に済まないが、死んだ現場を妻に見せてやってください。そして最後にそばにおられた方々に逢わせていただいて、色々その時の様子を聞かせてもらいたい。」

とお願いすると、こころよく収容所へ案内してくださった。そして「愛ちゃんの様子は私もよく知っていますよ。」

と石井さんは歩きながら言われた。昨日の兵舎に入ると、ずっと奥の左側へ連れて行って奥から二番目の藁ぶとんを指して、「愛ちゃんはここにねていました。あのベットです。暫く待ってください。」といて石井さんは出て行かれた。ベットにはそれぞれ負傷者が寝ていたが、そのベットは空いていた。

暫くすると二〇歳あまりの元気のいい娘さんが二、三人と兵士が二人、石井見習士官と一緒に来て来た。娘さんたちは女子専門学校の生徒であった。この方たちが最後まで愛子を見てくださったのである。

女子専門学校の方は、堀本さん・久米さんたちで兵隊さんは山崎軍曹と高塚軍曹とであった。

「愛ちゃんはとても元気でした。よく起きてここに腰かけて、こうして足を動かしていました。『愛ちゃん起きてもいいの...』』という、直ぐ自分のベットに行ってねころびました。」

と女子専門学校の方は話して下さった。堀本さんは、

「大変元気だったので、愛ちゃんだけは助かるだろうと皆さん言っていましたのに、お気の毒なことをしました。十一日のお昼御飯のとき『愛ちゃん今日はお昼はお豆腐のお汁よ、何かほしいものない。』ときくと、『らんぎょうが食べたい。』といいますので、向宇品の私の親戚へ取りに行き食べさせました。」といわれた。堀本さんは江田島の人ということだった。また石井さんは「十一日の晩、淋しいからここにいて、いっしょにねてくれというので、傍で一緒にねむりました。」と言われた。久米さんは、愛ちゃんが亡くなる時に「お母さん、お母さん」というので「お母さんですよ...」といて愛子の手を握ってやってく下さったそうである。そして臨終の時に「早う行かんといけんから、のいて、のいて...」といて、手で前の人をかき分ける様にしたそうである。愛子の最後の様子を次々と親切に話して下さった。高塚軍曹は広島の実業町の方で、愛子の係であったので特にお世話になつたらしい。

「愛ちゃんがあまりにお父さん、お母さんと言うので、家族の人に知らせてあげたいと思って八日に二人連れて、電話局へ尋ねて行きました。門の処でワイシャツとパンツ一つの局の人に逢いました。」

と言われた。ああそれは赤木君であったに違いない。あの時自分は門の内側にいたのだった。高塚さんは門前で赤木君と広島君に逢ったのだ。その時広島君は手帳に「木村愛子、一四歳・学徒・重傷・暁六一四〇部隊収容」と書きとめていたのであった。それは後でわかったことである。広島君は庶務課長であった。一週間前に転任してきたばかりだったので、私の家族のこともよく知らないし、当時進徳女学校の生徒が一五〇名程挺身隊で局へ手伝いに来ていたので、それと思ってただ手帳に書きとめておいたらしい。門の内と外とで、僅か三、四間しか離れていなかったのにぜんぜん知らなかったのだ。

高塚さんは話を続けて

「白島へも行きました。色々尋ね廻って木村という人にも逢いましたが、人違いで愛ちゃんの家のことをきいても、ケンもホロホロの挨拶でした。長寿園まで行こうかとも思ったのですが、すっかり疲れて、自転車はもっているし、歩行は困難であるし、とうとう引返しました。」と話された。そこへ中隊長という品のいい人が来て、愛子の悔みをいって下さった。

愛子は皆さんに親切にしていたのであった。愛ちゃん愛ちゃんといって可愛がっていただいたのだ。有難いことである。

皆さんに厚くお礼をのべてお別れした。別れる時に下士官が封筒をもってきて、「愛ちゃんの遺髪です。」といて渡された。封筒の表には

八月十二日午前二時四十分逝去

木村愛子の遺髪

暁六一四〇部隊

と楷書で丁寧に書いてあった。中隊本部に保存してあったものらしい。頂いて拝み、胸のポケットにしまった。

二人は振り返りして、来た道を宇品のバスの停留所まで歩いた。正午近い夏の陽はあかるい。しかし、なんと寂しいことか。

お蔭で皆さんにも親切にいただいたのに、早く捜しに行きやらなかったために、とうとう死に目に会えなかった。親としての誠意が足りなかったのだ。妻にも済まない。腸を断つ思いだ。妻はただ黙々として竹にすがって歩いた。

駅前下車すると、松山通信局から応援に来たという一橋君に出逢った。私は妻を後からかかえるように歩かせて白島の小屋へ帰った。

一、地区の概要

この地区の範囲は、似島[にのしま]全域である。広島港南部(港域内)に位置する島で、元安川河口の南方沖約四キロメートル離れたところにある。周囲約一四キロメートル、面積三・八平方キロメートルの広さである。

爆心地からの至近距離は、島の北端で約八・三キロメートル、もっとも遠い地点は、島の南端で約一一・五キロメートルであって、原子爆弾による直接的な被害は軽微であった。

似ノ島は古来、安芸の小富士と呼ばれる山が聳え、南に江田島、これと陸続きの西能美島、東に峠島、西に小弁天島・弁天島など、大小の島々が周囲に点在し、瀬戸内海特有の美しい風光につつまれている。

島の西側に集落をなす町民の生計は、半農半漁で成立っているが、平坦地が少ないので、山を開墾し、だんだん畑の縞模様を描いている。だんだん畑は、標高二七八メートルの"安芸の小富士"の中腹までも耕されているが、広島市街地から四季の折々に濃く淡く望見される。

似島陸軍検疫所

明治二十八年六月に似島陸軍検疫所が設置され、日清・日露または大東亜戦争に出征した多数の帰還軍人が、上陸するとき、必ず一度は立ち寄った島でもあった。そのため島内は経済的にかなりうるおったとも言われている。また夏季には、海水浴場が開かれ、市民には親しい島でもある。

被爆当時、建物総数は三九五戸、世帯数四〇九世帯、人口一、七五一人で、町内会長は浜本寿夫であった。

似島国民学校

なお、同島字家下に似島国民学校がある。

二、疎開状況

市の中心部から、はるかに離れた島であって、人員疎開・物資疎開・学童疎開など戦時的な緊急態勢をととのえる必要性があまりなかった。

逆に、市街地からの疎開を受入れる立場にあって、それがヒシヒシと戦局の緊迫感を島内に盛りあげていた。

三、防衛態勢

住民のほとんどが、軍の作業や広島市中への出稼ぎ、または、農耕や、漁業のために家を留守にすることが多く、防空・防火訓練も、組織的に集団行動を取って実施できなかった。

出稼ぎの内容も、一般勤労でなく、軍事的労務作業の従事者が多く、一家こぞって作業に従事する状況であった。軍用輸送船が、海上せましとばかり多数出入りしたが、そのつど碇泊地に近い似島住民は、労役を提供し、時間的余裕もまったくないような日常であった。

地区がこのような特殊な立場を占めていたので、町内会・隣組はあったが、せいぜい各家庭で作った防空壕に待避することが唯一の防衛手段であった。

わずかに隣組単位で、防空・防火訓練を数度行なった程度である。

四、避難経路及び避難先

町の特殊性から、防空・防火訓練すら満足にできない町であったから、避難経路や避難先など、前もって指定しておくというようなこともなかった。

ただ、家庭防空壕だけが頼りであった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍運輸部似島検疫所	似島町字長谷
陸軍運輸部馬匹検疫所	似島町大黃
暁部隊上陸用舟艇船庫	似島町深浦
広島兵器廠似島弾薬庫	似島町東岸
廃部隊船舶貯油所	似島町字長浜
高射砲基地	似島町字中原

六、五日夜から炸裂まで

島の西側に所在する居住地域では警報発令のときなどに、特別な伝達方法はなかったようであるが、隣組によっては、鐘を鳴らして伝達していた。

ほとんどは、宇品方面とか、隣接の島から聞えてくるサイレンによって、それぞれの家庭が単独に対処していたようである。

空襲の気配が濃厚に感知されるときは、自家および合同の防空壕へ待避するとか、夜間は灯火管制を行なうなど個々に独断で決めていた。

五日夜

市中から離れた海上の島のことでもあり、特殊な軍用施設はあっても、直接的な攻撃目標になるという意識が少なかったから、五日深夜から六日朝にかけての警戒・空襲警報発令のときも、従来とおなじような受取り方であって、別段これといった表情はなかった。

これまでに空襲警報の発令があっても、広島市には大規模な空襲がなかったし、無論、島内がどうということもなかったので、情性的に楽観していた。

六日朝

六日朝も、警報解除後ではあるし、無頓着に海へ、畑へ、または軍用労務作業へと、それぞれの持ち場へ出ていく人たちが多かった。

なお、似島では、動員令による疎開作業出動はなかったし、島内の建物疎開もまったく実施されなかった。

七、被爆の惨状

被害軽微

似島町は炸裂時の爆風圧によって、家屋が破壊倒壊するということはほとんどなかったが、島内総戸数の大半の家で、建物の窓ガラスなどが、強い震動と爆風によって破壊された。

しいて被害状況を言えば、半壊一％、小破五〇％、無傷四九％、計一〇〇％となろう。また、火災の発生もなく、市中の処々で見られた降雨もなかった。

その時、屋外にいた者は、露出部分に、熱風のような異様な熱さを感じたが、これによる火傷の症状にまでなった者はなかった。また、ガラスの破片などで負傷した者もなかった。

しかし、通勤者とか通学生、または私用などで市中に行っていた者のうちには、即死者や負傷者がかなりあった。これら町民の負傷者は、被爆一か月後の集計では一〇八人が死亡し、それ以後も死亡者が出ているが正確な人数は不明である。

市中の被災者を収容

島内では別に避難などする必要はなかったが、午前十時ごろから、市中の負傷者が、続々と船で似島へ運ばれて来はじめた。これら負傷者は検疫所と寺院へ収容し、町民こぞって救護活動に従事したが、はっきりなしに運ばれて来て、ついには島全体が、異様な興奮に陥った。殊に検疫所では、軍隊の活動がめざましく、収容、看護になみだぐましい作業が続けられた。

六日、寺院(似島説教場)にいったん収容された者も、検疫所まで運んで治療をうけさせた。

収容作業は八月六日から二十五日まで続いたが、全収容者数は約一万におよんだ。

市中遠望と島内の惨状

六日夜、島から海上はるかに市中を眺めると地上は、血の色に染まった強烈な火炎が立ち狂っており、その上をどす黒い雲が、火葬炉のふたのようにずっしりと重く覆っていた。一方、島内では、人間断末魔の絶叫や呻吟・悲鳴・号泣が充満し、冷酷無残な死の暗影が、ドロドロと渦巻いていた。その渦中であって、町内の主婦たちは、全力を傾け、一人の生命もおろそかにせぬよう献身的に立ち働いた。

死亡者の処理

なにぶんにも、市中から運ばれて来たおびたしい収容者であったから、当初は、縁故者たちが探しに来て、とても容易には判明し難かった点もあったが、二、三日後には住所氏名を聞きただして名簿を整えると共に、名札を作り、死亡した場合、その名札を死体の上に置くようにした。しかし、重傷のため死亡前にききぬすことができなかつた者や、すでに死亡していた者の身元不明者がずいぶんたくさんあった。

火葬は、八月十日ご三から八月末日ごろまで、主として、似島町字東大谷二八七の一番地(現在・似島火葬場)において、ほとんど軍隊が、不眠不休の治療活動のかたわら根気強く行なった。

最初は、一体ずつ丁重に焼いていたが、またたくまに死体の山ができ、似島町字大黃の陸軍馬匹検疫所構内広場(現在の似島中学校)で数体ずつまとめて火葬しなければ処理できない事態となった。

千人塚

検疫所は、ここに千人塚を建てて遺骨を納め、慰霊祭を行なっていたが、後に平和記念公園内にある供養塔へ納骨した。なお、町内会の機能は支障なく、従来どおり活動を続けた。

似ノ島にて

義之栄光（当時・一八歳船舶練習部斉藤部隊津留隊）

(一) 出動命令を受けた場所

江田島北岸 幸の浦 戦隊兵舎内

イ、部隊員の様子

当日午前十時から軍装検査、正午頃広島を経て九州五島へ、出戦の内示を受け、最高に戦意が昂まっていた折であったから全員切齒した。まもなく軍装検査は一時中止、舎内待機の指示が出たように思う。しかし広島の被害を推定して、早期に偵察員を出し、また救援隊を組織して繰り出す必要ありというのが兵舎での話題であった。

ロ、閃光と音響

小生はちょうど舟艇当番で海上にあり、(レ)艇の整備作業をしていたが、北方上空仰角五〇～五五度位のところに、突然、強いマグネシウム花火のような光りがあり、それがユラユラとおりて来て、約四五度位の高さの場所で、白が金色にかわり、ダイダイ色のような丸い火の玉になった。「熱い!」と思った。暫時の後、強烈な爆風の熱い風に叩かれ、つづいて間もなく、ズ・ズーンと鈍重な爆発音がひびき渡った。あらゆるものがビリビリと震え、ゴツゴツと小突かれたような感じであった。

(二)、出動の経路と周囲の状況

時刻ははっきりしないが、記憶の断片をつないでみたところから、当日午後、(レ)艇 K-12 号に四人便乗して宇品栈橋に向う。栈橋は大変な混雑で、上陸困難のため東に向う。上陸できそうな場所がなく、あまりの混乱と海岸に殺到する人波に上陸をあきらめ、金輪島・峠島を経て帰投する。報告は「広島は何しろ大変な被害で状況の正確な把握は不能、上陸も困難、海岸には被災者が雲集、市内の救護収容施設は殆ど壊滅または使用不能のため、海上輸送によって周辺の収容可能施設に極力輸送中。」ぐらいな事しか出来なかった。建造物などの被害よりも、人間の被害の大きさと悲惨さに気をとられて、この頃あいまいになる。その夜、広島は盛んに燃えつづけ、北の空は真っ赤。翌朝食後、五十三戦隊を二つまたは三つに分けて小生の編入された分隊は、大発動艇に乗り北上。服装は体操衣袴。似ノ島の検疫栈橋につき、構内にはいってすぐ左手の建物に拠点をおき、向い側(栈橋から上がって右側にあたる)の舎内に収容されている患者の看護と、次々に栈橋に着く船や舢舨からの患者を担送、また誘導する。これが作業のはじまり。被災者の輸送には機帆船や舢舨が多かったが、中に一隻りっぱな客船が混っていた。

「フクセイ」という船名であった。

(三)、活動場所とその状況

八月七日、患者の看護と担送、そして生者の氏名・住所などを聴き取り、荷札に書いて身体のどこかに結びつける。内服薬はなく、外用薬としてはマーキ口液と亜鉛華胡麻油ぐらいしかない。食器とコップは孟宗竹の輪切り。ハエがすこぶる多い。患者も飯を食い、水を呑み(おおむね死水になる)、ハエを追い払う。目玉の動き、目の光りが止った時が「死」を迎えたときらしい。死体は次第にふえて置場がなくなる。栈橋から海岸伝いに南へ三、四〇〇メートル行ったところにある厩舎へはこぶ。作業止めがかかったのは、夜八時頃であった。ロウソクをつけて部隊から運ばれた握り飯を喰う。汚れた被服の代りはない。手を洗う水も不便な島だった。

八月八日、朝から死体運搬。死体からは身元の荷札と何か遺品になりそうなもの(毛髪が多かった)を封筒に入れて、それに氏名を書き、本部(?)へとどける。また、一〇体かそこらは同じ穴の中へ材木を入れ、死体を並べて、その上に麦ワラやタタミ、材木をつみ上げて火を放って茶毘に付し、その骨灰をとりあつめた。死体そのものは、最初の一、二体は火葬窯で焼いたが、そのあとは防空待避壕を少し掘りひろげて、一穴当り六〇～八〇体程を入れ、上に土をかけて土饅頭とした。それでも間に合わなくなると、最後には筏で運ばれて来た死体を南側の崖に穿った横穴待避壕の中へ直接担ぎ込んだりした。穴の中には死体を狙って小さな赤い陸蟹が沢山いた。夕方、離家のようなところで死んだ吉成弘陸軍中佐の死体を棺に入れて運び出した。何でも朝鮮の李王家の中のどなたかの侍従武官だったとかで、拳銃で頭部を撃たれたと言う話であった(人に撃たれたのではなく自決)。その頃、火葬窯の中では、

鍋島大尉と某下士官(伍長あるいは軍曹)の二体が煙になっていた。この夜もロウソクとランタンの灯でおそくまでかかった。

八月九日、午前十時頃迄作業をすると、皆のびてしまった。昼前、部隊から迎いの大型発動艇が来て、一旦幸の浦へ引揚げた。交替が出向いたかどうかについては不詳。その夕方から小生は高熱を發し寝こんでしまう。翌夜だったと思うが、軍医の診察を受けると「破傷風」の疑いありという事で、夜中、青森県北津軽郡鶴田町出身奥瀬勇一候補生殿の付添いで、広島市の赤十字病院へかけこむ。そのまま入院という事で、小生の救護・死体処理作業はそれまでとなる。この間、日時不詳なるも広島市へ行き、御幸橋付近で救護活動・焼跡整理などを半日位やり、過労で倒れたことがあった。

(四)、その後

赤十字病院は建物が糸巻型に変型し、窓はちぎれとび、階下は一般患者と八工の渦巻きで、気分の悪くなるような環境。小生は軍人の故をもってか階上に収容される。二階は八工も少なく、悪臭も薄く、重症患者も少ない。破傷風ではあるまい、という事で二日程で

退院、奥瀬氏と共に帰隊。しかし熱はあり、下痢は続き、全身から力が抜けて、何か重い病気がかかったらしい感じが濃厚で、起きられるようになったのは十三日頃であったと思う。復員後、ひどい視力障害。毛穴からの出血、殆ど一年を周期とする発熱・発疹・下痢

症状などが昭和三十二年頃までつづく。それが原爆症状であったか否かは不詳。昭和四十三年春、申請して被爆者手帳をうけた。

八、被爆後の生活状況

生活状況

被爆程度が軽微であったし、地理的に離れた島であったから、疎開の必要もなかったほどで、家屋・家財に不自由はしなかった。しかし、生活必需物資は、終戦後もあいかわらず、ずっと欠乏していたが、市街地生活者のようなことはなく、半農半漁の生計者が多かったため、ある程度の自給自足で飢餓を切抜けていった。

被爆直後の市中のようなおびただしい八工の発生といったような現象もなく、被爆による環境衛生の悪化ということは別になかった。ただ、特殊なケースとして、宇品から送電している海底電線が故障したためか電灯がつかず、しばらくロウソク生活を余儀なくさせられた。

電灯がついたのは、それから一、二か月後であった。

九、終戦後の状況

九月の暴風雨、十月の大豪雨にもそれほどの被害はなかった。

似島町としては、幸いに戦災からも火災からもまぬがれて、市中のような特別な復興作業を考える必要はなかった。

十、その他

島内の陸軍運輸部似島検疫所、および地区外の金輪島ドックでは、被爆負傷者を多数収容したが、治療には軍医だけでまにあわず、手術を要するほどの重傷者は軍医の手で、その他は医療に経験のない将兵・軍属全員が、戦場における臨機応変の処置と同じようにテキパキと治療にあたった。

将兵・軍属は、平素の軍事訓練の中で、止血とか、繃帯の扱い方、薬品の取扱い方ぐらいのことは、だいたい修得していたので、この非常の場合、大いに役立ち、その活躍は実にめざましく、また、たのもしかった。

この時の状況について、昭和三十九年二月六日、当時似島検疫所勤務であった堀田福美・山本治郎助・奥本カヤノ・黒木マツエの四人、および当時金輪島ドック勤務であった高田治などの談話をまとめると、次のとおりである。

その一 陸軍運輸部似島検疫所

陸軍運輸部似島馬匹検疫所

(文中、右二検疫所を総称して通称の「似島検疫所」とする。)

陸軍運輸部似島検疫所・同似島馬匹検疫所

1 概要

所在地 似島町長谷一番地(但し、馬匹検疫所は似島町大黃)

被爆当時の勤務将兵軍属数 約七〇人前後(他に船舶司令部の病院船所属部隊八〇人前後)

主要建物

伝染病等 二棟(病床合計一〇〇床位、一棟当り建坪三八四平方メートル)

普通病棟 一棟(病床合計一〇〇床位、一棟当り建坪三八四平方メートル)

停留舎 五棟(一棟当り建坪約四六〇平方メートル)

宿舎 一棟(二階建延坪約九三〇平方メートル)

兵舎 二棟(一棟当り建坪約四三〇平方メートル)

馬房 一二棟(但し概数、一棟当り建坪約五〇〇平方メートル~五六〇平方メートル)

上家 六棟(概数)

その他 事務所・治療室・炊事場・消毒室・倉庫・休憩所・検査場など。

敷地面積 一三二、〇〇〇平方メートル(約四万坪)

収容期間 被爆当日から八月二十五日まで。

2 当時の概況

似島検疫所は、かの日清戦争以来、各戦役・事変・出兵のたびに、戦場からの帰還将兵は、まずここに上陸して検疫を受けた所である。将兵たちは、祖国の第一歩を、この島に踏みしめ、感慨をあらたにしたのであって、実に印象深い思い出の地として、全国の出征経験者たちは、皆永く胸底にとどめたものである。

大東亜戦争に際しても、検疫所は大いに利用されていたが、戦局ようやく危く、急迫を告げた半ばごろから、殊に昭和十九年四月以降になると、戦線の膠着からであろうか、検疫業務が少なくなり、機能も弱体化していった。

そのとき、検疫所内で陸軍船舶防疫班四箇班が編成されたが、三箇班は外地に出動してしまい、残り一箇班が所内にとどまっているという状態であった。

また、このころ、病院船部隊が所内にある停留舎二棟に駐屯していたが、その部隊が検疫所の事務所も使用したので、検疫事務を馬匹検疫所の事務所内に移して執りおこなった。

日ごとにさびれゆく検疫所を見て、勤務する者たちは、戦局のただならぬ事態を、そくそくと肌に感ぜざるを得なかった。

3 炸裂の時

六日朝は、所内に停留兵や入院兵もなく、また、帰還部隊を検疫する予定もなく、平常どおりの静かな朝であった。

海上すらも、うそのように平穏そのものであった。広島港沖に、堂々たる船団が投錨し、海上を圧していた風景も今はなく、一隻も影をとどめぬ気の抜けた海面が、ただ寂莫と眼前にひろがっていた。

その時刻、ピカッとあやしく空中が光った。瞬間、空の千切れ雲が拭うように消えていった。ズシんとこたえる衝撃と爆風が来た。同時に異様なもの音をきいた。見ると、屋根瓦が飛び、ガラスがこわれ、煙突が折れていた。「すわッ」と、一同は退避した。悪い予感が脳裡を走った。

待避壕で、じっと体をすくませ、注意深く推移をうかがっていたが、敵機襲来の様子がない。そろッと出て、不安な気で所内や近くにある弾薬庫などを見まわって、付近に爆弾投下されたところがたいことをたしかめた。

4 救護活動

何が光り、どうしてこうなったのか皆目原因不明で、イライラする気持ちをおさえながら、でもやはり何とも気がかりで重苦しい不安がつるばかりであった。

そのとき、はるか宇品方面から機帆船・さんばん(動力付小船)・団平船などが、続々と検疫所の棧橋へ向って来るのが見えた。どの船も人間があふれていて、全速力で近づいて来る。

たった今、平穏だった海面が、急転直下一変して極度の緊迫感におおわれ、あわただしさがみなぎって来た。

午前十一時ごろであった。棧橋に最初の船がついた。宇品港からの所要時間は約四〇分である。

船上に満載された人間は、全く人間の姿ではなかった。着物はボロボロ、または裸、そして血だるま、火傷して苦悶している者など、見ればだれもかれも目もあてられぬ負傷者ばかりであった。

なんとも云えぬ悪い予感があったが、予感のあいだはまだしも、このように的中し、如実に生地獄を見せつけられては、救いのないショックに、前途がすべて絶望的に思われた。「戦況は、こうまで破局におちいていたのか。」と、負傷者の上陸援助を急ぎながら、一同はただ愕然とするばかりであった。

「急ぎ収容せよ。」との命令一下、総員が出動した。重傷者は担架で運び、歩行できる者は肩によりかからせ、できない者は背負い、一人で歩ける者は歩かせて、すべての建物をいっせいに解放し、収容を開始した。

負傷者満載の船は、次から次へとひっきりなしに棧橋に着く。休むひまはない。無我夢中で収容作業を続けた。

金輪島部隊約二〇〇人、他島から来援した部隊一〇〇人ぐらい、これに病院船部隊の応援も加わって、必死の活動をつづけるうちについに夜となった。夜になっても続々と船で負傷者が運ばれてきた。

負傷者は、棧橋にあげたとき直ちに死亡する者や、運ぶ担架のなかで息を引きとる者もあり、運ばれるのを待つあいだに死んだ者も多くあった。

収容者の治療は軍医をはじめ、将兵・軍属など協力一致して次々に進められていった。

父親と六歳ぐらいの女の子が、一緒に収容され、コンクリート床の上にすわらされていたが、女の子は、父親のそばで無心に遊んでいた。父親は、その子を見守るでもない様子、そして動くことなく、じっと坐っている。通りかかった堀田福美軍属は、チラと見て「変だな。」と直感した。近寄って、肩を押すと父親は棒切れのように抵抗もなく、そのままそこへ転がった。死んでいたのである。女の子は父の死を知らないで遊んでいたのであった。

また、この日収容した負傷者のうちには妊婦が数人ばかりいたが、収容当日に二、三人の赤ん坊がうぶ声をあげた。よるこびより痛ましさの方が強く先にたつ生命の誕生ではあった。

5 火葬と埋葬

収容者は、このように上陸途端に、あるいはその当日から続々と死亡していった。しかし、間断なく運ばれて来る負傷者の収容作業に追われ放しで、死体を処理することまでは到底できなかった。

遺体は一か所に山積みされたままであったが、救援部隊の到着があって、やっと手がつけられ始めた。

死体を馬匹検疫所の方にある上家まで運んで、そこで遺品などを調べ、氏名を確認した。構内のタコ壺式防空壕を仮火葬場に急転用し、マキを集めて死体を積み重ね、それに重油を浴びせかけて茶毘にふした。

次から次にと、まったくの強硬作業で死体を積みあげて何回もくりかえして焼いたが、ついに間にあわなくなった。その結果、横穴壕に死体を運び入れ、とりあえず土をかけておいたのもたくさんあったから、壕の入口には毎夜、燐が燃えていた。

八月六日から一週間ぐらいのあいだは、死亡者あいつぎ、火葬も当日が翌日に開始して八月二十五日ごろまで続けたが、鼻を突く火葬の臭気にももはや無感覚になるほど、連日連夜の重労働であった。

これらの遺骨は、病院船部隊保管の遺骨箱 - 小さい木箱に納め、慰霊室にいったん安置し、引取者が名のり出ると、そのつど、確認してそれぞれ引渡した。

東海岸の南端(字南泊 = まどまわり)に遺骨を供養する意味で、「千人塚」と墨書した盲目さ約二間の標柱を島の住民らが立て、次々と火葬するたびに遺骨を納めた。標柱の白い木肌が眼に泌みるようで、深く哀感をそそった。

横穴に仮埋葬した遺体については、四、五年後に市役所が構内の一隅に集めかえて、供養塔を設け、おごそかに葬った。

のちに、平和記念公園内に供養塔が設置されたので、千人塚および供養塔に納めた遺骨をすべて移管した。

6 収容者数と来訪者

八月六日から二十五日まで、検疫所で扱った収容者数は、約一万人と推量される。

各収容建物ごとに収容者名簿を作成していたので、縁故者が探しに来たとき、この名簿によって、どの建物に収容されていると、一人一人に教えていたが、次第に来島する人々が増加し、係員がいちいち調べるのもまにあわなくなった。ついには名簿が引っ張りダコになるほどに、来訪者たちは殺気立ち、われ先にとあらしめて、少しでも早く探しあてようとした。

その二 陸軍運輸部金輪島ドック

陸軍運輸部金輪島ドック

1 概要

所在地 金輪島(似島東方約四キロメートル、宇品より南東約二キロメートル)

被爆当時将兵軍属数 約一、〇〇〇人

2 そのとき

光った一瞬、市内を遠望すると、見える限りの市街地全面、地上わずかの高さで、平行線のように区切られた地

面との空間が、あやしく黄色に染ったと思ったら、ところどころから黒煙が立ち昇った。

上空の雲状の煙が、その黒煙を吸いとるような状態になって、大きくふくれあがった雲と、地上とのあいだにさまざまの色が立っていた。

3 爆風

船に乗っていた作業員が二、三人、突然海中に落された。爆風に吹きとばされたのであろう。金輪島の施設は、ガラスの破損だけでなく、建物もかなりひどく破損した。

4 負傷者の収容

金輪島ドック構内には五〇〇人ぐらい収容された。

昭和二十二年ごろ、雨のために構内で山崩れがあったとき、その場所に、畳の上に寝たままの死体が数体あらわれて、当時を思い出させたことがある。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

竹屋町、南竹屋町(一部)、昭和町、鶴見町、富士見町、三川町、田中町、薬研堀町、宝町、流川町、東平塚町、西平塚町

町内会別要目

この地区の範囲は、竹屋町[たけやちょう]・平塚町[ひらつかちょう]・薬研堀町[やげんぼりちょう]・田中町[たなかまち]・富士見町[ふじみちょう]・昭和町[しょうわまち]・宝町[たからまち]・鶴見町[つるみちょう]・下流川町[しもながれかわちょう]・三川町[みかわちょう]とし、爆心地からの至近距離は、雑魚場町[ざこばちょう]と境界を接する富士見町北端で約八〇〇メートル、もっとも遠い地点は、昭和町の京橋川畔で約一・七キロメートルである。

歴史的由緒の深い地区で、福島氏時代に、今日の竹屋町・富士見町地域がキリシタン新開の名で開かれたのが、この地区の基であって、広島城の正面を形成する地域として急速に繁栄した。

平塚町は、往時五箇荘の一つであった平塚荘の遺名、薬研堀町は、その名の濠(城を守るV型のほりという)があったのが、後に町名となり、田中町には、石川丈山が屋敷を構えていて、そのころ田の中にあっただので田中屋敷と呼ばれたのが公称となったもの、また、流川町は、街側に沿うて一帯の水路があったので名づけられたが、水路は今川とも称され、泉邸の園池疏水のために開かれたもので、清い水が絶えず流下したから流川と唱えられ、三川町は、明治十五年一月新たに置かれた町で、その地が一面は下流川に、一面は竹屋川に沿い、北は堀川町に接していた故に三川町となったと、それぞれ由来正しく旧史に記されている。

城下町となってからは、当初は侍屋敷が置かれたが、後に町家の居住地区とせられ、以後、住宅地区を含む商店街として発展した。

戦後は一段と飛躍して、特に下流川町・薬研堀町境界は、商店街・歓楽街として発展し、昼夜雑踏するところとなった。

また、三川町円隆寺のとうか祭(さん)は、広島地方の浴衣着初めの夏まつりとして、今も名高く、当日は人波で広い三川町通りが埋まる。

なお、被爆直前の建物総数は約四、九七八戸、世帯数約四、〇九〇世帯、人口約一一、六七三人で、各町内会別内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
東平塚町	1,070	1,500	2,289	香川菊三
西平塚町				安田寿夫一
平塚元町				木村潤一
北平塚町				吉本芳太郎
薬研堀町	159	207	783	楠原徳太郎
田中町	204	260	1,200	田村操雄
竹屋町	250	300	1,500	平岡卯三郎
昭和町東	526	536	1,726	脇本弥一
昭和町南				横山喜一
昭和町西				西亀正夫
富士見町上組	871	265	870	鎌田良吉
富士見町本通				門田幾次郎
富士見町下組				渡辺高一
宝町	685	685	2,055	近藤逸八
鶴見町	805	不明	不明	石原満槌
下流川町	176	125	400	宮下文造
三川町	187	212	850	三宅萬次郎
東新天地	(下流川町に含む)			池田軍次郎
西新天地	不明	不明	不明	小林敏雄

また、地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
山陽中学校	富士見町	円隆寺	三川町

山陽商業学校	富士見町	興禅寺	平塚町
竹屋国民学校	鶴見町	順教寺	西平塚町
区裁判所・同検事局	三川町	禅昌寺	薬研堀町
地方裁判所・同検事局	三川町	常林寺	三川町
金子製麦所	東平塚町	興徳寺	田中町
第一信用組合	下流川町	正隆寺	昭和町西部
広島通送株式会社	昭和町	万徳寺	竹屋町
大正煉炭	三川町	琴平神社	東平塚町
逓信局倉庫	三川町	玉守稻荷神社	富士見町下組
永進堂缶詰会社	鶴見町	夜泣き地蔵(竹屋地蔵)	竹屋町
己斐病院	田中町	天使館(映画館)	東新天地
母子寮(早速チヨ)	鶴見町	花月(映画館)	西新天地
ワカバ幼稚園	東平塚町	東券番	薬研堀町
修道会館幼稚園	富士見町上組		

二、疎開状況

建物疎開

二十年三月二十一日、段原国民学校において、軍当局から二十四時間以内に家を明け渡すよう指示があり、翌二十二日に軍隊が来て、鶴見町上土孝作宅(母屋二六四・〇平方メートル、土蔵一・製材工場九九・〇平方メートル)を取りこわしたのが、この地区における最初の建物疎開の実施であった。

このとき一緒に、鶴見通り平塚側を、下流川町の角のところまで約五、六〇戸を壊したが、急なことであったので、家財道具はおのおのが自家の物を運び出し、親類や知人宅へ一応疎開した。以後、積極的に指示どおり進行し、鶴見町は、竹屋国民学校付近を僅かに残すだけという大がかりな建物疎開をおこなった。

この疎開跡地が、戦後の都市計画に際して、幅員一〇〇メートル道路(平和大通り)を開通させる一つのポイントになったといわれる。

人員疎開

戦局が日々急迫して来て、住民もじっとしてられない焦燥感にあおられたから、人員疎開も円滑に行なわれた。

老人子供・妊婦・病人をはじめ、生産や防衛にたずさわらない者に対して、町内会が勧奨し、推進した結果、各町内会とも約半分の世帯人口に減少した。

生活必需品以外の家財道具など諸物資の疎開も、どしどしおこなったので、家のなかにはガラン洞になった。ほとんど郡部へ疎開したのであるが、運搬方法にはみんな辛苦した。疎開先と連絡し、話しあいがつくと、町内会長の証明をもらい、西警察署長の証明を得てトラックを使用した。トラックは統制されていて民間人が、自由に使用できなかった。警察署長の証明なしで、トラックを使用していたのが露見し、積んでいる家財道具を三川町の道路ばたに、全部引きおろされた者もあった。そこで、警察の証明を得た人のトラックに便乗させてもらって、やっと運んだりしたが、その証明書もなかなかもらえなかった。たとえ貰えても、そのトラックを使用する順番が待てどもこず、気があせるばかりであった。待ちきれず大八車を探して借りてきて、積めるだけ積みあげた。馴れない手もとは痛み、朝からのオカユ腹で力の抜けた脚を、一步一步引きずりながら、一家中の者がエッサエッサと押したり、引っぱったりして、ともかく疎開するだけはしたのであった。

学童疎開

竹屋国民学校の学童疎開は、当局の指示どおり行なわれたが、児童を引率する教師も、児童を送る親たちも、事故の起きないようにと心をくいだいた。

昭和二十年四月十三日・十四日の二回にわたって、三年以上約三〇〇人の学童が一五人の教師に引率されて、太田川沼津沼いの山県郡加計町・安野村・戸河内町・筒賀村・殿賀村の各寺院、集会所に集団疎開をおこなった。

三、防衛態勢

警防団・国民義勇隊

警防団・国民義勇隊などの防衛組織は、広島市全地域の統一的な機構として、竹屋地区においても、町内会・隣組の強化、再編成などによって、その態勢を確立していた。

なお、警防団には、各戸が月十銭ずつ寄付をして、運営基金に繰り入れた。

防空壕と警備・訓練

各町内会とも共用防空壕を築造し、隣組単位あるいは家庭単位の防空壕を設けた。隣組用防空壕は二、三〇人ば

かり収容できる広さのもので、地区内の建物疎開跡地などを利用し、市当局の設計書に従い、疎開後の廃材を使って、町民の勤労奉仕で構築された。

各家庭の防空壕は、特別なものを除いてほとんどが二、三人はいれるぐらいの簡易な壕であった。

防火用水槽も、隣組用として水量五石五斗(九九〇リットル)入りのもの、各家庭では五斗五升(九九リットル)入りのものを設置した。隣組用水槽は、コンクリート製の他に、醸造用の桶(ホソ)を地中に埋めて利用した。家庭用は、竹の網を芯にしたコンクリート製の市販物であった。

消火器材としては、主として焼夷弾の被害時を想定し、竹ざおの先端に三〇センチメートルの縄を一五、六本結びつけた打払いや、一升(一・ハリットル)入りの砂袋、袋は紙でもよかったが、それを一〇個ばかり各家庭に備えた。また、木箱(ミカン箱など)に砂を入れて置いていた。

しかし、防火方法や器材は、他都市が空襲されるたびにそれを見ならって変更され、訓練も変わった。

演習は、婦人もかり出されて竹槍の使い方をならったが、目標は常に「自分が死んでも敵一人必ず殺すこと」であった。竹はまとめて、町内会が郡部から買いつけ、各家庭で竹の先端を削いでとがらせた。

敵機来襲の際、市の上空に張る煙幕用として、青松葉を牛田の水源池の山に採りに行き、銭湯の湯舟を利用し、直ちに着火出来る様に積んでおいた。

二十年七月ごろ、太田川のダムが破壊された場合、四〇分後に、市内が洪水になるという流言があったが、町内会の指示で、竹筒の浮袋を、各家庭の人数ずつ作った。輸送船がつぎつぎ撃沈されるので救命道具がなくなったとも言われたが、竹のフシとフシの空洞を縦に、シュロ縄で、自分の胴にまわるだけの長さにつないだものであった。

この竹筒製浮袋は海軍に供出したのもあったが、海軍が全滅して不要になったため、後に市民にくばられた。水主町(現加古町)の川端にあった大き倉庫に、その浮袋の配給を受けに、炎天下、大八車を引っぱって行ったが、成るべく良く浮きそうな竹筒の大きいのを選び、汗水たらしながら苦心して持ち帰った。

東券番

また、必勝の拳国一致体制下で、歓楽街は火の消えたようなさびれかたであった。石川ミサヨの談話によれば、栗研堀町の東券番(芸者置屋二二軒の持株)は、頭取、木村潤一・楠原徳太郎、監査役、石川ミサヨ・木村フサコほか、箱屋のおとし・おなごして運営し、当時、芸者一九〇人、舞妓一〇人ばかりいたが、戦争になってから、芸者の監札をみな警察へ返上して、軍需工場に出勤した。券番は、ミシン機械を入れて、軍需下請工場になり、お国のために、兵隊さんのためにと、日夜働きつづけていた。

四、避難経路及び避難先

避難方針

市当局の伝達によって、竹屋地区は、万一の場合、安佐郡可部方面へ避難するよう指定されていた。しかし、比治山公園は比較的距離が近いうえ、頑丈な防空壕があり、高地で浸水のおそれもなく、樹木などの遮蔽物が多いので、とにかく比治山へまず避難するようほとんどの人が考えていた。もし鶴見橋が落ちて通れなくなった場合は、山陽中学校のグラウンドということにしていて、避難経路は別に決めていなかった。

避難するときは必ず救急袋を各自持つことも決めていた。これは廃物利用の手製の布袋で、中にまず貴重品(貯金帳その他)、三角布・繻帯・骨折した場合の添え板(カマボコ板など)、それに一食分の食糧が入れてあった。ただし食糧は、その日その日が欠乏状態であったから、袋に入れようにも入れるほどなかった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
部隊名不明 通信技術練習生(約五〇人)	山陽中学校の一部
部隊名不明(駐屯予定)	竹屋国民学校

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日夜は、警報が発令されるたびに、灯火管制を厳重にしたり、モンペの非常服装で防空壕へ待避したりして、決められた通りに行動したが、なかには、馴れっこになり、疲労もしていて、発令されても防空壕へ待避しないままで、じっと解除を待っているという者も多かった。

町の役員のなかには、工場など勤め先が郊外へ疎開したため、仕事がなくなったので昼は昼寝ですごし、夜は町内会の不寝番をするという人もあった。

六日朝

六日朝、地区内では、建物疎開作業の出動について広範囲に指令が出る日であり、警防分団長は幟町国民学校の分団長会議に出席した。

建物疎開に該当する家屋を、警察がきて、標示の紙をいちいち貼って歩いたが、出勤者は、暑中ではあるし、九時集合のところを涼しいうちに片づけようとして朝早く出て来ていた。そのほかの人々は、ちょうど食事中であった。

このとき、東平塚町の石井某は、相当上空で、比治山の方から西練兵場の方へ、一機飛んでいくのを目撃した。

「今のはBの音だ。」と、傍の人にいうと、「解除になっているから、日本のだろう。」という。その飛行機は銀色に光り、音をたてながら旋回していた。

また、ある人は、B29の爆音を聴取したので、学徒報国隊として市役所前の野村生命株式会社(女子商業学校生徒一〇人がいた)に出勤しようとするわが子に「B29が通ったから、今日は休みなさい。」とすすめた。野村生命は現在の東京生命で、第一回空襲のとき直撃を受けた会社でもあった。しかし、その子は「警報が出ても、この会社は大丈夫だから出てこい、と言われていた。」と行って出勤し、そこで死んだ。同社の職員も椅子に腰かけたままの姿勢で、黒焦げになって死んでいた。

建物疎開作業状況

なお、六日朝、動員指令によって、各町から一二、三人ずつ、計一、七八〇人の国民義勇隊員(隊長・門田幾次郎)が、雑魚場町(地区外)と、鶴見町(地区内)とへ出動していた。なお昭和町西部の西亀正夫町内会長は、雑魚場町の疎開作業隊に付添って出勤し被爆、大河国民学校に収容されたが、七日午前三時に死亡した。

出勤者は、作業量の多い雑魚場町の方に多数が行き、疎開跡片づけ程度の鶴見町へは、老人や身体の虚弱な人々が行った。

鶴見町の現場には学徒義勇隊として、県立商業学校二五〇人・広陵中学校四九〇人・第一工業学校一〇〇人・進徳高等女学校四三九人・比治山高等女学校三九二人・女子商業学校四五〇人・第一国民学校二五〇人・白島国民学校六七人・楠那国民学校五九人・牛田国民学校二一人・以上合計二、五一八人の生徒達が参集していた。

なお、竹屋地区内で実施された建物疎開は、つぎのとおりである。

第一次・二十年三月二十二日 東平塚町・田中町・下流川町・鶴見町

第二次・二十年三月末日 三川町・竹屋町

第三次・二十年四月五日 東、西平塚町・田中町・三川町

第四次・二十年五月ごろ 東、西平塚町

第五次・二十年七月初め 鶴見町

第六次・二十年八月六日 堀川町・下流川町・薬研堀町・弥生町・東平塚町(以上各町とも計画で終わる)

七、被爆の惨状

六日午前七時三十一分、警戒警報が解除になったので、平塚元町柴田シゲコは、屋内の廊下でモンペをぬいでいると、飛行機の爆音がきこえてきた。その爆音がどこかへ去っていったと思ったあと、パッと周囲が明るんだ。丸い火の光りで、瞬間、目をおおった。気がつく座敷のまん中に転げており、屋根の棟木の下敷きになっていた。

「ドン」という音は聴いていなかった。必死で脱出して、周囲がまっ暗ななかで、病床にあった娘をタル木の下から救い出した。ふと見ると弥生町の方から火が出ていた。そのうちにグルリが火となった。

旋風起る

広中静は、閃光と同時におどろいて屋外に飛び出した。見ると、もう竹屋国民学校の講堂が火炎につつまれていた。その火炎は強い勢いで燃え立ち、校庭の塵芥が、空に吸いあげられるように、小さく渦巻きながら移動していた。その渦巻きに爆風で飛散した屋根のソギ板や紙屑が、吸い寄せられた。渦は右廻りに次第に大きくなっていった。ついに、その渦に芯棒が立ち旋風化すると、空中を三川町の方まで移って行って見えなくなった。

周囲の家々はほとんど押し潰されたように倒れていたが、なかに新築したばかりの家が一戸だけ建っているのを見た。また、傾斜しただけの家屋もたくさんあった。京橋川の川べりの家は川の中へ倒れこんでいた。

自然着火

屋根の角っこや物干竿をかけるツイマチの先端に、ポッと火がついた。これは熱線による自然発火であったことが、後日ははっきり判ったが、当座は実に不思議であった。そのポッと出た火が四方に燃えひろがるのが、また早い

速度であった。

石井ヨシ(現姓・赤木)は、逃げるとき、町内会の重要文書を入れて、扉や窓は赤土で厚く塗りつぶしていた土蔵の屋根が、棟木が中ほどで凹んで折れたところから、タバコの煙みたいな煙が出ているのを見た。土蔵は、こうして焼け落ち、重要文書も灰になった。

東平塚町の笹栗弥は、家屋の下敷きとなったが、三〇分ぐらいしてやっと抜け出た。出て見るとまだ一〇メートル先の人の顔が見えないほど周囲が暗かった。あちらこちらから「助けてくれ」と叫んでいる声があがっていて、手あたり次第に助けようと努力したが、壁のコマイ竹などが材木にからんでいたりして、なかなかはかどらなかった。そのうち煙がまわって来て、どうすることもできず、自分自身が危険になったので逃げ出すほかなかった。このころ、東寄りの南風が吹いていたが、燃えひろがるのも早かった。

平塚の土手にあがり、鶴見橋の方へ逃げる途中、東平塚町土手の建物疎開跡の避難道路のところ市土木課の管理する白壁の倉庫二棟(二、五間×三間及び二間×一、五間)があったが、木炭と土木器材の入っている書庫は、火が北側東角に燃えあがっており、他のドラムカンの積みである倉庫は四五度傾いたままになっていた。

木炭などの倉庫の方は十時ごろ焼けおちたが、もう一つの方は、笹栗弥が周囲の人々に呼びかけて、疎開あとの壁土をかけて、延焼をくいとめた。倉庫のかげには重傷者がたくさん横たわっていたが、その一メートルたらず前で火を消したのであった。建物は軒端から火の出たのが多かった。平素の防火訓練が活用されていたならば、火の海にならなかったかも知れないが、みんな自分のそばに爆弾が落ちたと思って逃げたのであった。

避難道路

避難道路というのは、現在の幅員一〇〇メートル道路設置のもとになった疎開跡地で、東平塚町川土手近くの棕櫚の木小路(しゅろのきしょうじ)から田中町を経て、裁判所倉庫南側、県立高等女学校の南側塀ぞいに電車道までの道路を言い、幅が八〇メートルから一〇〇メートルあり、道路のまん中には二〇メートル幅ほど真砂が敷いてあった。昭和二十年三月二十二日に着手し、六月ごろ真砂を敷いて完成した。この避難道路と、廃材が堆積している鶴見町疎開跡地は焼けていなかったため、多くの人々が避難して来た。

避難者

鶴見町の疎開あとの傍に立っている倉庫から、老人が一人で、ふとんや座ぶとんをかたぎ出していたので、町の世話役が避難して来た人々に、それを投げてやると、老人が「これは預り物だからこらえてくれ。」と制止した。「何を言うか、みな日本の物じゃ。」と言いかえして、裸に近い姿の避難者に配ったという。

大手町の方の人々も、避難道路へたくさん逃げて来ていた。中に、全裸の髪をふり乱した女が大火傷していたので、防火用水槽(深さ一メートル)に入れ、首から上だけ出させて休ませておくということもあった。

弥生町の方からは遊廓の女が半裸になって逃げて来た。左手を右手で持っている持ち方がおかしいので、見ると皮だけでくっついて手が折れていた。「もう、折れている。」と、何事でもないようにその女が言った。

また、ちょうど鉢巻きをし、円匙をかついだ電信隊の兵士が一〇人ばかり通りかかったため、下敷きになった人々の救助を頼み、火がくるまでに幾人かが救出された。

午前九時に少し前ごろ、鶴見橋畔南側の市の排水ポンプ所が、川の方へ四五度傾いたまま瓦が落ちかけており、火がついていたので、付近に逃げて来ていた人々が、崩れた壁の赤土をかけて消しとめた。

鶴見橋付近の状況

鶴見橋は落ちておらず、どんどん避難者が比治山へむかって渡っていったが、橋床のへりから火が出ているのを見つけたので、逃げて来ていた者が協力し、砂をかけて消しとめ、危く焼失するところを防いだ。

鶴見橋の西詰のたもとの、向って右側のコンクリート敷きの上に、中学校の一年生ばかりの死体が三〇体ほどならんでいた。鶴見町の疎開作業隊らしく、ここまで逃げてきて死んだのであった。山陽中学の生徒らしかったが、砂が全裸体にまぶれていて、まるでキナ粉餅のようになっていた。中にはまだ呼吸のある子どももいた。死んでいるのがみな男の子どもばかりで、女の子はおらず、しかも大人が一人もいないのが更に痛ましく思われた。

その反対側の向って左では、平塚町内会の山崎副会長が、自分の工場からソーダ水二箱を持ち出して来ていて、誰れ彼れとなく避難者に飲ませて元気づけていた。また、橋のそばの雁木(がんぎ)のところで、駐在所の小池巡査部長夫妻が、じっとうずくまって乾メンボを喰べていたが、ひどく疲れていた。

柳橋が自然着火して、一時間余り後に焼け落ちたため、比治山橋・鶴見橋の方へ避難者がたくさん押し寄せ、死者も続出して凄惨をきわめたのであった。

鶴見橋を渡った比治山側の河岸にも、疎開作業の学徒が三〇人ばかり、死んだ者、重傷している者などが、ずらっと横たわって苦悶していた。笹栗弥に水をくれと言うので、拾ったビール瓶二本に入れて持ってゆく途中、近親者を探しにきたらしい若い男がいたので、引きかえして、また、次の水を持ってこようと思い、その若い男にビール瓶を渡し、学生に飲ますよう依頼したところ、自分が飲んでしまった。それを橋畔に立っていた憲兵がみていて憤激し、抜刀して「ブツ斬ってやろうか。」と大声でどなったという。

地区全焼

このような大混乱のうちに、竹屋地区はついに全焼したのである。火炎は、だいたい炸裂直後から九時ごろにかけて地区全体を呑みつくしてしまい、十時頃から十一時頃にかけて一切が燃え落ちてしまった。

不思議であったのは、鶴見町疎開跡に積んであった廃材が、周囲はみな火が消えてしまった午後四時ごろ急に燃え出したことであった。また、火が消えたあとの昼前ごろ、あちらこちらからドーン・ドーンと、ドラムカンの爆発するような音が、夕方まで続いた。正午ごろ、南の方角にあたる専売局の塩の倉庫の炎上するのが見られた。

雨

炸裂直後に雨は降らなかったが、夜八時ごろ、五分か一〇分間くらい、パラパラと降って来た。

食糧

夕がた、比治山西側登山口の多聞院に「仮総監府」が設置され、避難民の救済活動をはじめた。午後六時ごろ炊出しをするというので、鶴見橋畔の避難者を代表して笹栗弥が出向いた。仮総監府には軍人はおらず、警察官が数人いて、にぎりめしを配給していた。どこから来たのかトラックが積んで来たもので、鶴見橋西側として一五三人分の配給を受けた。その後、避難者が多くなったので、数回かよったが、終りには、にぎりめしがなくなり、乾パンだけになった。

なかには鶴見町の栄進堂(敷地一、〇〇〇坪)の築山の木に、建物疎開に出動した学徒が、持参の弁当をたくさん吊っていたのが、そのまま残っていたので、それを取って食べる者もいた。また、台所の流し台の下のバケツの中へ、戸棚の卵が飛んで落ちていたが、ちょうど良いゆで卵になっていたの食べた者もいた。

夕がた、二五、六歳の若い巡査が通りかかり橋畔で休んだ。その巡査が、「六人で山口町の東警察署の焼失を辛うじて防止したが、何十回か三階へ防火用水を運びあげた。」と言った。巡査はまったく疲れきった顔をしていたが、しばらく休んで宇品の方へ帰っていった。

諸現象

路傍の死体は、いずれも一様に両手を広げられるだけ広げて上にあげ、どちらか一方の脚を、膝で曲げたまま上げて硬直していた。男も女も仰向けになって死んでいた。また、焼け残った電柱の高いところに、女の頭髮が一束ぶらさがっていた。

川土手の舗装道路は燃えなかったが、裸足の足裏が熱くて、歩かれないほどであった。アルミニウム製の物やガラス類は溶解し、庭石や墓石はポロポロになっていた。なお、衣類などは、木綿は焼けにくく、人絹のシミーズなどはたやすく焼けた。黒いものは特に焼けた。

熱線によって、右手首が火傷した罹災者の一人は傷口が(く)の字型になっていた。こんな一寸した負傷だけで助かった人もわりかたいたが、その後、たいがいの人々が死んでいった。

なお、各町別の被害状況は、次のとおりである。

炸裂瞬間の被害

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
竹屋町	100	-	-	-	48	32	20
平塚町	100	-	-	-	49	28	23
葉研堀町	100	-	-	-	63	22	15
田中町	100	-	-	-	74	19	7
富士見町	100	-	-	-	63	22	15
昭和町	100	-	-	-	42	35	23
宝町	100	-	-	-	43	33	24
下流川町	100	-	-	-	77	10	13
三川町	100	-	-	-	89	8	3

踏みとどまった昭和町二五人

栗栖勉(談) (被爆地・昭和町六二九番地 当時三四歳・警防分団班長及び在郷軍人会参事)

空襲警報が発令されたので、六日午前一時ごろ、被服廠警備員であった私は、ただちに警防団の服装をして出勤したが、まもなく解除になったため、五時半ごろ帰宅して、「起こしてはいけないゾ。」と、家人に言って仮眠をとった。

八時ごろ、やっと目覚めて、茶の間にいき配給タバコをすった。半分くらいすったときであった。急に、青いような光線が眼に入ってきた。音はきかなかつたが「あらッ」と、疑心のおもむくまま裏の物置小屋に行ってみると、平素から火の気は何一つないのに、ぼーッと煙がのぼっていた。私はすぐ消しとめた。

「おかしいゾ」と、思いながら外の様子を見ようと、家の前をのぞいた。家の前は、鶴見町から平塚町へかけて実施された建物疎開作業の最終地点で、まだ倒された家そのまま地上に重なって広場になっていた。鶴見町付近には学徒報国隊や国民義勇隊などが、その跡片づけに来ていたが、昭和町一帯には六日の朝はまだ来ていなかった。ただ、タキギ拾いの人が幾人か散見されただけであったが、ふと見ると、その四、五人の婦人たちの一人が倒れていた。それが三戸のおばあさんで意識不明、その近くに三戸の娘さんが地べたに坐りこんでいて、「腰がたたない。」という。

私は傍にちょうどあった水槽の水を手にとり、おばあさんの口にそそぐと、すっと息をふきかえした。娘に叱りつけるように「しゃんとせんかッ。」と、私がいうと、反射的に娘さんがすっと立ちあがった。

私は町内をまわってみようと思い、一〇メートルばかり先の三村さんの家のところに来ると、玄関のなかの障子に火がついていて、三村のおばあさんが消していた。すぐ手伝って消しとめた。

そこから比治山橋の下手、現在の昭和町市営アパートの前の河岸緑地にあたる所に出て、付近の状況を見ると広島市街は見えるかぎり倒壊しており、あちらこちらに、ポツポツと煙が立っていた。

その帰り、兼吉さんの二歳の子供が、一尺ぐらいの縁のところ、壁土の下敷きになって泣いているのを見つけた。救い出そうとして、重い壁土に手こずっているところへ、父親が来て、一緒に力をあわせてやっと助け出した。そこへ、町内の娘さんが来て、「母が下敷きになっているから出してください。」と、頼んだが、私は、自分の隣組がみなやられていて行けず「近所の人にたのみなさい。」と言って帰らせた。あとで聞くとところによると、その母親は、結局救出されず、下敷きになったまま焼け死んだということである。

昭和町では、下敷きになったまま焼け死んだという人は四、五人ぐらいであったが、ある老夫婦の家では、老妻が下敷きになって助けてくれと叫ぶ声に、「出してやるゾ。」と、老人は言いながら逃げ出したまま帰って来ず、残された老妻は生きながら焼死したということである。

町民は、すごい突発事態にあわてふためいて、何らなすところなく、ただ倒壊した自家のまわりをウロウロしており、もう正常な意識を失っていた。不安のどん底に叩きおとされ、混乱状態にある人々にむかって、私は大声を出して、川土手の上に集よう指示した。

もう十一時ごろにたっていた。土手に集って来たのは二五人で、比較的軽傷者かあるいは奇跡的に無傷の元気な人々であった。重傷した者は、それぞれの家族に背負われたり、手をひかれたりして四散したのである。

それでも二五人のなかには、かなりの傷の人や火傷した人や、発狂状態になった人もあったので、元気な男が協力して、疎開跡の廃材を拾い集め、土手の上に二間×一間半のバラックを急造して収容した。

市中心部はすでに猛火につつまれていたが、調べてみると、風が南から西北へむかって吹いており、昭和町一帯はいわば風下にあたるから、延焼からまぬがれるだろうと考えられたので、私は土手に集った人々に対して、どこへも逃げないように指示した。

川は、ちょうど潮がひいていくところであったが、敵機が来襲するので、婦女子はそこにあった舟に乗せて、比治山橋の下へ隠れさせた。比治山橋は、南側の手すり全部川の中へ落ちただけで、通行には不自由しなかったから、市中から比治山公園へむけて逃げる避難者が、続々と渡っていった。みんな裸同然で、血まみれ埃まみれになっており、なかには力なくその場に行き倒れて絶命する人もたくさんいた。橋上にはいつ果てるともない死の行列が続いていたが、川べりには、わりと避難した人がいなかった。

そんなとき、私たちが建てた土手の急造バラックに憲兵が一人やって来て、「みんなただちに比治山へ逃げろ。」と命令した。だが私は頑としてはねつけた。「比治山の周囲は家が密集しているのではないが、そこが焼けはじめたらどうするのだ。われわれは、ここに火が燃えて来たら川に入る。なまじっか動かないほうが安全だ。」と反駁した。憲兵はすごい権幕で私にくっついてかかって来たが、市中全体の一大事のさなか、私にばかりかかわっておれないので、

ついにどこかへ去っていった。

しかし、午後二時ごろになって、ますますつのる火勢はついに昭和町一帯にも迫って来た。火はみるみるうちに広がったが、土手の付近一帯は疎開作業ですでに家屋が壊されていた関係からか、火災の熱さをさほどに感じなかったのも、逃げないですんだ。昭和町付近の倒壊家屋が完全に焼けてしまったのは、午後六時ごろであった。

このようだ状態のなかで、夕がた午後五時ごろ、呉市から救援の食糧が到着し、大正橋の交番所のところで配給があるということを知った。私は元気な男子を五人ほど指名して、配給を受けに行かせようとしたが、町内会長の印鑑が必要だということで、ハタと困った。町内会長は、二五人が土手に集ったときには、すでに姿が見えなかったし、どこへ避難しているかということもわからなかったからである。二五人の町民は腹をたてたが、あとでいろいろ聞くとところによると、広島がこうなる前、指導的な地位にあって、厳格な命令を出していた責任者が、かえって我先きにと安全地帯へ逃げ出していたという事例はたくさんあったようである。

そうこうしているとき、比治山橋の西詩で、竹屋連合町内会副会長の門田さんが、血まみれになって通っているのに出あった。もしやと思い聞くと、印鑑を持っておられるとのこと、さっそく借りて、配給を受けとりに行かせた。申請人数は、二五人を倍にし、二ギリめし五〇箇余りをもらって来た。

私は、火が迫って来る前、自宅の倉庫から白木綿の反物を取り出して来ていたから、裸同然の避難者に三尺ずつに切ってくばっていたが、そのとき、学徒動員で観音町の三菱工場に出動していたという女生徒が、裸すがたで四、五人通りかかったので、さっそく木綿でからだを巻いてやり、残っていたにぎりめしをやって帰らせたこともあった。

その夜は、土手の小屋にみな泊った。意識不明のところを救出した三戸のおばあさんたちや幾人かの婦人は、橋下に舟をつなぎ、その中へ寝かせた。

男子は五、六人が交替で、不寝番に立ち、バラック小屋を守った。

翌七日の朝、食糧を確保するために、婦女子六、七人を指名して、広島文理科大学のグラウンドの畑に、サツマ芋を掘りにゆかせた。何度も運んで相当確保したあと、監視員に見つかってしかられたと云って婦人たちが帰って来た。

比治山橋の上には、死体をあまり見かけなかったが、川のなかには、青ぶくれした死体がたくさん浮いていた。それを、工兵隊の舟が来て、一隻に一〇体ぐらい結びつけて、川上の本隊の方へ持って帰った。その作業を一日中、何度も繰り返していた。

被爆後、三日目に矢賀町に避難していたという町内会長が、町内に帰って来た。昭和町の町民がずっと踏みとどまっているということを知ったのか知らないが、町民のなかには立腹して責任をただすような言葉も出たのであった。しかし、万事やむを得ないことであつた。驚天動地の思いがけない大惨事の中でのことであり、一応むかえ入れた。

町内会長は、皆に「行くところがある人は、ここから出て行くよう。」にと、状況を説明して話したので、二五人のほとんどの者が、それぞれ縁故をたどって別れて行った。ただ、そのうちの幾人かが町内会長とともに、その後も踏みとどまって、倒れなかった大浜さんの洋館応接間に藁を敷き、罹災証明書の発行など町内の事務をとったのであった。

八、被爆後の混乱と応急処置

鶴見橋付近には、軍人も警防団も来ていなかったのも、比較的傷の浅いものが周囲の避難者の世話をした。

橋のたもとに逃げているとき、敵の戦闘機が四機か五機ぐらいの編隊で夕方までに四、五回来襲した。来るときはいつも宇品の方から飛来し、上空を旋回し、東北の方へ去っていった。そのたびに「隠れる、耳をふさげ。」と、大声で言ったが、もう逃げたり隠れたりする者はいなかった。幸い機銃掃射もなかった。

重傷者の収容

救援隊も医療班も、六日には来なかったようである。また、応急救護所も地区には設置されなかった。ただ午前十時ごろ、暁部隊が来て、トラックで重傷者をつぎつぎに運んでいった。宇品の広陵中学校へ運ぶということであったが、あとで行ってみると運んでいなかった。トラックは何度もかよって来たが、鶴見橋畔の学徒の死体も運んでいった。

負傷者で歩ける者は、ほとんど比治山へ行って軍隊の治療を受けたが、少々の傷は水道の水をさがして、自分で

傷ぐちを洗ってすませた。

焼野原

地区内で、内部は全焼したが、外郭だけでも焼け残った建物は、信用組合金庫・裁判所書庫・赤煉瓦建ての山陽商業学校校舎だけであって、その他は一望の焼野原と化し、鶴見橋のところから、西は己斐、南は宇品までひと目で見渡せた。

六日の夜

六日、夜になると、三川町・竹屋町・下流川町あたりには人影見えず、ところどころにまだ余燼がくすぶり、赤い火炎があがっていた。殊に、栄進堂のところの電柱の大きなトランスが、夜通し燃え続けているのが不気味であった。

なお、別れ別れになった肉親の安否や負傷した家族が気かりなので、避難道路の焼けなかった防空壕に四、五〇人が寄りあつまって仮泊したが、ほとんど平塚町付近の住民であった。

仮町内会事務所開設

一方、郡部へ避難する者も多くいて、これの処理を行なうため、六日の夜、鶴見橋の西詰に仮町内会事務所を笹栗弥が設置した。疎開あとから焼け残りの畳を拾って来て、地べたに敷き、たる木を結びあわせて柱にし、唐紙を屋根にして、川土手の約一・五メートルある段落ちを利用し、応急にまにあわせた。

罹災証明書を書くにも一枚の紙すらないので、拾って来た唐紙を破り取って使用した。むろん鉛筆もペンもないので、堅いような消し炭を拾ってきて書いたが、すぐに無くなった。

比治山橋を渡って東側の、元師範学校事務所(現在・ピガー製菓会社のところ)に暁部隊将校が詰めていたが、その炊事班から五、六人の兵隊が、飯盒にぜんざいを入れて、仮設事務所に見舞いに来た。

その後、空襲で災害のあった場合に、仮事務所の設置場所として予定していた東平塚町の法華宗事務所本門仏立講の炊事場あとに、水道も出ていたので、ここへ仮事務所を移し、また、唐紙を拾って来て、消し炭で「東平塚町内会仮事務所」と書いた看板を立てた。

早速、多聞院の仮総監府へ、用紙と鉛筆を貰いに行くと、四、五人の新聞記者と服部副総監がおり、状況発表がおこなわれて、「大塚長官戦死、粟屋市長戦死云々」など一〇分ぐらいかかった。

用紙と鉛筆をたのんで、総監府用箋を三〇枚もらい、そこにいた巡査から削って小さくなった鉛筆を二、三本わけてもらった。

すぐ仮事務所で事務を再開すると、罹災者がわれもわれもと押しかけて来た。八日、九日になると、けんか腰になるほど書き続け、とうとう十日ごろに紙も鉛筆も使いはたしてしまった。この仮事務所で十二日の夕方まで、ともかく証明書の発行や救援物資の配給などを取扱ったのである。

最後の国民儀礼

八日午前七時ごろ、仮事務所の前の旧道路上に、平塚区域に残存して生活していた者が集った。毎日、町内会が琴平神社の境内で行なっていた「国民儀礼」をするためである。

四〇人ぐらいの人数が、あちこちの防空壕や残骸の陰から出て来たが、ほとんどが年長者で、若い者の顔は見えず、しかも女性が三分の二ぐらいであった。

どの顔もどの顔も疲労困憊しはてた顔で、着ている物もヨレヨレだし、からだ全体がひどく汚れていた。眼はくぼみ、蒼黒く乾いた皮膚は、全く異様であった。

世話役の笹栗弥が音頭をとり、一同は皇居にむかって遥拝した。

「ここに集っている人は、疎開先のない人や肉親の死骸の判らない人などで、やむを得ず踏みとどまっていると思う。」と、激励するつもりで挨拶をすると、一人が突然大声で泣きだした。それを合図のように、全部の者が、ワッと泣いた。司会者も続く言葉が出ず「思いきり泣きましょう。」と言っただけで泣いた。しばらくして、「みなさん。泣いていたのでは戦争に勝てません。敗けたら、これよりもっとみじめな姿になります。親や子の死にあっても、今日、これきりで、今後は泣きませぬ。」と、やっとしめくくりを言って別れた。

なお、ここに集った四〇人は、ほとんど原爆症で死に、現在(昭和四十一年)笹栗弥と広中静の二人が生きながらえているだけである。

防空本部設置

多聞院の仮総監府は、九日までで閉鎖された。十日から山口町の東警察署に設置された「防空本部」で、にぎり

めしや、乾パン・ワラ草履などの配給を受けた。十三日以降は市役所で配給を受けることになった。

死体の収容・焼却

死体の収容は、七日昼ごろ、すでに暁部隊が来て、氏名不詳者のみを、避難道路の中心より南側の地域で約三〇体ほど担架で集め、八日は、同道路の中心より北側を処理し、比治山の鶴見橋突き当りの谷間で焼いた。その遺骨がどう処理されたかは判っていない。また、栄進堂の大きな築山の南側の陰でも、死体を焼いていた。兵隊は割木をどこからか持って来て、それに石油をかけ、一度に二、三〇体ずつ重ねて、何度も焼いたが、だいたい九月初め頃まで茶毘にふす煙が絶えなかった。

死体の中には、半焼のもあり、氏名の解るのは、年齢や名前を書いた荷札を頭の繻帯などに兵隊がいちいちつけたが、みな服がボロボロになっていたのので衣類に縫いつけていた標示書きは読み取れないのが多かった。

肉親や縁故者のある死体は、個々に収容されて、その住居跡で焼却をおこなったから、夜遅くまで野火が焦土の中の、そこらじゅうに上がっていた。

町内会再開

八月十三日から平塚町では、正式な町内会長を決めることになり、ただ一人、印鑑を持っていた広中達省が役所の手続きなどにちょうど良いということで決定した。下流川町は、十二日ごろから常林寺前の交番所跡で、警防団消防部長の宮本行雄が会長になって事務を執った。この頃はまだ、三川町も薬研堀町も鶴見町も町内会はなかった。

二十一年四月ごろ、地区全体の連合町内会長として安田寿夫を選出し、事務所を西平塚町の自宅バラック小屋に置いた。五、六月ごろになって、三川町・薬研堀町・田中町を併せて末広霞が町内会長に就任し、少し遅れて竹屋町は山崎理髪店主、鶴見町は門重才助が就任し、昭和町は戦前からの町内会長横山喜一が再任され、それぞれ町内会を再開した。

九、被爆後の生活状況

炸裂後、郡部へ避難した者も多かったが、現地にとどまって焼け残りの防空壕暮らしを続けた者もかなりあった。炊出しのにぎり飯や配給物資のあるときに、あちらこちらの防空壕から出てきて顔をあわせ、「あっ、生きていたのか。」と、幸運をよるこびあったりした。

六日から九日までは、軍隊放出の乾パンがおもで、時々のにぎり飯の配給があった。

市役所が配給を扱うようになって、乾パン・米・野菜・魚など少量ずつながら配給されるようになったが、とてもそれだけではならず、生きていけるものではなかった。

食糧係をおく

そこで町(このごろは漠然とした周囲の居住者の集合体)の食糧係を決めて買出しをおこなったところもあった。しかし、米や麦の入手はむづかしく、食べにくい可部のヌカだんごを買って来て食べた。買出しの食糧係が、統制違反で警察につかまり、せっかくの食糧を没収されたので、待っていた者みんな空腹をかかえて過ごさねばならなかったこともあり、没収した食糧は警察官らが分けて食うのだと、憤憑をぶちまける者もいた。

八月末ごろの居住者

八月末ごろの居住者状況は、平塚町が一番多く六〇世帯ぐらいで、つぎに昭和町が一五世帯ぐらい、三川町・下流川町・薬研堀町・田中町を併せて約一〇世帯ばかりで、その他の鶴見町・富士見町・宝町あたりは、人がほとんど住んでいないようであった。

復帰者は、焼け残りの柱やたるき、焼トタンの使えそうなのを拾ってきて、焼け釘を叩きつけ、小さなバラックを建てた。

その建てる場所は、思い思いにしないで、公有の疎開跡地に建てるよう町の世話役が指導した町内もあった。理由は、焼跡の瓦の上にはまだ放射能が残存している怖れが多分にあると思ったからである。

被害のあまりなかった地区の某市会議員が、市役所から新品の釘樽をたくさん車に積んで持ち帰ったのを罹災者の一人が見たので、早速、市役所配給課にいき、「焼跡の居住者にこそ配給されたい。」と、強硬に談判したが、そんな釘はないと言ってことわられたというようなこともあった。

ハエ・シラミの発生

被爆後、しばらくすると、ハエがむらがって発生した。皮膚を刺すハエで刺されると痛かった。その大群が間がな隙がなまつわりついて離れず、食事のとき、食べるものと一緒に口中にはいるという状態であった。駆除する方法もなく、てんでに追っばらったが、追われて逃げるようなハエではなかった。

しかし、暗いところにはいなくて、防空壕内には入ってこなかった。バラックをよう建てない老人や病人を壕に入れていたが、これらはハエに刺されることはなかった。また、シラミも多数発生した。特に女性で頭髮にシラミをわかしていない者はなかった。

食糧の入手

食糧は市役所からの配給だけでは不足なので、郡部へ買出しに行ったが、建物疎開跡地に耕作されていた芋やカボチャが焼け残っていて、それをてんで取って食べた。カボチャはまだ早く、握りこぶしぐらいの未熟なままを炊き、米の代用にした。炊くときに、水道が出ない場所では、満潮時に川水を汲んできて、それで炊くと塩気がついた。芋もまだ太ってはいなくて、細い筋ばかりのようなイモを、取ってきて食べた。地面の葉っぱは焼けていたが、土を掘ると、芋は焼けていないで出てきた。焼けていない葉っぱは、茎の皮をむいて一緒に炊いた。また、防空壕に貯蔵してある食物をさがし求めて、焼跡をほつつき歩く者も多くいた。

近郊から大八車をひいてきて、焼跡に転がっている鉄の風呂釜や瓦その他目ぼしい物を掻き集めて、たくさん持って帰って行ったが、罹災者らはみんな食べることで精いっぱいであったから、ただ傍観していた。

平塚町から罹災者の代表者が野菜を買いに大河へ行ったとき、女が畑で野菜を採っていたので、事情を言って分けてもらおうとしたが、「金をもろうても、爆弾が落ちてこうなっては、金があっても何になる？」と言って大根の一本もくれなかった。代表者はみんなが待っている町へ、から車で帰りながら泣いたという。物々交換なら入手できるという人もあったが、その物品が罹災者にはなかった。罹災者が持っているものといえば、傷つきながらも、辛うじて助かった一つの生命と、僅かな金だけであった。

暗い夜

防空壕やバラック生活で困ったのは、夜の明かりがないことであった。傾いたままで焼けなかった鶴見橋畔の六〇馬力のポンプ所に二個のトランスがあったので、その中の油をヤカンに汲み取り、ヤカンの口にボロ布をつきさして芯代りとして、灯をつけた。このトランスの油を、平塚町付近の罹災者はみんな翌年まで使って夜をしのいだ。ロウソクが、市役所から二、三回配給されたが到底足りもどうもしなかった。二十一年四、五月ごろ、焼跡の裸線を拾い集めて、個々に電灯をつけた。

終戦

八月十四日、天皇陛下のラジオ放送があるらしいと、焼跡に伝わってきたので、罹災者のある者は、十五日に広島駅まで歩いてラジオを聞きに行った。それは、「忍び難きを忍び、堪え難きを堪え云々」と、日本が無条件降伏をした放送であった。その玉音放送は泣いておられるような声であったが、聴いている者も泣いた。「戦争は終わった。負けたんだ。ソ連が寝返ったんだ。」と、口々に言い、張り切っていた全身の力が、一度に抜けた。がっかりしてその場を去ると、深い空虚におそわれた。

暴風雨の襲来

九月十七日の夕がたから風をともなった土砂降りの雨となった。暴風雨は夜中の十二時まで焦土一帯をおそって吹きに吹き、降りに降りまくった。十二時過ぎると雨がパツタリと止んで、風速三、四〇メートルの暴風が襲ってきた。風は西から東に変わって更に烈しくなった。バラックのトタン屋根が、鋭い悲鳴のように、キキキキと叫び続けた。トタンが煽られて剥げそうになったので、風の吹きまくる中を屋板にあがり、重石でおさえたが危険きわまりない。浸水はますます深くなってきて、平塚の川土手の石垣の下段を利用して一〇世帯のバラックにまで水が上がって、水深四〇センチメートルぐらいにもなった。浸水と暴風で、罹災者らは身動きできず、石垣やコンクリート壁にヤモリのようにへばりついたまま朝をむかえた。朝方、風が一回転して西風になった。そして、パツタリと吹き止んだ。

夜が明けてみると、焦土が一面水没していた。川土手から見えたのは、栄進堂の築山跡と、山陽商業学校の校舎・第一信用組合の倉庫・裁判所書庫・富国ビル・小町の中国配電会社ビルの残骸だけであった。

仮住居にしていた防空壕はみな潰れた。それに引きかえ、バラックの掘立小屋が、風の中で倒れないよう材木で突っ張ったり、電線で結んだりして守ったとはいうものの、不思議なくらい倒れないで立っていた。

十月八日の阿久根台風の時も、平塚の川土手の下の段が一〇センチぐらい浸水したが、前の枕崎台風ほどではなかった。しかし流川町方面まで水没した。川は増水し、濁流が逆巻き流れ、上流から太い材木や樹木がどんどん押し流されてきて、鶴見橋があやうくなった。原子爆弾にも守りとおした橋を落すまいと、付近の者が協力して、橋げたに引っかかりそうになる浮流物を必死で取りのぞき、流失からまぬがれることができた。

この暴風雨によって、焦土一面に堆積していた汚物が、まるで洗滌したように一掃された。そして、急激に青みがかり、雑草が丈高く繁茂した。殊に鉄道草がたくましく、秋晴れのもと、ひろびろと風に靡いていた。その中をトボトボと、復員兵がわが家のあとを探すのか、往きつ戻りつしている風景が、日増しに多くなった。破壊された駅に降り立った復員兵の一人が、荒廃した焦土を眺めて落胆のあまり、短刀で自決したという話を聞いたのもこの頃であった。また、復員くずれといわれる若い男が、夜昼なく出没した。ものを尋ねるふうをして近づき、いきなり目つぶしをし、持っている物品を奪う辻強盗が、鶴見橋の上や平塚町の大ガンキの土手などで発生した。

あるいは、人のいないバラックに侵入し、置いてあった古服を盗っていった泥棒もいた。警察力は無く治安は乱れる一方であった。

秋十一月ごろ、県庁あとが県病院あとへ復員兵収容所をつくる計画があったが、どうしたわけか、これも実現しないで終わった。

闇市利用

広島駅前のできた闇市では、色々な物が売買されていたので、これを利用する者も多かった。丸裸の罹災者ながら、妙なもので現金はみんな幾らかずつ持っており、代用食のダンゴの闇買いに銭がないという人はいなかった。

復帰者

昭和二十一年の二、三月ごろから、郡部へ疎開していた人々が、ポツリポツリ復帰しはじめた。

これらの人は、かつて住んでいた家の跡を片づけて、バラックを建てたが、瓦礫の中から永く使っていた家具の端くれや、失ってはならなかった調度品などが、焼けただけ変形して出てくるたびに、拾いあげてはそっと、片隅にならべた。その一つ一つは、もはや取返すことのできないものであったが、被爆者らは何時までも諦め切れないもののように、拾う指先をふるわせた。人々は、にわとり小屋のようなバラックの周囲にたどたどしい手つきで菜園をつくった。市役所や青年団が配給したキビやトウモロコシ・カボチャの苗・イモづるなどを植えて、食糧の補給をはかり、どうしても生き抜こうとした。

経済活動

二十二年ごろになって、復帰者もようやくふえて来て、バラックの店舗もできるようになった。竹屋地区では最初に酒を売る店ができた。それに続いて調味料をあきなう店ができ、米・肉の闇売り人も横行した。やっと店らしい店ができたのは、二十二年も半ばを過ぎてからであった。しかし、衣類などの店はまだなく、これはもっぱら駅前の闇市を利用した。

竹屋地区の復興は、隣接の幟町地区よりも幾らか遅れていたが、経済活動も次第に伸長して、このごろからやっと復興路線を歩みはじめたのであった。

復興の家第一号

原熊太郎(北陽)(談) (当時・中国軍管区司令部常勤報道員・愛国少年団副団長)

親もとを離れて県下各地の農村に、集団疎開をしている国民学校児童の、激励と慰安をおこなう放送時間を設定することになり、当時、中国軍管区司令部報道員であった私は、八月六日の朝、午前六時四十五分の汽車で小月飛行場に向うことにしていた。

小月飛行場には、少年航空兵出身の「荒鷲」が多数入隊していたし、隊長樫出大尉そのものが同じく少年航空兵第一期の出身で、私と個人的に以前から親しくしていたから、小月に行けば何か得られて、立派な原稿ができるに違いないと思われたからである。

七日までに原稿を仕上げ、八日に検閲をおこない、九日にテストして、十日に放送をするという計画を、軍管区司令部の報道部主任山本中尉(中国新聞社の長男)が私に参謀長からの命令として伝えた。

私は、国民服に軍靴・巻脚絆、それに鉄兜を背にかけ、陸軍報道班員の腕章をつけ、カメラを持って六日の早朝、富士見町の自宅(修道会館幼稚園建物)を出た。

広島駅では切符制限をしていて、六時四十五分発のは無いから、九時の汽車に乗るように言ったが、私は陸軍報道班員としての公用であると主張して、改札口を突破、強引に発車まぎわのその汽車に飛びのった。

汽車が大竹駅近くになったとき、何か窓外にピカリと光った。音は聞えなかった。

大竹駅では、駅長が不安げな蒼白な顔色をして、広島市の方を仰ぎみながら、ホームに立っていた。

原子爆弾の炸裂など思いつく者はなく、汽車は出発した。

小月に着いた私は、すぐ樫出隊長の自宅を訪ねたが、すでに出ていたあと、電話で隊に連絡すると、明日がちょうど三か月に一度の休暇の日だから、夜まで待つようにとの事で、私は一泊することにした。

放送原稿は「墜ちる。墜ちる。B29、火ダルマになって墜ちる。」という題で、徹夜の作業を続け、終わったのは三時ごろであった。

翌朝六時ごろ、物音に目がさめると、樫出隊長が台所で湯を沸かしており、赤ン坊が生まれるという。産婆も来てめでたく女児誕生である。日の出の頃生まれたので日出子と名づけられた。

原稿を持って小月駅に出てみると、「広島は全滅です。汽車もありません。」と、駅長がいう。

私は、広島の師団司令部で、米軍では近くすばらしい威力の新兵器ができるのだということをきいたのを思い出した。それが来たのだなと直感された。

午後四時ごろ、下関駅から小月に電話があり、軍用の救援列車が通過するというので、陸軍報道班員の私を、ここで乗せるようすぐ交渉して成功した。

夕方七時ごろ、広島市を目前にする佐伯郡五日市駅まで乗り入れた。ここからは徒歩で市内に向かわねばならなかった。

一步一步、歩いていく程に惨禍は大きくなった。

この頃、庚午に一戸の家を借りて、家族や家財の疎開に備えていたので、そこへ立ち寄ったが、妻も娘も来ていなかった。

不安が急につのって来た。富士見町の家でやられたかと思うと、いたたまれなかった。

庚午橋を渡り、死骸の累々と横たわる相生橋に出て、まず師団司令部へ向ったが、そこには何もなかった。広島城も吹っこんでいた。ただまっ赤な火明りが夜のとばりを透かして見えるだけであった。

足もとに見る死骸のなかには、まだ生きていて、ピクピク動いている者もあった。

残火や残骸をさけながら歩かれるところを歩いて富士見町まで行ったが、そこも吹っこんでいた。私はやむなく庚午の家に引返した。

翌八日の朝、再び司令部跡に行き、全滅を確認してから、富士見町の自宅跡をたずねた。

私は修道会館幼稚園跡の防空壕のなかから、焼失をまぬがれた愛国少年団の天幕三張りを引き出して、現在百メートル道路になっている建物疎開跡地に建て、近辺の負傷者を八人ほど収容した。

周辺にたくさん死骸が転っていたので、焼トタンをかぶせ、人目につかないようにしておいた。軍隊が来て、やたらに持っていかれると、後日縁故者が歎くことになると思ったからである。

天幕に収容した八人は、一か月のうちに全員死亡したが、生きているうちにその縁故者をきいておいたので、すべて連絡が取れて引渡すことができた。

八人のうち一人は、「このご恩は忘れません。私はもう助かりません。」という遺書を残して、天幕の中で首つり自殺した。

私は、隣近所の死体をつぎつぎに焼いたが、遺骨は三川町の円隆寺の防空壕内に、新しい骨つぼが二〇数個あったのを拾って来て納骨した。

一家八人が全滅した知合いもあって、私は戦争の残忍性をそくそくと胸にかみしめた。

なお、妻と娘は、倒壊した家屋から這い出して、宇品の熊本さん(香川軍二さんの娘むこの家)の家に避難し、助かっていたが、同僚の報道班員二七人のうち、子ども番組を作るために外出した私一人が生き残っただけであった。まったく子どもに救われたと言えよう。

妻や娘が天幕に帰って来てからは、周囲の瓦礫を片づけて、イモや小麦をうえ、市役所の指導に従って菜園を開墾した。「沙漠の豪農」と、ある新聞記者が記事にしたのは、この頃のことである。

十二月十七日、観音三菱工場の防空壕を壊すことになりその廃材を利用し、生き残っていた大工さんの手を借りて、原子沙漠では最初の本建築の家を建てた。

七十何年間は不毛の地だと言われたが、私はどうしても、ここから復興しなければならないと固く信じていた。

荒涼とした厳冬の焼野原のまっただ中に、赤く焼けた瓦をふいた復興第一歩の、その家を仰ぎながら、私はじつと明日へ伸びる希望に充たされていたのであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

大手町五丁目、千田町一丁目 二丁目 三丁目、東千田町一丁目 二丁目、南千田東町、南千田西町、南竹屋町、平野町

町内会別要目

この地区の範囲は、大手町[おおてまち]八丁目・同九丁目・千田町[せんだまち]一丁目・同二丁目・同三丁目・東千田町[ひがしせんだまち]・南千田町[みなみせんだまち]・南竹屋町[みなみたけやちょう]・平野町[ひらのまち]とし、爆心地からの至近距離は、大手町八丁目万代橋東詰で約一キロメートル、もっとも遠い地点は、南千田町南端で約二・七キロメートルである。

千田の地名は、明治年代宇品築港を幾多の苦難を乗り越えて実施した県令千田貞暁の姓に由来し、西側を元安川、東側を京橋川にはさまれた市域の南端一帯を占める地区である。

市の中心繁華街から離れていて、経済的活気というものはあまり見られない。地区のほぼ中央を通る電車道路に面した両側に、種々の商店がなっているほかは、ほとんど閑静な住宅街を形成し、なかんずく学生専用の下宿屋が多くあったが、まさに、広島市における文教地区ともいべき地区であった。

市の重要な教育施設の多くが、ここに集中的に設置され、広島文理科大学・広島高等師範学校・広島工業専門学校(いずれも現在は国立広島大学に改称または併合されている)をはじめ、古い伝統を誇る中学校・高等女学校・国民学校など合計一五校もあった。

また、市内電車およびバスを経営する広島電鉄株式会社・広島地方貯金局・日本赤十字社広島病院(広島赤十字病院)などの主要施設もあった関係上、防衛態勢もきびしく、防空・防火には神経過敏なほど種々の対策を実施していた。

しかし、原子爆弾により、千田町三丁目と南千田町が一部分の焼失にとどまったほか、他は全焼という大きな被害を受けた。

被爆直前の地区内建物総数は約三、〇〇〇戸から三、三〇〇戸、世帯数三、〇〇〇から三、四〇〇世帯、人口一〇、〇〇〇人から一一、〇〇〇人ぐらいであって、各町別に見れば、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
南千田町	318	308	1,112	中川亀三
東千田町	290	286	940	加登鎮男
千田町一丁目	451	500	1,600	西田齊
千田町二丁目	387	392	1,397	花咲信一
千田町三丁目北組	91	103	315	宮本福松
千田町三丁目西組	158	160	500	藤田理平
千田町三丁目南組	180	185	783	池田善雄
平野町	265	265	965	鶴田常吉
南竹屋町上	365	365	1,220	松本新蔵
南竹屋町下	220	200	900	近藤春和
大手町八丁目	150	170	630	(東)藤田哲二、(北)瀬川鉄丸、(南)三原彦三郎
大手町九丁目東	80	80	300	大沼亀太郎
大手町九丁目南	112	148	415	岡本好兵衛
大手町九丁目西	271	280	890	青木梅太郎

地区内に所在した主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広島文理科大学	東千田町	藤本木工所	南千田町
広島高等師範学校	東千田町(広島文理科大学内)	広島電気株式会社	南千田町
広島高等師範附属中学校	東千田町(広島文理科大学内)	火力発電所(休業中)	南千田町
広島高等師範附属国民学校	東千田町(広島文理科大学内)	火力発電所変電所	南千田町

市立千田国民学校	東千田町(広島文理科大学内)	合資会社 津石製作所	南千田町
市立千田青年学校	東千田町(千田国民学校内)	株式会社 藤田組	千田町三丁目
市立大手町国民学校	大手町八丁目	竜文製氷株式会社	千田町三丁目
市立大手町青年学校	東千田町(大手町国民学校内)	旭製材株式会社	千田町三丁目
広島工業専門学校	千田町三丁目	広島電鉄株式会社	千田町三丁目
県立広島工業学校	千田町三丁目	広島電鉄株式会社車庫	千田町三丁目
県立広島工業修学校	千田町三丁目(県立広島工業学校内)	トヨタ自動車株式会社	千田町二丁目
市立工業専修学校	千田町三丁目(広島高等工業学校内)	朝日陶器株式会社(休業中)	千田町二丁目
広島女子高等師範学校 附属山中高等女学校	千田町二丁目	広島地方貯金局	千田町二丁目
私立修道中学校	南千田町	徴用工宿舎	千田町二丁目
私立進徳高等女学校	南竹屋町	宇品警防団 千田分団詰所	千田町三丁目
広島文理科大学 尚志館	東千田町	日本赤十字社広島病院	千田町二丁目
広島文理科大学 専心寮 (高等師範学を含む)	平野町	広島市設 公共市場	大手町八丁目
広島高等学校寄宿舎	千田町三丁目	大手町 公共市場	大手町九丁目
広島工業専門学校寄宿舎	東千田町	株式会社 広島魚市	大手町九丁目
修道中学校寄宿舎	南千田町	関西病院	東千田町
帝国人造絹糸株式会社広島工場	南千田町	広鉄用品工業株式会社	平野町
		中国ゴム工業	平野町

二、疎開状況

人員疎開

人員疎開は確実な数を知ることはできないが、町内会などの勧奨によって、婦人子どもは相当疎開していたようである。仕事のつごうや配給関係から、町籍簿には家族全員が記載されていて、夜間だけは家の留守番的な役目で家族のうち一人か二人が残り、他は近郊の縁故先に行って寝泊りする者が多かった。従って、夜間は人の住んでいない町ようになり、ガランとして寂しく、暗いばかりであった。

物資疎開

物資の疎開も、運送の不自由な中をいろいろと考えて、それぞれが大部分を疎開していた。不燃物は、地中に埋没したり、完備した防空壕のある者は、そこへ収納した者もいた。

学童疎開

学童疎開は、千田国民学校の三年生以上が集団疎開した。疎開先は、山県郡大朝町大朝・大塚・田原で、教師六人と学童一三四人、同郡新庄村(現在大朝町に合併)へ教師四人と学童一一人、同郡河迫村(現在千代田町に合併)へ教師二人と学童四〇人、また同郡蔵迫村(現在千代田町に合併)に教師二人と学童五二人、以上合計教師一四人、学童三四五人が、二十年四月に疎開を実施し、疎開先の寺院とか民家へ分散して収容された。

このほか、縁故疎開した学童が約五〇〇人いた。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年、千田学区警防団を結成し、終戦時には団員一六〇人がいた。団員は、防空・防火・救護などの訓練にはげみ、進んで各町内の防火資材設備の指導にあたった。

また、警防団幹部が防空学校(被爆前県庁の南側にあった武徳殿の裏)に召集され、精神教育・軍事教練・命令伝達・灯火管制・救護法などの訓練を受け、各隣組単位に、その訓練演習をおこなった。

国民義勇隊

昭和二十年六月、国民義勇隊を創設し、千田学区を大隊に、各町内会を中隊に、各隣組を小隊に組織し、各世帯員が隊員となった。

防衛態勢

防空対策としては、各町内会隣組単位に当番を置き、一日を四交替制にして、その任についた。当番は警備とか、警報の伝達をおこない、警防団員は、灯火管制用具の適否、員数の調査点検をおこなって万全を期した。

防火態勢については、各家庭・各隣組・各町が、それぞれの単位ごとに、当局の指示どおりの設備をおこなった。

なお、水源池が破壊される憂いありとの情報があったので、避難用竹製胴巻を各戸に配給した。このためか、炸

裂による火災発生の際、各所から竹のはじける音がきこえた。

四、避難経路及び避難先

非常事態の発生に対処して、千田地区は佐伯郡五日市町・廿日市町方面に避難するようあらかじめ指定していた。

現在の鷹野橋 - 明治橋 - 観音橋を渡って、ここから二筋に分かれ、一方は西大橋 - 旭橋(現在は廃橋、約二八〇メートル下流に新旭橋を架設)を経るのと、もう一方は、庚午大橋を経て国道二号線(通称観光道路)に出て、廿日市町方面に至る。ただし、橋梁が破損して渡れないときは、干潮時になれば川を横断し、さもなければ遠廻りをしてでも避難するよう指示されていた。なお、舟の便のある者は舟を利用することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地	備考
憲兵隊屯所	千田町三丁目	現在・林興一郎宅
兵種不明	平野町	
第二〇五特設警備工兵隊本部	平野町	山本中国新聞社社長宅
暁部隊通信隊	千田国民学校	約四〇〇人位の兵がいた。
第二〇五特設警備工兵隊兵舎	東千田町	高等師範学校内

(註・広島文理科大学内に、呉の海軍工廠砲煩実験部理化学班の一部が疎開していた。)

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

各町内会は、警防団との連絡を密にする必要上、防空屯所を事務所にしていたので、警報発令と同時に各々の受持ち当番詰所に集合し、それぞれの区域の灯火管制状況を巡視し、少しでも光線の洩れる家は大声で注意をうながした。

警防団は、常々地区内を巡察し、防衛施設や備品などの点検監視をおこたらなかった。

五日夜の防空壕への待避も、これまでかってなかった長時間にわたる警報発令であったし、これまで、呉市がひどく爆撃されていたので、引続き広島市が空襲されるという情報があって、みんな神経をとがらせて、平素の訓練どおり確実に待避していた。中には乳児と共に壕内で一夜を明かした者もあった。

六日朝

警報が解除になると、みんなはまず一安心したが、睡眠不足と精神的疲労がはなはだしく、それに過労が加わってクタクタになっていた。七時九分の警報発令、ついで解除も知らず、ラジオが「敵機が浜田方面から日本海方面へ行った。」というので「何のことだろう。」といぶかりながら朝食をとっていた者もあった。

また、平野町では早くも、食糧配給があって、配給所の前に多くの町民が長い行列をつくっていたし、南竹屋町では、下組は町内の建物疎開作業中であり、上組もおなじように町内の建物疎開家屋の解体作業について打合せをしている最中であった。これらの人々が炸裂によって集団的に被爆し、多くの犠牲者が出たのであった。

侵入の敵機

南竹屋町下組の建物疎開出動は、町内の間引き疎開作業で、朝の涼しいうちに済ませようという計画で、香川軍二・土岡喜代一などが町民三〇人ばかりを指揮して、現在竹屋町の中国電力東営業所の東側にあった理髪店の解体に取りかかっていた。前日壁をおとしていたので、柱に縄をかけてみんなが、エソヤコラと引っ張っているときに、突然炸裂した。敵機の来襲には誰も気づかなかったという。

しかし、ある被爆者は、市の東方上空から三機侵入、一機が急降下し、何かを落して急上昇しながら、西方に飛び去るのを目撃した。

また、他の目撃者は、市の東南上空から、銀色に見える一機が、市の上空に飛来し、北の安佐郡方面へ飛び去ったというのもあり、もう一人は、午前八時十分ごろ、市の西方上空(佐伯郡八幡村西方、極楽寺山あたり)の高度から銀色に輝く大型機一機が、機首を下げ、東北に向って急降下し、西練兵場上空を経て、牛田町神田山方面に去ったのを見、引続き同型機二機が、同様に西方上空にあらわれ、同じコースで牛田町神田山方面に姿を没したが、西練兵場上空あたりで、青・黄・赤を混ぜた異様な閃光があり、その一瞬暗黒になったという。さらにある人は、市の西方の上空高く、銀翼の大型機が、後尾に長くて白い飛行雲をつけ、市の中央上空に侵入して東北に去ったのを目撃したともいう。

千田地区内では、大手町八丁目・同九丁目・千田町二丁目・同三丁目北の各町内会においても建物疎開を実施中であったが、関係者が死亡しているため、資料もなく詳細は不明である。前記町内会以外では、各自の町内での建

物疎開現場に出動していた。

建物疎開状況

なお、当日動員指令による出動と、地区内での建物疎開実施概況は、つぎのとおりである。

町内会名	動員指令によって町内会より疎開作業への出動について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数(人)	出勤先地名	建物疎開計画予定概数(戸)	被爆前日までの実施済み概数(戸)	当日朝、実施中の概数(戸)	他地区から実施のため集合した人員概数(戸)
南千田町	60	同町内二か所	8	上記戸数を前日までに解体していた	前日までに解体した残りを解体中	なし
東千田町	20	同町内	20	なし	なし	なし
千田町一丁目	80	同町日赤病院南	12	6	6	不明
千田町二丁目	不明		不明	不明	(実施中)不明	
千田町三丁目北	不明		不明	不明	(実施中)不明	
千田町三丁目西	60	同町内	11	7	4	不明
千田町三丁目南	70	同町内元関西病院院長宅北側	10	6	4	不明
平野町	なし		なし	なし	なし	不明
富士見町南部	50	同町内	不明	3	5	なし
南竹屋町	60	南竹屋町	不明	不明	不明	不明
大手町八丁目	不明		不明	不明	不明	(実施中)不明
大手町九丁目東	不明	同町内	不明	不明	不明	不明
大手町南	不明		不明	不明	不明	(実施中)不明
大手町西	不明		不明	不明	不明	(実施中)不明

七、被爆の惨状

凄い衝撃

千田町付近では、炸裂の閃光と同時に、建物が浮動し、地震とは違った揺れかたであった。急に何か胸を圧迫するような重苦しい感じに襲われた瞬間、暗黒になった。このような衝撃感、爆心地点より離れていた者が、却って明瞭に感受できたのではないかと、宮本一男(南千田町)が提出資料に記している。

炸裂のときの轟音は、この地区の被爆者の言によれば、ほとんど聞かなかったというが、数万戸の家が一瞬にして、破壊、倒壊したので、その音響が、炸裂音と交錯して、はっきり聴くことができなかつたともいう。

炸裂後、暗黒から次第に明るさを取りもどした頃から、助けを求める声や肉親をさがして相呼ぶ声、下敷きになった悲鳴のような声が四方八方からあがった。

また、南竹屋町で、町内の間引き疎開作業に出動していた土岡喜代一の体験によれば、ちょうど作業中、稲妻のような閃光をうけた瞬間、フットボールを強くぶっつけられたような感じの強い爆風で、身体が一〇メートルあまり先へ吹きとばされていた。道路上であったが、また異様な、はじめと同じ閃光だが、やや弱い二度目の光線を受感した。痛さも痒さも感じない光線であった。飛ばされた体を、まるで夕だちのときのような暗さがつつんだが、煙の暗さではなかつたという。閃光について、ある人は豆つぶぐらいの白光が無数に飛んで来たともいう。

たちまち火災が発生したが、当時、疎開作業で解体した家屋の天井や土壁のコマ工竹などを、各自がその場で焼いて処分していたので、その上に家が倒れて、火元になったのも多い。

炸裂下の避難

炸裂下、屋内にいた軽傷者とか無傷の者は、一応屋外に出て川の中の砂洲とか、堤防上や堤防のノリ下などに避難した。しかし、屋内にいた者でも、窓や障子、フスマなど開放していた者は、閃光を受けてほとんど火傷した。

重傷者は救護所をたずねて行く者もあり、また、家族らと郊外の縁故先へ脱出する者もたくさんいた。

田中隆雄の体験によれば、平野町広鉄用品工業会社事務所で、炸裂にあったが、黄燐焼夷弾のようなものが、御幸橋と角倉家との中間ぐらいのところ落ちて炎と化したように思った。同時にまっ暗になり、気がついたときには、靴がなくなり、事務机の下にはまりこんでいた。見ると足に直径一センチメートルぐらいの穴があいていたが、血も出ていなかった。

閃光は直接には見なかつたが、黄燐弾の炎上と思ったときも音はなかつた。しばらくして音がした。一瞬気を失った。二時間ぐらいあと、現場を去るとき目撃したことであるが、目の玉の飛びだした人が「助けてくれ」と言い

ながら、手さぐりするようにして路上にたたずんでいた。また、裸で倒れた婦人の腹から嬰兒が飛び出していた。さらに五歳ぐらいの子どもが、全身火ぶくれとなり、親をさがしていたし、聞き覚えのある声で、倒壊家屋の下から助けを求めていたが、火に包囲されてどうすることもできなかったという。

これら多くの被爆者は、皆助からなかったと思われるが、下敷きになりながら体をどうにか動かして脱出できた者や、少しでも歩くことのできる者などは、ほとんど裸で、とにかく火の気の少ない方向をたどって逃げたのである。

千田国民学校内に駐屯していた暁部隊(暁第一六八一〇部隊)特別幹部候補生通信隊約四〇〇人のうち、どうにか動ける者は、隊伍を組み、互いにもちつもたれつして、平野町を経て比治山の方へ避難していったが、みな瀕死の重傷であった。

東側と西側を川にはさまれている千田地区では、東方には比治山橋・御幸橋、西方には明治橋・南大橋を渡って避難すること以外に方法はなかった。南は海に面し、北(市中心部)は、猛烈な火災が発生していたから、逃げまどう避難民が道路上に溢れて混乱をひきおこした。道路はまた、火災にあぶられて灼けつくように熱く、その上、倒壊・飛散した物の残骸で通行もままならなかった。また、即死者や重傷者が多数倒れており、地区一帯は酸臭をきわめた。

明治橋・南大橋・御幸橋・比治山橋などの橋梁付近では、火傷したり、怪我をしたりした重傷者が水を求めて雲集していた。比治山橋の上にたくさん集っている負傷者を、暁部隊の兵がトラックで来て、どこかの救護場所へ運んでいった。

また、猛火に追われて川の中へ避難した者も多かったが、京橋川筋がもっとも多く、元安川筋がこれについて多かった。舟をもって向う岸へ渡る人もあったが、川へ逃げてきたまま、どこへも行かず、干潮時には川原の砂の上に、満潮時には筏の上や、水のあがらない石の上などにかがんでいる者も多かった。このように、やっと川までたどりついた人々も、その多くは、そのまま息を引取ったのである。

十時過ぎごろ、比治山方面が火の海に包まれているのが眺められ、千田町電鉄会社の横には息たえた馬がころがっていた。大学の尚志会には、小さい炎があがっており、風にあふられて次第に火勢を増していた。

鷹野橋付近は黒煙でまったく不明。罹災した群衆がどんどん逃げていたが、みな今にもぶつ倒れそうな姿であった。

山中高等女学校の校庭は、避難者で充満し、川岸は、火炎の竜巻が天に向かって猛り狂っていた。

十二時ごろ、御幸橋上は、死者・負傷者で混乱の絶頂に達した。

炸裂時の瞬間被害

地区内での瞬間的被害については、不明の点もあるがだいたい次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者	
南千田町	50	50	-	-	2	90	8	
東千田町	60	40	-	-	20	80	-	
千田一丁目	全焼のため不明				不明			
千田二丁目	全焼のため不明				不明			
千田三丁目	64	36	-	-	不明			御幸橋 = 欄干は御影石造りであったが、全部倒壊し、南側は河中に、北側は人道上に横倒しとなる。 南大橋 = 木造で欄干は全部破壊し、橋桁も三カ所破損し、橋の両ともと側は焼けた。
平野町	30	10	60	-	5	85	10	
富士見町	70	30	-	-	15	85	-	
南竹屋町	56	44	-	-	15	85	-	
大手町八丁目	全焼のため不明				不明			
大手町九丁目	全焼のため不明				不明			

火災発生炎上の状況

この地区で火災の発生がなかったのは、南千田町、および千田町三丁目南組町内会区域だけである。千田町三丁目西組、北組の両町内会が七〇%、平野町は九九%が全焼し、他の町は全域にわたって全焼している。

各町別の火災発生炎上の詳細は、次のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた	延焼の状況	火災終息

	場 所	およその時刻		のおよその時刻
南千田町	藤本木工所および中国電力株式会社変電所より	午前九時頃	藤本木工所および中国電力の変圧器より発火し、油槽の油が燃え上がり、南西の風で火勢が強くなったが、軍隊の応援もあり必死の消火によって鎮火する。	当日午後二時頃
東千田町	電鉄車庫付近より	午前一〇時頃	発火の原因は変圧器からと思う。南西の風、火勢強く千田国民学校・平野町・南竹屋町と次々に延焼していった。	当日午後四時頃
千田町一丁目	赤十字病院西側付近	午前九時半頃	南大橋、魚市場の飛火で民家にうつり、おりから南西の風で大手町八丁目、九丁目の火災とで火勢が加わり全町におよぶ。	当日午後三時頃
千田町二丁目	中山高等女学校北側	午後六時頃より	無風状態であったが、山中高女校舎に延焼すると同時に、北西方向より風が起り、南東と北東に向い電車道へ延び次々と延焼して行く。	七日午前五時頃
千田町三丁目	山中高女校炎上したため、民家にうつり延焼した。	八月七日午前九時頃より	北西の風で火勢は強かったが、幸いに微風程度だったので、道路境で南側に延焼するのを食い止めた。	八日午前四時頃
平野町	大学専心寮、八幡氏宅台所付近より発生。また東千田町、南竹屋町から延焼する。	炸裂直後より煙を出していた。	別荘通りは、向こう岸の皆実町の炎上している煙が正午頃円筒形で水上を走るようにして渡ってきて着火した。南瀬の風により川下から延焼してくるとの合いし、市の中心部に向け火勢は進んだ。	当日午後七時頃
富士見町	東千田町の広島文理大裏にある民家が広島電鉄車庫炎上のため延焼したのがそのまま延びて火災となる。	午前九時頃	南西の風、火勢も強く、飛び火で、炎上した箇所が多い。	当日午後三時頃
南竹屋町	東千田町の広島文理大裏にある民家が広島電鉄車庫炎上のため延焼したのがそのまま延びて火災となる。	午前九時頃	南西の風、火勢も強く、飛び火で、炎上した箇所が多い。	当日午後三時頃
大手町八丁目	元土谷病院裏および公設市場ならびに明治橋付近	午前八時五〇分頃	西南の風、北東に向い延焼し、火勢強く炎が風で飛び散り、これにより再び火災を起した。発火の原因は、いずれも電柱の変圧器より発生したことを認める。	当日午後三時頃
大手町九丁目	南大橋東詰の魚市場および明治橋東詰付近	午前八時五〇分頃	西南の風、北東に向い延焼し、火勢強く炎が風で飛び散り、これにより再び火災を起した。発火の原因は、いずれも電柱の変圧器より発生したことを認める。	当日午後二時頃

なお、この地区では全域にわたって当日雨は降らなかった。ただし、午前十時ごろ、火災に基づく上昇気流によるらしい小雨が降ったとも言われている。

六日夜

六日夜、地区の南部方面では、焼失を免れた家族や、火災から焼け出された者が、道路上や、堤防上、またはその下に避難して仮泊した。それまでに、午後四時ごろ市外から救援のにぎり飯などが運ばれて配給された。

その夜、宇品警察署からの下達情報によって、今夜また、敵機が来襲するという知らせがあり、残留避難者に警戒するように伝達して廻った。避難者は、それがために緊張し、前夜からの疲労が重なり眠れなかったが、仮眠すらできない不安と恐怖のうちに夜を明かした。また、平野町の広島文理科大学グラウンドの東南部は焼失しなかったから、逃げ場を失った避難者が多数集っていた。中には焼けなかった家から畳を持ち出してきて仮泊した者もあった。

七日となった午前二時ごろでも、千田町二丁目方面は、いまだに盛んに燃えていた。その火炎の明かりで見ると、焼けあとには風呂釜・ポンプ・庭石などが見えるだけで、そのほかは何も無いという目を疑う廃墟が出現していた。

また、南千田町からは、東の国鉄広島駅、西の己斐駅、北辺の横川駅まで見とおすことができた。そして見える限りの中に、土蔵の焼け残りや、鉄筋コンクリート建てのビルが黒々として立っていた。

れんが造りの建物の残骸は、まさに崩壊という言葉がふさわしい状態で、地面に粉々になって散乱していた。

炎上した電車の残骸、中途からぶつ千切られたように折れた大木たど、凄惨という以外に言葉もなかった。

諸現象

(イ)原子爆弾の熱線や光線を直接受けて、思わぬところから発火した現象は多いが、平野町では、厚い桜の板材

が、その木肌についていた表皮の、黒い部分から火がついたし、屋外にいた女性の頭髪が白くなったという事例がある。また、衣服も焼けてボロボロになったが、普通の火災と違って、焼けた色が総じて赤味がかっていた。

(ロ)橋梁の材木部分(橋板や欄干)が焼けたり焦げたりし、川の中の小魚(イダ)が、赤白く火傷してたくさん浮流していた。

(ハ)爆圧や爆風によって、爆心地から南にあたるこの地区では、焼失を免れた家屋が、一様に南東方向に、そのまま三センチメートルから八センチメートルばかり移動していた。土台から一度、家屋が吹きあげられた現象で、半壊程度の家屋内で、置いてあった陶製火鉢が無傷のまま、はりの上に吹きあげられていた。

(ニ)疎開あとの菜園から採ってきたカボチャが、表皮は焼けておらず新鮮な色をしていたのに、包丁で切ろうとすると、自然にグチャグチャになってくずれた。

生命の回復

(ホ)戦時中、軍の勤奨によって、家庭菜園にヒマを植え、その実を供出したが、そのヒマが焼野が原となった瓦礫の中から一本芽をふいた。被爆後四日目であったが、一週間ばかりで三〇センチメートルぐらいに伸びたのを見て、人々は、不死のたくましい生命力に感動し、勇気づけられた。また二週間ばかりたつと、ヨモギなどの雑草が芽を出しはじめているのを見つけて、「これなら、ここで生きていける。」と、何か明るい希望のようなものを強く感じたのであった。

放射能熱線

(ヘ)放射能熱線による現象は、これまでの常識をはるかに超えたものであった。防空用の暗幕に熱線を受けた家屋が、もっとも早く火を発生したし、道路に面した家の二階からとか、電柱が中間どころから燃えだしたのも目撃された。電柱に取りつけてある変圧器のほとんどが、中の油が火をふいて、火災の一つの原因ともなった。

(ト)中には、原子爆弾炸裂のとき、二階にいた人が、瞬間的に屋外にほうり出された。そして家は倒壊したが、その人は、今が今まで二階にいたことしか記憶になく、どんなにして放り出されたかは、少しも知らないし、しかも、まったく無傷のままであったという事例もある。

助かった人々

(チ)奇蹟的なことではないが、被爆後、足を痛めたりして、あまり動けなかった人とか、早く田舎へ行って新鮮な空気を吸い、水を飲み、野菜などをたくさん食べた人、家全体のガラス戸を取りのぞいていた人などが、生命が助かったり、負傷が少なかったりした。

南竹屋町の惨状

近松幸一

昭和二十年八月五日晚、堀原様の宅にて、南竹屋町内会の役員会が召集され、会長松本新造ほか一四、五人が集った。

その晩、役員はそれぞれ仕事の責任を割当てられたが、私は家屋疎開作業隊第二班の責任者を言いつけられた。

その晩は十二時に解散した。明けて六日、晴天。この日は全市民・全学童は家屋疎開作業に総動員されていたが、午前七時九分に警戒警報発令、みんないそいで防空壕に避難した。七時三十一分、警戒警報が解除になり、ただちに出動した。

南竹屋町の作業隊は、甲斐という理髪屋の所に集合し、八時に人員点呼を終り、まず最初に屋根瓦を降すことからはじめた。男子は屋根に上がり、女子は一列になり、リレー式で降ろされた瓦を他の場所にするのである。

私は、集められた廃材を焚いていたが、そこへ山県郡中野村字川小田の上田市太郎氏が来られ、「近松君は、作業隊の責任者であるそうだが、良い材料があればくれたまえ。」と言う。「何に使うのか。」と、私はたずねた。彼は、文理科大学の防空壕を作るために動員され、その材料が必要なのだと言う。私は彼を案内して、裏の小路にある須門さんの家の材料が最も良いと思ったから、その家の前に行った。ちょうどそこに、軍人の河野准尉と小さい子どもさんが居られ、四人で立ち話をしていたとき、かすかに飛行機の音が聴えてきた。

空を見あげると、小さな飛行機が飛んでおり、銀色の小さな玉を落した。「また、宣伝ビラを落した。」と、私は言った。それは四、五日前に飛行機が、ちょうど銀色の丸い玉を落とし、上空で爆発して、いろいろの宣伝ビラが撒かれたから、それに相違ないと思ったからである。

こんなことを話しながら、河野准尉と子どもさんは北の方の家に入り、私と上田君は、一緒に須門の家の庭に入

り、私が空家となっている座敷の中にあがったとたん、突然、地上に叩きつけるような音と光がした。その光は、黄色光の中に、金の粉のようなものがキラキラと光っていた。

「やられた。」と、私は言った。「上田君、残念だ！」と、叫んだきり何もわからない。それから幾刻してか判らないが、ふと気がついて見れば、周囲はまっ暗であった。

私は起き上がり、手さぐりで、あたりをさぐってみると、土壁が倒れて、その上にケタが落下していた。家が倒れていることに気づいた私は、朝の集合場所に早く出なければと思い、そのケタの上にあがって、上田君を呼ぶと「足をやられた。」と叫ぶ。「少しくらい痛くても、早く出ないといけない。手を上げなさい。」と、言う手をあげた。「痛い、痛い。」と言うのを、無理に引上げて出そうとしたが、どのように倒れているのか判らなくて困っているとき、先程私が集合場所の廃材につけておいた火が、かすかにまっ赤なトウガラシのように見えたので、それを目標に、倒壊物の上を上り下りして外に出た。出るとき、河野准尉ほか多数の人々が助けを求めた。「すぐ助けにくる。」と言いおき、私は上田君と手を取りあったまま、苦心して集合場所まで出たのであった。ようやく周囲が少し明るくなったので、「早く大学に帰ってみなさい。」と、上田君を帰らせた。

作業隊の人々は全員やられ、即死した者、黒焼になって着衣はボロボロになり、裸同様。頭髮もバラバラで、誰が誰やらまったく判らない姿になっていた。ただだ、「助けて、助けて！」という悲鳴の声より他になにものもない。

私の姿を見て、「助けてくれ。どこに逃げればよいか？」と、人々が言う。「御幸橋に避難しなさい。」と、その人たちに答えた。

私は、妻がどうなっているか心配になり、早く帰ろうとしたが、帰る途中、倒壊家屋の下敷きになって、助けを求めていた人々を四人ほど助け出した。わが家に帰ってみると、家は完全に倒れており、戸口のところに宇都宮の長女すみ子さんが即死していた。もはや妻もだめだと思ったが、倒れた家の上に立ち、大声で呼んでまわった。返事がない。やはり死んだものと思われたが、もしやと思いなおして、また飛びまわって呼んでみると、かすかに「ここにいる。」という声がした。私は必死で二度三度続けて呼び、居場所をつきとめた。そこには、壁が三重になって倒れかぶさっていて、それを掘る道具がない。傍の木切れを持ち、壁土を除き、コマイ竹を取ったが、その下には天井板があった。それを打ち破ってみると、小さな隙間のある所に、妻が丸くなっていた。手を引っぱって、曳き出そうとすると、「痛い、痛い！」と言う。それを無理に引っぱり出した。

その時、すでに一四、五間向うの新田さんの家は火事になっていた。妻は足をやられ、出血するので、防空壕に入れてあった布切れで応急手当をし、一緒に御幸橋の方に逃げようとしたとき、隣家の奥さんと娘さんが、「お父さんを助けて...」と、大声で呼んでおられた。私は、妻を一人で御幸橋に行かせ、岡本さんを助けに行った。行ってみれば、二階のハシゴ段で、足を押えられて抜くことができない。どうにもならない状況であったが、「足は折れてもよいから助けてくれ。」と言われるので、無理に引っぱり出したら、足の肉が全部取れ、骨ばかりになった。そこへ今井という炭屋さんが、小さな車を持って来たので、その車に乗せて御幸橋に出るよう指示して別れた。後日聞くとところによると、出血多量で死なれたとのことである。このときすでに、デルタ薬局の裏は、大火災となっていた。

その前ごろ、霧雨がすこし降った。

こうして私もやっと御幸橋に出ていき、千田国民学校の所で妻と一緒にになった。途中、最もなさけないと思ったのは、千田国民学校に駐屯していた兵隊が、全部やられているのを見たときで、もはや日本は負けたと感じた。

御幸橋の下の川ばたに、私と妻は避難して、各方面に収容せられるのを待っていたとき、二〇間くらい向うの馬小屋の所にある電柱から、火が燃えあがったので、すぐに消しとめ、火事になるところを防いだ。

負傷者たちは、ただ水が飲みたいという人ばかりである。そのうち次から次へと自動車で収容されていくので、私も妻を自動車に乗せて収容所に送った。私自身は、再び南竹屋町に帰ったが、大火災で到底町内に入ることはできず、御幸橋に引返して火災のおさまるのを待った。

午後三時半ごろ、町内に帰ってみると、さしもの大火もほとんど燃え落ちていた。そこには町内会の防空壕の中で苦しんでいる負傷者、大声で親は子を、子は親を呼ぶ人々、また助けてくれと叫びながら死んでいく人など、まさに生地獄が出現していた。

町内会長の松本さんは、負傷して行方不明である。町内会長役員で大怪我をせず町内に残ったのは、瓜・坂本・近松・堀原で、夕暮れ、怪我をしなかった町内の方と、残留人員を調べて、食糧と火傷につける油を御幸橋の所ま

で受取りに行って、それぞれに分配した。

日が暮れて、その夜の広島市は、見渡すかぎり大海にとうろうを流したようで、まったく変りはてた夜であった。生き残った人々は、全部あちこちらの防空壕に入った。ロウソクの明かりで配給された夕食の握りめしを御幸橋の所から受取って来て、壕内の人々に配給したが、食べる人はほとんどいなかった。みんな食欲さえも失っていたのである。一晩中、肉親を探して呼びあう声がきこえるとともに、次から次へと人が死んでいく。そのうえ、飛行機の爆音がして、何んとも言いつくせない恐ろしさと淋しい一夜であった。

明けて七日は、各方面から縁故者が尋ねて来られ、その応答に私は一生懸命つとめた。

警察からは、河浜部長が町内の被害状況を調査に来られたので、それに答えた。それから、南竹屋町の進徳女学校に行ってみると、校庭には、何百人という女学生が行列縦隊になって、白骨となっていた。これは、ちょうど朝会で、校庭に行列縦隊にならないうち被爆したのである。当時は、何時空襲があるかも知れないから、自分の手持品はいつも持っていたが、その白骨の一体々々のところに、学用品・弁当箱などが焼け残っていた。

尋ねて来た肉親や縁故者は、これが家の子の持っていたものではないかと調べて、ただ泣くばかり…。学校の先生も四、五人が火傷して、防空壕の中に飛びこんだまま死んでおられた。

六日の朝、話をして別れた河野准尉は半身焼けて死なれ、子どもさんは白骨になっておられた。

七日の夜から、私は進徳女学校の防空壕に移った。夜、暑いから外に出ると、飛行機が来て、また急いで壕に入った。この夜、町内会役員の堀原夫婦は気違いのようになられた。それは、父上とただ一人の娘さんが、家の下敷きになられたのを掘り出そうと、一生懸命になっているうちに大火となったので、堀原夫婦は、自分らも娘と一緒に焼け死のうとしたとき、娘さんが、「私とおじさいんは、最早やこのまま死んでいくから、お父様お母様早く他へ逃げてください。」と叫ぶので、他へ逃げては、また飛んで行きするうちに、父と娘が焼け死んだと話されていたが、このため、夫婦とも狂人のようになられたのである。

明けて八日、私の飼っていたヌートリヤを見に行ったが、一二匹くらい居たうち、三匹くらいは生きてどこかへ逃げたようであった。また、体全面に火傷した馬が、どこから来たのか、フラリフラリと竹屋町に来て倒れて死んだ。水槽の中に飛びこんで死んでいる人もあり、哀れをきわめる。

日がたつにつれて、各方面から警防団が来られ、焼跡の整理が進められたから、町内整理も進んだので、九日に妻の居所を探したが行先不明。いろいろ尋ねるうち、森の主人が、「近松のおば様は似ノ島におられる。」と言われた。私はすぐに宇品に行き、南竹屋町の患者を調べに行くのだからと言って、警察の許可を取り、船で似ノ島の棧橋に着いた。

棧橋では、大きな船に死体を山ほど積んで、どこかの焼場に運んでいた。上陸して検疫所に行く途中、いまだに一度も治療を受けていない人が、たくさん苦しんでいた。検疫所の入口では、死んでいく人が次から次へと投げ出されている。死体はほとんど「大」の字型である。

検疫所の中に入ってみると、立錐の余地もないほどの患者と、大きな叫び声が渦巻いていた。その中を、南竹屋町の患者を尋ねてまわった。ようやく妻を発見したとき、ちょうど昼食で、一四、五人がおカユを食べていたが、ほとんど裸で、着物を持って来てくれと、みんなから頼まれた。

負傷者の大部分は「水をくれ。」と叫んでおり、助かる見込みのない者には水を与えると、次から次へと死んでいく。

私が南竹屋町の負傷者に別れを言うと、連れて帰ってくれという人、着物を持って来てくれという人もあり、涙ながらに妻を連れて退出した。宇品から電車で南竹屋町の焼跡に帰り、九日から十一日までの三日間、町内の整理にあたり、十一日の夜、坂本・花本ほか二名の方に後の事を申し送って、瓜勇様一家と私ども二人は、田舎に行くことにした。瓜様の兄上が車をもって迎えに来られたが、私は妻が足を負傷しているので、乳母車を拾って来て妻を乗せ、瓦礫の中を難渋しながら出発した。途中、到る所で死体を自動車に積みこんでは運んでいるのが見られた。死体の焼場で、もっとも多く積み重ねて焼いていたのは、横川橋の所であった。それから夜通し歩き、八木の民家で頼んで朝食をよばれ、ようやく可部町にたどりついた。可部で瓜様と別れ、夕方、来合わせた自動車に乗り、戸谷に着いた。

ここで市場という宿屋に泊まることにして、二階に上がっていたとき、中原の二反田様の自動車が中野村に行くから、それで帰らないかと言われたので、宿を断って帰ることにした。山県郡芸北町字細見に着いたのは、十二日

午前二時であった。

その自動車には一〇人くらい(本田モモヨ様・坂井様など)が乗っていたが、はっきりしたことは覚えていない。

生きていたわが子

瀬川博(談) (被爆場所・広島文理科大学事務室、当時・三四歳、警備隊応召中)

私は、当時、千田町の広島文理科大学(兵舎・高等師範学校)に駐屯していた第二七八四部隊(隊長・陰山稔大尉)に警備召集を受けていました。

六日は、朝七時半ごろ、新川場町付近の建物疎開作業のため、隊員七、八〇人が出て行ったあと、本部詰(指揮班)であった私は、事務室の黒板にむかって、来る八月十日はいよいよ満期除隊になるが、軍隊手帳にこんなふうに入るのでと、その要領を書きかけていたとき、突然、ピカッと光ったのです。ドンという音はききませんでした。

光った瞬間に、落下物の下敷きになっていました。夏のことで、みな上半身は素裸でした。私は右の目の下が骨折したうえ、ガラスの破片などで血が流れてきました。意識はあり、失明したなど思いながら、もがいてみましたがどうすることもできませんでした。

そこへ、建物疎開作業に出ていた兵隊が逃げかえって来て、片手だけ落下物の上のぞいていたのを発見し、ひっぱり出してくれたのです。

大混乱の最中のことではっきりしませんが、後日聞くとところによると、私をひっぱり出したのは同室にいた田原正人二等兵であったかも知れません。

広商時代に野球選手で有名であった天満町出身の竹岡曹長も、同じく下敷きになっていましたから、助け出そうとしましたが、落下物が多く、その上腰の長い指揮刀が何かにひっかかかって出ることができぬまま、火が迫って来て、ついに焼け死なれました。

私はヨロヨロと這うようにして、大学の前の広島赤十字病院へ行きましたが、もう負傷者がたくさん集っていて、長蛇の列を組み、アカチンを塗ってもらっていました。私は他の人々よりも軽傷であったし、なかなか順番がなかったのも、足のむくまま御幸橋の方へむかって逃げました。

御幸橋の西詰の交番所のところで、ボンヤリ立っていましたら、海の方から川をのぼって船が一隻近づいて来ました。兵隊や負傷者が二〇人くらい乗っていましたが、「もう一人乗れるから乗れ。」と、兵隊が呼ぶからそれに乗り、似ノ島へ運ばれました。これが正午ごろでした。

舟で運ばれる途中、すごくノドが乾いたので海水をすくって飲みましたが、びっくりするほど辛かった。しかし、実にうまかったのが忘れられません。

似ノ島には三日いました。似ノ島の収容所では、多くの負傷者はただ運ばれて来て、ムシロの上に寝ているだけで、治療というものはありませんでした。薬品もすぐなくなっただけでしょうが、負傷者の収容作業だけが精一杯というありさまでした。その上、負傷者がバタバタと死んでいきますので、夜は火葬の火があがり続け、異臭がするどく鼻を衝いてきました。

私も次第に身体が弱ってきましたが、配給のにぎりめしを食べるより、部隊のことが気にかかりました。原隊へ連絡したいから帰してくれと頼んで、三日目の八日午後二時ごろ宇品の棧橋まで舟で送ってもらい、そこから電車道伝いに歩いて大学へ帰りました。

立札に、二七八四部隊は草津国民学校にいるから、そこへ来い、と書いてありましたので、鷹野橋 福島町 己斐駅と道をたどっていき、午後六時前に国民学校につきました。

皆は私が死んだものと思っていたので、びっくりしました。氏名をかいた貼紙をみると、私の名の上に斜線がひいてあったほどで、緑色の三角巾で片目をおそっている姿の私を、「瀬川だ。」と言っても、はじめは信用してくれませんでした。判ると小原中隊長らみんな非常によるこんでくれました。

草津国民学校には、終戦になる十五日までいました。

一方、私の家族の妻菊江、長女祐子、次女富美子、長男泰司らは、東観音町二丁目の妻の両親の家の二階を借りて疎開していて被爆しました。

家屋は一瞬に倒壊し、辛うじて妻と妻の母、長女、妻の妹と次女は助かりましたが、妻の父と三歳の長男泰司の二人が見つからないまま、猛火が迫って来て逃げるほかないことになりました。火炎がグングンまわって来るので、火の中をぬうようにして、西(己斐)へむかってとにかく脱出しました。

観音町は、万一の場合の避難先として、あらかじめ地御前方面が決められていたのでもありますが、地御前には私の親類もいましたので、そこへ逃げのびていきました。

それから毎日、父と長男を探しに焼跡へかよいました。父の骨はすぐ見つかりましたのに、長男はまったく影も形もありませんでした。八月の末ごろでしたか、ある日、ラジオの尋ね人を探す時間に「戦災孤児は五日市町の収容所にいる」ということが放送されたので、すぐ尋ねて行ったのですが、それらしい姿が見つからなかったのです。孤児は五日市に来る前は、比治山国民学校に収容されていましたが、私と叔母が尋ねて行ったときには、その半数しかまだ来ていなかったことを知らなかったのです。

妻は、毎日のように孤児収容所へ出かけていき、洗濯物などの勤労奉仕を続けながら、長男を探しておりましたが、とうとう見つからず死んだものとあきらめて、お寺にたのみ戒名を作ったのです。

三年の法事、七年の法事をやり、十三年の法事をしようという時でした。朝日新聞が全国の孤児の親さがし運動をやりました。長く読んでいた新聞をやめ、朝日にかえてから一週間もたっていない昭和三十五年十月六日のことでした。妻は働きに出ていて疲れるためあまり新聞を読まなかったのですが、その日に限って紙面をひろげたのです。そこに「中村勝己」という名で出ている子どもを見つけて、アラッと感じたのです。

本籍不詳、少しどもる。生年月日は十月らしいと、書いてある。

十月七日、朝日新聞社の車で尋ねて行くと、私を見るなり、そのの先生が「中村勝己に似ている。」と言われた。すぐ個人別のアルバム帳を見せてもらおうと、長男と同年令の子の写真があった。それが戦後生まれた三女とそっくりの顔でびっくりしました。まったく性別が違うだけでした。私は見るなり、長男が生きていたという実感が湧きました。

「中村勝己」という名は、山下義信所長がつけられた名前ですが、九月末日限りで満一七歳になったから、収容所を出て、八丁堀の会社に勤めており、皆実町にある会社の寮に住んでいると聞かされました。

その晩、朝日新聞社で十五年ぶりに泰司と逢いました。泰司はすでに一八歳の立派な青年に成長していて、童顔だけ覚えている私には、急には判りませんでした。どことなく似ていました。

現在は、死亡で抹消してあった戸籍も旧に復し、完全に長男になっております。何も彼もそっくりになり、酒をのむことまで父親と同じです。

八、被爆後の混乱と応急処置

負傷者の収容

被爆直後は、茫然自失の状態、みんな何事も手につかず、ただ混乱に混乱を重ね、疲労困ぱいの極に達したまま午後をむかえ、やっと応急処置の手がつけられた。

負傷者や避難者でごったがえす比治山橋のところへ、午後になって宇品から陸軍船舶司令部のトラックが来て、負傷者を片っぴしから収容し、司令部までどんどん運んだ。その時、生きている者は氏名をただして荷札を身体につけたが、死亡して不明な者は、死体を海に捨てたのもあったという。

七日、軍隊が舟をもって来て、京橋川と元安川に浮く多数の死体を集め、これを陸揚げしてトラックで、どこかへ運び去った。

にぎりめしの配給

大手町方面・千田町一丁目付近では、六日午後二時ごろ、はじめて軍隊からにぎり飯が配給された。また南千田町方面では、午後四時ごろ、呉市方面から救援のにぎり飯が運ばれてきた。御幸橋一帯では乾パンの配給があり、夜になってにぎり飯の配給があった。

応急救護所

六日午後、広島赤十字病院と御幸橋西詰に応急救護所が設置された。ここへ軍から救急薬品が届けられ治療をはじめたので、負傷者がたくさん集った。

七日、対岸の広島専売局内に、暁部隊の応急救護所が設けられ、一〇日間ばかり治療にあたりと同時に、トラックで重傷者を次々と宇品方面に運んでいった。宇品港から島嶼部へ送ったという。

ある負傷者は、会社の従業員によって、荷車にのせられて、宇品の運輸部に行き治療を受けた。それから鯛尾の収容所にまわされ、しばらくして、小屋浦の収容所に収容され、治療を二十日まで受けた。小屋浦には軍人が八月二十日ごろまでいた。

終戦となり、軍隊が解散することに決まると、救護所の軍人は、比治山に集合し、最後の乾盃をおこなって引揚げたという。その後は段原山崎町の第一国民学校で治療活動がおこなわれたが、リパノールをひたしたガーゼを取りかえるだけの簡単なものであった。

道路の啓開

道路は倒壊飛散した障害物で足のふみ場もないほどであったが、軍隊が出動して八月十日ごろまでに、主要道路の大体の啓開をおこなった。

御幸橋の上は、欄干が倒れただけで、どうにか通行できたから十二日ごろまでそのままにしてあった。

焼失をまぬがれた地域でも、道路は障害物で通行できない状態であったが、六日からずっと地区外へ避難しないでいた残留者が力をあわせて、八月末ごろまでには歩けるように整理した。

死体収容・火葬など

死体は、川の中に浮くもの、道路上に目もむけられない姿で転んでいるものなど、七日からすでに軍隊によって収容された。収容場所は、広島赤十字病院と山中高等女学校の北側であった。

死体の氏名確認は困難な作業であった。殊に半焼の死体は、その性別すら判断に困ったような惨状であったし、従来からの居住者も三、四人ぐらいしか居らず、身元などの確認は不可能であった。

これらは、広島赤十字病院裏の仮焼却場に運んで火葬にされたが、一週間後からの死亡者四、五人は、町内の防空壕あとを利用して焼却し、それぞれの縁故者に遺骨を渡した。

また、南千田町の現在の下水処理場南端でも火葬が行なわれ、千田町一丁目と二丁目の境(広島赤十字病院・山中高等女学校北側付近)に仮埋葬をおこなった。

火葬方法は、土地を掘り下げ、横木を渡して、その上に死体をのせて木片・ムシロなどをかけ火葬に付した。燃料がなかったので、倒壊家屋の残材を集めて焼いたが、なかなか完全に焼ききることができなかった。

夕方に火をつけて、朝行ってみると半焼けのまま火が消えていたりしたので、また、その上に木片を積みあげて焼きなおした。なお、仮埋葬したところには、墓標を立てておいた。

平野町では、焼け残った石灯籠の中に遺骨を入れておき、遺族がたずねてくると引渡したこともあった。千田町方面の遺骨処理については、確実な資料がないから、不明である。

合同慰霊祭

十月十六日ごろであったか、市役所が、現在の市立浅野図書館西側にあった空地で、広島市合同慰霊祭を執行したので、千田町方面も加わって、地区内の死没者の冥福を祈った。

平野町方面は、二十一年八月六日、広島文理科大学グラウンドで、宇品町の千暁寺住職を招き、合同慰霊祭を執行した。

町内会の機能

なお、被爆後の地区内における町内会の機能、および被災対策の状況はつぎのとおりである。

町内会名	記 入 欄
南千田町	会長は全身火傷し活動不能のため、副会長および理事など割合健在な者を督励し、なお会長の令嬢が健在であったので、ともに罹災証明・交通証明などの交付事務を行ない、当局からの指示とか伝達事項などのことも扱った。これらの事務の遂行において紙類の不足と食糧の入手手続きなどで大変困ったが、幸いにして、よき協力を得ることが出来たので不自由ながら町内の運営は進められた。
千田町三丁目南組 西組	町内会長はかなりの負傷をしていたが、歩行することが出来るので焼跡に残った者とか倒壊家屋に残った町民を督励して、町内事務を手伝わせる。なお、他町との連絡を密に取るようにしたので、かろうじて町内運営ができた。
千田町三丁目北組 千田町一丁目 千田町二丁目 大手町八丁目 大手町九丁目 東千田町 南竹屋町上組 南竹屋町下組	各町内会長は避難とか被爆死などで、町内会機能は壊滅した。それがため残存者などの罹災証明書は警察署まで行って証明をとるようにしていた。九月に入り、おいおいと復帰しバラック建てなどで仮住いをする者が増してきたので話し合った結果、町内会事務を当番制にして交替でしばらくの間事務を遂行した。
平野町	当時の町内会長・副会長とも、避難していたので、翌日からの配給その他の事務とか物資の配給が出来ないため残留している市民で町内会役員を定めた。中山村へ避難している前副会長を訪れ、町籍簿を持帰り、バラック建ての事務所古紙を使用して、証明書発行事務からはじめた。八月七日には、バラック建て事務所が出来たのであるが、この事務所を目標にして人々が来るようになった。

九、被爆後の生活状況

最初の居住者たち

七日、平野町では、田中隆雄と木谷龍吉夫妻が協力して、焼け残りの防空壕から木材を取出しバラック小屋を建てた。そのバラック小屋の壁を利用して裏側に、六日夜、大学のグラウンドで仮眠した人たちも五、六戸のバラック小屋を建てた。これが最初の居住者で、引きつづき十日ごろ、グラウンド内に六戸のバラック小屋が建った。それから、被爆直後、一時、郊外へ逃げていた人々、つまり破壊されただけで、全焼はまぬがれたという人々が戻ってきた。

バラック小屋の材料はみな同じで、防空壕の使用材、倒壊家屋の木材などを使用し、屋根は焼けたトタンを引延ばして葺き、床は土間のままの掘立小屋であった。

郊外へ避難したものの、知人も縁故もないところへ行っても生活もできず、仕方なく早く復帰した者が多かったが、着のみ着のまま、風呂もないという原始的な状態であった。行先がなくて六日の夜から、ずっと区内にとどまっていた人々の多くは死んだのであるが、バラック小屋を建てたときは、何かホッとした気持ちになったという。

どん底生活

しかし生活は困難そのもので、夜とて電灯はなく、ロウソクもなかったし、水すらなく、また、食糧も欠乏のどん底生活をすごさねばならなかった。その上、新聞も、ラジオもなく、何がどうなっているのか全然わからないトンボ同然の毎日で、日づけすら忘れることがある程、みんな深い虚脱に陥っていた。

しばらくして、軍の放出物資が配給されるようになり、生活は幾らかよくなったが、依然として原始人のような状態であった。夜は、焼け残りの材木を拾ってきて焚き、灯明のかわりにしたが、生きているということだけが、ただ一つの救いであった。

なお、八月末ごろの、各町別の居住者の状況はつぎのとおりである。

八月末ごろの居住者数

町名	世帯概数	町名	世帯概数
南千田町	60	千田町三丁目	120
平野町	25	富士見町	10
東千田町	10	南竹屋町	10
千田町一丁目	15	大手町八丁目	5
千田町二丁目	20	大手町九丁目	5

八工の発生

地区一面に八工が多数発生した原因は、焼跡の腐敗した人畜の死体とか、衣類や畳などがむし焼きになった所へ水が浸透し、それによって悪臭を放つようになった汚水を、排水出来ぬままに放置されたためという。

被爆後三、四日して八工を多く見るようになり、一週間ぐらい後には手におえないほど発生し、食事の際は片手に打ち払いを持って追いながら、食べなければならない状態であった。防空壕の中などでは、八工が飛び回るとき、まるで雨が降るような音がした。また、道を歩いている人の背中には八工がとまって黒く見え、からだに黒い毛がいっぱい生えているように見えた。

このような状態が続き、ノミ・シラミとともに日ごとに増加し、八月中ごろから、最も多くなったが、駆除剤がなかったためどうする方法もとれなかった。

九月上旬ごろ、進駐軍の飛行機がDDT(駆除剤)を撒布してからは、急に少なくなった。

生活物資

食糧は、被爆当日午後一回と翌日一回、軍からにぎり飯の配給を受けた。八月八日ごろから、肉および豆の缶詰と乾パンの配給があったが、乾パンの中に小さな金平糖も混っていて、その甘味が実になつかしくおもわれた。

平野町方面では、主食米の配給があり、被爆後一か月ぐらいは困らなかったといわれる。なお、醤油は田中隆雄の所有する貯蔵品を近所の者が分けあって使った。九月中旬ごろ、京橋町方面に醤油かすの焼け残りのあるのを知り、多くの人が探しに行き、持ち帰って利用したこともあった。

しかし、食糧品は絶対量が不足であったから、買出しは市外に依存し、町内会とか警察署の罹災証明書及び交通証をもって、主として安佐郡方面へ買出しに出かける者が多かった。

また、焼け残った町内会では市と交渉し、主食米の現品交付証を受取り、佐伯郡八幡村農業協同組合へ受けとり

に行き、一時をしのいだこともある。十月末ごろから、本格的に市から配給を受けるようになったが、それ以外の食糧物資は各々が郡部へ買出しに行かねばならなかった。市内電車が運行し始めたのは九月初旬ごろであったが、全線運転でなかったため、買出しにはずっと遠くまで歩いて行った。

電灯

ロウソク生活は、総じて十一月ごろまで続いた。市からロウソクの配給が一回あっただけで、ロウソクも闇買いするよりほかなかった。後には「カンテラ」、「ランプ」などが、闇市場で売られていたので、それを使った者もあった。

電灯がつくようになったのは、平野町付近では三三日目の九月七日、千田町方面では十一月ごろであった。配線工事は電力会社によるものでなく、すべて町内に住んでいる者が勝手に行なった。平野町では、千田町三丁目広島電鉄株式会社の方から裸線を引っ張り、支柱を同会社から角材を三〇本ほど提供してもらって配線を行なった。ソケットは皆実町方面の空家になっている家から取寄せ、電球も盗んで取りつけ、やっと光を得ることができたという。

電灯がつくと復帰する者が増加し、南竹屋町上組・東千田町方面にもバラック小屋が建ち、電線が引込まれるようになった。それがため次第に電圧が低くなり、照明が暗く十二月二十日ごろには電圧なく、ついに用を達することが出来なくなったので、町内の者が総出で、比治山橋方面から電線を引きこみ一応復元させた。いずれも焼跡のはだか線を使用し、素人の手で配線工事を行なったのであった。ようやく翌年一月末ごろから、中国電力会社が本格的復旧工事として、配線工事を実施しはじめた。

疎開者の復帰

疎開世帯の復帰は、早い者では八月十日ごろにはかえっているが、十月ごろまで緩慢であった。復帰の増加が目立つようになったのは、十月の暴風雨後であるが十一月ごろから急激に増加した。

復帰が遅れたのは、バラック小屋を建てる資材の不足と、食糧事情の悪化が原因し、そのうえ、被爆後七五年間は人も住めぬとの流説により、精神的な不安が強くはたらいたからであろう。

しかし、この流説に反して、焼跡に密生した雑草の繁茂ぶりに、今までの不安が取除かれたのか、十一月ごろから復帰する者が急増した。

学童の復帰

千田町国民学校は全焼したので、十月二十五日、外郭の残った貯金局四階を借りて開校式を行ない、残留生徒の授業を始めた。疎開児童の受入れについては、十一月はじめに千田国民学校の教員が集団疎開先から帰ってきて、「疎开学童が帰っても、学校が全焼していて受入れられたいので、なんとか対策できないものか」と、町内会に申し入れたので、十一月の下旬、池田・森信・花咲・加登・田中・中川、その他、約一二、三人が池田会長宅に集り、学校の復興対策について協議した。

とりあえず、警防団から金一万円、各町内会より金一、〇〇〇円ぐらいと定めて、二万円の資金を集めた。これによって校舎一棟を藤田組が建設した。工事費一九、〇〇〇円で十二月末日、現在千田小学校の給食室のところに竣工し、疎開児童の受入れ対策を講じた。

闇市場の利用

軍需品の放出があっても、高価のため罹災者には入手困難であった。逆に、原子爆弾から免れて残った貴重な衣類なども、食糧品入手のため農家に行って、物々交換をするのに使わねばならなかった。広島駅前にできた闇市場も、皆が皆大いに利用して助かったというわけのものではなく、ただ見たり聞いたりするだけで困窮生活を送る者が多かった。

また、せっかく貯蓄していた金が封鎖になり、戦災者には息の根をとめられるほどの大きな痛手であった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日、台風の襲来で、せっかく建てたバラック小屋も吹き飛ばされた。そのうえに、戦時中疎開していた所から持ち帰った衣類なども、全部水浸しになって泣くに泣けないありさまであった。

この被害を克服して住居を修築したやさき、またもや十月八日の大豪雨に見舞われ、京橋川・元安川の水位が増し、堤防を約三〇センチメートルも高く越して、地区全域が浸水した。南千田町方面は約三日間、平野町方面では約二日間も減水しなかった。それがため、修築したバラック建てでも倒れ、防空壕にも浸水し貯蔵していたほとんど

の物資を失ってしまった。雨は以前から降り続いていた上の大豪雨であったから増水は甚だしく、殊に平野町では、半日ぐらい一面湖のようであった。仮住居の窮乏生活をしているところへ、二度の災害を受け、やむなく一面あきらめた気持ちで、田舎に引返す者もあった。また、倒壊や全焼をまぬがれた半壊家屋などもやっと修理して住めるようにしたところへ災害を二度までも受け、復旧出来ない者もあった。なお、原子爆弾では命拾いしたが、この暴風雨で家が倒壊し、下敷きになって死亡した者もあり、また、失神状態になった者もあった。

経済活動

被爆してから九月になるまでは金の使いみちもなく、九月中旬ごろより闇売りの行商人がくるようになってはじめて、金の必要を感じた。二十一年四月ごろになって、ようやく生活が活気づいてきたようである。

復興するにつれて、食糧品・日用雑貨品の商店が最初に、衣料品商・古物商・自転車商・喫茶店の順に店舗ができた。

それらは、鷹野橋を中心にして、大手町八丁目～九丁目に商店街ができ、また、千田町一丁目付近にも店舗ができて、順次全地区に及んでいったのである。

住宅の修復状況

南千田町は、全焼したのは僅かであったが、倒壊家屋が多かったので、二十年十一月上旬、市役所の求めで瀬戸内海の各島の大工職人が、応援に来広したうち、五〇人の割当てを受け、二十年末頃までに半数以上の家を補修することができた。

千田町三丁目は、二十年九月上旬ごろから、バラック小屋が建ちはじめ、焼け残った破損家屋は、前記応援隊により修理工事を施したので、同じく二十年末ごろまでには、約半数の補修ができた。

全焼地域の千田町一～二丁目・東千田町・大手町八～九丁目・平野町・南竹屋町の七か町では、すでに八月七日(平野町)ごろから、バラック小屋建てられたが、一般に多くなったのは、二十一年四月ごろからであった。

建築資材は物資統制令で入手困難のため、大部分は闇買いをするとか、田舎の縁故をたどって買うとかしなければならなかった。釘類は、市が町内会へ配給を委託している配給品があった。

十一、その他

地区南部の千田町方面では、全焼をまぬがれ焼け残った区域があったことによって、当日、避難していた者が早く復帰し復興が早かった。

電灯についても、広島電鉄株式会社の電力が緊急復旧したため、早急に電線を各戸に引込むことができて、住民は明るさを取戻し、電灯の光を見ることによって虫が集るように、次第に居住場所を求める人が集って来たという。

そして、いち早く連合町内会を結成して、物資配給および発展の対策につき申合せができたこと、警防団に保管金があったこと、これらが復興意欲を強くする根源となった。

現在の広島大学グラウンド(平野町)が地区内にあったことは、非常に利用価値高く、多くの便利をあたえ、これが復興を促進する一つの力となった。しかも、グラウンドが貯木場となっていたので、ここにある木材が復興資材として活用され、バラック建築を促進した。

また、当時の混乱状態の際、市長の命令で、建物が全壊している地域の各町内会へ、全壊家屋の払下げを一任して、入札を行なわしめた処置は、また復興を早めた基となった。

平野町では、田中隆雄が田舎に貯木していた材料を使ってバラックを早く建てたが、これが罹災者の心を引き立たせたともいえよう。また、鉄道局から資材を得て、二十一年三月に自営の工場を復旧し、広島文理科大学内から動力線を引込んで製造を開始したことで、これがまた、町の復興を進める原動力にもなった。また、二十二年に、電柱を二〇本ほど電話局に寄贈して、電話架設工事を行なった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

吉島町(一部)、吉島西一丁目 二丁目 三丁目、吉島東一丁目 二丁目 三丁目、吉島新町一丁目 二丁目、光南町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目、南吉島町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、吉島本町[よしじまほんまち]一丁目・同二丁目・同三丁目・吉島町[よしじまちょう]の一部(刑務所)とし、爆心地からの至近距離は、吉島羽衣町[よしじまはごろもちょう]と本町一丁目の境界で約二・三キロメートル、もっとも遠い距離は本町の最南端(旧陸軍飛行場跡)の海寄り約四キロメートルである。

中島地区に隣接し、本川と元安川とはさまれたデルタ地区で、南端は広島湾に接している。

地区一帯は野菜畑が多く、戦前はまた、花々と葎の生え茂る低湿帯が広がっていて、ヒバリやヨシキリなど小鳥がたくさん棲んでいた。また、戦争中は陸軍飛行場があり、市民はあまり近づけなかった。

吉島町にある広島刑務所の外壁(高さ七メートル、幅六〇センチメートル~二メートル、外周一、七〇〇メートルで、その材料は泥と石を使用し、これを煉りあわせたもので、明治十九年に完成)は、原子爆弾の爆風圧にもビクともしなかった。

戦後、広島市の膨脹にともない、太田川改修工事や都市区画整理事業などの換地用地、市営住宅団地などに利用され、急激な発展をなし、稠密な新市街を形成している。

被爆前の建物数・世帯数・人口数は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
吉島本町一丁目	293	321	1,049	川口覚一
吉島本町二丁目 吉島本町三丁目	250	255	1,232	竹内武一

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
中国塗料株式会社	吉島本町一丁目	倉敷航空機株式会社	吉島本町二丁目
広島刑務所	吉島町	陸軍飛行場	吉島本町二丁目
県立聾学校	吉島本町二丁目		

二、疎開状況

人員疎開、学童疎開

吉島本町一丁目は、あまり疎開することも無かったが、吉島本町二丁目町内会では、倉敷航空機株式会社付近の住宅一〇戸の建物疎開をすると共に、老人・国民学校児童などが縁故先へ五〇人ほど疎開した。集団疎開児童は四二人が昭和二十年四月十三日、双三郡三良坂村および同郡吉舎村の寺院や農家に分宿した。

三、防衛態勢

吉島本町一丁目には、県が大型防空壕を九か所構築した。しかし、この地域は、市の中心部から離れていたし、田畑や草地が多い地帯であったため、警防団員が二、三人いただけであった。防衛対策としては時折り、婦人会の防火訓練を実施した程度である。

四、避難経路及び避難先

避難先は佐伯郡平良村を予定し、舟入町を通り、己斐町に出て、それより廿日市町に行き、平良村に至るコースを予定していた。

五、所在した陸軍部隊集団

吉島本町二丁目の陸軍飛行場内に、暁部隊航空隊(練習隊)が駐屯していた。

六、五日夜から炸裂まで

この地区では、農村的色彩強く、家屋が少ないため、町内会としての警報に対する命令的な行動は行わず、個人個人が適当に待避した。

侵入の敵機は見えなかったが、警戒警報解除後、北方の上空(西練兵場付近)に、白く光る物体が三個見えて、三

機の編隊飛行のようであった。それも、ほんの瞬間的なことで、見た直後に落下しはじめ、青い光を放った。敵機の爆音は、ほとんどの者が聴いていない。なお、被爆当日、この地区からは建物疎開作業に出動していなかった。

七、被爆の惨状

炸裂直後

炸裂の閃光が、電気スパークのように青く光った。感受後二秒くらいのち、強い衝撃を受けて建物が倒壊した。しかし、家の下敷きになった者が二、三人程度いたぐらいで、たいしたことは無かった。

飛行場では、敵の電波探知機から逃がれるためとかいわれる木製の赤い翼の練習機が着火して、兵隊がシャツが服を振りまわして消火につとめていた(紫色の閃光・守宗寿人手記)。

避難者の殺到

地区では避難する者はなかったが、地区外からおびたしい避難者が続々と入ってきた。

まず、吉島本町一丁目・同羽衣町二丁目のうち、一部の人が吉島本町二丁目の飛行場へ避難した。また、中島地区・水主町・大手町方面の負傷した避難者も、飛行場やその付近の畑及び空地に逃げてきてごったがえし、酸鼻をきわめた。

家屋の倒壊で、一部通れない道もあったが、町民が片づけて通れるようにした。南大橋は川下に傾斜し、手すりも焼けていたが、人だけは通行できた。この辺りでは川の中へ逃げた者はない。

瞬間的被害

地区内の被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(%)				人的被害(%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
吉島本町一丁目	58	32	10	-	19	46	35
吉島本町二丁目	10	83	7	-			
三丁目							

全焼は全壊を含む

六日夜

しかし、六日夜は、地区外からの避難者で、ほとんどの家が満員となり、負傷者の看病で時間のたつのも知らず働いた。

熱線現象

吉島本町一丁目では、午前十時ごろ中心部南側から火が出て、北へ向け拡がり、ついに一丁目は焼失した。なお、時間は不明であるが、ごく僅かの雨が降ったという。

その他の地域においては、熱線による火災も、その他の原因による火災も発生しなかったが、屋外にいた人は、全員火傷を受けた。また、衣類など綿物は焼けなかったが、スフなどの人造繊維は、光を受けると同時に焼失した。なお、この付近には雨が降らなかった。

爆圧爆風の威力

電柱が三〇度ばかり、南に向いて傾き、電線は全部切断された。人間は少し後にさがる程度であったが、三人ほど、吹き飛ばされて負傷をした者がいた。

吉島飛行場にて

黒瀬重吉(水主町下の自宅で被爆)

頭の負傷のため、水主町の自宅から吉島飛行場までの記憶は全然ない。妻と南大橋までは一緒だったそうだが、どこで離ればなれになったのか、それも判らない。一応は橋を渡ったが、途中でまた引返したので、長女は四女の手をひき私に付添っていた。多くの人々は急いで逃げているのに、私は相変わらずトボトボと歩いていった。やっと飛行場の営門を入ると同時に倒れた。

兵隊が担架で運んで兵舎に入れてくれた。頭の裂傷、右眼・腰部の負傷のため、敷いてもらった毛布、兵隊の外着も、出血のため血まみれとなった。これは数日後に長女から聞いて知ったことである。

そのうち、別の兵舎の兵隊を他に移して、その兵舎に罹災者を収容した。私は二、三日は意識が朦朧として昏睡の状態を続けた。

ある朝、私の枕元で「この人も、もう駄目かもわからない。」と言っている話声を夢うつつで聞いた時、その話声

で気がついたのか、眼を開いたところ「あー良かった。」と話しておられた。話しておられたのは、週番肩章を肩から掛けられた四〇歳ぐらいの口髭をはやした将校と三人の下士官であった。

将校は、「気がつきましたか、気分はどうですか。」と話しかけられたが、私はまだ夢心地で思うように話ができなかった。

どうしても歯の根が合わなくて、顔が引っ張られるような痛みで、口を動かすことも苦痛であった。

将校は重ねて、「元気を出しなさい。あとから缶詰と乾パンを持ってこさせますから。」と言って他の兵舎に行かれた。兵隊が密柑の缶詰と乾パンを持ってこられた。

私の枕元の前方に、この部屋の看視の兵隊が椅子に腰をかけていた。その兵隊がたべてみなさいと言ったので、長女が密柑の缶詰をたべさせてくれた。大変おいしかったが歯にしみた。また、乾パンを口中に入れてくれたが、顔面と歯が痛んで咀嚼することができない。

家屋の下敷きになった時、顔面を何かによって打ちつけられて顔が曲がったのであろう。乾パンを噛むことができないので、空缶に水を入れて湿して口中に流しこんだ。

意識がいくらか恢復にむかうと、頭・顔・右眼から右耳にかけた裂傷・腰の傷がとてひどく日夜疼痛に苦しんだ。

毎日、週番将校の見舞いをうけた。缶詰と乾パンのお礼を言った。

「少しは気分が良くなりましたか。」とたずねられた。「大分よくなりました。」とお礼を言った。「煙草を喫いますか。」、私も煙草の味を思い出し、「喫います。」と言った。

「マァ少しだけ喫ってみなさい。」と言われて、軍隊の「ほまれ」を煙草ケースから六、七本抜き出して貰った。一本喫ったら少し目まいがしたが、久しぶりで旨かった。

食事も一個の握り飯がうまくなった。

一日二、三回空襲警報が発令され、無気味なサイレンを聴いたが、爆弾の投下される様子はない。

長女は、私に「此処に避難した夜、市中はまだ紅蓮の炎で空も真っ赤になって燃えていた。また、ここへ来て死んだ人が沢山あって、死人を兵隊さんが運んで行って、積み重ねて火葬にした。」と話していた。

午後、担架で運ばれて野天で軍医に傷の治療を受けた。ある日、私が治療の順番を待っている時に、朝鮮人が荷車を挽いて、その母親が荷車の横に付添って、子供を乗せて治療を受けに来た。荷車には一、二歳位の子供が全身を焼かれて眼を掩う悲惨な姿で、裸のまま仰向きに寝かされていた。全く形容のできない痛々しい姿であった。一体どうしてこのように体を焼いたのだろうか、と訝しく思った。

ここの部屋でも隣の部屋でも、また、あちらの部屋でも何か判らぬ大声で喚いたり、喧嘩をしているような声を聞いた。発狂しているのだそうだ。

ある日、ボロボロのモンペを着ていたが、ほとんど上半身は全裸の若い娘さんが、何か咳きながらブラブラと歩いていた。夜になって、この部屋で若い娘さんが二、三人で喚き合い喧嘩をしているのだと思ったら、この娘さんたちもみんな気が変になっていたのだ。あまりにも喧しいので、兵隊さんが取り静めようとしても、なかなか静まらない。夜半頃、やっと静かになった。疲れはてて寝たのであろう。翌朝、兵舎の床下で一七、八歳の娘さんが死んでいたそうだ。

また、ある日発狂した娘さんが、満潮の川へ飛び込んだのを看視兵が発見して、川から引揚げて来たと話していた。私はどうしてこんな訳の判らない状態になったのだろうかと思った。

私の寝ている横に、一〇日余り前、両親と妹と朝鮮から引揚げて帰って来たと話していた一四、五歳ぐらいの男の子が寝ていた。私の意識がいくらか回復した頃、その子供が話しかけた。「私は大手町九丁目の魚市場の近くの土手を歩いていた時、ピカーッと光ったので、川へ飛び込んで、それから此処へ逃げて来た。」と言っていた(多分爆風で川の中へ吹き飛ばされたのだろう)。

それから一両日経って、急に容体が悪くなり、食欲もなく気が変になったのが、夜も昼もうわ言を言いだした。

その頃、その子供の父が探しに来た。子供の枕元には朝の一個の握り飯に蠅が沢山たかっていた。父親は頻りと子供の名を呼んでいたが返書をせず、うつろなまなざしで父を見ていた。父は重箱と水筒を持っていたが、重箱をあけて子供に「喰べ。」と言っていたが、子供は喰べないで、水を欲しがり、「吞ましてくれ。」と言った。そのことを看視の兵隊さんが聞いて「水を吞ましたら駄目ですよ。」と言ったが、子供が頻りと水を欲しがるので、父親は水筒の水を吞まして、「明日は車を借りて来て連れて帰ってやる。」と言って帰ったまま翌日こなかった。その子供は

昼も夜も夢うつつで「子ちゃん」と妹の名を言っはうわ言を繰り返していた。

私はこの子供も近いうちに死ぬるのではないかと思ひ可愛想になった。

私の意識もおいおいと良くなつた或る朝、夜明けのでき事であった。

私の足元に寝ていた婦人が、突然「キヤッ」と叫んだと思つたら、婦人の横に置いてあつた自転車が倒れた。その時、その婦人は私の両足をしっかりと握りしめたので驚いた。その手の冷たさで、足を引きこもうとしたが、私も足の自由がきかず婦人の手は離れなかつた。兵隊が自転車を起こしに来たとき、頼んで手を離してもらつた。婦人はその時刻頃息を引きとられたものと思つた。朝になってその婦人が死んだと兵隊が言つてゐた。朝十時頃、その婦人の主人がこられた。「これは私の家内です。」と、兵隊に言つて何か話してゐた。

その人は官庁か会社勤めの人品のある人であつた。

私が重傷を受けているので、子供二人は兵隊さんに可愛がられて風呂に入れてもらつたり、兵隊さんの慰問品や食物を買つたり、下駄を作つてもらつたりして、大変喜んでゐた。

週番将校は毎朝来て見舞つて話された。

「大分良くなりましたね。頑張りなさい。」と親切な言葉を受けた。

三、四日経つた或る日、自宅の前の坂本さんが探してこられた。妻や他の子供のことも尋ねられたので、妻とは南大橋の辺で別れ別れになつたことを話した。「今何処にいるかは判りません。」「それでは奥さんも多分焼跡へ見に帰つてこられるでしょうから、お宅の焼跡へ吉島飛行場におられると立札をしておきましょう。見られたらきつと此処へこられます。私方も家財の大部分は灰となりましたが、家内も子供も五日市に避難してあります。元氣を出しな

い。帰りに立札を立てておきます。」と言つて歸られた。

何か判らない特殊爆弾で全市を焼かれても、未だ戦争中なので、敵機はたびたび上空を飛んでいる。偵察だけなのか投弾はしない。しかし、その都度、不気味な空襲警報のサイレンが鳴り、兵隊の誘導で軽傷者や歩ける人々は防空壕に避難した。

私のような歩けない重傷者は、兵舎にそのままにしておかれた。私はもう此処で死んでも仕方はないと諦めてゐた。(後略)

飛行機で脱出、更に救援に飛来(要約)

安沢松夫 (当時・小付第一飛行師団司令部参謀部付飛行班)

広島第五航空司令部における軍管区通信参謀会議に出席する高山少佐を乗せて、八月六日午前七時に、私は99式高等練習機を操縦し小月飛行場を出発、七時四十分に、広島吉島飛行場に着陸した。地上勤務者の誘導により、掩体壕に飛行機を格納してから、司令部に到着報告をするため数百メートル先の防空壕内のピストに行った。そこで電話器を握つたとき、強烈な閃光があり、大音響がした。そして急に周囲が暗い静かさとどざされた。もう死んだかと思つたが、ようやく明るさを取戻すと、私は机の下に伏せていた。壕から出て見ると、実に悠大な雲が天高くムクムクと上昇している。B29四機編隊が高度七〇〇〇メートルで進航している。私の飛行機が戦闘機でないのが残念！この頃、我々は飛行機の消耗をおそれ、奇数日は例え一機でも全力攻撃、偶数日は退避と決めていたが、敵にそれが洩れてゐたのか、今日はまさしく六日、偶数日である。

町の方ではすでに火が見える。会議に出席のために来た飛行機数機やガソリン補給車からも火が出ていたが、皆が必死で消しとめた。私の飛行機は火は出ていなかったが、風防ガラスが全部破れ、胴体は中央後方が一〇度位曲り、方向舵を操作する索がたるんでゐた。避難者が殺到しはじめたころ、私は惨状報告のため飛び立つ決心をした。祈る心で操縦席に入り、整備兵に始動車を頼んだ。心が通じたのかエンジンが廻つた。皆、歓声をあげた。高山参謀が走つて来て乗りこむと、一〇年のキャリヤに賭けて私は慎重に離陸した。時に十時頃で、噴きあげる火煙をくぐつて飛び、幾度も旋回しながら高度八〇〇メートル上昇、運を天に任せて十時五十分頃、小月に帰投した。機を取巻く将兵は大胆さに驚歎した。私の報告は至急電で大本営に打電された。折返し大本営から真相報告に出頭せよと下命された。

一方広島への救援を進言し、十二時三十分、神尾准尉と共に各種救援物資を積み、輸送機(一〇人乗一式双発機)で出発、午後一時過ぎ吉島に着いた。物資を降すと、参謀達を兵庫県の加古川に送ることになり、二時過ぎに離陸した。上空からみる市街は、すでに七〇%火に包まれていた。加古川では着陸してもエンジンを止めず、すぐに広島に

引返した。炎上中の広島上空で徐々に高度を下げる時、引火するのではないかと思われた。僅かに着陸できる幅員を残して避難者が溢れる飛行場に接地したが、まさに生地獄のまっただ中に降り立ったのであった。この仇を打つまでは決して負けないぞと、青年将校の私は歯をくいしばった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救急作業

地区には、救援隊は来ず、救急品などの配給も、被害軽微のため全くなかった。六日、吉島本町一丁目町内会事務所跡に応急救護所を設置し、地区住民で負傷していない者が救護にあたった。なお、一部の負傷者は、聾学校の寄宿舎や吉島飛行場へ避難していった。飛行場内の軍隊の救護所には相当数の避難者が収容され、兵隊によって治療活動が展開された。

死体の収容と火葬・仮埋葬

暁部隊によって、八日から九日へかけて死体の収容が行なわれ、身元不明者は全員、火葬にふされた。火葬した場所は、吉島本町八〇一番地(現在の貯木場)である。遺骨は一緒にして、軍隊がどこかへ持って行った。

なお、道路の啓開作業などということは別にしなかった。

町内会の機能

吉島本町一丁目は、町内会役員が、一部のけが人はあったが、ほとんど無事であったから、幸い機能は停まらなかった。吉島本町二丁目では、竹内町内会長宅に町内会事務所を設け、生き残った事務員によって諸事を行なうようにし、急場をしのいだ。

九、被爆後の生活状況

復旧居住者状況

吉島本町一丁目を除き他地域は火災がなかったので、被爆後三日目ごろから、住居の修理にとりかかった。これらの家は被災地区からの縁故者をそれぞれ多数かかえていた。生活は、主食には困ったが、この地区には農家が多かったため、他町にくらべて、苦しいうちにもわりに恵まれていた。

衛生環境

八工が多数発生した。九月中旬ごろ、アメリカ軍の飛行機が、空から薬剤散布を行なったため、少なくともはしたものの、なお、八工は残っていた。しかし、別に不衛生的なことも起らなかった。

ロウソク生活

夜はまっ暗な生活が続き、ようやく九月に入ってから、ロウソクの配給を受けた。電灯は十月十日ごろ、草津方面から電線をひいてつけた。これは大部分の家が補修程度で点灯できたので、町内の電気工事人によって工事が進められたものである。

疎開世帯・疎開児童の復帰

吉島本町一丁目は、空家が多かったが、八月末ごろから、家主とか他町からの入居者が多く、わりに早く町民が増えた。その他の地域では、被爆前から疎開世帯が無かったため、復帰ということはない。児童については、各自の家が焼けなかったので、九月十七日、学校の先生と一緒に帰町し、各自の家に戻った。

闇市場の出現

広島駅前の闇市場や、己斐・天満橋付近の闇市場へ買出と通ったが、他地区の人ほどの苦境は見られなかった。

十、終戦後の荒廃と復興

九月十七日の暴風雨までには、ほとんどの家が応急修理を完了していたので別段、たいした被害はなかった。

この地区は、幸いに暁部隊航空隊から、住宅補修資財を受けたため、被爆直後から補修にかかり、八月末日頃までには、全家屋の補修が終わっていた。なお、他町からの避難者の中には、そのままとどまって、地区内にバラック盾の仮住宅を建てた者もあった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

土橋町、小網町、舟入町、河原町、舟入中町、舟入本町

町内会別要目

この地区の範囲は、西新町[にしんまち]・西地方町[にしちがたまち]・小網町[こあみちょう]・河原町[かわらまち]・舟入町[ふないりちょう]・舟入仲町[ふないりなかまち]・舟入本町[ふないりほんまち]とし、爆心地からの至近距離は、西地方町で約〇・七五キロメートル、最も遠い距離は、舟入本町で約一・六キロメートルである。

この地区は東側を太田川(本川)、西側を天満川によってはさまれており、明治・大正期に栄えた中島町本通り商店街に隣接して、歴史的にも古い由緒を持つ職人町や、商業地であるとともに、広島市西部の大きな花街もあった。

旧史によれば、西地方町は「もと広瀬村に属し、豊屋町とも称せり。また、この町を豊屋町と称せしは、開府の時、豊工多く住居せしに由る。」、河原町は「昔時瓦工に宅地を賜ひ、子孫永く住して其業を継ぎけるより、瓦焼の名遂に地名となりしといふ。」とあるが、この付近は、小粋な待合や商店が密集し、むかしながらの広島ツ子的な明るい温和な気風をつちかっていた。

西新町・小網町が、これに隣接し、西新町は西地方町と共に、明治十五年に貸座敷業区域として指定され、小網町は明治二十四年に貸座敷営業免許地に指定されて、はなやかに栄えたところである。ことに小網町は、紅灯緑酒の伝統を永く引きついで、歓楽地帯の俗称西遊廓があった。

舟入町は、往古は湾口で、「船舶入津の地」であったと言われ、江戸時代には、刑場のあったところでもある。いわゆるデルタの地先が舟入仲町・舟入本町・舟入幸町となり、そして舟入沖新開、すなわち現在の江波町となった。

被爆直前の各町の内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
西新町上	163	183	907	山崎吾一
西新町下	不明			福原一穂
西地方町	不明			富士谷盛夫
小網町東	不明			田熊一郎
小網町西	不明			福永信蔵
小網町南	不明			梶野
小網町新町	不明			玉本
河原町東上	不明			八木常吉
河原町西	703	750	2,800	二宮貞光
河原町上	不明			松島正
河原町下	不明			藤井完一
舟入町	400	400	1,000	福井照吉
舟入仲町東	400	400	1,300	三上豪介
舟入仲町西				山本政一
舟入本町東	420	420	1,200	岡崎主税
舟入本町西				前宇一
舟入小舟区	不明			新納賢吉

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
神崎国民学校	舟入仲町	羽田別荘 (西部軍司令官官舎)	舟入町
永光寺	舟入本町	劇場寿座	小網町
三光寺	小網町		

二、疎開状況

建物疎開・人員疎開

昭和二十年三月末から、四月五日ごろまでの間に、新大橋西詰から、江波線[えばせん]電車道路まで、道路の南北両側(西地方町・西新町)に面した建物約七〇戸を強制疎開して、道路の幅員を拡大した。その地域の町民の大部分は、郊外あるいは市内各所に縁故を求めて疎開した。

また、昭和二十年七月三日限りの家屋強制疎開で、住吉橋西詰から、観音橋東詰まで(河原町下組・舟入本町東組・舟入本町西組)各町の五間道路を、南北両側建物約九〇戸ほど強制疎開して道路をひろげた。そのためこの地域住民も大部分が縁故疎開をした。

さらに、昭和二十年七月二十八日限りの建物強制疎開で町内(小網町東・同西・同南の各組・新明の四組)全戸の建物約四八五戸、人員約一、八〇〇人が疎開したので、この疎開で消滅した各町の町内会は解散した。

物資疎開

また市外の縁故先に物資を疎開した家庭もあったが、また全く物資疎開をしなかった家庭も相当多数あった。

学童疎開

二十年四月三日、神崎国民学校の第一回集団疎開学童約一六〇人が、山県郡吉坂村の葉王寺・公会堂・阿坂の安養寺・吉木の明覚寺へ疎開した。

同じく四月五日は、第二回、学童約八〇人が、山県郡本地村の専教寺・浄楽寺へ疎開した。

引きつづき、四月七日、第三回、学童約八〇人が山県郡南方村の光雲寺・浄徳寺へ、それぞれ疎開をおこなった。

また、縁故疎開をした学童は一、〇七〇人で、学校残留者は四二〇人であった。

疎开学童の復帰は、十月十九日ごろであった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年四月、神崎警防分団を結成した。

本部員として、分団長西村幸蔵・副分団長高木吾一・高義一の二人および伝令の五人がいた。

消防部には、消防自動車一台・消防手引車一台・トビロ二五本・鋸一〇丁・斧一〇丁を設備し、部長藤井完一のほか、班長五人、班員五〇人がいた。

救護部は、担架四台・救急箱六個を設備し、部長紙田末男のほか、班長二人・班員二〇人がいた。

防毒部は、防毒マスク二三個を設備し、部長綿平孝一ほか、班長二人・班員二〇人がいた。

配給部は、班長一人のほか、班員一〇人で、配給物の仕事にたずさわった。

国民義勇隊

昭和二十年六月、国民義勇隊神崎大隊を創設した。大隊長に西村幸蔵・副隊長福永信蔵が就任し、隊員約三五〇人で、十日市町から江波に通ずる電車道路を中心として、東西両支隊を設置した。

八月六日当日は、東支隊約一七〇人が小網町付近の疎開地のあと片づけのため出動して被爆し、全員死亡した。

四、避難経路及び避難先

避難状況

避難先としては、己斐町・山手町方面、または、佐伯郡五日市町役場方面を指定していた。

避難経路は江波線(電車道路)を南に下るか、川土手をくだって、江波山方面へ避難する。

また、天満橋・福島橋を渡って、己斐方面に避難する経路、および、橋が渡れなければ小舟を利用して南大橋から旭橋に出て、陸路草津・井口を経て五日市町方面へ避難する経路を決めていた。

五、所在した陸軍部隊集団

舟入町羽田別荘が、西部軍司令官官舎及び軍人の集会所・宿泊所になっていた。

なお、二十年六月ごろ、陸軍部隊(大国部隊一〇〇人)が、約三週間ほど神崎国民学校に駐屯したことがあった。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

八月五日夜、隣組の集会を開いていたところもあったが、午後九時ごろ、警戒警報が発令されて解散し、各町内会は、老人と婦女子を防空壕に待避させた。中には、江波方面にいち早く避難した者もいた。男は防空服を着用し、終夜各町内の見廻りをして警戒体制に入り、一応解除されたが、十二時過ぎに空襲警報発令、翌六日二時過ぎに解除になった。

六日朝

六日午前七時九分から同七時三十一分までは警戒警報発令中であったから、各町内とも、各隣組が警戒体制につき、部署のない者は、防空壕に待避した。

七時三十一分には「中国軍管区内上空に敵機なし」と報ぜられ、警戒警報が解除されたので一安心した。

みな防空壕から出て、涼風を入れようと肌着をぬいだ者もあり、また肌身はなさず持っていた現金を、たまたま家において外出し被爆した者、そのまま避難して家の全焼した者、作業につくため急いで出勤したところで被爆した者など、いろいろな事態が発生した。

炸裂

午前八時十五分、一大爆発音と共に物凄い地揺ぎがし、一瞬のうちに家屋は倒壊、または半壊して、突然、町の姿が変貌した。

屋内にいた者は、家屋の下敷きとなり、木切れやガラス片で無数の傷を負った。屋外にいた者は、原子爆弾の光線によって大火傷し、付近の川に飛び込んだ人も多い。そこへ火災が発生して、たちまち地域は修羅場と化した。

はじめ、一機二機と相当の高度で侵入する小影を認めた。南方から飛来したが、空襲警報・警戒警報解除後なので、はじめは友軍機だろうと思っていたところ、すぐに空襲と感づき、おどろきあわてて右往左往した者もあった。

また、住民の中には、市の上空に、白い玉が二つあるのを認めたとたん、大音響と共に炸裂したという者もいる。

小網町付近は、二十年七月二十八日までに建物疎開が完了していたので、被爆当日その後片づけのため、県立第一中学校をはじめ市内の各学校生徒・大竹市・小方町・横川町一、二、三丁目・油谷重工業株式会社・三菱精機株式会社・高密機械株式会社および女子挺身隊などが大勢作業に来ていた。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出勤人員概数	出勤先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数(戸)	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数(人)
小網町西				485		369
小網町東						
小網町南						
小網町新明						
西地方町				45		
西新町 南・北	5	小網町付近		25		
河原町下	40	小網町付近		30		
舟入本町東	30	小網町付近		30		
舟入本町西				30		
舟入仲町東	45	小網町付近				
河原町北	20	小網町付近				
河原町東	15	小網町付近				
河原町西	15	小網町付近				

七、被爆の惨状

疎開作業隊の全滅

六日八時十五分、警戒警報の発令もなく、上空を注意している者はほとんどいなかった。

小網町付近の疎開のあと片づけに出勤中の人々は、これから作業を始めようと準備中の者、シャツなど脱いで、すでに作業をはじめていた者、学徒たちは、弁当を一か所に置いて整列していた者などいろいろであった。全員、炸裂と同時に、その爆風にあおられ、大量の解体材木にしたたか打ちのめされた。立っていた者は熱湯をあびせかけられたように感じて倒れ、坐っていた者は、地面に叩きつけられたように倒れた。

この突発事態の中で、ともかく立ちあがり、本川や天満川へ走って飛びこんだ人もたくさんいたが、そのまま死んだ。その他の重傷者・行方不明者も結局は全部死亡したようである。

辛うじて生き残った者は、かねて決められた避難先へ逃げようとしても、路上や橋上は焼けて思うように通れないありさまであり、ほとんどの者が裸体の無残な姿と化したまま、迷い迷い素足で歩いて行ったが、郊外に通ずる道路上には、爆風で吹きとばされた雑多な物が山をたしていた。ある者は防空壕から這い出して見ると、周囲は暗黒の世界であって、倒壊建物がすでに燃えあがっていたという。避難者は、その中を這うように潜って脱出しようとした。どの橋も避難者でものすごく混雑した。天満川の電車鉄橋は、ヒン曲がっていた。

観音橋は、己斐方面へ向って避難する人で重なりあい、押すようにして渡った。ある者は、小舟をあやつって観音町へ、やっと渡った。

橋梁の状況

関係橋梁については、天満橋・観船橋・観音橋・住吉橋など橋桁がゆるんでいたが、いずれも通行には差しつかえなかった。本川橋は破損がひどく、通行危険であった。

羽田別荘

暁部隊漁撈班下関出張所的那須秀雄所長(軍属)は、五日夕方から羽田別荘に会社員の原田某と宿泊して被爆した。別荘は毎夜のように軍関係の会食や懇談で、多数の人が泊り眠っていたが、炸裂下、一瞬に建物が倒壊して、全員が下敷きとなった。

那須所長は、遮二無二、材木や壁を突き退けて脱出、続いて会社員の原田も出て来たが、二人とも全身負傷して血まみれである。既に別荘本館は火を吐き、西遊廓一帯の豪壮な建物が猛火に包まれていて、危機が迫っていた。

その中で、叫び声をあげる女中二人を救出し、庭の防空壕へ運んだが、ここも火に包まれた。瞬時を争う危急の場合で、二人の女中を叱咤して川の方へ逃げさせた。庭の小高い山に、那須所長と原田某が登り、状況を観察すると、周囲一面が火の海で、もはや逃げ道が無い。築山の人造滝の石畳と石畳の間にもぐり込んだ。そこには調理人の老爺が一人、濡れたふとんを被って待避していた。頬被りした手拭が血で染まっている。猛火は築山にも延び、松や芝生が燃え始めた。那須所長ほか二人は、下の池の中に飛びこみ、脛までの浅い水を浴びながら火と闘う。そこへ、三〇歳位の婦人が駆けこんで来た。

「私の子供が、家の下敷きとなって、今焼き殺されている。あの声を聞いて下さい！お願いします。助けてやって下さい！」と、泣きわめく。耳をすましてみると、バリバリ焼ける雑音の中から、「母ちゃん、母ちゃん！」という金切声が、かすかに聞えて来る。しかし、どうすることもできない。婦人をなだめるほかなかった。

四人一塊とたって、三時間余り、池の中にかがみこんでいたが、その間に、逃げだして来た別荘の建物は、すっかり焼きつくされてしまった。

「深い創です。口が開いている。早く手当を…」と、婦人が心配そうに言ったが、那須所長は、どうにでもなれと、もう精魂つきはてた姿であった。

やがて火炎が下火となったので、池から這い上がり、待避壕に行った。しかし、調理人の老爺と婦人は、思い思いに何処へ行っただのか、もう姿が見えなかった。

この羽田別荘の焼跡から、後日、八七体の屍体が発掘されたということである(那須秀雄著「原爆を浴びて」)。
火災発生状況

午前八時四十分ごろ、地区内の各町から発火し、猛烈な勢いで炎上した。風は南方から吹き、火炎は天を衝き、白いような黒いような煙がもうもうとあがった。午後の七時ごろから八時ごろまでに、だいたい焼けるものは焼けつくし、火災も終息したが、翌七日午前中もなお、ところどころに煙があがっていた。

黒い雨

炸裂後、二、三〇分たった八時四十五分ごろから、神崎方面に黒い雨が降りはじめた。だんだん激しくなり、午前九時二十分ごろまで降り続いた。ところによっては、泥雨が降った。しかし、場所によっては、少しばかりしか降らなかったところもあるという。

黒い雨が降り始めて、いちじ火勢がおとろえたように思われたが、晴天になって、再び炎上した。

焼跡の惨状

避難直前、民家から吹きとばされた着物や衣類を入れるコウリ・瓦・板戸などが、空高く飛ぶのを見た者もいる。子供の泣き声・大人のうめき声の交錯するなかを、着のみ着のままに逃げる群衆は、鮮血と泥にまみれており、男女の区別もつかない姿で、今にも倒れそうに歩いていった。

翌七日、ある避難者が一望の焼野原になった町あとに帰ってみると、東部の方は、比治山までが一目に見通され、その中に市役所や、富国ビルなどの残骸がポツンポツンと黒く立ち、南には江波山が眼前に見わたされた。

足もとには、無数の死体が転がっており、負傷者が日除けの焼トタンを立てて、その陰に並んで寝ていた。

天満川や本川の死体は、みな水ぶくれして、さながら材木を流したように浮きつ沈みつしていた。焼け落ちた町跡は平坦になって、鼻をつく死臭だけが漂っていた。

電柱や樹木は、その中ほどから発火して燃えた。爆風で倒れたのは、倒れたまま燃え、電線はクモの巣のように切断されて落ちていた。

水道栓は破裂して、流れ出るままであった。電車道路は通れたが、電車は、木の部分が全部焼けて、鉄の部分が変形して、路上にその残骸をなげ出していた。電車鉄橋は曲がって自然着火により、枕木が部分的に焼けていた。

朝食前後のことであったから、炊事の残火による発火もあったろうが、熱線のため全く火の気のないところからでも火が燃えだした。特に黒いものがよく焼けた。

黒い瓦が茶褐色に変色したり、曲がって変形したりした。石は茶色に変色してもろくなった。ガラス類は飴のように溶解し、他の物とまじりあって種々の形に変化した。

陶器類の中には、こわれなくて黒くくすぶり、もとの形だけはとどめていたものもあり、土中に埋めていた物はそのまま変らなかったが、防空壕内の物はみな焼けた。

鉄類は焼けて変色し、場所によっては変形して原形をとどめていなかった。町内にある土蔵はすべて倒壊焼失して残影もなかった。

爆風によって電柱は五五度ばかり傾いたり、中程から折れていた。その折れた個所は鋸のようになって裂けていた。

自動車は、窓ガラスを吹き飛ばされ、内部は燃えていた。家の上に吹き飛ばされていた車もあった。

神崎地区では、奇跡的な事象は見あたらない。ただ、被爆して逃げ、血便が出たり、皮膚に斑点が出たりした人でも、現在は至極元気である人もある。

炸裂時の被害

炸裂時の各町被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事
西新町上	100	-	-	-	81	11	8
河原町西	100	-	-	-	78	13	11
舟入町	100	-	-	-	62	34	4
舟入仲町東、西	100	-	-	-	44	43	13
舟入本町東、西	100	-	-	-	42	38	20

西新町下・西地方町・小網町東・小網町西・小網町南・小網町新明・河原町東上・河原町上・河原町下・舟入小舟区、以上は不明。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊

翌七日から十五日まで、岡山部隊一小隊が、観音町の県立第二中学校(現在・観音小学校)に本部を置き、救護活動や治安の任についていたが、全壊全焼した神崎国民学校跡内にその支隊を設けて、小網町・西地方町・西新町・河原町方面の救援を行なった。また、小網町天満川土手にも軍の救援隊がいた。

食糧配給

食糧は、神崎国民学校跡の臨時救援部隊が配給した。この部隊は死体の処理にも当たっていた。

街路交通も徐々に整理されたが、なかなか進歩しなかった。

治療所

八月十日ごろ、神崎国民学校跡に軍隊用の簡単なテントを張り、簡単な治療所ができて、連日、負傷者の手当を行なったが、消毒の赤チン塗布程度で、薬品らしいものはあまりなく、治療する医師の中には、自分自身はかなりひどく負傷している人もあった。治療所の付近は探索者で連日混雑した。

道路の啓開

舟入町一帯は全焼し、当時の町内会役員が、ほとんど死亡しているので道路の啓開については不詳である。

小網町・西地方町・西新町・河原町付近では、特別に作業隊来援の様子はなかったが、必要に応じて、生き残った住民の手により、少しずつ片づけられていった。

火葬状況

死体の火葬は、舟入町付近では八月七日ごろから始めた。終了したのは判らない。舟入本町に死亡者の名前が書き出されてあったが、確実なものとは言えなかったようである。

神崎南方(舟入幸・川口町付近)の負傷者は、舟入川口町の唯信寺に集ったが、毎日つぎつぎと死んでゆき、身もとの判る死体は、それぞれ関係者に引取られた。

火葬と埋葬

火葬場所は、唯信寺・江波山麓・射撃場・天満橋の東詰・小網町電車停留所の川端などであった。

小網町・西地方町方面では、八月十日ごろから八月二十日ごろまで、住民四、五人の手をかり、小網町の三光寺・

西地方町の浄国寺などをはじめ、各町のところどころに死体を収容し、火葬にした。これらの遺骨は、神崎国民学校の運動場の一か所に仮埋葬し、慰霊塔を立てていたが、後に西地方町浄国寺の墓地に埋葬した。

火葬をするときは、地上に古木などの燃料をならべ、その上に死体をならべて、火をつけた。死体の上に古トタン板を置いて火のまわりを良くしたこともあった。

人を焼いたこともない者が焼くので、焼けたかと思って翌日骨をあげにゆけば、くすぶっただけで焼けておらず、また木を集めて焼き、二日ぐらいかかったのもあった。

火葬・仮埋葬するとき、付近の人は皆あつまり、線香があればたてて合掌し、念仏をとなえた。だが線香を持っている者は、ほとんどいなかった。

慰霊

現在、小網町三光寺境内に建物疎開作業に出動して被爆死亡した人々三六九人のため、木製と石の慰霊塔が建っている。

遺骨は親戚縁故者が処理して、それぞれ引取ったが、無縁仏も多かった。小網町三光寺では、毎年八月六日、同寺が追甲法会を厳修し、天満川でとうろう流しを行なっている。

町内会の復活

各町とも壊滅、町内会長もほとんど死亡し、町内会の機能は、まったく停止した。辛うじて生き残った人々が集り、さしむき神崎聯合町内会会長に舟入仲町の風早謙が就任、幹部に舟入本町東組中田文一・舟入町谷口寅吉・小網町松垣渉・三光俊水らがなり、早速食糧その他の物資配給に尽力した。

食糧対策

食糧といっても「江波だんご」であった。事務所は舟入本町東組中田文一宅の近くにバラックを建てて設置した。そのうち、復帰町民が増加して、東部・西部・北部へ聯合町内会支部を設置し、転出などの事務を取扱った。二十一年六月ごろ神崎消費組合を設立し、配給物資を取扱った。後に、食料品業者が取扱うようになり、次第に常態に復していった。

九、被爆後の生活状況

復帰状況

翌七日に帰って来た者もあるが、だいたい九日、十日ごろから、ごくわずかの人が、ぼつぼつ帰って来はじめた。八月末ごろはまだ、各町内とも、五、六世帯から多くて一〇世帯ばかりが復帰していた程度である。

復帰者は、郡部に親戚知人のない人で、焼跡からトタンを集めて、焼け残りの木切れを拾い、バラックを建てて住んだ。

食糧

食糧は毎日のように「江波だんご」で、時おり、さつま芋が配給された。

たまたま「米」の配給があると、みな大喜びした。

八工の発生

八月十日ごろから死体にウジがわき、八工が多数発生した。人体の負傷個所にたかって、ゴマを撒いたように集って来た。駆除のための特別の薬はなかった。九月初め、占領軍が飛行機で駆除剤を撒布してから急にいなくなった。

原爆症

このころから原爆症の様子があらわれだして、下痢などをもちやす者が多くなった。

生活物資

生活物資は、ひどく欠乏していたが、どこかで仕入れて来た者がお互いに分けあった。特に米は、申訳程度の配給のほかは、入手困難であったから、鉄道草や芋づるを食べて足したり、僅かに残った疎開品を持ちかえて農家へゆき、米と交換してもらったり、あるいは、手みやげにして気嫌をとり、やっとならべてもらったりした。それも乗物が不便で、遠くまで徒歩で買出しに行った。

ロウソク生活

ロウソクの配給も少なく、夜間必要に迫られた用事のあるときだけ使い、あとは常時暗やみ生活をした。郡部につながりのある者は、そこから、ロウソクなどを入手した。

電灯のついたのはハッキリとはわからないが、二十年十二月ごろ、舟入本町小池電気店の応急工事によって点灯

したところもある。

疎開世帯・疎開児童の復帰

復帰したい者も、住む場所がないので帰れず、さし迫った者がポツリポツリ小屋を建てて帰って来るという状況であった。

疎開児童は、父兄が勝手に連れて帰った児童もあるが、神崎国民学校の記録では八月二十日ごろからとなっている。しかし、帰って来ようにも帰る家がなく、親戚縁故の家に世話になった者が多かった。

闇市場

終戦になってから軍需品の放出で、毛布・外被などの配給があったが、なかなか手に入らなかった。多くは、広島駅前付近の闇市場へ買出しに出かけた。土橋地区で、市場的なものが計画されたが、人の集まりが悪かった。天満橋のほとりで十一月初めごろから軍の放出物資が売られていた。

家財は全焼し、着のみ着のままの者が大部分で、交換する品物もなく、住民は食生活に日々苦しみあえいだ。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨で、天満川と本川が増水し、観音橋は通行不能になった。

十月八日の大豪雨のため、天満川と本川がまたもや増水して、天満川では天満橋・観音橋が落ち、本川では本川橋・新大橋・住吉橋が落ちて、市の東部方面へゆく時は、相生橋を渡ってゆかねばならず、西部己斐方面に行くには、横川橋を渡って山手町に出て、己斐町に行かねばならないことになってしまった。苦心して建てたバラックが、浸水倒壊し、ようやく入手していた少量の物資も腐敗した。盗難事件は頻々としておこり、今後どうして生きていこうかと途方にくれた家族もたくさんあった。

経済活動

経済活動といえるものは、二十一年の四月から六月ごろにかけてようやく始まった。

土橋付近(現在の土橋マーケットがあるところ)に食糧品を扱う人々の店ができ、土橋電車停留所付近から江波線の電車道の両側から舟入本町五間道路付近にかけて逐次発展していった。

バラック小屋建つ

舟入仲町西(土手付近)に、八月七、八日ごろからバラックが三戸ばかり建ち、続いて電車道にもぼつぼつ建ち、河原町にも建っていた。しかし、各町とも、だいたい九月初めごろから焼トタンのバラック建てがごく少数ながら建ちはじめていた。

その後、住宅公団からバラック建てのセットが抽せんによって売り出されて、幾人かが建てた。

中には、市外で建築資材を求めて来て建てた人もあるが、しばらく後のことであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

舟入幸町、西川口町、舟入川口町、舟入南町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、舟入幸町[ふないりさいわいちょう]、舟入川口町[ふないりかわぐちちょう]とし、爆心地からの至近距離は、舟入幸町(住吉橋から少し南へ下る地点)で、約一・六キロメートル、もっとも遠い距離は、舟入川口町(現・県立広島商業高等学校前)で、約二・八キロメートルである。

本川と天満川にはさまれた舟入幸町および舟入川口町は、もともと舟入本町から続く地先で、往古、まだ江波山が、海中の独立した小島であった頃には、竹やぶの繁茂する海辺であり、藩用の船舶も、材木を積んで出入りしたところであると旧史に記すが、戦前、舟入川口町も南部あたりは、なお、畑が多く散在していて、往年の田園地帯のおもかげをあちらこちらに残していた。現在は、商店を含む静かな住宅地区として飛躍的な発展を示している。

被爆の当日、この畑の多い付近に避難者が殺到し、収容所に指定されていた舟入川口町の唯信寺は凄惨をきわめた。

なお、被爆直前、この地区の建物数は約一、六一一戸、約一、六三世帯、人口は約六、六二六人と推定されるが、これを町内会別に見ると次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
舟入川口下	168	168	705	司原光一
舟入川口東	162	162	750	高橋績
舟入川口中	235	233	871	中山直人
舟入川口公園組	105	110	390	吉川秀夫
舟入川口西	130	136	540	(兼連合町内会長)大内義直
舟入川口南	189	189	745	
舟入幸町東	216	206	872	伊藤一三
舟入幸町中	195	195	913	佐々木強平
舟入幸町西	211	232	840	脇田長市

地区内に所在した主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
舟入国民学校	舟入川口町	舟入地鎮神社	舟入川口町
市立広島高等女学校	舟入川口町	隠居ゴム会社	舟入川口町東
唯信寺	舟入川口町	日本理化学工業広島工場	舟入川口町東
称専寺	舟入幸町		

二、疎開状況

人員疎開

舟入川口町は、一帯が住宅地であり、南部は家がポツンポツンと建っていたような田園地帯であったから、住民も疎開する意志があまりなかった。

舟入幸町でも、あまり疎開しなかったが、両町とも老人や子供の中には、郡部へ疎開していた者もあった。

物資疎開

住民の疎開がなかったので、必然的に物資の疎開も考えていなかった。むしろ安全地帯と思われていたから、仏壇や貴重品を唯信寺[ゆいしんじ]に寄託した者が多く、それらの物品で寺の本堂は埋まった。その上、重傷患者の収容所として指定されていたから、薬品類や医療器具がたくさん積みこまれていた。

学童疎開

学童疎開は、市当局の方針に従って実施された。

疎開先は、安佐郡狩小川村・福木村の寺院であった。このほか縁故疎開した児童もいた。

三、防衛態勢

防空防火対策

防空防火については、他地区と同様に平素から訓練をおこなった。各家庭に貯水槽・防空防火器具を備え、それ

ぞれ防空壕を造っていた。特に防火訓練では、地区内を南北にかけて貫流している大きな下水溝があったので、この水を利用して訓練を実施した。戦争末期には、家庭の主婦を中心に、舟入国民学校校庭で竹槍訓練(佐伯栄指導)を実施した。

当時、舟入学区連合町内会事務所が舟入川口町唯信寺に、また、警防団本部が舟入幸町食糧配給所に設置されていて、防衛態勢の充実につとめた。

避難対策

地区の避難先としては、舟入川口町は江波港町の元県立広島商業学校と定め、負傷者は応急治療所として指定された唯信寺にいくよう決めていた。

舟入幸町は江波射撃場、または、佐伯郡八幡村(現在五日市町)に避難する計画であった。

なお、地区内に所在した陸軍部隊・集団はたかったようである。

四、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日深夜からの警戒警報とか空襲警報に対しては、これまでと同様な態勢をとって備え、特に変わった活動は行なわなかった。

その夜は、各町内会義勇隊幹部全員が、大内大隊長の召集により、舟入警防団分団本部の二階に集合して、翌六日の雑魚場町の建物疎開作業現場へ出動することについて協議した。協議内容は、出動人員の割当てを各町内会から二〇人、大隊長代理として吉川町内会長が引率すること、集合場所は警防団本部から南寄り、電車道東側、集合時間は午前七時三十分とすることなど決定した。

六日朝

六日朝は、建物疎開作業の動員で、約二〇〇人が舟入幸町の電車道に集合し、大内大隊長の訓辞があって出動した。これら動員で出動する者のほか、通学生・勤労者なども平常どおりの服装支度で、なんの不安もなく出ていった。

浜岡辰夫(舟入幸町)の談によれば、「朝出勤途上で、建物疎開作業に出動のため集合していた人々を見たが、大部分が舟入幸町の婦人だったので『家を壊す作業だから気をつけなさいよ。』と注意して別れた。被爆後に聞くと、これら婦人は雑魚場町の疎開現場で被爆し、即死した者や行方不明になった者もあり、重軽傷者は、着衣がボロボロに焼け、皮膚はむごくだれた姿で、唯信寺の庭に命からがらたどりついた。」という。

なお、この地区は平常から、空襲のときは直ちに避難できる態勢の服装でいることに決めていたので、家にも、とっさの場合に、すぐ外に逃げ出られるよう訓練していた。

六日の朝の警戒警報解除後も、そのままの非常服で大部分が屋外にいて被爆したのであった。

六日朝の疎開作業への出動状況は、次表のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について	
	出動人員概数	出勤先
舟入川口町川西	20	雑魚場町
舟入川口町公園	20	雑魚場町
舟入川口町川中	20	雑魚場町
舟入川口町川東	20	雑魚場町
舟入川口町川南	20	雑魚場町
舟入幸町東	20	雑魚場町
舟入幸町中	20	雑魚場町
舟入幸町西	20	雑魚場町
合計 160人		

五、被爆の惨状

炸裂下の状況

原子爆弾の炸裂で、家は波を打つように上下に震動して、屋外へ出ることすらできなかった。二階の床が階下に抜け落ち、家財道具は飛散し、ふた目と見られぬ惨状を現出した。

倒壊した家屋もあり、たとえ倒壊しない家屋でも、柱と梁の取付けのホソが折れたりして、崩れるのも時間の問題ではないかと思われるほどの被害であった。

このような状態であるから、家屋の下敷きとなって圧死する者もあったし、生きている者もほとんどが負傷していた。しばらくして爆心地に近い北部の舟入幸町から火災が発生し、舟入幸町に接している舟入川口町の北部(広島

市立高等女学校付近)まで燃えひろがって止まった。この一帯の住民は川下の江波町へ避難する者が多かったが、市中心部からの避難者と合流して、おびたしい人の波がつづいた。その大部分は重傷者が多く、電車線路には、避難途中で倒れた負傷者が、そのままたくさん転っていた。

舟入幸町の罹災者の体験では、炸裂後、家屋が倒壊して下敷きになった者が、やっと這い出して見ると、付近の家は全部倒壊しており、方角もつかめないほど町内の様子が一変していた。しばらくして火災になったが、どうして出たのかわからない、という状況であった。

一方、本川河岸の舟入幸町山陽木材防腐株式会社付近の住民の中には、筏にのって江波方面へ逃げた者が相当数あった。

また、舟入川口町齊藤好の話によれば、舟入川口町北部は全焼したが、南部は火の手が所々に上がったのを、みんなで消しとめて、ついに延焼から免れた。そして、地区内の者はほとんど郡部や市の周辺部へ避難して、地区内にふみとどまった者は少なかったという。

また、高橋績(舟入川口町東組)の談によれば、住民の大部分が、警報解除後も非常服装で屋外にいたので、炸裂したときも直ちに避難することができた。これがため熱線によって火傷する者、負傷する者が多かったけれども、家屋の下敷きにならずにすんだので、その犠牲者が比較的になかったともいう。

なお、舟入川口町一帯の残留老は、六日夜、倒れかかった家の中で仮眠をとったが、他地区からの避難者は、電車線路や畑のなかなどにそのまま寝た。

被害状況

炸裂時の瞬間的な家屋被害・人的被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)		人的被害(約%)		
	全壊	半壊	即死者	負傷者	無傷の者
舟入川口町	50	50	10	60	30
舟入幸町	90	10	15	60	25

火災発生炎上の状況

炸裂後、地区内の火災発生炎上の状況については、次のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
舟入幸町	立市住吉橋病院	午前九時ごろ	町内全焼	正午
舟入川口町	北部にあたる舟入幸町に近いところ	早い地域は午前九時ごろ、遅い地域は午後三時ごろ	北部は全焼。電車線路より、東側は午後三時頃から燃える。南風であったので北から延焼してくるのがおそかった。南部は板塀が炸裂直後燃えていたが消し止めた。	夕方

雨

被爆当日、雨は降らなかった。だが翌月になって、油性の含まれた雨と思われるのが降って、この雨のために、また家が燃え出したので不思議に思った者も多い。

放射熱線

原子爆弾の熱線により、唯信寺境内にある墓碑には、爆心地に対して北東側に面した部分にアワ状のザラザラしたような傷痕がついた。

放射熱線によって、舟入川口町南部の板塀が燃えはじめたので、すぐに消した。また、同町の日本理化学工業会社の酸素タンクに立てかけてあったボンベ三本が、タンクの表面にその影を焼きつけていたが、タンクは爆発しなかった。

爆風爆圧

唯信寺と舟入国民学校を結ぶ線路が爆風の被害ではもっとも強かった。

舟入川口町(当時・公園組町内会区域)について、齊藤好の談によれば「私は熊野製缶工場に勤めていたが、出勤して会社で被爆した。まもなく自宅が心配になり、早速帰宅してみると、自宅の階上は後へひっくりかえって飛んでいた。階下だけが残っていたので入ったら、敷いてあった畳が天井へ吹きあげられてブラ下がっていた。戸・障子はこわれて、室内にあった家財道具は散乱していた。」という。

また、高橋績の語るところによれば、「舟入川口町北部ではあるが、縦貫している市内電車江波線より東側の地域においては、炸裂してから倒壊するまでには若干の余裕があった。時間にして三分から五分ぐらいして倒壊したようで屋内にいた者も、外に出ることができたのは、これが幸いした。」という。

舟入川口町で被爆

亀田富子(広島市舟入南町二丁目四七)

警報が解除になったので、私はすぐ近くの畑に出て草取りをしていた。すると飛行機の音がする。しかも敵機の音らしく聞えたが、機影は全然見えなかった。しかし、何か横長の銀色の物体が三個ほど天に浮いているのが見えた。

私は不審に思って、太陽のまぶしさに両手をかざし、天空を仰いでいたところ、突然、「ピカーッ」と来たので、「やられたーっ」と思ったと同時に、大地に伏したのである。暫らく目を閉じてジットしていた。それは万雷も消えたかと思われるような静寂な感じであった。

この「ピカーッ」と来た閃光の色はよく覚えませんが、とにかくきつい光であった。しかも突然の閃光で、自分一人が狙われたかのような感じがした。そして閃光に当たった所の皮膚はすぐに焦げて、火傷の痛みを感じた。

また、閃光で失明した人もあった。しかし私は非常に機敏に目を閉じたものか、まぶたも眼球も焼けなかったが、その代わりに、目以外の顔面やのどくびや両腕などは火傷したのである。

其後しばらくひれ伏していた私は、何事もなさそうなので起き上がって見ると、着ていた上の服が焼けて小さい孔が一杯あいていた。また黒味がかかった綿のモンペをはいていたが、その上部の前面が大きく焦げて、孔だらけになっていた。でもその焼け焦げる臭いも煙も熱さも、私には何の感じもなく全然判らなかつた。それから畑に打ち込まれた杭なども、割れ目から炎が出ていたから、土をかぶせたり、ぶつつけたりして消した。私には原子爆弾の炸裂音が聞えなかつたから、何事かわからなかつた。

そして、閃光や轟音に次いで爆風があつて、知らぬ間にかぶっていた私の麦ワラ帽も、吹っ飛んでなくなっていたし、私たちの寮も家屋の中央部が倒壊していた。そして、この線上に当たった近所の家屋も、みんな倒壊していた。

なお付近の家も、みんな一旦浮き上がって傾いたり倒壊したりしていて、人間も尻が浮き上がったり、吹き飛ばされたりした者が多かつた。

以上の光線や熱線、爆風などのその線上に当たっていたものは、みんな大小の被害を受けた。

畑から帰った私は近所の人にすすめられて、火傷の手当てを受けに舟入国民学校に行くことにしたが、途中でそれは駄目であることが分つたので断念し、今度は江波二本松にある陸軍病院に行って手当てを受けた。翌日は江波国民学校に行って、医師の手当てを受けた。

私が病院に行く途中、電車道に出るまでに一二、三歳位の尻からげしたような娘さんが一人、吹き飛ばされたものか倒れて死んでいた。また閃光が来た時道を歩いていた人は、北側の上半身が焦げていた。露出部は火傷して黒褐色になっていたし、また焦げた皮膚が剥げてブラ下がっていたり、衣服を着ていた者は、衣服が焦げて孔だらけになっていた。負傷者の中では火傷者が一番多く、そして誰とも分らぬような怪我をして、腫れて血だらけの者も多かつた。

なお被爆者たちはみんな電車道を、南へ南へ小走りで逃げて行った。また負傷者は、江波二本松に在る陸軍病院をさして行くのであつた。私が電車道に出る途中で見たのであるが、電車道の歩道の並木(プラタナス)が「ザーッ」という音を立てて行くような感じで、北から南へ黒い風が流れて行くのであつた。

次に爆弾が落ちてから、暫くすると町の中から煙が上がり始めて、だんだん天が暗くなり、遂に全市が大火となつて来た。

私が陸軍病院で手当てを受けて外に出て見ると、もはや被爆者が一杯で、中には声をあげて苦しんでいる人たちもあつた。そして負傷者ばかりではなく、死者もいたのである。

それからわが寮に帰る途中、被爆による火災の煙や、ときどき爆弾の炸裂するような音が聞え、町の空は一面に曇つて来て、無気味な火煙におおわれ、何だか広島の天地が、異様に感じられた。

私が病院からやっと寮に帰りつてからのこと、火傷に水は禁物と聞かされていながら、非常に喉が乾くのでついに堪え切れず、ウドン茶碗に一杯水を汲んでもらって飲み干したのである。その水の甘きことは何ともたえようがなく、これほどの甘いものが他にあるだろうかと思つた。しかも火傷に少しの害もなかつたことは幸いであつた。また夕方ごろであつたか、炊出しの握り飯の配給をいただき、みんなと感謝しておいしく食べた。

いよいよ夕方も迫つて来たので、主人たちが野宿の仕度をした。私が被爆した畑の端に、古板を並べ、破れた畳を敷き、蚊帳をつるして寝ることにしたのであるが、市中の大火災の音と、天を焦がす明るさに、終夜一睡も出来

なかった。それから後もこの野宿を続けたのである。

とにかく医者も薬も間に合わなかったのが実状であるから、致し方なく民間療法を試みた者が多かった。実は私も、目が腫れ、潰れて歩くことも出来ず、医師の手当てだけでは、なかなか直らないので、三日目から民間療法を試みた。それは油に塩を混ぜて患部に塗りつける方法を行なったのである。その結果は冷えて気持ちがよく、直りも早くて成績がよく、十八日ぶりにいよいよ全癒したのであった。

六、被爆後の混乱と応急処置

この地区には救援隊は来なかったようであるが、全焼をまぬがれた地域では、住民一同が協力して、下敷きになっている者を助けだしたり、また火災の延焼を防ぐために活躍した。

にぎり飯の配給は、当日、農村から送られて来たところもあり、翌日昼から搬入されて配給されたところもある。

唯信寺の混乱

この地区では、いわゆる仮設の応急救護所は設置されなかった。しかし、戦争末期に唯信寺が負傷者救護所に指定されていたから、この地区内から出動していた建物疎開作業隊員の生き残った負傷者が、放心状態の中にも隊列を作って、唯信寺めがけて帰って来た。それに市中央部、殊に土橋以南の多勢の負傷者が、この作業隊員と合流して、なだれ込むように殺到して来た。引率責任者吉川大隊長代理は、舟入川口町の自宅近くの畑まで、瀕死の重傷をかえりみず隊員を誘導して来て、ついに倒れ、まもなく死亡した。

これらの中には、県立第二中学校の生徒を中心に、多数の女学生が避難して来ていたりして、唯信寺の境内は一杯となり、ついには本堂・庫裡までも解放して収容した。ついに唯信寺に収容しきれなくなり、元県立広島商業学校へ向うようにと教えて行かせたのも相当あった。

唯信寺の収容者に対する治療は、医師が一人もいないので、同寺の家族の者や町内会事務所の職員などが行なった。そのうち死亡者が続出しはじめたが、翌七日からの火葬もこれらの者で処理した。凄惨な戦場そのままの光景が約一か月間にわたって繰りひろげられたが、唯信寺のこの間における収容者数は七六二人で、そのうち死亡した者が三五〇人内外であった。

収容した負傷者はみんな非常に悪寒を訴えたので、寺が所有する客用のふとんや家族のふとん・敷布・座ぶとんをはじめ、終りには、日の丸の旗・洋服・着物など、寺物全部を提供した。

なお、収容者のうちに妊産婦が二人いて、境内でそれぞれ男子を分娩し、大内住職が名づけ親となった。

道路啓開

地区内の主要道路は、町内の者で応急的に整理をおこなった。そのうち他へ避難していた者が次第に復帰して来たので、各自の家の周辺を整理するようになって、自然に復旧した。

死体収容

六日当日、すでに軍隊が出動して来て、死体の収容を行ない、江波線電車軌道に運んで来ては、ずらりと並べた。また、川には、たくさんの死体が流れて来たのでこれを引きあげていた。なお、軍隊は暁部隊と思われる。

しかし、軍隊が処理していた死体の確認は、どのようにしていたか不明である。

唯信寺へ避難して来た負傷者は、被爆後一か月半ばかりのあいだ、毎日一〇人から二〇人が死んでいったが、その姓名や年齢をはじめ、いろいろな記録は、現在なお、唯信寺に保存されている。

しかし、人名確認がどうにかできたのは、地区内の関係者だけであった。死亡者のうち、身元不明者については死亡したとき、推定年齢を書いた紙と遺品とを遺骨のかたわらに置いて安置したので、遺族や知人が探しに来たとき、遺品と年齢がまちがいなしと認められて持ち帰ったのが多い。このようにして、最後まで引取り者もなく残った遺骨は僅かであった。

火葬・埋葬

火葬、仮埋葬は、八月七日ごろから十月中旬ごろまで行なった。場所は、唯信寺の境内および唯信寺の西北西の畑の中であった。

地区外の者の死体の火葬は、唯信寺が行ない、地区内の者の死亡者は、各自の家族によって行なわれたが、死亡前でも負傷者の患部は腐ったようになっているので、死亡したときは腐乱するのも早かった。それで検視などを行なわれることなく、できるだけ早く火葬にふした。火葬に用いる焚木がなかったので付近の倒壊家屋の木材などを集めて来て使った。

遺骨の安置と慰霊

唯信寺境内に慰霊碑を建て、無名の遺骨を安置した。ここには、唯信寺収容所で死亡した者だけでなく、地区内の各所で死亡した者の無名の遺骨も納められた。

町内会の機能

地区内の各町内会の機能は全く停止状態となった。郊外にほとんどの者が避難したので、住民の数は少なかったが、被爆後一、二日してから、舟入連合町内会事務主任一色匠および加藤の息女某が、唯信寺境内へテントを張って事務を再開した。そして、大内連合町内会長を中心に生き残った二、三人の町内会長が漸次集まり、民心の安定と町内会事務などの対策について協議した。

当地区は、市の南端であったためか、食糧の配給が遅れたため、空腹をかかえて、畑の中に蚊帳をはって不安におののく幾日かが続いた。罹災者らはさながら餓鬼道の様相を呈するに至り、大内会長は英断をもって生き残りの全町民に指令を発し、「畑に作ってある物は、生き延びるために何物にかかわらず取って食うべし。」と伝達し、辛うじて飢餓をしのぐことができた。

これを伝えきた某農区長が、大内会長に怒鳴りこんで来たが、この際は、やむをえないことであった。

神崎連合町内会の高会長が、被爆死し、また他の多くの町内会長も同様の運命となったので、大内連合町内会長が、これを兼務することになった。後に配給品などの事務や、江波地区の連合町内会事務も、唯信寺の事務所で取扱うようになったが、当時、大内会長は、広島市町内会連盟事務局長も兼ねていたから、事務所は繁忙をきわめた。

七、被爆後の生活状況

早期の復帰居住者

舟入幸町は全壊全焼したので、しばらくのあいだは誰れもいなかった。殊に、放射能が残っているというので、郊外へ避難した者も、帰りたいが帰れなかった。それでも、勇敢な者は、焦土の隅っこの方に、二、三か所住んでいたようである。

舟入川口町南部(市立高等女学校から下)の方は、全壊か半壊家屋で、そのまま焼けない家屋も多かったから、飛散してはがれた屋根や柱を補修したりして、ともかく使用できる部屋を作り、そこに入居した者が多い。

被爆直後は、大工も左官もおらず、建築資材も入手できなかった。家らしいものが建ちはじめたのは、バラックにしる、二十一年初めごろからではなかったかと思われる。中には、四国の伊予から大工を呼んで建てたという者もあった。

困窮生活

バラックの生活状態は非常に悪く、配給品は少なく、また、闇物資は高値を呼んだので、生活が極度に窮迫した。このような状況が、いつまで続くのか判らないため、ようやく避難先から復帰しても、焼跡に住みつけず、田舎へ再びかえった者もあった。

焼跡には、泥棒もたくさん横行し、無警察状態であったから、バラック生活は、常に不安と危険におびやかされ続けた。

八月末ごろの居住世帯数ははっきりしない。舟入幸町には全く無かったように思われる。

八工のの多数発生

八月末ごろから九月へかけて八工が一せいに発生した。体の前面は追っ払うが、背筋は追えないので、まっ黒になるほどとまっていた。被爆直後、地区に入った亀田正士の談によると、「焼跡に残っている死体に、大きなウジがわき、腐肉を喰っていた。一見、形は人間だが、その形でウジが一面に取りついていて、腐肉を食い終ると、また次の死体へウジが群をなして移動していた。」という。

しばらくして、飛行機からDDTが撒布されて、ウジも八工もいなくなった。なお、ノミ・シラミはいなかったという。

生活物資

六日当日の夜、にぎりめしが配給された。

舟入幸町や舟入川口町の北部の家屋で、全壊全焼して、郊外へ避難した者以外、南部方面は、家が傾いた程度で、大部分、農家であったから、その後の特別な配給はなかった。しかし、衣料品・日用品には極度に不自由した。

暗い夜

ロウソクの配給もなかったし、代用の他の油もなくなり、行き詰って、倒れたり折れたりした電柱のトランスの

油を抜きとり、布地に浸して灯火に使ってすごした。やっと、九月末ごろに、応急的配線で電灯がついた。

復帰状況

六日当日、郊外へ避難した者の多くは、全焼地区へは一年も二年も本格的な復帰をしなかった。疎開児童も、縁故先へそのままとどまっているのが多かったようである。

食生活

罹災者のほとんどが筍生活で、農家へ行き、米と物々交換をした。ただ、地区南部の農家は、他の被災者より幾分か食糧の面では助かったようである。

そのうち広島駅前や天満町に闇市場ができて、金で欲しいものが買えるようになったが、新円の切替えで思うように買えず、苦しい生活が永くつづいた。

八、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の台風で、半壊家屋の倒れたのが多かった。この台風と十月八日の豪雨による浸水は幸いにしてなかったが、爆風による屋根や壁の破損がひどく、物々交換生活でもこれだけはと、残っていた数少ない着物や、保存していた書籍などが、たくさんぬれたり腐ったりした。

また、強盗も多く、灯のない暗やみ生活の中で、罹災者は不安にかられながら、深い虚脱におそわれたまま、ただ生きているだけであった。

なお、唯信寺収容所では、時日の経過とともに死没する者、小康を保って疎開先を求めて立ち去る者など、一応、混乱もおさまったころ、この台風で本堂も庫裡も全部倒壊し、一切のものを無くした。寺も被爆者と同様の運命をたどったと言えよう。

この頃でも、唯信寺の墓地の隅の天幕のなかに、どこへも行くところのない負傷者が一四、五人いたが、台風による被害はなかった。

経済活動

舟入地区では、十月ごろ以降、露店式の闇市が天満町や横川付近にできたので利用者もいたが、もっとも多く利用されたのは、広島駅前の闇市場であった。なお、露店市場が、バラックでも家らしい構えになったのは一、二年後のことであった。

売っている品物は、食べものをはじめとして、日用品・医療品・古着などが主で、古着は、復員者がかついで帰郷した旧軍隊の物資や放出された毛布・シャツ・袴下・軍服・靴・手袋などさまざまであった。プカプカの航空服などもたくさん売られた。

バラックの建ち始め

十月ごろからバラックの家が建ちはじめた。当時は、大工職人が不足していたので、大部分のものは自力で、どうなりこうなり建てた。

倒壊しなかった建物の補修には、屋根にもっとも困った。何とかソギや杉皮で葺いたが、すぐ雨漏りして弱った。補修するにも、材料の入手が困難なため、土壁の落ちたところは板囲いをしたり、戸障子などは、倒壊した家屋の使えるようなのを拾って持ちかえり間にあわせた。

翌年一月か二月ごろに、半壊家屋はこわすことになり、そのこわした古材を補修材料に使用した。

九、その他

家屋が倒壊して、火災があがるまで、まず火炎も煙も下を這ったので、その煙にむせて死んだ人も多い。煙は、壁土や埃のまじった濃密なものであったから視界はまったく利かず、煙にさえぎられて中に入れず見殺しになった者が数知れずいた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

江波東町一丁目 二丁目、江波本町、江波南町一丁目 二丁目 三丁目、江波栄町、江波沖町、江波西町一丁目 二丁目、江波二本松町一丁目 二丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、江波港町[えばみなとまち]・江波東町[えばひがしまち]・江波本町[えばほんまち]・江波南町[えばみなみまち]とし、爆心地からの至近距離は、江波口の舟入変電所付近で約二・六キロメートル、もっとも遠い地点は三菱重工株式会社広島造船所の進水台で約四・八キロメートルである。

江波はもと広島湾の孤島の一つであって、旧史にも「江波島、船舶輻湊之所、芸洲四通之要津也(芸備国郡誌)」とある。すなわち、大小の船舶が泊まる「天造の要害」であったし、また海の幸を誇る漁民の集落地区でもあった。

太田川デルタの発展に伴い、ついに陸繋して、大正五年七月から江波町として新発足した。

現在では、本川と天満川にはさまれたデルタの南端に位置を占め、伝統的な漁業でさかえている。殊に浅海養殖が根幹となり、ノリやカキの生産は、広島名産として全国に名高い。

地区内には、これら水産業のほか、戦時中は、陸軍軍需品支廠江波集積場・第一陸軍病院江波分院があった。また、県立広島商業学校(被爆時、同校は陸軍兵器学校となっており、皆実町広島県立師範学校々舎に移転していた。)が江波町に、広島管区气象台が江波山にあり、海面埋立地には、三菱重工株式会社広島造船所の大工場が活況を呈しており、戦後もまた、瀬戸を眺める平穏な姿のなかに、広島市発展の重要な役割を受けもっている。

被爆による被害は全域に及び、建物はほとんどが半壊以上で、飛石的に三か所から火災が発生したけれども延焼せず、被害が僅少にとどまったことは、この上もない幸せであった。

被爆直前の地区内総建物数は約一、一二五戸で、世帯数一、二六九世帯、人口五、七七三人であった。なお、町別内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
江波港町	330	359	1,129	桐原富次郎
江波東町	214	226	964	丸本京一
江波本町	350	423	2,473	野間源一
江波南町	231	261	1,207	野間真一

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
市立江波国民学校	江波町	陸軍軍需品支廠江波集積場	江波町
広島管区气象台	江波町	三菱重工株式会社広島造船所	江波町埋立地

元県立広島商業学校は陸軍兵器学校分教所となり、擬装塗装されていた。また、一部教室は、出征部隊の宿泊所にも使用されたようである。

二、疎開状況

人員・物資の疎開

楽観していたわけではないが、市の中心から少し離れているということと、漁業中心の生業のため、人員疎開はおこなわれなかった。

ただ、妊産婦は、安静の必要上、郡部の親類あたりへ疎開した者があった。

また、物資の疎開も、積極的にはしなかった。

学童疎開

しかし、学童疎開だけは、当局の方針に従って、江波国民学校学童が、縁故疎開と、三年生以上の集団疎開を実施した。

縁故疎開は約五〇人、集団疎開は、昭和二十年四月十三日及び十五日の二回に、約一七〇人が、双三郡吉舎町・八幡村へ疎開したが、両親や住みなれた家と別れて出てゆく学童の姿はいたまじかった。

先生に引率されて、町を出て行くとき、子どもながらも時局の重大さを感じていて、行く先の不安や淋しさを、じっと小さな胸に堪えながら手を振る姿に、親たちは熱くなってくる両の頬をおさえて見送った。中には、意外に

元氣そうに、遠足でもゆくかのようにしゃいでいる子もいて、更に、そのいじらしさをそそったという。

三、防衛態勢

他の地区と同様に、防空・防火訓練を実施した。警防分団も、義勇隊も結成されて、本部との連絡を密にした。

町内会および隣組の態勢を強固にととのえて、組織的に、常時きびしく訓練演習をおこなった。

四、避難経路及び避難先

事態発生の場合は、舟入町を抜けて己斐橋を渡り、南下するように避難経路を指定していた。

避難先は、状況に応じて己斐町の山林地帯か、佐伯郡井口村(現在広島市井口町)方面としていた。また近くでは江波公園南側と丸子山北側とに待避する計画であった。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍兵器学校広島分教所	江波町元県立広島商業学校内
陸軍軍需品支廠江波集積場	江波町元県立広島商業学校内
第一陸軍病院江波分院	江波町二本松埋立地
高射砲陣地(部隊名不明)	江波町江波公園
照空隊陣地(部隊名不明)	江波町皿山および江波公園

六、五日夜から炸裂まで

五日の夜から六日の朝にかけて、空襲・警戒警報の発令ごとに、灯火管制を厳重に実施し、各家庭では、非常待避服装に身なりをととのえ、救急袋も、常に手のとどくところに用意していた。

六日午前七時三十一分の警戒警報解除後、ラジオも「...中国軍管区内上空に敵機なし」と放送したので、町民は各人の部署から静かに自宅に帰り、自分の生活をおのがじしはじめていた。

また、この朝、江波町では、富士見町方面の建物疎開作業に出動することにたっていて、町民二五人が集合するところであった。

なお、地区内では建物疎開をしなかった。

七、被爆の惨状

直後の状況

爆風による被害が相当あった。家が傾いたり、窓がこわれたり、天井が落下するなど、その衝撃は大きかった。

天井や家財道具の下敷きになって、救助を求め、悲鳴をあげている者もあり、熱線着火あるいは家庭内の火から火災を発生している家もあって、一挙に恐怖の巷と化した。

下敷きになっている声を頼りに、一人一人救出し、火災を起している家の消火に追われて、町内は混乱のきわみに達した。

火災の発生

火災は三か所から発生したが、住宅七戸・倉庫二か所にとどまって鎮火した。

火災は、幸いにして早く消火することができ、救出にも成功したので、恐るべき灰燼からまぬがれた。

このようにして、ともかく町民のほとんどは避難しないで、町内に踏みとどまり、事態のなりゆきを注意深く見守っていたが、精神的な動揺はかくしおおせなかった。中には再度の空襲をおそれて、防空壕や付近の山へ避難する者もいた。

避難者の殺到

町は辛うじて助かったけれども、しばらくすると、他地区から幽鬼のような避難者の群れが殺到して来はじめた。

火傷した負傷者が、血まみれになって、第一陸軍病院江波分院へ、次から次へとひっきりなしに送られて来て、酸鼻をきわめた。

瞬間的被害

地区内には江波山・皿山の二つの小山があり、この山の北側に密集している民家は、爆圧の影響を直接受けた。瞬間的に瓦が一方に吹き寄せられ、屋根に穴があいて、雨天には雨漏りが激しく、相当な被害であった。

町内においての即死者はなかったが、他地区に出て行っていた町民が不幸にも死亡した。

次表は、各町別の瞬間的被害内訳である。

町名	家屋被害(約%)					人的被害(約%)			
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無傷の者	計
江波港町	20	40	40	-	100	5	16	79	100

江波東町	10	30	60	-	100	5	-	95	100
江波本町	5	25	70	-	100	10	10	80	100
江波南町	10	10	60	20	100	5	10	85	100

火災発生炎上の状況

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況	火災終息のおよその時刻
	場所	およその時刻		
江波港町	住宅七戸および倉庫一戸			午前十時頃
江波東町	発生箇所なし			
江波本町	元傷害者補導所倉庫二戸	炸裂後、数分後	倉庫の一戸には可燃物を入れてあったのへ引火した	午前九時半頃
江波南町	発生箇所なし			

降雨の状況

なお、午後二時から一時間ぐらい雨が降ったという被爆者もいるが、広島気象台記録によると、江波では降らなかったとされている。

炸裂後三〇分もすると、避難者が続々とやって来たが、昼過ぎから、ますます避難者が増加し、国民学校も、病院も、また一般民家にも、江波山一帯にも避難者があふれた。

六日夜

そして、警防団はもとより、一般町民も、また朝鮮の人々も、全町こぞって避難者の整理と負傷者の救護作業にあたり、大混乱のうちに六日の夜は過ぎていった。

江波の海

海岸にいて、炸裂瞬間の閃光が海面を突っ走るのを目撃した松下八マノ(江波南町)が、広島湾にそそぐ本川の河口付近の岸壁に、ひと夜明けて出てみると、避難用につないであった筏の上に、多数の死人が仰向けに大の字になった乗っていた。また、赤茶けて焼けたような色になって、水面すれすれにノタノタと泳いでいたイダ(魚)が、みな死んで真っ白になって浮いていた。八日には、暁部隊が来て、海面に浮遊するたくさんの死体を、大きな網を使って収集するのが見られた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

第一陸軍病院江波分院は、被爆前(四、五月ごろ)にほとんどの軍人患者を山陰地方の各分院に疎開させていたので、一〇数棟の全病棟は空家同然であったから、市中心部から殺到した負傷者やトラックで運びこまれた多数の負傷者を収容して、軍医・看護婦・入院中の軽症軍患者などが治療や看護に活躍した。この江波分院では、わりかた治療の点は行きとどいていたようであるが、九日ごろから、続々と死亡者が出たのであった。

なお、陸軍病院に収容し切れなくなった負傷者は、一応治療したあと江波国民学校や一般民家約二〇〇戸に収容したが、その治療した負傷者の総計は一万人を超えた。

死体の収容と火葬

死亡者の火葬に際しては、馬車に死体を積んで火葬場へどンドン運んだ。陸軍病院や国民学校、あるいは民家に収容している負傷者が、つぎつぎと死んでいくので、陸軍江波射撃場を主にし、数か所に応急火葬場を設けて、ようやく茶毘にふすことができた。火葬は、翌七日から開始したが、九月の中旬ごろまでも続けられ、江波分院の扱った死体だけでも約一、〇〇〇体に達した。

町内会の機能

避難者の収容作業や火葬処理など、臨機応変の処置を執りつつ、一時は混乱の渦中にまきこまれた町内会であったが、幸い町役員などには死亡者がなく、従前どおり運営機能に支障がなかったので、種々の対策が異状なく遂行できた。

陸軍病院閉鎖

九月三十日、陸軍病院江波分院が閉鎖されたとき、江波国民学校に約三〇人がなお収容されていたので、舟入川口町の青山巖齒科医師がこれを引継いで治療にあたり、外来患者を含めると約一〇〇人の負傷者の救護を続けた。

九、被爆後の生活状況

町自体は、被害が少なかったもので、他地区のように地区外へ避難するという必要はなかった。

この地区でも八工が多数発生して、手のほどこしょうがなく、放任状態であった。

ロウソク生活

夜は、電灯が消えて九月末ごろまで、か細いロウソクの明かりを頼らなければならなかった。それも配給があるわけではなく、どこかで手に入れて来た蠟燭を、化粧用クリームびんなどを利用して中に詰め、燭台代りにした。

電灯のついたのは、九月末か十月初めであったが、それまでは不自由な暗い夜々であった。

国民学校開校

江波国民学校は、七、八〇〇人の負傷者の収容所となり、全校舎のほとんどが使用され、二十年十月下旬になり、ようやく一部教室を使って授業を開始したが、この頃、疎開児童も帰って来たのであった。

敗戦とはいいいながら、親も子もはればれとした笑顔で、僥倖とも言える復帰をよろこびあった。

食生活

食生活においては、漁業・農業にたずさわっている家庭が多かったので、比較的にめぐまれた自給自足生活であった。中には、己斐や天満町などの闇市場へ逆に出荷したものもあったようである。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月の暴風雨や十月の豪雨にも、さしたる被害はなかったが、爆風によって屋根がこわれたままになっていたため、雨漏りにたいへんなやまされた。さしむき応急的に、破れた箇所にはテントをおおうて過ごすようなありさまであった。

十一、その他

(イ)江波二本松民間共有地一四八、五〇〇平方メートル(四万五千坪)、工業港埋立地六六、〇〇〇平方メートル(二万坪)が戦時施設所として、昭和十三年に借上げられたが、合計二一四、五〇〇平方メートルの使用区分は次のとおりであった。

一、陸軍病院江波分院 六六、〇〇〇平方メートル(二万坪)

(この病院は主として結核患者収容施設であった。)

二、木炭貯蔵所 三三、〇〇〇平方メートル(一万坪)

三、木材置場 六六、〇〇〇平方メートル(二万坪)

四、被服倉庫 四九、五〇〇平方メートル(一万五千坪)

計 二一四、五〇〇平方メートル(六万五千坪)

(ロ)皿山および江波山の中腹に防空壕(横穴式)が作られたが、完全に工事が完成しないうちに終戦になった。そのまま作りかけで放置状態にしてあったため、しばらくして陥没しはじめ、山の姿が変わったといわれている。

(ハ)七月二十六日、米軍コンソリデーテッド機四機編隊が、佐伯郡八幡村付近に来襲し、最後の機が江波高射砲隊によって撃墜された。編隊は菱形でその真中に砲弾が炸裂し、その中へ後尾機が突っこんだのであった。その一機はゆるく曲線を描きながら、鈴ヶ峯の上空で火を噴き大爆発した。その間、三人の飛行士がパラシュートで脱出したが、一人は海中に落ちて死亡し、二人は八幡村山中に降下した。これを地元の警防団が逮捕して、五日市警察署に引渡したと言われる。この墜落の状況を見ていた市民はかなり多かった。

城子(むらこ)の最期(抜粋)

坂本潔、坂本文子

ようやくにして江波射撃場に来た。空は黒雲に覆われ雨は降り出し、傷ついた人々は所々方々から集って来て全市の被害を受けたことが正午頃にして解った。爆弾でなくて殺人光線だと言う程度のことが口伝えとなってひろまった。その後敵一機が偵察に来たのみで不安のうちに半日は過ぎた。避難者は続々と増して斃れてそのまま死ぬる人あり、血まみれになって水を求める人などこの世の生地獄かと思われた。幸い自分は非常用の救急薬を持ち合わせていたので皆に与えたが一向に効果なくただ吐気症状を呈して苦しむばかりであった。これが今日の原爆症と記憶される。午後二時頃になって漸く気も落ち着いてきたので一先ず長男(当時・広島高等学校在学)長女の動静も気がかりなので先ず市女に尋ねに行ったところ女先生ばかり残って居られて今のところ現地との連絡もつかず、十分に判明し難いから今暫く待ってくれとのことであった。学校も北側校舎は倒壊して瓦も柱も折重なって想像以上の被害を蒙っていた。五時頃再び学校を尋ねたが現地からの連絡もなく、男子の先生が多数引率して居られるので心配はないとは思っているが、こちらからも行って見るとの話合いの折も折、あわただしく大声で父兄の一人が「市

女の生徒は全滅だ、早く行って何んとか救い出さないと可愛想だ。」という。私は、一瞬不吉の予感に打たれた。私はまた大声で「さあ現場へ行こう。あの方面は委しく知ったところですから道案内します。父兄はついて来て下さい。」と言って裏門から走り出た。電車道を北上して舟入本町交叉点から住吉橋を渡り、火災燃え盛る中をまっしぐらに万代橋西詰に来た。此の周辺は第六次疎開で殆んど家屋は取壊されて後始末に動員された一般人も多数作業していたらしく、死体は累々と折重なっていた。さあ皆さんこの辺りから手分けして我が子の名を呼びつつ行きましよう、と、河岸沿いに「城子(むらこ)ちゃん…」と我が子の名を連呼して探した。火炎の中に斃れ、息も絶え絶えに両親の名を呼んで救いを求める女生徒もあった。また和服に袴をはいた女の先生の傍に同じく他の学校の父兄らしい人が「この辺りの生徒は安田高女の生徒です。」と言って立ち去った。川の中岸辺には、生徒が三々五々折重なって肌着は破れ、髪は乱れて裸となって殆んど絶命の状態、誰とも見分けがつかない。時に午後六時半頃。夕闇はいまより迫り冷気は加わり気はいらだつばかり。名を呼び続けて行くうちかすかな声で「ここよ。」と叫ぶわが子の声と、「築山さんはお父さんが来られていいね。」と、どこからともなく聞えた友達の叫びが、今なお耳底深く残って誰であったか判然としなかったことが、今更ながら残念である。多分仲のよかった友達同志は一緒になって、この川岸まで逃れて来て遂に斃れたのであろう。城子は川の石に腰掛けていた。朝からこの時刻まで、どんな気持ちで我々の来るのを待っていたか、よく苦しみをおさえこらえて生きていてくれた。多分他の皆さんも同じ思いであったであろう。苦しい中からも父母兄弟に救いを求めつつ、これが戦争だ、天皇陛下万歳と絶叫して散った少女の尊い犠牲は永久に忘れられぬ。直ちに川に飛び込んで行き、城子ちゃんのと、たずねる程顔は腫れ、目は糸筋の如く、頭髮は焼けぢぢれ、口唇は脹れて見る影も無い容貌に、思わず城子ちゃんかと念をおせば、かすかにうなづく。モンペに名前を書いた白布がついている。父母に会えた安心か「もう死ぬるよ。」と云ってぐったりとなるのを励ましながら身体を抱き上げるとモンペは膝から下はなく、火傷して皮膚がズルッと下がって居た。余り痛みを訴えるのでそっと岸まで運んだとき、一夫人が「お嬢ちゃんが見つかったのですね。私の子供はどうしても見つからないのですよ。一人でも助かって下さい。よろしかったら私の帯で背負って一刻も早くお帰りになっては。」と親切に言葉をかけて下さったので帯を載き、辛うじて場所を去ることが出来た。お名前は千田町の蔵内さんとおっしゃった。現場を去るに際し声高らかに「帰って先生やお父さんやお母さんに早く救いに来て貰うから暫く元気を出して待って居るのですよ。」と言い残して火のように熱い土地を転ばないように注意しながら、住吉橋まで辿り着いた。此処にも多数の負傷者が一箇所に収容され、病院に運ばれる手配中であつたので、傷の軽い女の人に城子を頼んで、学校に現地の救出方を知らせに帰った。

また自分は妻と共に蚊帳と水をさげて子供の所に引返した時は、午後九時頃冷気は一層加わり、川風は身に沁みて、負傷者は呻き苦しむばかりで、なかなか病院に運んでくれる様子もない。こんな状態では、みんな死んでしまうと思ったので、たまたま救援に来た一七、八歳の年若い特攻隊に頼み、陸軍江波分院に収容するよう手配を依頼し、道中は自分が案内することにし、病人を運ぶ車や戸板で仮の担架を作って貰った。途中到るところに焼けくすばった電柱、家屋のある中を通して病院に向った。時に零時頃。

途中、担架に蚊帳を敷いて寝ていながら無意識に畳の上に寝たいよ。横にしてねえ。水がのみたいとか、坐らしてなど言いつづけて苦しむのを見て、特攻隊の方々に「此の仇はきっと僕らが取ってあげますよ、しっかりして下さい。」と励まされ、一緒にただ泣くばかりでした。江波分院は既に満員で収容の室もないので、急に江波国民学校教室が充てられる事になった。

負傷者は校庭に運び置いて、爆風で木端微塵に散乱した硝子などを、真っ黒闇の中で整理し収容した。幸いにして城子は、医師の診察を受けて注射して貰ったが、身体が大変に冷いので直ぐ全身摩擦をする様に注意を受け、二人で一生懸命に体温が移る様、腕の中に抱きこんで介抱したが、再び診察の結果死亡の旨言い渡された。時に午前一時。

死体を校舎の一部に移し、夜の明けるのを待った。周囲の負傷者は苦しさ泣き叫び、近くに居た七、八歳位の男の子は死の直前「お母さんは何処ね、お母さん。」と大声で呼び、何か見ようとして両手を振り廻して、何も無いのに「蚊帳をのけて、早うのけて。」と云いながら一人で息を引取った。私達も一緒に気がくるいそうになる。

また隣りの方でしきりに「英子ちゃん、英子ちゃん。」と、体をゆり動かして名を呼び、叫んでおられたおばあさんとお母さんがあつたが、同校の一年生田村英子さんと、同時刻になくなられた。後に偶然にも古田町古江の知人だと分った。

私たちはそれぞれ死体のそばで、悲しみと不安のうちに一夜を明かした。前日から食事を摂っていないので空腹

を感じていたが、昼頃炊出しがあって、大きな握り飯が二つずつ配給された。この日も朝から上天気で、暑さは一層きびしかった。

死体は一応校庭に運び、誰れ彼れとなく一緒に火葬にするようにと、私たちにもその知らせがあった。とっさの措置とは言え、後で骨が判り難い心配が胸一杯で、できれば両親の手で火葬にしたいと、あれこれ悩んでいたら、幸いにも田村さんの好意により、英子さんと一緒に、迎えの車で一先ず家に運んで貰うことになった。私たちは再び江波避難所に引返し、僅かながら手荷物を纏めて、一緒にいた方々とお別れをして、徒歩で観音新開から庚午町に渡り、田村家を訪れた。時に三時頃。既に同家においては、近隣の方々が集って、英子さんとわが子の為に読経を済ませて、私たちの着くのを待って居られた。

城子は綺麗なふとんに寝かせて貰っていた。死んだとは言え、これで身体も楽になったのではないかと思われた。皆さんによって山の焼場に運んで貰ったが、古江にも多くの死者が出ているので、一人ずつ土地を細長く掘って、下に薪を積み重ね、死体をのせて、上から水に浸した藁を覆って、皆さんと一緒に静かに火入れをした。白煙が山を縫って天を覆い、ただただ、わが子の安らかな永眠を祈り続けた。

江波の「山文」に逃げる

平川義明(筆名・林木) (当時・広島県警察練習生)

昭和二十年六月二十日、広島県巡査を拝命した五二九回生(当時一八歳)は、卒業をあと二週間にひかえて、くる日もくる日も空襲に備えての建物倒壊作業に出動し、夜ともなれば、警戒警備の連続で眠るひまさえなかった。

そして、警察官本来の教育はなされず、酷使と空腹に疲れ果て、一日でも早く、その部署から逃れ去りたいばかりであった。

前夜(五日)の空襲で、朝の三時までそれぞれの警備(私は市役所屋上)についていた警察練習生は、六日の朝異例に、点呼が省略された。雲ひとつないのどかな朝であった。

前日の五日の朝、県北の農村から切符のとれにくい芸備線で、母が面会にきてくれた。

母は、一週間まえに行なわれた警察練習所長福中奏任警部の訓示のあと、私のしたためた手紙によって思ったものである。

訓示の内容は、「諸君は、現下の状況では、いつ一身を天皇陛下に捧げる日がくるやも知れぬ。後顧の憂いなきよう、遺書をしたため、遺髪を切り取って、父母の許に送っておくように。」というものであった。

面会室に、練習所の中食を持参した私と、二ヵ月目に会った母は、すっかり目の落ち窪んだ私の顔と、手にしている碗を見くらべて、急に暗い顔になった。「これだけしか食べさせてくれんのかい...」

涙声になりながら、手造りのにぎりめしを出してくれ、あたりに気をつかいながら、しきりに食べることをすすめた。

久しぶりに食う銀めしであった。私は、そのにぎりめしとおかずをガツガツ食べた。

母は、その日すぐ帰郷した。そのあと私は、強い下痢に見舞われたが、どこかに体力の余韻がのこされたような朝でもあった。

点呼がなく、朝食の終わった午前八時、私たちの第五班は、警防会館二階で、久しぶりに新任巡査の講習を受けた。サーベルを外ずし、上着を脱いで席に着いた。

教官は、経済警察担当の岩井警部補で、

「きょうは君たち警察官が、戦時下の第一線に出た場合の、いちばん大事な仕事について講義をする。」とあって、岩井教官は後ろ向きになってチョークをとり、黒板に向かって、

食糧管理法

と大きく書いて向き直った。

私はその朝、偶然にもいい席についた。東側の開放された窓から射し込む太陽は、前列にいる同僚たちに容赦なく照りつけた。私は最東部にいたが、机を区切りに右側が土壁となっていて、ちょうど陰になっていた。

「諸君は数日ののち、任地に着いたら、早速、警察官としての職務を遂行していかなくてはならないが、主食、とりわけ米や麦を、政府以外に売り渡すこと、運ぶことを、徹底的に取締まって貰いたい...」

岩井教官がそこまで言って、机上の法令集に目をやった。

その瞬間であった。青紫の光線、ちょうど電気溶接の強度の光りが反射するときの光色であった。

げんな顔をあげた岩井教官の眼鏡が、異様に光った。光った時間は、ほんの半秒足らずであったろう。

教壇にいる岩井教官があたかも廻り舞台に乗って、ふり廻されるように、左斜め下に向かって急に傾き、私たちは右上に移動した。まったく無言の一瞬であった。同時に建物が倒れかかってきた。

倒壊する喧燥の中で、その間人声らしいものは何ひとつあがらなかった。前後左右からこづかれ、圧倒されながら、頭の上に落ちてくる瓦のカケラが、火の玉のように熱かった。一寸先も見えない暗闇の中に、全員下敷きになっていながら、声を出すものがいない。

喧燥が止んだとき、私ははじめて声をあげた。

「助けてくれッー」

「助けてくれ！」「助けてくれえ...」と、私の声が堰を切ったように、周囲と下の方からつぎつぎと叫び声があがった。強い声もあれば、ひ弱い声もあり、断末魔の悲痛な声であった。いくつかのうめきも聞えた。

周囲がいくらか見えるようになり、土煙がうすらいでいくと、空のあることがわかった。

"逃げられる！"

はじめて自意識をとり戻した。私はしゃがんだような格好で、建物の間にうずくまっていた。

倒壊した建物の間から見ると、あちこちから、一人、二人と這い上がってくる人影が見える。そのとき、パチパチと火の手が上がりはじめた。

"だれも助けにきてはくれない - "

私は身体をうごかした。左足がうごかない。見ると、編上靴を履いた私の左足先は、大きな角材とタルキの間にはさまれている。

燃えさかる焔の音が、急につよくなった気がした。四、五回思い切って左足を引いたが動かない。両手の動く私は、次に右手で身体を支え、左手で靴のヒモを解きはじめていた。

半分紐を解いたところで、左足に力を入れると、意外にも簡単に足が抜けた。とにかく、外へ早く出ようと、二、三歩歩いたが、脱ぎ捨てた靴が気になった。どうして靴を気にしたのでらう。

ふと、左足に、柔かく暖いものが触れた。人間である。同僚のうなじのところである。顔を下向きにして、すでにこときれていた。面識はあったが、名まえを憶えていない巡査であった。

ころがっている編上靴は、木材の間からこともなく拾われた。私はその靴を履くと、元安川寄りに逃げて行った。

すでに多くの人々が群がっていた。走るもの、ゆっくり歩むもの、ピッコをひいてかろうじて身体を支えて進むもの。四ツ這いになりながら、気力だけで逃げようとしているもの。みんな半裸か全裸である。一人一人が自分自身をまもるために精いっぱいであった。他に力をかす余裕はなかった。

「タスケテ...」

元安川畔の道路に出ようとしたとき、私に声をかけた少女があった。

「オカアチャンがコノ下にいる。タスケテチョウダイ！」

四歳ぐらいの少女は、すぎるような目つきで倒れた家を指さした。

目をやると、下の方でうめき声が聞えており、もうその端は火が廻わっている。

「おい、生きていたか？」

同僚の菅田剛吉がそのとき後から声をかけてきた。

「早ういこう、逃げ遅れたら死んでしまうぞッ！」

菅田がそう言っているうち、少女はいつのまにか、私のズボンをつよく握っていた。

「うん、よし待っとれよ。」と言って、足を引くと、力を入れている少女の手はもろくも放され、よろめきながら私の顔を見た。そして「ウワッー」と、はちきれんような声をあげて泣いた。明らかに少女は、私の嘘言を、私の顔の中に見たのである。

少女は中腰になって、泣きわめきながら私を見送った。避難者はつぎつぎと後を追ってくる。その人混みで、よろめきながら逃げてくる大男につまずかれ、少女は転んだが、意外にもそれは、岩井教官のようであった。私は後をふり向かないようにして、その場を去った。

菅田と私は、どこというあてもなく、ただ、人の群れにしたがって元安川に沿って、南へ南へと小走りに歩いていった。

途中、元安川には、水面にたくさんの屍体が浮んでいる。追い越し、追い越されながら逃げて行く人たちは、ひ

どいやけどで、皮膚が垂れ下がっているもの、顔の形がわからないほど外傷をうけているもの、すでに力つきて、虫の息で、通りすがりの者に何かを訴えようとするものなど多くいたが、だれひとり、耳をかそうとする者はいない。

「早う歩けや。」と菅田に叱咤されながら、二人で吉島飛行場に着いたのは、九時に近かったであろうか。

「お前足の骨は大丈夫か？」と、菅田に聞かれて、自分がピッコをひいていることにはじめて気づいた。そして、シャツの袖で顔を拭いた白地に、多量の乾いた血がこびりついていて、頭部に傷のあったことも知った。

数千人の群衆であったが、飛行場はさすがに広がった。逃げてきた方をふりかえって見ると、私たちの被爆した地点は、赤い焰の上にどす黒い煙が渦巻いており、その上層部は、まっ白いきのこ型の傘ができたように望見され、その雲が、飛行場上空まで迫っていた。

「生きられたぞ。」

菅田はそう言って深いため息をついた。

いささかの安堵をおぼえ、私は急に水が欲しくなった。菅田もそうだった。二人は人影のあまりない、飛行場南端にある建物の方へ向かった。

人気のない建物の外に、防火用のガランを見つけ、菅田が狂喜して蛇口をひねったが、水は二滴ばかり落ちてきたきりであった。

私は急に疲れを感じた。菅田の目にも極度の疲労の色が見えた。二人は周囲をさまよったが、水らしいものは、防火水槽にたまって、ポウフラのわいている汚水だけであった。

「海の水をのもう...。」

菅田にうながされ、岸壁まで歩いたが、海水もはるか下の方に水面があり、その石垣を下りて行く気力も、体力もなかった。

「お願いいたします。」

岩壁の端に坐っている一人の老婆が、ひよわい声をかけてきた。老婆の半裸になった背中は、まっ赤ななま身をむき出して、皮膚がボロきれのように、腰あたりまで垂れ下がっている。

「おにいさん、助けると思うてわたしの背中にショウベンをしてくださらんか。ヤケドにはショウベンがいちばんいいんじゃないんです。」

虫のように小さな声だった。ふりかえると菅田が見えない。私はどうしたことか、かろうじて立っただけで、さきほど裏切った幼女のことが思いだされてならなかった。

それだけがその日の良心であった。私はうなずいて、坐っている老婆の後ろに廻り、まっ赤な背中に向って、ようやくかまえた。

老婆は、やっとうごかせる両手を、不器用に胸あたりに組んで合掌した。老婆はしきりに念仏をとなえていた。

私は、かまえたけれど、体がよろめくようで、どうしても果たせないのであった。

「おばあさん、ダメです。ごめん。」

と、ことわると、

「いいえ、ありがとうございます。」

感謝のこもった涙声で、かなりはっきりした声で言った。老婆は勢いよく私に背を向けたまま合掌して、深く頭を垂れると、次の瞬間、反対に私の股間に向って、上向きに倒れてきた。私の恥部を老婆の髪で押され、私もそのまま一緒に倒れた。老婆はそれっきり、息をひきとった。引きつった目だけが、空を見つめていた。

菅田が、どこからか長い竿をもってきた。菅田は、その竿を低い海面に向けると、先で海水を撫でて、竿をたぐりながら、先についている海水をなめた。そして何回もその動作をくりかえしたのち、私に竿を渡しながら言った。

「お前はダメだ、自分の生きることも考えんで、人にかかわりを持ちよーる。」

たしかに水が欲しかったが、海水は、自分の飲みたい水ではなかった。いま、コップに一杯の水をくれる人があったら、私は死んでもよいと思った。

私はまた菅田にしたがった。菅田はもとの建物の傍に行き、さきほど見たコンクリートの防火用水槽に近づいた。彼はその水に口をつけると、ガムシャラに汚水を呑んだ。

防火用水を呑み終えた菅田は、大きな息をふきだすと、そのまま横のめりになって、吐気をもよおした。私は菅田の背中を撫でてやろうとしたが、すでにその力もなかった。そして、どうしたことか、私も嘔吐しはじめた。

二人は、朝の食事を全部吐き出した。汚水を呑んだ菅田の方が、量としてははるかに多い感じがした。

それから数時間、真夏の太陽に照らされて、二人がどれだけその場で眠っていたかは明らかでない。

大粒の雨にうたれて、菅田に起こされたとき、キノコ型の雲は、いつのまにか、そのきわが、大きくうすらいでいた。二人はしばらく軒下に入って、雨の止むのを待った。底力はなかったが、いくらか疲れを忘れていた。私は雨の中に出て上を向き、大きく口を開いて雨を呑んだ。

西の方に焼けていない町があるように感じたのは、雨が止んでからであった。死んだ人、生きている人の群れが、飛行場のあちこちに見えた。菅田と私は、長い時間をかけてその町に向かい、滑走路を横断していったが、その端まで来たとき、またガックリした。町と飛行場の間には大きな川があって、橋もなく、水面いっぱい覆った木屑の中に、無数の屍体が浮んでいる。

少し経ってから、菅田の指さす上手を見た。一艘の小船に、鈴なりにたった被災者を乗せて、対岸に向っている。その川岸には、数百人の人たちが順番を待っていた。

船の着く川岸には、二人の憲兵が立っていた。周囲には十人あまりの、青い服の囚人たちが、憲兵の指示にしたがっていた。

「お前らは、傷が浅いから渡せん。」

憲兵は二べもなく、私たちにいう。

「いいえ、公用です。」

突然、菅田が言った。

「自分たちは、警察部警備隊の者ですが、電話不通のため、これから廿日市警察署に連絡に行くところであります。」

とっさで口から出まかせの菅田に、私は気力のないままたじろいだが、菅田は平然としていた。

憲兵は、私たちの顔を見くらべていたが、

「何か証明になるものをもっているか。」

と、糺した。

「いいえ、口頭伝達です。警備隊長殿から、廿日市署長殿への救助依頼です。書類は何ひとつありません。」

菅田はそう言って、腰につけている帯剣用バンドの朝日影を押さえた。

憲兵は、菅田と私の帯剣バンドを見ると、何の疑いももたず、二人の名まえも聞かないまま、

「よしッ、行け！」

と言って、私たちを優先して舟に乗せた。

舟が沈むほど多くの重傷者を乗せて、船頭は、群がる屍体をかき分けるように、竿をつかった。

どうしたことか、私は、舟の上で、子供の頃教わった「いなばの白兔」の童話を思い出した。そして、菅田も私も、おなじ昭和二年の卯年生まれであることを、どうしてそんな時に思いうかべたのかわからない。

それは、大きなたたずまいの家であった。

「水を吞ませてください。」

岸を踏んだ瞬間、急に水がほしくなった。その家のおかみさんは、気持よとりなしで、私たちを大きな炊事場に入れ、井戸ポンプを押してくださった。

私たちは交互にドンブリ六杯ばかりの水を呑み、そのまま、また吐気をもよおした。吐いたまま倒れてしまった私たちを、おかみさんと若い女中さんは、表の八畳の間に入れて、柔らかい絹布団を敷いてくださった。タオルと水を用意して、私たちの汚れた身体を拭い、私の頭の傷の手当をして、包帯までしてくださった。何だか、人並みな世界に連れ戻されたという気がした。

その家では、三人の娘さんが勤労働員に狩り出され、その朝、七時半頃家を出て、行方不明のため、主人はいま探しに出かけているということであった。

(あとからわかったことであるが、その家は山本文蔵という門札がかかっており、商号「山文」という料理屋であった。

同地がまだ江波村であった頃、寛政年間に創業された料亭であるといわれ、当時、浅野藩のご法度により、広島城下では、料理屋営業が許されず、遊女はもちろん、芸妓も置かせないという儉約令下で、江波では華やかな三味の音が聞かれ、酔客たちのたわむれる声があがるなど、治外法権の土地柄であったと伝えられる。

袋町の仁室にこもって、「日本外史」の編さんにあたっていた頼山陽は、よく町を脱け出して、「山文」に遊び、

山陽の酔筆を振るった大看板「白魚阿里 山文」の書は、「山文」の家宝として、現在なお秘蔵されている。

その後、維新を経て明治、大正、昭和と栄え、由緒や格式とともに、白魚料理を名物とした「山文」も、原爆で三人の娘を失って同家の血脈は断え、併せて太田川が汚染されて白魚も棲まなくなり、昭和四十年頃から、老舗「山文」の行燈は、江波の町からその灯りを消すこととなった。)

ガラス窓のひどく壊れている八畳で、たそがれてきた庭に、またしても強い雨が降った。菅田も私も放心状態になったまま、絹布団に横たわり、燃えつづける対岸の火を見ていた。

夜半、主人が帰ってこられ、「娘さんは、何らの手掛りもなかった。」と、おかみさんと女中さんに言ったらしく、三人のすすり泣く声が、隣室から聞えてきた。

おかみさんは、私たちにおかゆを作ってすすめてくださったが、二人とも、まったく食欲をうしなっていた。

その夜の何時であったか、また空襲があった。おかみさんたちにうながされ、菅田は起きあがったが、私はもう、立ちあがる気力がなかった。離れ屋敷の裏山にある防空壕に、執拗に連れて行こうとする女中さんに、「いいですから、私にかまわず行ってください。私は、このまま布団の上で死ねたら満足です。立ちあがるのが苦しいのです。」

と言って、私は仰向けになったまま、両手を合わせた。

幸い、数分後に空襲警報は解かれた。無難な一夜が過ぎたが、私の体力は、小用に立ちあがることもできないほど衰えていた。布団を汚してはと、明け方、隣の部屋にいる女中さんに声をかけ、肩を貸して貰って便所まで行き、支えられながら、長い時間をかけて用を足した。

七日朝、主人は、再び三人の娘さんを探しに出て行かれた。菅田はどこへ行ったのか、昼すぎになって戻ってきた。私は彼の体力が羨しかった。菅田は、手にした紙一枚を私にくれた。

西警察署 江波巡査駐在所

巡査 何某印

と、罫紙の後尾に記された、私の罹災証明書であった。

その夕方、私はどうにかおかゆののどを通った。しかし、またしても、三人の娘さんの行方をつかめないで帰ってこられた主人の失望ぶりをみて、私は再びやり切れない気持ちになった。

翌八日の朝、菅田と私は、「まだ無理だ。」と引きとめてくださる「山文」をあとにした。

二人は、江波の町から、廃墟となっている舟入町を北上した。まだ多くの屍体が道路の脇に転がっていた。焼けたトタンが立てかけてあり、家族の消息や居所を記したチョークの字があちこちに見られた。再び、人間の世界から遠ざかっていく気がした。

それぞれの安否を尋ねて、往来する人の影が多かった。十人あまりの兵隊が作業をしている。それは、数十におよぶ屍体を積み重ね、石油をかけて茶毘をしている一隊であった。火葬作業をしている煙は、他の所にもたくさん眺められた。

住吉橋の手前に、母子と思われる二人があった。横たわったまま、顔と上半身ともに焼けただれた半裸の母があり、その胸あたりに顔をうずめている、二歳ばかりの幼女がいた。幼女は、泣き疲れていて、放心した目を私に向けた。私は、またしても二日前の幼女のことが思いかえされた。

「オカアチャン、マダ寝トルンヨ。」

そう言って、私に語りかけてきた幼女の顔はあどけなかった。母の体からは、すでに屍臭が漂い、多くの八工が、目や口もとにむらがっていた。

道ばたに寝転んだまま、虫の息で、水をくれと、通りすがりの人に乞う何人があったが、だれひとり相手にするものはなかった。

菅田と私が、住吉神社の境内にある、警察練習所連絡所に戻ったのは、その日の昼頃であった。

福中所長、特高の松本警部補、私たちの講義をしていた岩井警部補のほか、三人あまりの教官がいた。被爆時、教官二十名、練習生約二百名の警察官は、そのほとんどが、即死が行方不明とのことであり、他に十二、三名の練習生がいて、焼野原となった練習場跡から、乾パンの空箱に、骨をかき集めては戻ってきた。

菅田と私は、不機嫌な教官連中から、かろうじて帰郷を許され、その日のうちに郷里に向った。

かくて、終戦と郷里(双三郡君田村)の盆を同日に迎えた頃、私の体調は小康を得ていた。頭部の裂傷と、背中のかすり傷二か所も完全に癒えており、足の打撲も、ほとんど痛まなかった。被爆時、右側が土壁となっていて、直

接殺人光線をうけなかったのが、何よりの幸運であったと思われた。

敗戦を知るとともに、どうにか職場に戻りたいと思っていた私を、母はどうしても行かせようとはしなかった。五月に直腸癌の父を失い、妹と私の二人の子しかもたない母としては当然であったろう。

八月二十八日頃から、急に頭髪が脱げはじめ、強度の熱に見舞われだした。

私は、九月下旬まで、べったり床に就いた。わけても、九月はじめからの一週間は、人事不省となった。その間、何度か生死の間をさまよい親族が寄り集った。

頭髪が脱げ、歯ぐきがはげしく痛んで、多量のよだれが流れ出た。四十度を超す熱が、連日のように出た。無医村であった私の村で、宍戸忠義という海軍衛生特務少尉が復員してきて、私は毎日治療を受けたが、私の症状についての完璧な療法はわからないとのことであった。わずかに、ビタミンを補給することがよい、という宍戸さんの意見をたよりに、母はやたらに南瓜とサツマイモの茎を煮ては、私に食べさせた。

母の執念ともいえる食事療法によって、私は九月中旬をすぎると、にわかには体調が回復し、食欲がでてきた。それからの毎日、私はガキのように南瓜とイモツルを食べつづけた。

十月十四日、戦後初めての村まつりを迎えた頃、私は奇蹟的にも、ほとんど完全に健康をとりもどしていた。私は十月下旬に入り、反対する母や親族たちの止めるのも聞かず、禿げた頭に戦闘帽を冠り、向洋町、東洋工業内に仮設された広島県警察練習所に戻っていった。

教官の顔ぶれは大幅に変わっており、被爆当時の教官は三人しかいなかった。百数十人の新しい練習生はすべてが復員してきた兵隊たちであった。

わずかに生き残っていた四人の同期生と、私は、その部屋に一緒になった。

岩井警部補も、私と一緒に逃げていった菅田も、すでに他界したとのことであった。即死者を除いて、郷里に帰って療養中のものが、ほとんど亡くなっていくといわれ、私たち二百名近い五二九回生も、生きのびたものはわずかに三十名ばかりだろうと伝えられた。

同期生五人は、ほとんど講義も受けず、連日、教官室の使役にあてられた。再び空腹をおぼえる生活に戻された。

ある日私は教官室裏の、書庫の整理を命じられた。腹の空いていた私は、その片隅に積重ねられてある、乾パンのボール箱を見て、その蓋を開いた。その中には、あの日かき集められた多くの同胞たちの骨があった。そして、その上部には、名まえの書いてない茶色の封筒があり、少量ずつ区分された骨が入れてあった。

卒業を二日後にひかえた日、ある同僚の父母らしい人が、教官室を訪ねてきた。新しい教官で、係りのその巡查部長は、謙虚にその二人と語り合っていたが、前日、私の整理した書庫に入って行き、しばらくして茶色の封筒をもって出てきた。

巡查部長と、二人の会話の内容は聞きとれなかったが、二人は涙しながら、その封筒をおしいただくようにして、帰っていった。

二日後に卒業式を終え、それから十年、私は巡查としての生活を送った。

十月三十一日附で呉警察署勤務となった私は、その年の暮、休暇をとって、制服にサーベル姿のまま、母の用意してくれた餅米二升を鞆につめて、あの日お世話になった「山文」を訪ねた。

おかみさん一人がいて、人なつっこげに私を迎えてくださった。やはり三人の娘は行方さえわからないと、話された。おかみさんは、しきりに私の家の状況など訊ね、できたら、この家の子になってくれと私にせがまれた。私は、どういってよいものか返答に窮した。

それから十数年が過ぎた。私はすでに警察を退めていた。そして、妻と一男二女があった。

昭和三十九年、第十九回目の八月六日、私はひとり平和祈念式典に参加した。式を終わった慰霊碑の後側に、つぼんだ蓮の花束と、線香を売っている露店があった。

その店で、蓮一束と線香を買っている、二十四、五歳の娘に、なぜか私は気をとられてしまった。
"これがもし、あの日、母を助けてくれと、私のズボンをつかんだ幼女であつたらどうしよう..."

私はにわかには胸が詰まって、涙がおしあげてきた。私はその娘が去ったあと、おなじ蓮と線香を買って火をつけ、逃れるようにその場を後にした。

元安橋の上まで来たとき、持っている線香の火は、すでに手元まできていた。その間、どこをどうさまよったか、いまだに記憶がない。おそらくその間、私は現実をはなれた、十九年まえの世界にいたと思う。

私は、元安橋の上から、ことばにならない大きな声をあげて花束と線香を川の中へ投げた。

その夕方、心ばかりの果物籠を買って、私はひとり江波の「山文」を訪ねた。

うらぶれた「山文」の屋内であった。居合わせた女中さんは、おかみさんは一昨年、胃癌で亡くなったといい、ガックリした私が、ようやくわけを話すと、女中さんは、私たちが、あの日、水を吞ませてもらった炊事場の片隅で、独りビールを吞んでいる主人に引き合わせてくれた。

「それは、よう来てくださった。」

と、ポツリ、とひとこといわれた、主人の顔には覇気がなかった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

広瀬北町、広瀬町、寺町、十日市町一丁目(一部)、同二丁目(一部)、西十日市町、榎町(一部)

町内会別要目

この地区の範囲は、寺町[てらまち]・広瀬北町[ひろせきたまち]・広瀬元町[ひろせもとまち]・錦町[にしきまち]・西九軒町[にしくけんちょう]・西引御堂町[にしひきみどうちょう]・新市町[しんいちまち]・横堀町[よこぼりちょう]とし、爆心地からの至近距離は新市町南部で約〇・七キロメートル、もっとも遠い地点は寺町の横川橋南詰で、約一・二キロメートルである。

戦前、寺町一帯は西本願寺広島別院をはじめ、由緒ある古寺名刹が、その荘厳な薨を並べていた。また、広島の高瀬五箇荘の一つとして 広瀬荘 の名を起源に持つ広瀬元町・広瀬北町付近は、軒の深いしっとりとした家なみが連らなり、伝統的な下町らしい情緒を、表筋にも裏筋にもなおとどめていた。

新市町は、魚貝類をあつかった北榎町の川沿いの旧市[きゅういち]に対してできた青果物市場が大いに繁栄したことに由来して、その町名となったといわれるが、この新市町から西九軒町へかけての付近一帯は、市場の発展とともに佃煮・トウフ・カマボコ・アメ玉などの食品加工をおこなう家内工業が盛んで、これらの商店がびっしり軒をならべていた。また、西九軒町の広瀬神社は境内も広く、昔からの巨木が昼も暗いほどうっそうと茂っていたが、原子爆弾により社殿も大樹もすべて全焼した。戦後都市計画により境内は三分の一の狭さになったが、社殿は再建され、植樹もされた。

この地区の被爆直前の建物総戸数は約二、八三三戸、人口約一一、六一一人と推定されるが、詳しくは次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
広瀬北町一丁目	554	554	2,461	由井善次郎
広瀬町北町二丁目				田部行雄
広瀬北町三丁目				西村仁津夫
広瀬元町	748	748	2,994	辻本真吉
錦町				小宇羅賛一
西九軒町				西脇澤登
寺町	429	423	1,796	岩本伝衛門
西引御堂町西				市川章
西引御堂町東				内村光次郎
横堀町	1,102	1,180	4,360	木村寛一
新市町				小田盛蔵

なお、地区内に所在した主要建物および事業所は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
広瀬国民学校	広瀬北町	超専寺	寺町
広瀬託児所	広瀬元町	教順寺	寺町
西本願寺広島別院	寺町	光円寺	寺町
円龍寺	寺町	光福寺	寺町
元成寺	寺町	実相寺	寺町
浄満寺	寺町	浄専寺	寺町
常光寺	寺町	徳応寺	寺町
真行寺	寺町	報専寺	寺町
善正寺	寺町	品竜寺	寺町

二、疎開状況

人員疎開

当時、自家に住む者の疎開は禁じられ、空襲に際しては戸を開き、各自が家を守るよう市から通達されていたが、老人や病人は疎開した。なお、間借人や同居人は親類や知人を頼って疎開させた。

物資疎開

物資疎開は家具類が主で、各人が郡部の親類知人の家に運搬していた。家具類以外のものは疎開できなかった。

運搬には、トラックや馬車を使ったが、なかなか都合がつかず困難をきわめたので、疎開できなかった人も多かった。なお、宇品の陸軍糧秣支廠から広瀬元町辻本昆布工場倉庫に、軍用罐詰を大量疎開していた。

学童疎開

昭和二十年四月二十一日、広瀬国民学校の児童三年生以上約二〇〇人が、教職員八人に引率されて、双三郡酒河村・同川地村・同板木村の寺院や民家に集団疎開をおこなった。このほか、約一五〇人の児童が各自で縁故疎開をした。残留した三年生以上の児童は、学校内で引き続き授業を受けていたが、一、二年生は、広島別院と広瀬神社の二か所に分散して授業を受けた。

三、防衛態勢

各隣組の単位で防衛態勢を組織し、隣組長が班長となって、気迫のこもった真剣な訓練が日常繰返された。ハシゴを屋根にかけて登り、焼夷弾攻撃に備えたバケツ・リレーなどの訓練がおもで、警防団の指導はきびしいものであった。

電車通りに面して、大型の防火水槽を五か所ばかりに設置していたし、各自も家庭用防火水槽をそれぞれ備えていた。寺町では、大型(横一・八メートル、縦一・三メートル、深さ一・二メートル)の防火水槽を一〇か所設置していた。また、各家庭は庭すみや縁がわ近くに防空壕を作って、万一の場合に備えていた。

四、避難経路及び避難先

非常の場合には、安佐郡古市町へ避難するように、市当局から通達を受けていた。市当局から古市町役場へも、その連絡がしてあった。

避難経路は、まず横川町へ出て、横川本通りの裏側を通過して、古市町方面へ避難することになっていた。

五、所在した陸軍部隊集団

広瀬国民学校の南側校舎に、広島地区第二特設警備隊(中国第三二〇三八部隊)が駐屯しており、常時六〇人くらいいた。そのほかの所在軍隊については不明である。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜九時ごろから警戒警報が発令され、続いて深夜、空襲警報となったが、平日と別に変ったところはなく、日ごろの訓練どおりの防衛態勢をおこなった。

六日朝、警戒警報が発令されたので空襲・防火に対処するため、寺町の野地兼松ら役員は再び広島別院に集合して待機したが、解除になったので、それぞれの自宅に帰った。

ある者は、平常着に着かえて一服していたし、ある者は朝食の仕度にかかっていた。またある者は食べ終って一息入れていたところであったし、出勤の用意をしていた者もあった。

その時突然、異様に強烈な光線を感じた。そのまま何をするまもなく、すぐまた大きな音を聴いた。ピクッとしたときには、もう家屋もろとも倒されていた。防空壕へ待避するひまはなかった。

家屋疎開への出動

なお、この六日朝、西引御堂町と西九軒町から、土橋方面の建物疎開作業に出動することになっていた。疎開対象戸数は一〇戸で、前日までに三戸の疎開を終わっていた。

このほか、六日当日個人の自由意志で、疎開家屋の廃材を薪用にするため、土橋方面へ取りに行っていて、災難にあった者も幾人かいた。

地区内の家屋疎開状況

地区内の建物疎開は、被爆前に北広瀬橋付近、広瀬北町三丁目電車通りより北広瀬橋まで。また西引御堂町中央道路を空鞘町筋に広瀬北町二丁目黒住教の家付近までの、主として人口密集地帯の間引き疎開を完了していた。

炸裂

寺町の熊本善導(仏壇商)の談話によれば、別院の本堂の廊下にいるうさん臭いルンペン二人が、広庭に降りて北門の方へ行ったので、注意しながらあとをつけて大門の前から四、五歩、北へ向って歩きかけた時であった。横川橋の上の方に、朝日ぐらいの大きさの、目のくらむ青白いマグネシウムをたいたような光る物体を見た。

一瞬、爆弾だと直感して北に向って伏さるや否や、その光る物体は、パチンという音をたてて破裂した。そして、横まくれに傍の家に逃げこむまでの二、三秒のあいだに、朝日も黄赤くなるような煙をみた。

伏さるとき、後首筋を刀で斬られたような感じがした。屋内にころがりこむと同時に、百雷一時に落ちるような

轟音がして、目さきはまっ暗になった。

倒壊店舗の中から出てみると、紙屋町・八丁堀まで見え、別院本堂の大屋根は飛んで無くなっていった。しかし、不思議にも大門はそのまま残っていたという。

七、被爆の惨状

川原に避難

閃光を感受したと同時に、すべてがペチャンコとなり、凄い煤煙が立った。

飛び出して助かった者、下敷きになったが這い出られた者、辛うじて救出された者など、町民の多くは地区西側を流れる天満川の川原に集った。

死者続出

地区内全域の倒壊家屋からたちまち火の手があがった。下敷き状態から救出されたときは、すでに周囲が火の海であった者も多く、その火炎の中から、呻く声、救出を求める声々が、断末魔の悲鳴そのまま、あわれに悲しく無数に聞えた。

しかし、その声々を助け出す余裕はもうなかった。運よく自力で這い出した者もあったが、ほとんどは生きながらに焼け死んだのであった。

脱出した人々の大多数は川原に逃げのびて行き、川に飛びこんだ。もうこの時、川には被爆死体が一ぱい浮いていた。死体は松の皮を剥いだような色になって脹れあがり、人相は無かった。この川原に逃げて来た者は、広瀬地区の住民が多かった。しかし脱出できた者は一部分であって、怪我人や火傷者など多く、命からがらの姿であった。救急箱も薬品もなく、ただそこにあった手拭を拾ったり、フンドシを破ったりして繃帯をするだけのことであった。また、川までは逃げのびられたが、力つきて死ぬる人々もたくさんあった。

川原以外の状況

川原以外には、横川町の本通り裏側の道路をとおって、安佐郡古市町の国民学校などを目ざして避難したが、倒壊した家屋が一面に燃えあがっていて、逃げる道も判然とし難いほどであった。横川駅前道路は、すでに焼け死んだ人間と、歩行できない重傷者らでいっぱいであった。

電車の車掌が、切符鉢を持ったまま大の字なりに倒れて死んでいたし、新市町の市場へ野菜などを運んで来て、市内の家庭の肥料を汲み取り、田舎へ帰る途中であったらしい馬や牛が幾頭も倒れていた。

なお、炸裂時に横川橋鉄橋上を進行中だった電車の運転手が運転台から河中に吹き飛ばされたのを目撃した人もいる。

道路は猛り狂う火炎と、爆風による飛散物などの障碍物で通行できず、やむなく天満川を渡って己斐方面へ脱出する者も多かった。己斐へ出た者は、軍のトラックによって佐伯郡廿日市町方面に送られた。

学徒の死

野地兼松が己斐へ向って避難する途中、学徒動員の子ともであろう。どこの学校の生徒やら判明しないが、一〇人ほどの声で「助けてくれ。」と叫ぶのをきいた。すぐその場所へ行ってみると、家の下敷きになって身動きできなくなって苦しんでいた。場所は、広島別院の電車停留所前で、電車が来るのを待つのに、暑いから日をさけて家の陰に入っていて被爆したものらしかった。

学徒三人を家の下敷きからひっぱり出したが、三人は飛ぶように逃げて行った。そのうちに火災がおこり、倒壊物が燃えだしたので、残りの生徒は助け出そうにもどうにもできなかった。

家の下敷きになったまま、残された学徒たちは、火勢のつる中で「君が代」を合唱しながら死んでいった。さきに救出した三人が逃げたので、学校の名も姓名もきくことができなかったという。

倒壊家屋

爆風圧の筋道がはっきりと判るように、家屋が、その位置のまま、マッチ箱を押しつぶしたように倒壊していて、各家の所在ごとに、その区切りをつけているところもあった。

別院は、大屋根だけとんで、内陣・外陣の大柱は立っていた。なお、一般の家では、寺町上組のケヤキの大柱を使った岩本伝右衛門宅だけが残っていた(熊本善導談)。

火の海

広瀬地区は全域にわたって壊滅し、各所から発火した。寺町では広島別院が最初に発火したという目撃者もあるが、時間的な差はあまりなく、ガソリンや油の罐がパンパン爆発する音がして、たちまち全体が火の海と化したの

であった。

被爆者は男女ともほとんど丸はだかで血まみれとなり、大小の火傷でなま皮が剥げているまま、気ちがいのよう
にわめき叫びながら逃げていった。

倒壊した家屋や飛散物のみでなく、山の手の松の木も、鉄道沿いの柵の杭頭も自然着火で燃えていた。

黒い雨

炸裂後約一時間くらいたったころ、まっ黒い油のような雨が、逃げまどう避難者の上に降って来て、人相がわか
らなくなるまでに、みんなの顔は黒く汚れた。ついで大粒の雨が降り、体にあたると痛いので、なんでも手あたり
しだいに拾って頭にかぶり、雨のやむのを待った。二時間くらいして雨もやんだので、まだ歩く力の残っている者
は歩いて、それぞれ安全な方向へ逃げた。

この降雨のなかでも、燃えさかる火炎はいっこうに衰えなかった。

橋焼失

橋梁は、木の部分が自然に燃えあがった。午後二時ごろまでに広瀬橋・北広瀬橋などがついに焼け落ちた。

海軍来援

逃げるに逃げられず迷っていた負傷者らは、午後四時ごろ、横川町の三篠信用組合本店へ行けということ、人
づてに聞いて、そこに集った。海軍の衛生隊が来援して、負傷者の治療をおこなった。

六日の夜

こうして、死ぬる者は死に、逃げられる者は安全地域へ逃げ、辛うじて息をしている重傷者はその場所から動か
れぬまま、六日の夜を迎えたのであるが、なお残りの火が燃えており、広瀬地区一帯、立っている家屋は一軒も見
えない死の街であった。

諸現象

避難先からしばらくして復帰したときは、黒焦げになった電柱や柱が、ただポツンポツンと立っているに過ぎな
かった。瓦礫の堆積した地面には、焼けた機械類の赤茶けた残骸、衣類やふとんなどの布ぎれ、もつれあった電線
などが雑然と散乱していた。

焼けた瓦、焼けた石が歩いて行くどこまでも続いており、中には硬貨類が溶けてくっつきあったまま凝固してい
たし、瓦も溶解したガラスと共に固っていた。

寺町一帯の各寺院墓地は、墓石の散乱がひどく、また多くの墓石は焦熱のため欠損が甚だしかった。

諸所に焼けただれた脱線電車・自動車の残骸があり、傍に運転手が乗客かの死体が転っているのも見られた。

広瀬地区は爆風・爆圧の直撃を受けたらしく、倒壊家屋その他がほとんど一斉に発火した。ドガンという音と共に
丸味のある光が落下したとたん、地獄と化した。

こんな状況の中で、広瀬元町のある家では、二階に寝ていた母親と二児が、約二〇〇メートル北の広瀬橋の東側
まで、二階と共に吹き飛ばされたが、三人ともかすり傷一つもしないで助かった。その二階は瞬間的に一階から
はずれて飛んだという。

また、寺町の報専寺内にある高さ一メートル半ばかりの築石台の上の鐘つき堂は、その瓦が飛んだだけで、その
まま残っていた。この鐘つき堂とイチヨウの木などの樹木は、付近の民家四戸とともに奇蹟的に焼けず、戦後まで
残った。

なお、炸裂瞬間の被害は、次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)		
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者
広瀬北町	100	-	-	-	54	36	10
広瀬元町	100	-	-	-	58	35	7
錦町	100	-	-	-	78	14	8
西九軒町	100	-	-	-	81	7	12
寺町	100	-	-	-	53	33	14
西引御堂町	100	-	-	-	80	14	6
横堀町	100	-	-	-	70	22	8
新市町	100	-	-	-	80	15	5

全焼は全壊を含む

八、被爆後の混乱と応急処置

救護状況

焼野原になった地区一帯には人影一つなく、住民もいなかったから、その後の混乱ということもなく、応急処置も不必要であった。

兵隊が三、四人来たが、何も救援しなかったし、もちろん救護所も設立されなかった。一週間ぐらいして、現在の商工会議所付近に天幕を張り、乾パンを誰彼なしに配給したから、受取りにいった者もある。

死体の収容と焼却・埋葬

死体の収容と火葬は、八月十日ごろ天満川の岸で、兵隊がおびたしい数の死体を集めて来ては焼いた。

死んでいるその場所で処理された死体もあったが、これも残材を集めて兵隊たちが焼いた。死体はどれもこれも裸同然なので氏名の確認などしようにもできないことであった。

火葬は、兵隊が油をかけておこなったが、これらの遺骨の処置についてはいまだに不明である。

焼跡整理

被爆直後、焼野原の中にポツンと一軒だけ、焼トタンで囲った小屋が建っており、人が住んでいたが、またどこかへ逃げていった。

こんな状況であったから焼跡の整理作業など思いもよらぬことで、進捗しなかった。地区一帯が無人の焦土と化し、各町の町内会も壊滅し、対策を立てるといふ余地もなかったし、当分の間は全く不用でもあった。

九、被爆後の生活状況

八月末の状況

全地区、ただ一望の焼野原となったまま、八月末になっても、誰一人として帰って来る者はなかった。両側を川に囲まれたこの地区内で、目標となるのは、ただ寺町のおびたしい墓石群の散乱荒廃した無言のたたずまいだけであった。

八工の発生

避難した人や以前に疎開して助かった人が、ときどき様子を見に帰って来たが、八工がまっ黒く発生している焦土を見るだけであった。

道路のあちこちに牛や馬がたおれ、死んだままになっていて、八工の格好の餌になっていた。ここに人間の生活というものは、まったくなかった。しかし、九月十七日と十月八日の暴風雨と大出水が、このような不潔な焼跡を洗い流した。

なお、九月十七日の暴風雨の時は浸水はひどくはなかったが、横川町の電車鉄橋はその際流失した。

バラック建つ

秋風吹く十月末ごろになって、やっと各町のあとに一、二戸ずつ、焼トタンを使ったバラックが建ちはじめた。

建築資材としては何もなく、焼残りの材木や板切れ、焼トタンなどを拾い集めて、これも拾って来た焼け金槌・焼け釘・弾力なくすぐ折れる焼け針金などを使って、自力で、ただ寝るだけのちっぽけなみすばらしい小屋を建てた。入口の扉には、はしの方の少し焦げた藁などを拾って来て、風よけに吊りさげているバラックもあった。焦土は、これらのバラックを中心にして、散乱した焼け瓦を垣代りに積み重ねながら、少しずつ整理され、清掃されていった。

電灯つく

焼跡には灯がなく、バラックはそれぞれ残材を焚いたり、何かの油をともしたりして、暗黒の夜をすごしていたが、十月中ごろ、バラック生活をしている二、三人が勤労奉仕で、中国配電株式会社の大洲工場まで歩いて電柱を取りに行き、穴を掘って電線の架けられるのを待った。そして翌年三月ごろになって、ようやく電灯がつけられた。また、市当局から、組立式の簡易住宅のあっせんがあり、抽籤に当たった者は自分が資材を運び、自分で建て、ようやく人間らしい生活を取りもどした者もあったが、ごく少数であった。

生活物資

生活物資の配給が極度に少なく、ほとんど闇売りのもので都合をつけた。衣類を疎開していた者は持ち帰って、それを米や野菜などと交換して食いつないだ。

この地区には田舎からも、時々闇商人が食糧を持って来たので、罹災者はみんなそれを買ったのであった。

ノミ・シラミ

昭和二十一年初めごろ、ノミやシラミが多数発生したので、当時の進駐軍が浮浪者などはもとより、一般の人々にも薬品DDTを散布して駆除した。

電車通る

昭和二十二年、横川線の電車が復旧した。しかし、鉄橋が流失していたので、広島別院前までしか電車が来ず、横川駅へ行くにはそこから歩かねばならなかった。二十三年十二月になって、横川橋から横川駅前の終点までの電車が開通した。

闇市の発生

電車が通るようになって、広島別院から横川橋のたもとまで闇市ができて日々隆盛になっていった。闇市では、食糧品はもとより、軍用品その他の衣類をはじめ、手巻タバコ・砂糖などの調味料・その他戦時中ながく目にも見られなかった生活に必要な品々がたくさん売買されていた。

経済活動

昭和二十三年ごろから経済活動も活発となり、ようやく罹災者らは活気を取りもどしたのであった。ことに、電話の復旧で、電話関係の業種は異状なほど多忙をきわめたが、これが経済活動復活に大きな影響をあたえた。

昭和二十四年ごろから、市民生活は本格的な復興軌道に乗り、ソギ葺・板ばりのバラック建築ながら、横川橋のふもとを中心にして、どしどし建てられだした。

しかし、以前の町の形はまったく姿を消した。住んでいる町民も、以前からの人はほんとは少なく、他から新しく入ってきた人たちがばかりで占められた。また、このころになって、寺町の各寺院も、広い境内に小さなバラックのお堂が建てられていったのであった。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

中広町一丁目 二丁目 三丁目、上天満町、天満町

町内会別要目

この地区は、太田川の分流が横川橋から西流して更に二本に岐れる天満川と福島川の両河川に挟まれていた地区で、地区の範囲は、天満本町[てんまほんまち]・天満南町[てんまみなみまち]・天満中町[てんまなかまち]・西天満町[にしてんまちょう]・西天満上組[にしてんまかみくみ]・上天満本町[かみてんまほんまち]・上天満町[かみてんまちょう]・上天満町東通り[かみてんまちょうひがしどおり]・および中広町[なかひろちょう]・中広北町[なかひろきたまち]・中広町[なかひろちょう]一丁目・中広本町[なかひろほんまち]・上天満北町[かみてんまきたまち]とし、爆心地からの至近距離は天満町の天満橋西詰めで、約一キロメートルであり、もっとも遠い地点は、中広町北部で約一・六五キロメートルである。

天満地区各町は、旧史によれば、往古、小屋新開と呼称されたところから、勤勉な職人の町として発達した地域である。

天明八年、町奉行の許可を受けて、町民が町内の天満宮にちなみ、天満町と命名したのが、この町名の起源であるという。その歴史的な伝統を引継いで、被爆直前まで、大きな工場や商店は少なく、町全体が誠実な職人や勤労者の居住地帯であった。

中広地区には、食品工場その他の工場が少しあったが、ほとんどの家は昔ながらの農家で、広島市に野菜を供給する田園地帯を形成していたところである。

なお、被爆直前の建物戸数は、概算二、〇五四戸、人口数は七、八一二人と推定される。

地区の各町別の内容は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
中広町	253	236	986	中尾三郎
中広町一丁目	121	110	390	飯村資郎
中広本町	269	269	1,084	山中悦蔵
中広北町	230	230	897	永井一夫
上天満北町	220	205	850	野村修一
上天満町東	107	104	541	岩住善次
上天満本町	235	235	1,053	大田喜一
上天満町	116	110	400	山中寿一
天満中町	37	37	142	中西多次郎
天満本町	150	150	462	小畑寿吉
西天満町	97	105	407	藤川達朗
西天満上	155	152	497	西尾雄三郎
天満南町	64	62	193	武内半之助

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
天満国民学校	天満町	西警察署中広派出所	上天満東通り
天満宮	天満町	東洋製罐株式会社	西天満町
三宅製針所	西天満町	楠原罐詰工場	中広町一丁目
広島畜産株式会社工場	上天満町	玉造機株式会社	中広町
西警察署天満南町派出所	天満南町	岩見木工所	中広町
飯村鉄工所	中広町一丁目	松尾鉄工所	中広町
清和鋳工所	中広本町	高見製材所	中広町
瀬川食品工業株式会社	中広町一丁目	向西館	中広本町
三宅食品工業株式会社	中広町一丁目	広島市立中学校	中広町

二、疎開状況

(天満地区)

天満地区では婦女子・児童を優先的に疎開させるようにしていたが、種々の理由から、疎開することなくそのま

ま居住する者が多かった。

昭和二十年四月ごろ、建物疎開が実施されたときも、立退者で市外へ転出する者は少なく、隣接地の観音町へほとんどが転出したようである。建物強制疎開による立退者でも、このような状態なので、その他の者で市外へ疎開する者はあまりいなかった。

物資の疎開も、建物疎開にともなって引越したくらいのもので、それ以外は、あまり見受けなかった。

学童疎開は、天満国民学校児童が佐伯郡砂谷村・水内村の寺院や民家へ分散して集団疎開を行なった。

(中広地区)

中広地区では、川向こうにあたる山手町の上の山中に仮設住宅を作り、約二〇戸ぐらい一〇〇人程度が疎開していた。その他町民の二〇パーセント程度が、田舎へ疎開していた。

物資疎開は、人員疎開と同じように僅かな荷物と食糧を疎開したにすぎなかった。

中には、畳・建具・衣類などを田舎に疎開した人もあるが、それはごく一部のことであった。

三、防衛態勢

(天満地区)

天満地区では、防空防火用施設として、貯水槽・防空壕を町内会ごとに、警防団が指導して設置した。

防空訓練も頻繁に実施された。警防団員は、中広町を含めて一四〇人ばかりいたので、訓練にあたっては、十分に指導できた。

町内会長はじめ幹事は、防空防火訓練を熱心に行なったが、原子爆弾の災害に際しては、何ら役に立たなかった。

(中広地区)

中広地区では、各町内会ごとに防衛隊を組織し、町内会長が隊長となり、五〇戸ぐらいの単位で班長をつくり、警防団ならびに警察の指導のもと、日夜、防空防火・避難・救護などの訓練をおこない、二十年六月ごろ、国民義勇隊ができて、ほとんど家族ぐるみが参加し、非常時に備えた。男(老人が多い)は竹槍の訓練、女は炊出しの準備訓練をおこなった。

四、避難経路及び避難先

(天満地区)

天満地区では、佐伯郡宮内村および平良村その他付近の町村へ避難することになっていた。避難経路は別段に定めていなかった。汽車・電車の利用と鉄道線路沿いと、国道を西方に向うようにきめていた。

(中広地区)

中広地区は、地区自体が、広瀬・本川方面からの避難先になっており、空襲警報発令のたびごとに、当地区内に逃げて来た市民が解除を待って復歸した。地区内住民は、各戸または集団利用の防空壕が設置されていたので、そこへ避難した。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
大國部隊	天満町・天満国民学校
陸軍(部隊名不明)一個中隊	中広北町・市立広島中学校

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

天満地区では空襲警報発令中は、警防団員が数人ずつ各町内を巡視した。その復命報告は、各町内とも異状なく防空態勢をとっているということであった。それほど、各町内会とも灯火管制を厳重にし、直ちに避難できるような服装と携帯品をそのまま持ち出せるように構えていた。

なお、防空壕への待避はさせていなかった。

炸裂まで

警報解除後は、職場への出勤など、それぞれの仕事についていた。

炸裂前、警防団の警備を解こうとするときに、飛行機の爆音が聞えているようなので、吉川益三本部長が団員に「監視檣にあがって様子を見たら…」と言ったところ「暑くなっているうえに、警戒警報も解除されているし、万一敵機としたら、直ちに空襲警報のサイレンが鳴らなければならないのに、そのようなこともないのだから檣に上がるのはやめよう。」と言うので、警戒要員四人を残し、他は全員帰宅した。

中広地区でも、六日の朝、警報解除になったので、皆安心して、それぞれの家業や、通勤をはじめたところであった。八時ごろ、東北の方面から、ブルンブルンという音が聞えてきたが、あまり気にかけず、町内も隣組もなんら活動しなかった。防空壕へもほとんどの人が待避しないうでいた。

疎開作業への出動

天満地区の建物疎開実施概況は次のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数	出動先	疎開定概数	被爆前日までの実施概数	当日朝実施中の概数	他地区からの応援人員概数
天満本町	出動していなかった		10			
天満本町南町			90	90		
天満本町中町			160	160		
西天満町			10	10		
西天満町上組						
上天満本町						
上天満町						
上天満町東通						

中広地区では、当日各町とも疎開作業への出動はなかった。また建物疎開を実施していた町もなかった。

七、被爆の惨状

(天満地区)

天満地区では、原子爆弾炸裂と同時に、屋内にいた者は、崩壊した家の下敷きとなり、屋外にいた者は、熱線で火傷した。突然降って湧いた生地獄で、親は子を、子は親を探す声、助けを求める声が喧しく交錯した。

約一時間後には、各所から火の手が上がり、ますます混乱状態となり、人々は右往左往して逃げまどった。

避難状況

満潮の川が引きはじめていたから、ある人は、川へ逃げて流木につかまっておれば、下流へ流されて行く。その下流には兵隊がいるだろうから、きっと助けてくれるだろうと、川へ逃げるようにすすめたりした。

どうにか逃げられる者は、川を渡るか、電車線路伝いに、または橋を渡って西方に向って無我夢中で逃げた。逃げるときは、道とか橋とかを考える余裕などなく、通れるところをどんどん進んで、己斐の川岸へと向った。

電車線路には、電車が進行中のまま破壊され、車内の乗客が苦しんでいるのを見受けたけれども手の施しようがなかった。

欄干が燃えていた福島橋は、市内で一番長い橋であったが、別名耳切り橋(寒い時、橋が長いので渡る時間がかかり、耳が切れるように痛むことからいう。)とも言い、この橋を渡って逃げる者は少なく、上流の方の小河内橋を渡る者が多かった。

しかし、橋上が混雑していたので、小河内橋のかみしもで水面を泳ぐようにして渡る者もたくさんいた。

また、天満橋東詰の橋上に二列にならんで、三〇人ばかり坐りこんでいたが、その顔はまっ黒で誰が誰だか判別できなかった。

橋の左岸下側に筏があったが、そこにも三〇人ほどの重傷者が、うなってかじりついていた。

川下の電車専用鉄橋の下側に舟があったが、その舟と岸とのあいだには、学生(建物疎開に出動していた者)二〇人ばかりが苦しんでいた。

電車道と疎開跡には、東部から逃げて来た市民が多くいて、あちらにもこちらにも倒れて死んでいく者がたくさんあった。

(中広地区)

一方、中広地区では、閃光と炸裂・轟音に黒煙り、建物の倒壊が一瞬のうちに起こり、まっ暗な中で方角もわからず、方々から「助けてくれ」という叫び声があがった。それをどうすることもできず、軽傷者でも、ただ呆然としているだけであった。しばらくして気がついて、下敷きになっている者を助け出し、また助け出そうとしたが、その時は、もう火災が発生していた。消火どころの騒ぎではなく、むろん水も容器も、また体力もなく、家族の存在すら判らず、必死になって、探す名前を泣きながら呼びつづけるだけであった。

火の廻りは、意外に早く、逃げ道もなくなり、遠まわりして避難した。

一瞬の惨事発生で、千人千様、下敷きになった家族をそのままにして逃げる者もあったし、火炎の中へ救出に入

ったまま、一緒に焼死した者もあった。

避難者の中には、子供の死体を背中に負ってゆく者もあったし、軽い荷物を手に持ち、肩には重傷者をついで逃げる者もあった。

死体が列をなして路上によこたわっていたが、山手町を経て長束(ながつか)・祇園(ぎおん)方面へ通ずる山添いの道と、福島町を経て己斐の山へ通ずる道に、半死半生の人や死体が最も多く転っていた。また、三滝の山の方へも一〇〇人以上も逃げて行った。

中央橋は炸裂時には現存していたが、二、三時間後に、中央北寄りに、約三〇センチメートル焼け始めて、夕方までに北側半分ぐらいが焼け落ちた。

ちょうど避難の最中、安佐郡方面から敵機五、六機が上空にあらわれたので、山手川の浅瀬にあわてて隠れた者がたくさんいた。なお、炸裂時の瞬間的被害は、次のとおりである。

(天満地区)

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
天満本町	100				50	50		
天満南町	100				10	90		
天満中町	100				10	90		
西天満町	100				5	95		福島橋の欄干が燃えた。
上天満町 (上天満本町、 上天満町、上 天満東通)	100				2	98		

(中広地区)

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
中広町	90	10			53	30	16	
中広北町	90	10			40	35	25	中央橋半焼
中広町一丁目	100				50	35	15	
中広本町	100				40	30	30	
上天満北町	100				45	35	20	(天神橋)中広橋半焼

火災発生

炸裂後、天満地区の各町とも、飛石的に火災が発生した。午前九時ごろ発火したが、雨が降ったのちも燃えつづけ、およそ午後九時ごろ終息した。

中広地区では、中広北町西寄りの家屋は火災が発生しなかったが、他は同じ状況で、最初の火災発生は、前夜、敵機が油をまいたという人もあり、町ごとに二、三か所から点々と発火したようである。午前八時半ごろ発火したが、東風によって火勢があふられ、ものすごく延焼の速度を早めた。また、山手町の山林が自然着火で火災を起していた。

黒い雨

天満地区では、雨が午後二時ごろから五時ごろまで土砂降りに降った。そのあいだ、焚火にあたりたいほどの寒気がした。雨は激しい降り方であったが、火災は鎮火しなかった。

中広地区では、炸裂三〇分後に雨が降りはじめたが小雨程度で、一時間あまり降りつづいた。黒い雨は、爆風による地上のゴミが吹き上げられ、これに雨が降って来たので、黒い雨になったと思われた。雨量も少なく、火災には影響を与えるほどでなかった。

六日夜

六日夜の状況は、天満地区は全壊全焼であったから、逃げられる者は、他へ逃げてしまっていて、その状況は、余燼くすぶる焦熱の巷であったこと以外は、はっきりしない。

避難したところから眺めると、夕方は火災で明るいようであったが、八時ごろには暗くなっていた。

中広地区でも、天満地区とほとんど同じであって、地区内で住宅の残ったのは、中広北町の一部だけで甚だ少なく、もちろんそれら残った家々の電灯も消えていて、地区全体がただ空漠としていた。

焼跡を見ると、河原のようにひらく物の残骸が横たわり、コンクリート建物だけが、ところどころに崩れた形をわずかに残しているだけであった。

諸現象

(イ)屋外にいて火傷した人体のある部分は、鉛色のような黒色をしていた。裸体にいて火傷した者は、皮膚がむけて、あたかもボロをきたようになっていた。

家屋の倒れ方を見ると、動力線の電柱を中心に、右と左というような倒れ方をしており、爆風の方向を知ることができた。

(ロ)天満地区では、瓦の表面が溶解して重なり、他のものと密着していたし、ガラスも飴のように溶けてドロドロになり、凝結していた。

中広地区では、瓦が赤土色になり、弱くて使用に堪えなくなった。金属は火熱で曲がったり、熔けあい、赤くなって原型はとどめず、ガラスは溶けてサンゴ礁のようになっていた。石材は軽石のように小穴があき、割れてボロボロになった。

(ハ)天満地区では広島電鉄市内線の天満町停留所付近に、電車二台が、そのままの状態でも爆炎上し、その残骸をさらしていた。

電車の窓ガラスは、夏であった関係か、開放していたのでその破碎は案外になかったように思われる。もっとも後日見たのであって、あるいはガラスが全部破壊されているのをそのように見たのかも知れない。

電車内には多くの負傷者がいたが、それは車内での負傷者ばかりでなく、避難途中、苦しさのあまり車内へ入ったと思われるのもあった。

中広地区では、爆風で電柱が裂けて折れた。電線はズタズタに切れて落下し、クモの巣のように絡みあっていた。

爆風は家の天井を吹きとばし、壁も落ち、地区内の家屋はほとんど倒れた。

横川橋電車鉄橋から、電車が川の中に落ちて横倒しになった。これが九月の洪水のとき、約一〇〇メートルばかり下流の天満川に流されて、その後一か月ぐらい、川の中に放置してあった。

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊来る

天満地区には、炸裂後一時間ぐらいしたころ、宇品の暁部隊(少尉指揮)が三〇人ぐらい救援に来た。命令で天満町方面の救援に来たのだと言っていたが、スコップ・ツルハシなどを狩り集めて、当地区内の救援を行ない、夕方には、引揚げていった。

翌七日の朝、にぎり飯が一人に二個から三個ずつ配給があったが、空腹であったからひどくうまかった。

約一週間後に、また、兵隊が一〇人ぐらい来て、焼跡の遺骨を集めていった。

中広地区に救援隊(双三郡方面の警防団)が来たのは、八月十日ごろで、中央橋仮設がおこなわれた。なお、この地区には救急品の配給はなかった。

応急救護所

天満地区では、六日当日、西は福島町まで、東は小網町までは入ることができたが、火災のため地区内には入れなかった関係上、応急救護所の設置などは全くできなかったようである。

中広地区でも、救護所はなかった。しかし、八月十日ごろ、三篠地区の打越町中央橋渡り詰めに救護所ができて、軍の看護兵が施療にあたったが、薬がないので十分な治療はできなかった。そのうち移動式になって、他の町内へ移って行った。

道路の啓開

天満地区では、一か月後ぐらいであったか、町内会長四人と残存の町民で作業のできるものが集って道路開きをおこなった。当時、罹災者は職もなく遊んでいる状態であったから、日当をもらって作業を行なった。この地区内が済むと、他地区へも延ばして、道路開きの労務作業をつづけた。なお、中広地区では労務作業は行なわれなかった。

死体の処理

天満地区では惨事後、死体はそのまま放置してあった。

それは遺体を探している人の便宜をはかるためであって、判明したのは縁故者が持ち帰った。残った遺体は、氏名の確認もできない程むごい姿を曝していた。しかしその中の幾体かは、辛うじて確認できた者もあった。

火葬

天満地区における火葬は、八月十三日ごろ、天満町の電車停留所北側で、道路をはさんで東側と西側で行なった。しかし、火葬するにも薪がなかった。一週間ぐらいして薪が届いたので、やっと火葬にふした。火葬がひととおり

終わったのは八月二十三日ごろであった。

読経することもなく、穴を掘って火葬にし、野天に遺骨をそのまま置いていた。しばらくして遺骨を一か所に集めて置いたが、後に市の供養塔へ納骨した。

中広地区の死体は、軍人を除き、地区内の人が多く、氏名も判名していたので、八月七日から、最寄りの人の手で焼き、遺骨は家族親族知人などが引取った。従って仮埋葬はしなかった。

火葬場所は、各町とも、その死体の近くで土を少し掘って、壊れた板切れを集めて焼いた。

軍人の遺骨は、板の上に永らく並べてあったが、市の役人が納骨堂に持って行って納めた。

火葬の終わったのは八月十日ごろであった。

法要を営む

地区内の僧侶が健在だったので、八月末ごろ、町内ごとに法要をいとなんだ。

被爆後の各町内会の機能は、次のとおりである。

各町内会の機能

町内会名	状 況
天満本町	全町が全焼したので、町民もほとんどが避難していたことではあるし、機能は全滅と言ってもよいほどであった。
天満南町	
天満中町	
西天満町	
上天満本町	
上天満町	
上天満町東組	
中広町	町内会長負傷のため、副会長(四方盛一)が代行したので、機能はまひしなかった。
中広北町	町内会長が陣頭指揮をとった。
中広一丁目町	町内会長が陣頭指揮をとった。
中広本町	町内会長死亡のため、副会長が代行した。
上天満北町	町内会長健在にて町民の世話をする。

九、被爆後の生活状況

両地区の生活状況

天満地区では、被爆後、若干の世帯が焼け残りの防空壕とか、掘立小屋に住んでいた程度で、にぎり飯の配給が一〇日間ぐらいあった後に、一般配給がおこなわれた。しかし、食糧難のため、焼跡で目ぼしいところが多かった。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

天満地区では、昔から大水のとき、上天満町から福島川へ抜けるように築堤し、下流の水害を防ぐ場所(水入りと呼ぶ)があった程で、大水のたびに浸水したが、九月の台風のときは、西天満町が浸水した。この台風で筏にいた死体も、鉄橋下の死体も流された。十月八日の洪水では、天満橋・電車鉄橋が落ち、交通が杜絶し、渡舟で往来した。

中広地区では、九月の暴風雨も、十月の豪雨も、それほど被害を受けることもなかった。ただ、バラック小屋の屋根が雨漏りして寝るところがなく困ったが、罹災者はすでにこれ位の苦難は、たいしたことに思わなかった。

十一、その他

中広地区では、市から巻タバコの配給があったとき、農家に対し、食糧を都合してもらって感謝の意味で、配給の三分の一を差引き、農家におくった。しかし、何ら原子爆弾の被害もない農家に、被爆者がタバコを提供するのは間違っているという不満の声が出るには出た。

また、この地区内には畑が多く、野菜を作っていたが、警報発令になって避難して来る人の中に、野菜を盗んで帰る人が多くて、どの農家も困ったという。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

観音町、東観音町、西観音町、観音本町一丁目 二丁目、南観音町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目 五丁目 六丁目 七丁目 八丁目、観音新町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、東観音町一丁目[ひがしかんのんちょう]・東観音町二丁目東区・同西区・同南区・同北区・観音本町[かんのんほんまち]一丁目・西観音町[にしかんのんまち]一丁目・西観音町二丁目・南観音町[みなみかんのんまち]一丁目北部・同南部・南観音町二丁目北区・同南区・南観音町三丁目・および三菱造船[みつびしぞうせん]・三菱造機[みつびしぞうき]・昭和新開[しょうわしんがい]・三菱寮[みつびしりょう]とし、爆心地からの至近距離は、東観音町一丁目の現在の緑大橋西詰めで、約一・一キロメートル、もっとも遠い地点は、南観音町の現在の広島空港西南端で約五キロメートルである。

観音地区は、南部の田園地帯、および三菱重工株式会社社宅街を除いて、閑静な住宅街であった。古名を新蔵新開と称し、慶長の初年開発してから、ずっと新開の造成が続けられて、天満川と福島川に挟まれる大きな地区となった。戦後、福島川の廃川埋立てによって、地区の北部は福島地区と陸繋した。

地区内各町についての要目は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
東観音町一丁目	430	450	1,550	吉村直樹
東観音町二丁目東	795	740	2,960	田頭新太郎
東観音町二丁目西				島津市造
東観音町二丁目北				島津芳雄
東観音町二丁目南	163	155	533	田中保太郎
観音本町一丁目	281	320	1,200	上野円蔵
西観音町一丁目	610	630	2,700	岩崎泰二
西観音町二丁目北	265	258	923	松原正治
南観音町一丁目北	226	226	820	長尾京一
南観音町一丁目南	152	185	834	住村礼三
南観音町二丁目北	247	247	971	久保八二
南観音町二丁目南	175	175	864	川村祖吉
南観音町三丁目	201	199	998	城廣四
観音本町二丁目	140	180	280	小畠光俊
西観音町三丁目南	179	170	830	不明
西観音町三丁目西	186	186	788	不明
南観音町三菱新開西部	160	251	1,446	小浦健吾
南観音町三菱東部	1,200	700	2,810	高橋好雄

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
観音国民学校	東観音町一丁目	第二国民学校	南観音町
観音院	東観音町二丁目	広島市立造船工業学校	南観音町
南正坊	東観音町二丁目	三菱重工株式会社機械製作所	南観音町昭和新開
畜産缶詰工場	西観音町一丁目	三菱青年学校	南観音町昭和新開
栗林缶詰工場	東観音町二丁目	真宗学寮	南観音町
山口缶詰工場	東観音町一丁目	土地区画整理事務所	南観音町
県立第二中学校	西観音町二丁目	広島放送局分局	南観音町(造船工業学校内)
私立西高等女学校	東観音町二丁目		

二、疎開状況

人員疎開

観音地区では、他地区のような集団疎開はなかったが、少数ながら縁故疎開をした者があった。むしろ、他町からこの地区へ疎開して来る転入者が相当あった。南観音町一帯でも、被爆前まで八三〇世帯ぐらいの転入世帯があった。

三菱重工株式会社機械製作所は軍需工場とその社宅ばかりで疎開しなかったが、ただ、同社事務系統は、草津の

海蔵寺や己斐の山の中に疎開していた。また、家族の一部は、各自の郷里へ疎開していた。

物資疎開

物資の疎開は、衣類の疎開が約七〇パーセント、家具の疎開が約一〇パーセントぐらいと推定される。

学童疎開

観音国民学校は、比婆郡八幡村・久代村・田森村および同郡東城町の各寺院へ疎開した。三菱重工株式会社関係の学童は、現在の三次市十日市町へ二か所、田森村へ一か所、八幡村へ一か所ほか一か所、および三菱青年学校に一、二年生の六学級が疎開し、その他は観音国民学校の疎開先に行った。

三、防衛態勢

警防団

観音警防団を結成し、団員は八九人であった。各町とも、隣組組織で、消火ポンプや水槽の整備を充分におこない、週一回の演習訓練を実施し、一〜二か月に一度は連合訓練をおこなった。

国民義勇隊

また、昭和二十年六月に国民義勇隊を創設すると共に、各町内会は防空壕を作った。防衛上・煙霧用として使用するため己斐町や牛田町の山へ松の枝(青松葉)を切りにいき、貯えて準備したが使用しないままで終わった。

三菱重工株式会社社宅街では、会社の指令で男は全員工場で働き、婦女子だけで町内を守れということになって隣組を整備した。各隣組ごとに係員を置き、防衛・防空の訓練演習を厳に実施した。また、避難・救護演習をおこない、各要所に防火用水池を掘り、各隣組ごとに手押しポンプを備えていた。

なお、広島市国民義勇隊には、町内の係員を隊員として参加させた。

四、避難経路及び避難先

非常の場合の避難先は、東観音町・西観音町地区では、第一次草津町海蔵寺として、此所で一夜をあかして集結後、第二次として、佐伯郡地御前に避難することにしていた。

南観音町地区では、佐伯郡平良村(現在の廿日市町)に避難することにしていた。

五、所在した陸軍部隊集団

南観音町総合グラウンドに陸軍高射砲隊があり、また、同町市立造船工業学校には、出征兵士約一〇〇人が宇品港から出陣するまでの間、常時、校舎に宿泊していた。

六、五日夜から炸裂まで

五日夜

五日午後九時二十分から翌六日午前二時十五分まで警戒態勢をとり、灯火管制をしていたが、解除になって態勢をといた。

六日朝

六日午前七時九分、再び警戒態勢に入り、七時三十一分解除、防空壕へ避難していた者も出て来た。各町とも四〇パーセントは屋外、その他は屋内にいて、平常とかわらなかった。

侵入敵機

上空侵入の敵機を見た者は少なく、爆音もあまり気づかなかったようである。

三菱造船社宅街では、原子爆弾炸裂まで隣組の活動は別になかったが、三、四日前から敵機が呉から岩国へ、岩国から広島三菱の上空を通過して呉へと一〇〇機、二〇〇機が来襲し、猛爆撃をし、八月五日には、明六日広島を大爆撃するという敵機からのピラがあったともいわれて、非常に不安な空気がみなぎっていた。

各隣組ごとに造った防空壕に、老人・病人・子供はなるべく警戒警報のときから待避し、空襲警報のときは全員待避することになっていたが、当日朝、解除になったので活用できなかった。しかし、解除後も、敵機のピラのこともあって、社宅街全体が緊張した空気に包まれて、なんとなく無気味な気持ちでいた。

上空侵入の敵機について、広島周辺を高度を高くかすかに見える程度で旋回していたのを目撃した者があったが、爆音は聞かなかったという。

疎開作業への出動

疎開作業の出動について、当日、西観音町二丁目町内会二七〇人が、水主町の県庁付近の作業に出動していた(松原正治隊長は無傷であったが、戸板に乗って、午後三時ごろ帰宅して、三日目ごろに死亡した。)

また、南観音町二丁目北町内会は、土橋方面に出動し、久保八二中隊長は、市役所に連絡に行く途中、日本銀行

前で被爆、自宅に帰って死亡した。その他の各町および三菱重工社宅からは出勤していなかった。

三菱造船・三菱造機の両町内会は、被爆前日までに各一〇〇戸ずつ、また三菱寮は約一〇棟、建物疎開作業動員を済ませていた。

七、被爆の惨状

(観音地区)

東・西両観音町・観音本町地区では、住民のほとんどが閃光を感じた。閃光は矢のように、洋傘のホネの形で庭面に一斉に突きささった(西観音町二丁目・高田靖一(談))。家の外にいた者の大半は吹き飛ばされ、屋内にいた者もすべて衝撃を受けた。家屋も天満川向き(東向き)の家屋は倒壊した。轟音と同時に眼もあてられぬ惨状を呈し、家の下敷きになった者は、大多数の者が、突発事態にあわてていたし、道具もなかったから、ほとんど救出できなかった。

避難者は大部分、西へ西へと倒壊家屋のあいだを遮二無二逃げた。経路は己斐観光道路(国道)を通り草津方面へ出たのであるが、西大橋も旭橋も避難者で一ぱいであった。なかには欄干にもたれて動けなくたった人もあったし、川へ逃げた者の中には重傷者が多く、ほとんどの者が死亡した。

南観音町地区では、瞬間、黄色の光がして、パツというような音が聞えた。焼夷弾かと思われたが、昼間に落とすようなことはあるまいに、不思議なことだと思った者もあった。

鶏舎のような簡易な建物は倒壊したが、その他の建物は倒壊しなかった。しかし、戸障子はこわれ、窓のガラスが粉微塵となり、天井が落ちかかっているという状況であった。壁なども、壁土がはがされて、土が床上に撒いたように飛散した。そのうえ、燃えているところもあったが、消火に努めて大事に至らなかった。

この騒ぎに、いったんは防空壕の中に逃げたが、家が損壊しているのが気になって出て行き、あと片づけを一生懸命おこなった者もある。

(三菱地区)

三菱重工株式会社関係地区では、下川正一の体験を聞くと、「ピカッと光った時、瞬間的に土間に伏せた。日頃の訓練のたまものであった。二つ三つ呼吸したころ、ドーンと大音響がした。百雷が一時に落ちたかと思われた。窓は飛び、壁はくずれ、天井は落ちる、家財は破壊するなどの音が、一時にした。

音の静まったころ、飛び起きたが、一〇人ばかりいた事務員が天井の下敷きになっていた。すぐに救出したが、全員窓ガラスの破片で血まみれだった。そのうちの一人は腹部にガラスが入りこんでいた。

自分自身は無事で、外に出てみると、脱出できた人は血まみれになっており、壁土や天井の煤が付着して誰れが誰れやら見きわめがつかない。

『どこへ避難したら良いのですか。』と、付近の人々は、たださまよっている。私は町内を一廻りしてみようと、ちょうどあった自転車が出かけたが、屋根の瓦やこわれた家の残骸でなかなか通れなかった。

あらまし町内の様子を見たが、どこもここも同じ状況である。

峯避難場所を定めねばと、県営グラウンドの軍隊(暁部隊)に頼んだところ、『この場合仕方がないから此処にしよう。』と言った。それで、負傷者はグラウンドへ収容せよと命じた。すると、ほぼ、十時ごろと思うころ、その部隊から、『はたはだ気の毒だが、薬品も残り少なくなり、また第二の戦闘準備にかからねばらぬから、これでひとまず収容を打切って、患者を引取ってくれぬか。今約三、〇〇〇人いる。』と、言われて当惑した。

社宅の者は社宅へ引取ったが、外来者は、一部社宅の空家があったので半壊家屋ではあるが、そこに引取ることにした。

外部からの避難者は、なお続々とつめかけてくる。その姿は、よくもここまで来られたものだと思われるほどの重傷であった。裸の大腿部が半分ぐらい抉り取られている者もあったし、また一二、三歳の少女が三、四歳の子供を背負っているのが、二人とも全裸体で、皮膚がバラバラに裂けており、ミノかヨロイを着たようなかっこうで、歩けばその皮膚がバラバラとあおぐように揺れた。少女が、『おじさん、どこへ行ったら良いのですか。』と聞くのであるが、その時は部隊からも締め出されていたので、『よし、今助けてやるぞ。』と言ったものの困ってしまった。

その後、なお続々と避難者は詰めかけて来るのであった。南観音町の真宗学寮を避難所にしたと聞いていたので『そこへ行け。』と命じた。

あと、真宗学寮へ様子を見に行ったが、手当てをする者は誰れもいない。が、そこにも、また付近の路上にも、

避難者が一ぱい寝ころんでいて、道もふさがってしまい、通れないほどのありさまであった。

その時は、もう全市一円、煙につつまれて見通しもできなかった。」という。

天満川

七日朝九時ごろ、天満川には水面一ぱいに、死体が浮び、それをかき分けて舟をつけ、その肉親や知人を探し出して運んだ者もいた。

なお、炸裂時の瞬間的被害は、次表のとおりである。

各町の被害

町名	家屋被害（約 %）				人的被害（約 %）			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無傷の者	
東観音町一丁目	70	30			25	55	20	天満橋 十月の水害で落橋
東観音町二丁目東	70	30			24	57	19	観音橋 九月台風で半分落橋
東観音町二丁目西	70	30			22	54	24	
東観音町二丁目北	70	30			24	55	21	
東観音町二丁目南	70	30			22	56	22	
観音本町一丁目	60	40			16	54	30	観音橋 九月台風で半分落橋
西観音町一丁目	60	40			15	52	33	
西観音町二丁目	57	43			13	65	22	西大橋 九月の台風で半壊
南観音町一丁目	50	20	30		10	67	23	
南観音町二丁目	20	80			9	65	26	
南観音町三丁目	20	70	10		9	64	27	
三菱造機町内会	1	99			1	96	3	庚午橋 九月の台風で落橋
三菱造船町内会	2	98			1	96	3	
昭和新開町内会	2	98			1	96	3	昭和橋 全壊

火災状況

なお、地区内における火災発生状況については、次のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
南観音町一丁目		午前八時三十分頃	町内五〇%は全焼した。	
南観音町二丁目		午前八時三十分頃	ボヤ程度でただちに消し止めた。	
南観音町三丁目				
東観音町一丁目	天満川川上堤付近	午前八時二十分	町内一円に延焼して全焼	午後四時頃
東観音町二丁目	天満川川上堤付近及び町内各所より	午前八時二十分	四方に延焼して全焼	午後四時頃
観音本町一丁目	東観音方面方面からと町内中央部	午前八時三十分頃	南西に向かって延焼し全焼	午後四時頃
西観音町一丁目	東観音町二丁目方面と町内中央部	午前八時三十分頃	南西に向かって延焼し全焼（但し、六戸残る）	午後四時頃
西観音町二丁目	東観音町二丁目と西観音町一丁目寄りからと町内各所	午前八時三十分頃	西南に向かって延焼し全焼（但し、一部残る）	午後四時頃

このような火災状況のなかで、倒壊物の下敷きになっている人々の、助けを呼ぶ声に、二、三人は助け出したが、迫って来る猛火に堪えきれず、まだ中で必死に呼ぶ声を聞きながら、「すまぬ許してくれ。」と、合掌して逃げたと、生存者の一人は語っている。

降雨

東・西両観音町地区では、午前九時前後二〇～四〇分間くらい、大粒の黒い雨が降ったが、火勢には何らの影響もなかった。雨は異様な臭気を持っていたという。

南観音町地区でも、昼すぎ午後二時ごろ、夕立程度で約三〇分間降りつづいた（一説には午後は降らなかったともいう）。

三菱一帯では、パラパラの雨で、爆発後一時間ぐらいと思うころ、約二〇分ぐらい降った。雨滴は眼に入ると非常にしみるものであった。

六日夜

焼失した観音地区では、避難できる者はすべて避難し、あとには重傷者だけが残って、夜をあかした。

三菱地区では、荒れはてた屋内を片づけて、破れた屋根にのぞく星空を見ながら戦々恐々と一夜をあかした。町内役員その他元気な者は、負傷者の看護や見廻りで徹夜をした。

負傷者は焼けただけ、白い葉をぬりつけているのでバケモノのような悲惨な姿であった。それらが、そばを通る人の足音を聞いたたびに、「水くれ、水くれー」と叫んでいた。

諸現象

(イ)翌七日、朝九時ごろ、天満川へ出る者が観音本町を通ると、溶けたアスファルトが足にくっついて歩きにくいほどであった。その道には、焼けただれた死骸や牛馬が大きくふくれて死んでいた。

熱線を受けた側だけ焼けただれた木があった。人間は肌につけた布地の色、特に、黒と白で対照的なほど、被害が違っていた。

(ロ)三菱地区から眺めると、全市一面、焦土と化し、広島駅方面まで一目に見えるようであった。その中で、ところどころ鉄筋コンクリート建物や大きな樹木・電柱などの残骸が、なお燻っていた。また、あちらこちらで、死体を収容して焼く煙がなまぐさく鼻を衝いた。これら死体焼却の悪臭は、七里沖の那沙美(なさみ)の瀬戸まで広がって行った。

(ハ)当時、各町の隣組および学校には、防空用の松葉を相当量蓄積していたが、それが夏で、よく乾燥していたし、板壁の家がたくさんあったのが着火を容易にしたと言われる。また、朝食後の残火が、家屋の倒壊によって火元となったのも相当数あったであろう。

(ニ)瓦・ガラス類は、熱によって変形しダンゴようになっていた。川の砂や土が、ねばりを失いボロボロになっていた。上水道用鉛管も熔解していた。

(ホ)爆風によって電柱は傾き、あるいは折れていて、電線も切断された。ところどころで、立樹が根こそぎ抜けていたり、土蔵の屋根が吹き飛ばされていた。また庭の敷石が浮いていた。

(ヘ)観音地区では、風呂場で洗濯中、炸裂にあったが、周囲の練瓦壁に、倒壊した家の梁がかかり、下敷きにならず無傷で助かった者もいた。また、日陰で遊んでいた子供が、爆風のため吹き飛ばされたが助かったというものもあった。

(ト)三菱地区では、人間も牛馬も屋外にいた者は、全員火傷した。また爆風に吹き飛ばされて一時人事不省の状態となった者が多かった。

東観音町にて被爆の記

原田文子

あの朝、私が南側に面した窓の側で父と弟を送り出したやさきでした。突然ピカッと鋭い閃光が窓一ぱいにまるでダイダイ色をした巨大な日輪のように、ギラギラと右に左に大きく揺れ動きながら落ちてきました。私(東観音町・爆心地から一・一キロメートル)は、とっさに、先刻のB29がいたずらに照明弾を落として逃げたのだと思いました。

突如、ズドンと地底から噴きあげるような地響きと同時に周辺が暗闇になりました。そして気がついた時は、八畳間から三畳の玄関まで吹っとばされていました。「このままでは死ぬる。至近弾の煙で窒息する。台所の流し場でタオルを濡らそう。」私は手探りで立ち上がり、歩きました。この時、眼に映ったものは、天井はぶら下がり、梁までも落ち、入口は立ち塞がり、足許にあるはずの畳がない、という光景でした。なにもかも壊されたのでした。

しかし、自分の生命は助かっていました。私はタンスの引出しを元通りにしながら、残りの衣料は急いで疎開しておこうと思いました。そして、この時、「命あってのもの種だ。」と、強く自分に言い聞かせました。 - 苦労知らずの私は、まさか父が爆死しているとは夢にも思っていなかったから、このことばは終戦になってからも、日を追えば追うほど強く身にしみます。生きて行くことの厳しさを、混乱した時代の中で、二〇歳の私が受けとめねばならなかったのです。そのあと、これから先一七歳の弟と一〇歳と八歳の妹たちのことを考えると心痛のあまり、なぜ私が残って父さんが死んだのだらうと、不安や腹立たしさを毎夜畠に行っては先立った両親を恨んで泣いたものです。 -

そのとき、縁側の向こうから先隣の羊雄ちゃん(当時一八歳くらい)が「文ちゃん、膝からすごい血が！止血してあげよう。」と言ってはいってきて、ハンカチでしっかりとくくってくれました。それではじめて下半身が血だらけになっているのに気がついて、急いで下着を全部取り換え、私の一番着着だったモンペ(銘仙で当時の衣料切符大半を使い、四二円で手に入れたもの)に着替え表に出ました。すると、どうでしょう。お隣りの木内も松浦も高橋も俵谷も全部ペチャンコにつぶれ、瓦だけしか見えません。

「あっ、木内のおばさん！」

瓦の下から目だけを出したおばさんが、悲痛な叫び声をあげて…。私は夢中で瓦やタル木を取り除いたのです。

「救援隊を呼んできて。」

といら立たしげに言われるのです。

表通りに出ると、缶詰工場の若い二人連れの女工さんが、泣きながら両手を前に、顔中血だらけにして裸足で走って行きました。

つぎは、東側隣りのおばさんと出逢いました。髪は総立ち、額は割れ、下唇が顎の先までぶら下がり、血が吹き出しています。

「お医者さんは何処が良いかしら。」

「外科医は土橋の樽谷が一番よ。」

- 私はまさか広島中が壊滅しているなんて夢にも思っていなかったものですから、爆心地に近い方の医者をお教えしたのでした。その後、一六年ぶりに出会った時には、おばさんの肩にとびかかって、「おばさんのことが気にかかってかかって」と責任を感じていたことを話しました。 -

そのうちあっちこちから炎が見えてきました。私は、父・姉・弟・妹など肉親が無性に気にかかってきました。郊外の姉の家に行けば、誰かが集結するだろうと思うと、身の危険を感じていた気持ちが急に恐怖感となってきました。家の前まで引返すと「おばさん、ごめんなさい、こらえてください。」とだけ言って、私は夢中で、後も見ないで逃げ出したのです。観音橋は燃えて渡ることができないので、できかかりの庚午橋を渡って草津町にたどりつきました。

そこでは、姉と姑とが電灯の傘やガラスの破片を取り除きながら、かたづけていました。昼過ぎても、父も弟も来ない。女の私でさえも逃げて来たのに。傷がひどくて何処かで治療しているのだろうか、それとも道端で虫ケラのように苦しんでいるのであろうか？

姉と私は、防空頭巾とタオルを持って姑の止めるのもきかないで、焼ける町に出かけて行きました。すべての家は跡かたもなくブスブスくすぶり燃えていました。倒れた電柱をまたいで舟入町まで行きましたが、あまりの悲惨さに、二人とも貧血が起きて引返しました。翌日は鷹野橋から日赤病院へと歩きましたが、なんの手がかりもつかめませんでした。

ついで三日め、姉も私も諦めざるをえませんでした。父の焼死体があったのです。壊れた県会議事堂の壁の近くに。父は、厚い壁にはばまれて這い出ることできないでブスブス焼かれたのか、それとも即死だったのか、そのなきがらは何も語ってくれません。きっと苦しめないで即死したのであろう。「ねえ、お父さん、そうよね。苦しまなかったね。」県会議事堂の壁は無残にたたき潰され、まぎれもない父の弁当箱、朝入れた配給のたけのこの煮つけがちゃんとはいつている。弁当箱の底はぬけないで直径五センチくらいの穴があき、鹿の柄のナイフも側にありました。

私たちは唾のように、白い骨を小さな弁当箱に一ぱい入れると、声をあげてうずくまりました。「お姉さん、父も弟も全滅かね。これから先どうしよう。疎開先の妹も連れもどさにゃあ。」

それから一週間後、頭じゅう繃帯だらけの弟が憔悴しきって帰ってきました。その弟に「お父さんは死んだ。」と告げただけで、私たちは声をあげて泣きじゃくりました。

八、被爆後の混乱と応急処置

救護活動

六日午後から、生き残り警防団員を召集(約二六人)し、県立第二中学校(現在・観音中学校)に救援本部を設置し、三菱重工株式会社から薬品の提供を受け、笠坊医師の指導を受けて負傷者の救護活動を開始した。

翌七日朝、近郊から警防団員が救援に来着した。救急品は、食糧その他で、にぎり飯は七日の未明に到着した。(東・西両観音町地区)

八月九日、東・西両観音町地区では、各町内会長会議を召集したが、大多数が死亡したり、避難中の二人は、集らず、復帰住民中から、各町代表一人ずつを召集し、田頭新太郎が連合町内会長に選出され、ただちに復帰家族の調査や諸物資の配給体系が確立された。さらに死体処理にあわせて道路の啓開、その他復旧に関する会議を開催して諸対策を決定し、実施にうつした。主要幹線道路は、十一日には大部分の啓開が済んだ。

死体の処理

死体の収容は、八月八日午後が第一回で、十五日ごろまで続け、火葬は、九日ごろから十七日までかかった。

死体収容場所は、県立第二中学校のグラウンドで、処理は、当初は二、三日のあいだ生存者の高田靖一ほか二人で火葬した。死体はグラウンドに一杯あったし、次々に運んで来たので焼ききれないほどであったから、観音国民学校の方へも移したりした。そののち暁部隊および応援警防団が来て行なった。薪は、倒壊家屋の材木を使い、グラウンドに穴を掘って、仮の火葬場とした。

確認できる死体は、当時の警察署派遣の小隊長(警部補)の手続きを受けたが、大多数の者は確認できず、そのまま火葬にふした。遺骨は全部まとめて、その後、平和公園の供養塔に安置した。なお、十一月に連合町内会主催で慰霊法要をおこなった。

(南観音町地区)

南観音町地区では、第二国民学校を救護所として設け、約一か月間存続した。この間、収容者の炊出しや死亡者の火葬について、地区内の警防団が活躍した。火葬は県立第二中学校の仮設火葬場でおこなった。

(三菱地区)

三菱地区では、被爆直後、県営総合グラウンドの暁部隊に収容されていた負傷者約三、〇〇〇人を、その日午前十時ごろ、三菱社宅に引取ることになり、応急救護所を社宅内(太田川沿いの丙住宅)に設置した。負傷者のうち、地区内の者はそれぞれの自宅に引取らせ、外来の者ばかりを、総合グラウンド西側の空屋数十戸の社宅に収容したが、負傷者がその後も詰めかけて来たので、いちじは四、〇〇〇人以上も収容して混乱をきわめた。

これらの治療には、翌七日に三菱構内病院から派遣された医師・看護婦があたったが、看護その他一切の世話は町の役員が協力しておこなった。

また、負傷者や避難者への炊出しや救急品の配給は、すべて三菱の寮からおこなわれたが、三原市からの救援隊が、トラック二台で乾パン・缶詰・ノリ、その他の救援物資を運んで来たこともあった。

二日目ごろから、負傷者の焼けただれた部分に、ウジがウヨウヨするほど湧いて、救護所は凄惨そのものの情景を現出した。そのうち身元のわかった者は、関係者に引取られていったが、身元不明の者はそのまま死んでいった。

死体処理

死体は、八日ごろから十二日ごろにかけて、三菱地区内で火葬にふした。死体の処理にあたった者は、当地区三菱重工機械部造機町内会防衛部長田村喜十郎その他、および暁部隊の兵士であった。

火葬は、倒壊家屋の残材に油をかけて三〇体ずつ、つぎつぎに死亡者をならべて火葬にふした。そのとき、暁部隊の羽根軍曹が寺の住職であったから、仏式でとむらいをし、兵士は捧げ銃によって冥福を祈った。

当時は、地区が三菱の社宅内のことであり、またその後のことを考えるゆとりもなかったので、標識柱を建てたり、遺骨を特定場所へ安置することもしなかった。

慰霊祭

火葬した中で無名の死体は約四五体ぐらいであったが、二十二年から二十九年まで、毎年八月六日には当地区内死亡者のために慰霊祭を執行し、現在に及んでいる。

町内会廃止

町内会の機能は、支障もなく継続したが、終戦後、マッカーサー命令によって、町内会および衛生組合を廃止した。しかし、三菱地区内居住者の便宜をはかるため、三菱造船および三菱造機と二つの地域を合わせて 互助会と改称し、引きつづき社宅地域の事務を執った。また市役所出張所分室を社宅事務所内に置いて、その事務にあたった。

観音新町

昭和三十一年から、当地区が観音新町と町名をかえたので、三菱互助会と昭和新開町内会をあわせて、観音新町町内会と改称し、現在に及んでいる。

南観音町にて

金河東伯(談) (南観音町で被爆当時満三七歳)

当時、私は市役所の土木技師で、南観音町の真宗学寮東側にあった土地区画整理事務所(木造平家建約一三坪)に勤めていた。

六日の朝、少し早く事務所に出勤し、あれこれ仕事にかかる準備をしていた。その準備中、ふと神のお告げともいうか、「早く外へ出る。」という声なき声を、三度も聴いた。すぐ屋外へ出て、松のあいだから三〇〇メートル先の工事現場を何気たしに眺めた。

その時、頭上で稲妻のような閃光がした。パッと反射的に、頭をかかえるなり、事務所の壁の陰に伏せた。ガラガラッと物が崩れる音が一度にした。

私は助かっていた。やっと脱出してみると天井が飛び、壁土が落ち、窓ガラスが破れていた。見ると、事務所に隣接する斉藤さんのワラ屋根(物置小屋)が、火気はないのに発火していた。

私は事務所のバケツ二箇を持ち出して、傍の水道の水を汲んでは二〇回ばかりかけて火を消した。

斉藤春三さんが来て手伝ったが「金河さん、肩から血が流れている。」といったので、左肩が、ガラスの破片でやられていることに、はじめて気がついた。

幸い事務所も物置小屋も、畑中にポツンと建っていたので類焼をまぬがれたのだが、私は事務所の中のトランシット(四インチ半)などの測量機械が気にかかった。

半崩れの事務所にはいっていき、機械置場からトランシットや、その他の重要な測量の諸機械を持ち出し、すぐそばの斉藤さんの防空壕の中へ移した。機械の確保を斉藤さんに頼んで、私は国泰寺町の本庁へ行くことにした。(この測量機械の確保は、その後、焼跡の整備に大きく役立った。当時、県庁へも借したことがあるが、昭和二十五年まで使用された。土地区画整理事務所は、この他草津町や荒神町にもあって焼けなかったのに、諸機械は紛失していたから、私のところだけでも、確保できたのはさいわいであった。)

本庁へ行く途中、南観音町の通りで電柱に登って作業していた電気工夫が、真夏のこととて半裸で作業中をやられ、熱射を受けた片側半身の皮膚が、ボロをぶらさげのように焼けただれて、苦しんでいるのを何人も何人も見た。

この付近は当時一面の畑であったが、その畑の中へ、脚の折れた人や、皮膚の剥げた人や火傷した人などが多数、逃げる時持ち出した毛布やふとんを敷いて坐ったり、臥せたりしていたが、ほとんど泣き叫んでいた。

中には素っ裸になった人が、ぞうきんのように剥げた皮膚をたれさがらしたまま、今にも倒れそうになって歩いていたりした。

真宗学寮の上手東の海べりの民家が、約二〇戸ばかり炎上していたが、これらの人々が畑の中へ逃げて来ていたのであろう。

同時に他町の被災者が続々と、この畑へ逃げて来はじめた。どのあたりまでやられたのかしらと思いながら行って見ると、観音橋付近の竹屋に火がつき、竹がはじけて、まるで機関銃で撃つように、音をたてつづけていた。

この橋の西詰めで、役所のトラックの運転手の上原君に出あった。

「今、本庁は火の海だ。消火につとめたが体がもてないので己斐へ逃げるところだ。」

と、私の顔を見ながら涙をポロポロ流して言った。この上原君はその後死んだ。

被災者の群れが、みんな新鮮な空気のある方向を求めて、市の周辺地区に避難するなかを、私は逆に本庁へ本庁へと歩きつづけた。

明治橋西詰めから東(本庁の方)へ渡る途中、十二時四十分ごろであったが、橋上に二〇歳代の男一人と同年齢の女一人が、素っ裸でエビのように体をねじ曲げ、苦悶した姿のままで死んでいた。女の雪のようなまつ白い尻がむき出しになっていた。昼過ぎ一時ごろ、本庁へ到着した。

西観音町一丁目にて

井上美史 (当時・無職五六歳、被爆地・広島市西観音町一丁目)

閃光は見た。屋内にいたため火傷は受けなかった。ただし、強い爆発音があったので、近くに爆弾が落ちたのだと思った。

血が頭部より大分流れたので、大きな傷を受けたと思ったが、あまり痛みは感じなかった。近所の娘さん(二〇歳位)が、木材にはさまれて助けを呼ぶので、これを助け出すことにして、妻を古江方面の知人目あてに逃げさせた。

火炎が、だんだん広がり、私の家も類焼して来たので、近くの消防分所の人と共に、全力をつくして娘さんを助け出した。其の時は、まだ西方の第二中学校方面が焼けていなかったから、人に託して娘さんを草津方面へ行かせた。私は息子が気にかかり、中広町へ行こうとしたが、火災のため行く事はできなかった。

消防分団の火の見やぐらに登って見ると、広島市内一面が、火災と煙のため見通すことはできなかった。私は不

思議であった。爆発音はただ一つであったにもかかわらず、広島全市が火の海になっているではないか。

強雨が降って来たので消防署の防空壕へ避難した。壕の中へも、だんだん避難者が集り、七、八人位となって来た。数時間の後、雨のためか、火災の火も、大分消滅したので壕を出て、中広町方面へ行くべく、北方へ向った所が、路上には死人や傷ついた人々がたくさんいた。衣服が焼けて身体が縞模様の人、また頭の上部の毛髪が残り、下部の毛髪が焼けて「おけし」の様な人もいた。

焼跡は一面、木材や瓦などのため、行く道が無いので、天満町電車道を西へ向い、福島川に出て、川添いに、中広町へ行こうと進んだ。電車道を西へ行った。ここは福島川の土手になっていて少し広場があるので、避難者の人々も川に向かって逃げて来たのであろう。その時は、おそらく満潮時であったのであろう。川に下りる事もできず、そのまま死んで行った人々は、およそ三〇人位いたと思う。

中には、まだ生きている人々もあって、「おじさん助けて。」「水を下さい。」と呼んで私に抱きつく婦人もいた。見れば、どの人もほとんど頭髪が逆立っていた。私は、水をあたえる事もできず、そのまま死んで行く人も見た。

ようやく川伝いに、中広町へ行く事ができた。中広町には焼けた家もあり、焼けていない家もあった。息子のいた家は、焼けてはいなかったが、半倒れとなっていた。息子・孫たちを捜し求めたところ、西方土手上に見つけた。私は、無事でいた息子や孫らと共に西側の畑中に避難した。そこには、すでに二〇人位の避難者が集っていた。避難者の中には、火傷を受けている人も、半死半生の人も交っていた。避難者も、おいおい集り、およそ五〇人となった。人々はみな木切れを拾い集め仮小屋を造った。

息子の近所の人で、ひどい傷で大腸が露出した人があった。倒れたまま、ただ水だけで二日も生きていた。食物をあたえても食べる事もせず、ただ水を要求するだけであった。私は時々水を与え、日よけのため拾って来た傘を立ててあたえた。

避難者もだんだん多く集り、中には来るとそのまま死んでいく人もあり、また数日後、死んだ人もいたようである。

夜が来たが光がないので、暗闇の中に寝た。寝たというよりも、ただころんだという方が正しいと思う。どこを見ても暗黒で所々にわずかに火がもえているくらいであった。

夜が明けた。周囲の人々を見たが、皆も眠っていないかと思え、ただ坐ったまま、ボンヤリとして動く事もせず、恐怖の事、爆弾の話などを語り合うだけであった。しかし、食事の件があるので人々は近くの井戸水をもらって食事の支度をした。

さて周囲を見れば、何時死んだかわからぬ死体が二体あったので、人々と協力して、川向うの草原に運び、木ぎれを集めて焼いた。後にここが死体を焼く場所となった。

私は足部に傷を受けていたため、あまり遠方へは行けなかったが、やむを得ず行かねばならぬ事があって、天満国民学校の東土手まで行った。沢山の死体のある中に、一〇歳位の子供が四ツンパイになっているので、私は思わず声をかけた。ところが返事はおろか、動きもしないので、近寄って見たところ、死んでいるので驚いた。どういわずみで四ツンパイのまま死んだのか不思議であった。

現在の平和公園内に緑地課公園出張所がある。あの建築物はあまり堅固ではないと思うが、しかも原爆の中心地に接近しているにもかかわらず不思議に残っている。また、あの建物の中には、私の近所の娘(一七、八歳位)が勤めていたが、原子爆弾炸裂直後、あの火災の中をくぐり抜けて逃げて帰ったのであった。(その頃はまだ娘の家は焼けていなかった)しかし、一週間後に死亡したという事であった。

だれがどうするという事もなく皆で死体は川向うの焼場に運び、夜となく昼となく、毎日毎夜焼いた。また市内の何処を見ても死体を焼く煙と臭気であった。夜ともなれば、青い鬼火が方々にチロチロと燃えている。私が子供のころ見た地獄絵を、そのまま見るような凄惨な光景であった。

九、被爆後の生活状況

(観音地区)

一朝にして焦土となり、人々はしばらく茫然としていた。焼け残りの防空壕や、半壊の家屋は、一部屋だけをまず片づけたり、焼トタンを拾って雨露をしのぐだけの小屋を建てて生活がはじまったが、虚脱状態のままであった。

九月中旬ごろから共同生活ではあるが、やっと生活をするという人間的な気持ちになった。

生活は、タケノコ生活が、そのすべてであった。しかし少額ながら、戦争中の強制貯金のおかげで四、五か月は

助かったという者も多い。

八工の発生

八工が多数発生したが、駆除薬もなく、焼跡一面にわいた。この地区は、平素から八工・蚊・ノミが多かったが、被爆後の発生は猛烈なものであった。

暗い夜

電灯がつかなくて、夜は真暗であったが、十日ごろ、市からロウソクの配給があり、大切に使用した。十月末に、住民の奉仕で電柱を運んで来て要所に建て、ようやく電灯をともすことができた。

食生活

被爆直後、避難者への炊出しは、市の西部寄りの補給路線が、観音国道を通過して運搬されるという地の利があり、他地区より比較的によくであった。

しかし、その後の食糧配給は、乾パン・大豆かす・コウリヤンなどが少しずつあるだけであったから、江波町で売られる草だんごを買ったり、ドングリなどの木の実や雑草のだんごを作ったり、あるいはサツマ芋の茎をゆでて食べるなどして、飢餓をしのいだ。その上、水道が止まり、飲料水がないので、防火用の赤サビの水や塩分を含んだ濁りのある井戸水を汲んで、それを濾過しながら使うところもあった。

しばらくして、己斐・天満地区に闇市場ができたので、日用品などはそこで求めるようになったが、被爆の衝撃や生活苦から病気になる者も幾人かあった。

疎開児童の復帰

疎開児童は、二十年九月四日、団体で八〇パーセントが帰って来た。一家全員死亡した世帯の児童が二〇パーセントあり、一たん帰って来て後、それぞれの縁故先に落ちついた。

暴風雨

九月の暴風雨と十月の豪雨によって、天満橋・観船橋・観音橋が流失したため、市の中央部への連絡は、三篠町を廻って中央橋を渡って行く道しかなく、たいへん困った。また、暴風雨で南観音地区では、焼け残っていた家が四、五戸倒壊した。

経済活動

経済活動は、二十一年二月ごろから始った。まず東観音町二丁目から起ちあがり、主として衣料品・食糧品店が繁盛した。

観音地区では、早期に町内会が新発足し、機能を充実させたので、他地区に比較して復興が早かった。また、八月末の世帯数は、被爆直前と比較して、南部はあまり差がなかった。

(三菱地区)

三菱関係地区では、工場全体の破損がひどく、復興に必要な人手も物資もなかったため、応急処置として、拾い集めた瓦を、屋根にならべ、周囲はありあわせの物でかこって雨露をしのいだ。

生活物資

生活物資は、八月九日、三次からトラック二台で運んで来た。同十日から食糧の通常配給となったが、配給物資はおおよそ人間の食べるようなものではなかった。市役所からの配給物資は、町内会を通じて配給されたが、二十一年四月ごろから当地区会社経営の総合配給所として、野菜漬物・調味料、その他の配給も少しずつあった。

配給の不足分は、前述のように江波だんご、または海そうめんなどが江波にあったので買い求めておぎなった。

なお、八月十日ごろ電灯がついたので、ロウソク生活だけはあまりしなかった。

八月末頃の居住世帯数

八月末ごろの居住世帯数は、三菱造機町内会約四〇〇・三菱造船町内会約三二〇・昭和新開町内会約一〇〇であった。

疎開世帯の復帰

疎開世帯が二十年十一月ごろから復帰しはじめた。ただし、家族の一部が疎開していたのであって、世帯の移動は、あまりなかった。

疎開児童は、他の観音地区の児童と同じ状況であった。

闇市も天満町や己斐方面へ行って大いに利用したりして、生活にはみな死にもの狂いであった。

三菱寮の半壊建物や総合配給所の建物が、台風で倒壊した。豪雨の時は、太田川堤防寄りに浸水があったが、あ

まり被害はなかった。社宅は全部半壊家屋であり、疎開家屋の古材木・板・アンペラなどを釘づけして補修していたので室内はすごく暗かった。しかし、これが当たり前という気持ちで、精神的にも、何ら奇異を感じなかった。

経済活動

経済活動は、二十年十一月ごろからぼつぼつ会社の整理作業が始り、疎開していた者も帰って来たり、これまで社宅にいなかった社員も、新しく入居したりして従業員も出勤しだしたので、伸展しはじめた。

二十一年八月ごろまでには、古材を使って家屋の修理がほとんど終わった。しかし、天井や窓ガラスはなく、暗いアバラ屋でしかなかった。

その後、三菱造船・造機両工場が賠償工場となり、廃止されようとした。会社としてもこれが防止をはかり署名を取る運動を展開したが、民間の署名集めは下川正一・田頭新太郎両人が、観音・江波・舟入・吉島・本川・天満・中広・福島の各方面に働きかけて、おびたしい署名を集め、撤去防止に成功したのであった。

復興

会社も本格的に復興に踏み切り、従業員募集をはじめた。採用者には、寮あり、社宅ありと発表したところ、全市焼野原となっている折柄、家欲しさに申込者がぞくぞくと押し寄せた。しかし、そのとき空いている社宅は、被爆のため屋根は雨漏りし、壁は落ち、床板さえもなくなっているというありさまであった。

その修理資材もなく、わずかでもあれば会社の工場修理の方へまわしたし、また予算もなかったので、社宅とはまったく名ばかりであった。

ムシロ・コモ・アンペラを破れた壁や窓の建具代りとし、タタミも寄せ集めの古ダタミというひどい社宅であったが、それでもたちまちのうちに満員となった。

その後の申込者も必死で、昼夜押しかけて来た。なかには語気荒くおどしつけ、社宅を与えろとわめき立てる者もいたし、反対に泣きおとしで来る者もいた。

親類に同居(疎開)していたある夫婦は、配給のことでその親類の家族に妻がいじめられるので口論となり、そこを飛び出したものの、今夜から寝るところがない。どんな小屋でも良いから頼みますと泣きついたが、このような例は何十組となくあった。このように、罹災者が自分の家を求める必死のありさまは言いつくせないほど、すさまじい様相を呈した。

ともかく急速度に住人が増加したため、この地に児童保育所が必要となってきた。しかし、会社としても町内会としてもどうすることもできなかった。そうした時、西念寺の藤内遊修住職から任せてほしい旨申し出があった。

このころ、マッカーサー指令により、町内会及び衛生組合の廃止がおこなわれ、当地区では「互助会」に切替えしたが、その互助会の総会で、藤内住職に幼稚園の設立を一任することに決定した。物資なく、資金もない状況のなかを東奔西走の苦心の結果、窓は古新聞を貼った一棟の園舎が建った。昭和二十一年十二月二日、ようやく開園式を挙行了した。

なお、観音国民学校(二十二年四月一日小学校と改称)は、昭和二十年十月五日、三菱青年学校において授業を開始し、二十三年一月二十三日に南観音小学校PTAが発足した。

同二十三年九月十四日、第一期工事が完成、二十四年四月三十日に広島市立南観音小学校と校名を変更、同年五月十四日、三菱青年学校から引きあげた。さらに同年同月十七日に、広島市立観音小学校新設により分離し、同年六月十八日、第二期工事が落成して、ここに完全に復興した。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

福島町一丁目 二丁目、小河内町一丁目 二丁目、都町

町内会別要目

この地区の範囲は、福島北町[ふくしまきたまち]・福島中町[ふくしまなかまち]・福島本町[ふくしあほんまち]・福島南町[ふくしまみなみまち]・福島沖町[ふくしまおきまち]・南三篠町[みなみみささちょう]一区・同二区・同三区とし、爆心地からの至近距離は、福島橋西詰めで約一・五キロメートル、もっとも遠い地点は、南端(旧旭橋の川下)で約二・七キロメートルである。

福島地区は、歴史的に古い土地で、藩政時代には、城下町を東西に貫く国道の西の基点(関門)として、重要な位置を占めていた。

戦前から、地区の南部に市営屠場(食肉中央市場)があり、種々の関連産業が盛んであったが、戦後は国道沿いの福島本通り商店街を除くほかは、ほとんど一般住宅地として整備されつつある。

南三篠地区は、農家が多く、田畑がひらけていたが、戦後は急速に住宅地としてひらけた。

被爆当時、福島・南三篠地区は、山手川と福島川に囲まれ、南北に長いデルタであったが、戦後、太田川放水路(昭和七年着工)の完成により、山手川沿いの地域が河床となり、福島川は埋立てられて、小河内町(元の南三篠町)の一部と都町を生み、全体の地形が大きく変貌した。

原子爆弾の被害は全域に及んでおり、当時の市内電車線路(福島中町と同南町の境を通る。現在は南方平和大通りに移設。)から北側が火災で大部分焼失した。被爆直前の地区内総建物数は約一、五五八戸、世帯数一、五五八世帯、人口六、〇三七人で、各町ごとの内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
南三篠町一区	165	165	670	山肩健一
南三篠町二区	152	152	537	矢野福一
南三篠町三区	130	130	420	吉永裁助
福島北町	156	156	560	岩井常吉
福島本町	115	115	450	角田善之助
福島中町	260	260	1,030	高橋直行
福島南町	350	350	1,420	菊崎正行
福島沖町	230	230	950	高間秀光
計	1,558	1,558	6,037	

地区内に所在した学校および主要建物は、次のとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
福島町民一致協会会堂	福島南町	光照寺	南三篠町
広島市西隣保館	福島南町	広島市屠場	福島沖町
キリスト教愛光園	福島南町	広島市家畜市場	福島沖町
妙蓮寺	福島南町		

二、疎開状況

人員疎開

人員疎開は、老人や幼児が市外の縁故者をたよって疎開したほか、他はほとんど実施せず、働くことができる者は、すべて町内にとどまって、それぞれの生業に励んでいた。

昭和二十年七月になって、比較的到家屋・人口の密集している福島北町、および南三篠町三区の一部を合わせた約五〇戸に、建物疎開命令が出たので、各町内会長が、建物疎開の立退き問題について、該当者のおのの折衝したうえ、移転先の世話などもして、すでに実施する運びにまでなっていた。ただし、立退き先は、市外へではなく、地区内の縁故者にたより、同居の形で入居する方法で、移転を取り決めていたようであったが、原子爆弾によってご破算になった。

物資疎開

物資疎開についても、大々的なものはなく、ただ縁故疎開に準じて、身廻り品だけの疎開にとどまった。ただ、

軍需品の毛皮なめし製造工場が二か所、陸軍被服支廠の命令によって、郡部に疎開したようである。

学童疎開

国民学校児童は、佐伯郡水内村一松寺と同郡砂谷村(いずれも現在の湯来町)へ集団疎開をおこなった。

三、防衛態勢

国民義勇隊

国民義勇隊福島・南三篠地区

分隊長 菊崎正行

副隊長 大川武夫

後援会長 高橋直行

以上三人を中心として、地区内八か町内会より精鋭のものを分隊員として選び、国民義勇隊分隊を編成した。防衛上必要な器具を整備し、防空・防火訓練に努めた。また、警防団、消防団も防衛に任じ、訓練を重ねた。

四、避難経路及び避難先

非常の場合には地区全域が佐伯郡八幡村および観音村(現在・五日市町)に避難するよう指定されていたが、避難経路については定めてなかった。

ところが、被爆に際しては、一部は五日市町へ逃げた者もあったが、多くは太田川放水路の川原か、またはその堤防などに待避し、火災がおさまるとともにそのまま元の住宅あとへ復帰した。

五、所在した陸軍部隊集団

この地区内には、陸軍部隊は所在していなかった。

六、五日夜から炸裂まで

前夜から空襲警報が発令されるたびに、防空壕への待避を行っていたが、空襲警報ではなく警戒警報の解除後であったから、敵機が上空高く飛んでいるのさえ、不審も抱かずに見あげていた者が多数いた。

原子爆弾の炸裂から爆風が来るまでの短時間に、防空壕へ避難することは不可能であり、避難した者はおそらくなかったと思われる。従って炸裂時には、屋外で無防備のまま熱閃光にさらされたか、さもなければ屋内で被爆負傷した。

なお、この地区の建物疎開作業出動は、前日の八月五日まで天神町方面に出動していて、一応この作業の出動任務は終わっていて、その被害は免れた。

七、被爆の惨状

閃光

住民の多数の者が敵機を見上げており、ちょうど写真に使うマグネシウムを一度に大量たいような青白い強烈な閃光を浴びた。また物蔭にいた者でも、あたかも摺りガラスをとうして物を見るような視力障害を受け、一〇日以上も視力が、回復しなかったと訴える者もあった。

惨状

まもなく火災が発生し、逃げまどう人々や救助を求める声など上がり、地区は混乱のきわみに達した。南三篠町の畑中に爆風で胴から千切れ飛んだ首が幾つも転がっていた。作業していた兵隊らしく、その首は鉄カブトをかぶり、あごひもをしめたままであった。

地区の凄惨な状況が、当時、動員学徒(工業学校二年生)であった益信之の手記「黒雨について」の中に、次のように記録されている。

「古江まで帰ると家が焼けているのがはっきりとわかり始め、地獄の列はますます増して来る。『お願いします。福島町に子供が沢山生理めになっていますから助けて下さい。』合掌した老婆が私達を拜む。救護隊と間違えたのか。トラックはやっと己斐へついた。トラックをとめて罹災者に尋ねたところ、とても街には入れそうにないとの返事なので、仕方なしに降りる。

『焼けていたら工場に帰って来なさい。』との運転手の声を後に、私達は歩き始める。団結した行動を取ることにして、上級生と一緒に己斐橋の方へ歩く。私達が福島町電車停留所の角の隣保館前に差しかかった時、警防団員の腕章をつけた人がやって来た。

『君達は救護係りの人だね。』

『いいえ。』

『それは困ったな、実は子供が沢山生理めになって泣き声は聞えるのだが、助け出すことができないのだ。手伝ってくれないかね。』

私達は一刻も早く家に帰りたく、そのため断ろうとしたが、倒れた館内からかすかに聞えるうめき声に心を打たれて、援助することにする。いたいけない子供達が建物の下敷きになって救いを求めている。ピカッと光った直後、ものすごい爆風が襲って来て、瞬間にして全壊したようだ。雲は大空いっぱいには拡がって曇天となり、僅か南の江波山の上空に青空がのぞいている。

館内に入ったとたん、門の所に全身火傷してその上に何がついたのか、異様に汚れた皮膚をあらわにしながら、ふるえている親子がいる。寒いのか、子供の両眼からどす黒いウミに似たものが流れ出し、警防団員が『目が見えるか。』とたずねると『見えないのです。』と手をふるわした。一瞬にして健全な肉体が無残なまでに切り裂かれてしまったのだ。『水を飲ましてくれ。』と手探りで哀願する。

建物のどこから片付けて良いのか、さっぱり見当がつかない。下の方で身を刻むような泣き声が、聞えて来るのだが - あわれにも死の叫び声か。五〇メートルばかり離れた小さな倒壊家屋の所を二人の女がうろついている。私はその方へかけつけた。幼稚園の分室らしい。

『利男、利男！』と泣き叫ぶ母親が、大きな柱を動かそうとしたがビクともしない。私達も手伝った。柱が少し動く。しかし子供の姿は無く、カバンが一つ押しつぶされているだけだ。先に来ていた一人の兵隊が向うの方で、五歳位の子供を抱き上げた。『これは違いますか。』と、その女に尋ねたが、顔をのぞき込んで頭を横に振りながら、なお我が子を求めて、瓦を一枚ずつ除け始める。子供の顔は？ 目から毒々しい赤い血が一筋流れている。すでに息はない。兵隊はソッと草原に死体を降ろして合掌した。私は呆然としてまた

も肉親を思い出し、気の毒ではあるが今さら柱を動かすことが出来ない。またそれだけの力が出て来ないのだ。うなだれながら友人のKが門の方へ歩み始めたので、私も弁当箱を持ってつづいた。上級生も無言で帰り始める。悲惨な状況を目のあたりに見た私達は、全身の血が無くなったように青ざめ、歩むだけが最後の努力である。

福島町の鉄橋に出て見ると、対岸は燃えさかっており、とても渡れそうにない。枕木が二、三本黒い煙を出している。仕方なく己斐駅に引返し、街中へ入るただ一つの望みとして横川駅に出ることとする(以下略)。』

炸裂時の被害

この地区は、爆心地点より一・五キロメートル以上～二・五キロメートル内にあり、家屋の瞬間的被害は全域に及んでいる。

次表によれば、だいたい南方に下がるほど全壊家屋が多くなっているようで、少ない町で七〇%(南三篠町一区)、多い町で九〇%(福島沖町)の全壊があった。人的被害にしても、前記益信之の手記のとおり、福島南町の福島町民一致協会会堂にあった天満国民学校分教場(昭和十八年六月二十四日・福島国民学校を天満国民学校に合併した。)にいた未疎開学童(約二〇人)が、会堂が全壊したために下敷きになって、大部分が即死したことの事例もあるので、かなりの即死者と重軽傷者があったものと推察される。なお、西隣保館敷地内にあった一致協会会堂は、間口一二間・奥行七間の総二階建延一六四坪の木造建物で、広島市役所が、現在地に移転するとき、その市会議事堂を同協会が譲り受けて建設されたものである。

被害状況表

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
南三篠町一区	70	30	-	-	10	80	10	小河内橋 - 異状なし (渡橋には支障なし)
南三篠町二区	80	20	-	-	10	83	0.7	
南三篠町三区	90	10	-	-	10	80	10	己斐橋 - 小破(渡橋には支障なし)
福島北町	80	20	-	-	0.7	88	0.5	
福島本町	90	0.7	0.3	-	10	60	30	福島橋 - 小破(渡橋には支障なし)
福島中町	90	10	-	-	10	60	30	
福島南町	80	20	-	-	0.5	83	12	広島電鉄KK市内電車線 福島鉄橋 - 己斐鉄橋 - 小破 (電車運行支障なし)
福島沖町	90	10	-	-	15	75	10	西大橋 - 小破、旭橋 - 小破 (いずれも渡橋に支障なし)

火災発生の状況

東地域の中央部にある福島本町と福島中町は、家屋が、密集していたところであるが、両町とも九五パーセントが倒壊全焼した。この両町を中心に南北に次第に全焼家屋が少なくなっている。

福島中町および福島南町は遅くから火災が発生した関係か、夜間にかけて燃え続けていた。この両町以外の他の町は、炸裂直後には、すでに、火災が発生していたのであった。

各町別の火災発生状況は次表のとおりである。

町名	最初に発火しはじめた		延焼の状況(方向・火勢・炎・煙)	終息の時刻
	場所	およその時刻		
南三篠町	福島本町よりの延焼が一時間位後であるが本町内には既に三〇分後には飛石的に火災が発生してした	午前八時三十五分	当町は田園地帯で家屋が散在していたので、飛石的に火災が発生した。なお、福島本町に近いところ家も密集していたが、福島本町よりの延焼で大部分焼失した。当時の全戸数の約四四%が全焼した。	夕刻頃まで
福島北町	南に隣接している福島本町から延焼して来た。	午前八時三十五分	当町は家屋密集していたため、全戸数の六〇%が全焼した。	午後四時頃
福島本町	藤本仕立屋(本町西寄りにあった)	被爆直後	火勢の方向は、はじめ西より東に向い、後に南より北へ進み、更に北より南へ向かって延焼していったようである。火力強く、全戸数の九五%が全焼した。	正午頃
福島中町	福島本町から延焼	午前十時過ぎ	約九五%にわたり家屋が全焼した。	夜間
福島南町	福島中町から延焼	正午過ぎより	全戸数の約三〇%が全焼した	夜間
福島沖町	中野化製工場 河寅化製工場	被爆直後	全戸数の約三〇%が全焼した。上記工場より直接炎上、周囲に及んだ。	午後三時頃

降雨

降雨については、はっきり判っていないが、被爆直後に豪雨が降ったと言う者と、大した雨ではなかったと話す者もあって二説に分れている。だが軽い雨であったという説が強いようである。大体において被爆後一、二時間後に降りはじめ、午後も断続的に降ったと思われる。ある人が、行方不明となった家族を探すとき、雨傘をさしかけて出かけたが、この地区一帯で傘を閉じたり開けたりしたと語っている。このような降雨のうちにも、いっこうに火勢は衰えず、ますます燃え続けたのであった。

六日夜

火災からのがれた者が、建設途上にあった太田川放水路の堤防や、放水路の河床や、あるいは畑の中に、三々五々と相寄って、炎上する町内を望見しながら夜を迎えたが、みんな重軽傷者でどうすることもできなかった。

放射熱線

福島沖町では積み上げてあった箱の仕組板の切り口が、熱線によって、ところどころ黒焦げとなり、市内電車の枕木も同様、熱線の放射方向に焦げていた。

なお、南三篠町の畑にあった農作物は、大部分が熱線を受けて葉はちぢれ、カボチャ・ナスなどは落ちて地上に散乱した。

電車脱線

市内電車一輛が、天満町方面より終点己斐駅に向って西進して、己斐鉄橋にかかろうとする五〇メートル手前(爆心地から西方二キロメートルの地点)で、被爆するとともに、脱線して二〇度ぐらい傾斜し、逃げ残った乗客三人が腰掛けていたまま死んでいた。

老松焼失

福島本町の旧国道の両側に、むかし並列して植えられたと伝えられる樹令数百年におよぶ松並木があった。伝説によれば、毛利輝元が広島城を築いたとき、福島町の宗家伍家八右衛門が記念として植えたものであると言われ、被爆当時には、なお数本残存していたが、これらの松も熱線により焼けた。

その中の一本(直径一メートル余)だけが、火の消えることなく、約半年間、毎日煙を吐き続け(炎は見えないままで)、遂に高さ一メートル半のところまでを残し、上部を焼きつくした。

八、被爆後の混乱と応急処置

医療救護

被爆直後、福島中町の照山宅(元妙蓮寺跡)において、東京から疎開して帰っていた天本毅医師が、多数負傷者の治療にあたった。また、県の防空業務命令書によって、福島町の救護所(西隣保館)を預っていた天満町の児玉克己医師も、自身の負傷をかえりみず、馳せつけて医療救護にあたった。

連合町内会事務所の設置

福島南町の妙蓮寺は、被爆当日の夜出火したが、風がなかったためか、庫裡が延焼をまぬがれたから、ここを福島・南三篠地区連合町内会の事務所に定めて、食糧の配給その他の救護対策を行なった。

にぎり飯配給

八日ごろから、救急品、とくににぎり飯の配給が開始されたが、近郊からの持ち込みではなく、毎日、炎天下の焼跡を通り、広島市役所まで町民が受取りにかよったのである。持ち帰ったにぎり飯は連合町内会を通じて、五、六日間配給された。

救護所

部隊名不明の陸軍部隊が、八月七日、太田川放水路堤防上の、福島沖町側へムシロ張りの仮救護所を設けて、負傷者の治療にあたっていたが、翌日には急にこれを撤去し、南観音町にある第二国民学校(現在・観音中学校)に設けられた救護所へ移動併合した。

また、大竹海兵団所属の救護班が、八月七日より二～三日間ほど、大破した市営屠場内に来援し、一般負傷者の治療を行なった。

道路の啓開

この地区内を東西に貫通している旧国道と、旭橋と西大橋間の観光道路につながる道路は、暁部隊らしい陸軍兵士により、三日間くらい、啓開作業が行なわれた。その他の道路の啓開は、復帰した住民の手によって、逐次、進められた。

死体の収容と火葬

被災地から周辺部へ避難するため、この地区を横断して己斐町方面へと避難する火傷・負傷の重傷者は、氣息えんえんのありさまであったが、力つきて倒れ、そのままになった死体が、日光にさらされ、ゆでたエビのように赤茶けて、到るところに転っていた。ほとんど男女の識別さえつかない身元不明者であった。これらの遺体を己斐橋東詰めとか、太田川放水路上の草原や焼け果てた畑中などに集めて、町内有志の手により火葬にふした。

なお身元が判明した者のうち、自身で連絡出来ない者のために、町民がわが家の災害をにおいて、献身的にその縁故者を探し出し、連絡した例もすくなくなかった。

身元不明者の遺骨は、町内の妙蓮寺に安置していたが、後に広島別院へまとめることになって同院へ引渡した。

家庭の破壊

なお、炸裂時に、福島地区の住民で、市の中央部に出ていて死亡した者も多い。益田与一(福島南町)の資料によれば、その隣組約一〇世帯の中においても、益田宅の北隣り柿原清人の家族は、四男信男(一三歳・市立第二国民学校)・四女和枝(一〇歳・未疎開児童)の二人を亡くし、三軒ほど北の菊崎正行の家族は、三女智子(一五歳・市立高等女学校)を亡くし、南端の岡本忠雄の家族は、戸主忠雄(四一歳・自宅倒壊し負傷)をはじめ、長女栄子(一六歳・市内で所用中)・二男忠光(一四歳・市立第二国民学校)・四男充(一一歳・未疎開児童)の四人を亡くしている。

また、益田宅に預っていた山県郡筒賀村順正寺の伊藤佳子(安芸高等女学校)も学徒動員で出勤中に被爆し、ついに帰って来なかった。さらに益田宅南隣りの岡本高市の長女雛子(市立高等女学校二年生)も中島町付近の疎開作業に出勤中に被爆し、両親の一か月余にわたる探索の結果、天神町の防空壕内で死んでいるのが発見された。このように原子爆弾による家庭破壊の惨禍は、地区住民の立ち直りにいつまでも大きな障害を与えた。

なお、被爆後の各町内会の機能は、次のとおりであった。

町内会の機能

町内会名	状 況
南三篠町一区	町内会長・副会長とも健在で、異状なく活躍した。
南三篠町二区	町内会長は勤務先で被爆死したから、副会長満田周平が指揮をとって活躍した。
南三篠町三区	町内会長・副会長とも健在であったから、町内会の運営に支障が少なかった。
福島北町	町内会長以下町の幹部は全部無事であったから、異状なく運営が出来た。
福島本町	町内会長が被爆により火傷したため第一線を退き、副会長斉藤貫一が指揮をとったが、一カ月後被爆症状が出て退いたそのあとは、高原正人が引き継ぎ異状なく運営した。
福島中町	町内会長及び副会長木原正春が被爆により火傷したので、療養のため退き、高橋義正が指揮にあたった。

福島南町	町内会長(連合町内会長兼務)が被爆により火傷したので、療養のため引退し、実弟菊崎明が副会長川野義諦・菊岡明の二人を補佐して町内会および連合町内会の事務を円滑に運営した。
福島沖町	町内会長が被爆後死亡したが、後任藤原勇により支障なく運営が出来た。

九、被爆後の生活状況

仮小屋

徹底的に破壊された焼跡を、応急的に整地して仮小屋を建てたのは、一週間くらいあとであった。

ノミの発生

ハエより蚊・ノミがおびただしく発生した。夜具の下にノミが行列して這い廻っている状態で、無慮何百何千というほどのノミが、一つの仮小屋の中に人間と同居していた。

蚊も、昼でも蚊帳を用いねばならないほど発生したが、当時は駆除することもできず、そのまま日夜苦しんだ。

生活物資

主食の米はもとより、副食物も配給がごく僅かであったから、窮余の策として、焼跡を駆けまわって、地下の貯蔵庫にあった醤油を見つけて持ち帰るとか、漬物・梅干・缶詰などを掘り出して来て食べたりした。

また、水道が出ず飲料水にたいへん困り、蛙のいる井戸の水をも使用するという状態であった。そこで、東側に川を隔てて隣接する観音町の水道鉄管の破損口から水があふれていたのので、川を渡って行き、バケツとか、その他の器に入れて、持ち帰るといった苦勞が続いた。

ロウソク生活

己斐町に近い地区にあっては、工面して得た長い電線を更に継ぎ足し、己斐地区に電源を求め、ホタル火のような心ぼそい電灯で過ごしたのは、まだましな方であった。電灯のないところは、倒壊したロウ工場から、パラピン油を探し出し、これを皿にとかして布地などでシンを作って使ったり、牛のヘットをとかして、同様のシンを用いてロウソク代用に使い、暗夜をしのいだ。これらの地域に電灯がついたのは、不完全ながら翌二十一年二、三月ごろになってからであった。

公設市場

広島市が、広島電鉄己斐駅東側の観光道路上に、昭和二十一年五月から六月初めにかけて仮建築で公設市場二〇戸を建て、日用品とか食料品などの販売を開始したのが人気を集め、遠く宇品町方面からも買物客が来る有様であった。地区内の町民はほとんどがこの市場を唯一の頼りとし、必需物資の買い求めに利用した。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨と、十月八日の大豪雨で橋梁が落ち、市の中心部との交通が困難になり、生活の回復をさまたげた。蚊の発生がおびただしく、掘立小屋の中へ蚊帳をつり、風雨の荒れるにまかせたのが実状であった。ハタハタとはためいている蚊帳のすそを石などで押さえ、昼夜傷病者の看護にあたりながら、しばらくの間、虚脱状態が続いた。

経済活動

この地区の主要産業である食肉卸売業は、市営屠場の大破と市役所の機能が一時的に麻痺したことにより、営業ができず休業状態となった。二十二年四月になって応急修理されてから食肉卸売業が、ようやく正常に復し、経済活動はおいおい活発になっていった。

住宅の状況

本格的に家屋が建ちはじめたのは、三、四年後であるが、地区内の都市計画事業が進行するまで、バラックのまま、いつまでも居住していた者が多く、日常生活に多くの支障を招いた。

また、焼失を免れた建物も、大なり小なりの破損を受けていたが、本格的修理とか改築をなし得ないで、一時的補修だけで長いあいだ住んでいた者も少なくなかった。

十一、その他

(広島市営屠場の概略)

福島沖町の市営屠場は、もと広島屠畜株式会社の経営であったが、明治四十二年(一九〇九)七月、広島市が建物・機械器具などの一切の設備を譲り受け、若干の増築を施し、経営にあたったのが、その発足である。

市勢の発展とともに施設の改善が必要となり、大正二年(一九一三)四月に着工、翌三年三月の竣工により、面目

を一新し、市の主要産業施設として、原子爆弾被災時に至った。

主要建物は、上質の煉瓦造りであり、設備の高架軌条・機械器具は、すべてドイツのベッグ・ウンド・ヘッケル社製という最新式のものであった。

総工費 九八、六〇〇円

その他経費 八、五〇〇円

当時としては、外観の宏壮・設備の整頓・内部の清潔など、全国屈指と称せられた。

食肉の普及とともに、屠殺数も年ごとに増加の一途をたどり、牛のみで年間二万頭を越える数量に達したが、日華事変に続く大東亜戦争と、戦局の進むにつれて経済統制がきびしくなり、食肉も他の主要食糧と同じように配給制となった。

その上、輸送の困難・牛豚の急減も加わり、被爆前には、日々わずかに二頭、三頭をおとす程度になっていた。

原子爆弾炸裂の当日朝、作業開始の時間となり、二頭の牛の処理に着手したところを被爆した。爆心地から二・五キロメートル離れていたため、即死者はなかったが、重傷して帰宅後死亡した従業員があった。

なお、屠殺場は屋根が吹っ飛び、煉瓦造りの壁面には幾筋も大きな亀裂を生じたが、倒壊はまぬがれた木造の事務所・肉捌場・倉庫・繫留場などの付属建物は、見るかげもなく全壊あるいは半壊した。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

楠木町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、横川町一丁目 二丁目 三丁目、三篠町一丁目 二丁目 三丁目、三篠北町、三滝町、打越町、横川新町、大芝町一丁目 二丁目、大宮町一丁目 二丁目、新庄町、山手町
町内会別要目

この地区の範囲は、横川町[よこがわちょう]一丁目・同二丁目・同三丁目・三篠本町[みささほんまち]一丁目・同二丁目西組東組・同三丁目南組北組・同四丁目・楠木町[くすのきちょう]一丁目・同二丁目・同三丁目・同四丁目・打越町[うちこしちょう]・山手町[やまてちょう]・新庄町[しんじょうちょう]・大芝町[おおしばちょう]・三滝町[みたきちょう]とし、爆心地からの至近距離は、横川橋南詰めで約一・二キロメートル、またもっとも遠い地点は、新庄町北端で約四キロメートルである。

横川駅は、市の北の玄関として、車輛の交通量も多く、駅周辺には商店街が栄え、三篠町筋にかけては、鋳物・ゴム・針・紙などの工場や農家、勤め人などの住宅が建てこんでいた。その他の地域は、山林や田園地帯であって、広島市の有力な蔬菜供給地帯でもあった。

戦後、地区の中ほど、山側に沿って幅三〇〇メートルの太田川放水路工事が進捗し、画期的な変貌をとげた。すなわち、太田川本流の北岸に沿って、中国山脈系の裾に形成された一区画であった地域が、現在は、山沿いの山手町・三滝町地区と、市街地の横川町・楠木町・三篠町・大芝町地区とに二分された。

被爆直前の、地区内の建物総数は四、八八六戸・人口は一八、九八七人で、この内訳は次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
横川町一丁目	265	265	1,000	山本豊松一
横川町二丁目	345	481	1,830	岡村清一
横川町三丁目	150	150	450	橘高甚助
三篠本町一丁目	290	290	1,200	森井賢雄
三篠本町二丁目西組	207	215	870	谷川亀太郎
三篠本町二丁目東組	368	355	1,350	福島喜代槌
三篠本町三丁目南組	250	250	990	土井午吉
三篠本町三丁目北組	169	183	795	田村友太郎
三篠本町四丁目	184	197	838	須沢秀三
楠木町一丁目	390	362	1,285	辻国一
楠木町二丁目	336	280	860	赤木繁三郎
楠木町三丁目	290	289	1,001	阿甲順太郎
楠木町四丁目	345	348	1,740	加土広次
打越町	571	571	1,895	安田新七
山手町	62	49	217	坪田島太郎
新庄町	55	68	267	吉本寿一
大芝町	247	247	1,014	岡本与茂一
三滝町	362	362	1,385	野村範一

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
横川駅	横川町二丁目	芸備銀行横川支店	横川町三丁目
横川巡査派出所	三篠本町一丁目	三篠神社	三篠本町一丁目
広島・三篠信用組合	横川町三丁目	光隆寺	三篠本町一丁目
三篠国民学校	三篠本町一丁目	陸軍病院三滝分院	打越町
崇徳中学校	楠木町四丁目	大橋製靴工場	三篠本町三丁目北組
大芝国民学校	大芝町	三好製紙工場	楠木町三丁目
安芸高等女学校	打越町	明星ゴム工場	楠木町三丁目
広島電話局西分局横川従局	三篠本町一丁目	田付製針工場	楠木町三丁目
農産連倉庫	横川町三丁目		

二、疎開状況

(南部地区)人員疎開

横川・打越・山手各町など、地区の南部では、各町内会が市内に雇用関係のない人、郷里に生活の根拠を持つこ

とができる人、そのほか、郡部に縁故のある人々に対して、極力疎開を勧奨し、相当の成果を得た。

ことに、終戦に間近いころは、各都市の焼夷弾による波状攻撃状況を聞いて、防衛要員は疎開禁止になっていたが、その他は自発的に疎開する者が多かった。

物資疎開

物資の疎開については、日常必需品を除いて、世帯道具・家具・衣類などを郡部に疎開させた。しかし焼夷弾のことだけを考え、家具を市内の各所に分散疎開していた者が多く、これは皆、全焼した。

打越町の一部と山手町は、家屋の焼失をまぬがれたが、全壊または半壊して、家具も損害を受けた。

学童疎開

学童は、三篠国民学校三年生以上は、高田郡本村ほか、四か村に疎開し、寺院や公民館に収容された。これについて、三篠国民学校教育後援会幹部の、長崎五郎・住野重太郎・岡村清一など三人が、昭和二十一年三月、現地に行って、村当局および関係教師に対し感謝の意を表した。

(北部地区)人員疎開

地区の北部・三篠本町・三滝・新庄・大芝などの各町では、老幼不具者など少数の者が、市外の縁故先へ疎開した。

物資疎開

物資は、郡部の親類・縁故に疎開した者もあったが、ごく僅かであった。むしろ、市内の中心部から多量の疎開品をあずかっている家が多かった。

学童疎開

学童は、三篠国民学校高学年が高田郡本村および同郡横田村へ疎開し、大芝国民学校が比婆郡口北村に集団疎開をおこなった。

(東部地区)

東部、川沿いの楠木・大芝両町では、極力、縁故疎開を実施し、両町とも相当成果があった。物資についても、できる限り大部分が疎開をおこない、万一の場合に備えていた。

三、防衛態勢

隣組強化

各町とも、市の防空計画に基づく態勢を整え、各家庭に防火水槽を置き、防空壕を作らせていた。また町内会は監視隊を巡回させて灯火管制を厳重にし、また警防団を組織して、隣組を強化した。

焼夷弾や爆弾に対する防火訓練も厳しくおこなった。

国民義勇隊

国民義勇隊は、隣組を基礎として、男女とも一八歳以上六〇歳までで組織し、身体障害者・乳児をもつ婦女子は除く、全町民を編入し、市の建物疎開作業にも出動した。

この地区では、国民義勇隊三篠大隊(大隊長・岡本清一)、及び大芝大隊(大隊長・佐々木亮)が結成され、本土防衛に備えての竹槍訓練には、女子も参加した。

防衛・防空・防火態勢の一例として、楠木町では、各家庭に一石(一八〇リットル)入りの防火水槽ならびに防空壕を一個ずつ造り、町内防火水槽を一〇個から二〇個ぐらいも併設し、手押しポンプ三台から四台、場所によっては一〇台も設置、防火ポンプの大型も備えた。この様に各町とも楠木町に準じて、それぞれ万全の態勢をかためていた。

四、避難経路及び避難先

地区全体として、避難先を、安佐郡安村の安国民学校および正伝寺とし、近隣では、太田川付近の寄洲・打越山・三滝山・新庄山に指定していた。また、長束の竹やぶも考えられていた。

経路は、安方面へは、可部街道(出雲街道ともいう)を北上し、古市橋から左に入る。また、楠木通りを北進して右に入り、安村に至ることにしていた。

山林地帯へは、可部街道から西へ入る道路を西進することにしていた。

五、所在した陸軍部隊集団

当時、地区内に所在した陸軍諸部隊は、つぎのとおりである。

兵種・名称	所在地	兵種・名称	所在地
-------	-----	-------	-----

広島陸軍病院三滝分院	打越町	高射砲隊	安芸女学校 南西
独立鉄道第二大隊 (線第一三五二部隊)	崇徳中学校	第一八独立鉄道作業隊	大芝国民学校内
高射砲隊	新庄町	第一一四部隊二個中隊	三篠国民学校内

六、五日夜から炸裂まで

炸裂前

前夜から各町内会は、当番四、五人が二時間交替制で、町内を巡視し、警報の発令解除を知らせ、灯火管制を厳重に励行させていた。町民は六日朝になって警報解除になったので、みな安心してその日の業務に就いたのであった。

警報解除のあとで、平常とかわるところなく、朝食が終って、商店街は店をひらき、屋外には、牛馬車をひいた肥料の糞尿汲取りの百姓や、家屋疎開の残材を積んで持ち帰る運搬車などが見受けられ、また、学童は登校中のもいたし、低学年児童は、各町の公民館や青年館で、勉強をしていた。

敵機目撃

敵機は二機、B 29 が牛田の水源池方面から来襲し、東方に向っていた。高度は七、〇〇〇乃至八、〇〇〇メートルと思われた。

パラシュートのような物に三個何か下がっていて、可部方面に落下したのを目撃した者がいる。侵入敵機の爆音は、聞いたという者も、聞かなかったという者もある。

なお、当日朝、疎開作業への出動と建物疎開実施の概況は次表のとおりである。

町内会名	動員令による町内会の建物疎開動員について		地区内で行なわれていた建物疎開実施状況			
	出動人員概数	出勤先地名	疎開定概数	被爆前日までの実施概数(戸)	当日朝実施中の概数(戸)	他地区からの応援人員概数
横川町一丁目	100	小網町		21	21	安佐郡祇園町
横川町二丁目	223	小網町				
横川町三丁目				約 20	約 20	
三篠本町一丁目	70	小網町				
三篠本町二丁目西	18	小網町				
三篠本町三丁目南	16	小網町				
三篠本町四丁目	20	小網町				
楠木町一丁目	95	小網町				
楠木町二丁目	11	小網町				
楠木町三丁目	28	小網町				
楠木町四丁目	25	小網町				
打越町						
山手町						
新庄町	8	小網町				
大芝町	35	小網町				
三滝町	48	小網町				
三篠本町二丁目東		小網町				
三篠本町三丁目北		小網町				

七、被爆の惨状

不意の炸裂

突然、地区の南東上空に、稲光りのような閃光が発ち、同時に轟然たる音響が耳朵をつんざいた。

家屋やその他の建物は、すべて吹きあげられて倒壊し、一帯はたちまち天地晦冥、もうもうと立つ土煙におおわれてしまった。

人々の多くは家屋の下敷きとなり、助けを求める血まみれの声々が、その暗やみの中に入り乱れた。

中には、炸裂の音を聞かぬや防空壕に待避した者もあったが、寸時にして火災が発生したため、あわてて着のみ着のまま、防空壕から出て、山林地帯に向って避難した。火災は地区全体から発生し、防空壕も焼けだしたので避難場所にならなかったのもあるが、少数は逃げ遅れて、ついに焼け死んだ。

自然発火

被爆直後、一五分ぐらいして、ワラ葺の家が自然発火し、各所から白煙があがった。その煙と煙が、見る見るうちに連らなって、一大火災となった。消火する人手もなく、また余裕もなかったから、下敷きになったまま生きな

がらに、焼け死んだ人々は数えきれない。

避難行

辛うじて歩くことができる者は、襲い来る火炎をくぐって脱出したが、それらは、国民学校前を通り、打越土手を行き、北口の新庄橋を渡って、安佐郡方面へ避難した。

重傷者をかかえた人々は、遠くへ逃げられず、近くの三滝町の竹やぶの中や倒れた陸軍病院三滝分院の応急治療所、あるいは山手川兩岸の雑木の陰に隠れた。

また、橋の下にも約一〇〇世帯ほどの人々が避難した。

逃げる途中、瓦礫その他で埋まった道に、馬が四、五頭たおれて死んでいるのが見られた。

郊外に通ずる横川町本通り - 三篠本町 - 新庄橋間の道路は、倒壊物で埋まっていて交通不能であったから、避難者は主に、太田川堤防を通って大芝町方面に抜けるか、あるいは打越 - 三滝の土手を経て、新庄橋に出るかの、この二本の道しかなかった。しかし、この道も、電柱が折れ、電線が随所にもつれて垂れさがり、地面に散乱し、屋根瓦やコンクリート片などが雑然と堆積していたから、車などは無論のこと、歩いて行くことさえ困難をきわめたのであった。

同じ地区内の山に近い大芝町や新庄町でも、家屋は倒壊するか、あるいはそれに近い被害が発生した。寸時にして、ワラ屋根・ソギ萱屋根・瓦屋根が吹き飛ばされ、全面的に着火して炎上した。

避難者の衣服は半焼となって血に染まり、顔や手足は火傷して、ヨレヨレの皮膚がブラ下がったまま、誰ともわからぬ程のまっ黒く汚れた姿で、付近の竹やぶや河川の堤防に、あるいは山林にと息たえだえで逃げて行った。

しかし、猛りくる火勢と煙のため逃げ道を失い、方向もつかめず、とまどっているまま火炎に呑みこまれていった人々も多い。

この突発事態の発生にあっては、平素の訓練も忘れ、われ先にと一物も持たないで、命からがら人々は逃げたのであったが、その途中で力がつき、動けなくなると、多くの人々が死んでいった。

また、河川の水中に火を避けて逃げていた人々も多数いたが、その多くも死んでしまった。

このような猛火の中で、楠木町三丁目赤木町内会長・同町三丁目阿甲町内会長及び四丁目松島副会長らは、いずれも全町の焼け落ちるまで踏みとどまり、最後を見とどけてはじめて避難した。

奥地への道奥

地へ向う国道はもとより、その他の狭い道も、可部線の線路上も、ヨロヨロと今にもブツ倒れそうな、全裸半裸の人々が、後から後からひっきりなしに続いて行った。途中、板塀などにあり合わせの物で、「安村に行く後から来い 何某」などと、あちらこちらにたくさん書き残されていた。

このように書き残した人々も含めて、新庄橋付近まで来ると、安全圏内に到達したという安心感からか、ヘナヘナとかがみこんだり横になったりして、ひとまず休息する者がたくさんいた。しかし、休息したまま、二度と動けなくなった人も多かった。これら路傍に苦しむ負傷者の呻き声を聞きながらも、歩ける者は歩いて去った。誰も彼も負傷者で、他人を助ける余力はなかった。無論、傷の手当など思いもよらぬことであった。

黒い雨

午前十時ごろから、黒い雨が激しい夕立のように降りはじめ、一五分間から二〇分間ぐらいでやんだ。このため三滝山の谷川の水はまっ黒になった。

しかし、この降雨状況も被爆者によって体験がまちまちで、楠木町三、四丁目付近では午前十時ごろから無色の雨が降りはじめ、午後三時ごろから黒い雨が降ったと言い、大芝町では午後になって普通の雨が降りはじめ、市内の中心へ向って、渦となって降って行ったと語っている。

降雨は、建物の火災に対しては影響なかったが、山林の火災に対しては消火の役目をはたした。

川の死体

河川にのがれた人々も無数にあったが、横川橋や三篠橋付近には、三、四時間後すでに多数の死体が川面に浮いていた。

午後四時ごろ、山手川の水辺に、まっ黒い顔をして、皮膚のブラ下がった手をつき、水を飲む姿勢のまま絶命している死体があった。そのほとりに、頭を手拭で繃帯し、手に竹槍を持った人が坐っていたが、その手拭はまっ赤に血で染まり、顔にドス黒い血のりが流れていた。その付近にいる罹災者たちは、みんな死んだような顔をしており、「水をくれ、水をくれ」と、泣き叫んでいた。

その中に、死んでいる幼児をしっかりと抱いた母親が、ムシの息になって倒れていた。

翌七日の満潮時には、横川橋下に打ち寄せられた死体が、無数によこたわっていたが、二、三日後になると、更にその数を増した。死体はみな、張り裂けんばかりの腫れかたをしていた。

国民義勇隊全滅

なお、六日の早朝、小網町の建物疎開作業に出動した横川地区の、国民義勇隊三二三人は、生存者四人を残して、他は全員死亡した。残った四人も十日前後のうちに死んでいった。

児童の死

また、三滝青年会館で分散授業を受けていた大芝国民学校の低学年児童十数人がへ爆風によって倒壊した建物の下敷きとなった。付近の人々によって救出された児童たちは、ガラスなどで負傷していたが、幸い大きな傷はなかった。まもなく建物は類焼し、その跡から三人の児童の死体が発見された。

六日の夜

六日の夜は、まったく暗黒の死んだ世界であった。

川べりや竹やぶ、山林内に逃げこんだ避難者たちは、その場にゴロ寝するほかなかった。治療を受けるということもなく、終夜呻き苦しんで、ただ夜の明けるのを待った。救援隊の来ない所では、一日二日は水を飲んで辛うじて命をたもっていたが、助ける人もなく遂に死んでいく負傷者も数知れないというありさまであった。

山地に近い打越町や山手町などの、炎上をまぬがれた地域では、屋根瓦が飛んだ位で、何の損傷も受けなかった家もあり、市中の避難者が各家に流れこんで来ていたから、ありたけのものを出して救護にあたった。

どの家も多くの負傷者がいて、一晩中、泣き声や呻き声が絶えなかった。

それに灯火なく、ラジオなく、暗闇の中で、恐怖におびえつつ過ごした。

山べりの小高い所から町々を眺めやると、コンクリート建物の残骸と、樹木の焼け残りが見えるだけで、あとは広々と遠くまで残火の明かりに見とおされ、燃え残った炎が鬼火のように、赤くゆらいでいた。その中に時々思い出したように人影が見えた。焼死者でも探していたのであろうか。

炸裂時の被害状況

地区内の原子爆弾炸裂時の被害状況は次表のとおりである。

町名	家屋被害(約%)				人的被害(約%)			摘要
	全壊	半壊	小破	無事	即死者	負傷者	無事	
横川町一丁目	焼失				15	65	20	横川橋は小破 横川線(電車)無事
横川町二丁目	焼失				15	65	20	
横川町三丁目	焼失				15	65	20	
打越町	60	20	20		9	51	40	中央橋は半焼 三滝橋残る
山手町	60	20	20		14	44	42	山手橋全壊
三滝町	40	50	10		4	58	38	被爆による死者八〇人
三篠本町一丁目	焼失				7	54	39	
三篠本町二丁目東	80	20			1	60	39	36被爆による死者六〇人
三篠本町二丁目西	80	20			1	60	36	被爆による死者三九人
三篠本町三丁目南	75	25			1	50	49	被爆による死者三三人
三篠本町三丁目北	75	25			1	50	49	被爆による死者三九人
楠木町一丁目	焼失				15	65	20	三篠橋は大破せしも一部 通行可能
楠木町二丁目	80	20			1	50	49	被爆による死者二〇人
楠木町三丁目	80	20			1	50	49	被爆による死者四〇人
楠木町四丁目	75	25			1	40	59	被爆による死者三五人
大芝町	40	60			1	40	60	被爆による死者四四人

火災状況

原子爆弾炸裂後、地区内の火災発生炎上の状況は次のとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場所	時刻		
三滝町	南部 藁屋根 西部 上山手 藁屋根 北部 中原藁屋根 山林数ヶ所	八時二十分	最初、藁屋根一面に着火炎上する。風強くなり飛火する。瓦はがれて居るので、火の粉が、ソギなどに炎上する。火勢の強くなるにつれて、旋風様となる。	午後五時
三篠本町二丁目東	製材所の木造ソギ葺屋根などに町内数ヶ所から発火する。	八時二十分	旋風の風強くて見る見る拡大していく。防火するものなし。延焼は速い。	午後五時

三篠本町二丁目西	町内数か所	八時二十分	旋風の風強くて見る見る拡大していく。防火するものなし。延焼は速い。	午後五時
三篠本町三丁目南	町内数か所	八時二十分	旋風の風強くて見る見る拡大していく。防火するものなし。延焼は速い。	午後五時
三篠本町三丁目北	町内数か所	八時二十分	火勢の上昇とともに、強風となり、見る間に延焼して行った。	午後五時
三篠本町四丁目	南部、飯田製材所立材付近、藁屋根数か所炎上す	八時二十分	この地区は隣家との間も開き、被害の程度も少しは軽く、よく防火につとめたので一部焼失で止む。	午後五時
大芝町	お宮近くのワラ葺家から一番に出火	八時二十分	ワラ屋根の家、数戸焼失する。	午後五時
楠木町二丁目	興亜ゴム、鉄道の枕木	炸裂と同時に自然発火	狩野宅が、一番おそく出火、他が焼けるのにあふられて出火したらしい。	一番おそく夜まで別院がもえていた。
楠木町三丁目	現在の登宅の家の付近が出火	炸裂同時に自然発火		午後十二時ころまで
楠木町四丁目	大芝国民学校付近の原家が一番に出火	炸裂と同時に自然発火		大部分が焼け終わったのは、午後十一時頃

諸現象

原子爆弾による災害は、町民のこれまでの常識では考えられないような、まったく不思議な現象が多くあって、火災終息後、避難先から帰って来た者の目をおどろかせた。

(イ)炸裂の光線を受けた稲の葉先が、約三センチメートルほどそろって枯れたように黄色に変わっていた。また、平素橋上からは見えなかった横川橋下のコイ・イダなどの魚が、熱線を受けたためか背すじが白く剥げており、泳いでいるのがよく見えた。

(ロ)白布地に黒で「憲兵」と書いてあった腕章の、黒い字の部分だけがくりぬかれたように焼き取られ、白い部分だけが残っていた(横川町)。

(ハ)鉄骨が鉛のように曲がっており、ガラスは液体となって溶け、地上の凹みに溜まった。岩石類も焼けただけで脆くなっていた。屋根瓦はほとんど変色変形して破損し、あか土色となった。

また、金庫の中へ保管してあった眼鏡も、セルロイドの縁がまがり、レンズがはみだしていた(横川町)。

(ニ)爆央から約三キロメートル離れたところのノコギリの刃が、火にあっていないのに、ポロポロとむしることができた。この辺りでは、鉄材などに変化はなかったが、鋏などの製品になっていた物は変化した。

アルミニウム類はすべて溶解した(大芝町)。

(ホ)黒い衣服は、炸裂の熱線を受けた部分が、その強弱によって縞のガラの焦げ目ができ、あとでポロポロになった(楠木町)。

(ヘ)鉄道線路の枕木に自然着火し、部分的に焼けた(横川町)。

(ト)将校が乗馬のまま、人馬共に横倒しになって死んでいた。また、牛が街路樹につながれたままで死んでいた(横川町)。

(チ)小網町の疎開作業に出動していた国民義勇隊員の一人は、炸裂時にたまたま土蔵の中において、屋根や壁の下敷きとなったが、生命に別条なく奇跡的に脱出することができた。

(リ)火災に包みこまれた女性二人が逃げ場を失い、何度も水槽で身体を冷やしては防空壕にかくれ、数時間頑張っているうち、老婦人は倒れたが、若い方は生き残って脱出に成功した(横川町)。

(ヌ)三滝山・新庄山・打越山一帯の松の葉が赤くなって枯れた。

(ル)三滝や大芝あたりの竹やぶの竹は、爆央に向いている側の表皮が、全部焦げ、後日、そのところだけ晒したように白っぽくなった。

(オ)三滝町では、ワラ屋根の家が全部焼けたが、中にただ一戸だけ佐々木玉吉宅が焼けなかった。

(ワ)三滝橋を渡っていた婦人が、爆風で一〇メートルも吹きとばされたが、そこから余り離れていない竹やぶのかげで仕事をしていた人で、火傷も受けず、爆風も知らなかった者があった。

紅蓮の炎の中を

末田実吾 (被爆地・楠木町三丁目)

当時私は、県食糧査察員として、毎日の市民の食糧が円滑に配給されるように、そのルートを誤らないように見

守ってきた。

しかし、あの最後の日が近づく頃には、横流しする品もなくなり、甚だしきは、市内とその郊外一帯には、およそ食べ得る野草(オバコ・セリ・ヨメナ・クサギナ・スイバ)は全く見うけられないように食べつくされていた。

実に重大なことなので、早速、憲兵隊特高課に報告したが、軍部でもどうするすべもなく、係の方も「苦しかろうが最後まで、やって下さい。お互いに頑張りましょう。」と、顔を見合わずに過ぎなかった。

長い間、ゲートル姿でやすみ、モンペ姿で床にはいり、ラジオの放送に耳と全神経をとがらせながら熟睡することもできない。僅かの米麦の配給に空腹ながらも、満足して戦ってきた。(中略)原爆投下の前夜も同じような不安と重苦しい一夜だった。

警戒警報解除の報に、ホッとした瞬間の出来事が、あの恐ろしい大惨劇だった。子は親を呼び、親は子を探し、未だかつて見たこともない、聞いたこともない地獄の絵巻が、今、目の前に展開されているのだ。いや、その地獄の中に、今、自分が投げ込まれているのだ。「お母さん、お母さん」と血のほとばしるような悲鳴…。

どこからともなく紅蓮の炎が上がってくる…来る…くる…自分の方に…。大火は物凄い勢いで、近々と燃え広がってくる。先き隣の家にも…隣の家にも…私の家にも。

焼けただれて、まるでボロ布のさがったような顔、手、足。

着ている物は、その瞬間に焼けてしまい、一糸もなく丸裸の避難者が、幾千幾万と、ゾロゾロ、ゾロゾロと続いて後をたたない。

しかも、その行列の中から、まるで子どもが、お母さん、お母さんと叫ぶと同じように「天皇陛下…天皇陛下…」と叫びつづけて避難する人も実に多かった(以下略)。

北へ向けて脱出

岡村アヤ子 (被爆地・横川町一丁目四ノ三九)

夫がちょうど、家で市役所の指示事項などの書類を整理している最中でした。

突然、強い光りと、地をゆすぶる大爆音が起り、アッと思うまに家屋はもの凄く揺れて倒れました。泣き叫ぶ声、悲鳴！一瞬に地獄が出現したのです。

夫は家の下敷きとなりましたが、辛うじて脱出しました。見れば左手の動脈が切れ、顔や手足も負傷し、白シャツは出血でまっ赤に染まっています。

夫は右往左往する付近の人々を、安全地帯にのがれるよう誘導しながら、私と共に約五〇メートル東方の太田川三篠橋付近にのがれ出て、川土手を北にむけて進みました。しかし、夫は出血多量で顔は蒼白になり、倒れては起き、倒れては起き、休み休み歩かねばなりませんでした。

夕方、安佐郡祇園町の神社までやっとたどり着きましたが、その頃は、顔面にドス黒い血が流れ、皮膚は破れてボロ布が下がったような負傷者が、続々とのがれて来ました。

歩くことができなくなり、水をくれ水をくれと、息も絶え絶えに叫びつつ倒れ死んでいく人もたくさんでした。

このような事態の中で、私ら夫婦は励ましあって、簡単に傷の手当てをして、しばらく休息しましたが、被爆時、広島市中にいた息子のことが気にかかりだしました。

一夜その場で過ごしてから、横川の元の家跡にもどりました。家は焼け落ちて燻る火気と異臭で、呼吸も苦しいほどでしたが、一日中探し歩いたのち、牛田町の親類を頼って行ったところ、顔や手などを負傷しながらも息子が生きていましたので、抱きあって泣きながら喜びあいました。しかし、息子は二日後に死にました。全く生きる気力もなくなってしまいました。

八、被爆後の混乱と応急処置

北へ脱出

六日のその日、横川付近には救護所がなかったから、安佐郡の祇園町や安村方面に向って、逃げていくほかなかった。血だるまになった人や足が千切れてビッコをひいていく人など、無数の重軽傷者が、四散した家族と連絡をとるため、電柱やセメント塀や水槽など、ところ嫌わず、家族の名を書いたり、貼紙をしったりして安全地帯へトボトボと歩を運んだ。

衛生隊

同地区内でも大芝町には同日午後六時ごろ、比婆郡の衛生隊が到着して、申しわけ程度の手当てをおこなった。

三滝付近

また、第二陸軍病院三滝分院は木造平家建ての病舎一六棟が全壊したが、火災にならなかったのも、診療機器や医薬品その他を拾い出して、三滝山麓一帯の避難壕などに収容した患者の治療を行なうと共に、分院跡近くに臨時救護所を開設して、一般負傷者の治療を行なった。

三滝寺は、三滝町など周辺地区の避難先に指定されていたためもあるが、寺の中に、避難者が殺到し、身動きできない状態となった。寺では炊出しを行なうと共に、衣類などもすべて提供して救護にあたった。しばらくして、山したの三滝橋付近に臨時救護所が設置された。

また、長崎五郎医師は三滝分院の入口の竹やぶで、約八〇〇人余の負傷者の治療にあたった。その後、三滝山の自分の山小屋に移り、終戦まで毎日数百人の治療を行ない、更に、大芝国民学校に移って多数の負傷者の診療にあたった。この長崎医師も、後日、原爆症で死亡した。

救護所の設置

翌七日早朝、外郭だけ残った横川駅前の三篠信用組合の二階建物に、賀茂海軍衛生学校の救援隊約七〇人が到着し、救護所を開設した。また、山県郡の医療救護班八人も同建物に入り、救護活動を行なった。

同建物には重傷者ばかり約二〇〇人が収容されたが、このうち二、三〇人は屋外にはみ出て、ムシロやゴザの上に寝かされた。いずれも全裸に近く、若い女性や少年が多数見受けられた。

警察隊の指揮する警防団が、トラックで負傷者を郊外へ次々と運んだ。

握りめし配給

警察隊は、信用組合の建物近くの焼跡に派出所を設けた。机も何もなく瓦礫に腰をおろして、罹災証明書の発行や郡部から運んできた麦の多い握りめしの配給をおこなった。真夏の炎天下の輸送で、握りめしはすでに腐りかけていたものが多かったから、一度焼いて食べなければならなかった。

しかし、収容された重傷者たちは食欲がなく、いつまでも頭のそばにそのまま置いていた。この食糧配給もまったく当てずっぽうなやり方であったから、楠木町三丁目のように十日頃から配給された所もあるし、十五、六日頃から二週間ばかり弁当が配給された所(楠木町二丁目)もあった。

死体の処理

このような状況下で、陸軍船舶部隊の兵士や郡部から出動した警防団の手によって、残骸で埋まった道路の啓開や無数に散乱する死体の収容・処理がはじめられた。焼跡の中で焼く死体は異臭を放ち、ひどく鼻を衝いた。

死体の収容・処理作業は、おおむね七日ごろから始まり、十二日ごろに終了した。横川駅東プラットホームも死体収容所と化し、身元不明の数十体が置かれてあった。

信用組合に収容した負傷者も大多数が死んでいったが、身元不明が多く、一日間焼かないで探索者を待った。

救援隊の携帯医薬品はたちまち底をつき、多くは治療らしい治療も受けないまま、苦悶のはてに死んだ。

八日ごろから、三滝町の現在火葬場のところや、三篠国民学校のグラウンド、山手川の河原、大芝公園の東河原などでも火葬がおこなわれた。

このほか、焼跡のあちこちの空地や鉄道沿線の両わき、あるいは三滝山や打越町の山ふもとなど、到る所でおこなわれた。

死体は来援した警防団員によって、最寄りの場所に運ばれたが、身元の確認ができた者はわずかであった。身元不明の死体は、数体を一まとめにして焼いたが、取扱った数は非常に多く、確実な数はつかめていない。

ただ、楠木町二丁目付近の死体は身元不明者がなく、それぞれの縁故者が処置したから、集団的に火葬がおこなわれるということはなかった。同町三、四丁目付近の死体は、川土手で若干火葬した者があった。

大芝町では、町自体の者でなく、他から逃げて来た兵隊や市民の死体が多く、河原や川土手で火葬した。

三篠信用組合の建物から約三〇メートル離れた焼跡では、陸軍の兵士が簡単なテントを張って、横川駅前一帯の死体を集めて焼いており、モウモウたる煙の絶えまがたかった。

幽鬼の世界

八日ごろになると、焼跡の夜は暗く、もの音なく、余燼の煙が力なくただよっていた。そして、遠く近く一面にうす紫の燐の燃えるのが眺められた。

救護班として出動した賀茂海軍衛生学校の生徒野呂昭夫練習生は、この陰微な夜の光景を、生きてふたたび見ら

れない幽鬼の世界であったと報告している。

このような夜、死体を焼きつづけている火が、時々、パッと赤く燃えあがり、それと共にジリジリと焼ける脂の音が、無気味にきこえた。そして、鼻をはげしくつく異様な臭気が暗やみの底を這うように流れてきた。

慰霊祭

九月一日、三篠信用組合内に西警察署が設けられたが、その裏の広場で、十五日に三篠連合町内会主催の慰霊祭が執行され、多くの遺骨を、広島別院の供養塔に安置した。

各町内会の機能

被爆後の各町内会の機能その他の状況は、次のとおりである。

町内会名	説明
横川町一丁目	山本豊松会長は、佐伯郡宮内村に疎開していたが、被爆後二、三日目から、連日町に帰って来て、とどこおりなく事務を執った。
横川町二丁目	岡村清一会長は負傷して安佐郡祇園町に疎開したが、被爆一週間後、疎開先から通って、三篠連合町内会の会務と、同町内会の運営にあたった。
横川町三丁目	橘高基助会長は、一家が故郷に避難して復帰しなかったから、被爆後の事務は矢野一徹が処理した。
楠木町一丁目	辻国一会長は、安佐郡祇園町に隠退したので、戦後は住田稔が町内会事務をおこなった。
楠木町二・三・四丁目	被爆後・町内会としての機能は停止した。町民全員が多かれ少なかれ負傷したため、町としての対策もたてられなかった。
三篠本町一丁目	森井賢雄会長は・自宅(寺町)で爆死したから、代って大塚十次郎が町内会の事務を行なった。
三篠本町二丁目東	被爆時、当初は福島喜代槌会長と一〇戸ばかりの町民が共同炊事をしていた。買出しに行く者を当番できめて、配給物の不足を補った。
三篠本町二丁目西及び三丁目南・北	町民心大部分は避難先にとどまり、バラック小屋の建築材料が入手できた者が帰って来て、隣組を作った。復帰者が増すにつれ隣組も増して町内会が復活した。
三篠本町四丁目	一部焼失なので、町民は他に避難しなかった。したがって町内会の機能もあまり支障を生じなかった。配給物資も少量ながら順調に配給された。
三滝町	一部焼失なので、町民は他に避難しなかった。したがって町内会の機能もあまり支障を生じなかった。配給物資も少量ながら順調に配給された。
山手町	一部焼失なので、町民は他に避難しなかった。したがって町内会の機能もあまり支障を生じなかった。配給物資も少量ながら順調に配給された。
打越町	安田新七会長が引退したので、被爆後は岡部伝一が町内会の事務を代行した。
大芝町	町民は自分自身の事だけで、手一杯であったから、町内会としての活動というものはあまりしなかった。
新庄町	町民は自分自身の事だけで、手一杯であったから、町内会としての活動というものはあまりしなかった。

九、被爆後の生活状況

(南部地域)

地区南部の全焼地帯は、一時無人の焦土と化した。火災がおさまると、わが家の跡に帰って来た人が、わずかながらあった。

焼け残った材木やトタン板を拾いあつめて来て、コジキ小屋のようなバラックを建てて入ったが、床にはムシロや菰など捜して来て敷き、食器も拾って来た空かんなどを使った。その日々は、まったくただ露命をつないでいるというだけの状況であった。

焼跡には、雑然とした物の残骸の下敷きになっている多数の死体をはじめ、斃死した馬などもそのままになっており、異臭紛々、たちまち八工の大群が発生した。九月初めごろ、進駐軍が飛行機で全市にわたってDDTを散布してから、ようやく減少した。

食糧は、前述のとおり安佐郡や高田郡からにぎりめしが運びこまれ、それによって、被爆後の五、六日間をすごした。十二日から三篠信用組合内に駐在する西警察署において、一世帯二日分ずつの主食と少量の野菜の配給がおこなわれた。

しかし、配給とは名ばかりで、それだけでは餓死を待つばかりであったから、焼跡や近くの山地や川べりに生えている雑草や、農家に行って分けてもらったカボチャや芋づるなどを、配給米にまぜて食べた。米の粒の方が少ないご飯であった。

のちには、江波町で売り出された雑穀と雑草をつきあわせた「江波だんご」を買って食べ、空腹のたしにした者も多かった。

このだんごも、長い行列をつくって待たなければ買えなかった。

被爆前に防空壕や地下に埋めておいた米や醤油などは、実に貴重な物資で、少しずつたしなんで使った。

終戦になってから、軍用物資が僅かながら配給された。透けて見えるような木綿の薄い布地や、軍服・袴下・ジューパンなどであったが、何人かに一つの割当てであった。

夜は灯火がなく、まっ暗であった。

焼け落ちている裸電線を使い、遠くの電源につないで、点灯しているバラックもあるにはあったが、一般的に点灯されたのは、八月十五日ごろからであった。それまでは、配給された一本の口ウソクを頼りに、細々とたしなみたしなみ使い、無くなると焚火をして明かりを取るか、なるべく早く眠るようにした。普通の神経ならば、一時間も過ごすことのできない死の世界であったが、原子爆弾の惨禍に打ちのめされた罹災者たちには、焦土の荒涼とした夜の暗黒など、もの数ではなく、漠とした虚脱状態のなかに、不安感も緊張感も忘失していた。

六日当日、安全地帯に避難した人々は、なかなか焼跡に復帰してこなかった。住むに家なく、近親者もなく、また収入の道もなく、身体の健康も回復せず、生活条件のすべてが、徹底的に破壊されてしまったのが、その原因であった。

郡部へ疎開していた学童たちは、両親や縁故者の避難先が判明し、連絡のついた者だけが、そのもとへ引揚げていった。しかし、少数の学童は、家族が焼跡に復帰してから、戻って来た。

中には、家族や縁故者の方から疎開先に連れに行つたのもあったが、疎開先で待っていた子どもは、迎えを見ると、抱きあってよろこび、ともどもに泣いた。そして連れ帰られた焼野原のバラック小屋は、僅か三畳敷きの広さに、七人もが寝るといふみじめな生活であった。

八月下旬から九月初めにかけて、横川町三丁目の信用組合の周辺に、主として食べ物の闇市ができた。福島町あたりから牛の臓物などが売り出されたのも、この頃のことである。

横川には、戦前からキリンビールの出張所があったが、そこで午前午後の各一時間ぐらいずつ、ビールの立飲みがはじまり、進駐軍の兵士も罹災者も一緒になってならんだ。

(東・西部地域)

焼野原となった楠木町跡に、被爆二日目に井出口某が、重傷の家族をかかえて帰って来た。やはり焼残りのトタンなどでバラック小屋を建てて住んだが、食糧はなく困窮をきわめた。空腹に堪えられず、死んで池に浮いているコイを焼いて食べたりしたという。

十日ごろから、崩れかけの防空壕や焼トタンバラックを建てて、ぼつぼつ復帰しはじめたが、復帰者の多くは、先祖代々からの土地所有者で、借家人はほとんどいずれかへ転居した。

ここもまた八エが大発生し、まるで黒豆をまいたように群がって困った。

生活物資 - 特に主食は、配給米が唯一の頼りであったが、最少限度の量もなく、疎開して辛うじて助かった衣類などを米と交換したり、高価な闇米を買ったりしなければならなかった。夜は灯火なく、早く寝てしまうよりほかなかった。バラックにやっと電灯がついたのは十月末から十一月へかけてであった。

その間、疎開していた学童を迎えに行き、焼跡に連れて帰ったが、学校の再開もおぼつかないことであった。

三滝町・大芝町・新庄町、および三篠本町四丁目一帯は、焼失をまぬがれたうえ、農家が多かったから、きびしい経済状況ながらも、食生活は比較的恵まれていた方である。

この地区の八月末の各町世帯数は、つぎのとおりである。

町名	世帯数	町名	世帯数	町名	世帯数
横川町一丁目	103	三篠本町三丁目南	55	楠木町四丁目	115
横川町二丁目	100	三篠本町三丁目北	60	大芝町	280
横川町三丁目	85	三篠本町四丁目	150	三滝町	320
三篠本町一丁目	100	楠木町一丁目	107	打越町	325
三篠本町二丁目東	40	楠木町二丁目	115	山手町	142
三篠本町二丁目西	38	楠木町三丁目	106	新庄町	60

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月の暴風雨と十月の豪雨によって、罹災者はまた大きな打撃をうけた。

九月十七日の台風のととき、大芝堤防が決壊して、三篠地区は打越町・山手町を除く一円が浸水し、思わぬ悲劇を生じた。

浸水家屋は九五%で、横川・打越・三篠本町一、二丁目付近は、水深一メートルから一・五メートルに及び、完全な床上浸水であった。焼失をまぬがれた家も、屋根の損傷がひどかったから、雨もりはげしく坐っている所もないありさまであった。素人造りのトタンバラックは、トタンが吹きとばされたり、小屋そのものが倒壊したのもたくさんあった。防空壕の中やバラックの片隅に収めていたとっときの家財・衣類・ふとんなどが、汚水につかってベトベトになり、使用できなくなった。

楠木町四丁目の国民学校分教場(今の順覚寺)に、疎開先から復帰した学童が四人ばかりいたが、台風のため建物が倒壊して死亡した子がいた。

また大芝町でも、疎開しなかった二、三〇人の学童がいた分教場の被害が大きく、二、三人負傷者を出した。

十月の豪雨のとき、戦災につぐ天災に打ちひしがれた罹災者たちは、被爆してひどく破碎されながらも、幾つかの教室が残った大芝国民学校へ避難して、ひと夜をあかした。

しかし、この洪水が不衛生な焼野原の汚物を、あらかじめ瀬戸内海へ運び出したから、一見さわやかな秋が急に訪れたように思われた。

学校再開

このころ、疎開から帰った児童や残留組で生き残った児童を集め、三篠国民学校は九月半ばに、大芝国民学校は十月に、それぞれ青空教室で授業が再開された。

商店建つ

二十年十二月ごろから、衣料品店・飲食店・日用雑貨店・八百屋などの小さなバラック店舗が建ちはじめた。

これらの商店は、当初、横川駅を中心にしてできたが、二十一年になると更に発展し、被爆後、半年から一か年のあいだに、順次、横川町一円、楠木町・三篠本町一帯へと経済活動をひろげていった。

復帰者増す

復帰者も次第に多くなり、焼跡に点在するバラック小屋の数もふえて、二十一年五月、市役所の復興局建築課から鉄板一、〇〇〇枚余の配給があった。被爆直後の台風のとき、夜どおし必死で、吹きとばされないように押さええていた焼トタンも、これでようやく張りかえることができた。

一、地区の概要

町内会別要目

この地区は、己斐東本町[こいひがしほんまち]・同中本町[なかほんまち]・同西本町[にしほんまち]・同東中町[ひがしなかまち]・同西中町[にしなかまち]・同上町[うえまち]の範囲とし、爆心地点からの至近距離は、己斐橋西詰めで約二キロメートル、もっとも遠い地点は、己斐上町三区字国宥で約五・二キロメートルである。

己斐地区は国道沿いと、山間部のひらけた地区を除いて、ほとんどが山地である。この山間部は、戦時中、市内の工場や市民が、疎開先として多く利用した。

己斐は、茶臼山城跡をはじめ、昔から市の西の玄関として重要な位置を占め、旧国道に沿って栄えた。戦後、山地一帯に閑静園・緑ヶ丘・ふじハイツなど大規模な住宅団地が造成されつつある。

新修広島市史に「己斐の花卉・盆栽・植木の歴史は古く、造園の技術とともに、家中屋敷や町家の需用にこたえて発展している。」とあるが、戦争になるまでは、花売りが「ホウ、ホウ」と呼びながら町筋に毎日出て親しまれた。従来、この伝統的な産業を中心にして、人口が密集していたが、原子爆弾による焼失からは辛うじてまぬがれた。被爆直前の建物総数は、一、七六七戸、人口は七、九四七人で、各町内会の要目は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
己斐東本町	203	226	1,289	和田満苗
己斐中本町	186	184	850	井上忠一
己斐西本町	248	250	900	井上陸松
己斐東中町	745	745	3,458	(兼連合町内会長)川本精一 藤田儀三郎
己斐西中町				
己斐上町	385	385	1,450	土井卯一

地区内に所在した学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
己斐駅	己斐中本町	己斐信用組合	己斐東本町
日本通運(株)己斐支店	己斐中本町	芸備銀行己斐支店	己斐中本町
己斐郵便局	己斐東本町	NHK広島放送局疎開倉庫	己斐字百花園
三菱造船疎開工場	己斐柚ノ木谷	蓮照寺	己斐西中町
三菱造船訓育課	己斐東本町花市場内	善法寺	西本町
東洋製缶疎開工場	三谷	光西寺	上町区
己斐国民学校	己斐上町	旭山神社	己斐西中町
広島花市場	己斐東本町	広島己斐園芸農業協同組合	己斐東中町
広島印刷株式会社	己斐上町区		

二、疎開状況

人員疎開

この地区は、市の中心部からはずれていたもので、人員疎開も特別な事情のある人を除いて、大部分が実施せず、町内にとどまっていた。

物資疎開

物資の疎開についても、地区内から他へ疎開する者はなく、市の中心部からこの地区へ物資を疎開して来る者が多かった。

また、地区内の山林地帯には、軍需工場や軍部が諸物資・諸施設などの疎開をおこなっていた。

学童疎開

学童疎開では、昭和二十年五月十二日、広島駅前広場において、己斐国民学校集団疎開児童九六人の壮行式が、市主催で挙行され、午前八時三十分発の列車で出発した。

疎開先は、世羅郡東村国民学校(現甲山町)および同郡大見村国民学校(現世羅町)であった。この入村式と入学式に、己斐連合町内会長川本精一が現地に出向いて参列した。

三、防衛態勢

防空訓練

市中心部や、その他の地区と同様の訓練を実施し、戦争末期になると三日にあげず行なった。待避壕造りを奨励し、バケツ操法・竹槍訓練などで決戦態勢に備えた。また、貯水槽・防火用器具の充実にも意をもちいた。

特に、山林地帯には、三谷(字名)に横穴式防空壕を、町内会費で二か所築造した。いずれも馬蹄形式で、一か所に約三〇〇人収容できる大規模のものであった。

国民義勇隊

昭和二十年五月二十二日、国民義勇隊の編成に着手し、五月二十七日には編成届を提出、五月三十一日、己斐国民学校において結成式を挙行した。結成式には、市長代理谷山振興課長が列席し、約一、〇〇〇人が参列した。

四、避難経路及び避難先

この地区では、特に避難を想定せず、むしろ、市中心部方面の被災町の受入れの準備として、己斐国民学校を整備した。

五、所在した陸軍部隊集団

茶臼山に高射砲陣地(部隊名不明)があった。また、己斐西中町蓮照寺及び旭山神社に部隊が駐屯していたが名称・人員は不明である。

このほか、己斐国民学校内に陸軍糧秣支廠が疎開駐屯していた。

六、五日夜から炸裂まで

前夜

五日午後九時二十七分、空襲警報が発令されたので、町内会幹部や警防団員は、灯火管制、防空壕待避などの指揮をとり、警備につとめた。

六日早朝、解除になったので、警備員六、七人を残して、他は帰宅した。町は平常と同じような状態に復し、前夜来からの緊張から解放されていたところへ、原子爆弾が炸裂したのであった。

敵機目撃

上空侵入の敵機が目撃者もあり、原爆搭載機の僚機の爆音を聴取したという町民もいるが、はっきりした状況は判らない。

疎開作業への出動

建物疎開計画について、かねてより陸軍糧秣支廠の依頼で、源左衛門橋から八幡川橋までの道路を拡張して、国民学校の下(現在・市立己斐保育園)の県道に接続する計画の解決が迫っていた。

それで拡張にともなう立退きとか、土地提供の問題を、八月三日己斐国民学校において、土地家屋の所有者藤田儀三郎ほか三三人と、慎重協議の結果、これら該当者の意見がまとまり、すべて軍部および市当局に一任することにして解決した。

そこで引続き調査をおこない完了したときに、原子爆弾に遭遇して中止された。

市中の家屋疎開作業への出動については、己斐地区は八月一日から毎日三〇〇人ずつ、出動人員延べ二、〇〇〇人を、中島地区へ出動するよう当局から要請を受けていた。

これに応ずるためには、出動人員の割当名簿の作成をして、手配しなければならなかったが、時間的に一日から出動できるような態勢を整えることができなかった。それは、四日に戦没者の己斐町葬を営む準備に追われていたことと、引続く空襲で、町内会幹部も疲労して執務が渋滞していたからである。

ところが、四日の朝、このことについて軍部側が、己斐連合町内会長宅を訪れ、強硬な態度で非協力だと責めたので、六日から必ず出動するよう手配すると契って、会長は軍部の了解を得た。

そして六日をむかえたが、この手配もすることができず、作業出動は中止となったのであった。

七、被爆の惨状

廃屋と化す

この地区は市内中心部ほどのことはなかった。しかし、倒壊した家屋が一〇数戸あり、たとえ倒壊しなくても爆風圧による損傷は大きく、廃家同様の被害をこうむった。

炸裂後、まもなく火災が発生し、山林も燃えだした。省線から東側の市街地の火災が全面的にひろがっていった。全焼家屋は八〇数戸に及んだが、地区警防団員七、八人の必死の消火活動で火災の拡大が防止できたことは、大きな功績であった。

原子爆弾炸裂の衝撃で、いちじ山間部へ避難していた者もあったが、すぐに帰ってきた。

己斐は、市の西方郊外(佐伯郡方面)へ通ずる主幹道路があるので、市中から避難者が殺到して混雑をきわめた。なお、地区内の全般的な被害は、次のとおりである。

町名	家屋被害(約%)					人的被害(約%)				橋梁被害
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無事	計	
己斐町	10	40	50		100	3.2	1.2	95.6	100	己斐橋・損傷はあったが通行に支障なかった

火災発生炎上の状況

また、炸裂後の火災発生炎上の状況については、和田満苗の体験によれば「このとき一番先に燃えだしたのは、東本町のマスミ屋で、倒壊している二階のひさしから燃え出した。その家の下には、子供が下敷きになっている。ところが、子供を助け出そうと思っても一人ではどうにもならぬ。己斐消防署員の応援を求めため、署まで行ったが署員は一人もいない。警防団詰所にいた六、七人の応援をたのみ、手押しポンプを持ち出し、最初の場所へ帰った。そのときマスミ屋の東方も盛んに燃えていたので、それどころではなく、無我夢中で消火にあたった。そのかいあってか、午後二時ごろにはだいたい鎮火したが、なお残火がくすぶり続けていた。完全に消火作業を終ったのは午後六時ごろであった。」という。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	終息の時刻
	場所	時刻		
己斐町	己斐東本町(マスミ屋)	およそ午前八時三十分ごろから	各所に点々として火災が発生。東本町は集中的に燃え、中本町、中町、上町(山間部が多い)などにも全焼家屋がある。	およそ午後二時ごろ

黒い雨

炸裂後まもなく黒い油よりの雨がバラバラと降っているうちに、まれにみる集中豪雨と化し、午前十二時まで降り続き、山林の火災が消えた。この雨は、安佐郡祇園町山本から、山手町・己斐町・古田町・井ノ口町の山の手一帯にかけて降った。

諸現象

(イ)放射能熱線によって、屋外にいた者は火傷した。また、西北にあたる山間部(己斐上町)の己斐国民学校は、爆心地から約三キロメートルはなれているが、その校庭にいた者も熱線によって火傷した。

(ロ)自然着火現象としては、爆心地から西方約二・五キロメートルはなれ、周辺を山にかこまれ、南北にむかった谷で、東方は山でさえざらされている家屋(川本精一宅)で、炸裂後・窓のカーテンが燃えだした。己斐東本町の火災現場から約三〇〇メートル離れた場所であり、熱線による自然着火であったが、ただちに消しとめて大火に至らなかった。

(ハ)また、山の高所に登ってみると、山林が所々で燃えているのが見られた。

(ニ)己斐地区は爆心地から西方約二キロメートルから五・二キロメートルの圏内にあるが、爆風による影響は大きかった。爆心地から約三キロメートルまでの地帯は、家屋のほとんどが大破した。または、それに近い損傷を受け、中には倒壊したものもあって、被害はかなり大きかった。

被爆後、市および専門家、銀行などによる家屋の被害程度を合同調査したが、調査結果では、己斐国民学校から下手一円の各家屋は約七〇%の被害程度であって、地区内全体としては平均約五〇%の被害であった。

軍人谷にて

安部アヤ子

一九四五年八月六日、その日も朝から良く晴れたお天気でした。空襲警報解除になったのは午前七時過ぎ頃ではなかったかと思います。当時、夫と私と子供三人は夫の実家の己斐におりました。姑と弟嫁英子さんとの七人暮らし、夫の兄と同じく第二人は出征していました。

己斐軍人谷と言われるこの谷は、昔から軍人が多く住み、そのために地名になったと姑からよく聞かされてきました。山の緑の樹々に囲まれた細い道に点々と家があり、姑の部屋の庭に立つと左は広島市内、右は遠く瀬戸内海の景色が美しく見えました。四季の変化をはっきりとしめし、特に冬の雪景色は名画を見るようでした。

警戒警報解除を聞いて、今のうちにと虫のついた配給米を仏間(仏だんのある部屋)に広げて陰干しをしたのでした。夫は私に「今日は少し早い用事があるから」と、職場に出かけました。何時もよりわずか一分早いだけでしたのに、そのために命拾いしたのでした。長男重雄(一一歳)は己斐国民学校に登校、長女マチ子(七歳)は学校を休ませていました(低学年はほとんど授業になりませんでした)。水道はついておりましたが、その頃には水も出な

くなり、夜中にときどき思い出したように、チョロチョロ音がするばかりでした。私はマチ子に、

「良坊の(生後五二日)お守りをしていてね。」一言言ってバケツを持ち、英子さんと隣に水を汲みに出ました。

「お早うあります。」

声は、山の奥の岩田のおじさんでした。肥桶をかついでいましたがふと立ち止まり、手をかざして空を眺めている姿を目にとめながら英子さんと私は隣との境のくぐり戸を開けました。「奥さん恐れ入ります。またお水を分けて下さい。」と声をかけると、窓から顔を出した奥さんは、「お日より続きで井戸に水があるでしょうか。スイッチを入れてみます。水がないとモーターがから廻りしますから、水がないようでしたら三時間程待てば湧いてきますし、遠慮なくどうぞどうぞ。」と言ってくれました。私は礼を言い、妹がバケツに汲みそれを私が受け取った時でした。パチッと音がしました。青い光が眼を射しました。

「あら、ヒューズが飛んだ。」

妹と顔を見合わせた瞬間、ゴオーと物凄い地響き。続いて頭の上に落ちる屋根瓦と板切れ。私は吹きとばされ、下駄のはなおが切れて、横倒しにころげたのでした。爆発かしら、そんな筈はないと思ったりもしました。周囲が黄色く霧のようなホコリで眼を開けていられません。人声もなく静かな瞬間でした。(後でわかったのですが隣の奥さんは、額と首からのどにかけて大けがをしたのでした。二メートルぐらい離れていた英子さんは無傷でした。) 私が地面を這いながらくぐり戸をぬけ、家に引返そうとした時、家の土蔵の壁が崩れおちてきたのでした。壁にたたきつけられながら下敷になったら生命がないと、とっさにそばの柿の木につかまり、ヨロヨロと立ち上がりました。近所に爆弾が落とされ爆風かもしれないと思いながら、我が家を見たのでした。そして自分の目を疑いました。廻り廊下のガラス戸がはずれ、目茶目茶になって外に飛び出ているのです。その辺一面にガラスの破片と屋根瓦が飛び散り、天井の板ははがれ、釘をつけたまま一枚一枚部屋一杯にブラ下がっていて、畳ははね上がっているのです。ハダシのままの姑が、顔から血を流して恐怖のため荘然自失して立っている姿。その時、シミーズ一枚の長女マチ子もハダシで

「おばあちゃん、おばあちゃん。」

としがみついたのでした。恐怖で夢中の姑は、孫のその手を突き離して、よろめきながら防空壕に這入ったのでした。時間にして五秒か一〇秒のできごとだと思いますが、強烈な印象として私には忘れられません。突き離された娘はひざをついて泣き出しました。私は怒りがこみあげてきました。けれど、それは悲しみとなり絶望と変わったのでした。(その後、人間不信は、長い年月私を苦しめたのです。姑をおいつめたものが、戦争という状況にあったと気がつき、それは戦争へのにくしみと変わりました。)' マチ子おいで、泣きなさんな。ズキンとモンペはどうしたの。早くするのよ。良坊は何処においたの。」おびえた娘は頭をふるだけでした。

「足が痛い。ガラスがささったの。」

よく見ると足をくじいているらしく、「痛い痛い。」と言うばかりです。

その時、

「裏に火がついたようー、早く来て、誰か早く消して！」

英子さんの声がします。私は狂ったようになりました。

「赤ん坊はどこ、良坊はどこに寝かしたの。奥のカヤの中、茶の間なの、早く、はやく、マチ子言ってちょうだい。」

家の中に入りたくとも、天井からブラ下った釘のついた板をのけなければ、入口がないのです。一枚一枚ほうり出しながら、良坊はどこかと必死でした。とばされ、投げ出された物の中に、柱時計が八時十五分で止まっているのが目に止まりました。壁とガラスをのけて探している私に、遠くで赤ん坊の泣く声が聞えます。

「お母ちゃん、茶の間にねかしたの。」

マチ子声です。茶の間のテーブルに落ちている土とガラス、そして板をのけたのでした。テーブルの横にいつも寝かしておくのですが、そこには大人の頭より大きな石が一つ落ちていました。もし赤ん坊がここに寝ていたらこの石でつぶされていたでしょう。

「いないのよ。」

私は叫びました。また、声がして

「粉ひきうすのそばに寝かしたの。」

部屋のすみの壁土とガラスの落ちている天井板をのけました。赤ん坊の泣き声がします。ゴザをそっと取りまし

た。良坊でした。顔はススと壁土で真黒になり、おでこに大きなコブが一つ。大きく口をあけて泣いていました。口だけがとても赤く、私の目にうつりました。「泣いているのは生きているからだ。ほんとうに生きている。」私は抱きあげました。どのくらいの時間が経ったのでしょうか。私は赤ん坊をおんぶして、娘には防空用具をつけ、痛む足に小布を巻きつけしっかり手をつないで庭に立ちました。夫と長男はどうなったかと思いながら、次第に暗くなる空に眼をやった時、真黒なかたまりの不気味な形をしたキノコ雲をみたのでした。山の小道には、岩田のおじさんのかついでいた肥桶がころがっていました。

話し声がしてきました。

「山は大丈夫だろう。」

一二、三人が山を登って来たのです。白くなった髪、恐怖と疲労の顔、顔。

「休ましてつかあさい。」

と廊下に身を投げるように、腰をおろすのでした。話をする人もなく、誰れかが「今何時かのう。」と言うのですが、返事をする人もいません。けがのない英子さんは姑のそばについていたのでした。配給の大豆が炊いてあったのを思い出し、「英子さん、大豆でも食べて元気をつけましょうよ。」と私は台所のカマド(カマドはこわれずに、仕かけてあった大豆のお鍋は、ふたもとれないで安全でした)から大豆を少しずつ分けたのでした。

「有難う有ります。」

一粒一粒を口に入れてかみしめていると、みんなは、少し落ち着いたようでした。ボソボソ話をしているのを聞いていると、ほとんどの人が福島町方面から逃げて来たのでした。これから先、どうしていいか解らないのでみんな不安なのでした。

そのうち目まいがする、頭が痛い、と言いだす人がでてきました。

「それでは己斐国民学校に行ってください。非常用の薬があるはずですよ。こんな時ですから、お医者もいるでしょう。食べるもの、配給もするでしょう。」隣組長をしていましたので非常の場合は、己斐国民学校に行くことを私は思いだしたのでした。

「では、そうしょうか。」

と三人四人と腕を組んだりして助け合いながら、礼を言って山を下り、去って行きました。「こうしていても、また空襲になるとどうしようもないから、山の奥の岩田の防空壕に行きたい。」と姑は言うのでした。私もそれを気にしていたので、

「英子さん、岩田へ逃げて。」

としようと

「お姉さんはどうするの。お姉さんも行って下さい。」

と言うのでした。英子さんは、当時二〇歳位でキビキビとよく働くお嫁さんでした。

「あたしはここに残るわ。お父ちゃんや重雄も、この山の家を日当てに帰って来るでしょう。ここまで火がきたら、その時はなんとかするつもり(自信はなかったのでした)私だけでも、ここにいてやりたいの。」

姑は大切な物を入れた袋を持ち、杖をつき、足をひきずるようにして歩き始めました。英子さんは振り返りながら、「それでは、マチ子ちゃんだけでも連れて行きましょう。」

と言ってくれました。私は首を振りました。

「この子は歩けないし、ここにいる方がいいの。」娘の頭をなでながら、孫の手を払いのけた姑を思い出し、涙が出たのでした。そうして、同時に死を覚悟したのでした。

(壁が崩れ落ちた時の腕の傷が痛み、紫色になり、手が動きませんし、疲れで限界にきていました。)

その時、小道を急いで帰る夫の姿が見えました。後には一七、八人の人たちが一緒に登ってきます。

「お父ちゃんが帰った。ああ、矢張り帰った。」娘と私は夢中で手を振りました。姑は、夫に気がついたのでしょう。家にひき返してきます。夫が連れて来た会社の人たちは、手足に負傷したり、やけどしていました。その中の女子学生七、八人は顔のやけどだったように覚えています。

夫は、

「うちにある薬を全部出しなさい。」と言い、やけどの手当て、傷の手当て、おばあちゃんには注射(ビタミン)をしたのでした。会社の人たちが三人、四人と組になって帰りました。その後、一息ついて夫は横になりました。

「ああ苦しかった。がまんをしていたがもう起きていられない。医者をつたのむ。」

それから長い病床生活がつづいたのでした。

話は前後しますが、夫がけが人の手当てをしている時に、激しく雨が降りました。黒い雨です。屋根は穴だらけなので、家の中も外と変わりなく降りました。姑の部屋はどうやら雨もりのする程度なので、姑と娘を寝かしました。ほかの所はけが人で坐る所もないので、私は赤ん坊をおんぶして英子さんと、台所の戸棚に肩を寄せ合い、雨をよけながら、

「何故生き残ったのかしら。もうどうなってもいいわね。」と語りあいました。

「重雄ちゃんを探してみましょ。」

と英子さんは山を下りたのですが、やがて帰ってきて、

「どうしても見付からないので、人に聞いたら、どこかよその防空壕にいるらしい。お姉さん、とてもひどいけが人が...。」

と後は口ごもり、泣くのでした。

今度は私が長男を探しに山を下りました。途中、石がきが崩れて通れない所や、家がつぶれていました。道ばたに坐ったり、また寝ている人、山の中腹に小屋を建てようと丸木を組立てている人を見ました。山を降りきって通りに出て、あらためてその凄惨さに目をおおいたくなりました。福島町方面から己斐国民学校に向かう人々の群れ。一糸もまとわない裸の行列でした。髪の毛は焼けちぢれ、皮ふはただれ...。皮がたれ下がり、ヨロヨロしながら、一生懸命に、目的の国民学校へ行くために、黙々と歩くのでした。焼けただれて真赤になった素裸の大きな男の人が、カヤを頭からかぶったのとすれちがいました。また、戸板に負傷した人を乗せて来た人たちが、戸板を道ばたにおいて倒れてしまうのです。それがみんな裸なのでした。私はモンペを身につけている自分を申し訳ないような気になったのでした。

青い顔をした長男の姿を発見した時は夢中で、ただ無事でいてくれたと思うのが精一杯で、言葉もなく涙さえ出ませんでした。

隣組一四世帯でしたが、どの世帯にも行方不明、亡くなった人、けがをしている人が二人や三人はありました。私の家では、動けるのは、英子さんと私と一歳の長男だけなのでした。

近所の越智医院長が駆けつけてくださったのが夕方でした。

「けが人が多くて廻り切れません。」

と疲れきった先生の様子でした。姑と夫の胸にしっぶをしたり、頭を冷やしたりして下さいました。注射が効いたのでしょうか。夫は、

「赤ん坊は大丈夫か。」

「子供になにか食べさせたのか。」

とか心配して聞くのでした。今朝陰干しにしたお米は、壁土とガラスの破片で駄目になり食べられないので、大豆と米びつにわずかに残っていたお米をおかゆにして食べたのは、暗くなってからでした。

この軍人谷は、幸いに火を消すことができましたが、夜になっても赤々と燃え続ける広島市の街でした。何時まで戦争が続くのかしら、病人と三人の子供を考えながら、星の見える天井を見つめ、空襲になっても防空壕には、もう入るまいと思いました。

この山に避難した人たちの話し声と、けが人の苦しむ声、アイゴーアイゴーと歎き悲しむのは朝鮮の人でしょう。深夜の山にこだましています。歎き、悲しみ、怒りが叫びとなっていつまでも続きました。死体の焼ける臭気。恐怖心もなく、私は吐気と腕の痛みにときどき全身にけいれんがおきていました。

良坊が激しく泣きました。やっと身体を起こし、抱きかかえて乳房を口にふくませたのでした。お腹がすいていたのでしょうか。勢いよく吸いしましたが、乳房を離して泣くのでした。お乳は出ないのでした。一滴も出ないのでした。首をふりながら乳房を探して、吸っては離して泣く赤ん坊。良坊は泣き続けるのでした。母親として大切なこと、乳を飲ませることに一日中気づかなかったのでした。私は心から詫言いました。この子のために私はどんなにしても食べよう、草でも木の根でもいいから食べて乳にしなければと心に決めました。良坊の体を軽くたたきながらゆすり、絶望の闇の中で意識がはっきりしてきたのでした。

終戦となり、そして二十年の歳月が経ちました。けれど、私は実感として終戦のけじめがなく今も続いているような気がするのです。

妹のこと

森本英子

八月六日は、朝から太陽がキラキラと輝き、暑い日中を思わせていました。その日は家中そろって屋根なおしをする日だったのです。そのため挺身隊で工場に行っていた私と姉は休みました。妹だけは、母があれほど止めるのも聞かず、また私たちもいらぬ口をはさみ、「喜和子があんなに行きたがっているのだから行かせてやりんさい。」と言ったのが仇になろうとは... (妹は当時女学校一年生)。妹だけが小網町の建物疎開のあとかたづけに出かけて行ったのです。

朝御飯をすませ、父と叔父と屋根屋さん二人は屋根に上がり、私たちは家の中の物をみんな外に出していました。私が祖父から何やら用事をたのまれ、近所の米屋に行き、店の人に用件を言おうとした時です。凄じい閃光が広がりました。私はとっさに奥の米俵が沢山積み重ねてある所にしゃがみこみました。私の下に朝鮮のおばさんがしゃがんでいたのです、その背の上に私もしゃがんだのです。

それからどれだけ時間がたったのでしょうか。真っ暗な中からポーと明かりがさしてきました。この家はずい分大きな家です、メチャクチャにこわれていましたが、私の体には何一つ落ちてはきませんでした。私は裏口があったことを思い出し、そこからどうにか這い出すことができました。埋もれた米屋のおばさんが、必死になっておじさんに助けを乞うておりました。私の下になっている朝鮮のおばさんをよく見ると、額から真赤な血が太く流れていました。私は無傷でした。ようやくにして明かりをたどり、外に出ることができたのです。

と... .. どうでしょう。外に出たら驚くほかないのです。広い道一ぱいに二重にも三重にも、グチャグチャに家が倒れていました。あちこちから子供を呼ぶ声、泣きわめく声、そして頭の先からつま先まで、真赤な血まみれの子、それでなければ煙突から抜け出したように真黒になった人たちばかり、私も全身真黒でした。ただ印象に残っているのは、私の足だけは白かったと思います。その足でピ

ョンピョン兔のようにはねて走って家に帰りました。家に帰ると、父が目の色を変えて私の名を呼んでおりました。

きちょうめんな父は、日頃から肌身離さず警防団の服を身の近くにおいておりました。その時、いつどうして着たのでしょうか、帽子までかぶっていました。それから姉が出て来て「母は先に逃げたから早く逃げよう。」と言って、祖父と父と私たち四人で己斐方面に向かって逃げたのです。逃げる途中、父は警防団の服を着ていたばかりに、あっちからもこっちからも助けを求められ、とうとうはぐれてしまいました。

空も地上も、灰色一色にぬりつぶされた世界、他に色があると言えば、全身血まみれの赤ばかり、お尻にポッカーリと穴があき、中の臓物の見えている女の人の、鼻のプランとたれ下がった人、さもなければ、全身焼けただれ、ジャガ芋の皮がむけてたれ下がっているようなボロボロの皮ふになり、顔も体も腫れるだけはれ上がり、誰の顔だかわからない人々。この生地獄を何と説明してよいやらわかりません。

父をのぞいて、母にも会えない私たち三人は、己斐橋から国民学校の方へあてもなく歩きました。空はすごく暗く、黒い雨が強く体をたたきつけました。道ばたには、市の中心部の方から逃がれて来た大ぜいの人々がいました。全身やけただれた人たちばかりです。中にも疎開あとの片づけをしていた中学一、二年の男の子や女の子の多いこと。もう歩く力もなく、出ず声もなく、軒といわず家の中といわず、ぎっしりと一寸のすきまもなくうずくまり、雨にたたかれようと、声をかけられようと感覚がないのか身動き一つしないのです。姉はいたたまれなくなって、軒からはみ出している中学生たちに、押入れやらタンスから衣類を出して着せてやりました。(家の中といっても屋根がふっとび外とかわりたく雨がふり、家の人たちはみな逃げて、押入れやタンスはこわれ、中のものはグチャグチャになっていた。)

妹はどうしたのだろう。可愛そうにこの中に居るのではなからうか。そしてこの子たちと同じような姿になっているのだろうか。いや妹にかぎりそんなことはないだろう。いいやこの中に居る。こんなことを思いつめながら、私たちは必死になって、みんなの顔を調べましたが、眼は焼けつづれ、風船のような顔や体は、みた同じように見えました。

そのうちに父母に会うことが出来ました。母は妹が己斐国民学校に居ることを聞いて、父と母が学校へ探しに行きました。学校にはやけどの中学生が大勢いたそうです。その中の一人が、

「おばさん、水を一杯ちょうだい。」

と言ったそうです。母が何か水槽のようなものの中に水が一ぱいあったので、手ですくって与えたら、あちからもこちらからもかすれ声で、また声もよう出さず、手をノロノロとさしのべて、

「水をくれ」と言ったそうです。母はそこいらにころげていた洗面器のようなものに、水を一ぱいくんでは与えたそうです。水を飲んだ子供たちは安心したようにぐったり横になっていたそうです。そのうちに、妹らしい子を見つけたので名前を呼ぶと「そうだ」と言ったそうです。父母はどんな思いだったのでしょうか。私たち一家は、己斐国民学校からずっと登った小川のほとりのたきもの小屋を、仮りの宿としました。ガラスはこなごなに破れ、小屋一ぱいに飛び散り、かろうじて雨を防げる程度でした。

ずい分と時間が流れたと思います。どこで拾ったのか、父母が妹を戸板にのせて帰って来ました。私は急いで走って行き顔をのぞき込み、「きわこちゃん、わかる。」と大声で言いました。

「うん。」

と首を振ったので妹に間違いないとわかり、急に悲しさがこみあげ、小屋の隅でワアワア泣いてしまいました。それから藁を積み重ね、妹をねかせ、そのそばへずっとつききりでいました。ときどき「水を」と言うのですが、水を一べんに沢山飲ませると死ぬと思い、少しずつ口の中へ流してやりました。(今思うと、あの時言う通りに水を飲ませてやらなかったことが悔やまれてなりません。)祖父は背中と足に大火傷をしていました。母は頭、腕、首などに打撲傷を負い、みんなそれぞれ大けがをしていました。私と父だけが無傷でした。

だんだん周辺が暗くなり、夜になりました。市中の空が真赤に燃え、一晩中燃え続けていました。

真夜中に、急に妹が

「呼吸が苦しい。呼吸が苦しい。」

と言ったかと思うとグッタリとなり息をしなくなりました。私たちは大声で名を呼びました。みんなが大きな声で泣いて泣いて、その声は、夜のしじまを破り、谷間にこだまし、他の避難した人たちは、みな気の毒そうな目でこちらを見ていました。その中で母が一番苦しみ悲しんだことは、言葉に言い現すことはできません。

まんじりともしなかつたみんなは、あくる朝、妹をかかえて裏山の焼場まで行きました。帰りに学校の近くまで下ってみましたら、なんと、どうでしょう。家々の中や軒先に、昨日と同じようにぎっしりと詰まった大勢の人が一人残らず、みんな死んでいました。

十日ほど過ぎ、私たち一家は自分の家のあった焼跡へ帰りました。そこには焼けただけたタイル張りの風呂と台所が残っていました。そこへ父が木切れや焼トタンを拾って来て、なんとか座を張り、屋根をかき、どうにか住めるようにしました。(以下略)

八、被爆後の混乱と応急処置

救援隊

被爆当日、市西方の玄関口己斐地区は、多数の避難民と救援隊の出入りでゴッタ返した。

被爆当日、夕がたになって、非常用食糧の手配をしようとしたとき、郡部から炊出しされたムスビが、次から次へと運ばれてきた。西玄関としての取りつきに、己斐巡査派出所があったが全壊していたので、堅固建物で藁を敷かれた芸備銀行己斐支店(現在広島銀行と改称)へ搬入した。川本連合町内会長と和田町内会長が警官とともに、これを割当てして、地区内各町責任者を集めて配給した。

また、市中の被災地へも配給するため、川本連合会長が荷車をひいて運んだ。

市中の避難者が、地区内へ多数なだれこんだため、人口が急激に増加したので、配分が複雑化して二、三日間は大混乱に陥った。

応急救護所の設置

当日、炸裂の直後から避難者の行列が、続々と山地にある己斐国民学校へ流れるように押しかけて来た。敵機が絶えまなく来るので、皆、この山間部を目指して避難したのであった。かねてから、この学校を負傷者の収容所として定め、医師八人で応急処置ができるように防衛計画が立てられていたが、避難者のほとんどが負傷者であったから、校舎全部を解放して収容した。

軍医ら来援

この日正午前に、大竹陸軍病院から上方頼巳軍医以下衛生下士官二人、看護婦五人の医療救護隊が到着し、万を越える収容者の治療にあたった。市内の医師は被爆して死亡したり、負傷したりしたため、救援活動ができなかった。

死体の収容と火葬

六日当日から死亡する者が続出したので、その日から死体の収容をおこない、翌七日から火葬をはじめた。火葬は運動場に五〇メートルの釜を三筋掘って火葬場とし、毎日、火葬をおこなった。そのほか川土手や空地など数か所でもおこなわれたが、かねて遺体安置所に指定されていた善法寺(己斐西本町)へ運ぶよう段取りしたが、運搬者がなく、川本連合会長が一人で、遺骨を荷車にのせ、数回にわたって寺へ運んだ。夜になるとますます死亡者が増加して、寺への運搬もできなくなったので、やむなく学校に安置することにした。

火葬の薪には、校舎の天井板をはずしたが、これは焼夷弾が落ちたとき、天井にとどまって火災の発見が遅れてはいけないという理由で、かねて取除くことを指示されていたから、それをこの際にと、取除いて使用した。

死者の氏名

死体の人名確認は、死体の着衣についている名札によるほかなかった。不明者については、性別・推定年齢・遺品などを状袋に入れて遺骨のそばに置いた。ただし、火傷で死亡している者は、顔面が変形していて、年齢の推定もできないのがあった。また、避難者の収容でテンテコ舞いであったから、当日は氏名など聞いて受付けるだけの余裕がなかったのである。だから当初死亡した者で、着衣のない者は不明のまま処理した。やや混乱がおさまってから、氏名を聞いて名札を作り、患者の体につけるようにした。しかし、死期の迫っている患者などは、氏名を聞きとることも出来なかったのがほとんどであった。

己斐地区で扱った死体は、避難してきて死亡した者が約二、〇〇〇人と、応急救護所(己斐国民学校)で死亡した者が約一、〇〇〇人はあったと思われる。後日、学校の再開にあたり、運動場にサツマ芋畑を耕作することになり、教職員や児童が掘り返したところ、焼け残りの人骨や、頭髮、衣服の切れ端などが、多数地中から出て来て、その整理にも一仕事あった。

また、死体の焼却処分をおこなった川土手・空地(主として旭橋西詰の広場 - 某会社の鉄骨など露天集積場)などに広い面積の大きな穴を掘り、一度に数体をまとめて火葬した。各所とも手分けして、逐次火葬したが、後に警防団の援助があって、どうにか片づいた。火葬するときは、木を下に敷き、遺体をならべて油をかけ、火をつけた。そのとき各遺体ごとに名札を竹の先につけたのを立てて区別できるようにした。川土手や空地での火葬においても氏名不詳の者は、遺品と性別・推定年齢などを記したものを同様に立てた。

これらの遺体は、生前から皮膚がくさったような状態であったから、死亡後腐乱するのが早く、ズルズルすべって、手で丁重に処理できないため、担架にのせるときや、穴へ落とすときなど、粗末な扱いになりがちであった。

遺骨は、学校の教室の机の上に、名札とか遺品を入れた状袋と一緒にして安置し、尋ねて来る人のため、識別しやすいように取りはかった。

町内会の機能

地区町内会の機能には支障がなく、被爆前と同様に、対策や処置をおこなうことができた。各町の復旧とか、避難者の救護、及び罹災証明書の発行などで、連日多忙をきわめた。

九、終戦後の荒廃と復興

出入り混雑

地区は罹災程度が比較的軽かったので、特に変わったことはなかったが、全焼地帯に電灯がついたのは約一か月後であった。

復興するのも他地区より早かった。西玄関として省線己斐駅・広島電鉄郊外線西広島駅、及び市内電車の終着点であったから、地方からの乗降客で混雑した。

闇市

これら駅付近の広場にできた露天の闇市場は、連日、利用者で活気を呈した。露天式闇市場は、この地区に出現したのが広島駅前よりも早く、市内で一番最初ではなかったかと言われる。利用者は市内からばかりでなく、郡部からもたくさん集った。

己斐の闇市場は、最初は闇タバコの立売りからはじまり、それが物々交換品(主として軍の放出品)の売買となって、市場的なものに発展移行した。すなわちまず闇市場の出現であり、これが自由市場と称されるようになり、これまで露天であったのが前進して、バラック建ての店舗となって常設化するに至った。

公設市場

常設化の先駆となったのは、昭和二十一年六月二十日、市が公設市場を建設したことによる。その場所は広島電鉄西広島駅の近くで、宮島線の線路東隣の国道沿い西側であった。七戸建二棟・六戸建一棟計三棟が、延長約七

〇メートルに及ぶ細長い鉄板葺平家建で奥行は五・五メートル、間口は五メートルと一〇メートルの二種類が、各棟に混合し、公設市場として発足した。

この計画について、市商工課の記録によれば「戦後経済の混乱期に、市民生活の安定策として、昭和二十一年六月生活必需品市場の目的で施設した。その後、経済状況の推移により、公設市場としての機能を失い、一般店舗住宅と性格を一にした。」とある。

商店街

この公設市場が開設されると、この施設を中心にして、道路の両側に、不法建築の店舗が五〇戸以上も建ち、一躍商店街が生まれた。まもなく映画館・劇場も建築され、にぎやかさが更に加わり、西玄關の役割をもつ繁華街として脚光を浴びるようになった。こうして、広島駅前・横川駅前とともに、急造繁華街が、初期復興の先駆者となったのである。

十、その他

(イ)己斐町は、観賞用盆栽・庭木および植林用苗木の特産地であるが、終戦後、若干の落ちつきを取戻したころから、これらの需用が次第に増加し、戦前よりも活気を呈するようになった。当初は特に生花類が主であったが、これを仕入れた業者は、列車内へ持ち込んで帰る者が多かった。省線己斐駅では、これがため乗降客の混雑が増すばかりなので、花類取扱い業者専用の改札日を特別に設置した。この改札口は、下り線ホーム北側のところに近接している花市場へ直接通じていた。この改札は、良心的に花市場の責任者が当たったが、時宜を得た処置であった。己斐駅が、まだバラック時代の期間であったが、市民の復興意欲を大いに力づけた。

(ロ)被爆後、省線が復旧したと言っても、列車運行が円滑に行なわれず、特に貨物列車は数日間停車したままで、己斐駅構内に滞留していることが多かった。しかも、この貨物列車は、己斐駅構内の北東にある踏切りを遮断して通行ができないままであった。それがため、列車に積みこんである貨物を、夜間に抜取る事件が続出した。当時はまだ防止対策すらできないほど治安が乱れ、市民も不安な状態にさらされたままであった。

そうしたすきに暴力団がはびこるようになり、抜取り事件は絶えることなく増加するばかりであった。ついに、鉄道・警察・民間で防止対策を取ることに、「交通親和会」を設立した。それ以来、三者合同で取締まったかいあって根絶することができ、治安も回復した。

(ハ)昭和二十年七月二日、呉市が焼夷弾による大空襲を受けたが、呉市罹災者のために、にぎりめしの炊出しをするよう己斐連合町内会に当局から命令があった。第一回に米一八〇リットル(一石)、第二回に米三六〇リットル(二石)の割当てを受け、七月三日には、己斐巡査派出所の警官とともに己斐国民学校へにぎりめしを集めて呉市に送った。

供出した各町内訳は、東本町一八〇、中本町一八〇、西本町二三〇、中町七三一、上町三六〇、計一、六八一個で、この炊出し作業は、銃後奉公会・婦人団体の奉仕によっておこなわれた。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

草津本町、草津南町、草津東町、庚午南町一丁目 二丁目、庚午町、庚午中町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、
庚午北町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目

町内会別要目

この地区の範囲は、草津東町[くさつひがしまち]・同本町[ほんまち]・同南町[みなみまち]・同浜町[はままち]・庚午本町[こうごほんまち]・同北町[きたまち]とし、爆心地からの至近距離は庚午北町の己斐川畔(現在・太田川放水路堤防)で約二・五キロメートル、もっとも遠い地点は草津南町の隣町井ノ口に接する観光道路付近で約四・六キロメートルである。

草津町は、昭和四年広島市に編入されてから、市の産業面において、海産物の重要な集荷場として発展し、現在、民営の「広島中央魚市場」がある。

カキは特産で、牡蠣養殖は歴史的にも古く、「延宝年中(一六七五前後)、小林五郎八のたまたま発見した筏立養殖法に始るといわれる。」また、「直接大阪と取引関係を開き、宝永以降(一七〇五ごろ)、大阪の川筋に牡蠣船を出すことを大阪町奉行から特許されて広島牡蠣の名声を高くしていった(新修広島市史)。」という。

地勢的には、やはり藩政時代からの新開によって拡張されたところで、明治三年(一八七〇)に佐伯郡己斐・古江・草津の沖合の干潟に、全国的な凶作による窮民の救恤のため、富商有志が協力して、新田開拓の事業を起して造成された。明治三年の干支によって庚午新開と呼んだのが、「庚午町」の発祥由来であるが、ここは現在、市のベット・タウン的な住宅地区として開けている。

なお、草津沖は、さらに埋立てて拡張されることになり、現在、広島市西部開発事務所が設置されているが、近き将来、大きな飛躍が期待されると共に、むかしからの町の性格も変貌しつつある。

被爆直前の総建物数は約一、六五三戸、世帯数は一、六九五世帯、人口七、三三五人で、各町別の内訳は、次のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
草津東町	326	335	1,535	柳坪東一
草津本町	281	297	1,134	吉本文右衛門
草津南町	345	379	1,577	万谷孫八
草津浜町	340	325	1,495	橋本唯士
庚午本町	182	134	733	安光歳丸
庚午北町	179	225	861	栗栖百太郎

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
草津国民学校	草津東町二五六の二	慈光寺	草津東町
草津保育園	草津東町	芸備銀行支店	草津浜町
魚市場	草津南町	広島信用組合支店	草津東町
豊野神社	庚午北町十丁目	倉本酒造	草津本町
教専寺	草津本町六八九	小泉酒造	草津東町
浄教寺	草津本町六八〇	望月醤油	草津浜町
西楽寺	草津本町五六八ノ一		

二、疎開状況

地区は、中心部から離れた臨海地帯であるし、漁業など海産物関係従事者は、仕事の性質上、地元を離れるわけにできなかったから、人員疎開も物資疎開も、きわめて僅かの人が郊外の縁故をたどって、個々に疎開しただけであった。

しかし、学童疎開は他の学校と同じように実施し、草津国民学校は、昭和二十年七月世羅郡小国村・上山村・吉川村の寺院などへ集団疎開した。一部には個人的な縁故疎開をおこなった学童もいるが、集団・縁故を合計して約四〇〇人余が郡部へ疎開した。残留学童は、地区内の寺や会館に分散して勉学した。

三、防衛態勢

警防団

草津・庚午地区警防団を組織し、川本豊人団長のもとに臨戦態勢をととのえた。諸資材を充実し、訓練演習がきびしく実施された。

戦争末期は一段と演習が強化され、町内会・婦人会・青年団が加わって、総合的な拳町一致の訓練がおこなわれた。

国民義勇隊

昭和二十年六月、警防団以外の諸団体が発展的解散をし、全国的に国民義勇隊が組織されたとき、この地区でも国民義勇隊草津大隊を結成し、大隊長に小川早苗(連合町内会長)、中隊長に各町内会長が就任した。

この新組織によって、各隣組は結束し、防衛・防空・防火態勢を整備、ここに本土決戦態勢を確立した。後、隣接地区の田方町内会が編入された。

四、避難経路及び避難先

市の周辺地区で、危険性は少ないと思われてはいたが、避難場所や経路を、町内会ごとにあらかじめ田方地区が草津南町方面の山林地帯に、避難するように定めていた。家によっては、郡部の親戚や縁故と連絡をとって、万一の場合の避難先に備えていた者もある。

五、所在した陸軍部隊集団

(一) 砲部隊(兵科不明)

草津東町 草津国民学校内に駐屯

隊員一〇〇余人

(二) 高射砲隊幹部候補生教育隊(隊長・長島千訓大尉)

草津海蔵寺の山に設営

(庚午地区内にあったが、昭和十七年の水害後移動した。)

六、五日夜から炸裂まで

空襲・警戒警報については、各機関に依存することよりも、ラジオ、または爆音の直接聴取で、町内会長が判断をし、警報を発令することが多くなった。

こうした状況下で五日夜から、空襲警報発令があり、引きつづき警戒警報発令もあり、それぞれ待機、灯火管制の徹底をはかっていた。

また、各自の家庭用防空壕か、山地部に掘られた防空壕へ待避したりした。中には古田町田方の山地部へ待避した家庭もあった。

午前七時半ごろ、警戒警報が解除され、家に残っていた者も、避難していた者も一様に平常に復帰し、朝の仕事準備にかかろうとしていた。市中への通勤者は、もう出て行ったあとであった。

草津国民学校の分散授業場になっていた地区内の寺院・神社・会館などには、それぞれ学童が数十人集合していた。そして朝の早い農家は、すでに畑仕事に精を出していた。

建物疎開作業

この朝、草津南町から、小網町へ建物疎開作業隊一五六人が出動した。これは、広島市国民義勇隊草津大隊に対し、延べ八〇〇人出動の指令があり、庚午北町が四日、草津東町が五日に出動し、続いて六日に草津南町が出動したものであった。

なお、この地区内における建物疎開は、おこなわれなかった。

七、被爆の惨状

炸裂

八時を過ぎたころ、ある人は敵機か友軍機がよく判らないまま爆音を聞いた。

一瞬、家の隅々まで奇怪な光線が閃いた。同時に、家全体が震動し、ガラスは飛散、戸障子などは吹き飛ばされていた。

道路にいた人は、もの凄い爆風を受け、あわてて路面に伏せたり、防空壕にとび込んだりした。

火の玉

地区の東部の体験者によれば、炸裂のとき、これまでの経験にはなかった異色の、火の玉のようなものが数個、線を曳くようにして眼前を過ぎ去ったという。そして、すさまじい炸裂音を聞いた直後、爆風が襲来し、引きつづ

き二度目の音がきこえ、爆風が再び襲って来た。

草津本町では、東の空を見た人が、大きな真っ赤な火の玉のような雲を目撃した。また畑仕事をしていた人々は、熱線を感じ、火傷をした者もあった。

町内騒然

町内は騒然となった。家から飛び出したほとんどの者が、ガラスの破片で傷を受けており、薄衣に鮮血をにじませ顔面に血を流したりしていた。

家屋の天井は吹きあげられ、屋根瓦は吹き飛ばされ、塀は倒れた。柱と梁との取り付け箇所(ホソ)が離れて倒壊寸前になっている家もあって、爆風が上から覆いかぶさるようにして来たのと、路面から逆に吹きあげたように来たのとあったという。

多くの家々で、ガラス戸の破片が二メートルから四メートル離れたカモイや柱の上方部に深く突き刺さっていたりした。

健難民の殺到

炸裂後三〇分ほどすると、海岸線に沿ってずっと南の、名勝宮島口へ通ずる広い観光道路の上に、罹災した群衆が道路いっぱい溢れるように避難して来た。トボトボと歩いて来る者、トラックで急がしく運ばれる者など、佐伯郡方面へ向って流れ続いた。

髪は焼け、皮膚はむげて無気味に垂れ下がり、全身がただれて赤く腫れあがった半裸・全裸の人々が終日ひっきりなしに通った。

しかし、みんな悲惨な姿、苦悶の相をしながら、それは気味悪いぐらいもの静かな、死の行進であった。

不安高まる

一方、町内の住民の一部では、しばらくのあいだ、山林地帯へ避難した者もあったが、ほとんどが動かず「どうなることか、つぎに何が発生するのか。」と、不安のままじっとしていた。

しかし、市中から逃げ帰って来た人の情報が伝わって、縁故者の安否がまた気にかかって来るのであった。

避難者に状況をきけば、「燃えている。入れない。」との一言のみで、それ以外は語る気力も失っていた。

それでも、市中へたくさん町民が親類知己を探しに出かけていった。探しに出かけるには出かけたが、大半はただ事態の推移に任すほかになく、どうするすべもなかった。

郊外へ通ずる道路という道路は、ついに避難者でうずまった。午後になると更に激しく、旧国道をトラックが、負傷者を満載して、幾台も幾台も西方へ運ばれて行った。その中を逆に東の方へむかって自転車を飛ばす者などが入りまじって、異様な興奮状態が地区一帯に高まっていった。

救護活動

警防団員や町内会役員は、交替で観光道路筋の要所要所に出て、罹災証明書を交付したり、避難者の誘導をおこなって、救護活動を続けた。

己斐川下流(山手川・福島川合流の川筋)には、数々の死体が漂着してくるのが見られたが、夕刻・死体の流れ浮く川を泳ぎわたって帰って来た人々が、草津の町内に詳しい様子を知らせ、一段と恐怖心をそそった。

被害状況

地区は炸裂地点から三キロメートル以上も離れていたが、家屋の被害は全域に及び、草津町でさえ、爆風の被害によって危険な状態になった家屋があった。もっとも炸裂地点に近寄っている庚午本町・同北町などは、草津町にくらべて被害がより大きく、全壊家屋があり、ほとんどの家屋が半壊程度の損害を蒙った。

人的被害も、庚午本町で〇・三%の則死者を出し、負傷者も草津町より多かった。火災の発生は、庚午北町三丁目と同六丁目において、それぞれ一戸が全焼したに過ぎなかったのは幸いであった。

しかし、野積みにしてあったワラとか、下刈した木の束、屋内に吊ってあった蚊帳などに着火したが、すぐ消しとめたため、大事に至らなかったのである。

犠牲者の内訳

草津南町町内会の一般住民と、地区内に居住している学徒・徴用工員など、動員令で中心部の建物疎開作業に出動していた人々、および通勤者・通学生がともどもに、市中で被爆したため地区としての犠牲者数は大きかった。

国民義勇隊草津大隊が、八月十四日正午までの死傷者数を調査した記録によれば、町内居住者死傷者数は総計七九一人、また八月六日炸裂時一時滞在者の死傷者数は総計六四四人、総合計一、四三五人に及んでいる。この内訳

は、次のとおりである。

町名	町内居住者死傷者数(人)					八月六日炸裂時一時滞在死傷者数(人)					総計
	死亡者	重傷者	軽傷者	行方不明	計	死亡者	重傷者	軽傷者	行方不明	計	
草津浜	26	32	41	16	115	14	27	41	-	82	197
草津南	157	30	50	48	285	13	25	45	-	83	368
草津本	16	16	23	14	69	16	38	190	-	244	313
草津東	44	39	24	34	141	14	40	46	-	100	241
庚午・庚午北町一円	20	29	114	18	181	29	36	49	21	135	316
合計	263	146	252	130	791	86	166	371	21	644	1,435
備考	(イ)死亡者とは八月十四日正午までに死亡した人と即死者を含めた総称である。 (ロ)町内居住者とは町内で世帯を構成、生計を維持していた者(八月五日現在)。 (ハ)一時滞滞在者死傷者数とは八月五日までに、親戚・知人を訪れて宿泊し、八月六日に炸裂時まで要務のため市中へ出て死亡、または負傷した者。										

この調査の範囲は、草津連合町内会の区域内の居住者とか一時滞滞在者が、建物疎開作業に出動するか、または通勤・通学生および用務のために市中に出ていて原子爆弾に遭遇し、即死とか重軽傷を負った人のみを調査したものである。

すなわち、常住人口の一〇・八パーセントの町内居住者が死亡または負傷し、一時滞滞在者も常住人口の八・八パーセントに相当する死傷者があったことを知ることができる。

この調査後も、つぎつぎ死亡者が出た。原爆症と言われる病気によって、現在でも犠牲者が出ているが、当時、縁故者の死体捜索などで市中へ出たために、第二次放射能によって原爆症にかかり、死亡する者も少なくなかった。昭和二十年十二月、合同慰霊祭を執行したとき、草津・庚午地区内の町民だけで、約七〇〇体の霊があったが、調査後にいかに死亡者が相ついただかがわかる。

このほか、被爆以後、原因不明の病気にかかり、一進一退の異状を訴えつづけている者も多いが、被災中心部でない地区においても、このように大きな災害を蒙ったのである。

最初の火災

古田町古江～田方間を通ずる道路上から、市中を望見した人によれば、炸裂後五分ぐらい経ったころ、大手町四丁目か五丁目あたりで、まっ黒い煙ようの中に、へびの舌のような赤い炎が立っているのが見られた。その場所が最初の火災発生地点のようで、その後数分経過してから、各所に火炎があがったという。

降雨

炸裂後の降雨については、草津方面では、バラバラッと降ったという人もあるし、降らなかったという人もある。

庚午本町以東では、炸裂後約一時間を経過してから、雨がバラつき、雨滴の黒いのに気がついた。敵機が油類を散布したのかと思うまもなく、約二、三〇分間、黒い雨が降り出して、溝川には黒い水が流れていた。

爆風

畑をたがやしていた人、路上に立っていた牛が、爆風で、瞬間的に約二メートル先へ吹きとばされていた。地上に置いてあった長さ一メートルぐらいの丸太棒が約一〇数メートルも吹きとばされていた。また、屋内(庚午北町七丁目)にいた者が、突然吹き転がされたりした。

六日夜

六日の夜は、暗く不安な夜であった。昂った空気と、不安にかられた空気の入りまじった何ともいえぬ無気味なものがみなぎっていた。

混乱きわむ

草津では、市中へ肉親を捜索に出た者が、そのまま帰って来ないので、また、それを捜しに出た。その二度目の捜索に出た者が、またまた帰って来ないので、不安はつもの一方という人、その隣りは、待っていた家族が、やっと帰って来たが、声を出さなかったら見分けがつかないほどの負傷をしていて、その看護につとめている人など、どの家々も尋常一様のありさまでなかった。

このような混乱の渦中ではあったが市中から避難者が、ここへやっとのことで辿りつくと、縁故知人を問わず、何人でも家に立ち寄れば看護にあたり、にぎり飯を出したりした。

庚午では、いつどんな大事態が再発するかわからないので、屋内で寝るのが不安なため、ほとんどの人が屋外で仮眠をとることにしたが、町の混乱状態を、さらに煽るように、さまざまな流言飛語が伝わって来て、仮眠も妨げ

られるばかりであった。

八、被爆後の混乱と応急処置

この地区は全壊全焼しなかったが、地区内に殺到した避難者の救急作業に、全町挙げて活動した。

一方、市中へ出勤していた者、建物疎開作業に出動していた者、あるいは学徒などの、身の上を案じた家族が、つぎつぎ探しに出て行くようなことも、その日だけで終らず、被災後一週間も一〇日も続いた。灰燼に帰した市中のここかしこ、また死体の転んでいる河原や、負傷者が送られたときく郡部や島々へも、毎日のように、名を呼びつつ探し歩いた。

応急救護所の活動

こうした状況のなかで、地区の国民義勇隊や警防団海上班の救護活動は、特にめざましかった。

六日、炸裂後まもなく救護活動が開始され、草津国民学校に応急救護所を設置、医師でもある佐藤救護隊長をはじめ、隊員がただちに馳せつけた。

加えて、陸軍の長島隊の応援と、岩国燃料支廠の軍医も来援して、積極的な救護活動が展開されたのであった。

火傷・裂傷・打撲・出血・骨折などの負傷者がなだれのように押し寄せ、息つくひまもなかった。

草津地区国民義勇隊日誌によれば、応急救護所で取扱った人数は、六日の治療者数約二、〇〇〇人、収容患者数五四五人、七日の治療者数一、五〇〇人、収容患者数五二二人と記録されている。

このほか、地区内のほとんどの家に罹災者が泊っており、その人数を加えれば実に莫大なものとなるであろう。

大野町のチヤス牧場から牛乳を、地元のかまぼこ組合から代用食・食用油などの寄贈があったほか、国民義勇隊婦人部が炊出しを行ない、救護の万全を期した。

古田国民学校救護所から県立広島病院治療班が、草津の救護所へ急遽来援して、ずっと作業にあたっていたが、十月になって、県立広島病院が草津に移転して来たので、はじめて救護作業を病院に任せることになった。

道路清掃

このほか、草津町海蔵寺の山に駐屯していた陸軍の長島隊(高射砲隊)が来援し、避難者の流入のためと、爆風によって散乱した破損物で、不潔になっていた道路の清掃作業をおこなった。

死体の収容と火葬

負傷者は、収容当日から、次々と死亡しはじめ、その中で引取人のない遺体を学校の体操用具倉庫へ安置した。

火葬をするために、校庭にある防空壕を利用したり、または穴を掘って、地元寺院浄土宗西楽寺住職嶋良雄師の読経のもとに、義勇隊・警防団・学校側とが協力して、死体を荼毘にふした。

遺骨は、紙袋に納め、番号をつけ、氏名を記入して、国民学校作法室に安置した。

身元不明者の遺骨は、男女別・推定年齢・特徴などを記録し、それぞれに番号をつけて安置した。このうち引取人のなかった遺骨は、のちに市当局へ引渡した。

九月末日まで死体焼却をおこなったが、草津地区以外の人だけでも、処理数は約二〇〇体以上に及んだといわれる。だがもっと多数であったかも知れない。

収容者以外では、己斐川の河口に近い岸に漂着した中学二年生くらいの身元不明の死体を、八月十一日ごろ、堤防において火葬し、その遺骨を、庚午本町安光家の墓に納骨した。

火葬場所	期間	現在ある目標物	備考
草津東町二五六五 草津国民学校	自八月七日 至九月末日	草津国民学校プールわきの柳の木のある所	
庚午北町十二丁目	自八月八日 至八月十日ごろ	埋立地となっている所	古田町・古江町町内会が使用した
庚午北町五丁目	自八月八日 至八月十日	児童公園内	庚午本町・庚午北町・高須町の各町内会

慰霊碑

なお、庚午北町・高須町町内会の人々によって、庚午北町五丁目の児童公園内に慰霊碑を建て、両町内会区域内で死亡した引取人のない死者の霊をとむらった。

町葬と合同慰霊祭

庚午本町町内会では、九月二十三日、町主催によって、草津町内三か寺の導師の読経により四五柱の霊を慰める町葬をおこなった。

また十二月ごろ、草津・庚午地区町民犠牲者約七〇〇体の合同慰霊祭を教専寺において盛大に執行した。後日警

防団の慰霊祭もおこなわれた。

町内会の機能

幸い地区内は被害軽微で、町内会の機能には支障なかった。町籍簿の整備、食糧配給所との連絡も密接にとれて、救護対策を次々と実施していった。

町籍簿

八月二十日ごろ、市当局から町籍簿を整理するようにと、被爆後はじめて連絡があったが、新規に作る必要はなかった。

九、被爆後の生活状況

人口激増

草津・庚午の各町の家庭には、被災地から、親類知己、その他縁故者などが避難して来ていて、人口が被爆直前にくらべると約二倍にも増加した。

食糧その他生活必需品が極度に窮乏しているとき、家族だけ生きていくのにも精一杯のなかで、必ずしも感情的なトラブルがなかったとは言えないが、それぞれが堪え得るだけ堪えながら、混迷の日々を送った。

なお、八月末ごろの居住世帯数は、次のとおりである。

町名	世帯概数	町名	世帯概数
草津東町	390	庚午本町町内会 (庚午本町一～二丁目、庚午北町一〇 ～一二丁目、庚午南町一～二丁目)	240
草津本町	330		
草津南町	470	庚午北町町内会 (庚午北町一～九丁目)	270
草津浜町	420		

衛生環境の悪化

生活環境は、ますます悪条件を積みかさねたが、同時に、衛生環境もひどく悪化した。

ハエやノミが驚くほどたくさん発生して、追えども追えどもからだに一日中取りついてた。シラミも多く、ほとんどの人にわいていた。

町内会は、駆除薬品が入手できず、何らほどこすすべもなく、発生にまかせるというありさまであった。

また、腹中に寄生虫がはびこり、口から飛び出すほどで、駆虫剤一服の服用で四、五〇匹の回虫が、ウドン玉のような形になって排出したという人もあったし、当時「かいかい(痒い痒い)」と呼ばれた皮膚病が蔓延して、痛痒を訴える人が多くいた。

そして、病床で呻吟している罹災者の傷口とか、腐敗した死体に、ウジが無数に発生して、流れ出る膿や、ただれた腐肉を低めまわしていたが、消毒する手だてもおよばなかった。

こんな状況下の日々がしばらく続いた。食物も食品衛生にかなったものを食べるような余地などなく、食べられるものはなんでも口に入れて、だれもかれも、ただ飢餓から脱出しようとはばかり考えていた。

救急品の配給

炊出し、救急品の配給は、地元民にはなく、応急救護所に収容されている患者だけにおこなわれた。

地元へは食糧、その他の配給品も少なく、ほとんど闇買いで入手するか、物物交換をするはかなかった。

ある時は、草津の望月醤油会社の倉庫に砂糖(軍用分)が山と積みこんであったが、終戦になって倉庫を誰かがあけ放したので、いちじ取り放題という状態であった。中には、馬車を曳いて来て取って行った者もあった。

イモだんご

草津授産場で製造する黒い「イモだんご」は、イモの粉(芋のアルコール醗酵粕)とヌカが主材料で、雑草材料のパフン紙のような「江波だんご」よりも、少しは食べやすく人気があった。

これを入手しようとする人々が、市内の各方面から集って来て、長時間、長い長い列が店先に続いた。みんなすき腹をかかえて、自分の順が来るまで、炎天下、黙々と辛棒強く待った。

飢餓生活に彷徨する罹災者は、みな栄養失調独特の、蒼白くツヤの抜けた顔色をし、その日その日を辛うじて生きていた。このような状態であったから、草津・庚午の農家の多くは、畑の農作物をしばしば盗んでいかれたが、それを防ぎ切ることはできなかった。

野菜の配給

八月十日ごろから、広島西部地区の野菜類を、庚午本町町内会事務所前の広場に集荷した。警察の了解を得て、公定価格より四キログラムにつき十銭高くして、古田町以西の罹災者に配給した。この配給開始によって、畑の盗

難が少なくなり、罹災者にもよろこばれた。

消費組合結成

また、生活危機打開策として、庚午本町町内会全員が、十月、消費組合を結成した。一世帯につき二〇円ずつの出資で、食糧その他の生活必需品を共同購入し、多くの便宜をはかった。

電灯つく

電灯についても、小川連合町内会長の折衝によって、廿日市町から送電されることになり、八月十日には、もう明るい灯がつけられたが、その後電力不足から時間制送電で停電が続き、ロウソク生活が長く続いた。

疎開学童の復帰

九月二十三日、世羅郡に疎開していた学童が、全員そろって無事に集団疎開先から帰って来た。学童は三か月ぶりに親のもとに帰って来たわけであるが、焼けていない家、道路もそのままだし、夜は明るい灯のもとに坐って、戦災からまぬがれた幸福を小さい胸にしみじみとあじわった。

僅かの人々であったが、郡部に疎開していた人もポツリポツリと復帰しはじめ、町は徐々に常態を取りもどしはじめた。

闇市場

闇市場が市中のあちこちに発生し、軍靴・軍服・軍用毛布など...毛布は戦争中に、民間から供出したものもたくさんまじっていたが、飛ぶように売買された。闇市場は日ごとに活況を呈したが、軍放出の毛布などは特に、応急救護所の患者には、最高の必需品として、貴重に取扱われた。中には毛布を冬服に仕立てて着る人もあったが、それを笑う人はなく、むしろ羨望されるというありさまであった。

この地区内には、闇市場がなかったが、個々の物々交換は盛んで、郡部の親類や知人などをたよって足繁く往来する人が多かった。

地区からもっとも近い己斐駅前の闇市場は、そうした人々にとって、すこぶる貴重な存在であった。

十、終戦後の荒廃と復興

暴風雨

九月十七日の暴風雨で、庚午地区の修復中の家が、約一〇戸倒壊した。

北から雨に降りつけられて、損壊家屋は、すべて雨漏りが激しく、屋外にいるのと変らなかった。

生産の再開

しかし、被災軽微で、戦前どおり水産物集散施設があり、加工業施設も残り、一方、田畑も安泰で、稼働人口も確保できた草津地区の立直りは早く、目ざましいほどの活気であった。

カマボコ・ハンペンなどの製造は、生産がまにあわないほどの忙しさで、その形さえしていれば、投げたおいても売り捌けた。

統制経済下の魚貝類も、需要と供給のひどいアンバランスから、闇屋の言い値でたちまち売り切れた。またバケツで隠しながら横流しされる魚貝類も相当な量にのぼった。

米の絶対量の不足は戦争中からであったが、被爆直後の悲惨さなか、甘藷は貴重な主食品で、どんな零細農家でも闇売りするのに忙しかった。

これらは単に草津地区に限った現象ではなかった。被災地区周辺の、いわゆる近郊農漁業従事者は同じ状態であって、統制経済が保てなくなった社会的要求による必然の現象であったが、特に水産物製品は空前の売行きを示し、現金収入源として大きくクローズ・アップされた。関係従業員も、これが直接的な利潤追求の魅力に取りつかれ、つぎつぎと自営業者に転ずる者が続出した。

また、鮮魚関係でも、同様の傾向をたどって、広島駅前地区や宇品地区などをはじめ、ほとんど全市にわたって、バラック建店舗を急造し、どんどん進出していった。

家屋修復

一方、爆風によって損傷した家屋は、物資統制がなおきびしく、修理資材を容易に入手することができなかった。修理費は多額を要し、資材も僅少であったから、ほとんど一時的な補修にとどまり、本格的な家屋修理は、相当の年月が経って、おもむろに行なわれた。

家屋の補修材として、草津の荒手(現在・中央魚市場)から井ノ口の停留所付近までの海岸に、船で運んで来てあった軍用木材(丸太・角材)や、電車道の下側の原っぱに積んであった材木が、つぎつぎに盗まれていたが、占領軍

が来てしばらくして、材木の搬出を止められたということもあった。

十一、その他

婦女子の避難指示

八月七日ごろ、老人・婦人・子供は安全地区に避難せよとの、出所不明の指令があり、その状況を調査報告することになって、町内会が調査したとき、町民の恐怖をさらにあふるような結果となって、たいへん動揺を招来し、収拾に困ったことがある。

また、月日不明であるが、進駐軍が宇品港上陸前のことである。警察から、若い婦女子は進駐軍が行かない安全地区に避難すること、路傍にて小便しないこと、婦女子は胸部を露出しないことなどを、全町内会常会において普及徹底をはかるようにとの指示書が届いた。その指示書は、用済み後焼却するようにと注意してあった。この指示書に基づいて、庚午本町町内会常会では、急いで避難させないこと、状況に応じて町内会長が、そのつど指示することなど決定した。これによってある二戸は家屋を売却して故郷に引きあげて

ゆき、またある家では、娘を佐伯郡の奥地に避難させたという実例がある。しかし、ほとんどの人々は被爆体験以上に残酷なものはないことを知っていて、もはや、動揺することはなかった。

治安対策

被爆・敗戦による精神的な打撃も、実に大きかった。世相は混迷の状態で暗中模索、道徳は日々破壊されていった。町内の人間関係もはかばかしくなくなり、融和をはかることも困難であった。昭和二十一年三月、防犯灯の設置と、高さ六メートルのやぐらを組んだ見張り台を四か所に設け、夜間だけ交替で不寝番をつとめ、犯罪の頻発に対処した。十月に入り、自警団を壮年層ばかりで組織し、われわれの事は自らの手で守る運動を推進した。

一方では、青年会を組織し、青少年の不良化防止に努力したが、町内会の解散を命ぜられ、廃止されてからはますます治安が乱れていった。

社会的連帯感・責任感は、急激に薄れていき、自己中心主義の目的のために手段を選ばないような悪徳が、無政府・無警察状態ともいえる原子爆弾の焦土に日ごとにはびこって、この風潮がこの地区にも激しく流入していたのである。

一、地区の概要

住居表示実施後の新町名

高須町一丁目 二丁目 三丁目 四丁目、古江東町、古江西町、古江新町、古江上町一丁目 二丁目、田方町一丁目 二丁目 三丁目、山田町

町内会別要目

この地区の範囲は、高須町内会[たかすちょうないかい]・古江町内会[ふるえちょうないかい]・田方組町内会[たがたくみちょうないかい](字山田[あざやまだ]を含む)とし、爆心地からの至近距離は、現在の新旭橋に通ずる観光道路付近で約二・六キロメートル、もっとも遠い地点は、西北の山林地帯、佐伯郡に接する付近で約六・二キロメートルである。

古田地区は、市の西方山林地帯に沿って一街衢を形成し、北は己斐、西は草津・庚午地区に接している。地区のほとんどが山林で占められ、国鉄山陽本線沿いの僅かな平坦地が、住宅地となっている。市のベット・タウン的な性格を持っていて、瀟洒な高級住宅がならんでいる。

地形的に、山林地帯から海岸へむけて大半が東南に傾斜していて、前面に何の障害もないので、原子爆弾の閃光を直接に受け、被害も近隣地区より比較的に大きかったが、農業生産には格好の地形であって、山ふもと一帯は、特に果樹の栽培が盛んである。果樹の種類は幾つもあるが、古江のイチジクと云えば、広島っ子なら誰れでもなつかしく忘れがたい季節の賜ものである。

また、高須を中心とする水蜜桃栽培も、古田全域・井ノ口町・己斐地域にも及び、たいへん盛んであった。

炸裂による家屋の倒壊とか、火災の発生はまぬがれたが、大部分の家屋が大なり小なりの、部分的損傷を受けた。

なお、当時の、地区内建物総戸数は八三一戸、世帯数九九五世帯、人口四、〇五五人で、各町内会別の内訳は、つぎのとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
高須町	264	320	1,343	幸田末一
古江町	397	425	1,812	田川静夫
田方組町(字山田を含む)	170	250	900	力田周一

学校および主要建物

地区内に所在した主要建物は、つぎのとおりである。

名称	所在地	名称	所在地
広島市立古田国民学校	古田町字古江	西警察署古田巡查駐在所	古田町高須
古江会館	古田町字古江	大歳神社	古田町高須
古江説教場	古田町字古江	八幡神社	古田町田方
古江新宮神社	古田町字古江	海蔵寺	古田町田方
永田病院	古田町字古江	高須郵便局	古田町高須
広島興産株式会社	古田町字高須	福蔵寺	古田町古江
高須会館	古田町字高須	力田療養院	古田町田方
前田別荘	古田町字高須		

二、疎開状況

人員疎開

市役所から、人員疎開を実施するよう通達があり、町内会が再三再四町内の人に呼びかけたが、実行する者がほとんどいなかった。むしろ市中から、古田地区へ逆に疎開して来るほどであった。山林地帯であり、市の中心を外れているという立地条件の安心感があつたことはいなめない。

物資疎開

物資疎開についても同じようであって、地区外から公民館や大きな防空壕へ、軍需工場などからの疎開物資がたくさん搬入されていたほどである。

学童疎開

学童の疎開もまた、国民学校が山の中腹に建ててあるため、その必要性を感じず、万一の場合に備えて、大きな防空壕を設けていただけであった。

三、防衛態勢

警防団

昭和十四年四月、田方・古江・高須のそれぞれが、警防団を結成した。

警防団は、防空監視所を設置し、消防自動車・水管車・手押ポンプを置いた。その他、警報の受領・伝達などをおこなった。

防衛班

また、町内会は、隣組単位の防衛誓編成した。各隣保班ごとに七石五斗(一・三五立方メートル)以上の水槽を設置し、消火用バケツ・梯・ロープ・鋸・鳶口・斧などを常備した。なお、各家ごとにも一石(〇・一八立方メートル)以上の水槽と防火用器具を設置した。

隣保班

隣保班は、警防団長・町内会長の指揮のもとに、日程を定めて訓練をおこなった。

さらに、各隣保班、また各家にそれぞれ防空壕を設置したし、永田病院・古田国民学校を一般救護所にあてて、万全を期した。

国民義勇隊

昭和二十年六月、町内会・隣組を基盤として国民義勇隊を編成することとなり、古田学区内町内会を統合し、各町内会長が中隊長の任につき、地区大隊を編成発足した。しかし、何ら武器を持たない形骸だけの義勇隊であったから、隊員一同、何となく物足らなさを感じていた。

高須町内会は、防衛上、道路が狭少なので、焼夷弾攻撃に備えて、その拡幅が必須条件となり、昭和十九年の末から市当局と交渉中のところ、二十年七月になって交渉がまとまった。従って道路拡張とこれにともなう家屋の立退きを実施する運びとなっていたのだが、原子爆弾のため実現しなかった。

四、避難経路及び避難先

地区は、町の背景が山地となっているので、山腹の適当な場所を選んで横穴を掘り、防空壕をつくった。この防空壕へ、一組あるいは二、三組単位の隣組が避難場所として決めていた。

山地は、道路の幅員が一、二メートルなので、避難時の混雑に支障がないように、それぞれ避難経路をきめていた。

このほか、古江町内会では、古江会館・新宮神社および説教場を、一般避難所として当てていた。

高須町内会は、一般避難所として高須会館・大歳神社・大歳神社裏の大防空壕をあてていた。

五、所在した陸軍部隊集団

兵種・名称	所在地
陸軍部隊倉庫および防空壕	古田町甲の久保
陸軍部隊防空壕	古田町鳥越
第二総軍関係宿舎	古田町大字高須 前田別荘

六、五日夜から炸裂まで

警報連続

連日連夜の警戒・空襲警報の発令で、いささか慣性化していたのか、六日朝の原子爆弾炸裂まで、特別に注意を払うということはなかった。

六日早朝も、警報が発令されると、警防団長および町内会長の指揮のもと、ただ決められたとおりに、誘導されるまま所定の場所に、おのおのが、その処置をとったままであった。

警戒警報解除とともに、ひと安心で解散し、みんな平常の生活にかえった。

八月は、文字どおりの猛暑、朝七時ごろまではちょっと曇っていたが、すぐに土用らしい晴天となり、七時半ごろから、チカチカするような太陽の直射で、じっとしていても汗が噴き出た。

敵機目撃

八時を少し過ぎたころ、南西と東北の二方面から広島上空へ、大型機B29が二、三機、空に飛行雲を描くように流して侵入して来た。

そのB29のうちの一機が、市の中心部あたりへ来たと思ったとたん、炸裂の強烈な閃光を放った。閃光の目撃者幾人かは、放射能障害によりその後死亡した。

なお、この日、国民義勇隊動員令によって、古田町高須町内会から、堺町二丁目における建物疎開作業のため、

五一人が出動していた。

なお、この地区内でおこなわれた建物疎開はなかった。

七、被爆の惨状

炸裂

炸裂の轟音は、爆発音というよりか、地球が壊滅したのではないかと思われるほどの強烈な衝撃であった。超大型爆弾が頭上で炸裂したと直感し、思わずその場に伏さった者が多かった。

しばらくして、やっと我れにかえった人々は、何事かと右往左往した。ほとんどの人が、わが家に爆弾が落ちたものと錯覚した。

慌てふためいて屋外に飛び出し、その事を叫びながら駆けまわっている人も多かった。

激烈な戦闘が続き、事態は日増しに悪化して、空襲警報も連日連夜という極限的状态に追いこまれていて、鋭く緊張感のみなぎった日常であったから、すべての者が、その覚悟はしていたはずであるが、この炸裂は、まったく突然で異様であった。

避難せず

炸裂後、反射的に防空壕へ避難した人も多い。高須町内会では、老人や子どもは、そのまま防空壕に残し、活動できる者は町内会事務所へ集合した。すぐに家々の火災発生の有無を確認したが、幸いにして発火のおそれがあったので、避難する必要のないものと認め、それぞれ地区内にとどまることにした。

旧国道の混乱

山のふもとを東西に貫通している旧国道上には、西方へ向って歩いて行く避難者群と、逆に縁故者の安否を気づかって市中心部へ尋ね行く人、あるいは救援のために市中へ向う人々が入りまじって、その混乱は、直前の静穏を一挙に掻き消してしまった。

避難者群は時々刻々と増加したが、南北に抜ける新国道よりか、さらに空襲された場合、安全率が高いと考えてか、一木一草の陰も頼りにして、本能的に、その足を山沿いの旧国道の方に選んで歩く人も多かった。

倒れそうな体をやっと支えた血だるまの群衆が、炎上する市街から一歩でも遠ざかろうと、その国道筋をゾロゾロと歩いていった。

ある者は、力つきて路傍にしゃがみ、ある者は、歩きつつ死んで、バツリ倒れたまま動かなくなった。まだ息ある者は、水を求め、母を呼んだ。もう力つきた者は、火ぶくれの体をエビのように折りまげ、ただ眼だけはガッと開き、何かを睨みつけたまま息たえていた。

それを救助する力は、避難する誰一人にもなかった。

黒い雨

死ぬる者や、倒れる者をそのままにして、涎々と、見る影もない襤褸の群衆が、喘ぎ喘ぎ歩いて行く上に、午前九時ごろから、十時ごろまでの約四〇分間ばかり、汚れた黒い雨がはげしく降りそそいだ。

古江地区では、雷鳴をともなった雨で、降り方は均衡して降り続き、道路やグラウンドなどにも水たまりができるほどであった。何という意味の雨か、「聖戦」終焉の合図にしても、痛いほど大粒の非情な雨であった。

瞬間的被害

地区内の瞬間的被害は、次のとおりである。

町名	家屋被害(%)					人的被害(%)			
	全壊	半壊	小破	無事	計	即死者	負傷者	無傷の者	計
古田町大字古江(高須町内会)	-	65	25	10	100	9	10	81	100
古田町大字古江(古江町内会)	-	50	50	-	100	8	-	92	100
古田町大字古江(田方町内会大字山田を含む)	-	40	50	10	100	0.5	10	89.5	100

六日夜

当日の夜は、学徒動員とか疎開作業で出動した人や、通勤者・通学生が帰って来ないため、町の人々は市中へ捜索に出ていった。まさか死にはしないだろうと、奇蹟を目当てに、安否不明の肉親や縁故者を探しに、焦熱の灰土を必死になって、あちらこちらと踏みわけたのであった。

避難者溢れる

古江町内会では、警防団長、および町内会長の指揮のもとに、永田病院や古田国民学校に収容した多くの避難者の救護に、全町あげて力をつくした。

田方町内会では、周囲の山に避難者や負傷者が一、〇〇〇人以上も押し寄せた。夜どおし呻き声や、肉親を探し呼ぶ声などが、騒然として山に溢れていた。町民は、これらに炊出しをおこない、水を運び、まったく休む時間はなかった。

高須町内会では、家屋の倒壊もなく、火災の発生もなかったが、天井が抜け、屋根が破れ、そこから空が見えた。それに黒い雨が降りこんで足の踏み場もないくらいに被害を受けたので、夜は、ほとんどの人が家を放棄して防空壕で夜明かしをした。

諸現象

これらの地区では、被爆によって、特異な現象が見られた。

(イ)古江付近は、閃光と同時に、直接光線を受けた者は、かなりの高熱を感じた。この熱線のため、鉄道線路の黒い枕木が燻りはじめていた。樹木の葉も枯れた。

爆風によって、屋外にいた人は、二メートルくらい吹き飛ばされた人もあった。電柱は傾斜し、電線は切断された。木々の枝も折れて飛んだ。

(ロ)高須付近は、樹木や農作物の、熱線の作用による影響の受け方が、山すそになるほど大きかった。樫の木や雑木の葉が黒焦げとなっていたが、松のような針葉樹は、その割合に焦げていなかった。

ちょうど桃の採れる季節であったが、桃の葉も熱に弱かった。紙袋をかぶせていた桃の実には、洗えば落ちる程度の黒い斑点がついていた。食べる時、どうも感じが悪かったという。

農作物でも、稲の葉は熱線に強く、サツマ芋・里芋など葉の広い形種のもは、まっ黒くなっていた。

地区は山林でほとんどを占められているためか、サアッと爆風が通り抜けるような所にある建物には、被害がわりあいに少なかった。

(ハ)田方付近は、山林の樹木の枝が、引き裂かれたようになって折れていて、瞬間的に爆風が突っ走っていった形跡が、所々に見られた。それも潤葉樹の類に多く、その被害が見られた。

八、被爆後の混乱と応急処置

救急作業

古田地区には救援隊は来なかった。したがって各町内会が、自主的に臨機応変の措置を取り、町民の一致協力をもって、多数の負傷者・避難者の救護作業にあたった。

古江では、救護作業と共に、負傷者の輸送もおこない、収容所で死亡した者の処理もした。

疎開作業隊の惨禍

高須では、五一人ばかり、市中の疎開作業に出動して被爆し、隊員はバラバラになって、一人ずつ辛うじて歩ける者が帰って来た。町は、これら帰って来る者の救護に全力をあげた。一人歩きもほとんどできない重傷者が多く、探しにいった義勇隊員などに助けられながら、やっと自宅に帰りついた。しかし早いのは帰った翌日、遅い者でも帰ってから十日目ぐらいの間に、つぎつぎと死んでいった。

これら重傷者を、どうにかして命だけは助けようと、日夜看護にあたったが、何しろ突発事態だし、一度に多数の重傷者の出現であったから、町内会は、上を下への大混乱で明け暮れた。

炊出し

配給事務は、町民がお互いに助けあって、急場をやっと切り抜けることができた。

田方では、町内に避難して来た罹災者の炊出しを町民一致しておこなった。はじめ食糧配給所と交渉したが、火急の事態にまにあわないことがわかり、農業会倉庫にある米を強引に提出させて、一個一〇〇グラム(八勺)ぐらいのにぎり飯を作って配給した。

田方地域は、通勤者・通学生が多かった関係上、ほとんどの家庭が、肉親をさがして市中に出て行ったため、この炊出し作業も人員がそろわず、要員を集めるのにたいへんな苦心をしなければならなかった。

応急救護所の活動

被爆者が続々と避難してくるので、各町内会ともこれが収容にあたって、町ぐるみの活動を展開した。

古江では、警防団長・町内会長の指揮によって、重傷者を永田病院・古田国民学校へ送りこみ、一般避難者を古江会館・説教場・神社に続々収容、一般家庭にも収容できるだけ収容をおこなって緊急事態の收拾をはかった。

高須では、町内から出動した疎開作業隊の重傷者の救護を一応やって、その日夕がたごろから、義勇隊・警防団・一般町民などが積極的に救護活動をおこなった。西方へ避難していく力もつき、フラフラになって途方にくれてい

る多数の罹災者を、町内会長の指導によって、高須会館をはじめ、町内の大きな住宅に泊めて救護にあたった。

田方では、周囲の山にかこまれた小さな谷あい、奥深く喰い込んだような地形なので、好適の避難所となり、この地域へ避難して来た罹災者たちのほとんどが、山にこもって仮泊した。その数は一、〇〇〇人以上に及んだと思われる。

このうち重傷者は、力田病院に収容した。病院に収容しきれない患者は、庭にテントを張って極力収容し、カルシウムと油の練りあわせた薬で手当をつくした。

なお、応急救護所として、古田国民学校に多数収容していたが、八月十日ごろから、収容を病院に切替え、当局から医師の配置があるまで、地元の永田医師が治療にあたり、医師の補助員として、古田町内会の多くの町民が、献身的になみなみならぬ活動をおこなった。

死体の収容と火葬

収容者は、つぎつぎに死亡していったが、八月八日ごろから、十一月二十日まで、これらの死体の処理をおこなった。あるとき、高須へ、重傷の身でたどりつき、軒下で苦しみもだえて倒れ、さらに体をひきずって残った体力をふりしぼり、防空壕へ逃げたまま死亡した者が発見された。このような無残な死は、枚挙にいとまがないほどであったが、市当局も警察組織も壊滅的な打撃から、全然立ち直っていないという混乱時のため、当分のあいだ町内会長の検視によって火葬をおこなった。もちろん身元不明者もたくさんいた。

古江では、死体の人名を確認し得た者は、引取人があるとき、ただちに引渡した。氏名不詳とか、引取人のない死体には、身長・人相・特徴などを記入した札を作成し、火葬した遺骨は消防車庫内に安置したが、その数は二八六柱に達した。後に、おのおのの遺骨を、記名札と一緒に袋に納め、警察署に送った。

田方では、避難途中で死亡した遺体や、病院とか山の中の避難者集団地での死亡者が数百人に達したが、すべて遺品を残し、火葬した遺骨と別々にして保管した。

力田病院へ連日、縁故を探してたくさんの人が来たが、氏名を書いて張り出した紙や、遺留品などを調べて、つぎつぎと判明したものは引取らせた。

火葬場所は、それぞれ高須火葬場・庚午北町公園・古田国民学校校庭・田方火葬場・古田火葬場・田方町内の山地・川岸などであった。

火葬するとき、高須火葬場・庚午北町公園では、多い時は一回に一〇体以上、日に四回ぐらいおこなったが、そのたびに僧侶をよんで読経した。

古田国民学校においては、死亡者が出るたびに、古田地区三か町内会が交代制で火葬した。読経はしなかった。

慰霊碑

なお、庚午北町・高須両町内会では、両町内で死亡した無名の遺骨をまとめて、児童公園内の慰霊碑に納め、毎年八月六日、両町合同の慰霊祭を執行している。田方で死亡した者のうち引取人のないままになっていた最後の四遺骨の霊を慰めるため、力田病院で慰霊祭をおこなったが、後に引取人が出て、自宅へ持ちかえった。

九、被爆後の生活状況

居住者状況

古田地区は、焼失地区でなかったことと、原子爆弾による被害も市中に比して軽く、全町民が避難することもなかった。

八月末頃の居住世帯概数

古田町(高須) 四二〇世帯

古田町(古江) 四二六世帯

古田町(田方) 三七〇世帯(山田を含む)

衛生環境

高須では、八月下旬から九月中旬ごろ、ハエが多数発生した。死亡者の処理がながびいたので、火葬をするとき死体はウジ虫に取りまかれていた。また、ある時は町内へ配給した馬肉・鯨肉の中にウジ虫が発生していた例もあった。死亡した人の遺体だけでなく、爆心地から三キロメートルまでは、あらゆる動物の死体に、見るからに気持ちの悪いほど発生したうえに、その腐臭がブンブンして鼻を衝いた。それらを処理することなく放置されたままであったし、下水道や水溜りなどの衛生管理が行届きになっていたのが原因したといわれる。

古江でも、古江衛生組合が衛生思想の徹底をはかるとともに、ハエの撲滅に努力した。

生活物資

主食を主とした生活物資の入手方法については、九月中旬頃まで、時には市当局の主食の配給が遅れたので、その時は町内でとれる農産物でカボチャを二回、サツマイモを二回、計四回ほど町内会で応急措置的に配給して補ったことがあった。被爆直後から町内会で取扱った配給期間中は、市当局の食糧対策によって、一食たりとも欠がしなかったという。

交通手段としては、古田町から市役所へ行くにしても、一応横川方面へ廻り道をして行かねばならなかった。そのころ、市役所の通勤者のために、市の自動車が朝と夕方だけ運行されていたが、他に利用する交通機関もなかったため、町民もそれに便乗して不便をしのごうができた。

電灯

当時、夜は暗やみ生活であって、松根油用の肥え松を割って、灯火代りに使った心電灯がついた時期は、八月十日ごろ(古江)とも、また、八月二十日ごろ(高須)ともいう。

闇市場の出現

二十一年一月ごろから自由市場の商店数が多くなり、己斐商店街でも五〇店ばかりが、主として衣料品を扱っていた。農家への主食買出しは、日ましに激しくなった。軍需品の放出と思われるが、時々食用油の配給があった。軍服が一度配給され、砂糖が一度と、煙草が何度かの配給があった程度である。

このような時の闇市場の存在は、ありがたい救いであった。みんな、これを利用し生活の危機を乗り越えていった。

十、終戦後の荒廃と復興

台風禍

九月十七日の暴風雨と、十月八日の豪雨により甚大な被害を蒙った。田畑は浸水し、家屋は雨漏りで損害を大きくした。

家屋の損傷も、本格的修理をはじめたのは、翌年一月ころからで、それも手なおし程度にしかできなかった。しかし、町民一同不自由ながら一日一日と、困苦欠乏にたえて復興に立ちあがっていった。

一、地区の概要

町内会別要目

井口[いのくち]は、昭和三十一年十一月一日、広島市への編入合併実施までは、佐伯郡井口村[さいきぐんいのくちむら]であった地区である。

地区を、第一区から第七区までに区分し、それぞれの代表者をおいていた。爆心地からの至近距離は、草津町に接する鉄道路線で約五・九キロメートルであり、最も遠い地点は、佐伯郡五日市町に接する鉄道路線で約七・九キロメートルである。

井口は、名勝地宮島へ通ずる海岸線に沿った町で、背後に中国山脈の支脈連山が迫っており、半農半漁の家なみが静かに衆落を形成し、海岸沿いに若干の別荘風住宅が建ち並んでいた。

戦後、市部に編入されてから、鈴ヶ峯女子学園(戦前は実践高等女学校)、電波高等学校(現在・広島工業大学付属高等学校)が新しくで

き、また市営住宅団地などの開発が進捗し、大きな変貌をとげつつある。

被爆当時の地区内の建物総戸数は、二〇六戸、世帯数は二六〇世帯、人口は一、八二〇人で、内訳は、次表のとおりである。

町内会名	被爆直前の概数			町内会長名
	建物戸数	世帯数	住民数	
第一区	38	47	329	酒井哲三郎
第二区	28	35	245	新庄勉
第三区	24	30	210	酒井真佐男
第四区	37	46	322	東穰
第五区	27	37	259	中西繁太郎
第六区	24	30	210	橋本徳一
第七区	28	35	245	杉広快蔵

学校および主要建物は、つぎのとおりである。

学校および主要建物

名称	所在地	名称	所在地
井口国民学校	井口村	浜部会館	井口村
実践高等女学校	井口村	阿瀬波会館	井口村
井口村役場	井口村	揚部会館	井口村
井口農業協同組合	井口村	正順寺	井口村

二、疎開状況

疎開の受入れ

この地区は、当時は広島市ではなかったから、郡部として、むしろ市部からの疎開者や疎開物資を受入れただけであった。

従って学童疎開もおこなわれていなかった。

三、防衛態勢

昭和十四年四月、井口警防団を結成し、施設や資材の充実をはかった。隣組組織の整備をおこない、各隣組を単位として訓練・演習の強化をはかるとともに、避難救護組織を確立した。

昭和十五年五月、井口村防衛隊を、隣組組織を基盤として創設した。

四、避難経路及び避難先

非常の場合の避難先としては、井口国民学校・大歳神社(古田町)・正順寺・実践高等女学校を指定していた。

内訳は、村内三部落と浜部落は、井口国民学校・正順寺とし、揚部落は、大歳神社、また阿瀬波部落は、実践高等女学校としていた。

五、所在した陸軍部隊集団

暁部隊(陸上勤務第二二〇中隊)が、山手の段々畑に兵舎を作り駐屯していた。

なお、場所不明であるが、陸軍被服支廠が一部の物資を疎開して来ていたともいう。

また、実機高等女学校には、船舶司令部副官部所属の人事関係留守業務を行なう軍人が、七月初めから泊っていた。

六、五日夜から炸裂まで

普通の状態、別に特記する事項はない。

また、上空侵入敵機の見撃者もなく、原子爆弾搭載機や僚機の爆音を聴取した者もなかったようである。

疎開作業

疎開作業の出動については、八月四日、市内広瀬町方面の建物疎開に行って任務をはたしていたので、当日この地区からの出動はなく、住民は集団的な被爆死からまぬがれた。

七、被爆の惨状

瞬間的被害

爆風によって、ほとんど全戸の窓ガラス・天井・建具などが大なり小なり破壊された。

当時、畑仕事に行っていた者の中には、炸裂の青白い閃光を見た者、また、爆風で畑に倒された者もあった。なお、橋梁の損壊はなかった。

当日、井口村から、市内に行っていた者のうち、死者二二人、負傷者五八人があった。また、この地区では炸裂による火災の発生はなかった。

降雨

被爆直後、八時四十分ごろ、パラパラと俄雨が降ったが、黒い雨とは思われなかった。

一部の人の中には、少し変わった雨であったように思われるという者もある。

八、被爆後の混乱と応急処置

応急救護所の活動

当日午前九時ごろから、市内の被爆者が観光道路上を続々と歩いて来た。これら被爆者を井口電車停留所前において、暁部隊軍医の応急手当を受けさせた。井口村役場・農業協同組合が、当日の夜から詰めかけて来た避難者の救援作業に従事し、炊出しや救急品の配給などをおこなった。

多くの避難者のため応急救護所を、井口国民学校・正順寺・実践高等女学校に開設、暁部隊の応援によって約三〇〇人から五〇〇人位を取扱った。また、村内の民家にも多数収容して救護をおこなった。

死体の収容と火葬

救護所で死亡した者は、生存中に住所氏名をさいていたので、それによって処理したが、重傷者で最後まで氏名の確認できなかった者が六人いた。

火葬は翌七日ごろから始め、同月三十日ごろまで続き、約一五〇体以上に及んだ。

各収容所で死亡した死体を、警防団員が担架で運搬し、井口火葬場および明神ヶ浜の松林において茶毘にふした。遺骨は、身元が確認されて引取人のある者は、順次引きとられた。引取人のない老は、井口村役場および正順寺に安置した。その後、共同墓地に改葬した。

警防団出動

一方、七日には、井口警防団が、廿日市警察署の命令によって、広島市に出動し、八丁堀福屋付近に他の団と共に集合、分担区域の指示を受けて、横川町方面の死体処理に従事した。また、八日は広島駅の貨車から米を降ろす作業をした。

追弔会

毎年、平和祈念日を前後として、井口婦人会主催のもとに追弔会がおこなわれている。

九、被爆後の生活状況

八月末ごろ、井口村の世帯は三二〇世帯(被爆前より六〇世帯増)であった。

原子爆弾の被害は、きわめて少なかったため、日常生活にさして変化はなかった。

生活物資は、一時、井口食糧配給所を利用したが、ほとんど自給自足で生活した。従って闇市場の利用はあまりしなかった。

主要一覧表・記録

- 一、広島市内主要橋梁の被害状況表...3
- 二、広島市常会議員河口社三メモ帖...19
- 三、元広島県産業奨励館(原爆ドーム)の概要...71
- 四、広島市本川聯合町内会日誌...145

広島原爆戦災誌 第二巻 第二編 各説

第一章 広島市内各地区の被爆状況

昭和四十六年九月一日 印刷

昭和四十六年九月六日 発行

編集兼発行者 広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者 中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号